

この素晴らしい世界に祝福を！ アナザー・ユニバース・アイアンマ
ン

Tony.Stank

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

I A M I R O N M A N

戦う起業家、トニー・スタークはソコヴィアでの戦いで命を落とし、異世界へと転生してしまう。

野菜が空を飛んだり魚類が畑からとれたり、科学者として理解できないものばかりの世界で、これまた一癖も二癖もある仲間たちと共に魔王討伐にいそしむ元ヒーロー。

装着せよ、強き自分。鋼鉄のスーツでこの素晴らしい世界を飛び回る。

目次

PROLOGUE

異世界転生アイアンマン

1

LEGEND OF CRIMSON

第1話 駆け出しゴーレム

22

第2話 ありえないほど《堅牢》ありえないほど《幸運》

38

第3話 演出は大事

55

第4話 ありえないほど《爆裂》

73

第5話 最強の戦術破壊兵器

91

第6話 ミディアムレア

107

第7話 紅魔式魔法授業

122

第8話 SUPER HERO LANDING!!

138

第9話 鉄男式課外授業

157

第10話 激突、銀髪の義賊

177

第11話 見せる女神の意地と執念

197

第12話 爆ぜろ焰のつむじ風

217

第13話 MEGUMIN ORIGINS

251

第14話 プロジェクト・ノース・スター

261

第15話 “個”の力

279

第16話 狂信者とマッドサイエンティストの二重奏

296

第17話? 集まりし悪意

315

第18話 MEGUMIN RIGING

337

第19話 LEGEND OF CRIMSON

365

KONOSUBA “A” SSEMBLE

第20話 ありえないほど《平凡》ありえないほど《陽気》

第21話	理由と鏡	410
第22話	楽しいピクニック	426
第23話	ステイール盗賊団	444
第24話	Mk. 46	463
第25話	まだまだ上を目指せ	481
第26話?	最初に笑って、そして最後にも笑う	497
第27話	ゴースト・バスターズ	509
番外編1	キャプテン・ベルゼルグ	525
第28話	ありえないほど《真剣》	548
番外編2	マイティ・アルバイター 前編	567
番外編2	マイティ・アルバイター 中編	590
番外編2	マイティ・アルバイター 後編	614
オマケ	ベルディアの日常	643
第29話	三流詐欺師の脱税講座	646
第30話	しびるうおー	665
第31話	古代兵器と近代兵器と最強の戦術破壊兵器	687
第32話	FANTASTIC AVENGERS	700
第33話	KONOSUBA "A" SEMBLE	722
THE UNBREAKABLE DARKNESS		
第34話	ニューライザー	748
第35話	ジャッジ 裁かれるヒーロー	764
第36話	スリルに一撃	782
第37話	IN MEMORIES	799
第38話	AGE OF V	825

第39話	ありえないほど《悪魔》	841
第40話	PAYDAY	858
第41話	PAYDAY2	875
第42話	夜空を掛ける虹の橋	896
第43話	REGICIDE	909

PROLOGUE

異世界転生アイアンマン

目の眩むような閃光、頭上から雨のように降り注ぐ、空で砕けた国の一部たち……。

全ては一瞬だった。死力を尽くして、世界を救おうとした。

ウルترونと言う邪悪なロボットの策略によって宙に浮かび、高高度から隕石の如く飛来してくるソコヴィアを、地上スレスレで粉碎したが、救えたかどうかは分からない。

一つ分かってるのは……僕は、死んだかもしれないって事。

何故そんな事を考えているのかと言うと……。

「トニー・スタークさん、ようこそ死後の世界へ。あなたはつい先ほど、不幸にも亡くなりました。四十五年という短い人生でしたが、あなたの生は終わってしまったのです」

ついさっきまで視界に映っていた、この世の終わりのような光景……いや、実際終わりがかけていたんだが……。

そんな光景とは打って変わり、白を基調とした、どこか応対室を思わせるような部屋で、人間離れた美貌を持つ水色の髪の毛の美女が、椅子にゆったりと座りながら、僕の事を、髪と同じ水色の目で見つめ、真剣な声色でそう告げてきたからだ。

だが、完璧に自分の死を確信した訳ではなく、僕は訝しむような口調で聞き返した。

「……僕が……死んだって?」

「はい、なぜ亡くなったか覚えていませんか?」

彼女は、僕の言葉に対して、真剣そうな表情を一つも変えることなくそんな質問を投げかけてくる。

僕は、その質問に答えるために過去の記憶を振り返え……ようとして。

「ウルترونと戦って……空から落ちるソコヴィアを破壊して……それから……」

……駄目だ。ソコヴィアを粉碎した先を全く思い出すことができない。

「それから……僕はどうなったんだ？」

「あなたは落ちるソコヴィアを、地球に激突する前に見事破壊しました。ですが……あなたは降ってきた大量の瓦礫に飲み込まれ……」

そこから先は告げにくいのか、顔を伏せて言いよどむ。

ソコヴィア撃破の先を思い出せない事、突如目の前に現れたこの空間、そして彼女との会話の内容から、疑問が確信へと変わっていく。

そうか……僕は……死んだのか……。

やれあの世だ、やれ神だなんて非科学的な話は信じないタイプだったけど、自分の死だけはなぜか確信してしまっていた。

そんな僕の口から、最初に出た言葉は。

「なるほど、さすがにヴィブラニウムがシイクされた瓦礫に潰されるのには耐えられなかったか」

フツと鼻での笑いを交えた軽口だった。

「あれっ……ずいぶんと落ち着いてますね？」

「あー……まあ、死を覚悟でやった訳だしな？」

この返しは予想外だったのか、目の前の女性も真剣そうな表情を崩し、素っ頓狂な声を上げて目をぱちくりさせている。

……何故だろうか、今ほんの一瞬彼女に違和感を覚えたが……いや、そんなことを考えている場合じゃ無い。

自分が死んだってことは正直残念だ。でも、ヒーローなんてやっている以上、死ぬ覚悟はできていた。心残りは……。

いや、沢山あるな。やりたかったこと、残しておきたかったもの、いろんな心残りが次々浮かぶ。

そんな中でも、どうしても聞いておかなくてはいけないことがあった。

「なあ、あの後地球はどうなったんだ？ 救えたのか？」

ソコヴィアの落下は防いだみたいだが、ウルترون自体との決着は付いていない。

もし奴が逃げて、ネットにコピーでも作っつていようものなら……。

「ウルトロンは、ヴィジョンさんによって完全に破壊されました。あなた方の勝利です」

それを聞いて安心する。あんだけやって地球は滅んでましたじゃ悔しすぎる。

「めでたいね、ハッピーエンドだ」

安堵と自分が死んだことによる不貞腐れが混じった言葉が、ついうっかり出てしまう。

心残りはあるが、地球が救えたのならよかった。とりあえず背もたれに体を預け、ため息を吐く。

だが、そこからまた新たな疑問が生まれた。

「で、僕はこの先どうなるんだ？ この部屋と言い、羽衣をまとった君と言い……」

そこまで言ったところで、声にいたずらっぽさをまぜながら。

「昔見て鼻で笑った聖書みたく、天国か地獄かってやつ？ 正直、今日の前にいる君という知的生命体に興味と懐疑心を抱いてるところなんだが」

なんて、軽口を言う。それを聞いた彼女は、少し笑って。

「フフツ、絶好調ですね」

なるほど、いい返した。

「死んだ人間に対して『絶好調ですね』か、中々面白い皮肉だな」

「う、うぐっ……そ、そんなつもりで言ったんじゃない……」

少し困った顔を浮かべる青髪の女性。よく見るとかなり若々しい。

僕の歳の半分も行っていないんじゃないだろうか。

そして、今の困った顔の方がさっきの笑顔や真剣みを帯びた顔よりも人間味を感じるのなぜだろうか。

ひとまず話を進めるべく、話を本題に戻す。

「天使のコスプレをした女性をからかうのはこれくらいにし」

「て、天使じゃなくて女神よ！ わたっ……コホン、失礼しました。これは女神の正装です。コスプレと言うのであれば、トニー・スタークさんの今のお姿の方がコスプレっぽいかと……」

「もう素で接してくれた方が気が楽なんだが」

どうやら今までの彼女はビジネスの顔だったみたいだ。時折素が出てるのに、今だ隠し通せてると思ってるのか、真剣そうな目でこちらを見てくる。というか、真剣にしようとしすぎて顔が濃くなっている。ひと昔前の僕の国のコミックみたいだ。笑ってしまいそうだからやめてほしい。

そして、そんな彼女のコスプレ云々の言葉を聞いて、視線を下におろす。

……アイアンマンスーツを着たままだ。

ソコヴィアの戦いで負った傷もすべて直っている。どういう技術なんだ……？

「しかし、女神と来たか……僕の知り合いの神様モドキを思い出すな。良かったら名前を聞いてもいいか？」

「私は、死者に新たな道を案内す」

「あー……失礼、スーツのマスクを閉めっぱなしだった。今から自己紹介をするって言うのに、顔を見せてないなんて失礼だよな」

そう言つて、僕は閉めっぱなしだったヘルメットのマスクを開け、アーマー越しではなく直接顔を見る。

……顔を少し引くつかせた、女神の顔を。

……しまった。

「……続けてよろしいでしょうか？」

「すまない、悪気があった訳じゃないんだ。ちよつとタイミングが悪かっただけ。続けてくれ」

ちよつと不機嫌そうだ。女神っぽく名乗りたかつたんだろうか。

「では……私はアクア。日本において、若くして死んだ人間を導く女神です。日本といつても、あなたの知ってる日本とはまた違います
が」

「日本で若くして……？ その条件に、僕はあつてないようなんだが」
「ええ、あなたはちよつと特殊な例なんです。これから……説明いたします」

アクアと名乗った彼女は、そういつてバツと仰々しく手を広げ語りだした――



アクアの話のを要約するところだった。

魔王のせいでは滅びかけている世界があると。そこは魔法があつてモンスターもいる、いわゆるファンタジー世界つてやつらしい。

正直ものすごく胡散臭く、そんな世界は映画や漫画の中だけだろうと思つて話を聞いていたが、NYの空に穴を開けて襲つてきたエイリアンや、七十年間氷漬けで眠つていた超人兵士、雷神、怒ると緑の巨人に変身する仲間たちを思い出し、僕の世界も十二分にファンタジーだったなど、アクアの話を疑うことをやめた。

で、魔王がいる世界では、死んだ人間にもう一度生まれ変わつて人生やり直すか、天国に行くかを、アクアとはまた違う女神が死んだ本人に選択させてるらしい。

だが、魔王軍に殺された人間たちは、またその恐ろしい世界に生まれ変わることを拒否してしまうようだ。

おかげで人口は増えず、このままでは世界が減びてしまう。そこで神々は別の世界の人間を送り込めばいいじゃないかという移民政策を考えたらしい。

ここだけ聞くと酷い話に思えてくるが……。

「もちろん、普通に送りはしません。送つても死んでしまうだけですから……そこで、日本で若くして死んだ人に、モンスターとも戦えるような、特別な武器や力を与えて送るようになっています。これ、意外と人気なんですよ」

「納得だ。日本の若者なら、そういうの好きそうだしな」

「そうでしょう、そうでしょう。そして、ここからが本題です」

一度咳ばらいをした後、さっきまでの仰々しさはどこへやら、すこし気まずそうな顔をして。

「……そんな日本人たちも、かなり死んでしまっています」

「意味ないじゃないか」

僕のツツコミを受けて、さらに気まずそうに眼をそらすアクアだ

が、それでも話を続ける。

「いえいえ、日本人を送っていなかったらとつくの昔に世界は滅んでいました。でも、いくら強い力を持っているとはいえ、中身は戦闘経験ゼロの若者です。数々の魔王軍幹部を倒し、魔王を討ち取るとまではいかないのか、なかなか世界は平和になりません。さすがにこのままではマズイと思った私たちは、新しい策を考えました。その策とは、他の世界で勇者クラスの能力、実績を持った人間が死亡した場合、その魂を魔王がいる世界に転生させるという策です！」

「つまり、戦って死んだ英雄を、また死地に送り込んでもう一回戦わせらるってことだよな？」

「も、もちろん、本人の許可を取って送ることになっていますよ？」

「……なあ、他の選択肢はどんなのなんだ？」

「他には、記憶も何もかもリセットして、元の世界で生まれ変わる事、もしくは娯楽も何もない天国的なところで、永遠に世間話をし続けるかです。もう実質一択でしょう？」

アクアは多分、僕を送り込まないとマズイ状況にあるんじゃないだろうか。それくらいの必死さを彼女から感じる。

それにしても、天国は随分と酷い場所みたいだ。永遠に世間話をするだけ……地獄の話は聞いてないが、ひよつとしたら地獄よりひどいんじゃないだろうか。聖職者じゃなくてよかった。神を信仰してたらその実態に相当落胆していただろう。

天国へ行くのは却下だ。もう一つの選択肢は……。

「なあ、その生まれ変わるってやつは……生まれる先は選べるのか？」

例えば……愛した女性とまた再会できるような環き」

「無理です」

即答だった。

「選ぶことはできません、完全にランダムです。もしかしたらまたアメリカに生まれることができるかもしれませんが、紛争地域の貧民街かもしれません。ですがまあ、前世で多くの徳を積んだ人間は、基本的に裕福な場所で生まれることができます。なので、あなたの場合は……場合は……えつと……多分裕福なところに生まれることができ

ると……思います。きつと」

「不安げになつて理由をきかせてもらえないかな？」

そうツツコミはしたが、自分が徳の高い人間かと聞かれたら微妙なところだ。もちろん多くの人間を救いはしたが、ヒーローになる前は武器商人をやっていて、多くの殺人兵器を作つては、それを軍に売つて儲けていた。

……ヒーローになつてもいろんな過ちを犯してしまつたが。

「生まれ変わりと言うのも、言い換えれば今のあなたという存在が消えてなくなつてしまうようなもの……異世界転生、しませんか？」

……僕は、今の自分自身に誇りを持っている。確かに数々の過ちを犯しはしたが、それでも僕にしかできないことはまだたくさん残っているはずだ。生まれ変わった僕が元の世界で何かを成し遂げられるかどうかは分からない。

それに賭けるには危険すぎる。

世界は違えど、もう前の世界の人達に会えないとしても、自分がすべきことがある世界に行けると言うのであれば、また人を救えると言うのであれば。

「魔法の世界を科学者が救う……か。なんとも皮肉が効いてるな……：わかつた」

僕のその言葉に、女神は顔をぱあつと明るくさせ。

「そうよね！ そうよね！ やっぱそれが一番よね！」

と、椅子のひじ掛けにバンツと手を乗せて前のめりに身を乗り出して来た。

彼女がキャラを作つてるのはなんとなくわかつていたが、こうまで豹変されると面食らう。

そんな僕の表情を見てか、アクアはハツとした顔を浮かべ。

「え、えつと……今のは……」

「君がさつきからキャラを作っているのはバレバレだからな？ 正直僕としては、堅っ苦しいのは嫌いなんで普段通りに接してくれたほうがいいがたいんだが」

僕のその言葉を聞いて、アクアはうつむいて唸りだす。

「うーん、でも……いや、そうした方がむしろ失礼が無いというなら…….というか、そもそももう交渉成立したから……」

そのまましばらくぶつぶつと呟いていたが、やがて顔を上げて…….

「うん。あなたがそう言うならそうするわね。あらためて、私はアクア。よろしくね、トニー・スタークさん」

「トニーで良い。それにしたって、なんであんな変な演技してたんだ？」

「いやー、それがね？ この策って、相手が『いいよ』って言わないと異世界に送ることができないじゃない？ だから、快く引き受けてもらえるように、絶対に無礼なことは言わないように上から言われていたのよ」

普段通りと言った途端に足を組み、手を広げて肩をすくめ、やれやれといった顔をするアクア。

いいね、そう来なくちゃ。僕も足を組んで、背もたれにぐつと寄りかかって楽な姿勢を取る。

しかし、上に言われて……か。

「神の世界もルールで感じがらめで、縦社会か？ 大変だな」

「そう！ そーなのよ！ 人間はみんな神々が住む天界は美しくて、壮大みたいな感じに考えているみたいだけど、とんでもないわ！」

「気持ち分かる、僕だってルールは大っ嫌いだ。まあ、最近は考えを改めつつあるが……」

「でしよでしょ！ トニーならわかってくれるって思ってたわよ！ あっ！ それでね、それでね？ 実はエリスって子がいてね？ 私の後輩なんだけど、この子がすごい頭の固い子でー、規則規則ってうるさいのよー」

なんか重要な話をしてた気がするが、いったん頭の隅に置き、僕はアクアの愚痴を聞く。

そんなアクアの、エリスという名の女神に対する愚痴に、僕もある堅物君を思い出した。

「あー…….僕の世界にもロジャーって男が居るんだが、こいつがま

たひどく頑固なんだ。おまけに無自覚」

「キャプテン？ イケメンだけど、一緒にいたら気疲れしちやいそう。頭があのにシールドより堅そうよね」

「H A H A！ なかなかいいジョークセンスしてるな！ 空の上から見てたのか？ 僕の知り合いは変なのばかりでね」

「重要な立場にいるとお互い大変ねー。あ、ポテチあるわよ？ 食べる？」

「もううよ。天界にもジャンクフードはあるんだな、面白い発見だ」

僕はアクアとすっかり意気投合し、話がどんどん盛り上がっていく。天界がどんなところなのかという世間話、僕の世界で起きた騒動、お互いの仕事内容やその上手いサボり方、不満を持つ部下への対処法など、どんどん話題が切り替わり、気が付けば……。

「それで、僕は獲物をつつさらっていった自称雷神を吹き飛ばしてこ
う言ったんだ『引つ込んでろ、観光客』」

「あははははは!! 観光客！ 観光客って！ 噂の雷神ソーも大したことないのね！」

「言っておくが、僕のスーツがすごいんだからな？ で、哀れサー
ファー君はハンマーを投げるも、僕に避けられ、カウンターで吹っ飛
ばされたのさ」

「あははははは！ あははははは！ サーファー君！ サーファー君なん
て呼ばれているの？ トニーったらセンスあるわね！」

「だろ？ 君の話も面白かった。エリスの……」

「ああ！ あれね！」

「エリスの胸はパッド入り！」

「H A H A H A H A H A!! 女神がパッドするのか!? 冗談だろ
?」

「いや、ほんとなのよ！ しかも胸に違和感が出るレベルの……ブ
フッ！」

「H A H A H A H A !!」

……気が付けば、三時間以上も二人で話をしていた。三時間以上も。

お互いもはや椅子にすら座らず、前に出て床に胡坐をかきながら。話の途中で何度か本題に戻そうと思ったが、ついつい話し込んでしまふ。

だが、さすがに話題が尽きていき、エリスの胸パッドの話 最後に、少しずつ沈黙する時間が増えていった。

そろそろ本題に……。

「ふう、いっぱい話したら喉乾いてきちやったわね。ねえトニー、天界のお酒に興味はない？」

「詳しくきこうか」

やっぱりまだ少しお話してしよう。

親睦を深めるのは大切だもんな。

「ふふつ、そう来ると思ったわ。きつと気に入るわよ？」

「そりや楽しみだ。言っておくが、僕はお酒にはうるさいぞ？」

アクアはそう聞くとにっこりと笑って、掌を自分の耳元までもって行くと、映画や漫画に出てくる魔法陣のようなものが手と耳の間に浮かび上がり……。

「エリスー、エリス聞こえるー？ ちよつとお酒をいくらかこつちに持って来てほしいんですけどー！」

そのまま、まるで電話をするかのように自分の後輩に連絡し始めた。

サイバネティクスの類だろうか？ 興味を惹かれるが、アクアが見せびらかすように通話している方と反対側の顔をこちらに向け、ドヤ顔しているのが地味にウザい。

僕もマスクを開けたり閉めたり、ボディのあらゆるパーツをガチャガチャ動かしたりして対抗する。

「え？ 交渉？ まだ終わったわけじゃないけど……はあ!? 何固い事言ってるのよ！ 必要なものなの！ いいから持ってきて！ ほら早く持ってきて！」

もめてるみたいだが大丈夫なんだろうか。

しばらく大声で怒鳴り散らした後、『まったく、エリスはまったく……』とぶつぶつ言いながら頬を膨らませ、アクアは手を下におろす。それと同時に手のひらに浮かんでいた魔法陣が消えた。どうやら通話が終了したみたいだ。

「ちよつと待っててね？ 今来るみたいだから」

アクアがそう言うてから、ほんの数秒後……。

「ア、アクア先輩ーっ！」

何もない空間が白く輝き、その光の中から長く美しい白銀の髪をした美少女が叫びながら飛び出してきた。

息を荒げながら出てきたその子は、膝に手を置いて少し呼吸を整えると、バツとアクアがいる方に顔を上げ。

「アクア先輩！ 大事なお話してるときにお酒注文するなんて、一体どう……いう……」

そのまま、地べたに胡坐をかいてる僕とアクアを見て固まる。

「えっ……えっ……？ あの……何してるんですか？ そこにいるのは、トニー・スタークさん……ですよ？」

状況が理解できていないのか、光の中から現れた銀髪の美少女は僕とアクアを交互に見て、不安げに聞いてくる。

とりあえず僕は胡坐をかいたまま、やあ、と彼女に気さくに手を振しておく。

さっきの電話の内容からして、彼女がエリスなのだろうか。

「ちよつとエリス、お酒はどうしたの？ まさか手ぶらで来たって訳じゃないでしょうね」

どうやらエリスで正解みたいだ。

そんなエリスを、アクアは不機嫌そうに見るが、エリスはそれ以上に焦った表情で。

「い、いやいやいや！ アクア先輩！ わかってるんですか!? 今は交渉中でしょう！ 全然そんな空気に見えないし、お酒が必要っていったい何に使うんで」

「うるっさいわね！ 早くしないとその胸のパッドとり」

「ああああああああああああああああああ!!! いきなり何言ってるんですかああああああああああああああああああ!!!」

僕の前で胸のパッドの話をされ、すさまじい剣幕でアクアのセリフをかき消そうとするエリス。

しかし、すぐに我に返り、僕の方に顔をむけると。

「あつ……いきなり大声出してすいません……。あの、どういう状況か説明をいただ」

「これは多くの女性を見てきた僕からのアドバイスだが、胸にパッドを入れて盛るときは、せいぜい自分の胸より二回り上程度までにしておいた方がいいぞ。そんなにデカいの入れると違和か」

「ああああああああああああああああああ!!! なんであなたまでしってるんですかああああああああああああああああ!!!」

なんだこの反応が面白い子は。

さつき以上に息を荒げてるエリスは、顔を真っ赤にして胸を隠す。

僕は彼女が落ち着くように、軽く笑いながらエリスに声をかけた。

「冗談だよ、交渉なら今現在進行形でしてる途中さ。アクアが天界のお酒をご馳走してくれるって言ってくれてね。安心しろよ、彼女はとも交渉上手だ」

困惑していた様子のエリスは、僕の言葉を聞いてだんだん状況を理解し始めたのか、自分の胸を守るように回していた腕を解いて、頬をポリポリと掻きながら苦笑いする。

「あ、あはは……なるほど……交渉は上手く行っているようですね……」

「ああ、はつきり言って成立したようなもんだ。君も飲んでいくか?」

「い、いや……私は今の仕事を投げ出してここまで飛んできたので……すぐに戻らないといけません」

「それで、お酒は持ってきたの?」

まったく空気を読まないアクアがお酒の催促をする。

エリスは何かあきらめたようにため息をつく、自分の背後の足元に置いてあった瓶を取って差し出した。

「はい、一応持ってきていますよ。ですが、飲みすぎないでくださいね

？ 一種の交渉術だと言うのは分かっていますが……」

「エリスも飲んでいきなさいな」

「いやいや！ ダメですってば！ 今も自分の仕事を部下に任せてここに來てるんですよ!？」

「部下つてのはこういう時のためにいるんじゃないのか？」

「そーよ。ここは部下に任せてパーツとやりましょ？ トニーの画面白いわよ?？」

「もう酔ってるんですか!? 私は今すぐ戻らないと……! いや、いや……そんな『なんだコイツ、ノリわりーな』みたいな顔されても……! とにかく、私は飲みませんからね!？」

三十分後。

「トニーのちよつといいところ見てみたい！ それイツキ！ イツキ！ イツキ!」

僕は酒がなみなみ注がれたグラス片手に、アルコールが入って顔をほんのりと赤くしたアクアとエリスからイツキコールを受けていた。

美少女二人からコールを受けて飲めなきや男が廃る。

僕は注がれた酒を一気に呷り、グラスを一瞬で空にした。

「おおー!」

アクアとエリスから歓声が上がる。

エリスに飲んでいけよと言ったのはほとんど冗談だったのだが、まさかこんなにノリがいいとは思っていなかった。

女神というのは、酒を飲むとテンションが上がってノリが良くなるんだらうか。

まあ、アクアが強引に酒を飲ませたせいで大分ヤケクソになつてるといふのもあるのかもしれないが。

そんなことを思いつつ、コップを上に掲げてピースサインしていると、アクアが僕の方に掌を向け、何かを撃つようなジェスチャーをしてくる。なるほど、そういう事か。

僕は空にしたグラスを遠くに放り投げ、掌を向け目視で照準を合わせると、そのままグラスをリパルサー光線で盛大に粉碎した！

飛び散るグラスの破片が、光を反射してキラキラと光っていて美しい。

僕は二人がいる方向を見てガッツポーズを取り――

「YEEAAAAA HHHH!!!」

――盛大に雄叫びを上げた。

エリスは若干引いた顔をしているが、アクアは笑って『イエーイ』と歓声を上げている。

女神二人に囲まれて酒を飲むのも悪くない。もちろんペッパーが一番だが。

女神……………あれ？

僕はここで何しているんだ？

たしか僕は死んで……………そこで女神から案内され……………あつ。

そこまで考えて、ようやくこの部屋に来てからのことを全て思い出す。

……………羽目を外しすぎたな。何でもないかのように振舞っていたが、案外自分が死んだことにショックを受けてヤケになっていたのかもしれない。

そんな風に頭の中を整理するときだった。

アクアの手の甲に小さな魔法陣がホログラムのように浮かび上がった。それはつい先ほど、アクアがエリスに連絡するとき、掌に浮かんでいたものによく似ている。

誰かから連絡がきたのだろうか？

アクアは少し面倒くさそうな顔をしながらも、すぐに自分の耳元まで手を持っていく。

「はいもしもし、アクアですけど。今忙しいのでまた後で……………えっ？

説明？ あの、今やってるこれはトニー・スタークの説得に必要なこととして……………ま、待ってください！ 確かに交渉はだいぶ前に成立しましたが、気持ちよく異世界に行ってもらえば評価も上がってこの

先の計画の候補者達も……あ、ちよつ、そんな!? どうして私だけ!?
せめてエリスも……お願い待っ……」

そこまで言ったところで、手に浮かんでた魔法陣がフツと消えた。
耳元まで持ち上がったいたアクアの手が、プツリと糸の切れた人形
のようにブランと腰まで下がり、酔いが回ってほんのりと赤くなつて
いた顔が一気に青ざめていく。

そしてぶわつと目に涙を浮かべ……。

「ぐすつ……エリス、私滅給されちゃった……不要な宴会したからつ
て……私、良かれと思つてやったのに……おもてなししようと思つた
だけなのに……ぐすつ……こんなあんまりよおお……」

「アクア先輩は何も悪くないですよ……あ、あの、気のせいだといひん
ですが……私も道連れにしようとしてませんでしたか?」

「えぐつ……してない……」

突如告げられた理不尽に泣き喚いて右往左往するアクア。

そんなアクアを不憫に思つた僕は、アクアの肩に手を置いて慰め
る。

「まあ……君の気持ちは嬉しかったし、実際酒はとても美味しかった。
楽しかったよ、アクア」

「ありがとう……皮肉と嫌味しか言わないとか思つててごめんね……
ちよつとだけ報われたわ……」

「不憫に思つた僕の気持ちを返してくれ」

それからしばらく泣き続けるアクアだったが、僕のアイアンマン
スーツ変形ショーやエリスの慈愛溢れる必死の慰めもあつて何とか
復活した。

死後の世界を案内する女神が地べたで泣きじゃくり、それを案内さ
れる側の死んだ人間が慰める光景はとても頭の悪い光景だった。

女神とは何なのか、二日酔いを起こしたわけでもないのに頭痛がし
てくる。

全員の酔いも冷めたころ、気を取り直したアクアが説明を数時間ぶ
りに再開する。

エリスはアクアが不安なのか、補佐としてつくみたいだ。

「それじゃ、最後の説明をするわね。若くして死んだ日本人にチート能力を与えて送ってるって話をしたけれど、もちろんあなたみたいなのは既にチートアイテムや能力を持っている人も例外じゃないわ。あなたとの組み合わせによってはいくつか渡せない物もあるけどね。例えば、性質を理解して強く念じれば何でも作れちゃう能力とか。バランスが崩壊して世界が滅んじゃうわ」

さらっととんでもない事を言うアクア。だが納得だ。そんなものが使ったらミサイルを大量に作って魔王軍を好きなかだけ爆撃できるし、スーツが破損しても瞬時に修復なんてこともできるかもしれない。まあ、原理もわからない非科学的な魔法なんて使う気はないが。「こちらで与えられる能力や武器のカタログを今渡しますね」

エリスが指をパチンと鳴らすと、僕の目の前に紙の束が光とともに出現した。

その紙の束を手にとると、流れるような動作で自分の横に置く。

そんな僕を見て、エリスはきよとんとしながら。

「えっ……あの……見ないんですか?」

「用意してもらって悪いが、得体の知れない武器やらパワーを使う気にはなれなくてね。それに、さっきアクアも言ってただろ? 僕は既にスーパーパワーを持っている。それは……」

そう、僕が僕である理由にして、僕だけが持つ最強の力。僕のもう1つの名前。

きよとんとしたままのエリスに、僕が誰なのかを教えよう——

「それは……I私 AはMア IイRアOン MマAンNだ……でしょ?」

「……………」

——した所で、僕の最大の決め台詞を奪い、満足げにドヤ顔をするアクア。

この女、やってくれるじゃないか。

「正解だ。僕のセリフを奪ってまで紹介してくれて感謝するよ。僕のサインいるか?」

「うーん、どちらかと言うとソーのサインの方が欲しいわね。あの雷

神、天界じゃ結構人気でファンが多いのよ。その子たちに高く売れそうだわ」

な、なんて俗物的な女なんだ……。皮肉も通じない。女神らしく名乗ろうとした時に邪魔してしまった仕返しのつもりなんだろうか。というか、僕のサインよりソーのサインの方が売れることが何気にシヨツクだ。

僕が渋い顔をしていると、アクアの隣にいたエリスが気まずそうに頬をポリポリと搔いて。

「あ、あの……アクア先輩、そろそろ本題に戻らないとまた怒られてしまいますよ……？」

「うっ……そ、そうだったわね……ねえ、トニー、それじゃどうするの？」

「それなんだが……元の世界にあったものをこっちに持ってくるっていうのはできるのか？」

「えっ？　できるけど……本当にいいの？　言っとくけど、そのスーツなら私が服として処理して、持って行かせてあげるわよ？」

「いいのか？　それだと僕が今考えてる計画がよりスムーズになる。助かるよ」

「新しい飲み仲間へのサービスよ！」

そう言つて、ウイंकしながらサムズアップするアクア。

飲み仲間……飲み仲間か。そんなのができたのは何年ぶりだろうか。

まあ、悪い気はしない。

「さっ、なに持ってくるの？　なんでも言つてちょうだい！」

「それじゃ遠慮なく。僕が欲しいものは——」

僕が欲しいものはただ一つ。

アクアの目をしっかりと見据えて、それを告げた——！

▽

「は、はぁーっ!?　いくら何でも無茶よ！」

「ま、まあそういうわずに……私も手伝いますから」

僕の要求に目を見開いて拒絶するアクアと、なだめるエリス。だが、どうしても持っていきたいものだ。速攻片をつけるつもりではあるが、念には念をだ。

今度は僕がアクアに交渉してみよう。交渉は昔からやってきた、きつと上手く行くはずだ。

「何でも言ってくれっていうのは冗談だったのか？」

「うぐぐ……ね、ねえエリス！ 無効でしょ!? こんな無効よね！」

「えつと……一応不可能ではないので無効というわけには……」

「何でよーっ！ こんなめちやくちや面倒じゃない！」

不可能って訳ではないみたいだ。

だったら説得できる。

「アクア、よく考えてみる。僕に必要なものを与えてその異世界に飛ばした方が後々楽になるかもしれないぞ？」

「ふえっ？」

僕のその一言に頭を振り回して喚いていたアクアが動きを止めた。

「いいか？ 今頼んだものを用意してくれれば魔王討伐とやらが一気に楽になる。そうになったら？ 君の仕事が楽になる。もう日本人を異世界に送る必要がなくなるんだからな。今面倒だとしても、後から一気に楽になるんだ。投資ってやつだよ。簡単だろ？」

「な……なるほど……」

アクアが顎に指を置いて唸る。食いついたな。

僕の見立てだと、アクアは間違いなく楽しんで生きていきたいと考えてるタイプだ。

だったら、そいつをちらつかせてやればいい。

交渉において大事なものは、相手にどれだけ自分に利益があるかと思わせることだ。

「おお……」

エリスが感心したように見えてくる。僕にかかればこんなもんだ。

……なんて心の中でほくそえんではいるが……。まあ、実際これはお互い悪い話じゃないだろう。

別に騙そうとしているわけじゃないんだ。本当にメリツトのある話をしている。

「はあ……まったく、しょうがないわねえ……わかったわ。それ用意してあげるから、楽しませてよね？」

「もちろんだ。約束するよ」

そういつてニヒルな笑みを浮かべてみせる。

期待を裏切るわけにはいかない。

▽

——それからしばらく、アクアの様子を見ていると。

「ふう……や、やっと終わったわ……ちゃんとやったわよ私……ご要望通り……」

若干やつれた感じのアクアが額の汗をぬぐって息を吐く。

「お疲れ様。はたから見るとちよつとしたイルミネーションのショーみたいで楽しかったよ。また見たいね」

「またそうやって軽口たたいて！ もう二度とごめんよ！」

「あ、あはは……」

アクアとエリスは手や自分の周囲にきれいな魔法陣を浮かべて、それこそ僕がホログラムを浮かべて設計する時のような動きで、なにやらいろいろと操作していた。

本人はまじめにやってみていたが、きれいで見ていて楽しかったのは事実だ。

「ほら、準備できたからそこに立ってーほら早く立ってー」

けだるげに床にできた魔法陣に指をさすアクア。別世界への転送という緊張的な瞬間なのだが、彼女は何とも思わないんだろうか。

言われた通りにそこまで移動して、魔法陣の上に立つと。

「ふう……」ホーン、それでは……トニー・スタークさん。あなたをこれから、異世界へと送ります」

息を整え、最初に会った時のような真剣な顔になるアクア。

さつきまでくだけた雰囲気だったため、急に真面目になると少

しむずがゆい。

『君は誰だ』と突っ込んで雰囲気を崩したいが、そうするとうるさそうなので、ぐつとこらえて我慢する。

「魔王討伐のための勇者候補として、魔王を倒した暁には神々からの贈り物として、どんな願いでもかなえて差し上げます」

「へえ、どんな願いでもか……」

アクアの話聞く限りじゃ、その異世界はレンガの家々が立ち並び、道路には馬車が走るような中世レベルの時代らしい。

楽勝だ、すぐに終わるだろう。そして、その願いとやらで元の世界にサツと返してもらおうか。

そんな風に思っていると、エリスが少しだけ心配そうな顔をしながら。

「頑張ってくださいね、トニー・スタークさん。魔法を侮ってはいけませんよ？ おそらく、あなたが思っている以上にあの世界は強力です。中には、その無敵のスーツでさえ歯が立たないような魔法も」

「エリス、僕の世界にはこんな言葉がある——」

僕はエリスの言葉を遮り。

「——僕の科学技術は、魔法と見分けがつかない」

そういつて、スーツのマスクをカンツと甲高い音を立てて閉じる。キマツた。

「ちよつとー。私まだそういうカツコイイ事を言うターンの途中なんですよ」

「す、すいませんー！」

「悪かったからそう拗ねるなよ。ところでアクア、一つ聞きたいことがあるんだが、魔王を倒したらまたここに帰ってくるのか？」

「……へ？ そーねえ、倒した時に、いったんこの場所に呼んで願い事を聞くことになると思うわ。それがどうかしたの？ 早くしてほしいんですよ」

突然の質問を受けて、拗ねた顔から不思議そうな顔にして僕の質問に答えるが、すぐにまた拗ねた顔に戻る。

そんな、少し不貞腐れ気味のアクアに、僕はまたマスクを開けて。

「すぐに倒して戻ってくるから、さつきまで飲んでた酒、栓占めて保管しといてくれ。また飲みながら話でもしようじゃないか、飲み仲間君」

そう言っただけでまたニヒルな笑みを浮かべる。

それを聞くとアクアもニヒルな顔を浮かべて。

ちよつと声を低くしながら。

「ふふんっ……任せておきなさい。次に栓を開けるときは……あなたがここに来たときよ」

僕のノりに付き合ってくれた新しい飲み仲間は、手をぱつと挙げる
と。

「さあ勇者よ！ 願わくば、数多の勇者候補からあなたが魔王を打ち倒すことを祈っています！ ……さあ、旅立ちなさい！ あっ、お酒のお預けはつらいから、早く魔王倒して帰ってきてね？」

そう言っただけで、ニヒルな笑みからニヒルな笑みを浮かべた。そんなアクアと、僕たちのやり取りを微笑んで見ていたエリスの顔を見ながら。

僕は、明るい光に包まれた……！

LEGEND OF CRIMSON

第1話 駆け出しゴーレム

川のせせらぎと、石畳の上を車輪が転がる音が聞こえてくる。

目の前を覆っていた白い光がだんだんと晴れると、僕の視界に広がったのは。

「Wow……どうやら……本当に異世界のようだ……」

一見すれば元の世界の観光地にもありそうな田舎町だが、違うのは行きかう人々。

エルフ耳の女性や、獣耳が生えてる一家など、まさに映画や漫画でしか見たことが無いようなファンタジー世界の住人達がいた。

これは驚いた。ソーが胡散臭いコスプレ男に見えてくる。

科学者のはしくれとして、あの知的生命体に興味が沸く。人間とは寿命がどれだけ違うのだろうか、実際に弓矢の扱いに長けているのだろうか……。

しばらく好奇心から辺りを見渡して街中を観察するが、すぐに自分の目的を思い出す。

こんなことしてる場合じゃない。魔王討伐のために動かなくては。

何か情報を知ってそうな人を探していると、それぞれ大剣や槍、戦斧を背負った三人組の後ろ姿が見えた。

ちようどいい、彼らから話を聞こう。

そうと決めた僕は、後ろから近づいて彼らに声をかける。気さくに「行こうか。」

「やあ、そこの君たちにちよつと聞きた」

「う、うわあああああああああ?!?!? あ、新手のゴーレムか!?

おい、テリー！ ソファイ！ 戦闘態勢だ！ 武器を抜けええ！」

「はあああああつ?!? 何で街中にゴーレムが!?! 門番はどうしたのよ!?!」

「知るかそんなの！ ていうか見ろ、こいつめちやくちやババそうだぞ！ 魔王軍の新兵器でも攻めてきたってのか!?!」

僕の姿を見るや否や絶叫し、武器を構える三人組。

どうしてこうなった。異世界に来て一分くらいで武装した人間に囲まれるなんてさすがの僕でも予想できるわけがない。

いや……そうだ。僕を知ってる人間なんていないこの世界の人間が、スーツを着てマスクまで閉めた僕を見たらそりゃ怪物に見えるよな。

とりあえず殺気立ってる三人組を落ち着けるため、僕はマスク開けて顔を見せる。

「落ち着け、僕は人間だ。ただちよつと……鎧マニアでね」

適当な嘘をジョーク交じりにつく。これで信じてもらえればいいが。

駄目ならスーツを脱いで歌でも歌おうか。

そんなふざけたことを考えていると、三人はしばらくお互いの顔を見つめあつた後、若干の警戒をにじませながらも武器を下ろした。

「な、なんだよ……鎧かよ……びっくりさせやがって……でも、いきなり剣を向けて悪かつたな。俺はレックス、横にいるのがテリーとソフィだ、よろしくな。というかあんた今、手を使わずに兜を開かなかつたか……?」

「鎧マニアでね」

「ていうか、それ本当に鎧なの……? 胸が光ってる鎧なんて見たこともないんだけど……」

「……鎧マニアでね」

「そ、そうか……」

だめだ、いい誤魔化し方が浮かばない。もつと頑張れ僕の天才的頭脳。皮肉と世界を変える発明品しか浮かばないのか?

鼻に大きな傷のあるレックスと名乗った男は、僕の圧のあるごり押しに微妙そうな顔をしていたが、追究はしてこなかった。

「で、あんたは俺たちに何の用なんだ?」

レックスのその言葉を皮切りに、他二人も話を聞く姿勢に入る。警戒の空気は消えたが、代わりに僕は三人から奇妙な奴を見る視線を向けられていた。

もつとまともなごまかしを考えておくんだつたと後悔するが、もうこの男たちと話すことはないし、別にいいだろう。

——このスーツですぐに魔王城まで飛んで行き、魔王とやらを吹き飛ばして帰るつもりなのだから。

なので、特に深く考えずにレックスに質問をする。

「魔王城の位置を教えてくださいか？」

「ま、魔王城!?! そのすごそうな鎧と言い、腕利き冒険者だったのか!?!」

……の、割には魔王城を知らないなんて変だな」

「一体何する気なんだ？」

「まあ……ちよつと行つてみて来るだけさ」

ますます僕を見る目が奇妙なものになっていくが、いちいち気にしてはいられない。

そんなことよりも早く魔王城の位置を教えてください。

「……魔王城なら、ここから北西にあるバカでかくて禍々しい城だ。地図に記されているだけで、実際に見たわけじゃないけどな……。でもあんた、一人で行くのか? パーティは? 武器は?」

テリーと呼ばれていた男が魔王城がある方角に顔を向け指をさし、また僕の方に顔を戻してあれこれ質問してくる。

情報はもう聞いた。僕はテリーが指した方向を向き、質問に答えて会話を切り上げようとする。

「パーティ? パーティならこれから起こるさ。武器もある。一時間もしないうちにまたアクアとエリスの元に戻れそうだな」

そう言つて、僕は開いていたマスクを閉じる。

「あ、あんた……やっぱりその兜……」

マスクを閉めた僕を見て目を見開く三人。だがもう会うことの無い連中に対して誤魔化す必要も無い。

スーツのエネルギーを飛行スラスタに回す。

「情報提供感謝するよ。じゃあな」

一言礼を言い、飛行リパルサーを照射して空へと上昇していく。

「「えっ」」

そのまま高度を上げ、魔王城がある方角へ飛行した。

「鎧が……」

「飛んだ……？」

「帰って寝ようか。きつと疲れてるんだよ」

空に上がる際、レックス達が最後に何か言った気がしたが、リパルサーの照射音に掻き消されてよく聞こえなかった。

▽

巡航速度マツハ3で飛ぶこと十数分。城のようなものをスーツのズーム機能で確認した。

巨大で、漆黒で、禍々しい。なるほど、まさに「魔王城」って感じだ。

リパルサーのエンジン出力を上げ、さらに速度を上昇させる。

「さて、魔王になんてなろうとするやつはきつと頂上にいるに違いない」

このまま突っ込んで一気に片を付けてやる。アクアが我慢できずに酒を飲んでいなければいいが。

大丈夫、楽に終わるさ。スーツが搭載する全ての武装をオンラインにして城の頂上へ突撃の準備を終える。

さあ、パーティーの時間だ。

「ピザのお届けになります」

誰にも聞こえないジョークを言って、自分の心にわずかにあった緊張を消そうとした時だった。

脳の中まで響き渡る、銅鑼のど真ん中にスレッジハンマーをフルスイングで叩きつけたかのような、凄まじい轟音。

それと同時に全身を骨の芯まで震えるような衝撃が襲い、視界が大

きくブレる。

「ぐあああああああああ!?!」

何度もきりもみ回転し、視界が青空に向いたところで、ようやく自分が吹っ飛ばされていていることに気が付いた!

な、なんだ!?! 何が起きた!?!

衝撃によって空中制御の姿勢が崩れ、重力に従って地面に落ちる。意識を手放しそうになるが何とか耐え、姿勢を保とうとするが、衝撃でマヒした体じや手足をばたつかせることくらいしかできず、なすべなく地面にたたきつけられた。

……墜落してから数十秒か、数分か……。

朦朧とした意識を何とか覚醒させ、僕が墜落してできた地面のクレーターから這い出て、フラフラと立ち上がる。

「ぐ……バリアが張ってあるのか?」

スーツ越しに頭を押さえながら、魔王城を見る。飛んでいる時には気が付かなかったが、こうしてみるとうっすらと膜のようなものがドーム状になって城を覆っているのがわかる。

油断した……。魔法のあるファンタジー世界とはいえ、テクノロジの差で一方的に勝てるだろうと思っていた少し前の自分が嫌になる。

よし、動力源を破壊しよう。

もし城の中にあつたら不可能だが、地中などにあつたらなんとでもなる。

ヒドラの基地に張られてたバリアを解除した時も、地中にあつた動力源を破壊して中に侵入した。

バリア周辺をスキャンし、動力源を探る。

——が。

【動力源 無し】

【未知のエネルギーを検知。供給元は不明】

「どうなってる……」

ヘルメットのHUDに表示される情報に思わず顔をしかめた。

一番理解できないのは表示されたバリアが何からできているかだ。

ちらつと見ただけでも生体電気やら脳波に非常に似た反応がある。それも複数。

これの何が理解できないって、この反応は生きている生物からしか見られない反応ってことだ。

つまりこのバリアは生物由来ってこと。つまり頭がおかしくなりそう。

バリアを解除する方法は見つからない。だったら、突破するしかない。

僕はオンラインにした全武装を展開し、推進リパルサーを攻撃用に切り替え、出力も上げて狙いを定める。

やり方は簡単。一点集中で人が通れるくらいの穴を開け、ビーズカーテンをくぐるように中にスマートに侵入する。

「knock knock」

せいぜい禍々しい玉座か何かにでもふんぞり返ってろ。

すぐに電気椅子に変えてやる。

僕はバリアに弾かれて地面に叩きつけられた怒りをまだあってもいない魔王に向け。

バリアを打ち破らんとありったけの火力を――！

▽

「あの……お水です……」

「ああ……」

「あの……メニュー表、ここに置いときますね……」

「ああ……」

僕は、再び最初に送られた街に戻り、ギルドに来ていた。これもまたファンタジー世界では定番の場所だ。残念ながらワクワクはしな

いが。

またゴーレムと勘違いされないようにマスクを開け、酒場はないかと人に聞きまわっていただけだったのだが、このスーツを着ているせいか、『ギルドは向こうだよ、ベテラン冒険者さん』と、ここを案内された。

……気を紛らわすために何か飲もうと思ったのだが、この世界の金を持っていない僕は、こうしてギルドの酒場の端の席でうなだれながら水をすすってる。異世界くんだけりまで来て。

クレジットカードくらい使えるようにしとけ。

それにしても、一つの街を十年動かせるくらいのエネルギーを火力にして叩き込んだのに、バリアに傷一つ付ける事すら叶わなかった。ありえないだろ。

攻撃が効かなかったというよりも、拒否されたって感じだった。ダイヤル式の金庫にハッキングをかけてるような感覚に近い。開け方が違うと言うべきか。

あれを破るには、おそらく物理的なものだけでは足りない。僕も知らない未知のエネルギーが必要になるだろう。

……情報が必要すぎる。まずは書物などから情報収集しなくては。

そう考えていた時だった。

ゴトンツとテーブルの上に何かが置かれた。

……………?

うなだれて下げてた視線をテーブルの上まで上げると、そこにはジョツキが。

ビールか何かだろうか。飲み口まで泡があふれ、金属製のジョツキ全体に水滴がびっしりついていることから、キンキンに冷えていることがわかる。美味そうだ。

いや違う、そうじゃない。一体誰が……。視線をさらに上げ、テーブルの横に立っている人物を見る。

「やあ、そのキミー！ そんなにしよぼくれた顔してどうしたんだい？ これ奢ったげるから元気出しなよ！」

そう言って笑いかけてきたのは、頬に小さな刀傷があり、革の鎧を装備しつつも露出度の高い恰好をした銀髪で明るい印象の少女。

そして、その隣には長い金髪を後ろでまとめ、ポニーテールにしているゴツイ鎧に大剣を腰に下げた重装備の少女が。

どちらも十代半ばくらいだろうか。

金髪の方の少女は、僕のことを……いや、僕のスーツを見てなにやらソワソワしている様子だ。

それは置いておいて、とりあえず彼女たちが僕に何の用か尋ねる。

「あー……そういうサービスは頼んでないんだが」

「一体何と勘違いしているのかな?! あたしたちはそんなんじゃないよ!!」

わつと声を荒げて怒る銀髪娘。十代半ばの少女に言うジョークじゃなかったな。今度はちゃんと尋ねよう。

「悪かったよ。今ちよつと心が荒れててね。で、君たちは僕に何の用なんだ?」

「まったくもう……。とりあえず自己紹介させてね。あたしはクリス。それで、こつちの不愛想なのがダクネスだよ。よろしくね!」

「……ん。よろしく頼む」

「で、キミに話しかけた理由なんだけど、キミは街中でギルドがどこにあるか聞きまわってたでしょ? だから、ひよつとして冒険者になり来たのかなって思ったんだ。そこで、あたしとダクネスで駆け出し冒険者のキミに、いろいろ教えてあげようかなって思ってたね」

……本当はただ酒場を探してただけだったのだが……。

だが、これはいいチャンスかもしれない。この世界の常識と言ったものは全く知らないのです、教えてくれると言うならありがたく教えてもらおうか。

その前に自分の自己紹介をしようとした時、ダクネスと呼ばれた彼女が唐突に口を開いた。

「クリス、私にはこの男が駆け出し冒険者には全く見えないのだが。まず鎧が完全に駆け出し冒険者のそれではないだろう。これは相当な業物だぞ」

「ふふふ、私にはわかっちゃうんだよ、ダクネス。さっきの街での会話のやり取りとかからね」

そういつてダクネスにウィンクするクリス。観察眼つてやつが優れているのだろうか。

実際その通りだ。街の人々は僕の姿を見てベテラン冒険者と呼んでいたが、はつきり言つて冒険者が何なのかもよくわかっていない。とりあえず自己紹介を終わらせ、この世界での常識などがある程度教えてもらおう。あとは僕一人で書物などを読み漁つて知識を蓄えればいい。

「僕の名前はトニー・スタークだ。まあ、トニーで良い。これ、ありがたくもらうよ」

軽く自己紹介をし、クリスが奢つてくれた飲み物を一気に呷る。

冷えた炭酸の液体が喉を伝わり……

……なんだこれ。炭酸がはいっているのかと思つたが、少し違うみたいだ。シユワシユワするというよりは、シャワシャワする。酒にはうるさい僕からすると、少し安酒チックな味が気になるが、まあ悪くない。こういうビールみたいなのも好きだ。ジャンクフードが欲しくなるな。

空にしたジョッキを机の上に勢いよく置き、口元をぬぐう。

「で……ダクネス……だったか？ クリスの言う通り、僕はここに来たばかりで、冒険者とやらが何なのかもよく知らない人間だよ」

「何……そんな鎧で……これは驚いたな。では、その鎧は何なのだ？」
「そうだな……僕は……遠い国のメカニツ……いや、職人でね。自分で作った装備を自分で試そうとしてるだけさ」

「ほお……」

ダクネスがとても興味深そうな顔をして僕を見てくる。

クリスがコホンと咳払いをした。

「さ、話を本題に戻すよ。それじゃまず、冒険者とは何かつてところから説明するね」

冒険者とは、基本的には頼まれた薬草などの物品を危険なところか

ら採取してきたり、人間に害を及ぼすモンスターなどの討伐を請け負おう者たちの総称。基本的には何でも屋らしい。

冒険者には職業があり、それぞれ何かしらに特化している。クリスは隠密と偵察に長けた《盗賊》ダクネスは防御力に長けた《クルセイダー》と言った感じに。

モンスターを倒すことによって経験値がもらえ、それでレベルアップすることができる。そして、レベルアップによってもらえたポイントによって新たなスキルなどを得て強くなることが出来る。

そしてここはギルド。ここで冒険者として登録することによって、仕事をここで貰ったり、支援を受けたりできるらしい。

——以上が、クリスの説明で分かった冒険者についての情報。

完全にゲームの世界だ。ゲームは若いころにいくらかやってたが、まさにその世界だ。

だが、この世界で魔王討伐に動くなら、冒険者になるのが一番良さそうだ。

ひとまずは冒険者になろうとしよう。

「それじゃ、冒険者登録、いってみよう！」



クリスに言われるがままに、僕は冒険者ギルドの受付カウンターに立っていた。

目の前にいるのは、ウェーブのかかった髪をした、おっとりとした感じでかなりきわどい恰好をした美人の受付嬢。

僕の会社の受付嬢として雇いたい。

彼女は、いくつかの書類を取り出し、営業スマイルで受付テーブルの上に並べ始めた。

「ではまず先に、登録手数料の千エリスが必要になります」

……登録手数料か……。

もちろん、そんなものは持っていない。でなけりや端の席で水なんてすすってない。

「はあ……アクアとエリスは気が利かないな……。悪いが、ちよつと待っててくれないか？ このスーツのパーツなり何なり一つ売るなりして金を……」

「あ、あははは……ここは私が出してあげるから！ ほら、登録手数料！」

何か焦った様子のクリスがたたきつけるようにテーブルに金を置いた。

……？

「は、はい……では、冒険者について軽くご説明を……」

「説明ならさつきこの子から聞いたから大丈夫だ。助かったよ、クリス」

僕の言葉に、若干まだ焦りの表情を浮かべながらもサムズアップするクリス。

「そうでしたか。では、こちらの書類に身体的特徴の記入をお願いします」

「お安い御用だ」

出された紙に自分の身長や体重、年齢などをサツと書いて渡す。

「はい、結構です。では、このカードに触れていただけますか？ これでああなたの現在のステータスがわかります」

カードに触れるだけで自分のデータが出てくるとは、いったいどういう仕組みなんだろうか。

DNAから読み取っているのか……？

得体のしれないカードに触るのは気が進まないが、そうも言ったられないので触ろうと……して、自分がいまスーツを着ている為、素手で触れないことに気が付き、スーツを脱ぐ。

アイアンマンを知らない世界で、人の目がある中で、ガシヤガシヤと変形させて。

「！？」

ギルド内がざわめきだした。

酒場の方にいた冒険者達がこちらを見てはなにかヒソヒソと話をしている。

目立つのは嫌いじゃないが、その目が奇妙なものを見る目なら話は別だ。

これなら手の部分だけ解除して取り外せばよかったと思うももう遅い。

「ト、トニー!? 一体どうなっているのだその鎧!? 本当に……一体……」

「後で見せてやるからはしゃがないでくれ」

さつきまで黙ってみてたダクネスが興奮した様子で食いついてくる。

物静かな印象の女性だったが、鎧の類に目がないのかもしれない。

「す、凄い鎧ですね……。本当に初めて冒険者になれる方なのか……?」

「ああ、右も左も分からない駆け出し冒険者だよ」

そう軽口を言ってカードに触れる。

「はい、ありがとうございます。あら……魔力がほぼゼロですね……」

「ド、ドンマイ!」

「……うむ。その鎧を見るに、魔法職になるつもりはないのだろうか? 前衛職でも魔力は多少必要になってくるが、それでも大丈夫だろう。

う。気にするな」

「おい、別に気にしてないからその同情する顔はよせ。かえって惨めになってく……だからよせ!」

クリスとダクネスがうるさい。

僕はこのスーツで戦う。だから魔法が使えるかどうかは関係ない。

「あ、あはは……魔力が無くても冒険者にはなれますから……あつ、ですが、筋力、生命力、敏捷性、器用度は平均よりも高めですね。特に器用度はかなりのものですよ! あとは……知りよ……」

そこまで言ったところで、受付嬢が一瞬止まる。

……やがてカタカタと震えだし、カッと目を開いて。

「(……)(……)これはっ……! な、なんですかこの異常な知力!?! こんな数値、今までに見たことないですよ!?! ひよっとしたら人

類史上最高クラスかも知れませんが……っ！」

興奮した様子の受付嬢だったが、顔をキリツと整え、カードをテーブルに置き。

「あの、王都で魔道学の研究員になることをオススメします。あなたならすぐにこの国……いえ、歴史上最高の大賢者になれるでしょう」

「まさか冒険者登録に来て冒険者人生を否定されるとは思ってた」

「ち、違うんです！ 魔王軍と戦う手段は冒険者になって魔物を駆逐するだけではないと言うことを言いたくてですね……！」

僕の不機嫌そうな声を聴いて必死に弁明を始める。

とりあえずは選択肢として頭に留めておき、冒険者になる前提で話を進めていく。

「……で、冒険者になるんだとしたら、どんな職が向いてるんだ？」

「そ、そうですね……魔力が無いので、選択肢としては前衛職がほとんどです。ステータスの値は悪くないので、レベルを上げれば上級職になることもできますよ？」

リストを見てみれば、かなりの数の候補があった。戦士、ナイト、ラッサー、ソードマン……。

正直どれもなろうとは思わない。自分のスーツで戦うし、選ぶメリットを何も感じない。だが、職業は決めないと冒険者として活動はできないみたいだ。

どうしたものかと考えていると。リストの中から一つの職業が目

——冒険者。本職には及ばないものの、すべての魔法やスキルが取得できる職業。

全ての魔法……これはもしかするとあのバリアやこの世界の未知の力の研究に使えるかもしれない。

他に欲しいものもない。とりあえずこれにしておくか。

「……決めた。冒険者にする」

「そうですね。研究員ではなく冒険者に……それで、どの職にするんですか?」

「おい、コントじゃないぞ。職業を冒険者にするって言ったんだ」
すつとぼける受付嬢にちゃんと《冒険者》になりたいと伝える。

頭の上にクエスチョンマークを浮かべる受付嬢だったが、ハツとして慌てふためく。

「ほ、本気ですか!? その……冒険者は……」

「僕にとって職は重要じゃない。とりあえずはこれにさせてくれないか?」

「わ……分かりました……では、冒険者……つと……。あの、職業はいつでも変更できますからね?」

「覚えておくよ。それじゃ、カード貰っていくぞ」

カードを手に取り受付カウンターに背を向けて、いつの間にかギルドの入り口辺りで何かの紙を掲げているクリスたちの元へ向かう。

何をしてるんだ、彼女は。

「え……えつと……ギルド一同、あなたの活躍を期待しています!」
後ろから聞こえた受付嬢の声に、背を向けたまま手をひらひら振って答えた。

どうやら、クリスが持っている紙は依頼書のようだ。

なるほどな。最初は依頼を受けて世界の仕組みを知れってことか。クリスたちの元に合流し、一人そう納得していると。

「……ん。トニー、鎧を置き忘れてるぞ」

「関係ないさ」

「……? 鎧無しにクエストを受ける気か? もしかして、トニーもそういう趣味……を……」

何かよくわからないことをしゃべっていたダクネスが、途中で急に黙る。

……僕の背後から普通に歩いて追いついてくるスーツを見て。

「???:.....?!?!?!?!」

今まで凜と凛としていた顔はどこへやら、打ち上げられた魚みたいに口をパクパクさせている。反応面白いな。

後ろから追いついてきたスーツは、そのまま背後から文字通りスーツを羽織るかのように僕の体を包み込む。

ギルドがまたざわめきですが、もう慣れてもらうしかない。そのうちおさまるだろう。

その中でただ一人、僕のすぐ目の前で依頼書を持ったままのクリスは、ちよつと困ったような顔こそ浮かべているものの、驚いた表情は特に見せていなかった。

「君はこの顔芸大会に参加しないのか？」

僕はそう言つて、今だ口をパクパクさせているダクネスや、酒場で僕のことを見ている冒険者達を手でさす。

「へ? あっ.....まあ.....なんとというか.....初見じゃないと言うか.....すでに同じようなものを見たことがあると言うか.....あはは.....職業的に、いろんなものを見てきたから.....」
そう言つて、頬の刀傷の辺りをポリポリと.....

.....

「奇遇だな。僕も君と同じことを考えていたよ」

「へ?」

確信があったわけじゃない。だが今のしぐさとセリフでなんとなくそう感じたから。

僕は、マスクを閉め――

――クリスを顔認証システムにかけた。

「ね、ねえ.....どうしたの.....急にそんな見つめてきて.....な、なんだ

かすごく嫌な予感が……」

さて結果は。

【顔認証完了 出会った人物の中から最も一致度の高い人物を検索中……】

【検索完了】

【エリスとの一致度99.9999998%】

「……」

冷や汗をかいているクリスに……いや、エリスに僕は一言。

「なんでそんな恰好してこんなところにいるんだ？ エリ」

「あああああああああああ！！！！ うわあああああああああああ

あああああああああ！！！！」

僕の声をかき消すように、クリスが絶叫しながら掴みかかってきた

！

第2話 ありえないほど《堅牢》ありえないほど《幸運》

絶叫で我に返ったダクネスを尻目に、スーツを着てるはずの僕をギルドの入り口から路地裏まで引つ張るクリスもといエリス。

「おい、いきなり引つ張ってどうし」

「どうしたもこうしたもないよ！ なに普通にばらそうと……いや、なに普通に突き止めてるの!？」

「顔認証システムを使っただけだよ。ちなみに僕の世界にはわりとどこにもある技術だ。ここがNYじゃなくて良かったな。というか、君こそ髪を短くしただけで変装になってると思ってたのか？」

「うぐぐ……」

エリスは悔しそうな顔をして、首に巻いているマフラーを指でいじる。

本当は頬を搔くクセとスーツを見た事あるような言動で気がついたのだが。

まあ、自分で墓穴を掘ったことには変わりない。

「はあ……なんか様になる場面でこっちからカツコよくバラしたかったのに……」

『「真実は……私がエリスだ」。的な感じで?』

「えっ? う、うーん……まあ、そんな感じで……」

「微妙そうな顔するなよ」

「とにかく!! 間違つてもあたしをエリスつてよばないこと！ 特に、ダクネスには絶対バレないようにして!」

——と、クリスがまくし立てていると。

「えっと……私がどうかしたのか? その……いきなり大声上げて出ていったから心配になつてついてきたのだが……」

声が出た方に顔を向けると、そこには路地裏の入口あたりで、不安そうな顔をしながらこちらを見てくるダクネスの姿があった。

「な、なんでもないよダクネス！ ちょっとトニーの鎧にゴミが挟

まっつて危なかつたから……」

下手くそな言い訳をしながら、また頬をポリポリと搔くクリス。それを見たダクネスは、ますます不安を顔に滲ませる。

「クリス、お前は困ったことがあるとそうやって頬を搔くクセがある。何か隠し事をしているんじゃないのか？ 困ったことがあつたら私に言え。親友だろう？ 一人で抱え込むな」

「えっ……う、うん！ ありがとうダクネス……！」

親友の言葉に、クリスはとても嬉しそうにはにかんでいた。

あれ、これ僕邪魔かな？

「それじゃ、私はアクセルの門で待っているからな。用事が終わったら追いついてこい」

不安そうな顔から凜とした女騎士らしい表情に変え、踵を返すダクネス。

その後ろ姿は朝日も相まって、僕ですら思わず見惚れるほど美しく、気高さを感じさせるものだった。

「良い友人だな。羨ましいくらいだ」

「……うん。こんな良い親友なのに、本当の事を打ち明けられないなんて辛いね……」

「気持ちをよくわかる。まあ、いつか様になる場面でカツコよくバラせよ」

「ふふ、そうだね」

——Darkness^闇。彼女がなぜそんな名前をしているのか気になったが、とりあえずはクリスが持っていた依頼書の場所へと向かうことにし、ダクネスの背を追った。



——僕は依頼書にあつたジャイアントトード討伐のため、アクセル近くの平原まで来ていた。

スーツを着て長時間歩いたのは初めてかもしれない。

「で、ジャイアントトードってのはどんなモンスターなんだ？」

「ジャイアントトードを知らないのか……？ 一体どんな国から来たんだ？」

「エイリアンが空に穴を開けて侵略してきたり、手足がもげても再生する体温三千度の高熱人間が束で殺しに來たり、自我を持った人工知能が人類抹殺計画を企てたり……まあ、そんな国だ」

「え、えいりあん……？ じんこうちのう……？ よくわからないが、そっちの国も大変なのだな……」

本当に、大変な世界だよ。

と、その時だった。

【付近の地中に多数の生体反応あり】

僕のスーツが、近くの生命体の体温や心音を探知したのか、HUDのレーダーに赤い点で位置を示しだした。

その方向に顔を向けると……。

「出てきた！ あれがジャイアントトードだよ！」

ぼこつと音を立て、牛より二回りほど大きな体軀を誇る巨大なカエルが地面から姿を現した。

なるほど、名前のまんまだ。

ジャイアントトードは僕たちの方に首を向けると、のっそりとした遅い動きでこちらに向かってくる。

「間拔けな顔してるな」

「油断はしないでね！ あのカエルのせいで人里の子供や農家の人が毎年犠牲になってる危険なモンスターだから！」

「ヤツらは基本的に舌を伸ばしての捕食攻撃しかしてこない。だが、消化できない金属を嫌うのでトニーが食われることはないだろう。私とトニーでクリスを守るぞ」

「つまり君も食われることはないって訳か。了解だ、それじゃ……」

機動力のある僕がおとりになる。そう言おうとした時だった。

「ダ、ダクネス!? ダクネス何してんの!?! 駄目だよ！ 今は抑えて！」

横にいたダクネスが、おもむろに鎧を脱いでいた。

鎧の下に着ていた黒い全身タイツのみになり、ストレッチを始め

る。

.....???

「なあ、なんで鎧を脱いでいるんだ？」
「？」

僕の純粹な疑問に、不思議そうな顔をするダクネス。

不思議に思ってるのはこっちだ。

「もう一度聞くぞ。何で、鎧を、脱いでるんだ？」

「決まっているだろう。鎧を着てたら捕食されないからだ」

真顔でそんなセリフを言つてのけるダクネス。

僕はその言葉に込められた意味を、遠心分離機より早く頭脳を回転させて必死に探し出す。

そして一つの結論にたどり着いた。これだ。

「あー……。なるほど、クリスを標的から外すためか。素敵な自己犠牲の精神だな」

「いいや？ 捕食されたいからだか？」

「……は？」

僕がたどり着いた完璧な結論は、イカレてるとしか思えないダクネスの爆弾発言の前に、粉みじんに爆散した。

本当にこの女は何を言っているんだろうか。異世界だからなにか色々違うのだろうか。

頼むからそうであってくれ。

「ふ、ふふふ……私は今からあの長い舌にとらわれ、粘液でぐちよぐちよにされてしまうのだ……そ、そう考えるだけで……では、行つてくる!!」

「おい、ちょっと待て！ クリス！ 援護するぞー！」

「うんー！」

ダクネスは恍惚とした表情を浮かべながら、剣を構えて力エルに突撃して行く。

先ほど彼女に感じた美しさと高潔さが今にも崩れそうだが、モンスターにまっすぐ突っ込んでいったのでクリスと二人で援護することにする。

とりあえず、あのジャイアントトードのサンプルが欲しい。あれだけ大きくなった理由が知りたい。

リパルサーの出力を殺傷から衝撃レベルまで落とし、カエルの体のど真ん中に照準を合わせる。

衝撃リパルサーなら、体をほとんど傷つけずに倒すことができるはずだ。上げすぎるとその場でフライになってしまう。

さあ、これならどうだ。

掌から照射されたりパルサーが、ダクネスの横を通り、ジャイアントトードの腹へと突き刺さ……。

——ボヨンッ

「グハアッ!」

「ダクネスーッ!」

……突き刺さることはなく、バランスボールを蹴ったような音を立てながら弾かれ、代わりにダクネスの腹に突き刺さった。

ダクネスの体が吹っ飛んで宙を舞い、僕らの後方に落下する。クリスの悲痛な叫びが空に響いた。

マズイ……! 今のは巨大なカエルを倒す程度の出力は出ている。そんなものを人間が、ましてやなんの防具も装備していない状態で食らったら……。

「この……!」

カエルを放置しておくのは危険と判断し、頭に照準を合わせ、殺傷レベルまで上げたりパルサーをカエルに食らわせる。

頭の上が吹っ飛び、カエルがその場に倒れた。おそらく死んだと思うが、今はそんなのを確認してる暇もない。

僕はマスクを開けて、クリスと一緒にダクネスの元へ容態を確認しに駆けつける。

「ダクネス! 大丈夫か! しつかりしろ!」

あれだけの勢いで飛ばされたなら、よくて内臓破裂。悪くて即死。色々な不安が頭の中に浮かび、顔を青くさせてダクネスに呼びかける。

うつぶせに倒れている為、顔を見ることができない。

「ダクネス！ 返事して！」

僕とクリスの呼びかけに気が付いたのか、ダクネスの体がピクリと動き、僕とクリスは顔を見合わせてほっとする。

ひとまずは生きているみたいだ。とりあえず彼女を抱えて街へ向かおうとした時だった。

ダクネスが急に体をうずくまらせてプルプルと震えだす。

「おい、動くな！ 今から街に運んで……」

そこまで言ったところで、ダクネスがゴロリと寝返りを打ち、体と顔をこつちに向ける。

僕は、その彼女を……というより、彼女の表情を見て絶句した。

「はあ……はあ……なんだ……今のは……。まるで、内臓全体を同時に揺さぶられたかのような……。こ、こんなのは初めてだ……。た、たてにやい……」

ダクネスは……なんというか、口の端からよだれをたらし、頬を真っ赤に上気させ、それはそれは幸せそうな……。一言で言うなら発情したという感じの、恍惚とした表情をしていた。

……。

僕は理解してしまった。この女は、被^タ虐^ダ趣^の味^ト持^チな^ノだ。

さつき高潔で美しいと感じていた、僕の心の中での彼女の像はもはや見る影もない。

「んくうっ……！ あんな攻撃を食らわせておいて、そんな残念な奴を見るような目を向けられる……。ふ、ふふふ……悪くないぞ……お前とクエストに来て良かった……」

一応バイタルを確認したが、内臓系統に損傷は見られなかった。おそらく、ギルドでクリスが説明してくれた職業補正や、レベルアップによるステータスの上昇とかいったやつのおかげだろう。

特に心配する必要もなくなり、いよいよ僕は。

「クリス、僕もう帰っていいか？」

「ま、待って！ 確かにちよつとおかしいところもあるけど、根はとても優しくていい子なんだよ！ 信じて！」

「ハア……」

思わずため息が出るが、まだカエルの反応はある。

一度引き受けたんだ、最後までやってやろう。

さつき僕がカエルを吹き飛ばした音を聞いてか、周囲の土から大量のカエルがぼこぼこ出てくる。ざつとみて二十匹はいるだろうか。

「うっ……ダクネスが動けないから、この数はやばいかも……!」

「大丈夫だ。そこでダクネスの介抱をしてろ。僕がせん滅してきてやる」

「えっ! 大丈夫なの!」

「僕が何を見込まれ、何のためにここに呼び出されたか分かっているのか? こんなデカいだけの両生類に遅れをとるわけがないだろ。いいからそこで見てろ」

そう言つて、マスクを閉じ、スーツからリパルサーエンジンの音を響かせながら、地面から湧き出してこちらへ向かってくるカエルの群れへと歩いていく。

少し距離があつたカエルの一匹が、僕めがけて跳躍してきた。

数十メートルもある距離を跳んで一気に詰めてくるカエルだが、空中にいたところを僕のリパルサーで撃ち落とされ、地面に落下する。

仲間が死んでも警戒することなく、正面から向かってくるカエル達。

これなら的打ちと大して変わらないな。

そう思いながら、次の標的に掌を向けると……。

「ッ!」

「ダクネス!? 駄目だよ安静にしてなきや!」

僕の背後からそんなやり取りが聞こえてきたので、カエルに向けていた手を下ろし、後ろに振り向く。

ダクネスがクリスの元から飛び出し、何かを期待するよう目で、僕とカエルを見ていた。

「何しに来た。下がっているろって言っただろ。悪いが、君が性玩具にしようとしているカエルは、僕が今から全部倒すからな?」

「……………」

「おい、聞いているのか?」

「……………」

ダクネスは何をするでも、何を言うでもなく、ただ黙って僕とカエルを交互に見ていた。

何がしたいんだ……？ さっきの衝撃で元々おかしかつた頭がさらにおかしくなってしまったのかもしれない。

とりあえず無視しよう。

そう決めて今度こそカエルを倒そうと、掌をカエルに向けた時だった。

「ッ！ っこだ！」

ダクネスが、素早い動きでサイドステップしたかと思えば、またすぐピタリと止まった。

「ね、ねえ……ダクネスなにしてるの……？ 邪魔になるからこっちに戻る……？」

「クリス、邪魔をしないでくれるか。今私は、かつてないほどに集中しているのだ。少し静かにしててくれ」

「えっ……う、うん……」

クリスが制止しようとするも、ダクネスから発せられる気迫に圧されたのか、すぐに引き下がる。

「その角度だ……トニー、その角度でカエルの腹めがけて先ほどの攻撃を行ってくれ」

ダクネスが、そんな意味不明な指示を……。

……………まさか。

嫌な予感がした僕は、向けていた掌を試しに少しだけずらす。

そうすると、ダクネスも少しだけずれた。

……こんなこと想像もしたくないが、ダクネスのこの動きに結び付く結論はただ一つ。

この女は、カエルの腹で弾かれるリパルサーの入射角と反射角を一瞬で正確に計算し、リパルサーが自分に飛んで来る位置に移動していたのだ。

信じられない。その計算能力も自分の性癖への執念も。

……上等だ。

「君の期待には絶対に応えないからな」

「!?」

僕は、カエルすべてロックオンし、肩部を展開させる。

せりあがった肩部からマイクロミサイルが飛び出し、カエルの群れに降り注いだ!

▽

「はい、ジャイアントトードの討伐、お疲れさまでした。まあ、二十六匹も討伐されたんですか! すごいですね! おめでとうございませす!」

「ううっ……もう一度さっきの光の熱線を味わいたかったのに……なんだ、あの魔法は……あんな広範囲の敵をまとめて吹き飛ばす魔法なんて見たことが無いぞ……お前は一体何者なんだ……!」

「少なくとも、君の性処理係では無い事だけは確かだ」

カエルをせん滅した僕らは、報酬を受け取るためにギルドへと戻っていた。

冒険者カードを見せ、カエルを討伐した証を受付嬢に見せる。

カードには僕が記入した訳でもないのに、ジャイアントトードの討伐数が記録されていた。

本当に未知の技術だ。応用すれば殺人犯の特定などが楽になるかもしれない。

「それで、報酬なんですけど……」

そこまで言って、受付嬢が言いよどむ。

「どうかしたの?」

「その……カエルの移送に向かった方々から、地形が変わってしまったとの報告を受けまして……まるで、大きな爆発が起きた後のようだったと……それで、その地形の修復の補填の為に、報酬が……その……」

受付嬢が申し訳なさそうに、小さな袋をカウンターテーブルの上に

置く。

置かれたときの音から、中身がほとんど入っていないことがわかる。

「本当は、ジャイアントトード十匹討伐のクエスト報酬二十万と、原形が残ってたカエルの買取価格も併せて二十六万エリスの報酬だったのですが……二万エリスに……」

その言葉を聞いてクリスが袋を開けると、そこには二枚の硬貨が入っていた。

「あ、あはは……今日の飲み代くらいにはなったね……」

「トニーがああ熱線で敵を倒していたらこんなことには……」

「そもそもはあんたが戦っている時に発情したからだろ！ 僕のせいにするな！」

「バ、バカっ！ 声が大きい！」

発情という言葉に耳まで赤くして僕の口をふさごうとするダクネス。

さつきはあんな姿をさらしたというのに、この女は何を恥ずかしかっているんだろうか。

理解に苦しむ。

しかし、最初に受けたクエストが報酬減額で約二百ドル程度にしかならないとは……。

アベンジャーズが破壊した建物なんかは一部を除いて国が保障してくれてたんだがな……。

この世界は思ったより世知辛いようだ。

▽

報酬を受け取った後。

腹も減って喉も乾いていた僕たちはそのままギルドで食事をとることにした。

「すいませーん！ カエルのから揚げ盛り合わせと冷えたクリムゾンビアくださーい！」

「私にも同じものを」

「カエル……カエルのから揚げ……？ 美味しいのか？」

「この街の名物だよ。だまされたと思って食べてごらん？ おいしいよ！」

笑顔のクリスに言われ、同じものを注文して運ばれてくるまで待つ。

しばらくすると、頼んだ料理と飲み物が出てきた。

深めの皿に山盛りにされたから揚げは、揚げる前に何かのタレに付け込まれていたのだろう。揚げ物独特の香ばし匂いの中に、生姜やニンニクの香りが混じっていて食欲をそそる。

クリスが頼んだクリムゾンビアという名前の飲み物も、ジョッキの飲み口できらめきながら踊る泡、エールビール系統の芳香と、酒好きとしての僕のテンションを上げてくれる。

しかし、カエルか……。ジャンクフードは好きだが、ゲテモノ料理は食べたことが無い。

話によると鶏肉に似てるらしいが……。まあ、クリスやダクネスがもうすでに美味しそうに頬張っているんだ。マズイってことはないだろう。

恐る恐る口に一個放り込んで咀嚼する。

……美味しい。

若干の固さはあるが、むしろ歯ごたえがあると言うべきか。肉汁が染み出し、肉のうまみが噛むたびに広がる。

二、三個新たに口に放り込んで肉を楽しみ、飲み込んだ後にジョッキに注がれていた酒を一気に喉に流し込む。

クリスが最初あったときに僕におごってくれたやつだ。

クリーミーな泡が舌を滑り、冷たい炭酸の液体が喉を通り潤す感触、口に広がる華やかな味わいを楽しむ。

「おお、いい飲みっぷりだな。気に入ったか？」

「この国に来て良かったと今ちよつと思つたよ。美味しいな」

僕のその言葉にクリスとダクネスが笑顔になった。

自分の住んでいる街の名物を気に入ってもらえたのがうれしいみたいだ。

食事を終え、しばらくゆっくりしていると、クリスが僕に尋ねてきた。

「ところでさ、この後はどうするつもりなの？ 寝泊まりとかさ」「うむ。遠い国からやってきたのだろうか？ だったら、宿とかは取ってあるのか？」

その言葉に、はっと思い出す。そうだ、この世界に来る特典として持ってきた場所があるのをすっかり忘れていた。

「というか、クリスはアクアと一緒に手伝っていたんだから知っているはずだろう。」

「いや、初対面ということになっているのに、知っているようなことを言ったらそれこそおかしいか。」

「まずは自分が持つてきた特典まで向かうことにする。」

「僕の家はここにあるんだ。今から向かうところだよ」

「他国の人間なのにここに家が……？」

「まあ、別荘みたいなもんだ。来るか？」

「確かトニーは武器の職人だったな。家には製造中の鎧とか置いてあるのか？」

「お菓子の家だよ」

その言葉にダクネスは大人びた顔を子供のように輝かせて。

「クリス！ 楽しそうだ！ クリスも来ないか!？」

「ダクネスがそんなに興味を示すなんて珍しいね。あたしも行くよ」

「ここだけ見ると年相応の女の子らしくてかわいいものなのだが……。」

僕はダクネスの残念極まりない面を思い出して少し渋い顔をする。

その顔を見たダクネスが。

「ど、どうした……？ 私が来るのは嫌か……？」

「僕の作った武器にさえ発情しなければ構わないさ。誘ったのは僕だしな」

「す、すす、するわけないだろう！ 私をなんだと思っっているのだ！」

僕の嫌味に机を叩いていきり立つダクネス。

クリスがダクネスをなだめ、僕にジト目を向けてくる。

「もー、ダクネスをあまりからかつちやだめだよ？　この子、強そうに見えて案外繊細なんだからね？」

「はいはい、それじゃ行くか」

馬鹿なやり取りと会計を終え、ギルドの外に出た僕らは目的地へと向かう。

「それで、どこにあるのだ？　遠いのか？」

「確認する」

僕はマスクを閉じて。

『『リーダー』。『特典場所』』

「……？」

ダクネスが不思議そうに見つめてくる中。

僕の声に反応して、HUDのリーダーに特典場所が出現した。

『(ハ)よー・ (ハ)よー・ (ハ)よー』

「……」

アクアの、謎のボイスメッセージと共に。

デフォルメされたアクアがリーダーの上で回転しながら二秒に一度座標の位置を教えてくる。鬱陶しくてかなわない。

僕は無言でスーツのプログラムを目線で操作し、ウイルスじみたアクアのボイスメッセージと、リーダーで踊る3Dアクアを削除する。

ゴミはゴミ箱へ。スコーンという小気味のいい音を立て、スーツを蝕んでいたアクアのプログラムがHUD上のゴミ箱に落ちた。

ピロピロピロと昔のゲームを思わせる電子音を響かせ、百点のスコアがゴミ箱の上に表示される。

すつきりした。

『何でよーっ！』

最後にそんなメッセージを残してアクアのプログラムが消滅した。どうしてこんな無駄なところが凝ってるんだ。

こんなもの作らなければ、あの時もう少し早く特典を用意して準備を終わらせることができたんじゃないのか？

「ねえ、もう日が沈みかけているし、郊外だったら行って帰ってきたら夜遅くなっちゃうよ？　明日でもいいんじゃない？」

「うーむ……それもそうだな。すまないがトニー、明日でもいいだろうか？」

クリスがそんな提案をし、ダクネスがそれに同意する。

だが、僕には策があった。

「いや、そうする必要はない。二人とも僕に近づけ。すぐに連れてつてやる」

「……？ どういうことだ？ テレポートを持っているのか？」

「いいや。テレポート装置はいずれ作りたいところだけどな」

「ど、どゆこと……？」

不思議な顔をしながらも、僕の肩をつかむダクネスとクリス。

それを確認すると、僕は二人の腰に手をまわして担ぐように持ち上げる。

「お、おお、おい！ なんのつもりだ!! いきなりこん……ああああああああああああああああああ!!」

「ごっ、ごっというのはよくないと思うな！ バチがあた……ああああああああああああああああああ!!」

何か喚いていたが、僕が推進リパルサーを背部と脚部から照射して空へ飛び立つと、スーツ越しでも振動が伝わって来るほどの大絶叫が僕の耳とアクセルの空に轟いた。

▽

「おつかれさま。空の旅はどうだった？」

「もう突っ込むのも疲れてきたが、お前の鎧は本当におかしいぞ！

自立稼働する鎧ならまだ伝説として聞いたことぐらいはある！ だが！ 空飛ぶ鎧なんてのは聞いたことすらないぞ!!」

「百聞は一見に如かずだ。聞く前に見れてよかったな」

「口の減らない男だな……」

ダクネスが呆れ気味に僕を見てくる。

「だ、だが……あの空で宙ぶらりんの不安定な姿勢のまま高速で飛んだのはちよつと興奮したな……今にも地面に叩きつけられてしま

そんな恐怖感がまた……んんっ……」

「今君興奮するって言ったか？」

「言ってるない」

「言っただろ」

「言ってるない」

僕は呆れ気味にダクネスを見つめる。

ちなみにクリスはまだ僕に抱えられながらぐったりしている。

気絶してるのか、呼びかけても反応が無い。

「ほーら大物君。もう日が暮れ」

「ふあっ!? ア、アクア先輩!? すいません、居眠り……あれ、ここどこ……?」

「……?」

ふざけたつもりだったんだが、なぜか飛び起きるクリス。これ、子守唄なんだが。

夢と現実の区別がついていないのか、クリスはうつろな目できよろきよろして寝言を言っていた。

変なことを口走ってダクネスに怪しまれる前に、意識を覚醒させるのを手伝ってやろうか。

「僕がアクアに見えるか? 何が見える?」

「変なヒゲ……」

「いいぞ、その調子だ。ダクネス、こいつを頼んだ。まだ安静にさせとけよ?」

抱えていたクリスをダクネスに放り投げる。

僕は特典を探す、ダクネスはクリスを介抱する。適材適所だ。

決してヒゲを馬鹿にされて腹が立ったとかじゃない。決して。

「お、おい! 渡し方が雑だぞ! 私是不器用なのだ! 受け取れなかったらどうする!」

後ろから非難の声がしてくるが、無視して特典がある場所を探す。さて、レーダーではここを指しているのだが……。

僕の目に飛び込んできたのは、巨大な屋敷と、そのとなりにぼつんと立つ小さな小屋。汚れているようには見えないが、隣の屋敷の物置小屋と言われてしまえば信じてしまいそうなたたずまいだ。

だが、その小屋の看板には僕が最も見慣れた文字である英語である言葉が書かれてあった。

【YOU KNOW WHO I AM】
.....

僕が頼んだものは、本来なら一瞬で見つけられそうなほど巨大なものだ。それこそアクアが文句を言ってくるくらいには。

真面目なエリスがついていたんだ、こんなサボリをするとは思えない。エリスでもあるクリスマスに聞きたいところだが、いまだに意識が朦朧としているようだ。

「トニー、その小屋、なんて書いてあるの？ 私にはわからない文字なのだが。ひよつとしてトニーの故郷の言葉だったりするのか？」
「まあな。とりあえず中に入れ。土足で結構だ」

そういつて僕と、クリスマスを抱えたダクネスは小屋に入る。

小屋の中をぐるっと見渡すが、変なものは何も……いや、一つ変わったところがあった。

何もない小屋の壁にただ一つだけ、張り紙のようなものが張っている。

近づいて見てみると。

【あのままだったら景観を損ねちゃうのでこうしました。でも、こっちの方が気に入ると思うわよ？ 美しき水の女神の飲み仲間より】

そんな文章と共に、張り紙の右下の角にはアクアと一緒に飲んだ酒のフタをかたどったボタンが設置されてあった。

ご丁寧に矢印を引っ張って『押して』とまで書いてある。

僕が書かれてるままにボタンを押すと、カチャンツと背後の扉のロックがかかる音がした。

そして、小屋全体が揺れ始める。

「なな、なんだ!?! 何が起きた!?!」

「う……うーん……あれ……ここは……トニー、ついたの?」

「ああ、お待ちかねだ」

「クリスマス、起きたか!」

クリスマスの意識がようやくはつきり戻ったのか、状況も理解し始めた

ようだ。

「トニー、これは一体何が起きているのだ!? 全く状況がつかめないのだが! これは……下に下がっているのか!」

「そんなところだな。まあ、特に危険はない。寛いでろよ」

「大丈夫だよ、ダクネス。畏感知とか敵感知には全く反応が無いもん」
そんなことを言っているが、おそらくアクアと作ったから知っているのだろう。

やがて、最後にひと際大きく揺れた後に部屋の振動が収まり、扉があつた方とは反対側の壁の真ん中に線が入り、ゆっくりと開く。

……なるほどな。

さつきはどうして無駄に凝るんだと思つてしまつたが、前言撤回だ。

君は最高の演出家だよ、アクア。

開いた壁の向こうを見て、ダクネスが絶句する。

「一体……なんだ……ここは……」

「ひゃー……実際見たらすごいね……」

僕は空いた壁の向こう側へ一歩踏み出して入り、忠実な執事を呼ぶ。

「出迎えはいるか?」

『いつでも、ボス』

「さて諸君、紹介しよう!」

なんだか懐かしい気がするフライデーの声を聴きながら。

大きさに部屋を売るセールスマンのように、片手で部屋全体を指し。

「僕のラボだ」

持ってきた特典を二人に見せびらかした。

第3話 演出は大事

——ラボ。

僕の元の世界にあった、アベンジャーズタワーの上十階部分。

スーツの開発はもちろん、アベンジャーズのメンバーの装備品といったアイテムもここで作られている。最近NY州北部に新しい拠点ができたが。

この世の科学技術の全てがあると言っても過言ではない、まさに未来そのもの。

僕がアクアに用意させた特典だ。

まるまる持つて来ようとする、その時中にいた人間だとかにどんな影響が出るか分かったもんじゃなかった。で複製してここに呼び出すという形になった。

中を掃除してた清掃員や研究者の足場が急になくなって地面に真つ逆さまとか笑えない。

科学の施設を魔法で用意させるという何とも皮肉な展開になったわけだが……。

それでもこのラボは欲しかったし、この魔法の世界で現に必要なになった。

魔法的な存在の研究は初めてじゃない、そのうちここでコーヒー飲みながら突き止めるとしよう。

「フライデー、設備の全チェックだ。異常が無いか調べろ」
『了解しました』

念のため、フライデーに全システムをチェックさせる。

元々は僕が作ったものがほとんどだとはいえ、魔法で複製されてるなら何かしら本物と違いがあったりするかもしれない。

『チェック中……少々お待ちください』

フライデーはジャーヴィスのアップグレード版だ。今はまだ産まれたばかりで学習することが多いが、そのうち皮肉も言えるようになるだろう。

とはいえ、さすがに全システムのチェックには時間がかかるため、ダクネスとクリスをラウンジまで案内して適当な飲み物を出してやる。

「あ、どうも……にしても、すっごいなあ……」

緊張してるのか、若干よそよそしくなったクリス。ていうか、君も手伝っていただろうに。これは演技なのか？

ダクネスにいたってはずっとソワソワしてて挙動不審だ。

クリスに質問したいことがあるし、ダクネスにはその辺をぶらぶらしててもらおう。

「ダクネス、気になるなら好きに回っていいぞ。君に一時的にアクセス権限をやる。ある程度の部屋には入れるようにしといてやるから、自由に見て回れ」

「いいの!? あ、あくせす権限というのはよくわからないが、礼を言う。ではクリス、私はちよつとその辺を回ってくる!」

「あ、うん。いってらっしやい!」

笑顔で立ち去っていくダクネス。遊園地に来た子供のように早歩きだ。

僕の作ったスーツや武器が気になるんだろう。剣の類はないが、防具関連は色々あるのできつと満足するはずだ。

ダクネスがラウンジを出て行った辺りで、クリスの方を向く。

もう落ち着いてきた頃だろう。僕はクリスの顔を見て、いたずらっぽく首を曲げながら質問を始める。

「……で、君は何でここにいるんだ?」

「まあ、そう思うよね……ついさっきまで天界にいたんだし」

とって、苦笑を浮かべるクリス。

その表情のまま、彼女は話を続けた。

「実は創造神様からトニーの様子を見ておくようにつて命令されてたんだ」

「……創造神?」

「そつ。あたしたちの一番トップ」

「つまり椅子にふんぞり返って偉そうにしてるやつってことだな?」

「そんなことはないんじゃないかな!？」

僕の皮肉に突っ込むクリス。

上司を馬鹿にされるのは彼女にとって面白くなかったかもしれない。
い。

クリスは指をピツと立てて僕を諭すようにフォローを入れる。

「偉そうでもしていないように見えて、実は忙しいんだよ? ほら、トニーだって会社でトップやってた頃は忙しかったでしょ?」

「飲んだくれて女をとつかえひつかえして秘書を呆れさせて大発明して会社の株を上げてたよ」

「ごめん、あたしが悪かった。今の話は忘れて」

質問に答えただけなのにクリスは冷めた目で僕を見て質問を切り上げる。

……もうしてないんだが。

「話を戻すね。アクアさんの話にも出てたと思うけど、トニーはとある計画の候補者第一号なんだ」

そう言えば、アクアが計画だの候補者だの言ってた気がする。

SECOND LEGEND PROJECT
「その名も英雄譚の第二幕計画」

「しゃれてる」

「ねっ!」

この計画名を気に入っているのか、クリスは僕の率直な感想に笑顔で同調する。

しかし、候補者第一号か……。

「それで、そのしゃれた計画の候補者第一号の様子を観察するために君は僕に接触してきたのか?」

「そういうこと。まあ、他にもあるんだけど……」

だろうな。僕の観察の為だけに来てたんだったら、この世界の住人であるダクネスと交流があるはずがない。

人間ではないエリスが、わざわざ人間のフリまでしてこの世界で何をしているのか。僕は純粹に疑問に思っていた。

「よかったら聞かせてくれないか?」

「……」

僕のその質問に、少し沈黙し……。

「仲間が欲しいって……教会で願い続けたとある女の子の願いをかなえるためかな……」

クリスはそう言って少し恥ずかしそうに顔を赤らめて、顔の傷跡をポリポリと搔いた。

……。

この世界に来て、今に至るまでに分かったことの一つとして、エリスは僕の世界で言うところのイエス・キリスト以上の扱いを受けているという所がある。

国教として崇拜され、街のいたるところに教会があり、果ては通貨にまでなっている。

そんな彼女が、一人の信者の願いを叶えるために地上まで下りていた。

「……フアンサービスが手厚いな、君は」

「う……うう……」

そんな彼女を、尊敬と若干の呆れが混じった目で眺めている時だった。

僕らから十メートル程離れたところにあつた壁が、盛大に爆発した。

「!!」

爆発した方角から黒い影が飛び出し、僕とクリスの間にあつたガラステーブルの上に叩きつけられる。

テーブル部分のガラスが砕け散り、残った金属フレームの枠組みに、バスタブに浸かる貴婦人がごとくすっぽり仰向けで腰からはまっていたその黒い影は……。

「……その女の子つてのはこいつのことか？」

「うん……」

爆発した壁から吹き飛んできた黒い影、ダクネスを見て。

クリスはさつきとは違う意味で顔を真っ赤にして、耐えられないとばかりにその真っ赤な顔を両手で覆った。

僕も呆れるあまり片手で顔を覆ってため息をつく。

本人であるダクネスは、フレームの枠組みにもたれかかったまま喜悅の表情を浮かべて息を荒げていた。

▽

フライデーのシステムチェックを終え、なんの異常もないことを確認した後。

「すまなかつた。この壁は弁償する」

女騎士モードのダクネスが、正座しながら真面目な顔でそう言うてくる。

もうその凜とした化けの皮には騙されないぞ。

「大体君は何してたんだけ？ 何をどうしたら大事な話してる中に爆発しながら突っ込んでこれるんだ？」

「本当だよ。一体なにがあったの？」

「いや、それが……見たこともない球状の魔道具を見つけただな……どう使うのかと触っていたら……」

そう言うってダクネスが懐から出したのは……。

魔性の女スパイ、ブラック・ウイドウことナターシャ・ロマノフの為に設計したグレネードだった。

ゴルフボールほどのサイズでありながら、威力は普通のグレネードとは比較にならないくらいの高さを持つ代物だ。それこそ、このラボの壁をたやすく吹っ飛ばすほどには。

本来なら敵の重要拠点にこっそり持ち運んで爆破する破壊工作用アイテムなのだが……。

「……なあ、それ君の手元で爆発させたんだよな？」

「そうだが……」

「君はバター代わりに溶かした鉄でもパンに塗りたくって食べているのか？」

「わ、私を溶岩系モンスターと一緒にするな！ ただ、他人よりも防衛力のステータスが秀でているだけだ！」

ドン引きだ。ステータス上昇による防御力強化というのは、ここまでの力を発揮するものなのか。

……先が思いやられるな。やはり、この世界の仕組みについて深く勉強しなくてはならないようだ。

「君が何系のモンスターだろうと別にどうでもいいが、僕のを勝手にいじくりまわすな。取り返しのつかないことになったらどうするつもりだったんだ？」

「す、すまない……しかし、トニーの皮肉は気持ちいいのだが、さすがにモンスター扱いはやめてほしい……」

僕の説教にしゅんと縮こまるダクネス。

それを聞いたクリスは僕にジトツとした目を向けながら。

「そもそも爆発物のある部屋に勝手に入れるようにするのも問題だと思っただけど……」

「……」

一理ある。

クリスの理路整然とした意見に舌を巻いていたが、ここでもう一つ聞きたい事を思い出す。

情報をどこで手に入れられるかだ。

「まあ、その話は置いておくとして……僕はこの国のことを全く知らない。どこかで情報収集ができそうなどころはないか？」

「情報収集か……何について知りたいの？」

地面に散らばるガラス片を足で掃きながら、クリスが聞いてくる。

「魔法、この国に生息する生物、文明レベル……特に魔法関連を詳しく知りたい」

「魔法関連……ならば、紅魔の里に行ってはどうか？」

「紅魔の里？」

オウム返しにダクネスに尋ねる僕に。

ダクネスは煤だらけの体を払いながら立ち上がり。

「紅魔の里とは、住民全員が高い魔力と知力を持って生まれ、魔法職の中で最強の火力を誇るアークウィザードの適性がある小さな集落だ。全員真っ赤な瞳に黒髪なのが特徴で、一人一人が尋常じゃない戦闘力

を持つ」

「強力なモンスターが近くに生息してたり、魔王軍の拠点が近かったりで、危険なところにある村なんだけど、そういう理由で魔王軍が近寄れないんだよね。全員返り討ちにあってるんだ」

「魔法使いの戦闘民族……面白そうだな。興味がそそられる」

クリスが懐から紙を取り出し、ササツと何かを書いて僕に渡す。

「……これは？」

「これは紅魔の里がある方角を書いた地図。どうせすぐ飛んでいくんでしょ？」

「あー……できればそうしたいところなんだが……」

言葉を詰まらせる僕に不思議そうな顔を向けてくる二人。

もちろん、紅魔の里にはすぐにでも行きたい。きつと魔法に関する書物もたくさんある事だろう。

里に行ったら書物を余すことなく読むつもりだ。

だが、そうなるとその里に長い間とどまることになる。そのためには必要なものがある。

「……先立つものがある」

「あー……」

深刻そうな顔をする僕に、少し申し訳なさそうな顔をむけるクリス。

だが、ダクネスはさらに不思議そうな顔をしながら。

「こんなすごい別荘があるというのに、金欠なのか……？」

「僕の国の金はここじゃ使えなくてね。換金所もないと来た。この国じゃ無一文なんだよ」

僕その言葉に、ダクネスが唸ると。

「なら、明日も明後日もクエストに行こうではないか。金ならそこで稼げばいい」

「……それって君も一緒に前提で話しているのか？」

「だ……駄目だろうか……？」

いやそうな僕の顔を見たダクネスが、不機嫌そうな親におもちやをねだる子供のように、不安と期待が混じった表情で上目遣いに僕を見

てくる。

その表情は、ひどい目にあわされることを期待している顔ではなく、みんなとの旅を楽しみたいという顔で。

少し眉をひそめながらクリスに顔を向けると、微笑みながらダクネスを顎でさした。『かける言葉は分かっているよね?』と言われているような気がする。

別に、ここにあるものを何か売ってもいいのだが……。

……。

「ハア……。そうだな……。壁に穴を開けた分、君には働いてもらわなきゃな」

仲間が欲しいと願う少女のために地上に降りた女神を見習うとしよう。

僕の言葉にダクネスは顔を輝かせ……。いや、情欲にまみれた顔をしながら。

「つ、つまり体で支払えというのだな!? 一体私はどんな目に」

「君の仕事は、今からおうちに帰って二度と出てこないことだ」

「悪かった! 悪かったからそんなこと言わないでくれ!」

そんなやり取りを見て、クリスは楽しそうに笑っていた。

こうして、元の世界で話したら爆笑必須の珍妙なチーム……。いや、パーティーが出来上がった。

▽

パーティー結成から一週間後。

——カーンツ。

——カーンツ。

それは、熱い鉄をハンマーで打つ音。

私はトニーがラボと呼ぶ建物のとある一室で、ハンマー片手に鉄と鉄がぶつかり合う金属音を部屋にこだまさせる彼を、クリスと一緒にワクワクした目を見守っていた。

——カーンツ。

——カーンツ。

胸元が大きく開き、袖のない妙な黒い服と額に汗をにじませながら、トニーがハンマーを振り下ろす。

響き渡るその音色は、騎士団の応援隊が打ち鳴らす太鼓よりも、押し寄せてくるモンスターの足音よりも、私の心を奮い立たせる。

パーティー結成から一週間がたち、里に滞在するための資金を貯めるという当初の目的を果たしたトニーは、今日紅魔の里へ旅立つことになった。

短い間と言えど、一緒にクエストを受けてギルドの酒場で飲み食いだしたパーティー仲間のためにと、彼は今こうして置き土産を作っていた。

あんなすごい鎧を着ていたトニーが、私のために鎧を作ってくれる。これがワクワクせずにはいられようか。

ハンマーで大まかな部品を作り、その一つ一つを溶接し、デコボコした継ぎ目を、魔力も無しに高速回転する丸い石板のようなもので削って消していく。

烈火のごとく飛び散る火花が、見ていて楽しい。

「おお……自分の鎧が作られていく様を見るのは、なんともワクワクするな……」

思わず声が漏れる。

そろそろ終盤か、トニーはもう一度鎧を熱して柔らかくし、表面に模様を、裏面に水や高温、強い電流に耐える素材をコーティングした、彼が電気回路と呼んでいた妙な装置と衝撃吸収材を、これまた奇妙な金属製の触手みたいなものを操作して組み込んでいく。

彼曰く、見た目にも気を使ってこそ一流のプロらしい。

それを板金用の大型挟でつかみ、冷却プールに沈める。

水が瞬時に蒸発する音が響き、大量の水蒸気が部屋の中に広がって、トニーの姿が見えなくなる。

やがて、水が蒸発する音が消え、さっきまであらゆる音が飛び交っていた部屋を静寂が包み込んだ。

数秒の静寂の後、ゆっくりとした足音が蒸気の中から聞こえ、人影

が浮かび上がり……。

「完成だ」

——カーンッ。

蒸気を振り払い出てきたトニーが、私の目の前にあった机の上にソレを置き、最後に一つ金属音を響かせた。

「これは……」

「ひゃあ……」

鎧には一家言持つ私ですら、思わず生唾を飲み込むほどの鎧。その手のものには詳しくないクリスですら、顔に驚愕の表情を浮かべていた。

いや、果たして鎧と呼ぶべきなのだろうか……？ ソレは、形こそ鎧であるものの、表面にはまるで浮かび上がる葉脈のように整った光の線が、何かを循環させているかのように走っていた。

「試着室に案内しようか？」

ニヤリと笑いを浮かべるトニー。

もちろん決まっている。

「是非頼む！」

▽

試作した武器を試したり、九十代の盾を背負った年寄りがりハビリに使ったりする、上にも横にもただっ広い部屋の真ん中に、ワクワクした顔のダクネスを立たせ。

僕はコーヒー片手にガラス一枚隔てた向こうの彼女と、目の前のモニターに映る計測器の様子を眺める。

「ねえ、いったいどんな鎧を作ったの？」

隣から声をかけてきたクリスに。

「それは見てからのお楽しみだ。まあ、彼女の弱点を克服した逸品とだけ言っておくよ」

「ほほおー……」

クリスのアメジスト色のきれいな瞳が輝きを増す。

彼女にも用意したプレゼントを渡す時が楽しみだ。

「さてダクネス。着心地は？」

『あれだけ色々組み込んでいたのに、まるで重さを感じない。以前着ていた鎧とは大違いだ』

僕がマイク越しにダクネスに尋ねると、体を軽めに動かしたダクネスからスピーカー越しに答えが返ってくる。

今僕とクリスがいるのは、部屋のいろんな装置を制御するための部屋だ。

制御室は少し高いところにあり、この試作部屋兼トレーニングルーム全体を見果たせるようになっていた。

「それじゃテストその一。右手側面の人差し指の付け根辺りにボタンがあるのがわかるか？」

『ああ、確認した』

ダクネスは自分の右手を目の前まで持ってきて、ボタンを確認する。

「それを押してみろ。押すときには、自分の胸の前に腕を持っていくなよ？ それと、衝撃に備えて踏ん張っておけ」

『了解した。………衝撃？』

訝しみながらも、僕の指示通りに彼女が右手のボタンを押すと………

『ッ!』

鎧の胸部からモニター越しでもはっきり見えるほどの衝撃波が飛び出し、床にわずかに積もっていたチリや埃が空中に舞い散る。

『ト、トニーー！ なんか出てきたぞ！ なんだこれは!?!』

『ソニックバースト』だ。まともに食らえば、大型の牛も吹っ飛ばさず

『………オーバー過ぎない?』

「大は小を兼ねる」

クエストに行ってる途中に発覚したのだが、ダクネスはまともに攻撃が当たることができなかったのだ。

その剣の腕たるや、クリスがバインドという縄で相手を拘束する魔法で動きを封じたモンスターにさえ、たまに攻撃を外す始末。

ダクネスの名前の由来は、前が見えなくなつて攻撃が当たらなくなるDarkness^{暗黒}という、状態異常の名前からきているのだろう。そう解釈してしまうくらいには、彼女は剣の命中率が酷い。

彼女曰く、剣の命中率が上がるスキルにポイントを振ってないからだそうだが、理由を尋ねると『必死に攻撃しても攻撃が届くことなく蹂躪されるのが気持ちいいから』という脳みそがプラズマ廃液なんかで汚染されているとしか思えない答えが返ってきたので、途中から聞くのをやめた。というかあきらめた。

そんなへつぽこくるせいだあの為に作った装備がこれ。

ダクネスは、攻撃ができなくても敵を掴んで抑えることくらいはできる。

なので、抑え込んだ状態から攻撃すれば必中させられると考え、胸から衝撃波を発生させて敵を吹き飛ばす防具を作った。

機能はこれくらいしかないが、三日四日じゃこの程度が限界だ。

「感想は？」

『・・・なんか、私が望むシチュエーションに二度と会えなくなつてしまいそうな防具だ・・・』

ダクネスは、そんな嬉しさと残念そうな声色で感想を述べた。

なんて作り甲斐のない……。

▽

ダクネスの防具の試着と性能テストを終え、いよいよ僕は里へ向かう準備を整えて、ラボへとつながる小屋の外で、スーツを着てダクネスとクリスに向き合う。

「そろそろご退場の時間だ。僕がいないと泣いちゃう？」

「ああ、寂しくなる。わずかな間だったが、あなたとのクエストはとても楽しかったぞ。特に、攻撃を外すたびに浴びせてくる皮肉なんかが……」

「ダクネス、ストップ」

クリスがダクネスにストップをかけ、ダクネスがコホンと一つ咳払

いをして自分の世界から戻ってくる。

この女は別れの場面だというのにフリーダムすぎる。

「あれっ、トニー、そのワイヤーは何？」

僕が手に持っているワイヤーに気が付いたクリスが僕に尋ねてくる。

ようやく気が付いたか。

僕はわざとらしく、思い出したかのような顔をしながら。

「……あっ、これの事？ ダクネスだけにあげるのは不公平だと思つて、君に作つた置き土産だ。忘れてたよ」

「ほ、ほんと!? やつた!」

満面の笑みのクリスに、三本のワイヤーを軽く放り投げる。

クリスは抱きとめるようにキャッチして。

「わつと。これは……バインド用のワイヤー？」

「その通り。太陽光充電式エレクトリックワイヤーだ」

「えれ……何？」

初めて聞く単語に首をかしげるクリス。

ナターシャが使っていた『ウイドウズ・バイト』という、相手に電気ショックを与えるスタンディンググローブを応用して作つた。

「ワイヤーの端にある留め具に付いているボタンを押してから数秒するとワイヤーに超高压の電流が流れる。ボタンを押してからバインドを食らわせてやれば、それだけで攻撃になるぞ」

ダクネスとクリスのコンビでは、クリスがダガーで切り付けるか、クリスが縛つた敵をダクネスが攻撃するなど、まともな攻撃手段が無い為、少しでも火力が上がるように作つた装備だ。

「ありがとう! これは大事に」

「ク、クリス……それ、まだ試してないだろう? どうだ? 私でため」

「ささないよ?」

しよんぼりと肩を下ろすダクネス。

「装備を作っておいてなんだが、よくこれでコンビ解消しないなとクリスに感心する。」

僕はフライトシステムをオンラインにして。

「それじゃ、今度こそ別れの時間だ。クエストを終えた後に君たちと談笑しながら飲む酒は……まあ、安酒ながらも悪くなかったよ」

「まったく、お前は最後まで素直に別れの挨拶をいえないのか？」

「そういうあんたは最後までいい発情を抑えることはできないのか？」

「んんっ……!?!」

性騎士を一瞬で涙目にして、へっとほくそ笑む。

「それじゃあねトニー。これは大事に使うよ」

「ちよくちよく戻るから、その時に渡せばメンテナンスしてやるよ」

そう、別に完全に離れるわけではないのだ。

スーツという機動力のある足があるので、離れていてもすぐに戻ってこれる。

だがまあ、しばらくは里に滞在することになると思うので、お別れっちゃお別れだ。

僕の作った装備で活躍する彼女たちがすぐに見れないのが残念だが、それはまた別の機会ということだ。

「次会う時には……仲間が増えてると良いな、ダクネス。女神エリスのご加護を！」

「ああ、トニーにも女神エリスのご加護を！」

「あ、あはは……」

僕は、手を振るダクネスと、伝わる人……いや、伝わる女神にしか伝わらない僕のジョークに苦々しい顔をしたクリスを交互に見ながらマスクを閉じ。

紅魔の里へ向けて空へと飛び立った。



飛行を始めてから十分近く。クリス曰くレポート屋と徒歩で向かって丸一日以上かかるみたいだったが、僕のスーツならこんな程度だ。

『そろそろクリス様の情報にあつた紅魔の里が見えてくるはずです』
「了解、住民を刺激しないように、近くで着陸してから……」

そこまで言った時だった。

空の上から、地上で様々な色の光が点滅しているのが見えた。

爆炎のような炎が吹き上げたかと思えば、稲妻が地上を駆け巡っている。

どんな超常現象だ……？

HUDのズーム機能を使って何が起きているのか確認する。

見えたのは……。

「あれが魔法か……！」

拡大した画面に映っていたのは、黒いライダースーツのようなツナギを着て、指ぬきグローブをはめている男や、黒いローブに身をまとった女、それぞれ変わった衣装をしながらも、全員共通で深紅の瞳をした四人の人間だった。

ダクネスが言っていた特徴と一致する。彼らが紅魔族だろう。

たった四人にも関わらず、何か鬼みたいな見た目をした百体以上の部隊相手に無双している。持っている武器に魔王軍の紋章が彫られていることから、蹴散らされているのは魔王軍だろう。この一週間で多少は調べたんだ、間違いない。

情報にあつた高い戦闘力というのも納得だ。彼らが居たら、三年前のNY決戦もだいぶ楽になっただろうな。

苦戦のくの字もしてないが、このまま無視して行くわけにもいかない。

すでに半分近くの部隊が倒されているし撤退を始めているが、僕は敵部隊めがけて一気に急降下を始めた。

音速超えて地表まで接近し、撤退する敵部隊の真正面にガンツと拳を突き立てて着地する。

走って逃げていた鬼の部隊はその場で急ブレーキし。

「おっ……おわああああああ!?! な、なんだこいつ!?! 空から降ってきたぞ！」

「おい！ 止まるな！ 後ろから紅魔族が来……ぎやああああああつ

「！」
なにか言いかけていたが、僕が肩部から射出したミサイルでまとめて消し飛んだ。

最後まで話を聞いて情報を集めるべきだったか。

「ば、爆発魔法だ！ こいつ、爆発魔法を使ってくるぞ！ 全員散らばれえ！」

部隊が一気にパニック状態になり、変なことをのたまいながら四方八方へと蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

だが、今の爆撃で半分だった部隊がさらに三分の一まで減った。

ここまでくれば後は的打ちだ。

「全員散らばれば、何人かは生きて帰……ぐぎやあつ!?」

「おいどうし……ぐはっ!?」

「何が起きてるんだ!! あいつ、爆発魔法使いじゃ……ほぎやつ!!」

「なんだよあの光線!! 一体なに……ぎやあああつ!!」

「俺、入隊するんじゃないかっ……あぼっ!!」

走って逃げる鬼の部隊を、次々と背後からリパルサーで貫いていく。

こんな障害物もない平原で走ったところで、逃げ切れるとも思っているのだろうか。

体に風穴を開けて倒れ伏す鬼の部隊をみて、これで全滅かと辺りを探していると、最後の一人と思わしき鬼が、泣き叫びながら遠くで走っているのが見える。

あそこまで頑張って逃げたのか。ご苦労さまだ。

背中と足から推進リパルサーを噴射して空へと上がって照準を合わせ、攻撃リパルサーを照射した。

最後の一人のどてっばらに風穴を開け、部隊を壊滅させたところで先ほどの紅魔族と思わしき四人組が追い付く。

獲物を取られて怒ってなければいいが。

地上にいた四人が僕を見上げる。その表情は……。

マズイ、目が真っ赤に輝いている。比喻とかではなくて本当に目が赤い光を放っている。

どういう生理現象かは知らないが、とりあえず敵と勘違いされたら困るので、マスクを開けようと……したその時。

「我が名はぶっころりー！ 紅魔族随一の靴屋のせがれ。アークウイザードにして、上級魔法を操る者！ その外の人！ ……いや、人かどうかわからないけど、話はできるかな!？」

黒いローブをバサツと翻し、突然そんな自己紹介を始めたぶっころりーとかいう、親のセンスを疑う名前をした男。

僕が人間だと気づいていないにせよ、魔王軍を倒していた僕を見ていたためか、敵意はないようだ。

さて……摩訶不思議なこの自己紹介にどう返したもののか。

本気で名乗っているのだろうか、はたまた冗談で名乗っているのだろうか。

一秒未満の熟考の後、僕はどう反応するのか決めた。

地上五十センチくらいのところまで下降し、スーツの前面を開いて生身で飛び降り、スタツと華麗に着地。

そして、大仰に腕を広げて。

「私はトニー……。トニー・スタークだ。遠くの国からやってきた、ただの戦う起業家だ」

僕の出した答えは、彼よりカツコつけて名乗る事。

本気で名乗ったのならこれで対抗。冗談だったとしても、『僕も冗談の挨拶だよ』と返せる。完璧だ。

そんな僕の登場の仕方と自己紹介に、彼らは目をサーチライトのごとく光らせ。

「「「うおおおおおおおーっ!! かつこいいいいいいーっ!!」」」

自分の想像の百倍以上に興奮して絶叫しだした。

……彼らとは仲良くやれ……そうだ。

第4話 ありえないほど 《爆裂》

とある朝。いや、昼近くと言うべきか。

僕が座っているのはデッドリーポイズンという、飲食店に付けるべきとは到底思えない名前の喫茶店のテラス席。

柔らかな日差しが降り注ぎ、手に持っている魔導書と、テーブルの上にある果物のジュースが入ったコップを明るく照らす。

そんなうらかな陽気の中、魔導書を見ながら頼んだものを待っている。

「ほい、おまちどう。『死の女神による永遠の炎で揚げられしカツサンド』だ！」

「どうも」

男勝りな口調をした、恰幅のいい喫茶店の女店主が料理を運んできた。

僕は妙に長くて変な名前をしたカツサンドの皿を受け取り、テーブルの上に置く。

「魔法の研究は進んでるか？ 『流星の鎧に身を包みし者』 トニー・スターク！」

これまた妙に長くて変な二つ名で僕を呼ぶ店主。

僕は読んでいた魔導書をパタリと閉じて。

「魔力は生体電気に酷似していた。体の中に流れる生体電気を、別の物質に変えて射出する……または物質を操作する、エトセトラ……それが今のところ僕が魔法で分かっているところだ」

「ふむふむ……」

つまり、僕の元の世界の人間も使おうと思えば魔法を使えるようだ。

そんな僕の持論に店主が興味深そうに耳を傾けてくる。

紅魔族はみんな知力が高い。多少詳しく説明してもついてこれるだろう。

「まだ理解からは程遠いが、空間に残留する生体電気のパターンからいつどんな魔法をどんな強さで使用したか位ならわかるようになった」

たぞ。例えば君なんかは……」

僕はかけていたサングラスのフチに指を持っていき、彼女と彼女の周囲をスキャンする。

数秒でスキャンが終わり、僕の目に情報が次々と飛び込んできた。「早朝にクリエイト・ウオーターを複数回、ティンダーも複数回。それにこれは……上級魔法のトルネードか？ 洗濯に使ったつてところか……さらに……」

「も、もう十分だ！ なんか私生活が覗かれているみたいでいい気分がしないからやめてくれ！ 一体どうなってるんだ？」

この周囲で使われた魔法をあらかた挙げてみると、店主がひきつった顔をして止めてくる。

どうやら魔法が使われた後に、それがどんな魔法であったかを突き止める技術はこの世界には無いようだ。

魔法を使った犯罪現場とかで役に立つだろう。もしかしたら僕はここ一週間の間に、警察界限で革命が起きるような技術を編み出してしまったかもしれない。

「こんなのは初歩的なことだ。いずれ魔王城の結界をハッキングしてケツの形に変えてやるさ」

「もはや何を言ってるかはわからないけど、応援してるよ。トニーがここに来るおかげで客が増えたんだ。店の前に置いてるあの鎧を見るためにね」

そう言つて、店主がクイツと店の入り口近くに置いてある僕のスーツを親指で指す。

すっかり客寄せパンダとなった僕のスーツ。今日も店の前には人だかりができている。全員もれなくスーツを見るためだ。

前の世界でうんざりするほど見てきた光景だが、まさか異世界でも見ることになるとは……。

そんな人ばかりと、のどかな紅魔の里の街並みを見ながら、テーブルに置いてあるできたてのカツサンドに手を伸ばし――



ぶつころりー達に自己紹介を終えた後。

「ようこそ外の人！ よく来たね！ ゆっくりしてつてよ！」

僕はテレポートという魔法で紅魔の里の入り口まで瞬間移動していた。

実に便利だ。テレポート装置、本格的に作ってみてもいいかもしれない。

彼らに案内されるまま、里の入り口を通って中へと入る。

ざっと見渡した感じ、アクセルよりかなり田舎だ。

一言でいえば農村。高さ十メートルを超える建物が無い。超えているのは里の真ん中あたりにそびえている警鐘が付いた見張り台と、黒くて四角い、里の景観に全く合っていない謎の施設。あれコンクリート製じゃ……？

そのままきよろきよろと見まわしていると、前を歩いていたぶつころりー達が振り返り。

「それじゃ俺たちは、引き続き里の周辺をパトロールしてくるから。その鎧、後でじっくり見せてね！」

そう言つて、バサツとマントを翻し、その場でぶつころりーを含めた四人が忽然と姿を消した。

さつきまでスーツを見て子供みたいにはしやぎまくってた彼らだったが、あれでも魔王軍を涼しい顔してせん滅してしまうような攻撃部隊なのだ。

その鮮やかな去り方に思わず舌を巻く。

一体全体どんな魔法なのかと、思わずマスクを閉じて周囲をスキヤン……………。

『ボス……………』

「僕は何も見なかったことにする、君もそうしろ」

僕がHUDの熱探知を通して見た光景は、じりじりと足音を立てないよう、ゆつくりと歩いて解散していく四人組だった。

どうやら何かで姿を消しているだけらしい。テレポートで消えたわけじゃないみたいだ。

ここでふざけて「やあ、ここで何してるんだ？ パトロールじゃないのか？」と、ぶつころりの肩を掴んでみたくなる衝動に駆られるが、スーツを見て満面の笑みで目を輝かせていた彼らを思いだし、ギリギリで踏みとどまった。

▽

こっそり解散していく四人組を見守り、里の探索を始める。

入り口のすぐ近くにたたずむ、映画やゲームで何度も見たことがあるグリフォンの像が僕の目を引いた。

まるで生きているグリフォンをそのまま石像にしたかのようなレベルの精巧な出来で、今にも動き出しそうなほどリアルだ。

ここまできれいに削る彫刻家がいるとはな。感心する。

「「：：：：：」」

：：と、グリフォン像の鑑賞を終えたあたりで、周囲から射貫かんばかりの視線を向けられていることに気付く。

元の世界じゃ嫉妬であれ、尊敬であれ、憎悪であれ、視線には慣れているのだが：：。

ふと立ち止まり、周囲を見渡すと……。

赤く光る無数の眼が、いたるところから僕を覗いていた。

朝はダクネスたちの装備の実験に費やしたため、時刻は昼を少し過ぎたあたり。

今僕が歩いている外は、降り注ぐ日差しのもとでも明るいのだが、そんな昼の日光の真下でも分かるほどには、彼らの目がキラキラと赤く輝いていた。

そのうち目からペタワットレーザーが出てくるんじゃないだろうかとすら思えてくる。

どこを見ても赤い眼光が見えるその光景には、いささか恐怖を覚えるのだが。

ひよつとして、さつききの四人が特別なだけで実際はよそ者を受け付けない里なんだろうか。

僕が送り込まれたのはファンタジーの世界であって、ミステリーホラーの世界に迷い込んだ覚えはない。

そこらの住民に何か話の一つでも聞く為、適当な一人に向かって足を踏み出そうと……。

「ねえねえおじちゃん。おじちゃんどこから来たの？」

……して。足元から聞こえて来るその声に、動きを止めた。

視線を下ろして声が出た方を見ると、そこには六歳くらいの小さな女の子がいて。

「ねえねえおじちゃん。その鎧触っていい？」

真ん丸とした深紅の瞳をキラキラさせ、僕の顔を見上げてそんなことを言ってきた。

僕は微笑みながら膝を折って身を屈め、視線を彼女の近くまで合わせる。

「Wow、随分と可愛らしい親善大使だな。もちろんいいとも。なんならちよつとだけかぶってもいいぞ？」

「ひゃほうー！」

そう言つてヘルメットを外し、期待した目をして僕を見てくるちびつこの頭にかぶせてやる。

案の定というかなんというか、僕の頭に合わせたサイズのヘルメットなので、まだちびつ子の彼女が被るとブカブカで、小さな頭身も相まってやたら頭のデカイ首振り人形みたいな有様になっている。

だが、その姿のままぴよぴよ飛び跳ねる様はとても微笑ましい。

「かっけえー！」

……別に子供好きというわけでもないのだが、なぜかこの少女には

妙に惹かれるものがある。

決して僕にロリコンの気が芽生え始めたわけじゃない。わけじゃないのだが。

なんだか放っておけない感じがしてしまう。なんだ？ 洗脳の魔法か？

そんなことを考えていると、ひとしきりヘルメットで遊んでいたちびっ子が僕の方を向いて。

「我が名はこめっこー！ 家の留守を預かる者にして紅魔族随一の魔性の妹！」

急にポーズをとって、ぶっころりーの時のように名乗りを上げた。

紅魔族つてのは名乗るときにカツコついたりする習慣があるようだ。見る分には面白い。

それにしても、魔性の妹か……。この子は将来大物になるかもな。

「気に入ってもらえたようでよかったよ、ヒーローになった感想は？」

「ピカピカしててキレイー！ カッコいい！ ありがとうおじちゃん！でもなんか変なおいする」

「あー……ひよつとしてデオドラントスプレーの匂いか？ 男のたしなみだ。君にもいつか良さがわかる時が来るさ」

スーツは大変お気に召したようだが、スプレーの匂いの方は不評なようだ。

ヘルメットをかぶったまま、鼻歌交じりにロックンローラー顔負けのヘッドバンをかます魔性のちびっこを眺めていると、遠くから学生服のようなものを着た一人の少女がまっすぐ僕の方へと向かって来た。十二、三歳くらいだろうか？ 心なしか、こめっこに顔がよく似ている気がする。

その少女はこめっこの近くまで来ると、こめっこの頭をヘルメット越しにコンコンとノックして、優しく諭すように話しかけた。

「こめっこ。あんまり遊んでいるとそこのお方にご迷惑をかけてしまいますよ？ そろそろ返したらどうです？」

「姉ちゃんは羨ましがり屋」

「べ、別に羨ましがってるわけでは……」

どうやら姉妹だったようだ。

口では否定しつつも、こめっこが被ってるヘルメットを赤く輝く瞳でチラチラと見る姉。

こういうの、なんていうんだったか……。日本に行ったときに聞いたことがあったが思い出せない。

「姉ちゃんはツンデレ」

「誰がツンデレですか！　　というか、いったいどこでその言葉を覚えてきたのですか!?!」

「ぶっころりー」

「あのクソニートですか！　　こんどとつちめてやります!」

そして突然目の前でコントを始めた二人。

聞いたことのある名前が出てきたが今はスルーし、とりあえず猛る姉を鎮める為に僕は一言。

「君もかぶってみるか?」

「姉ちゃんかぶってみる?」

「……………」

猛る姉にヘルメットをかぶせて落ち着かせる。

感動しているのか、棒立ちの状態でヘルメットの内側から『わあ…………』とか『ふわあ…………』とか聞こえて来るのがなんだか不気味だ。

もう少しかぶっていたかったのか、姉が被っているヘルメットから目を離さないこめっこ。

…………そうだ、何かプレゼントしてあげようか。

面白いことを考え付き、腕部から武器を一つ取り出してこめっこの前に持っていく。

取り出したのは超小型のスタングレネード。強烈な閃光を発して敵の目をくらませる。

ハーレーに渡した時を思い出すな。

「こめっこ、代わりに君にいいものをやるよ。中にはお菓子が入っ
「やったあ。久々のちゃんとおなかにたまる食べ物だあ」

「待て待て待て!!　　冗談だから本当に待て!!!」

『冗談だ。これは武器だよ』と、最後まで言い切る前に僕の手からスタ

ングレネードを取ってあちこち触りまくるこめっこを、僕は顔を真っ青にして引き留める。

「というか、今聞いて悲しくなってくるようなセリフが聞こえてきた気がするのだが……。」

「おかしじゃないの?」

「残念だが違う。これは武器だ。もしいじめっこにかに捕まったら、目をつぶって下のボタンを押せ。いいな? 君いじめっことかいるか?」

「んーん。いないよ? でも、私を餌付けして手なずけようとしてくるロリコンのニートはいるよ」

「よし、もつとすごい武器もあげよう」

「なんだこの里は。こんな小さいのにそんな奴がいるのか。」

僕が超音波発生装置を腕部から取り外そうとしたとき、自分の世界に入っていたこめっこの姉がヘルメットを外し、僕とこめっこの間に手を突き出してきた。

「あの、うちの妹にあまり物騒なものを渡さないでください」

「安心しろよ、そんな大層なものじゃない。これを食らった奴は頭が割れそうな痛みで襲われて、苦しみに耐えきれず泣き叫びながら右往左往するだけさ」

「それを聞いてどこに安心しろと言うのですか!?! こめっこが言っていたロリコンのニートは私が何とかしますので、それはしまってくださいー!」

そう怒りながら僕の方にひよいっとヘルメットを投げ渡してくるこめっこの姉。

話が逸れ過ぎてしまったな。僕がここに来たのはコントするためじゃない、魔法について勉強するためだ。

「つたく、ジョークの通じない娘っ子だな。とりあえず君にいくつか聞きたいことがあるんだが、いいか?」

「全然ジョークに聞こえなかったのですが……。それで、なんでしよう?」

若干疲れた顔をしたこめっこの姉に、僕は聞きたかったことを尋ね

る。まずは一番の目的についてだ。

「魔法について知りたい。それも、初歩的なものから高度なものまで含めた全てだ。ここは魔法に最も詳しい里だと聞いた。書物でも何でもいい、なにか知識を蓄えられそうなところはないか？」

その質問を聞いて、彼女は顎に指を置いて少し考えた仕草をした後。

「ふーむ……それでしたら、族長の家に行ってみるのはどうでしょうか」

「族長の家？」

「ええ。この里の族長がいる家です。族長の名の通り、この里の管理も担っているので色々知っていますはずです。自分の名を名乗る事すら恥ずかしがる変わり者の娘もいますよ」

「それはよかった。この里に来て初めて普通の子と話せるって訳か」

「私からすれば、里の外の人間の方が変わってると思うのですが……あの、ところでですね……」

僕の皮肉を軽く流し、急にモジモジとしながらこつちを見てくるこめっこの姉。彼女もなにか武器が欲しいのだろうか。

ちなみにこめっこは僕があげたスタングレネードを手で転がしたり上に投げてキャッチしたりともてあそんでいる。うっかり暴発しなければいいが。

「……族長のところまで私が案内しますので、良ければその鎧でなんかかっこいいポーズでも取ってくださいませんか？」

何を言い出すのかと思えば、彼女は目を赤く光らせながら僕に妙な要求してきた。

彼女のその発言に、さつきから周囲で僕を見ていた他の紅魔族達も目の輝きが増す。

もしかしたら他の紅魔族もこのスーツに興奮して目を光らせているのだろうか。

「……まあ、いいだろう。お安い御用だ」

僕はそう答えると、彼女に対して体を斜めに構え、両手の掌をその姿勢のまま正面に構えて光らせる。

リパルサーを両手から放つときの構えだ。

「おおおっ！ すごくいい！ 凄くいいですよ！」

「おじちゃんカッコいい！」

「気に入ってもらえてよかった。ファンサービスは大事にしないとな」

二人とも目を赤く光らせて狂喜している。

元居た世界でもファンは大体こんな感じだったので、目が物理的に輝くという点を除けば、慣れてると言えば慣れているのだが……。

僕を知る者がいない世界に来てこんな反応をされるといのは嬉しいやらむずがゆいやら。

少なくともゴーレム扱いされて剣を抜かれるよりはマシか。

なんて考えていると、僕のポーズを見てはしゃいでいたこめつこを見ながらその姉が。

「こめつこがこんなに楽しんでいるのを見るのは久しぶりです。里にはこの子と同年の子が居なく家にはおもちゃもないので、いつも外に行つて一人で遊んでいるのですよ。あの子を楽しませてくれて、ありがとうございます」

そんなことを、とてもうれしそうな笑顔をしながら言ってきた。

……………。

「……もうちよつとだけポーズ取つてあげてもいいぞ？」

「いえ、大丈夫ですよ。これ以上時間を取らせるわけにもいきません。族長の家まで案内しますね」

そう言つて笑うと、彼女はくるりと後ろを振り向いて歩きだした。いい姉じゃないか。

なんて名前なのだろうか。

「なあ、こめつこ。君の姉の名前はなんていうんだ？」

「姉ちゃんの名前？ 姉ちゃんの名前は……」

僕が姉の名前を聞くと、僕に背を向けて歩き出していたはずのこめつこの姉がバツと僕の方に向き直り、こめつこが最後まで言い切る前に遮って激昂しだした。

「おい、今私の名を私に直接聞かず、妹に聞いた訳を聞こうじゃないか！ 紅魔族の名乗りを聞くのがめんどくさくて妹に聞きましたね!」
「中々鋭いな。将来は探偵志望か？ 悪いがいちいち反応するのも面倒だね。時間を取らせるわけにはいかないんだろ?」

「よくもまあ少女相手にそんな悪意に満ちた皮肉が言えますね!!
さつきまでの優しい気な雰囲気か台無しですよ！ 名前を聞くなら名乗らせてください!」

そういつてむすつとした顔で僕をにらんでくるこめっこの姉。

つたく、最後の一仕事と行くか。

「しようがないな……。それじゃ今から世話になる君の名前を教えてくださいませんか?」

僕その言葉を聞くや否や、羽織っていたマントのようなものをバサツと翻し、さすががしいままでのドヤ顔を浮かべ、声高々と名乗りを上げた。

「我が名はめぐみん！ 紅魔族随一の天才にして、爆裂魔法を愛する者!」



こめっこを家に帰り、族長の元へ向かう道すがら。

僕はめぐみんの背中についていきながら、質問の続きをする。

「ところで、君らの目が赤く光るのは何なんだ？ この里に来てからというものの、あの目線にさらされてばかりだ。ほら見ろ、あそこの民家の窓」

僕が指さした先にあるのは一つの民家。その窓には家族らしき男女の大人二人と子供一人の三人組がたっていた。

窓際に目を光らせる三人が立ってこちらをガン見している光景はホラーそのものだ。

「あんなの見てたら僕は里の儀式のいけにえとして明日にでも串刺しにされて焼かれるのかと錯覚してしまうんだが」

「た、確かにあれは怖いですね……。ですが安心してください。紅魔族

は気分が昂ると目が赤く光るのです。つまり、ただ興奮しているだけですよ」

「それって変な意味じゃないよな？」

「そんなわけないでしょう。新手のセクハラですか？ 事案発生ですか？」

「いや……違うんだ。アクセルには僕の鎧を見ると、あることを期待してハアハアと性的に興奮しだすパーティーメンバーがいてね」

「な、なんですかその人は……よくそんな人とパーティーを組めますね。私には到底考えられません……」

僕のパーティーメンバーの話聞いて、心底ドン引きした顔をするめぐみん。

気持ちには分かる。今思えばどうしてあんな女とパーティーを組んだのか自分でもよくわからない。

「その人はともかく、ここにいる里の者たちは単純にあなたのそのカッコいい鎧に興奮しているのだと思いますよ。この里には今までいろんな装備をした勇者候補が訪れましたが、あなたほどカッコいい装備を身にまとった人は初めて見ましたから」

「この鎧はそんなに君たちの琴線に触れるものなのか？」

「それはもう。紅魔族が好む真っ赤なボディ、放つ光沢、歩きたびに聞こえる謎の駆動音、胸に輝く光……。特にその胸部が最高です」

そうやって、僕の胸のアークリアクター・コアを指さすめぐみん。お目が高い。

「これはアークリアクターだ。改良に改良を重ね、今の発電量は毎秒九ギガジュール。ここまで上げるのも苦労した。心臓を人生百五十回分は動かせるエネルギーを持っている」

僕の自慢に、めぐみんは感心したような顔をして僕を見てくる。

「ほほお……ぎがじゅーるっていうのが何を示す値なのかはわかりませんが、心臓を人生百五十回分動かせる……面白い表現の設定ですね。紅魔族の血が混じっていたりしませんか？」

「おい、設定じゃないぞ。本気で言ってる」

めぐみんはその言葉を聞いて『またまた』とでも言わんばかりに笑

い出した。

こいつ信じてないな……。今度取り出して見せてやろう。
そういえば、めぐみんが自己紹介の時に言っていた爆裂魔法と言うのは何なのだろうか。

純粹に疑問に思い、めぐみんに質問してみる。

「なあ、君がさつき自己紹介の時に言っていた爆裂魔法っていうのは一体な」

「よくぞ！ よくぞ聞いてくれました!!」

「うおっ」

最後まで言い切る前に、僕のあごに頭突きせんばかりの勢いで顔を近づけてきためぐみん。

「ふふふ、爆裂魔法について聞きたいですか!? いいでしょう、いいでしょう!」

「あー……。軽めでいいからな?」

「爆裂魔法とは、人類が持つ最大にして最強の攻撃手段と言われる究極魔法です! どんな存在にでもダメージを与え、すべてを灰燼に帰す……」

そこから族長の家に着くまで彼女の熱い爆裂トークが始まった。

爆裂魔法に対する賛美を、胡散臭いテレビショッピングの司会者顔負けの剣幕でひたすら語っためぐみん。

おかげで僕が今最も詳しい魔法は爆裂魔法になってしまった。

当の本人はじんわりと顔に汗を浮かべてやり切った顔をしているが。

しかし、どんな存在にもダメージを与える究極魔法か……。

めぐみんのトークにあてられたわけじゃないが、僕は爆裂魔法に多少興味湧いていた。

「ふう……」ここが族長の家です。いやあ、爆裂魔法について語っているとあつという間ですね。どうですか? 爆裂魔法についてよくわかったでしょう?」

「ああ。君に向いている職はアークウイザードよりもセールスレディなんじゃないかってことがな」

「せえるす……なんですか？ それ？」

「言葉で戦う魔法職さ」

「初めて聞きましたね……」

族長の家の玄関前でくだらないやり取りをする僕ら。

そんな声が家の中まで響いていたのか、玄関の扉がガチャリと開き、中からヒゲをはやした中年の男が出てきた。

「すまんが、少し静かに……うおおっ!？」

……そして、出て来るや否や僕のスーツを見て変な声を上げた。

「そのこの旅のお方、ようこそ紅魔の里へ。なにか御用ですかな？」

「ああ、魔法について知りたくてね。この里の魔法に関する知識ができる限り欲しいって言ったらこの娘っ子にここを案内されたんだ」

「おい、娘っ子などではなく、私のことはちゃんと名前で呼んでもらおうか」

「なるほど、それでひよいぎぶろーさん家の娘も一緒に……。ふむ……魔法の知識ですか……とりあえず家に上がってくださいいな」

そう言ってドアを開けたまま家の中を指す男。おそらく彼が族長だろう。

僕はめぐみんより前に出ると、最後にめぐみんに背を向けたまま別れの挨拶をする。

「それじゃ、ここまでの案内感謝するよめぐみん。里にはしばらく滞在する予定だから、今度は爆裂魔法以外の魔法についても教えてくれ」

「むう……爆裂魔法以外についてはそんなに語りたくないのですが……」

「教えてくれたら報酬を支払おう。これは前払いだ」

「へ？」

僕の言葉にきよとんとした顔を浮かべるめぐみん。

そんな彼女を尻目に、僕は見せつけるようにスーツをゆっくりと変形させ、展開した前部から軽やかに歩いて出て見せる。

そしてポケットに手を突っ込んで、顔だけめぐみんに向けてニヒルな笑みを浮かべた。

「えっ!? ちょちょちよ! なんですか今の!? どうやって鎧を脱いだんですか!? もう一回! もう一回見せてください! お願いします!! それも後ろからではなく正面から!!」

「他の魔法についても教えてくれたら、今のを前から好きなだけ見せてやる。じゃあな」

「……めぐみん、今の鎧の変形はお金を出してでも見る価値があったぞ……!」

「うぐぬぬぬぬ……! 絶対に、絶対に約束ですよ!」

めぐみんの約束にポケットから片手を出し、ひらひらと手を振って答え、目を輝かせる族長らしき男の家の玄関へと向かった。

ちよつとカツコ付けすぎたかな。



「なるほど、スタークさんは魔法が普及してない国から来たと……」

「そういうこと。その国から魔王討伐を命じられてここに来たんだ」

「いやー、それにしても驚いたな母さん! あの鎧みたか!? 三十数年生きててあんなものは初めてだ!」

「ええ、本当に」

意外と若い族長とその奥さんの向かいにテーブルをはさんで座り、出されたお茶を飲みながら話をしていった。

「よければどんな国か教えてもらってもいいですかな? 魔法無しでどんな生活を送っていたのか、とても興味があります」

「そうですね。それと、スタークさんがどんな敵と戦っていたのかも気になります。このベルゼルグは魔王軍と最も近く、戦いも最も苛烈な国です。ですが、そんなベルゼルグの外で、あれほどの鎧が必要になるような敵と戦ってきたんですよね? 是非知りたいです」

「もちろんだ。だがその前に奥さん、テーブルの上のコップとお菓子を下げてもらえるか?」

「え？ は、はい」

言われたとおりに机の上を片付ける族長の奥さん。

僕はきれいになった机の上の真ん中に腕時計を置き、ポケットから端末を取り出した。

「それは……」

族長夫妻が不思議そうな顔をするが、説明するより見せた方が早い。

僕が端末を腕時計の上で振ると、腕時計からホログラムが飛び出して机の上に複数の映像ファイルを映し出す。

「ううむ……？ 映像を映し出す魔道具は知っているが……これには魔力を全く感じないぞ……？」

「変わってますね……」

「僕の国は魔法が普及していない代わりに、こういう技術が発達した国だった」

ホログラムを前に唸る夫妻に説明しながら、腕時計から映し出される映像を手元の端末で操作していく。

映し出されたのは、NYでエイリアン相手に戦う僕を含めたアベンジャーズのメンバー。

世界の平和を守る組織として設立されたS. H. I. E. L. D. が回収した映像記録をまとめたものだ。

僕が天才的頭脳の元に開発したスーツを装着して空を飛び回り、星条旗カラーのコスチュームをした正義の男が指示を出しながら盾で敵を打ち倒し、雷の神が豪快にハンマーを振り回して敵に雷撃を浴びせ、一見普通の男が緑の巨人に豹変して大暴れする。

夫妻はその映像に大興奮だ。体を前のめりに突き出し、拳を握って映像を食い入るように見ている。

ちなみにナターシャとクリントは映像記録がほとんど残っており、残念ながら二人に見せることができない。

一通り映像を見せ、ホログラムの映像をオフにする。

ただ自分がどんな世界の出身だったかを適当に見せようとしただけだったのだが、夫妻の顔は何か大作映画を見たかのように満足した

顔だ。

「とまあ、こんな感じで僕は遠い場所から侵略してくるモンスターの軍団から自分たちの星……いや、国を守るチームを編成し、戦ってたって訳だ」

「いやはや驚いた！　こんなすごいものが観れるなんて感謝しますよ！　スタークさん！」

「ええ！　大満足です！」

「満足させるために用意した映像じゃなかったんだが……さ、簡単な自己紹介はこのくらいにして……話の本題に入ろうか」

僕の言葉に夫妻ははっとした顔を浮かべる。どうやら映像を見るのに夢中で忘れていたみたいだ。

「おつといけない。すいませんね、つつい映像に夢中になってしまつて……。魔法について記された魔導書なら、学校と隣接した図書館にたくさん置いてありますよ」

「へえ、学校があるのか」

そう言えば、めぐみんは学生服のようなものを着ていたっけな。

「ええ。義務教育が受けられる教育機関があるのは、この国では紅魔の里ぐらいなものですね。本はいくらでもお貸しします。なんなら勝手に借り出しても大丈夫です」

そう言つて胸を張る族長。だがそのあとすぐに神妙な顔付きになり、僕の目を見据えてきた。

空気が一気に張り詰め、真剣な空気になっていく。

「それだけではありません……。図書館にない禁忌の魔導書もお貸ししましょう。ですが、それらと引き換えにあなたに一つ頼みたいことがあります。普通じゃ得られないような体験をしたあなたでなければ頼めないことです」

「……頼みたい事？」

オウム返しに聞く僕に、族長は神妙な顔つきのまま、口を開いた。

「トニー・スタークさん。あなたに、我が里の学校で特別講師になって
いただきたい」

第5話 最強の戦術破壊兵器

——我が里の学校で特別講師になっていたいただきたい。

族長の言葉に思考が一瞬止まる。

お茶を口に含んでたら嘔き出していたかもしれない。

「……僕が……講師だって?」

「ええ、そうです。母さんはどう思う?」

「面白そうだと思います。遠い国から来た特別講師だなんて、紅魔族としても昂るものがあるわ!」

そう言っただけ目を赤く光らせる夫妻。

……期待してもらってるところ悪いが、正直御免だ。子供相手にものを教えるなんて僕の分野じゃない。

だがまあ、とりあえずどんな学校かだけでも聞いておこう。

「教え子たちの年齢は?」

「さっきあなたと一緒にいたためぐみん位の子たちですよ」

「……」

「あ、あの……スタークさん?」

大学生相手ならまだしも、十二、十三相手の子供に何を教えろっていうんだ。

段ボールで空気砲でも作ってやればいいのか? それとも水溶き片栗粉握りつぶして遊ぶのか?

そもそも、僕の世界じゃ科学者だった人間が高校や中学の教師をやるなんてのは、所謂夢破れた落ちこぼれの末路みたいな扱いだ。ラボをクビになったり、大学教員になれなかった連中が食い扶持を求めて中高生相手に教鞭を執るなんてのはよくある話だ。

僕の中でもそういうイメージだったので、なりたいかと言われたら当然答えはNOだ。だがそんなことを言っても二人にはわからないだろう。

そんな思いが表に出てしまったのか、顎に手を置いて複雑そうな顔をする僕を見て不安げにする夫妻。

僕は顎に置いていた右手を翻し、肩をすくめて。

「大体、講師をやれって言うが、一体何を教えればいいんだ？ 言っておくが、僕の科学知識……いや、僕の技術知識は常人に理解できるものじゃないぞ？」

嫌味ったらしくそう言うが、二人は嫌な顔を一つしない。

それどころか、僕の言葉に族長は笑顔で返してくる。

「いえ、違うんですよ。この里の学校では一般的な知識を身に付け、魔法の修業を始めるんです。そして、やがては優秀なアークウイザードになって卒業していきます。戦いとは無縁の職に就く者もいますが、スタークさんには戦闘面での心構えや外の世界について教えてあげて欲しいのです。特に、スタークさんが担当するのは卒業間近の子供たちです。きつといい刺激になることでしょう」

その族長の言葉に、『世界を渡り歩く力を持って生を受けるのに、外の世界を見ないのはもったいないですもの』と、付け加えて笑う奥さん。

どうやら僕が思っていた学校とは違うみたいだ。

この世界の冒険者たちは若い。学生やってるような歳の子が普通に命を懸けて戦っている。

幼いころから戦う能力を身に着ける教育機関があってもおかしくはないだろう。

……面白そうだ。

この世界を魔王軍から救うのに、必ずしも僕が魔王を直接ぶちのめしに行く必要はない。

テロ国家を潰すのに大国が直接出向くんじゃなく、現地の反乱軍に経験を積んだ特殊部隊を教官として送り込み、戦闘ノウハウを叩き込んで強力な軍隊に作り変えるように、僕がこの世界の間側の戦力自体を上げてしまえばいい。

ここらで紅魔族相手にそれを試してみるのも悪くないだろう。

いずれは技術力も上げて魔王軍を文明力の差でボコボコにしてもいい。

だが、最後に確認しておかなくてはいけなことがある。

「あー……なあ、これだけは言っておくが……僕は講師ってガラじゃ

ない、なにしろ性格は欠点だらけだ。話してる途中でもわかっただろ？ 無礼だし、皮肉屋だし、むしろ生徒に悪影響かもしれないな……」

「スタークさん」

だんだん卑屈っぽくなってきた僕の言葉を、奥さんは遮る。

そしてにつこり笑い……。

「多少毒があつた方がかえって面白いものです。我々紅魔族はあえてステータスを下げる呪われた武器を使つたりもするのですよ？ なぜなら、それがカッコ良いから！」

……その赤い目を、ひと際輝かせた。

紅魔族っていうのが段々とわかつてきた気がする。

最初はただスーツのロマンがわかる良いセンスを持った一族程度にしか思つてなかつたが、僕の考えが甘かつたらしい。

彼らはそのロマンやセンスに対して清々しきすら覚えるほど全力投球なのだ。

そんな彼らを見てみると、自分の性格がどうだの生徒に悪影響がどうだのつてもどうでもいい問題に見えてきた。

ものは試してこそ科学者だ。

「さて、スタークさん。いかがなされますか？」

答えは決まつた。

「乗った」

「そう来なくてはい……」

族長が差し出してきた手を取つて、固く握手を交わす。

「交渉成立だな」

……と、笑つたその時。

妙な視線を感じ取り、そちらの方に視線を向けると……。

夫妻が座っているソファから数メートル程後方にあるドアをほんの少しだけ開け、そこからちらつと顔をのぞかしている女の子と目が合った。

「……っ！」

やあ、とでも言つて気さくにあいさつしようかと思つたのだが、僕

と目が合うや否やびくりと体を震わせて、ドアの奥に引っ込んでしまった。

その様子を見た族長が。

「ああ、あの子は我が娘のゆんゆんです。紅魔族なのに自分の名乗りすら恥ずかしがる変わり者でしてな」

「そのせいか、里でも浮いてしまつてて……友達がサボテンとまりもくらいしかいないんですよ」

「僕よりひどいって凄いな」

僕と違つて普通の感性を持っているだけなのに、それで友達がいないとかいくら何でも切なすぎる。

僕が微妙な顔をしていると、奥さんは僕に笑いかけてきて。

「あの子も学校に通う生徒の一人です。なにとぞ、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いしますね?」

「……善処するよ。ところで、僕はいつから教師をやれば良いのかな?」

「それはまた追々……。今日はひとまず里を回つて体を休めてください。食事処と宿が書いてある地図を渡しますので」

そう言つて、族長がパンフレットみたいなのを手渡してきた。

表紙にでかかど書かれた赤文字が目に入る。

——『里の秘密に迫りし超極秘機密資料』

「なあ、これ……」

「ワクワクする地図でしよう?」

「……………」

▽

里のそこらじゅうで無料配布してある超極秘機密資料を広げながら里の中を探索する。

気になる場所はいくつかあるが、まずは腹ごしらえだ。

ダクネス達の装備開発と試験をしていたおかげで朝から何も食べていない。

ひとまずは喫茶店へと、足を動かした時だった。

耳につけていたインカム越しに、フライデーから通知が入る。

『ボス、クリスマス様より着信です』

「クリスマス？ まだ別れてから二時間も経ってないだろうに。繋げ」

クリスマスには僕から携帯端末を送ってあった。

彼女は異世界に送られた僕がどんな影響を及ぼすのか見届けるよう上から命令されている。

僕としてもこの世界について詳しく、僕の事情を知っている彼女といつでも連絡が取れるようになるのは好都合だった。

『えーつと、これで良いのかな？ もしもトニー、聞こえる？』

「ばっちりだ。で、何の用だ？ もう僕が恋しくなっちゃった？」

『おお……毒電波受信中……なーんて。あはは、冗談だよ。この通信手段を試しておきたかったっていうのと、今紅魔の里でどうなったのか気になって電話したんだ』

「そんなことか。おおむね順調だ。この里で講師をやることになったが」

『えっっ』

ガタンツと物音を立て、奇妙な声を上げるエリス。

多分、元の世界のみんながこれを聞いたら同じ反応をするだろう。

「なんだよ、そんなに意外か？」

『意外というかなんというか……そういうの嫌がるタイプだと思っていただけから……でも、里の講師ってことは紅魔族の学校のことだよね？』

魔法使いの学校で何を教えるつもりなの？』

「僕が元の世界で得た戦闘経験や教訓なんかだ。将来生徒が冒険者になったときに何かの役に立つかもしれないだろ？ あと、外の世界の知識は生徒たちにとっていい刺激になるとも言ってたな」

『なるほど……ちよつと内容気になるなあ……』

異世界を救うという名目で送られた僕が、のどかな田舎の里で教師をやるという衝撃的な展開にも関わらず、興味深そうな反応をエリスは示す。

てつきりそんなことやってる場合かと説教されると思ったのだが、

あまりこちらの動きにあれこれ言うつもりはないらしい。

……僕が今立てている計画について聞いてみるか。

「なあ、エリス。僕の世界の技術や知識をこの世界に提供して、魔王軍に対して有利に立とうと思ってるんだが、どう思う？」

『うーん……この世界に悪影響を及ぼさない範囲であれば……多少は大丈夫だよ。今まで似たようなことをしてきた転生者もいるみたいだし』

意外とあっさりした答えに少々面食らう。

が、少し間を開けたのちにクリスが僕に真面目そうな……というか、おそろおそろと言った感じで。

『ねえ、その……失礼な質問になったら悪いんだけど……武器を売るつもりなの？』

「……まあ、そうなるな。だが今は状況が違う。人と人が殺しあつてるんじゃないくて、人と魔物が戦っている。一般人や悪人の手に渡らないよう管理はしっかりするし、魔王軍との戦いが終わったら全て使えなくなるよう細工でもするつもりだ」

正確に言えば武器を売るんじゃないくて、ただの技術提供だ。

S・H・I・E・L・Dのヘリキャリアにリパルサー・エンジンを搭載してやったのと同じだ。

再び武器商人をやるつもりはない。

ちなみにそのヘリキャリアはヒドラという悪の組織が乗っ取ったことにより危うく数十万単位の人命が失われかけたし、水の底に沈んだしで散々だったがそれはそれ、これはこれだ。今度は上手くやる。『それなら安心だね。でも、世界を滅ぼしかねない破壊兵器とか作っちゃだめだよ？ 約束だからね？』

「僕がそんなもん作るわけな……いや、なんでもない、わかった。約束だ」

通話越しなのになぜか冷たい目を向けられてるのがわかってしまった。

「それじゃあ、その技術提供についてなんだが……どうすればいいと思う？ この世界でそういったものを売り込むのに適している場所

に心当たりはあるか？」

『そうだね……とりあえず王都に行ってみればいいんじゃないかな。王都の近くの平原までよく魔王軍が襲撃に来るからそこで実際に使ってみせるなりすれば……』

と、そこまで言ったところで。

『ママァ、あの人変な板にしやべりかけてるー』

『しーっ、多分アクシズ教徒よ。見ちゃいけません』

『えっ、待っ、違っ』

突如聞こえてきた一般人の声と焦った様子のクリスの声を最後に通話が途切れてしまった。

……かわいいそうに。

エリスは幸運を司る神様らしいが、どうも本人は不幸体質みたいだ……。

彼女の幸運と、おいしくお腹を満たしてくれる料理に想いを馳せつつ、喫茶店へと向かった。

▽

「おや！ 今里で話題になってる鎧の男じゃないか！ いらっしやい！ 紅魔族随一の喫茶店へようこそ!!」

デッドリーポイズンという、飲食店を経営する気はあるのかと正気を疑いたくなるような名前の店に入った僕は、男勝りな口調の恰幅のいい女性店主に案内されて席に着く。

ちなみに定食屋もあつたのだが、そちらはデスクリムゾンという名前だった。いずれ行ってみよう。

暖かい日が差すテラス席に座り、メニュー表を開く。

——『暗黒神の加護を受けしシチュー』

——『溶岩竜の吐息風カラシスパゲティ』

——『魔神に捧げられし子羊肉のサンドイッチ』

……。

これまたすごい名前だ。なんの料理かさっぱりわからない。

スーツに狂喜するセンスはあっても、ネーミングセンスはないらしい。

「あー……なあ、オススメはなんだ？」

「今日のオススメは『死の女神による永遠の炎で揚げられしカツサンド』と『大地の女神の祝福サラダプレート』だ！」

「じゃ、それで」

「あいよー」

備え付けの果汁入りの水を飲んで一息つく。

さて、この後はどうしようか。

まず行くべきは図書館だろうか。あのコンクリート製らしき建物も気になる。

「やあ、こめっこー！ お兄ちゃんがおいしいものあげ……なんだい？

その妙な形のおも」

「どーん」

「ノオオオオオーツ！！ 目が！！ 目があああああつ！！」

騒がしいな。

今後について考えているのだから静かにしてほしいんだが。

聞こえて来る鳥のさえずりや、何処かで聞いた声の絶叫を聞きながら、僕が置いてあるスーツの前にできた人だかりを眺めて待つこと数分。

店主が料理を持って僕の席までやってきた。

「おまちどうー！」

テーブルの上にカツサンドとサラダが並べられる。

どちらも美味そうだが、目を引くのはカツサンドだ。親指の腹より厚いカツは、その断面をあふれる肉汁でコーティングし、日の光を反射して淡く輝いている。

衣も一目でサクサクしているのがわかる。素晴らしい。中世時代の文明と聞いて、料理は野菜と穀物のごった煮が主食とか想像していたのだが、今のところ不満のある料理は出ていない。うれしい誤算だ。

僕の脳から発せられる危険信号に反応し、喫茶店の前に置いてあったスーツが見物客をよけながら飛んできて僕の体を包む。

そのままパルサーを高威力のまま射出し、一瞬でキャベツを消し炭に変えた。

……料理が乗ったテーブルごと。

「お客さん！ どうしちゃったんだ!？」

「見てなかったのか!? キャベツが……キャベツが宙を舞って僕の顔をビンタしてきたんだぞ!？」

自分で言っていて頭がおかしくなりそうになる。女性にビンタされたことは星の数ほどあるが、キャベツにビンタされたのは生まれて初めてだ。

「何言ってるんだい！ キャベツが飛ぶなんてあたりまえのことだろう!!」

「あんたが何言ってるんだ!!」

「——なんだなんだ!？」

「——おおっ！ あの鎧手から光線が出たぞ！」

「——新しい演出か!？」

スーツの近くに集まっていた里の住民たちは何が起こったのか把握できていないのか、とりあえず僕のスーツを見て目を輝かせている。

気楽でいいなこいつら。

「お客さん、まさかキャベツが空を飛ぶってことを知らないのかい……?」

「知ったことに絶望しそうだ。少なくとも、僕が住んでいる国では空飛ぶ野菜なんていなかったぞ……」

信じられないといった顔をする店主。

不満のある料理は出てないか思っていた五分前の僕をビンタしてやりたい。

「はあ……とりあえずテーブルと皿の代金を弁償させてくれ……」

「あ、ああ……」



お腹を満たしに来たはずなのにげっそりとした僕は学校の図書館に来ていた。

あらゆる意欲が下がっているが、やるべきことはやらなくては。入り口のドアを開け中に入ると、そこにはたくさんの本棚が並び、その本棚一つ一つにぎっしりと本が詰められていた。

幻想的に輝くサーバルームに比べると若干見劣りするが、たまにはこういうのも悪くない。

古い紙と新しい紙、そしてインクの匂いに胸を躍らせ、部屋の中を歩き回る。

—— 『暴れん坊ロード』

—— 『タニシでも社交的になれる本』

—— 『読むだけで友達ができる禁断の魔導書』

アホみたいなタイトルの本が視界にちらつくが、それらは無視して魔法について記された書物を探し続ける。

「魔法……魔法……ん？」

—— 『爆裂魔法の有用性』

爆裂魔法。僕が今一番詳しい魔法だ。

めぐみん曰く、ありとあらゆる敵を一撃で葬り去ることができる最強魔法。

あの時の説明を聞く限りではかなり恐ろしい魔法に聞こえたが、弱点や問題面については聞いていない。

最強の魔法と言うくらいだ、使用者と敵対する機会はこの先あるだろう。

食らうことが無いように調べておかなくては。

その本を取ろうと手を伸ばした時、もう一本の腕が僕の左下から伸びてきた。

「左から失礼……って、さっきの鎧おじさんではないですか」

爆裂魔法の本を取ろうと手を伸ばしてきたのは、なんとめぐみんだった。

僕のことを鎧おじさん呼ばわりした彼女は、そのまま僕が狙ってた

爆裂魔法の本をさっと取る。

「おい、僕のことを鎧おじさんって呼ぶのはやめろ。ちゃんと名前があるんだ」

「……そういえば、あなたの名前は聞いてなかったですね。なんて名前なんですか？」

僕は背の低いめぐみんを身長差を活かして見下ろし、指パッチンしながら人差し指を立て、それをめぐみんに向ける。

そういえば、彼女は紅魔族随一の天才と名乗ってたっけな。

「僕の名はトニー・スターク。人類随一の天才さ」

そういつて、ニヤリと笑って見せた。

めぐみんは、僕が紅魔族式とは違うものの、派手に名乗りを上げたことに感心した様子で僕を眺めてたが、やがてハツとした顔を浮かべて。

「この私を差し置いて人類随一の天才とは聞き捨てなりませんね！

それだけ言うのであれば勝負しようではありませんか！」

「もちろんいいとも」

そう言つて、まるでガンマンの早打ち勝負のようにお互いカードを取り出して相手に突きつける。

めぐみんのカードに書かれていた値は……。

「……ばかなっ!! なんですかそのデータラメな数値!?! まさか……この私が……」

すさまじく悔しそうな顔をするめぐみん。だが……。

「あれっ? 魔力が……」

「おっと、天才対決は僕の勝ち。はいおしまい」

ゼロに近い魔力を見られまいと、素早くポケットにカードをしまふ。

その様子を見ためぐみんは実に憎たらしくニヤニヤと笑う。

クソ、遅かった。

「おやあ……? おやおや……。知力が高いのに、魔力がゼロとはなんでもつたない!」

「僕に魔力は関係ない。魔法使いになるつもりはないからな」

「へ？ ではなぜ魔法について調べようと……」

「僕の住んでる国じゃ、魔法が普及してなかったからだ。だから魔法について調べてるだけだ。あとその本、僕が先に見つけた奴だぞ」

そう言っつてめぐみんが手に持った本をかつさう。

「ああっ！ 子供が持った本を奪い取るとかそれでも大人ですかあ
あなたは!? このっ！ このっ！」

「これが大人だ。大人について知れてよかったな。こういうのは本
じゃ学べないぞ？」

めぐみんがジャンプして僕から本を奪い返そうとするが、身長差がある上に僕が本を持った手を頭の上まで上げてしまっている為手が届かないでいる。

「大体、君は爆裂魔法についてよく知っているじゃないか。僕が調べたっつていいだろ？」

「うぐぐぐ……仕方ありませんね。爆裂魔法の魅力がわかる同志が増えるかもしれない良い機会です。見逃してあげますよ……」

そうしてプリプリと怒りながらもあきらめて他の本を取りに行くためぐみん。

ちよつと悪いことしたかもな。あとでスーツの変形でも見せてやろう。

そうしてその場でパラパラと本をめくってみるのだが……。

「……なんだこれは……ボロクソじゃないか……」
描かれていた内容は凄惨たるものだった。

使用する魔力が大きすぎてまともに使える魔法使いはほとんどいない、使えば魔力は枯渇して他の魔法を撃つことすらままならない。周囲の地形は変わる、音につられて魔物は寄ってくる、使用者は地雷扱い。上げればキリがないくらい叩かれたりだ。

……めぐみんは、このことを知っているのだろうか。

爆裂魔法を愛している彼女のことだ、これを知ったらきつと……。
「今ですっ！ ふはははは!! 油断しましたね!!」

そんな声と共に、めぐみんが横から爆裂魔法の本をかつさらっていった。

ひゃほうと叫び、図書室の中を駆け巡る。

……あのガキ。

そのあと、上級魔法や中級魔法について書かれた本をいくつか取り、部屋の中にあつた椅子に腰かけて本を開く。

しばらく本を読んでいると、めぐみんが近くの席に座りだした。

「……なんだ？ この本も奪うつもりなのか？」

「奪いませんよ！ そんなちっぽけな魔法になんて興味ありません！

私が目指すのは最強の文字のみですから！」

「その最強の爆裂魔法とやらはネタ魔法扱いで、使用者は地雷魔法使いとまで書かれてるのにそれ言うのか？」

そういうと、めぐみんの顔がだんだんと曇って行って……シユンと、うなだれる。

……。なんだその顔は。さっきまであんなに誇ってしゃべってたのに……。

「……魔法について調べ始めたばかりのあなたでも、そう思いますか？」

めぐみんは、うなだれていた顔を上げて。

「……あなたも、爆裂魔法はネタ魔法だと思えますか？」

つらそうな、くじけそうな顔をしながら、僕にそう言ってきた。

彼女は、なぜこうもつらい顔をするのだろうか。この学校にいる生徒はまだ全員魔法を覚えていないというのは知っている。

ただ好きだけならこんな顔はしないはずだ。

「……君は、爆裂魔法を習得するつもりなのか？」

「……」

何も言わず、彼女は小さくコクリとうなずき。そして、自嘲気味に笑った。

「はは……何で親とかでもないあなたに打ち明けてるのでしょうか……そうですね……いずれ居なくなる里の外の人間だからでしょうか……そうです、私はネタ魔法と言われている爆裂魔法を習得しようとしています。小さいころ、一度だけ見た爆裂魔法が忘れられないんです。あの、すべてを蹂躪するかのような破壊の化身のごとき大魔法が。私の目標

は爆裂魔法を覚えて、極めて、私に爆裂魔法を見せてくれたあの人に、私の爆裂魔法を見せる事なんです」

……僕は、開いていた読みかけの本をパタリと閉じて。

「……その話、僕にしたのは正解だったな」

「へっ?」

素っ頓狂な声を上げて驚くめぐみんに、今度は僕が自嘲気味に笑いながら。

「実は僕は……武器を作ることが得意なんだ。昔はあらゆる武器を作っては、戦争の兵器として売りさばいていた……まあ、この話は関係ないか。僕が言いたいのは、僕には武器を見る目があるってことだ」

ネタ魔法を習得しようとする彼女に、こんな話をしていいのだろうか。

本当はやめさせてまっとうな魔法使いになれと言うべきなんじゃないだろうか。

だが僕は、自分の直感のままに。そして、ロマンを追い求め茨の道突き進まんとする彼女に少しだけ敬意を表し。

紅魔族が好きそうな感じで爆裂魔法をプレゼンしてやる。

「戦術破壊兵器。君が爆裂魔法を極めようとするなら、戦術破壊兵器を目指せ」

その言葉に、暗かったためぐみんの顔に明るさが戻っていき、目が少しずつ輝き始める。

「せ……戦術破壊兵器……! それは、どういう……」

「簡単だ。君自身が、戦術破壊兵器そのものになるってことだ。一発撃てばもうおしまいなら、それでいいじゃないか。仲間なりなんなり脱出する手段を用意して、強力な化け物相手でも、雑魚の群れにでもデカいの一発ぶち込んで撤退すればいい。使い捨ての一撃必殺兵器……使い捨てって言い方はよくないな。だがまあ、そんな感じでやりようはあるんじゃないか? あくまで、魔法使いとしての意見ではなく、武器を扱ってた人間としてのアドバイスだが」

「……!」

その言葉を聞いた彼女は目を赤くし、興奮した様子で。

「あーはっはっは！なるほど！そうですか！そういうことですか！ 私は世界を滅ぼす究極兵器と言うことですか！ 私としたこととが！ こんなことにも気が付かないなんて！」

悪の道に目覚めた悪役ヴィランのような笑い声をひとしきり上げて。

やがて、僕の方を向くと。

「ありがとうございます、トニー・スタークさん。あなたのおかげで自分が目指す道に自信が持てましたよ！」

「それはよかった。だがあいにく、僕は爆裂魔法を見たことが無い。今僕が示した道は、破壊兵器と言えるだけのパワーがその魔法にあるかどうかで決まるからな？」

僕がそういうと、なんの心配もいらないと言わんばかりに、ガタツと椅子から立ち上がり。

「改めて名乗らせてもらおうか！」

胸を張って、マントを翻し。

「我が名はめぐみん！ 爆裂魔法を愛し、いずれはこの世で最強の戦術破壊兵器の称号を手にするもの!!」

……クリス、悪いな。世界を滅ぼしかねない破壊兵器を作るなどいう約束だったが……今この場で作ってしまったかもしれない。

第6話 ミディアムレア

里に来てから一日が経った。

新たな拠点となったサキュバス・ランジエリーという酒場兼宿屋から出て、朝日を全身に浴びながら伸びをする。

「あつー！ おはようスタークさん！ 昨日あれだけ飲んでたのにこんな早く起きれるなんてすごいねー！ ご飯はすぐに用意するよ」

「この酒がおいしくてね。ヤケ酒とかじゃないからな？」

「酒場の区画を閉める寸前まで色々飲んでたもんね。スコッチ一本空にしたのは驚いたよ」

店の入り口付近を掃除しながらそうやってきたのは、八重歯が特徴的な長い黒髪の女の子。

ねりまきと言う名前で、この店のマスターの娘だ。

「おとーさーん！ スタークさんが起きたよー!! 朝ごはーん!!」
「あいよー!」

ねりまきが叫ぶと、店の奥からマスターの大きな返事が返ってきた。

ちなみにこの店に初めて入るとき、店の名前に少し胸躍らせたのだが、出迎えたのはマスターのおっさんだった。

スコッチ一本まるまる飲み干したのは、騙されたのが悔しかったからじゃない、断じて違う。単純においしかっただけだ。

マスター曰く、店の名前は里で随一の知力持ちが考えたらしい。きつと僕に匹敵しうる知力の持ち主に違いない。

その後、マスターと娘特製の二日酔い対策ミソスープとスクランブルエッグとベーコン、パンを食べ終え、食後のコーヒーを飲む。

良い朝だ。

朝食を堪能していると、見覚えのある服に着替えたねりまきが二階から降りてきた。

「その服……君も学生か？」

「うん、そうだよ。そろそろ行かなくなっちゃ。今日も宿に泊まってるくんでしょ？ またねスタークさん！」

「ああ、またな。今日のお酒も楽しみにしてるよ」

ねりまきを見送った後、再び図書館に向かうべく宿を出て歩く道中。

「おつ、いたいた！ 見つけましたよ、スタークさん！」

そういつて遠くから駆けてきたのは、この里の族長だった。

「やあ、族長。わざわざ僕を探してたのか？ 次からは魔法を空に打ち上げろよ。飛んで行ってやる」

「はは、ここじや上級魔法がしよつちゅう空を舞うのでね。誤認しかねないですよ」

「・・・そうか」

僕が読んだ本には、街の中で上級魔法なんて使おうものなら即しよつ引かれると書いてあったのだが。

この里の中と外の常識の違いは、異世界の常識について学んでいる途中の僕にとっては混乱の元だ。

なんて、考えている時。

『トルネード』ツ!! 『クリエイト・ウォーター』ツツ!!!」

「ほら、あんな感じに」

魔法の詠唱が聞こえた方に顔を向けると、水を含んだ巨大な竜巻が発生し、空まで登っていた。

トルネードは風の上級魔法。食らったものは空の上まで巻き上げられ、洗濯機に放り込まれたかのような様になる。昨日僕が調べて作った警戒すべき魔法リストの中でも上位に位置する危険な魔法だ。

そんな魔法が突然放たれたことに驚くが、そこで自分が頭に浮かべた単語にハタと気付く。洗濯機……。

「なあ、今やってるのって洗濯か？」

「よくわかりましたね。そうです、洗濯ですよ。これを見た外の方はみんな驚くんですがね」

正直僕も驚いている。上級魔法の景気のいい無駄遣いっぷりに。

「おっと、話がずれましたね。あなたを探していたワケですが、今から学校に来ていただきたいのですよ」

「……今からか？」

「スタークさんには今後午前か午後の授業のどちらかを担当していただくことになると思います。いやあ、急にすいませんね。本当は昨日のうちにお伝えしようと思ったのですが、里に眠りし邪神の封印が解けてしまってます……その件について会議してたのですよ」

邪神なんてのもいるのか。いや、すでに女神二人にあっているのだし特に驚くものでもないか。

それにしても……。

「ずいぶん物騒なもんが里に封印されているもんだ」

「他にも『世界を滅ぼしかねない兵器』とか『名もなき女神』とかも封印されていますよ？」

僕はその言葉について昨日究極の戦術破壊兵器になることを決意した女の子を思い出した。

その兵器がどんな威力のものかは知らないが、よさげなライバルがいるじゃないか。

それはそれとして、封印された女神はともかく世界を滅ぼしかねないという兵器はとも気になる。ぜひ見たい。

「この村は危険で興味を惹かれるものばかりだな」

「そう言ってもらえて幸いです。『邪神が封印された村とかカツコよくないか?』と、がんばってここまで持ってきて封印した先祖たちも喜んでいることでしょう」

「そんな小学生みたいな理由で危険物をひよいひよいここに封じ込めてるのか!? 気に入ったよ。君たちは本当にぶつとんで面白いな」
皮肉交じりの僕の言葉も紅魔族的には褒め言葉みたいだ。族長は嬉しそうに笑いながら。

「はっはっはー！ いやはや、うれしいお言葉ですよ！ はっはっはっは!! さて、こんなところで立ち話もなんですので学校へと向かいましょうか。道中に学校で教えていることなどを説明しますよ」

踵を返し、ご機嫌そうに歩く族長の後ろについて僕は学校へと向かった。

この里には、まだまだ面白いものが眠っているようだ。

退屈とは無縁そうで何より。

▽

「——というわけで、今日からここで特別講師になるトニー・スタークだ。好きに呼んでくれてかまわない。以上、よろしく」

学校に付いた僕は族長に見送られた後、入り口で待機してた教員に案内され、職員室まで来ていた。

職員たちの前で軽く自己紹介を終えると、僕より少し年下くらいの中年男がおもむろに席から立ち上がり、名乗りを上げた。

「我が名はぶつちん！ アークウイザードにして上級魔法を操る者！ 紅魔族随一の担任教師にして、やがて校長の椅子に座る者!! あなたが話題の新入教師か！ よろしく！」

紅魔族特有の名乗りを上げて満足そうに椅子に座りなおすぷつちん。

今の名乗りを聞き、一番奥の席で顔をヒクつかせてるのが校長だろうか。

他にも数名の教師が次々と名乗りを上げていく。

全員のカッコつけが終わると、最初に名乗ったぷつちんが僕の前まで歩いてくる。

「来て早速仕事で悪いが、俺の授業と一緒に出てくれ。養殖の手伝いをしてほしい」

「了解だ。スーツに着替えて来る。登場の演出は？」

「もちろんいる」

「だよな」

演出を考えておいてよかった。気に入ってくればいいが。

まあ、その辺は自信がある。おまけのジョークだって考えてあるんだ。

ぷつちんとの会話を終えた僕は、準備を整えるべく職員室を出て校庭へと向かった。

——養殖。

それは、この世界の経験値システムをうまく利用した育成方法。どういう原理かは知らないが、経験値はモンスターにトドメを刺した者にしか入らない。

だがそれを逆手に取り、あえて教師がモンスターを行動不能にした後で生徒がトドメを刺し、ひたすら経験値を稼がせていると、道中で族長から聞かされていた。

一見残酷かもしれないが相手はモンスター。元々は人間に害を為す存在で討伐対象だ。

レベルアップもできて脅威も減らせて一石二鳥だと彼は言っていたが……。

なるほど実に効率的だ。さすがは戦闘民族の教育機関。

本来は氷漬けにする魔法などを使って拘束するみたいだが、魔法の使えない僕はどうするべきか……。

……別に問題はないか。

要するにモンスターを安全に仕留めることができたらいいな。

妙案が浮かんだ僕は授業が始まる時間をぶっちに尋ね、まだ少し暇があることを確認すると、スーツを装着し——

▽

「さて、全員揃ってるな！ これより野外の実戦授業を行う！ いいかよく聞け!! 里のニート……手の空いていた勇敢な者達を連れて里周辺の強いモンスターはあらかた駆除しておいた。よって今この周辺には弱いモンスターしかない!」

校庭のど真ん中で熱弁する担任教師のぶっちん。

私たちは真面目な顔をして話を聞いている。今日は初めての養殖だ。

ここで敵を葬りまくり、究極の戦術破壊兵器に向けて一歩、また一歩と近づくのだ。

「だが、弱いモンスターと言えどモンスターはモンスターだ! 油断

すれば命の危機があると思え！」

命の危機。その言葉に生徒たちが若干ざわめく。

隣で不安げな顔をするゆんゆんが私に顔を寄せ、小声で話しかけてきた。

「ね、ねえめぐみん……命の危機だつて……今日の授業は緊張するね……」

「ふっ……臆病ですね、ゆんゆんは……我らは選ばれし一族である紅魔族ですよ。こんな程度でビビッてどうするのですか」

「そ、そうだよね……族長を指すんだもの。これくらい乗り越えなくちゃ！」

「その意気です。まあ、私が目指すのは究極の戦術破壊兵器なので、こちら辺の生物をゆんゆんの分まで刈り取って見せますよ」

「そんな物騒なもの目指してるの!? やめなよ！」

そういえば、破壊兵器を指せと言ったあのイカした鎧の男は何をしているのだろうか。

上級魔法を教える代わりに鎧が変形するところを見せてくれると言っていたし、まだ里にはいると思う。

また図書室に行けば会えるだろうか。

なんて色々考えていたが、先生がごほんと咳払いしたところで、私は我に返る。

その咳払いでざわめいていた生徒たちも静まり返った。

「命の危機と言ったが安心しろ。そのために俺達がいる！ モンスターを片っ端から動けなくしていくから、お前たちは動けないモンスターたちにとどめを刺せ」

「先生ー！俺達つてどういうことですか？他に誰かいるんですかー？」

「おつと……この俺としたことが……口を滑らせてしまったようだな……」

ふにふらが質問するが、意味深な返しをする先生に首を傾げ、そのツインテールを揺らす。

ゆんゆんだけは、何か知っているのかひとり納得したような顔をし

ているのが気になる。

何か知っているのかと聞こうとした時、先生が天を指さして。

「さあ！ 我ら教師の鉄の盟約の元、地獄より来たれ!! トニー・スターク！」

……えっ。

とても聞き覚えのある名前に思わず先生に聞き返そうとしたその時。

『——ツツツ!!!』

「!?!?!」

思わず耳をふさぎたくなるような、すさまじい爆音が校庭に轟いた。

例えるなら、金属製の弦をメチャクチャに引つ掻き回し、その音量を無理やり上げて響かせたような、そんな音……いや、曲？

そんな破壊的な旋律の中に、男の絶叫が混じっている。歌……？
なのだろうか？

先生も何が起きているか分からないように、驚いた顔で周囲を見渡している。

とりあえずこの耳がおかしくなりそうな爆音から逃れようと……あれ？ 意外と悪くないかもしれない。

他の生徒たちもそう思い始めたみたく、耳を覆っていた手を次々と下ろしていく。

流れた曲もピークなのか、その旋律がどんどん激しいものになる。そして、まるで曲のクライマックスに合わせるかのように、ソレは降りてきた。

ズンツとした衝撃が地面を伝わり私たちの体まで響く。

もはや墜落と言えるほどの速度で着地した、拳を地に突き立てている全身鎧のソレは……いや、その男は……。

「やあ、諸君。初めましてかな？」

平然と立ち上がり、大仰に腕を上げ。

「鉄の盟約も結んでいなければ、地獄からの使者でもない新任教師、トニー・スタークだ。スターク先生と呼んでくれ」
鎧の前面をガシヤガシヤと変形させ、馬車を降りる貴族のようにゆったりと歩き出てきた。

▽

ぷっちんと生徒のやり取りを、校庭に仕込んだマイクとHUDのズーム機能越しに上空二百メートルから眺め、完璧なタイミングを見計らってからの降下。

決まったね。

演出はぷっちり。おまけに完璧な着地だ。

僕はぷっちんの肩をたたきながら自慢する。

「なあ、見てたか？ 今のはきつと紅魔族的に百点だろう。君もいい演技するじゃないかぷっちん、おかげで登場しやすかった。ほら、生徒たちの目が赤く……。あ、赤すぎる……。本当にビームとか出てこないよな？」

思った以上の効果に自分で若干引くが、とりあえず話を先に進めなくてはいらない。

「ぷっちん、授業を進めてくれ。このままじゃ僕のスーツ自慢ショーで一日が終わってしまう。それも悪くないかもしれないが、大事ななのは授業だろ？」

「スターク……。今の……。もう一回やってくれ……」

「ぷっちん、君もか……」

真っ赤な目をしてこちらを見てくるぷっちん。

むさい男からこんな熱視線浴びてもうれしくない。

「ほら、こんなの毎朝この学校に通勤する時に見せてやるからしつかりしてくれ」

「あ、ああ、そうだったな」

なんで新人教師が初っ端から先輩教師を注意しなくちやいけないんだ。

我に返ったぷっちゃんが指パッチンすると、周囲に武器とスピーカーが現れる。

交流^Aで直流^Bな音楽はぷっちゃんの光の屈折魔法で隠していたこのスピーカーから流していた。

なんの装置かはぷっちゃんにも教えてなかったので驚かせてしまったが。

「えー、スターク先生の派手な登場も終わったところで本題にはいるぞ。全員注目！」

ぷっちゃんのその言葉に生徒たちも我に返り始める。

そんな中、今だこっちを唾然とした顔で見てる少女が二人。

「めぐみん、ねりまき。一体どうしたんだ？ 授業だぞ？ ほら集中」

僕がそう言つてパンパンと手を叩くと、二人はハツとした顔で。

「ど、どうしたじゃないですよ！ なぜここにいるんですか!？」

「本当だよ！ 昨日も今朝もなにも言つてなかったのに！」

「えっ……二人とも知り合いなの……？」

あの時家で会った族長の娘のゆんゆんが不思議そうな顔で二人に尋ねる。

二人は気まずそうな顔をして。

「えつと……昨日二人きりの図書室で私に新たな扉を開いてくれた人です」

「昨日の夜私のところに泊まっていた人かな……」

「おい冗談じゃないぞ。その言い方は誤解を招くから今すぐ変えろ」

さつきまで尊敬の目で見てた生徒たちの目がすごい勢いで冷めていく。

赤く輝く目から放たれていた熱視線も今となっては七十年ほど凍り付きそうな程冷たい視線に早変わりだ。

シャレにならない。

「スターク……さすがにそれは大問題だぞ……」

ぷっちゃんまでゴミを見るような目だ。勘弁してくれ。

「めぐみん！ ねりまき！ いい子だから誤解を解いてくれ！ このままじゃ僕は天才から変態にジョブチェンジだ！」

「で、でも……私の人生を左右したあの一言をここで明かすわけには……」

「その……こういうことになるなら言っただけで済んだな……今夜もウチに来るんでしょ？　ちよつと気まづくなっちゃうね……」

「君達は僕をクビに追い込みたいのか!?　フライデー助けてくれ！　このままじゃらちが明かない！」

『えつと……ボスは女性には優しく接するお方ですよ?』

「フライデー！」

こんなに焦ったのはいつぶりだろうか。

見覚えのない女が次々僕の家を集まって『お腹にあなたの子供がいる』と訪ねてきた時も、そいつらが突如玄関先でバトルロイヤルを始めた時もこんなには焦らなかった。

その後なんとかめぐみんとねりまきに誤解を解かせ、授業が再開したのは二十分先のことだった。

——校庭から少し里の外へと進んだ森の中。

僕が用意した武器を持って生徒たちの前を、僕とぷっちゃんが先行する。

子供に武器を持たせるのは若干危なっかしいが、本来は生徒たちの身の丈ほどもある剣や斧を用意すると言っていたので、それらよりはマシだろう。

ちなみに、持たせた武器は電気バトんだ。いきなりモンスターを剣で切り殺すのも精神衛生上よくないと考え、電気で即死させる高電圧の電気バトンをラボから用意してきた。

「スターク、どうだ?」

「この先に生体反応が二つ……僕らの気配に気が付いたみたいだ。走って逃げていくぞ」

「ちつ……追いかけて凍らせるのは面倒だな……」

「僕に任せろ」

推進リパルサーを噴出し、レーダーを頼りに逃げた二匹のモンスターに追いつく。

角が生えたデカイ鬼だ。

尻尾をふんづかまえて生徒たちの前まで持っていき。

「ほらぶっちゃん。氷漬けにするなりなんなり好きにしてくれ」

「うむ。『フリーズ・バインド』ッ！」

僕が放り投げた兎二匹の首から下をぶっちゃんが氷漬けにし、そのまま地面に転がす。

「ふうむ……空を飛ぶ鎧だなんて……実に興味深いね。鎧が飛ぶなんて発想はなかったから、良いインスピレーションを受けたよ。早速我が小説の禁断の書に書き留めなくては……」

そう言っつて胸元からメモ帳を取り出しスラスラと書き込んでいくのは、同年代のめぐみんがかわいそうになつてくる程の発育を持つ少女。

たしか名前は……。

「あー……あれま？ 君小説書いてるのか？」

「あるえです」

「失礼」

「我が邪眼によると、スターク先生は面白いことをたくさん知つてると出ています。今後の授業で教えていただいてもよろしいですか？」

「ぜひ私の小説の参考にさせてください」

外に出て戦うための知識としてではなく、小説のネタとして僕の授業が聞きたいのか……。

「小説のジャンルは？」

「勇者が仲間と共に血のにじむ努力を経て魔王を打ち倒す王道ストーリーを描く予定です」

「ありふれた題材の中でやっていくつもりか？ せいぜい本屋で他の本の下に敷かれるのがオチだぞ」

おっと、先生になつたというのに否定から入ってしまった。

あまり手放しで応援できる道じゃないとはいえ、なにも嫌味を言うことはなかったか……。

どう言い直そうかと悩んでいたのだが、あるえは不敵に笑つて見せ……。

「フツ……王道ながらも独特な視点から描かれる我が小説は世界を席卷し、賞賛と混沌の渦で包むことでしよう……」

世界を混沌の渦に包む小説とはなんなんだ。

売れるかどうかは別として、僕の嫌味に対して嫌な顔一つしないあたり、道を曲げるつもりは一切ないんだろう。

行く先が気になる。

「なるほど。自分の話がネタになった小説ってのは興味があるな。ぜひ面白おかしく書いてくれ、あろえ」

「あるえです」

「冗談だよ」

作家の卵をからかって遊んでいると、生徒たちのほうから僕を呼ぶ声が聞こえてきた。

「先生ー！ これどう使うんですかー？」

どうやらスタンバトンの使い方がわからないようだった。

僕は生徒が持ってきたスタンバトンを手に取って。

「その一、棒を握る。その二、このセーフティを外す。その三、嫌な奴に先つちよをくつつける。その四、この赤いボタンを押す。その五、あら不思議、ミディアムレアステークの完成。以上だ」

ボタンを押すとバトンの先つちよに青白い光がバチバチと音を立てて灯る。

そもそも僕が許可を出すまで武器のセーフティは外れないようにしてあったので使えないのは仕方がない。

「フライデー、武器のロックを解除しろ」

『了解しました』

フライデーに武器のロックを解除させ、手をパンパンとたたいて生徒たちの注目を集める。

「いいか諸君。今から君たちが持つのは武器だ。人の命なんてたやすく奪える。今回は君たちを信用して渡すが、冗談でも人に向けて遊んだりしたら二度と触らせないからな！」

僕の言葉に生徒たちも真面目な顔で頷く。

これなら大丈夫そうだ。

生徒たちが各々バトンを持って、氷漬けの兎に向き合う。

ちなみにぷっちは僕は僕があるえと話したりしてるうちに他の場所へとモンスターを探しに行った。

「う……いざ殺るとなると、中々きついね……」

「うん……つぶらな瞳がまた……キューキュー鳴いてるし……」

生徒たちは可愛らしい見た目をした兎相手に戸惑っているようだ。なおさら剣にしなくてよかったな。

電気バトンにしておいて正解だった。

「お先にいいかな？」

戸惑う生徒たちの中、あるえが前に出ると兎の周りに集まってた生徒たちが頷いて一歩引く。

みんなが下がったことを確認すると、兎の首筋にバトンの先を当て……。

「今夜は兎のステーキだー！」

……僕のさっきのセリフが気に入ったのか？

あるえがキメセリフと共にバトンのスイッチを押し……。

「グガゲゴ!!」

「「えっ」」

兎はこの世のものとは思えない断末魔と共に、顔中の穴と言う穴からいろんな色の液体を泡状にしてあふれださせ、ボタボタと音を立てて地面に体液の水たまりを作っていく。

「ぐぼオオオオ……」

地獄の底から聞こえてきそうなうめき声をあげながらパチパチと音を立て、顔中から未だ垂れてくる液体を蒸発させて兎はついに息絶えた。

最後に誰かがつぶらな瞳と評していた目玉がでろりと顔から流れ出て、地面にできたグツグツの体液のスープの上に具とでも言わんばかりに落っこちて彩を与える。

……。

威力の調整をミスった。これじゃ武器で切り殺すよりはるかに酷い。

周囲の空気が凍り付き、まるで時間が止まったかのように静かになる。

やがて生徒たちが震えだし……。

「わああああああああー!!」

「ひいひいひいひいひいひい!!」

「いやああああああああー!!」

「きゃああああああああー!!」

一斉に四方八方へと走って逃げて行った。

「待て！ 待ってくれ！ 次はキッチンと即死するように威力を調節する！ 危ないから森の中を走るな！」

「ドン引きですよスターク先生……何をどうしたらあんなおぞましい殺し方ができる武器が作れるんですか……魔王軍でもあんな兵器作りませんよ……？」

逃げずに横にいたためぐみんな顔を真っ青にしながら言うてくる。

この場から逃げず残ったのはあるえとめぐみん、そしてゆんゆんだけだ。

「きゆう」

……そのゆんゆんも白目をむいて倒れてしまった。

めぐみんが慌てて介抱に向かう中、あるえだけはその場に立ち……。

「なるほど……威力の調節によっては生き物をこんな風に殺すことも可能と……悪役の残虐性を示すシーンに使えるかもしれないね……」

興味深そうにメモを取っていた。

凄いなこの子……。というか、あるえが僕から得たネタを元に書いたメモの内容が、僕の作った武器で苦しみがいて死んでいく兔というのがなんとも言えない。

突如勃発した大惨事だったが、あつけにとられてる時間はない。リーダーを頼りに生徒を集めて授業の再開をしなくては。

あまりヘタなことをやらかしていると本当にクビになりかねない。安易に受けるべきではなかったな……。

「フライデー！ 最短ルートを割り出せ！」

『計算中……計算完了。三時の方角、ねりまき様から保護していつて下さい』

レーダーに表示された光の線に沿うように、推進リパルサーを噴射して片っ端から生徒の元へ向かう。

まずはねりまきからだ。

「おーい！ ねりまき！ 安心してくれ！ 次はちゃんと即死させる！ 苦しめないようにするから戻ってこい！」

「ひいひいひいひいーっ!! そのセリフを言いながら飛んで来るのはめっちゃ怖いんだけど!? こ、こないでえええええー!!」

波乱万丈の初日が始まろうとしていた。

第7話 紅魔式魔法授業

逃げ惑う生徒を何とかなだめ、再び集めた時にはカンカン顔のぷつちんに生徒とまとめて説教を食らう羽目になっていた。

ちなみにグツグツのシチューになった兎の遺体は、生徒の目に触れるとまたパニックを起こしかねないと判断してミサイルで木っ端みじんに消し飛ばした。ミサイルだって無限じゃないんだが……。

「スターク、どこで何をしてたんだ……？」

「あー……僕の武器のせいでパニックになって散らばって逃げた生徒たちをかき集めてたんだ」

「鍛え抜かれし紅魔族を狂気に陥れる呪われし装備……だと……」

「何が君の琴線に触れたのか知らないが、僕の武器を呪われた装備扱
いしないでくれるか？」

なぜか電気バトンに妙な興味を示し始めたぷっちんを落ち着け、状況を説明する。

事の成り行きをひとしきり説明すると、彼はため息をつき始めて。

「言っておくが、このあたりに生息しているのはすべてモンスターだ。

紅魔族たるもの、生まれ持ったその魔眼が欺かれるようなことがあつてはならん。その兎は一撃ウサギラブリーラビットと言っただな、無垢で無力な生き物の

ようにふるまい、油断したところをその角で一突きにしてくる凶暴な肉食モンスターだ」

かわいい顔してなんて悪辣なんだ……。その話を聞いて、めぐみんに叩き起こされたゆんゆんも青い顔をしている。

この世界は案外世知辛いのかもしれない。

分布するモンスターの凶鑑を念入りに確認する必要があるな。

「というわけだ、だいたい時間を食ってしまったが授業を再開する。この辺のモンスターは俺があらかた凍らせておいた。各自グループを作って」

散開。と、言おうとしたのだろうか。

その言葉は、バサリと黒い何かが羽ばたいて着地した音に遮られた。

「あ、悪……魔……？」

それは、生徒のだれが上げた声だったか。

降りてきたそいつの見た目は、まさに悪魔。

鋭い爪に漆黒の毛皮、コウモリを思わせる羽に、嘴のついた爬虫類面の二足歩行生物。

「先生……！」

生徒達の中から不安げな声上がる。

僕とぶっちゃんは安心させるために漆黒の化け物と生徒たちの間に立った。

「スターク、お前の知り合いか？」

「僕の知り合いにコウモリモドキはいない。君の女房って線は？」

「バカ言うな。俺の女房はこんな優しそうな顔してない」

僕とぶっちゃんの軽口のたたき合いに、後ろで待機してたゆんゆんから。

「言ってる場合ですか!? そもそも先生未婚でしょう!？」

「ゆんゆん、減点五だ。敵を前に軽口は必須だと前に教えただろう?」

「えっ!？」

「そういうこと。僕からも君に減点五。合計減点十だ」

「ええっ!？」

「そうだよ、ゆんゆん。戦う前の口上を疎かにすると命につながるんだよ。しかしなるほど……ペアでやるやり取りもあるんだね。勉強になる……」

「納得いかない……まるで納得がいかない……」

メモを必死にとるあるえと、ぶつぶつ言いながらうなだれるゆんゆん。

自分で言っておいてなんだが僕も納得いかないと思う。だがノットの方が楽しそうだと思つたし、実際気がまぎれたのでぶっちゃんと拳のハイタッチもする。

鋼鉄の拳とハイタッチは痛かったのか、自分の拳を押さえて少し呻くも、悟られまいと真顔を保つぶっちゃんがみていて面白い。

そんな風に遊んでいると、目の前にいる悪魔の挙動がおかしいこと

に気づく。

目の前に立ちはだかっているのに、まるで僕らに興味がないみたいだ。実際僕らと目を合わせずに、僕らの奥の生徒たちをガン見している。

いや、生徒たちというか……。

「あ、あの……先生方……確かに良い口上の掛け合いだったとは思いますが……その、その悪魔が二人に目もくれず、めっちゃ私のことを凝視してます……て、いうか……」

そこまで言ったところで、目の前の悪魔みたいなモンスターが羽を広げて僕らを飛び越え、めぐみんの方へまっすぐ突っ込んでいった！

「ああああああ！ 来てます！ 私の方に来てます!!! たすけあああ

あああああ!!!」

「おっと」

めぐみんの元へ到達する前に推進リパルサーを足と背中から照射して空へと上がり、モンスターの足を背後からつかむ。

そのまま僕とぷっちゃんが立っていた場所の前に叩きつけ、掌から攻撃リパルサーを照射して胸に風穴を開けた。

「「おおおー!」」

モンスターが声一つ上げることもなく動かなくなったところを見て、生徒たちから歓声が上がる。

これでさっきのが帳消しになってくれたらいいが。

「悪いなぷっちゃん。初日ぐらいは僕にカッコ付けさせてくれ」

「ま、まあ……良いだろう……それにしても……掌から無詠唱で熱線を出すとはどういう魔法なんだ……? ブレス系……? いや、というか……魔力を微塵も感じないのは一体……?」

興味深そうに、なおかつ難しい顔をして唸るぷっちゃん。

紅魔族は知能が高いと聞いたし、説明したらある程度は理解してくれるかもしれないな。

実際昨日図書室で見ためぐみんの数値はすさまじいものだった。

ここにスタークインダストリーズがあつたら即スカウトしてるレ

ベルだ。

「さて、邪魔者も倒したことだし今度こそ授業再開か？」

僕のその言葉に、ぷっちは真面目な顔をして頭を横に振った。

「いいや、さすがにこれは異常事態だ。こんなモンスター、この辺りじゃ見たこともない。そもそも、里の周辺に空を飛べるモンスター自体いないんだよ。授業は中止だ。生徒を教室に返す」

▽

——窓越しに降り注ぐ昼の日差しが図書室を明るく照らし、パラパラと紙をめくる音が室内に響く。

「なあ、君達帰らなくてよかったのか？ 担任教師の言うことくらいちゃんと聞いてやれよ」

「別にいいでしょう。今から家に帰ってもすることが無いのです。それに、もう片方の先生が今ここにいるのなら安心です。さあ、上級魔法について教えるので鎧の変形を見せてください」

「それもいいが、その前に……そっちで本読んでるのは？」

僕の言葉にびくりと体を震わせた族長の娘、ゆんゆんに視線をむける。

「私は……えっと……その……」

「ゆんゆんは私を帰りに誘おうとしたのはいいものの、私が図書室に行くとは知らず、帰ろうとも言い出せずになんとなくここにいます」

「そ、そんなわけじゃないから!! ただ暴れん坊ロードの続きがみたくて……」

「ふにふらとどどんこがあなたを帰りに誘おうとしてましたよ？ ゆんゆんがすぐに私の後ろについてきたため、言い出せなかったようです」

「ええっ!？」

「わかってたのに何で言ってくれなかったの!？」

「別にいいではないですか。あの二人を悪く言うつもりはないですが、あまりいい噂を聞きませんし」

娘っ子二人組が仲良くコントをしている。

かましいい図書室だ。

だが今朝授業前に確認した成績表によると、この二人はクラスの首席と次席。

上級魔法を教わるのにこれほど適した人材と機会もないだろう。

僕が席を立って窓を開けると、そこからスーツが軽やかに侵入し、図書室に不似合いな金属音を響かせて床に着地した。

その様子を見ためぐみんとゆんゆんが紅く目を輝かせ、ほうと唸る。

「それじゃ、コントはおしまいにして授業といこうじゃないか。昨日見た本じゃ得られなかった知識として……まずは各上級魔法の射程や弱点、詠唱の内容と言ったものを教えてくれないか？」

「そのくらい、お安い御用ですよ。では、なにかから知りたいですか？」
僕は昨日ある程度調べ、危険だと判断した魔法を次々と挙げていった。

——風の上級魔法。

「《トルネード》ですか。竜巻を発生させる魔法で、対象を空へと巻き上げてから地面に叩きつけます。無事に着地できる手段があればそこまで脅威ではないですが、追撃を非常に受けやすかったり、この魔法で前衛が飛ばされてる間に後衛に素早い敵がなだれ込むなど、けん制に使われることが多いです。弱点は重い鎧を装備している相手を巻き上げるのが難しい事と、長続きさせるには大量の魔力が必要なことです。鎧を着たスターク先生が危険視している理由は、飛んでいる間に食らったら空中での制御が乱されるからですか？」

「そういうことだ。スーツ、アームミサイルのポーズ」

僕の言葉を聞いてスーツが拳を前方に向ける。そしてシャキンツと金属音を立てて前腕部のミサイル発射機構が展開した。

「ふおおおおお!!」

——炎の上級魔法

「それは《インフェルノ》っていいいます。広範囲を焼き尽くす業火の魔

法です。単純かつ強力で、対抗手段を持ってないとまず大ダメージです。相手からすれば意思を持った火の海が襲ってくるような光景なので、敵をパニックに陥れることもできます。弱点は、放った術者の視界が炎でふさがってしまうので、敵がもし回避していたらそれを見破るのが難しい事ですね」

「実際、土の中にもぐって逃げたモンスターに気が付かず、地中からの不意打ちでやられた魔法使いの例があります。他にも、正面の前衛にわざとインフェルノを撃たせ、術者の視界がふさがっているうちに側面から回ってきた敵が術者を袋叩きにした例なんかもありますよ。使う際は敵の位置の把握と仲間にも側面を守らせることが大事ですね」
「なるほど。フライデー、スーツの各パーツの稼働チェックだ。補助翼も忘れずチェックしろ」

『了解しました』

ゆんゆんとめぐみんに魔法について教えてもらい、対価のスーツシヨールが始まる。

フライデーによるスーツのメンテナンスだ。

ボディの各パーツを全て動かし、どこかに負荷がかかってないかなどをチェックしていく。

これだけ聞くと地味に聞こえるが、全身の細かいパーツがカチャカチャと動く様はなかなか壮観だ。

「おおお……」

二人とも満足そうに何より。

——光の上級魔法

「《ライト・オブ・セイバー》ですね。術者の力量によってはなんでも切り裂くことができると言われていた上級魔法で、我々紅魔族が好んで良く使います。かつて魔王城の結界をこの魔法で強引に引き裂いて侵入した魔法使いがいたとかいないとか。弱点は射程が非常に短く、後衛職であるはずのウィザード系が近接戦闘を強いられることでしょうか」

「だが、裏を返せば敵に接近されたときの対抗手段にもなる……か？」

「そういうことです。紅魔の里には魔法職しかいないため、肉体強化魔法でドーピングして切り込んでいく輩もいますが……ところで、次はどんなギミックを見せてくれるのですか？」

「スーツ、ホバリング」

僕がそう言うと、スーツが飛行態勢に入り、両掌と両足から推進リパルサーを照射してゆつくりとそのボディを浮かせる。

いつものホバリングの姿勢だ。

めぐみんは、リパルサージェットの風圧でローブをたなびかせながら。

「……なんというか、珍妙なポーズですね。正直ダサイです」
「!?」

——それから一通り魔法について教えてもらい、スーツの変形、ポージングショーも終えた頃。

外はすっかり夕方になり、図書室を紅く染めていた。

「ぎつとこんな感じですかね。いやあ、良いもの見ました」

「本当に、すごい鎧でした。いったいどここの技術なんだろう……」

「おや、ゆんゆんにもあれをかつこいと思う感性があつたのですね。少し安心しましたよ」

「わ、私だって別に紅魔族のセンスの何もかもが理解できないわけじゃないわよ!？」

「その辺は腰に短剣差して登校してる君を見れば分かる」

「ううっ……これは……と、友達と買ったものだし……それに、見た目もオシャレで気に入ってるし……」

そう言いながらめぐみんの方をちらちらとみるゆんゆん。

友達という言葉を肯定してもらいたいらしい。族長が言っていた、友達が少なすぎて色々拗らせかけているという話は本当みたいだ。

だがめぐみんはどこ吹く風で。

「完全に危険人物のそれですよね」

「め、めぐみんに危険人物って言われた……!？」

「そうだ、君のその短剣、刃を高速振動させて岩でもバターみたく切れ
るようにしてやろうか?」

「物騒すぎませんか!? いらないですよ!」

「じゃあ……エアコンはどうだ?」

「えあ……? それもいりませんよ!」

僕のスーツは彼女も気に入ってくれたようだが、僕自身にはどうも
苦手意識があるようだ。

まあ、初日でだいぶやらかしてしまったので、それも仕方ないと言
えば仕方ないのだが……。

「冗談の通じない子だ。友達できないぞ」

「?!?!」

「おー……スターク先生、ゆんゆんにそれは禁句ですよ」

僕の言葉に一気に涙目になるゆんゆん。

友達という言葉にこんなに敏感だとは……。

将来友達がどののと言うだけでホイホイ言うことを聞いてしまわ
ないか心配になる。

少なくともNYでは三日と生きていけそうに思えない。住んだ初
日に路上で売ってる偽のロレックスなんかを買わされて大損こいて
そうだ。

「悪かったよ、ゆんゆん。実は僕も友達が全くいないんだ」

「そ、そうなんですか!? なんか、気さくに話して友達とかもすぐ作っ
ちやうんだらうなとか思ってたのに……」

ものすごく意外そうな顔をしているが、そのうちゆんゆんに友達の数
は越されてしまうんじゃないだろうか。

「正直言っって片手で数えるくらいしかない。その友人も今は遠い彼
方の国にいるからな。実質ゼロ人だ」

「スターク先生も、友達がいないんですね……」

さっきまで警戒交じりの目で僕を見ていたゆんゆんが急に仲間を
見てくるような目を向けてきた。

何故だろう。とても複雑な気持ちだ。フォローの気持ちで言った

だけだったんだが……。

「どうして僕には友達ができないんだろうな？ 別に欲しいわけでもないが……」

「気さくといえれば気さくですが、それ以上に皮肉や嫌味たっぷりのポイズンスライムばりの毒々しい性格のせいではないでしょうか」

「Wow、実に素敵な模範解答だ。減点十」

「ええっ!? なんで正解を言って減点されるんですか!? そういう所ですよ！ そういう大人げないところも原因ですよ！」

机をバシバシ叩いていきりたつめぐみん。

自分でもわかつている事とは言え、いざ人に言われるとイラツと来るものだ。

このまま三人で軽口の言い合いなり、おしゃべりしていたい気もするが、この後も予定がある。

「落ち着けよ娘っ子。もう外も暗くなり始める時間だ。また魔法について知りたくなったら君らに頼んでいいか？」

「はあ……別に構いませんよ。次の変形ショーも楽しみにしています」

「……あー……今日でほとんど見せてしまったな……他にもカツコイイ動きが観たいとなったら、リパルサー光線で校舎中が穴あきチーズみたいになるが……」

「あの……冗談です。十分見せてもらいましたし、別に魔法について教えるくらい構わないのであまり物騒なことは言わないでください……やりませんよね？」

もちろん冗談だが、彼女達を喜ばせるためにまたMk. 5や自動キヤッチ型スーツを作ってもいいかもしれない。

Mk. 3、Mk. 4の装着に使っていたアームをそのまま教室の床に移植してみるか。

あるいは昔スターク・タワーの最上階に設置していたMk. 6の着脱装置を、僕専用の廊下を作って仕込むのも悪くない。

むしろ全部やってもいい。多分何しても怒られなさそうだ。

教壇に上って出席を取っている間にアームが床から出てきてMk.

4 装着。

授業の始まりと共にスーツケースを展開してM k. 5 装着。

チヨークを持つ瞬間に窓から自動キャッチ型スーツが飛んで来て腕を包む。

夕日が差し、アームが伸びる廊下ですれ違いざまに帰りの挨拶をしながらM k. 6の装備取り外し。

うーん。大喝采間違いなしだ。

「あの……なにうつむいて一人でニヤニヤしてるんですか？ すつごく不気味なんですけど……」

「いや、なんでもないさ。ちよつと面白い事を考えていただけだよ。そろそろお開きにしよう」

校舎改造計画は楽しそうだが、そんなのやったらやったで授業が進まなくなりそうだな。保留にしておこう。

でもいつかはやってみたい。

改造に適した時期などを考えながら、図書室での勉強会を解散させ、帰路に着いた。

帰りに族長の家に寄って、十一枚の紙を渡し、とある頼みごとをしてから。

——その日の夜。僕はサキュバス・ランジェリーで慌ただしく外へ出る準備をしていた。

出された晩飯を急いでかきこむ僕の姿を見て、不思議そうな顔をするねりまきとその父親。いつもはもつとゆつたりと味わって食べるもんな。

「スタークせんせー……。もつとゆつくり食べたら？」

「そうしたいところだが、これから王都に向かうんだ。ゆつくりして居る時間はない」

「えっ、王都？ 一体何しに……？」

「半分ビジネス、もう半分は学校関連だ。どっちも兼ねてるともいえるが……」

そう聞いてねりまきは興味深そうに目を細める。

「おっと、内容は教えてやれないぞ？ ネタバレはしないからな？」

「スターク先生、お酒飲む？ いいお酒あるよ？」

「これからビジネスで王都に行くって言っただろ。口を滑らせようとしても駄目だ」

「ダメかあ……」

作戦が失敗して子供っぽくぶー垂れるねりまき。

楽しみは取っておくべきだ。

「よし、腹も満たしたことだしそろそろ行くよ」

「先生、そのスーツとても似合ってるよ。仕事できそうな感じがする」

「おだてても駄目だ。お代置いてくぞ」

「これもダメかあ……」

褒め殺し作戦も失敗して悔しそうな顔をするねりまきを尻目にスーツのネクタイを締めなおす。

今僕が着ているのはアイアンマンスーツではなく、普通のスーツだ。高級感あふれるオーダーメイドのトムフォード三つ揃え。

ビジネスとなれば正装をしないと。

僕が身支度を整え出口の扉に手をかけるのと同時に、扉についているポストから紙が投函された。

おっと、思ったより早かったな。

紙に掛けられた魔法によって、ポストからねりまきの手元へと紙がひらひら舞いながら向かっていく。便利だな。

ねりまきは紙を取り。

「あれ？ 学校の連絡事項用の紙だ。こんな時間に？ どれどれ……えっ」

その紙は僕がないときに見てほしかったものなので、そのままそそくさと外へ出る。

後ろからねりまきが紙に書いてあることを朗読する声が聞こえてきた。

「【明日の午後の授業は課外授業なので、校庭に集合しておくこと】……スターク先生？」

「おやすみ」

ねりまきにあれこれ聞かれる前に入り口に置いてあるアイアンマンスーツに身を包み王都へと飛び立った。

地図を見た限り、紅魔の里から王都はそれなりに近い。里の上空まで上がった時点ですでに街の明かりの煌めきが視界に映っていた。

いざ、田舎の村から国最大の繁華街へ。

▽

——王都上空に到着した僕は、大きく開けた石畳の道路の上に着地する。

「Wow……」

視線をあげると目の前に映ったのは視界の端から端まで覆い尽くす巨大な城壁。

今までアクセルに紅魔の里という田舎町ばかり見てきたので、目の前にたたずむ馬鹿でかい城壁に思わず感嘆の声が出る。

と、入口の門へと向かおうとした時だった。

『『ファイアーボール』ツツツ!!』

『ボス、後方から高熱の飛翔体が接近してきます!』

『!!』

スーツが戦闘モードにはいり、HUDのレーダーに背後から迫り来る火球が表示される。

そのレーダーを頼りに、振り向きざまにリパルサーを火球めがけて放った。

暗い夜の道路の上で一条の閃光と赤い光球がぶつかり弾け、辺りを一瞬明るく照らす。

「貴様っ!、そこで止まれっ!」

誰がこんな真似をと思いい火球が放たれた方向を見ると、杖を構えた男が1人と槍を構えた全身甲冑の二人組がこちらに敵意をあらわにして叫んでいた。

「ゴーレム風情が……王都に何の用だ！」

……。

ああ、そうだった。さつきまで紅魔の里にいたから忘れてた。僕は、初めてアクセルの冒険者と会った時のことを思い出す。

……このスーツでうろつくどゴーレムと勘違いされるんだつたな。里と外の違いを再認識しながら、ひとまずマスクを開けて顔を見せる。

「落ち着け、僕は人間だ。いきなり魔法をぶち込んでくるなんて過激すぎやしないか？」

「ハッ……に、人間!? そ、そんなばかな……!?!」

杖を構えていた男はありえないといった感じで、左右にいる甲冑に身を包んだ騎士たちと何やらしゃべっている。

めんどくさい……。いや、そうだ。人間であることを証明するのに一番手っ取り早い方法があるじゃないか。

アクセルに降り立った時とはわけが違う。

そのままスーツの前面を開き、今だ攻撃的な雰囲気を出し続ける三人組に対し。

「ほら、冒険者カードだ。ちゃんと人間だろ？」

自分の懐から冒険者カードを出して掲げてみせた。

アイアンマンスーツの前面が展開したことにもギョツとした様子だったが、騎士が持っていたランプの光を近づけ、僕のカードの情報を見るやいなや、顔を青ざめさせ……。

「もも、もうしわけない!! 目や胸が光っていて、てつきりゴーレムかと……!」

成長を感じる。カード一つでここまで楽になるとは。

「気にするな、きれいな花火で歓迎されてうれしかったよ」

「すいません……」

僕の皮肉に縮こまる騎士たち。

からかうのはこれくらいにして本題に入ることにする。

「これも二度目だ。別にいいさ。ところでギルドの位置を知ってるか？」

「ギルドなら、この門から入ってまっすぐ行けばすぐだが……なあ、さつき空から降りてなかったか……？」

「まあな。またここに来るから、次この見張りをする奴には空飛ぶ鎧を着た男がここに着地しても攻撃するなど伝えておいてくれ」

「あ、頭がおかしい奴扱いされそうだ……」

頭を抱える騎士たちを尻目にスーツを再び装着して門をくぐり、ギルドの方へと向かっていく。

街灯が夜道を明るく照らし、人々の活気ある声が飛び交い、そこらかしこにある出店がおいしそうなにおいを漂わせている。

ねりまきのところの宿で食事してなかったら、フラフラと寄ってしまっていたかもしれない。

にぎやかな王都の街中をしばらく歩くと、ギルドの紋章が描かれた旗を掲げている建物を発見した。

あれがギルドだろう。アクセルとはケタ違いの大きさだ。

すれ違う人々や騎士にチラチラと見られたが、マスクを開けていたためかゴーレム扱いされることはなかった。

ギルドの門を開けると、酒や料理の匂いが混じった熱気が頬を撫でた。大柄の男たちが酒を酌み交わして笑いあっていたり、ウェイトレスを口説いていた。少なくとも外より五度は温度が高い。

規模は違えど、アクセルの酒場とそんなに変わらない光景に少し安心感を覚える。

よく見ると日本人のような顔付きをした人もチラホラ見えた。アクアが言っていた転生連中だろうか。

「いらっしやいませ！ お食事ですか？ クエストの受注ですか？」

美人のウェイトレスが営業スマイルで話しかけてきた。

「クエストの確認をしたい。どこまでできる？」

「こちらどうぞー」

案内されるままに奥にあったデカイ掲示板に向かう。

僕が初めて見る顔であるためか、座って食事をしていた連中がこっちを見ては、興味をなくしたようにまた食事に戻っていく。

案外ギルドの酒場だとアイアンマンスーツを着ていても妙な目で

見られないな。面倒が無くていいような、すこし寂しいような。

「ごゆっくりどうぞ。メンバー募集の張り紙を張られる際は向こうの掲示板をお使いください」

「助かる」

僕が礼を言うと、ウエイトレスは笑顔で会釈し再び酒場の方へと歩いて行った。

さて、アクセルと比べてどんなクエストがあるだろうか。

掲示板にはあらゆる依頼書が張られまくれ、床に紙束をぶちまけたかのような様になっていた。

この時点からしてアクセルとは大違いだ。僕はその一枚一枚を確認していく。

——南東の村を滅ぼした魔龍の討伐。 注！ レベル五十以上の

上級職のみで固められたパーティーが三度全滅しています！ ※レ

ベル制限 レベル六十以上。

——【血濡れの亜神】の討伐。 注！ 生命力が高く、頭を切り飛

ばしても死ななかつたとの報告あり。 ※レベル制限 レベル六十

以上。

——起動要塞デストロイヤーの調査 レベル制限 レベル二十以

上。 現在北西方面を移動中とのこと。

——特別指定モンスターのフェンリル、別名【セイバー・トウリス剣牙狼】の討伐。

注！ 派遣された冒険者及び騎士団が一人も生還していない為、情報

がほとんどありません。 ※レベル制限 レベル七十以上。 ※人

数制限 十名以上。

……物騒なのばかりだな。

僕がここに来た理由は、明日課外授業という名目で生徒達を王都に連れてきて、クエストを受ける様子などを見せようと思ったからだ。

アクセルでもよかったのだが、紅魔族のようないきなり上級魔法を覚えてしまうイレギュラーは、アクセルにはいかずに最初から高レベルのモンスターがびこる地域を拠点にしようらしい。

拠点にしたギルドのレベル制限に引っかかるなら周囲の森でモンスターを適当に倒して経験値を稼ぐまで。

なら、最初から最前線で活気ある王都の方が良いだろう。それに、簡単すぎるのだとつまらない。

とはいえ、今朝の経験からあまり恐ろしいものは見せたくない。第一レベル制限のせいで受けられないものがほとんどだ。

低レベルでも受けることができ、残酷な絵面を見せなくても済みそうで、なおかつ見て面白くなりそうなクエストはないものか。

あれこれ考えながら、掲示板に広がる依頼書の海を一枚ずつ確認していくが、その量の多さにうんざりし、目当てのものが見当たらないことにイライラし始めていた。

書類とにらめっこするのは大体ペッパーに任せていた弊害がこんなところで……。

特に激しく動いてるわけでもないのに疲労感を感じていると、一つの依頼書が目にとまった。

——【銀髪の義賊】の捕縛。 注！ この依頼を受ける場合は、この依頼書を持って王城まで足を運ぶように。

第8話 SUPER HERO LANDING!!

——銀髪の義賊の捕獲。

クエストを受けることにしたのはいいものの、依頼書にはターゲットについての詳しい情報が書いていなかったため、その辺の冒険者連中からどんな奴なのか詳しく聞きまわることになった。

依頼書に書いてあった王城で話を聞いてもよかったのだが、やはり最低限知識は持つておきたい。

そうして聞きまわって分かった事といえば……。

神出鬼没にして暗中飛躍。王都の騎士団や警察が捜査を行っているのも関わらず足取り一つつかめないようだ。

ちなみに、目撃者によると銀髪の義賊はかなりの美少年だとかないとか。

そんな銀髪のイケメン義賊は悪徳貴族が持つ後ろ暗い金を華麗に盗み、エリス教の孤児院にすべて寄付するという、ヒーローのような存在だという事だ。

どうやらこの世界の貴族は犯罪を平気で犯してもみ消したり、身分の違いを悪用して横暴にふるまうなど、ロクでもないのばかりらしい。

多少あくどきは違えど、僕が元居た世界の腐った政府の役員どもと大して変わらないという事だ。

既に僕の中の貴族に対するイメージは最低なものになっている。そんな貴族を懲らしめる義賊を捕まえて良いものかと少し逡巡したが、そいつは捕まえてから考えることにした。

僕なら捕まえた後にこっそり逃がすこともできるだろうし、そもそも他に生徒を喜ばせられるようなクエストが見当たらない。

そんなこんなで、僕は依頼書を持って王城まで来ていた。街中のどこにいても視界に移るくらいにはバカでかかったので迷うことはなかった。

大ききだけなら依然見た魔王城に全く引けをとらない。

入口の門の前で城を見上げてみると、門番であろう甲冑を身にま

とつた二人の騎士の内の片方が話しかけてきた。

「王城に何か御用ですか？ 招待状などをお持ちであればご提示を……」

その柔らかな物腰につい顔をしかめそうになる。

来ているスーツの違いでどうも対応に差があるとは。

アイアンマンスーツを着ていた時は、道行く騎士に妙なものを見る目で見られたものだが。

今の僕は全身ビジネススーツだ。

パリッとしたスーツに身を包んで気分もビジネスモード。

ちなみに鋼鉄スーツの方は人気のない建物の屋上あたりに飛ばして待機させておいた。

僕は門番に言われたとおりに懐から出した依頼書を出して見せる。

「招待状は無いが、これは代わりになるかな？」

「ん……？ これは……え、あなた冒険者なんですか……？」

「僕が冒険者に見えないのか？ ……冗談だよ、見えるわけないよな。とりあえずこの先どうしたらいいのか教えてくれ」

「で、では……これをクレア様の元へ届けてまいりますので……」

そう言い残すと門番は依頼書を持って城の中へと消えていった。

さて、次は応援要請だ。

懐から端末を取り出し、たった一つだけの連絡先に繋げる。

『はーい、クリスだよ。どうかしたの？ もうあたしが恋しくなっちゃった？』

無線に出たクリスは、クスリと挑発的な笑いを無線越しに届けてくる。

この間の仕返しだろか。案外子供っぽい彼女を少し微笑ましく思いながら僕は反撃を開始する。

「ああ、君の明るくて可愛らしい声が聞きたくなってね」

『……それ、今まで色んな女性に言ってきたんじゃない？』

「……バレたか」

僕の反撃はあえなく失敗した。

『大体、そんな齒の浮くようなセリフでなびく人なんて早々いないで

しよっ!』

「前の世界だと大体こんな感じでもイチコロだったんだが……」

『モテモテだったんだね……まつ、あまり気軽にナンパしないことだね。痛い目見るよ?』

そうは言いつつも、その声色はどこか上機嫌そうだ。かわいい声と言われるのに悪い気はしないらしい。

『それで、今回は一体どうしたの?』

「君の盗賊としての知識を借りたい」

『……ほほう?』

今までは女神エリスとしての彼女の知識を聞いてきたので、盗賊のクリスとしての知識を聞くのは初めてだ。

そのせいか、クリスは興味深そうにうなる。

僕は聞きたいことをそのまま口にした。

「銀髪の義賊を捕まえようと思っ」

『ぼばあっ!?!』

端末の向こう側から盛大にむせ返る声が聞こえた。

ボバ? ボバ・フェット? 彼は好きだ。

『ゲホッ! ゲエツホ、ゴホッ!!』

「……大丈夫か?」

『う……うん……なんとか……それで、銀髪の義賊だっけ……?』

「ああ、なんか知っているか?」

『知ってる……うん、知っているよ……盗賊の間でも有名だしね』

「なるほどな。だったら、ここ最近の活動については何か知ってるか?」

正直明日の課外授業で都合よくその義賊とやらが向こうから現れるとは思っていない。

ベストなのは盗みを働いているところをちやうど阻止しての大捕り物だが、別に潜伏先を特定してからの襲撃でも構わない。

アジトを襲撃されて逃げる義賊、追いかけるはアイアンマン。これでも生徒たちは喜びそうだ。悪くない。

『うーん……。と、特に無——』

「まあ、無いなら無いで別に構わないさ。どうせ僕のテクノロジを駆使して探せばすぐに見つかるんだからな。どれだけ優れた盗人かは知らないが、せいぜい授業の資料になる程度は逃げ回ってもらいたいところだ」

『……………ふーん』

急にそっけない返事になったが、それでもかまわず話を続ける。

「ああ、言っただけじゃなかったか。実は銀髪の盗賊を捕まえる様を生徒たちに見せようと思ってるんだ。リアルタイムでね。どうだ？ アイアンマンが王都を賑わす盗賊と壮絶なチェイス…：僕が本気を出したらずぐ捕まってしまうだろうから、多少は手加減するつもりだが…：いい授業になると思わないか？」

『……………へえー』

「……………クリス？」

クリスの様子が何かおかしい。

雰囲気はどこか剣呑だ。実際に会って話しているわけでもないのに、なんだかピリピリとした感じがする。

『あるよ。いい情報が』

声色こそ今までと変わらないものの、僕は奇妙なプレッシャーを無線越しに感じていた。

……………なんだ？ この感じ……………。

『あのね、これは盗賊同士の情報網からなんだけど、銀髪の義賊が狙いそうな悪徳貴族をいくらかに絞っているんだってさ。どうせ捕まえられないけど、取りあえず現れそうところだけでも予想しておくってことでね』

「あ、ああ。それで？」

『その情報を聞いてあたしなりに貴族の情報とか、屋敷の警備状況とか色々調べた結果、エヴルー家っていう、明日にでも狙われそうな悪徳貴族を見つけたんだけど……………興味ない？』

「課外授業は明日だ。もしそれが本当なら実に都合が良いが……………」

『あたしのカンは当たるよ？ それじゃ、また……………』

通話を切ろうとしたクリスを僕は引き止める。

「あー、ちよつと待ってくれ」

『……どうかした?』

どこか不機嫌そうだが、これだけは聞いておかなくては。

義賊の情報について聞くのは殆ど世間話程度のつもりだったのだが、クリスが予想以上に情報を持っていたために話が少し脱線してしまった。

元々クリスに連絡を取った本当の理由は……。

「なあ、明日なんだが……君も授業に出ないか?」

『ふえっ?』

さつきまでの剣呑な雰囲気はどこへやら。無線越しに素っ頓狂な声が返ってくる。

フェツ? ボバ・フェツト? 彼は好きだ。

『えっ……えつと……生徒として? 確かに興味あるとは言ったけど……』

「まさか。先生としてに決まってる。まあ、正確に言えば僕と同じ特別講師だが……課外授業は明日だって言つたら? そこで考えたんだが、生徒を交えて銀髪の義賊対策会議をやるうと思ってるんだ。クエストってのは作戦を考えたりもするだろ? 君たちとクエストをこなしている時もそうしてたしな。だから、生徒たちにクエストに協力してもらおうのと同時に、作戦立案という形でだがクエストを体験してもらおうと思ってるんだ。面白くなると思わないか?」

『あ、あはは……あはははは……』

なにかあきらめたかのように笑うクリス。

一体どうしたんだ。

「なんか笑えるようなことでも言つたか? ジョークを披露した覚えはないんだが」

『い、いや……あたしって、仮にも幸運をつかきどる女神って面も持ち合わせてるはずなのに、どうしてこんな面白いことに巻き込まれるんだらうなってね……』

「……?」

そう言つたため息を吐いた。

確かに女神が盗賊を捕まえる手助けをするなんて言うのもおかしい話かもしれない。

いや、悪さする弟をぶちのめすために地球に降りてきた雷神もいるわけだし、そんなぶつとんだ話でもないのか？

気さくな神様達について頭であれこれ考えてたが、とりあえず思考を切り替えてクリスに答えを聞く。

「で、どうだ？ 君も作戦会議に参加してくれるか？ 君には盗賊クリスとしての知識を披露して僕らにアドバイスしてほしい」

『ま、まあ……それくらいなら構わないよ。ただ、あまり遅くまではだめだからね？ 用事があるから』

「交渉成立だな。大丈夫だ、作戦会議の間だけで構わない。どうせなら君にとらえた盗賊を見せたいところなんだけどな？」

『ふふふ……できたらいいね？ 幸運を祈ってるよ。あつ、テレポーター代は高いから迎えに来てよね？ それじゃまた』

イタズラっぽく笑ったかと思うと、そう言い残して彼女は通話を切った。

端末をポケットの中に入れて、夜空を見上げる。

王城への門付近は街灯と松明の火で明るいが、それでも夜空に光る星々の輝きはしつかり見えた。

「幸運の女神から『幸運を祈ってる』……か。神の祝福だなんだなんてものは信じたことないが……いいことあるかもな」

そんな独り言をつぶやいていると、王城の中へ入っていった方とは別の門番が僕に奇妙なやつを見る目を向けていた。

「なんだ？ これはただの交信魔法の魔道具だ。王都にいるくせに見たことないのか？」

「ハッ。そ、そうでしたか。失礼いたしました。気が触れてしまったのかアクシズ教徒なのかと……」

あの目で見られ続けるのは嫌だったので交信魔法とか適当言ってみたが、まさかあつさり信じてもらえるとは思ってなかった。

そうか、あるのか……交信魔法……。無線機を広めて驚かせようと

か思っていたが、冒険者カードといい、街を照らしている動力源の見当たらない街灯といい、意外とこの世界の技術力は発展しているのかもしれない。

なんて、舌を巻いていると。

「お待たせいたしました。クレア様から許可が下りましたのでこちらへどうぞ」

依頼書を持って門の中に消えていった門番が戻ってきた。

下襟をつかんでスーツのズレを直し、ネクタイを締めなおす。

さて、クエストも商談も成功させなくっちゃな。

▽

「はあ……」

トニーがくれた通信の魔道具をポケットに入れ、星空を見上げながら大きなため息をつく。

目星をつけてた悪徳貴族のところへ盗みに入るのもう少し先の予定のはずだったのだけれど……。

「どうしてこうなっちゃったんだろ……」

思わず愚痴がこぼれる。

いや、悪いのは私だ。聞き流せばよかったのに、ついついその場のノリでトニーの言葉に乗ってしまった。

……本当になんで乗ってしまったのだろうか。

私が銀髪の義賊だとバレたわけでもないのに。

しかも明日は盗賊クリスとして紅魔の里に赴き、特別講師になって自分自身の対策会議に参加するという、とんでもなく頭の悪い事態に巻き込まれることになっている。

これはもはやギャグだろう。

盗賊活動のこと自体秘密にしているけれど、もしこのことをアクア先輩に相談したら大爆笑されるに違いない。

『エ、エリスってば……ププツ……自分で自分の捕縛作戦の会議に出

るとか……ブークスクス!! 超笑えるんですけどー! 今時コントでもそんなの見ないわよ!』なんて言いそうだ。

……うん、声まで聞こえてくる。

まさにコントだけれど、作戦会議に出る事によって相手の手の内をすべて把握できる。

なんだか悪い事してるみたいだけれど、あれだけ啖呵を切ってしまつた以上やるしかない。

でも、思えばこれはいい機会かもしれない。

一週間クエストと一緒にこなして来たけど、彼の本気は見えていない。

転生される前の自分の世界を自分自身の手で救ってきたその実力を、実感してみたい。

彼の本気を見てみたい。

「ふふふ……」

さつきまでため息が出ていたけれど、なんだかやる気が出てきた。

これでも女神のはしくれ。安いプライドと言われてしまえばそれまでだけれど……この世界の先輩として逃げ切ってみせたい。

………捕まっても、事情を話したら許してくれるかなあ。

▽

「到着しました。ここが応接室です」

視界がぐにやりと曲がったかと思うと、瞬きする間に目の前に大きな扉が現れた。

こんな中世ヨーロッパレベルの技術力の世界に、人力以外で動くエレベーターなんて無い。

バカみたいに長い階段を登るハメになるのかと思っていたが、城に入るやいなやデカイ魔法陣が描かれた妙な床の上に立たされ、門番が壁にある小さな魔法陣に触れたらいつ間にか応接室の前まで飛ばさ

れていた。

……テレポートか？

「これは……」

思わず口から出た言葉に、門番の男が笑う。

「ははは、やっぱり驚かれますか。これはそういう魔道具ですよ。貴族でも中々手が出せないような代物でして。室内限定ですが、指定した場所の空間と空間を繋ぐのだとか。私も詳しいことは分かりませんがね」

「空間と空間を繋ぐ……興味深いな……」

羨ましいくらい便利だ。

こんなのがあつたらラボの中の移動もかなり楽になるだろう。

スキャンしたり解体したりして組成を調べてみたい衝動に駆られるが、今は商談だ。

歩いて扉の前まで歩く。

「ああ、最後に」

「なんだ？」

「あの、相手は貴族の方ですので、あまり無礼な態度はとらない方が身のためですよ？ 普段から冒険者と話すことも多々あるので、多少碎けた発言には目をつむつてくれるとは思いますが」

「ご忠告どうも。無礼だと言われたことは結構あるが、それで罰せられたことはないから大丈夫だ」

そう言つてフツと笑い、ノックする。

『入れ』

ドアの向こう側から声が返ってきた。どうやら女性のようだ。美しい声してる。

この世界の常識や身分のヒエラルキーなどについては一週間のうちにクリスやダクネスからある程度教わっていた。

貴族の話になるとダクネスがなんとも言えない顔をしていったっけな。なにか貴族との間にあつたのだろうか。

僕自身もこの世界の貴族についてはあまりよく思っていないが

……。元の世界の時みたいになんかつかり皮肉を言ったりするだけでブチ切られないか少し懸念する。

場合によっては逮捕されたりすることもあるみたいだが……。

なんて、色々考えながらドアノブを握って引き……。

……。

なんだこのドア？ やたら重いんだが……。

大きいドアだとは思ったが、これはちよつと重すぎやしないだろうか。結構な力を入れてるのに全く動かない。

……前の世界の常識が通用するか分からない、そんな異世界での初商談の前に、この僕がプレッシャーを感じているだけでも言うのか？

何考えてるんだ。今時そんなのにビビる男だったか？ 鋼鉄なのはスーツだけじゃないことを……。これなんか下品だな、やめておこう。

よし、もう一度力を込めて……。

「あの、そのドア引くんじゃなくて押すんですが……」

僕は突入するかのよう一気にドアを押して中に入った。

「きゃっ……びび、びびくりした！ なんだ貴様！ ドアはゆっくり開ける!!」

「話聞いてましたか?! どうしてドアをそんな勢いで開けちゃうんですか?! 失礼ですよ!」

後ろから門番の叫び声が聞こえるが、気にしない。

真顔でドアを閉め、目の前の相手と向き合う。

気品の漂う白いスーツを身にまとい、腰に装飾が施された剣を差した金髪で短髪の美人だ。

「失礼。私の国では大事な話をする時程ドアを気合い入れて強く開ける習慣があるもので」

「な、なんとも変わった習慣だな……」

気恥ずかしさといらいらでドアをぶち開けた気まずさを誤魔化すために適当に言った出まかせを信じ、ため息を吐く彼女。自分で言うておいてなんだが、それでいいのか。

部屋の中はというと、豪奢ながらも派手過ぎない装飾で飾られており、程よい上品な高級感が醸し出されていた。

パリやモナコの最高級ホテルのロビーに勝るとも劣らない内装は、一冒険者相手の応接室にしては少しやりすぎな気がしないでもないが、僕的には見慣れた光景の一つなので、リラックスして話ができてうだ。

とりあえず部屋の中央に鎮座する、美しい装飾が施され、氷水の入ったピッチャーとコップが乗っている大きな木製丸テーブルを挟むようにして交渉相手の前に立つ。

良い机だ。これ欲しいな。

「……私の故郷の風習紹介は置いておいて、早速クエストの話と行きませんか？ それと、今回はクエストとは別件で交渉もしたい」

「交渉だど？ 冒険者が交渉とはどういうことだ？」

「私の国の技術を買ってほしい。損はさせません。この国の防衛にきつと役立つと約束しましょう」

「……あなたの国の技術……？ 悪いが、クエストの話より先にそっちの話をお聞かせ願えないか？」

彼女はすこし警戒の声色が混じった口調で質問してくる。まあ、クエストの話をしに来たのかと思っただらいきなり交渉しようなんて言い出したらそうなるよな。

その質問には言葉ではなく、腕時計を取り外して机の上に置き、端末を操作してプログラムの映像を出すという行動で答える。

お決まりのパターンだ。

今回映した映像は、蚊を模した超小型偵察用ドローンや、様々な武装を施した大型の攻撃ドローン、防衛用ターレット、果ては敵の侵入を知らせる生体探知センサーから地雷まで、僕が今までに開発してきた兵器や高度な防衛システムをわかりやすく説明したものだ。

「こ、これは……」

その映像を、交渉相手の金髪白スーツは呆然と眺めていた。

いいね、やっぱり自分が作った発明品を見て驚いている奴の顔を見るのは楽しい。

一通りの映像を見せ終え、腕時計をつけなおして端末をしまい、金髪白スーツに向き合う。

「ここでクエストの話に戻りましょう。私には今とある計画がありません」

「う、うむ……というのは……？」

「銀髪の義賊を、私の国の……いえ、私の技術力の全てをもつて捕らえて見せましょう。そして、捕らえた暁には先ほど見せた私の数々の装備の配備、並びに配備できるだけの資材と資金の確保を検討していたきたい」

そう、これこそが僕の本当の狙い。

紅魔のちびっこたちにクエスト体験をさせつつ、僕の持つ技術を認めさせ、この国の軍事力を上げる事。

義賊捕縛のクエストがあつたのは幸運だった。

今の僕に必要なのは資金と資材。

ラボにある資材だって無限じゃない。オマケについて最近あるものを作るのかなり資材を使ってしまった。

装備の試供品を作って渡す分まで考えたら、もう本当に余裕がない。

何としても認めてもらう必要がある。

まあ、映像を見た彼女の反応からして特に問題はなさそうだが。

その当の本人である彼女はというと。

「……私の一存では決めかねる。だが、さつき見せてもらった装備で義賊の捕縛を行いたいというのであれば構わん。ぜひ見極めさせてほしい。とりあえず名前を聞かせてもらおうか」

「喜んで。私の名前はトニー・スターク。人類随一の知力の持ち主にして、やがてはこの世界を救……」

そこまで言つてハタと止まる。

……。

「……………スターク殿には紅魔族の血が流れているのか？」

「いや……紅魔の里に滞在していたおかげで少し変な影響を受けてしまったようです。お気になさらず」

「そ、そうか……」

里にいたわずかの間に色んな紅魔族に名乗られたおかげか、自然に紅魔族風の挨拶をしてしまいそうになった。

たった二日の滞在でこんなことになるとは……。

「では、クエスト内容の確認に入らせてもらう……が、その前に私の名前を覚えておこう。私はこの国の大貴族であるシンフォニア家の長女にして、王女様の護衛を務めているクレアと言うものだ」

自慢っぽく名乗りを上げたクレアは、そのまま話を続ける。

「それで、捕まえる算段は立っているのか？」

「狙われているのはエヴルー家という悪徳貴族で、侵入は明日の夜だそうです。私のパーティーメンバーに情報通の盗賊が居ましてね。彼女なりのツテやカンだそうですが……私は信用に足ると思っと思っています。ああ、これ注ぎましょう」

そうやってテーブルに腰を掛け、コップに水を注いでクレアに渡す。

「おい、テーブルに腰をかけるな。無礼だぞ」

部屋の隅のほうから鎧を身にまとった騎士が怒号を飛ばしてきた。

僕は腰かけた姿勢のまま首だけ騎士の方に向けて指を指し。

「さっきまで置物かと思ってたぞ」

「なっ……？　ふざけた男だ……これだから冒険者は……」

クレアはいきり立つ騎士を、手をつきだすことで制止させる。

「この程度構わん、気にするな。そうか、エヴルー家か……うむ、良い見立てだな。あそこは黒いうわさも立ってるし、金をケチっていて警備兵のレベルも低い。なるほど、わかった。では、今回は少し特殊な例ということで処理をし、技術提供の」

と、そこまで言った時。

けたたましい鐘の音が静寂の夜を切り裂いた。

何事かと身構えると、アナウンスのような機械を通した声が部屋の中に響き渡ってくる。

『魔王軍襲撃警報、魔王軍襲撃警報！　騎士団はすぐさま出撃。高レベル冒険者の皆様は協力をお願いします！　現在巡回部隊が襲撃を

受けています！一刻も早く救援に向かってください！」

そのアナウンスを聞くと部屋で立っていた、さつきまで置物だと思つた鎧の騎士たちが次々と部屋から出て行った。

その様子を見たクレアがため息をつく。

「全く……また性懲りもなく……まあ、夜襲部隊なら数も少なめだろう……すまない、少し待っていてくれ。すぐに片付くはずだ」

「あー……さつきの放送を聞く限り、敵がすぐ近くまで攻めてきているのでしょうか？ 私が力を貸しましょうか？」

「……？ 貴方は高レベルの冒険者なのか？」

クレアが不思議そうに尋ねてくる。

今夜は幸運続きだ。明日クリスに会ったら感謝の一言でも言っておくべきかな？

「レベルは高くはありませんが……戦うだけの力なら持っています。失礼、あそこのバルコニーに出ても？」

「あ、ああ……」

よくわからないといった顔をするクレアを尻目に、ドアを開けてバルコニーにでて下を見て高さを確認する。

Hmm………よし、高さは十分。

確認を終えた僕は、そのまま数m後ろに下がる。崖から崖へと飛び移る準備をするかのように。

「えっと……あの、スターク殿？ 一体何を——」

「また後でお会いしましょう」

そう言つて僕は、助走をつけ……。

華麗にバルコニーからダイブした。

「はっ……えっ……はああああああっつっつ?!?!? ス、スターク殿おおおおお!!」

そんなクレアの絶叫を聞きながら、地面めがけて猛スピードで落ちていく。

が、バルコニーから飛び出すとほぼ同時にすぐ下まで飛んで来ていた僕のスーツ、Mk. 45が素早く僕の体を包んでいく。

地面が目前まで迫ったところでスーツの装着を終え、スレスレのところでもりパルサーを照射してピタリと止まり、ホバリングする。

顔を上げた時、最初に目があったのはさつき応接室まで案内してくれていた門番だった。

「……………」

時が止まったかのように彼は固まっている。

気まずいな。なにか挨拶でもしておくか。

「Good evening
こんばんは」

そう門番に言つて、猛スピードで上まで駆け上がった。

「あああああつ！ うわあああああつ！！ 異国からの客人が急にバルコニーから投身自殺した！ だ、誰か来てくれ！ ああつ！ 大変な……………事に……………」

バルコニーの辺りで、まだ叫びまくっていたクレアは、目をバックに夜空に浮かぶ僕の姿を見るやいなや絶句する。

僕はマスクを開けて、目玉が飛び出そうな程瞼をひん剥き、鯉のように口をパクパクさせるクレアの顔を直接見る。

爆笑しそうになったが、とりあえずその衝動を封殺して。

「ああ、貴方に言い忘れたことが一つ……………」

ニヒルな笑みを浮かべて。

「これが私の戦う力のほんの一部です。ではまた」

そう言つてマスクを閉じ、たくさんのかがり火が見える場所まで飛んで行った。

「殺人タイムだあーっ！」

「プリーストを呼べーっ!! 流血患者だあーっ!」

上空から見たそこには、ぎつと三十足らずの騎士団が二百はくだらない魔王軍の雑兵相手にかなりの劣勢を強いられていた。

「ぐっ……全員持ちこたえろ! すぐに冒険者たちが来る!」

声を張り上げたのは部隊長だろうか。

大声で助けが来ることを叫び、仲間たちを鼓舞している。

だが、魔王軍の部隊の中で一際派手な鎧を身にまとい、装飾でギラギラしている武器を構えたボスらしき奴がニタニタと下品に笑いながら。

「だあーはっはっは!! そんなときにやすでに俺達は逃げるに決まってるだろボケがあー! 今回も罵声を浴びせながら逃げて後味悪くしてやるぜ! その時にはもうお前たちは死んでるけどな!」

「お前たちは死肉の塊だあーっ!!」

ボスの絶望的な言葉に合わせるかのように、部隊の雑兵たちが悪辣なセリフを叫んでゲタゲタ笑う。

……あんなセリフ今時B級映画でも聞かないぞ。

「クソツ、これだからあの敵指揮官は大っ嫌いなんだ! ことあるごとにムカつくセリフ吐きやがって! お前なんていつかどっ捕まってる酷い目に遭わされるのがオチだぞ!」

「ああ、捕まればな! ぎやはははは!!」

実に嫌らしく笑う魔王軍の指揮官とやら。

様子を少し上から眺めた僕は、そのまま敵のど真ん中まで猛スピードで突っ込んでいく。

「……あ? なんだ? ありや。流れ星にしてはでけえな……」

「ていうかこっちに……」

「た、退避……!」

もう遅い。

僕は群れの真ん中に拳から着地する。

超高速で地面にぶつかることによって、衝撃波で周囲の敵が地面ごと巻き上げられた。

「「ぐぎやああああつ?!?!」」

昔の体でこんなことをしたら怪我してたところだったが、レベルが上がって身体のスレータスが上がった僕の体はこんな無茶な動きも可能になっていた。

どうでもいいと思っていたが、案外役に立つもんだ。

パラパラと、巻き上げられた土と雑兵が地面に降り注ぐ。

「な、なんだああ?! こ、殺せ! 今すぐ殺せ! 囲んで殺せ!」

敵の群れの中に突撃したので、当然自分の周囲360度敵に取り囲まれていた。

つい最近の出来事だが、ウルトロンの雑兵達に囲まれたときのことを思い出すな。

「自分から敵地の真ん中に降りて来るとは何て間抜けな——」

そう言つてとびかかってきた敵兵士は上半身と下半身がキレイに別れ、僕の頭上をクルクル回つて通り過ぎる。

「——へっ?」

とびかかってきた奴だけではない。僕の周囲を取り囲んでいた他の雑兵たちも次々と胴体やら体の一部を切り落とされ、地面に転がっていく。

僕の両拳から照射され、僕の体を軸に周囲を薙ぎ払ったペタワツトレーザーによって。

今のでかなりの数の雑兵が倒れた。

騎士たちの巻き添えを考慮しなければ、もっと倒せたんだがなあ。

その様子を見た指揮官はワナワナと震え。

「て、てて、撤退ーッ! 撤退しろ! 全速力で逃げろッ! アイツは絶対にヤバいッ!」

そう言つて、猛スピードで逃げていく指揮官とその配下の雑兵たち。

人間どころか、馬でも追いつけなさそうな速度で走り去っていく。そして、走りながら器用に首だけ後ろに向けて捨て台詞を吐き始めた。

「これで勝つたと思うなよ! この便器に吐き出されたタンカス共が!」

「ああっ！　また捨て台詞はいてやがる！　恥ずかしくないのかあの野郎！」

「なんとでも言いやが……れっ………へっ?」

指揮官は何かを言っていたが、突然その言葉を止める。

「やあ」

そして、僕に後ろから首をつかまれて空を飛んでいることに気が付き、手足をバタバタ動かして叫ぶ。

「おっ……おああああー!?　どーなってやがる!?　一体何が起こってやがるんだああああっ?!?」

「さっきアンタらのど真ん中に僕が飛び込んだことをもう忘れたのか?」

「ああああああーっ!!　降ろしてくれえええっ!!　俺は魔王軍準幹部と目されている指揮官だぞ！　俺には莫大な身代金が払われるはずだ！」

僕の言葉にこたえることもなく、なにやら訳の分からないことをのたまう指揮官。

僕は指揮官の首根っこをつかんだまま、後ろに振り返る。

たくさんの明かりが見える。おそらく駆け付けた騎士団と冒険者連中だろう。

僕は、その冒険者たちがいる方へ体の向きを変えて飛んでいく。

「おろせええ！　おろしてくれえええ！」

「それじゃ、お望み通り」

「ぐえっ！」

喚く指揮官を放り投げて解放してやる。

地面に叩きつけられ、呻き声を上げながら顔を上げた指揮官が、ピタッと固まった。

………大勢の冒険者や騎士団の姿を見て。

やがて、カタカタと震えだし………

「あ、あばばばば………」

ただただ情けない声を上げ始めた。

「おい、あいつさつきギルドにいた奴じゃないか……？」

「ああ……銀髪の盗賊について聞きまわってた奴だろ……？ 何でここに……いや、というより……」

「震えてるこいつは……いつも負けそうになると最低な捨てセリフを吐いて逃げてた野郎じゃないのか？」

僕はただ一言。

「自由」

そのまま飛び立ち、再びバルコニーの方へと向かった。

後ろから何やら凄惨な悲鳴が轟いて来たが、まあ、僕には関係ない。クレアの反応が実に楽しみだ。

第9話 鉄男式課外授業

敵指揮官をデリバリーした後、真っ先に城へと向かい、今は夜空の元でホバリングし、バルコニーに呆然と立つクレアを見ている。

「スターク殿……なのか？」

僕はマスクを開けて。

「ええ。俳優のスコット・バイオではありません」

「スコット……？ えつと……」

「なんでもないのでお気になさらず。着地したいので、部屋に戻って貰っても？」

「あ、ああ。了解した」

クレアは頷くと、そのままバルコニーの扉から応接室の中へと戻って言った。

ゆつくりとバルコニーにホバリングして近づく。

「その鎧も……貴方の技術で作られたものなのか……？ どこからどう見ても神器……」

ありえないものを見るかのようなクレアの視線を浴びながら、月夜をバックに手を広げて自慢げに笑う。

カッコつける事に意味があるのかというと、当然ある。

カッコよく見えるという事は、好感を得られるということ。

好感を得られるということは、交渉の成功率が高くなるということだ。

証明完了。

「これも私が作った装備のひとつ……この最高傑作は渡せませんが……先程映像で見せた防衛システムならいくらでも提供いたしましょう」

言いながら、バルコニーの床の上まで移動する。次は着地をキメる。

スタツと華麗に。

「パワーオフ」

僕の声に反応して、スーツの飛行電源が落ち、そのままバルコニー

に着地する。

バキヤツと足元から変な音がして、急に背が縮んだかのように視線が瞬時に下に落ちていく。前を向いたままにも関わらず。

……………そう。

着地でバルコニーの床が抜けた。

「ス、スターク殿おおおおお!!?!」

本日二度目のクレアの悲鳴を聞きながら、地面に急降下していく。落ちる途中、下層の何かの屋根やらバルコニーの床やらを何枚も突き破り、時には分厚い屋根に弾かれ、全身に感じる衝撃が二十を超えたあたりでようやく止まった。

最後に、上から降ってきた瓦礫が顔の真正面に直撃して碎け散る。早めにマスクを閉じておいて良かった。

『ボス、大丈夫ですか?』

「……………」

次はスーツをもつと軽量にしよう。そしてこの程度で壊れるバルコニーも大改造してやる。

確かな決意を胸に秘め、仰向けに転がっている自分の体を起こす。辺りを見回すと、ついさっきもあつた門番と目が合った。

どうやら地上まで落ちてしまったらしい。

今回も門番は時間が止まったかのように固まっている。まるで先程のまま止まり続けているかのようだ。

とりあえず気さくに手を振っておいて、またクレアの元へと飛び立った。

一体いくら請求されるやら。

参ったな。今は元の世界にいた頃の財は無いんだが…………。

むしろクエストで稼いだ分しか無い分、僕は今その辺の一般人以下の貯蓄しかないというわけだ。

……………この天下の大金持ちであるトニー・スタークが、借金の心配をすることになるとは……………。



その翌日の事。

交渉中突如起こったプレゼンのチャンスをもノにし、高評価を得て見事借金を背負った僕は、まだ日も出て間もない早朝のアクセルでクリスを待っていた。

この僕が……借金………。

借金はどうしようも出来ないが、屋根やバルコニーを破壊した件が交渉に影響することは無いとはクレアに言ってもらえたが………。『幸運の女神に感謝すべきかな?』とか思ってた自分が馬鹿馬鹿しい。「おはようトニー」

なんて、異世界で借金を抱えるハメになった自分の運命に苦笑いしていると、クリスの声が横からかかってきた。

「おはよう、来たかクリス。よくもやってくれたな」

「ええっ! あたしなんかした!?!」

「昨日王都に行つて、いい事あったと思つたら借金を背負わされてね」「あの、なんであたしが謝らなきゃいけないのか分からないけどごめんね……」

納得いかなそうな顔で謝ってくるクリス。

僕も納得いかないと思う。

「冗談だ、本気にするな。トニー・スタークだつて八つ当たりしたくなる時はあるのさ。ほら、里に行くぞ、僕に掴まれ」

「うう……やっぱりそれかあ……ふう、ちよつと心の準……つて、ああああああ!!」心の準備をさせてつてばああああああ!!」

なにかごちゃごちゃ言っていたクリスをわきに抱え、そのまま雲一つない空へと飛び立った。

マツハで飛ぶとクリスが空中分解してしまうので、ゆつたりと飛ぶこと一時間。

だんだん慣れてきたのか、クリスは綺麗な銀髪をたなびかせて遊覧飛行を楽しんでいた。

「慣れると楽しいね、これ」

「気持ちいいだろ？」

「うん……あの、ところでさ、トニー」

「……なんだ？」

「……が、楽しそうだったクリスの声のトーンは急に真面目な感じになり。」

「銀髪の義賊は……捕らえてどうするつもりなの？」

彼女はあまり乗り気ではないみたいだ。

実際、直接口に出してはいないものの、ギルドで聞きまわった時は義賊を支持するような声が多かった。

僕もすごい奴だとは思っている。

「同じ職に同じ髪色で情でも湧いたのか？ そうだな……警察に身柄を引き渡すつもりだが……」

「まっ、やっぱりそうだよね……」

「……だが、その後のことは僕は知らない。捕まえるとき少しお話しして、良い奴だと分かったなら……もしかすると、手が滑って脱走のお手伝いをしてしまうかもな？」

「どんな手の滑り方さ、それ。ふふっ」

クリスはそうやってクスツと笑った。

「里が見えてきたぞ。当機はまもなく着陸致しまーす」

ジョークを言いつつ、学校の職員玄関の前にゆっくりと着陸する。

クリスを降ろし、スーツを脱いで玄関のドアを開けて。

「君が臨時講師になる事は僕が族長に昨日伝えておいた。ほら、入れよ」

そう言っつてクリスを手招きする。

職員室でクリスを軽く紹介し、教室に向かう途中の廊下。

「ス、スターク先生……そちらのイケメンな人は……」

自分の教室に向かう途中だったのだろうか。背中にリュックを背負ったまま、僕らを……いや、正確にはクリスの方を見る生徒二人組の姿が。

その視線には、好奇のソレが混じっている。

僕は二人を見た後人差し指を額に当てて。

「あー……ふにくらと……どろんこ」

「ふにふらですけど!」

「どどんこですけど!? 先生! まだ日にちが浅いのは分かりますが生徒の名前くらいは覚えてください!」

「そうですよ! キャラの薄いどどんこはまだしも何であたしまで!?!」

「……えっ?」

突然コントを始めた二人に思わず笑いがこみ上げる。

「H A H A ツ! いいコントだったよ、ブラボー。おかげで覚えられた、ふにふら、どどんこ君。だがもう始業のチャイムが鳴る。なるまでに席についてないと減点だぞ。ほら早く!」

そう言っって手をパンパン叩くと二人とも慌てた様子でバタバタと教室の方へ走り始めた。

「スターク先生! コントじゃないですから! それと、ふにふら!

後で話あるからね!」

「ス、スターク先生! 後でカツコイイポーズについて特別訓練を……あ、それと……」

ふにふらとどどんこは、途中でピタツと止まって僕らの方を見て。

「そのイケメンの人のこと、良かったら教えてくださいねー!」
それだけ言っって、二人は教室の方へ走っっていった。

「イケメンだとき。よかつたな?」

「何が!?! 何もよくないよ!?! あの、キミ達! あたしは女だからね!?!」

クリスは叫ぶが、もう遠くまで走っって曲がり角まで曲がっしまつた彼女達には届いてそうにない。

「まあ、後で自己紹介をする機会はある。その時言えよ」

「そんなに……男っぽいかなあ……」

自信なさそうに、自分の胸のあたりをペタペタと触りだしたクリス。

彼女はいつもの盗賊としての衣装を着ていて、露出は多めながらも胸はしっかりと隠しているのだが……………。

胸が小さいことは決して悪い事じゃない。

僕は慰めるようにクリスの肩に手をそっと置いて優しく揺する。

「僕の恋人だつて胸はつまましい方だ。元気出せよ」

「まだ何も言っていないんだけど？」

▽

「それじゃ出席を取る。あるえ、かいかい、さきべりー」

名簿を片手に次々とみようちくりんな名前の生徒を呼んでいく。

それは、学校じゃよく見る光景。出席の確認だ。

僕に名前を呼ばれ、一人ずつ挙手して返事をしていく生徒。

一人だけ次のページに書いてあるせいでうっかり呼び忘れそうになったゆんゆんもしっかり呼んで。

「これから授業を始めるぞ。昨日夜届いた紙はちゃんと見たかな？」

「スターク先生、昨日届いた紙には課外授業があるので弁当と水筒を持参としか書かれていませんでしたが……………どこかへ行くんですか？」

「その通りだあるえ。僕らは今日、丸一日使つて遠出する。何を隠そう、君達にはちよつとしたサプライズをしたくてね」

僕のサプライズという言葉にそわそわし始める生徒達。ティーンらしくて何よりだ。

「これから冒険者を目指そうとしてるやつはいるか？」

僕その質問に、ぽつりぽつりと手が上がる。

……………思ったより少ないな。

たしか、族長から聞いた話によると……………。

「まあ、確かに君たちは危険なクエストに行かなくても、魔道具職人なんかになって稼ぐことが出来るだろう。だが……………」

そこまで言つて腕時計からホログラムで映像を出す。

それは、資料用に撮つておいたクエストの一部始終で、僕とクリスとダクネスがモンスターと戦つてる様子が映し出されている。

ちなみに撮影したのはドローンだ。

「……だが、こんな風にモンスターを仲間と協力して倒し……酒場でその日あったことを話しながらパーティと宴会……」

僕の説明に合わせて映像は切り替わり、次に出てきたのは酒場でクリスマス達と宴会してる場面だ。

資料用ではなく思い出用。

ノスタルジーに浸る趣味は持ち合わせていないのだが、将来元の世界に戻った時に、この世界にいた証があってもいいかと一応撮っておいたものだ。

なんだか隣でクリスマスがニヤニヤしてる。

なんだよ。

それを見た生徒たちは、どこかおとぎ話に憧れる子供のような目になって………実際子供だが。

「冒険者として過ごすのも……なかなか楽しそうだろう？」

生徒たちは目を輝かせたまま、コクコクと頷いて。

「知らない土地とかを旅したり……イケメン冒険者の仲間と恋に落ちたりかあ……なんだか、夢が広がるね」

「う、うん……家の魔道具店を継ぐつもりだったけど、その前に世界を見るとか言って冒険者やってみるのも悪くないかも……」

どどんことふにふらの、そんな他愛のない会話が、さらに周囲の冒険者に対する憧れの気持ちを強くする。

ここまで冒険者人生賛美に持っていくつもりはなかったが、ナイスアシストだ二人とも。

僕は数年暖めたプロジェクトを、胸を張って発表する時のような顔と声色で。

「それでは諸君、よく聞いてくれ………今から………諸君らには………」

大仰そうな身振り手振り溜めに生徒たちが息を呑む。

「僕のクエストの見学兼お手伝いをしてもらう」

「「「いやったあああああ!!」」」

教室内が一気にヒートアップする。

「先生！　どんなクエストに行くんですか!?!」

「先生！　どうやってギルドに行くんですか!?!」

「先生！　戦ってる時でも後ろについてメモとっていいですか!?!」

「先生！　お弁当を作る余裕がありませんでした!」

生徒たちが前のめりになり、次々と質問をしてくる。

特にあるえなんかは今にも教卓の目の前までメモ片手に飛びついてきそうだ。

最後のアホは放置する。

「おい、落ち着け。一つずつ説明するから」

説明のために黒板に色々書こうとチョークに伸ばした僕の肘から先を、窓から飛んできた自動キャッチ型スーツ、Mk. 43の一部が機械音を立てて包んだ。

タイミングばっちり。

それを見た生徒たちがさらに興奮し始める。

「!!先生！　それについて詳しく!!」!!」

「ねえトニー!?!　なんでさらに話が進まなくなりそうなの!?!」

ワザとやってるの!?!」

それまで黙っていたクリスが急にツツコミを入れてきた。

朝日が射す教室にも関わらず、僕は夕日の如き紅い光に照らされている。

「ちよつと実験してみただけさ。授業しながらスーツを見せたりしたら楽しんで授業を受けてくれるんじゃないかとね。実験は失敗だ、まるで授業になりそうにない」

——大興奮した生徒達をなんとか鎮め、授業に戻る。

「銀髪の義賊!?!　銀髪の義賊と言いました!?!」

クエストの内容を聞いた生徒の1人のふにふらが興奮した様子で立ち上がった。

他の生徒たちの様子を見るに、何人かは知ってるみたいだ。

「あの、銀髪の義賊って言うのはなんですか?」

そんな中、おずおずと手を挙げて聞いてきためぐみん。
ふにふらはめぐみんに実にイヤらしい笑みを浮かべながら。

「なーにー？　めぐみんったらあの有名な銀髪の義賊を知らないのー？　勉強はできても、王都の流行を掴めてないと……ああっ！　痛い痛い！　文房具投げるなんて反則よ！　ちよっ……やめっ……わかった！　あたしが悪かったから！　もう投げないでよ!!!」

「何が流行ですか！　里の外にも出たことないくせに！　大方王都に魔道具を売りに行った親から聞いたとかそんな所でしょう！　ゆんゆん！　次の弾をくださいー！」

「ねえ、めぐみん!?　それ私の文房具なんだけど!?　なんで勝手に投げてるの!?!」

バカにしてきたふにふら目掛けて、ゆんゆんの机の上からペンやら消しゴムやらをぶんどっては投げつけるめぐみん。

話が進まない……。

スーツを装着した右手から咳払い代わりにリパルサー・エンジンの音を出して静かにする。

「……その通りだ、ふにふら。王都で暗躍し、誰もが捕まえられないでいる大盗賊……。そんな大物を、僕らの手でつかまえる。面白い課外授業になると思わないか？」

生徒たちは目を輝かせ、コクコクと頷く。

「良い返事だ。いいか？　クエストは、ボードから依頼書を引っぺがした時からもう始まっている。クエストを受けたら最初に何をしますか？」

「はい、先生」

「よし、どどんこ。答えてみる」

「報酬がどれだけ高いか確認することです」

「帰っていいぞ」

「!?!」

どどんこが一瞬で涙目になり、僕は次の回答者を探す。

「次、誰か答えるヤツは?」

スつと、生徒たちの中から手が上がる。

「いいね。それじゃ、成績一位君、君の答えは？」

「火力の用意です！ 圧倒的な火力を用意し、蹂躪の備えをするのです！ さあ！ 何点ですか!？」

そりやあもちろん。

「マイナス九十点だ。君はどここの帝国軍だ？」

「?!?!」

僕は眉を八の字にしながら生徒たちの方を見る。

「おい、大喜利やってるんじゃないんだぞ？ ったく、それじゃ、先輩冒険者に答えを聞こうじゃないか。クリス？」

「おつ、やっと来たね」

空気になりつつあるクリスに答えを振る。

待つてましたと言わんばかりだ。

「紹介するよ、僕のパーティーメンバーのクリスだ。彼女は盗賊職で……………」

「か、彼女…………？」

「いや、でもあの声は……………」

生徒たちから聞こえてくるヒソヒソ話にクリスが少し涙目になる。

「答えは作戦会議だよ…………自分のパーティーの構成や武器からどう戦うか、それぞれどんな役割かで立ち回るか等をみんなで考えるんだ。そ、それと、あたしは女だからね…………？」

「どうも、クリス先生。生徒諸君、先生はいじめちゃダメだぞ。それはさておき、最適解が出たな。その通り、作戦会議だ。最初にも言ったが、君たちにはクエストに参加してもらおうことになっている。つまり、君たちは臨時のパーティーメンバーって訳だ」

僕は、教卓の上にエヴルー家の見取り図をバサツと広げて。

「賢い紅魔族である君たちの知恵、貸してもらおうぞ」

——二時間後。

「この防衛タレットはこの曲がり角に設置しましょう。いい奇襲になると思います」

「それなら攻撃ドローンの配置はこうした方がいいんじゃないかな？」

「これなら死角は存在しなくなる」

「偵察用ドローンと監視カメラをバレないように設置して、油断したところを攻撃ドローンで囲むのは？ 効率いいと思うんだけど」

彼女達は広げた見取り図の上に展開させたホログラムを器用に使いこなし、ドローンやターレットの性質すら理解して、悪徳貴族の屋敷をヒドラも顔負けの要塞へと作り替えていた。

流石知能の高い紅魔族だ。みんなまとめてスタークインダストリーズに欲しい。

「フライデーさん、この装置はどういう装置なんですか？」

ホログラムに表示された防衛システムの装備リストから1つを指さし、ねりまきがフライデーに質問する。

『それはレーザー探知式地雷です。デバイスから照射される肉眼では不可視のレーザーに触れた瞬間にデバイスが爆発し、ターゲットを即座に無力化します』

「いいですね！ これを大量に設置しましょう！ 窓という窓に設置したら侵入できなくなるんじゃないですかね！」

「ちよつとやり過ぎじゃないかな!？」

「お目が高いな、ねりまき。だがクリスの言う通り、やりすぎだ。見落としてる点があるぞ」

「んんん……見落としてる点……なんだろ……」

ねりまきは顎に手を当てて悩み、クリスは何故かどんどん怯えたような表情を浮かべていく。

何かあつたんだろうか。

「それじゃ、プロの盗賊職に聞こうか。クリス、君だったらどうこの罠を回避する?」

「う、うーん……」

クリスは頬をポリポリと掻きながら、ホログラムで立体になった屋敷の見取り図を見る。

見取り図に無数に設置された赤い点を見て、どこか穴がないかよく観察しているようだ。

先程から、生徒たちが防衛設備の配置などを提案しては、盗賊職の

クリスが穴を見つけて改善案を出している。

生徒たちは実に目を紅く光らせてイキイキとしている。クリスは何故か顔を蒼くしているが。

「おい、大丈夫か？」

「大丈夫……あたしは大丈夫……」

大丈夫じゃ無さそうだな。

少し深呼吸した後、クリスは答えた。

「えつと……盗賊職には罠を検知するスキルと解除するスキルがあるんだ。だから、あまり無闇矢鱈に罠を設置するのは逆効果……だろうね。うん」

「そうですね……だったら、へたな罠よりも潜伏無効の生体反応探知式タレットを多数配置して、入れなくしてしまえば……」

「えつ」

「ねりまき、目的は捕縛です。近づけないと悟って屋敷に来なくなってしまうのは本末転倒です。良い感じに罠を設置して敵の進入路を絞って誘い込み、そこで盗賊を捕まえるのです」

「えつ」

「完璧な回答だ、めぐみん」

「なるほど！ さすが成績一位！」

——それからさらに一時間後。

「ライトニング・タレット二十門、地雷とワイヤートラップが三十個、ドローン四十機に……監視カメラ、赤外線センサーなどを含めた探知デバイス百二十個、防衛設備の配置はこれで良いな？」

「……異議なし！」

「ひいっ……」

さらに作戦会議を続け、ついに死角なしの無敵要塞が出来上がった。どう考えても過剰だ。みんな楽しんで貰えたようなので別によかったが。

「さて、そろそろいい時間だし、全員外に出る準備だ。そこそこ歩くか

ら、体ほぐしておけよ」

「あたしは大丈夫、あたしなら出来る……」

三時間、授業三コマ丸々使って、今は四コマ目の目前まで迫った辺り。四コマ目が終われば昼休みだ。

それにしてもクリスは本当にどうしてしまったのだろうか。

幸い、彼女の出番はここまでなので、あとは家に帰ってゆつくりしていても構わない。

「先生、外に出るって、どこに向かうんですか？ まさか歩いて王都に行くとか……」

「まさか。その辺はちゃんと考えてある。まあ、きっとビックリするはずさ」

「ほう、言っておきますが、私とゆんゆんは、昨日先生に鎧の変形という変形を全て見せてもらいましたからね。おぶつて空を飛ぶとかくらいでは感動しませんよ……」

「言うね、千エリス賭けよう」

「ほほう？ 実はい最近教室で千エリス札を見つけまして。いざと言う時の虎の子として取っておく予定でしたが……良いでしょう。その賭け乗りました」

「えっ……ねえ、どどんこ。あんたちよつと前に千エリス落としたとか言っつてずつと探し回ってなかった……？」

「う、うん……どこ探しても見当たらなくて、泣く泣く諦めたんだけど……ねえ、めぐみん……ひよつとしてそれ……」

「いいんだな？ もう取り消しは効かないぞ？」

「先生？ その……えつと……」

「望むところです」

「いや待って!? ほんとうに待って!？」



四コマ目。

スターク先生に言われるがまま、外に出て後ろについていたのだが

……。

「ス、スターク先生……何故……山登りなんか……ふう、ふう……」

山を登り始めて三十分。お腹が減る時間なのも相まって、私はかなりグロッキーになっていた。

今までずっと体育の授業をサボっていたのがアダとなったか。

「良い景色を見て良いランチを摂ろうじゃないか」

なんて、ニヒルに笑いながら言う先生。

何を考えているのかよく分からない。

安易にかけに乗るべきではなかったかもしれない。

少し後悔していると。ゆんゆんが勝ち誇った顔をしながら私に。

「情けないわねめぐみん！ こんな程度で音を上げるなんて！」
……。

「では、余裕のあるゆんゆんにおぶって貰いましょうか。友達というのは、友ごと友の苦しみも背負ってなんぼです」

「と、友達を……背負う……」

友達という言葉聞いたゆんゆんは指と指を合わせてモジモジしながら。

「し、しようがないわね……ライバルだから、本当はこんなことしたくないけど……」

こっちに向かってきておんぶの用意をするゆんゆん。

自分で言っておいてなんだが……。

「君の友人……チョロすぎやしないか？ 良いのか？」

「や、やめてください……ちよつと罪悪感が湧いてきたんですから……」

ゆんゆんに聞こえないように、スターク先生がジト目で責めてきた。

私を背負いながら、ゆんゆんがスターク先生に。

「よいしょつと……あの、スターク先生、ここはただの展望台ですよ？

いい天気ですし、見晴らしもいいですけど……何か演出とか考えているんですか？」

「それを言ったら面白くないだろ？ それに、君だって青空の下、見晴らしの良い展望台でクラスメイトとランチなんて素敵だと思わないか？」

「は、はいっ！ それは素敵ですね！」

クラスメイトとランチという言葉であっさり誤魔化されてしまったゆんゆん。

……………なんてチョロい。

スターク先生も、さつき私の事をジト目で責めてきたのはなんだったのか。

その後、落とした千エリスについてどどんこがあれこれ言ってくるのをのりくり回避したり。

スターク先生があるえに『目が見えるのに片目を隠して生活すると視力が落ちる』と注意し、それでも眼帯を外そうとしないあるえに業を煮やして、片手間に眼帯越しでも視界が見えるように改造したり。

木漏れ日に当てられながら、そんなやり取りを続けることさらに三十分程。

「はあ……………はあ……………や、やっと着いた……………」

「さすがにつかれた……………」

「お腹ペコペコ……………」

クラスみんなが、口々に弱音を吐きながら頂上の草原にへたり込んでいた。

並ぶ山脈と、小さく見える魔王城は中々に圧巻の光景だ。

「ふ……………全員情けないですね……………やはり最後に立つのは我……………」

「あんた何偉そうに言ってるのよ！ ずっと私がおぶってたじゃない！ おかげでヘトヘトよ!!」

「途中何度か降ろしてたでは無いですか。流石にスターク先生に代わってもらおうかと思いましたが、身の危険を感じたのでやめましたし」

「おい、それどういう意味だ？」

「しようがないでしょ！ いくら発育が悪くて軽いめぐみんでも、人

一人分の重り背負って山登るなんてキツイわよ！」

「ぶっ殺」

「痛っ！ や、やめてめぐみん！ 叩かないで！ 私今疲れてるんだから！ ズルい……痛たた!! お弁当分けてあげるから勘弁してえ！」

気にしているところを突かれ、怒りに任せに放った連撃にゆんゆんが悲鳴を上げる。

そのままゆんゆんをびびしびし叩いていると、後ろから両手を掴まれ、そのまま後ろに引つ張られた。

私は為す術もなく引きずられる。

「な、なにををするのですかスターク先生！ 事案ですか!? 事案発生ですか!? 出る所でても良いんですよ!?!」

「何が事案発生だ。落ち着け爆裂レディ。生徒の暴行を止めるのも先生の仕事だ。君の出るところでてないボデイの話は置いて………Oh!! おい！ 髭を摘んで引つ張るな！ ガキっぽい奴だな！ 図書館での恩を忘れたのか!?!」

それはそれ、これはこれだ。私は今守らねばならない確かなものの為に戦う。

私は手を振り払い、スターク先生の髭を攻撃する。

………が。

「僕はスーツだけじゃないぞ?」

「あああああああ!!!!」

疲れ果てたゆんゆんには勝てても、流石に大の大人には敵わない。適当にあしらわれ、そのまま草原にポイっと転がされてしまった。

転がったまま、うつ伏せになって草原に顔を埋める。悔しいわけじゃない。

「……………」

「………そんな強く投げ飛ばして無いだろ? おい、大丈夫か?」

ちやんと考えて投げたのか、私にはかすり傷ひとつ無い。

………私は首だけちよつと動かし、そのままチラリと恨めしげな目をスターク先生に向ける。

「あー……そういう事か。『私は不当な暴力を受けたことに対する慰謝料を請求する』って言いたいんだな？　　まったく、僕のツナサンド二切れやるから起き上がっ……速いな……」

文字通り、転んでもタダでは起きない。とりあえずゆんゆんからは降伏の証として。スターク先生からは、私を投げ飛ばしたお詫びとして持っていたツナサンドを半分ずつ貰った。

草原に座り、視界に並ぶ山脈を眺め、のどかな風を受けながらの素敵なランチも終わり。そろそろ午後の授業に突入するかというところ。

隣に座ってたスターク先生が皮肉っぽく言ってきた。

「中々世渡りが上手いじゃないか。今回は君が子供だから見逃してやったが、次こんな手を使ってきたら、僕は本気でやり返すぞ。女に起訴されるのだから一度や二度じゃないんだ」

「なんの自慢をしてるんですか!？」

嫌味で皮肉っぽい、若干問題のある先生かと思っていたが、女癖も悪いとなるといいよいよもって教師としてどうなんだというレベルになってくる。

まあ、鎧のカッコ良さと頭の良さ、それに、授業が楽しいことは認めるが……。

私が先生にツツコミを入れていると、横からあるえがやって来て。

「スターク先生、クリス先生はどうしたんですか？」

「ああ、彼女なら午後には用事があるらしいから帰らせた」

「……どうやって帰らせたんですか？　お金を渡してテレポト屋に？」

「いいや？　僕のスーツを装着させた。自動キャッチ型スーツって言うってね。さっき見せたやつなんだが、パーツごとに分離して……これは別に関係ないか。まあ、体格があつてなくても上手く装着させることができるスーツがあるんだよ。正確には、装着できる部分だけ装着させて飛ばしたつてのが正しいが……」

あのスーツを……。

ちよつと……いや、かなり彼女が羨ましい。

ん？ 待てよ……もしかして先生が考えているのは……。

「わかりました！ わかりましたよスターク先生！」

そう言つて立ち上がった私を、スターク先生は草原に足を投げ出して座ったまま見上げてきて。

「どうしたんだ急に。体を大きくする方法なら既に知ってるぞ」

「違いますよ！ 分かったのは、先生のサプライズの……あ、あの……あるんですか？ 体を大きくする方法……」

「ああ。牛乳飲め」

今すぐ髭をむしり取りたい衝動に駆られるが、とりあえず抑える。勝てない戦いをするものではない。

「………はいはい、面白いですよ………まったく……」

「一番現実的で、一番有効な方法だろ？ で、サプライズが何か解つたつて？」

「ええ。正解は……先程言っていた自動キャッチ型スーツで、生徒を王都に」

「全然違う」

「んなっ!？」

即答だ。

「そろそろ、答え合わせと行くか？」

そう言つて、スターク先生は崖の方へと歩き出した。

………？

「あの、スターク先生……そっちは崖ですよ……？」

何も答えず、そのまま崖近くまで向かうスターク先生。

何をするつもりなのだろうか。

そして、崖の手前で止まると、手首に巻いている装置を弄り始め………。

「全員注目。これから王都に向かう。昼飯は食べ終えたよな？」

スターク先生の言葉を聞いて、崖の近くまで私を含めた生徒たちが集まり始める。

「どうやって行くんだろ………」

「あの鎧で運んでくれるのかな？」

「めぐみんそう言ったけどハズレだったみたいだよ？」

「それじゃどうやって……」

と、集まった生徒たちが移動手段について話してた時だった。

「……………ねえ、何か聞こえない？」

最初に気付いたのは誰だったか。

その言葉に、全員静まり返って耳をこらす。

……………。

それは、スターク先生が空を飛ぶ時に聞こえて来るのとはまた違った音。でも、どこか似ている。

詳しく言うなら、何かを超高速で射出し、それで推進力を得ている音。

そのまま耳をこらしていると、崖の下からゆっくりと、登る朝日のようにソレは現れた。

その姿を見たねりまきが慌てた様子で叫ぶ。

「ス、スス……スターク先生!? なにソレ!? は、羽の付いたデストロイヤー……………?」

崖下から現れたソレは、なんとというか……………。

足をとっぱらった代わりに羽を付けて、平たくしたデストロイヤーみたいな見た目を……………。

……………!?

スターク先生は手首に巻いた装置に手をかざしたまま。

「フライデー、生徒たちの後方に着陸させる。後、飛行型モンスターに狙われたくないからステルスモードにしろよ」

スターク先生が『すてるすもーど』と言った瞬間に、私たちの頭上を機体を通り過ぎながら、どんどん透明に……………。

……………?!?!

最終的には、ほとんど見えなくなってしまった。目を凝らせば空間が歪んでるのがわかる程度だ。

紅魔族随一の頭脳を持つ私を持ってしても、なんなのかさっぱり正体が掴めない。

ズンっと、大型モンスターが降りて来たような音と衝撃がした。
透明でよく見えないが、おそらく着地したのだろう。

なんだこれは。本当になんなのだろうか。

「これぞ、君たちの送迎用スクールバス、通称クインジェットだ。乗り心地はあまり良くないけどな」

私は、ポケットの中に手を突っ込み、千エリスをくしゃつと握った。

第10話 激突、銀髪の義賊

——クインジェット。

出撃するアベンジャーズをいつも乗せていた輸送機だ。クリスタちとのクエストの合間、ラボに残っている数少ない資材をかき集めて作った。

大まかなパーツを作り、わざわざラボの外まで運んで組み立てるのは中々面倒だったが……。

この先技術提供の試供品などを運ぶ際に役立つってくれるだろう。

……まさか最初の役目がスクールバスの代わりとは思ってもしなかったが。

「ほら、全員乗ってくれ」

僕がそう言うと、生徒たちの中から声上がる。

「乗れと言われても、まず透明で見えないんですけど……」

もつともな意見だ。

ぱちんと指を鳴らすと、クインジェットの後部ハッチが開き、内部が見えるようになる。

その様は、さながら何も無い空間に突然扉が開いたかのようだ。

「言っておくが、これは魔法でもなんでもないぞ。君たちの知力だったら、教えれば直ぐにコイツの修理なんかもできるようになるだろう」

そう言いながら、空いたハッチの横に立ち、どうぞと手招きする。

みんなで顔を見合わせた後、目を赤く輝かせ、乗り込んで行く生徒達。ちびっ子らしくて実に結構だ。

今、僕のラボには働く人がいない。機械に任せるのも限界がある。

………外を見せる授業をしたが、行くあてのない子がいたらスタートクインダストリーズに後々誘ってみるのもいいかもしれないな。

なんて考え事をしてると、僕の胸に軽い衝撃とクシャツと言う音がした。

「今回の賭けは……あなたの勝利です。次は負けませんからね。逆に私があなただを驚かせてみせましょう」

……めぐみんが千エリス札と悔しさを僕の胸に叩きつけたよ
うだ。貰っておこう。

生徒が全員乗ったのを確認し、貰った千エリスをバレないように
こっそりどどんこのポケットにねじ込んだ。

▽

一度アクセルまで戻り、ラボを見たがる生徒たちを何とか押しとど
め、ドローンやらタレットのパーツを積む。

それに十一人の生徒も入り、クインジエットの中はギチギチでまさ
にイワシの缶詰状態だ。

それと……………。

「……………クリスから聞いてはいたが、まさか本当に教師をやってい
るとはな……………」

クインジエットの助手席に座っているダクネスが、生徒たちをチラ
リと見たあと、運転席に座る僕に視線を戻してそう言ってくる。

「意外か？ あ、君はどのボタンにも触るんじゃないぞ」

「触るか！ ……ゴホン、意外といえど意外だが……………生徒たちの
顔を見るに、良い教師としてやっているみたいだな」

と、彼女はにこりと笑う。

銀髪の義賊捕縛に当たって、ダクネスにも応援要請を出した。

攻撃の当たらない彼女が役に立つかは怪しいが、僕が作った装備が
どこまで機能してるか、また、彼女がどこまで使いこなせているかを
見極めるのに良い機会だろう。

……クリスには応援を頼んだのに、彼女だけ除け者つてのもあまり
いい気がしないな。

「しかし、クリスに一体何をしたのだ？ トニーが私を迎えに来る直
前、ギルドにふらつとクリスが来たのだが、それはもう真っ青な顔を
していたぞ。一体どんな羨ましい目に……………いや……………どんな酷い目
に……………ああっ！ その汚らしいものを見るような目……………っ！

んんっ！ 悪くない！」

やっぱり連れてこなければりや良かったかもしれない。

この猥褻物は教育において悪影響しかなさそうだ。

「今……私のことを猥褻物とか考えただろ……？」

「なんで分かるんだ……いや、言わなくていい。理解できないだろうし、したくもない……」

顔に手を当ててため息をついていると、遠巻きに見ていた生徒たちがざわめき出した。

「あのスターク先生が見たことも無い顔をしてる……一体何者……」

生徒たちはダクネスの事をなにやら凄い人物だと考えているようだ。

そのまま勘違いしてもらおう。

僕は自分とダクネスの席を回転させて生徒たちの方を向き、ダクネスの紹介を始める。

「さて、新しい臨時講師の紹介をしよう。この金髪の美人さんの名前はダクネス。クリスと同じく、僕のパーティーメンバーで、職業は上級職のクルセイダー。どんな攻撃も効かない二足歩行の要塞だ」

「二足歩行の要塞……」

「ト、トニー!？」

ガラにも無い僕のベタ褒めに、ダクネスが戸惑い、生徒たちは目を輝かせる。

「トニー、一体どういう風の吹き回しだ？ いつも私に呆れるか、皮肉を言ってるお前が何故急に私を褒めるのだ？ なにかの嫌がらせか？」

僕の方に顔を寄せ、生徒たちに聞こえないように小声でそう言うてくるダクネスに、僕は同じく小声で返す。

「君の救いようなない性癖は子供達の教育上悪影響しかない。だから、君にはみんなに引かれるダクネスではなく、みんなに惹かれるダクネスになれ。なあに、ほんのちよつと発情を抑えればいいだけだ。簡単だろ？」

「私をなんだと思っているのだ！ 人前で恥ずかしい振る舞いなどし

ないよう、普段からちゃんと心掛けています！」

「ジョークにしてはセンスがないぞ」

なんて、ダクネスと軽く言い合っていると。

「ダクネス先生、質問いいですか？」

後ろの方で生徒たちから手が上がった。

先生として質問されるとは思っていなかったのか、元々無愛想気味な彼女は少しうろたえて。

「えっ……わ、私にか？ えっと……貴方の名前は……」

「彼女はめぐみんだ」

先生と呼ばれるのに悪い気はしないのか、うろたえながらも満更でもなさそうな顔をするダクネスに助け舟を出す。

「ありがとうトニー。それで、私に質問とはなんだ？ めぐみん」

「はい。スターク先生が言っていた、スターク先生の鎧を見ると何かを期待してハアハアと性的に興奮しだす変態のパーティメンバーとは、あなたのことですか？」

「?!?!」

それを聞いた途端、さつきまでダクネスに向いていた尊敬の眼差しが、一気に変態を見るソレに変わる。

ダクネスの顔が一瞬で真っ赤に染まり、涙を浮かべて僕の方を見ってきました。

……そういえば、めぐみんにそんな話をしたっけな。

僕はダクネスに。

「あー……名前までは言っていないが、実はめぐみんに君のことを」

「ぬああああああ!!」

最後まで言う前に、ダクネスが僕に掴みかかってきた！

▽

「いやはや、お待ちしております。あなたがシンフォニア卿の仰っていた異国の神器使いですか。今日はよろしくお願いますよ！」

今いるのは、今日義賊が入るとされている悪徳貴族のエヴルー家。

「ごちらこそ、Mr. エヴルー。今日は貴方の身の丈にあつてない、この無駄に金をかけた屋敷と、貴方が悪徳の限りを尽くして貯めた後ろ暗い財産を精一杯守らせてもらうよ」

「?!?!」

「僕の皮肉を受けて目の前で固まってるのはその邸主であるエヴルー本人だ。」

「スターク先生……皮肉がエグすぎますよ……」

後ろでドン引きするゆんゆんに振り返り、肩を竦めていると、固まっていた悪徳貴族はハツと我に戻って。

「ま、待ってくださいな……。別に、私は特に悪いことはしてないんですよ？　なぜ狙われるのかすら私には見当も……」

「言つとくが、今まで君がやってきた人身売買と賄賂、脅迫といった数々の犯行はクレアが証拠を押さえてるからな。君捕まるぞ」

「えっ」

「サイツテー」

「クズ」

「詳しくは署で聞こうか……このセリフ、一度言ってみたかったんだ」

「……………えっ」

後ろで青い顔をする悪徳貴族を尻目に、毒を吐きながら次々と機材を運んでいく僕と生徒たち。

ダクネスは、どういう訳か貴族の屋敷に向かう直前になって急に屋敷に入りたくないと言い始めたので、クインジエツトで待機させている。

夜になったら義賊捕縛のために出向くとは言っていたが……。

フライデーと僕の指示の元、次々と罫をプラン通りに設置している。

良いペースだ。これなら夜までに終わるだろう。

「スターク先生ー！　タレットが起動しません！」

「あつ、そ、そこは配線が違うよ、ふにふらさん。この順に繋げば……」

「あ！　そっか！　ありがと、ゆんゆん！」

「ど、どういたしまして……えへへ……」

友達がいなくて色々こじらせてるらしいゆんゆんも仲良くやつてるようで安心だ。

そんな微笑ましい様子を見てみると、ねりまきが何かを大量に抱え、小走りでこつちへと駆けて来た。

「スターク先生、見てコレ！　こんなに色々良いモノが……！　スターク先生の言った通りだったよ！」

中身が澄んだ琥珀色の液体に満たされている、ブリリアントカットされたダイヤのような形のガラス瓶。

他にも、三日月を象ったものや、シンプルな丸い形ながらも、気品を感じる装飾が施されたもの……。

世界は違えど、僕にはわかる。

これは全て、お宝クラスの高級酒だ。

「でかした、ねりまき二等兵。wow……これはどれも一級品だな」

「サーイエツサー！　ところでこの返事って一体何なの？」

「僕の国の軍隊が使う言葉だ。意味は貴方は全てにおいて正しいです。だ」

「なるほど！　状況にあってるね！」

『ボス……子供に嘘を教えるのはどうかと思いますが……』

「大体あってるだろ」

なんて、軽口を叩いていると、邸主のエヴルーが慌てた様子で。

「あの……それ、私の秘蔵のお酒なのですが……」

「どうせ明日には全て差し押さえられ、君は冷たい牢獄の中だ。今のうちに飲んでおけよ」

近くの棚に飾ってあった二つのグラスを拝借して酒を注ぎ、片方をエヴルーに渡す。

「あ、あははは！　それもそうですね！　明日滅ぶんだったら今日は好きに生きましょうか！　イーッヒッヒッヒ！」

「いい心掛けた。素敵な家、素敵な酒、そして少しの後暗い財産。悪徳人生最後の日に乾杯」

と、グラスを口につけようとした時。

「させるかたわけ!! 犯罪者とはいえ、酒をせびろうとするんじゃない!!」

後ろから怒号がし、振り返ってみるとそこには……。

「……なんで来たんだダクネス。ジェットで待機してろと言っただろ。機内上映の内容がお気に召さなかったのか?」

「私だって好きで来た訳では無い! だが、お前の会話が聞こえて来たから、居ても立ってもいられなくなったのだ!」

……………。

「フライデー?」

『ボス、ジェットとボスの無線が繋がったままでした。設定したままお忘れだったようですね』

「……クソツ」

「口が悪いぞ! そんなことより、授業中なのだろう!? 酒を飲もうとするな! それでも教師か!」

「あの、持ってきた私が言うのもなんだけど……流石に授業中に飲むのはどうかと思うな………というか、『酒屋の娘として、高級な酒に興味はないか? ここならあるだろうし、今のうちに見るといいぞ』って提案持ちかけてきたのスターク先生だし……まさか飲もうとするとは思わなかった……」

ねりまき、君もか。

そのままどう弁明しようかとか考えながらダクネスと睨み合いを続けていると。

「ダ……ダダ………ダステイネス卿!?!」

ダクネスが現れてからというものの、となりでプルプルと震えているエヴルーが突然叫び出した。

……ダステイネス卿?

エヴルーの視線の先を追い、ダクネスの方に視線を戻すと、彼女は顔に手を当ててため息をつき始めた。

「はあ………これだから来たくなかったのだ………」

まさか………。

「君は………」

「……ああ、その通り、私は貴族だ。……………それも、そこそこ大きめのな……………」

ダクネスは、物凄く申し訳そうな顔でそう言ってきた。

ねりまき以外は、作業に集中していて聞こえていないようだ。

少しの間、沈黙が流れる。

そして……………。

「全員聞こえるかー？ 衝撃の事実だ！ ダクネス先生は実はこの国の大貴族だったんだとさ！」

「ちよつ!？」

僕の出した大声に生徒たちが手を止め、一斉に僕達の方を見る。

ダクネスは驚愕の表情を浮かべて。

「べ、別に言いふらす必要はなかっただろう！」

「それで、本名はなんて言うんだ？ ダステイネス？ ダステイネスの後になんて続くんだ？」

ダクネスの言葉を無視して質問をする。

「い、言わない……………」

「Mr. エヴルー。彼女の本名は……………」

「わ、分かった！ 言うー！ 言うー！ 言うー！ 勘弁してくれ…………ラ、ララティーナだ…………私の本当の名前は、ダステイネス・フォード・ララティーナ……………」

ララティーナは顔を真っ赤にして、モジモジしながら自分の本名を告げた。

ララティーナ…………。

僕はにやりと笑いながら。

「ララティーナ！ 随分可愛い名前じゃないかララティーナ!!」

みんな聞いたか？ 今度から彼女の事はララティーナ先生と呼ぶことにしようー！」

「はいー！ ララティーナ先生！ 改めて、今日はよろしくお願いしますー！」

ふにふらが、勢いよく手を挙げ、屈託ない笑顔でダクネスをララティーナ呼ばわりする。

「ち、ちよつと待つてくれ！ 頼むから私のことはダクネスと……」
「ララティーン先生！ 貴族だったんですね！ 道理で綺麗な訳です！」

「ララティーン先生！ フォアグラにキャビア乗せたり、寿司の上に寿司乗せて食べたりしてるんですか?!」

「するかそんなこと!! ダステイネス家ではエリス教にならない、貧こそ品と……」

「ララティーン先生！ 貴族には変態が多いって聞いたんですが、さっきのめぐみんの話はやっぱり本当……」

「ぬあああああ!!!」

「恥ずかしさの限界に達したのか、ダクネスはその場で頭を抱えてうずくまった。」

「やがてなにかブツブツと……」。

「おかしい……貴族だって分かってからの方がからかわれるとは、どういふ事なのだ……」

「忌々しげに言うものの、その声色はどこか嬉しそうだった。」

「僕は彼女の肩を叩き。」

「言つとくが、僕の国じゃ政治家だの国の上層部連中なんてのは普通に文句言われまくってたぞ？ なんなら僕自身、呼び出されても逆にからかって投げキッスしながら帰ったくらいだ。貴族だって明かしたくらいで君がちやほやされると思ったら大間違いだぞ？」

「紅魔族だって、権威だのなんだのには屈しない種族ですよ？ 王族にだってダメ口ですし」

「僕の言葉に、隣に居たねりまきが笑ってそう付け加える。」

「別にちやほやされたかった訳では無い……私はただ……」

「まあ、これで君の何かが変わるわけでは無いから安心しろよ。今まで通り、君はド変態クルセイダーのダクネスだ。君の名前をからかったのは、こっそりラボのグレネードを拝借して自爆して遊んだり、工業用のアームに突っ込んで、フライデーに自分の鎧を剥ぎ取れと命令したりした君に対するちよつとした仕返しさ」

それを聞くと、ダクネスはどこか安心したような顔を浮かべて。

「言いたいことはいろいろあるが……はは、そう言って貰えるのはとても嬉しい。ありがとう」

そう言つて、優しげに微笑んだ。

……ダクネスの変態プレイの内容を聞き、となりでドン引きしているねりまきには気がついてないみたいだが。

貴族は嫌いだが、ダクネスからは嫌な感じがしない。

僕が若い頃、亡くした両親から引き継いだ莫大な財産を狙つて、色んなやつが僕に近づいてきたもんだ。

おかげでゲスな奴は何となく分かるようになってしまった。

そんな僕が何も感じないのだから、問題ない。

………他が問題だらけだが。

——それからしばらくして。

午後の授業もフルに使い、ようやくタブレットやトラップ等の防衛設備の配置が終わつた。

日も落ちかけ、時刻は夕方辺りと言つたところか。

僕の前に生徒たちが整列し、その中から代表するようにめぐみんが前に出て。

「スターク先生。こんな感じでしょうか？」

「ああ。フライデー、システムチェックだ」

『了解しました、ボス』

僕の手にある端末に映し出されたデバイスのチェック項目に、緑色の光が次々と灯つていく。

オールグリーン。

「みんなよくやった。完璧だ」

僕その言葉に、生徒たちが目を輝かせ各々がツツポーズしたり、満足げにため息をつき始めた。

「これだけ準備しておいてこないって可能性もあるんだから、喜ぶのはクエストが終わってからにしてあげ」

歓迎の準備は整つた。生徒たちも頑張つたんだ、これで来ないなんて肩透かしは止めてくれよ。



クインジェットに戻って待つこと数時間。

空には月がのぼり、窓から射す月明かりでコックピッドが幻想的に彩られている。

もうそろそろ夜中だ。生徒たちも眠そうにしている。

というか、ほとんどの生徒は機材を降ろして広くなった床で雑魚寝して、寝息を立てている。

僕はエヴルー家の上空でクインジェットをホバリングさせ、義賊の侵入をまだかまだかと待っていた。

しかし……………。

「クリスのカンもハズレたか……？　ダクネス、君も寝てていいんだぞ。来たら起こす」

助手席に座っているダクネスに声をかけるが、彼女は腕組みしたまま首だけをこちらに回して。

「体力には自信がある。この程度問題ない」

「そりゃ…………頼もしいね」

僕は自分の座っている席をリクライニングし、星満天の夜空を見上げる。

「トニーこそ、椅子を倒して寝そうじゃないか。私が見張つといてやるぞ？」

「星空を見てるだけさ。というか、君警告ランプと電源ランプの区別つくのか？」

「……………？　よく分からんが…………光れば危険って事でいいのか？」

…………この女には絶対に何も触らせないようにしよう。

「盗賊が来たら、フライデーが知らせてくれる。コーヒー飲むか？」

「後ろの生徒に飲ませてやったらどうだ？　特にあの…………さつきから

トニーが『えいが』と言った映像作品を見てる子に……………」

ダクネスが心配そうな顔をしながら後ろを見る。

その視線の先には、タブレットに映し出された映画を見ながら、血

走った目でひたすらメモにペンを走らせるあるえの姿があった。

「……………まだ見てたのか。」

僕はコーヒーの入ったマグカップを片手に、床に転がって寝てる生徒たちをまたぎながらあるえの元に向かう。

「君も寝たらどうだ、あるえ。もう君たちの出番はほとんど終わったんだぞ？　重い機材運んだりして疲れてないのか？　それとも、そんなにスターウォーズが面白いのか？」

そう言ってマグカップを渡すと、あるえはそれを手に取って。

「ありがとうございます。ええ、面白いですよ。ダース・ベイダーはともカッコイイですね。言動、戦い方、威圧感、生い立ち、そして何より見た目……………全てが紅魔族の琴線にビリビリと来ます。インスピレーション受けまくりですよ。私の小説にさらなる閃を……………」

「いいや……………オマージュ、リスペクトですから……………どんな偉大な作家だって、必ず何かの影響を受けているのです。つまりはそういうことです」

珍しく焦ったような表情をし、口早にまくしたてるあるえ。

ちなみに、映画の中のキャラクターのセリフは、自動翻訳機能を使って下に字幕を表示させている。

この異世界の言語も研究の為に真っ先に翻訳機能に登録した。

と、あるえとスターウォーズについて語り合おうとも思った時だった。

『ボス！　屋敷に侵入者です！　センサーに反応がありました！』

フライデーの言葉に、寝てた生徒たちが次々と跳ね起きる。

「わっ！　き、来たの!?　銀髪の義賊が!？」

「見たい見たい!」

「ふっふっふっ……………見ものだね……………我々が張ったこの地獄の蜘蛛の巣から逃げることは出来るかな……………?」

「技術で築いた恐怖を過信してはいけない……………」

生徒たちが次々と屋敷内の映像が映されているコックピッドに殺到する。

早速ダース・ベイダーに影響されてる子がいるが、将来暗黒面に落ちないか心配だ。

群がる生徒たちをかき分け、運転席に座る。

「さて諸君。僕らが築いた要塞の力を見るとしようじゃないか」

「待っていたぞ。銀髪の義賊よ。ついに再会したな。宿命の環が閉じる……………」

この子はいつまでダース・ベイダーに影響されてるんだろうか。そもそも会ったことすら無いだろうに。

あるえのそのセリフを聞いて、めぐみんが興味深そうにあるえを見て。

「おや、そのセリフかつこいいですね、あるえ。あなたのオリジナルですか？」

「……………そうだよ」

「おい」

僕の視線に、あるえが気まずそうに僕から目をそらす。

つたく、バカやつてる場合じゃない。

「フライデー、状況は？」

『現在の東側の廊下を進行中。ですが…………』

「なんだ？」

『監視カメラ、小型ドローン、いずれも全て瞬時に破壊されています。正確な姿を捉えられません』

フライデーの言葉に、映し出されている映像に目を向けるとそこには……………

「すごい…………まるでカメラの位置が最初から分かっているみたい…………」

「なんて無駄の無い軽い動き…………」

姿が見えると同時にカメラに向かってダガーを振り下ろし、瞬時に破壊する小柄な影。

映ったのは本当に一瞬だ。月明かりに反射したダガーの一閃しか見えない。

その姿に生徒たちは……………。

「「「カツコイ……………！」」」

…………面白くないな。

「フライデー、攻撃ドローンを出せ。武装をオンラインにして出撃させろ。僕が指揮を執る」

『了解しました、ボス』

その場で立ち上がり、両手をガバツと広げる。

僕の動きに合わせて操作盤のホログラムが展開し、月明かりをかき消すほどの光が、イルミネーションショーの如くコックピッドを彩った！

「ゲーム再開だ」

オーケストラの指揮者もかくやと手を振り、次々とドローンを動かす。

「カッコイイです！今の先生はめっちゃくちゃカッコイイですよ！」

後ろから黄色い声援が飛んでくる。

僕は首だけ後ろに回して。

「だろ？僕の方があんなチビよりカッコイイって事を証明してやるよ」

「せ、先生案外子供っぽいのですね……………」

「何言ってるのよめぐみん、渋いオジサマ系のイケメンが、少し子供っぽいところを出す魅力が分からないの？」

「あなたが何を言ってるのですか!? どんどん、あなたは今相当ヤバいことを口走っていますよ!」

『M.s. ポツツにこの事は黙っておきますね』

後ろがやかましい。

僕は目の前の映像に集中する。

ドローンを操作し、センサーが反応を示した場所に向かわせる。長い廊下のど真ん中に立っているようだ。

流石に大量のドローンを一気に潰すことは出来ないのか、今度はその姿をハッキリとカメラの前に表した。

口元をスカーフで隠し、名前の由来であるその白銀の髪は窓から射す月光を反射し、キラキラとオーラののように淡く光っている。

「さて……………どこまでやれるか見せてもらおう」

三機を同時に突撃させ、捕縛用ネットランチャーの射程圏内まで距離を詰める。

十メートル、八メートル、六メートル……。

「今だー」

射程圏内に入ると同時に、ランチャーの砲門を義賊に向ける。

この狭い廊下なら避けられないだろう。

これで………。

『『ステイール』ッ！』

ドローンに内蔵されたマイク越しに聞こえる魔法の詠唱。

気が付けば、義賊の手にはドローンの一部が握られていた。

パーツを奪われたドローンが下に落ち、その機能を完全に停止させる。

………いきなり出てきたな。

僕がこの世界で一番警戒している魔法。

それは、雷の上級魔法でも、炎の上級魔法でも、爆裂魔法でもなく。

盗賊が使うあの魔法………ステイールだ。

効果は単純明快。相手の持ち物を一つ奪う。ただそれだけだ。

モンスターなんかに使っても、武器でも持ってなければ大して意味

の無い魔法だが………。

一部の敵には、致命的なまでの効力を発揮する。

………そう、複雑なパーツで出来たゴーレム系統の敵に対してだ。

この特殊な効果に目をつけた僕は、クリス達とパーティを組んだ時に、クリスに頼んである実験をした。

もし僕のスーツが所有物として認識されるのなら、恐らくこの魔法の効果の対象になるだろうと予測を立てたのだ。

結果は予想通りだった、僕のスーツのパーツが一瞬にして持ったか
れた。

石ころを持つなど対策法はあると言えど、僕にとっては天敵ともい
える魔法だ。

それにしても……。

「ピンポイントで主要パーツを持っていくとはな……」

「そ、そっか……………あれもゴーレムのような扱いになっちゃうのか……………」

「ったく、つくづく嫌な魔法だよ……………」

悪態をつきつつも、攻撃の手は緩めない。

ネットランチャーを装備したドローンを再び前に出す。今度は五機。手数で勝負だ。

そして後方の攻撃ドローンに機銃掃射させる。もちろん当たってるつもりはない、けん制の弾幕だ。

マズルフラッシュの閃光が薄暗い廊下を断続的に照らし、放たれた弾丸が窓ガラスを粉碎し、石畳の床を削る。

大抵の奴はこれにビビってまともに動けず、ランチャーで楽々捕縛って流れだ。

……………」

何を思ったのか、義賊はまっすぐ走り、手を前にかざしてすかさず叫んだ！

『『ステイル』ツ!!』

義賊の放ったステイルによって、前衛ドローンが一機撃墜され、無残なガラクタと化して義賊の足元に転がる。

そしてそのまま破壊したドローンを手に持ち……………」

『うおおおおおりやあああああッツ!!』

ドローンを盾に、弾幕の中に突っ込んだ！

「二はっ、はああああッ!?」

「ツ!」

生徒達が叫び、僕も思わず手が止まる。

その現状を知ってか知らずか、チャンスとばかりに義賊は畳みかけてくる。

「回避…………ツ!」

いや! この狭い廊下ではそれはできない! 作戦を逆手に取られた!!

隊列を組み、弾幕を張っていたドローンの編隊にガラクタを交えたタックルが突き刺さり、四方八方へとドローンが散る。

「ス、ストライク……」

生徒の誰かが、そんな言葉をボソツとつぶやいたが、ジョークを返してやる暇もない。

見事な一手だが、タックル程度で壊れるほど僕のドローンはヤワじゃない。

散ったドローンも、すぐに体勢を整え、今度こそ捕縛……。

そう考え、ドローンに攻撃命令を出そうとした瞬間。

義賊が懐からワイヤーを取り出し、円盤投げのようなフォームを見せた。

月明かりに反射し、手に持つワイヤーの元から先端へキラリと光が走る。

あれは……鋼鉄製のワイヤーだ。

義賊は体制を崩したドローンの群れめがけ、鋼鉄のワイヤーを水切り石を投げるかのように水平に投げた。

そして……。

『『バインド』ツ!』

義賊が詠唱をすると、投げつけた紐が意思を持ったかのように動き、ドローンを次々とからめとっていく。

散らばっていたドローンが鋼鉄の紐によって、一塊へとまとめられた。

「これは……!」

間髪入れずに義賊は一枚の丸まった紙のようなものを取り出す。

「せ、先生! マズイです! 義賊の狙いは……!」

めぐみんが叫ぶが、最後まで言い切る前にその丸まった紙を開き、まとまったドローンへ向けて叫んだ!

『『ライトニング・ストライク』ツツ!』

「ぐっ……!」

思わず目をつぶってしまふ。

バチツとはじけるような音とまばゆい閃光が発生し、ドローンからの映像がまとめて途絶えた。

「バカな……今のは……」

今のは雷の上級魔法……………。盗賊職のはずの義賊がなぜ……！

「スクロールです……………銀髪の義賊は、上級魔法が封じ込められたスクロールを使ったんです……………」

口を開いたのは、ゆんゆんだ。

彼女はそのまま話を続ける。

「伝導性のある鋼鉄のワイヤーで巻き取り、電撃の魔法でドローンを含めてショートさせたんだと思います……………」

「なるほどな……………」

手を下ろし、手動の操作を終了する。展開していたホログラムの光も消えた。

「あ、あの……………操作……………もう止めちゃうんですか？」

生徒の一人が不安げに聞いてくる。

「そうだとニー……………どうするつもりなのだ？ このままでは……………」

続くように、隣で黙って見ていたダクネスも。

「スターク先生、まだ何か策があるのですか？」

そして、めぐみんも。

僕はただ黙って椅子に座り直し、クルリと向きを百八十度回す。

「このままドローンをぶつけても、全て無力化されるだろう……………タレットも同様だ……………」

重々しく語る僕の言葉に、生徒たちの顔がどんどん暗くなっている。

そんな顔をするなよ。話はまだ終わっていない、依頼もだ。

言いながら、椅子のひじ掛けに付いているボタンを押す。

刹那、椅子の一部が変形、展開して僕の体にスーツを纏わせていく。

「?!?!?!」

見事だ、義賊君。第一ラウンドは君のポイントとしよう。

だが……………

「だが……………策ならある——」

立ち上がり、クインジェットの後部ハッチを開く。

カンツと、第二ラウンドのゴング代わりにマスクが閉じる音を響か

せ。

「――戦う」

ダクネスを連れ、月明かりと紅い眼光を背に、義賊の元へと急降下した！

▽

……上手く行っただけど、生きた心地がしない。

特に、あの弾幕に突っ込んだときはさすがに死ぬかと思った。

トニー……まさか屋敷をここまで要塞化させて来るとは思ってもいなかったな……。

作戦会議に参加していなかったらまず突破は無理だったろう。

でも、まだ気は抜けない。

私は足元の床や壁に張り巡らされた罠を慎重に解除して進んでいく。

それにしてもえげつない罠だ。

一つの罠を解除しようとしたら作動する罠や、作動してしまったら衝撃波で瞬時に意識を奪ってくるような強力な罠が蜘蛛の巣のように張り巡らされている。

……本当にえげつない。

なんにせよ、ドローンはほとんど破壊したし、タレットもドローンも敵感知スキルで居場所を特定してからステイルで安全に処理できる。

「フフフ……この世界の先輩としての面子を……何とか保てたって」
感じかな。

そう独り言をつぶやこうとした時だった。

「――！」

はるか上空に敵感知に反応が。

……上空!? こ、これは……。

速い！ ドローンの速度なんかじゃない！

しかも二つ……！

敵感知に反応があつてからほんの数瞬。

ドゴンツと凄まじい衝撃と破壊音がし、とつさに腕で顔をガードする。

一瞬で廊下が砂ぼこりに覆われた。

て、天井を突き破ってきた……！

「な……何!？」

粉碎され、穴が開いた天井から月の明かりがスポットライトのごとく穴の真下に降り注ぐ。

その光は、静まってきた砂ぼこりの中に二つの影を浮かび上がらせた。

「そ、そりやそうか……これだけやったんだたら……直接出向いてくるに決まつてるよね……」

砂ぼこりの中に、三つの光が見える。

それはまるで、暗闇に光る魔物の目のようで、されどどこまでも無機質な光で。

「やあ、銀髪の義賊君。初めましてかな？ 君……ヒーローなんだつて？ サイン貰えるかな？」

「神妙にしろ、侵入者。国を守るのがこのダステイネス一族に課された使命。ここから先には一歩たりとも進めぬと思え」

どうしよう。本当にヤバいかもしれない。

第11話 見せる女神の意地と執念

「降伏しろ。最初で最後の警告だ」

トニーが光る掌を私に向けて降伏を促す。

「この男の言う通りにした方が良い。彼の手から出る熱線の威力は……んんっ……強力だぞ」

知ってる………うん、よく知ってる……。だってパーティーメンバーだし……。

あと、私の親友は隣でため息ついているトニーに気がついてないのだろうか。

「さて、警告はしたぞ。言っておくが、僕らはさっきのおもちやの兵隊のようにはいかないぞ」

「はは……手厚い歓迎だね……」

左半身を相手に向け、半身の構えをとる。相手に見えないよう、ダガーを右手に握って。

傷つけるつもりはない。

……相手もそうだったらいいなあ。

「ごめんっ！」

先に動いたのは私だ。

トニーの足元目掛けてダガーを投げつける。

彼の弱点は、トニー自身が実験で教えてくれた。

それはステイル。

ステイルだけが私が今ここでトニーに刺さる唯一の武器！

ダガーがトニーの足元に突き刺さり、それにトニーが気を取られ……。

「これでけん制のつもりか？ お粗末すぎる」

……ない。それどころか、刺さったダガーをこちらに蹴飛ばし……。

——っ！ ちよっ!?

「あ、あぶなあっ!？」

私のスカーフを掠め、そのまま廊下の遥か奥の闇へと消えていっ

た。

「……いつもの高いダガーじゃなくてよかった。

「おいトニー！」

「叫ぶなダクネス。当てないように計算して蹴飛ばしたさ」

「そ、そういう問題じゃないと思うな!?!」

思わずいつもの調子でツツコンでしまった。

「……で、今のは投降の証として武器を捨てたんじゃないんだよな?」

ふざけてる間に、トニーが再び掌をこちらに向ける。

この狭い廊下でリパルサー光線を撃たせちやいけない!

私も即座に掌を相手に向け……。

「『ステイー』」

「任せろ！」

が、私が唱えるよりも先に、ダクネスが私とトニーの間に飛び込んできた。

思わず手を止める。仲間の盾になる時はとても速いのがダクネスだ。

トニーを背にして手を広げ、盾になっている彼女は不敵に笑う。

「フツフツフ……ステイールか? 残念だったな、この男にステイー

ルが致命的に効くのは把握済みだ。私が全て防いで見せよう！」

「……なんで言ったんだ?」

「あつ……す、すまん……」

当事者なので知ってるとは言えない!

私は素早く背中に手を回し、予備のワイヤーを手取る。

騎士系の職は盗賊職と相性が悪い。まずはバインドで素早くダクネスを封じて、盾を崩す。

軌道が見えないよう、暗い足元を這わせるようにワイヤーを投げた。

「『バインド』ツ！」

詠唱と同時に、放たれたワイヤーがヒュンツとダクネス目掛けて飛んでいき、その体にまとわりつかんと……。

……した瞬間、私の目の前の空間が歪んだ。

それからほんの一瞬遅れて、ゴウツと衝撃波が私の体を駆け抜けた

！

「ふわーっ!!」

為すすべなく地面を転がってしまおう。

先ほどの弾幕から生き残っていた廊下の窓ガラスが全て砕け散り、廊下は再び砂ぼこりにまみれた。

い、今のは……………!

私が入が付くと同時に、砂煙の向こうからその答えが返ってくる。

「やっぱりこのエアバーストは……………私が望むシチュエーションからは遠ざかってしまう代物だな……………」

「そうか。君の望むシチュエーションは明日からギルドのみんなにラテイナーナって呼ばれる事か」

「ごめんなさい……………」

……………仲良くできてるみたいで何よりだ。

でも、これはチャンス。

ダクネスのエアバーストで床の砂塵が巻き上げられたおかげで、相手からは私が見えていない。

私は潜伏スキルを発動させ、策を用意してこっそりと二人の元へ。後もう少しという所で、聞き覚えのある音が静かに響いた。

キュイーンという、何かをチャージしているような音。

その音が鼓膜に届くと同時に背筋が凍り、全身に戦慄が走る。

り、り。リパルサー・レイのチャージ音!

「ふ、ふわーっ!!」

砂煙の中にキラツと何かが光ったかと思うと、一条の光が砂煙を突き抜け、私の顔のすぐ横を通り過ぎた。

し、心臓が持たない……………!

ゆつくりと、地面に散らばったガラスを踏み砕きながら、トニーがこちらに向かってくる。

「残念だったな。サーモバイザーを使えば潜伏スキルは簡単に見破れる。生気で探知するアンデッドに潜伏スキルが通用しないようにな……………。それに、何を隠そう、僕のパーティーメンバーにも盗賊職の子

がいてね。前に潜伏スキルを使ってる彼女をこっさりサーモバイザーで見してみたんだ。結果は見ての通り。まあ、君にこんな話しても分からないだろう」

勝手に何をやっているのだろうこの人は。

いや、潜伏スキルを使うモンスターはいるし、対策として実験したんだろうけど……。

「あつ、この事彼女には言うなよ？」

本人ですけど。

………これは完全に想定外。

予想以上にトニーがこの世界のスキルや魔法に対して知識を蓄えている。

まさかアンデットの性質を知り、そこから科学技術を応用して潜伏スキルを破ってくるなんて……。

「いやあ……こんな手ごわい屋敷は初めてだよ。どうしてこんな大きくもない悪徳貴族の護衛を？」

「なに、プロとして仕事に徹しているだけさ。泥棒ごっこする悪ガキを捕まえるっていう仕事にな」

………彼を、試すつもりだった。

アイアンマンについて綴られた書類だけではわからないことがある。

だから、彼を知ろうとした。トニー・スタークを知ろうとした。

一緒にクエストに行つて、一緒に打ち上げて。そして、こうして手を交えて。

どんな風に戦うのか、彼はどんな風に世界を救うのか。試してみようと思った。

だが、とんでもない——

「………で？ 万策尽きたか？ ヒーロー」

——試されているのは、私の方だ。

にしても、暗闇の中、砂煙の向こう側から目と掌を光らせてそのセリフを言うのは………なんというか、すごく悪党っぽい。

「言ったら策にならないと思うなあ！」

熱探知。確かにそれを使われたら、あたしがどこにいるかはお見通しだろう。

でも、裏を返せば熱を持っていないものは探知できない。

つまり、私が今何を持っていて、何を仕込んだかまでは見えていないって事だ。

私が身に着けているワイヤーを使い果たしたので、トニーはバインドを警戒していないだろう。

「トニー！ 私より前に出るな！ ステイルを食らったらどうするつもりだ！」

「砂ぼこりで君はまともに見えないだろ？ いいからしばらく待機してろ」

トニーがダクネスに待機命令を出す。

ダクネスのエアバーストはかえって好都合だった。

私は地面にすぐさましゃがんで手をつき、あるものをギュツと握りしめる。

握りしめたのは、先ほど仕込んだ頼みの綱。

「なんだ？ やっぱり降参——」

『バインド』ツ！」

「ッ!？」

廊下のカーテンを結び合わせてできた長い即席のロープが、トニーの手足をからめとった！

私がダクネスのエアバーストで吹き飛ばされたとき、無意識に窓のカーテンをつかみ取っていた。

そこから思いついた策だったけれど……上手く行ったようだ。

外れたカーテンを繋げ、ロープを作っている時に分かったが、このカーテンはお金にものを言わせて作った超高級品だ。

丈夫で切れにくく、天気によって遮光性を変える高価な魔繊維が使われている。

いくらアイアンマンスーツと言えども、すぐさま引きちぎることはできないだろう。

私は手元にある、トニーとつながったロープを思いつきり引つ張

る。

「いい策だが、君程度の力で僕が転ぶと思っているのか!!」

両足を縛ってくっつけているとはいえ、重いアーマを装着したトニーを転ばせるのは一苦労だ。

でも、転ばせるのに必要なのは力だけじゃない。ただほんのちよつと、足裏と床に隙間ができればいい。

あとは、トニーのバランスをほんの少しだけでも崩して、自分の幸運を信じるのみ。

両手でしっかりとロープを握り、歯を食いしばり、全身全霊の力を込め、体を反転させて引っ張る。

「はあああッ!!」

「ぐっ……」

グラリと、トニーの体が少しだけ揺らぎ、バランスをとるために、縛られたままの両足で小さく跳ねる。

その着地点は……、

ドローンが機銃掃射でばら撒いた空葉莢の上!!

これで……——

——……あれ?

トニーが転ぶ感触も、地面に倒れる衝撃も、一切伝わってこない。おそろおそろ体を戻すと…………。

そこには、棺に入れられた人みたいな体勢で足の裏からリパルサーを照射して浮かぶトニーの姿があった。

そ、そんな…………。

「どうした? 空飛ぶ鎧は初めてか? 足をそろえて縛るべきじゃなかったな。残念だが、これでもうゲームオーバーだ」

腕に力を入れたのか、巻き付いたロープがギシギシと悲鳴を上げ始める。

でも……。

「まだやれるよー!」

できる限りの前傾姿勢をとり、地面を踏み砕かんばかりの勢いで前へと蹴り出て、ロープを引っ張る反動も利用してトニーの元へと猛ス

ピードで突っ込む。

正真正銘、これが最後の悪あがきだ。

「ッ!? 随分と諦めが悪いやつだな!」

全体重を乗せたタツクル。浮いてるトニーは地に足をつけて踏ん張ることもできないため、そのまま私と一緒に地面に倒れ、数メートル程滑る。

「ト、トニー!? 大丈夫か!」

地面を滑った際に、ダクネスを通り過ぎたみたいだ。

彼女の声が背後から聞こえる。

ダクネスがこちらに走り出す足音が聞こえるが、ステイールを一発撃つ位の時間ならある!

馬乗りになっっているトニーにすかさず掌を向ける。

「ば、万策尽きたかな!」

我ながら負けず嫌いだ。

自分の運の良さから言って、トニーのスーツの主要パーツを確実に奪う自信はある。

ちなみに、前回実験でトニーにステイールをかけた時は、胸に灯るアークリアクターを抜きとってしまい、私は手にやけどを、トニーはスーツの修理に徹夜するという大惨事になった。

運が良いのか悪いのかわからないけれど、今回はちゃんと対策をしてきた。

それが今日ほめてきた、このファイアードレイクの皮を使った手袋だ。

これなら高熱のリアクターを握っても問題ない!

……?

……なんだろう?

トニーの胸の光が、輝きを増していく。

「サービスだ、教えといてやるよ。今僕の上からどけば、君は五体満足で牢屋に入れるぞ」

……これは見たことが無い。トニーについて記された資料の内容は、彼が元の世界で成したことと、善行と悪行。

彼の技までは載っていないかった。

そして、トニーはこんな状況ではつたりを言うような男ではない。私のカンが告げている。これ以上は、取り返しのつかないことになりそうだと。

もう十分だろう。ここまでだ。

私はゆつくりとトニーに向けた手を下ろした。

「……………いい子だ」

トニーの胸の光も、段々と小さくなる。

……少し、頭に血が登りすぎていたかもしれない。

今日トニーと手を交えて、私は彼についてよく知ることが出来た気がする。

私は今まで、トニーがスーツで戦ってる所しか見たことがなかった。

だから、トニーの武器はスーツなのだと思っていた。

でも、それは間違いだったのだ。

トニーは、この屋敷をほんの数時間で鉄壁の要塞へと変えた。

そしてそれは、紛れもなくのトニー自身の力で作り上げたものだった。

私は、スーツを纏ったトニーがアイアンマンではなく、彼自身がアイアンマンなのだという事を、この理不尽な屋敷に侵入して理解した。

私とダクネスの装備を作りあげた時点で気が付くべきだったな……………。

ゆつくりと、私は口を開く。

「ねえ、その……………どうか聞いてほしいんだけど……………あたしはぐっはあっ!？」

途中まで喋ったところで、背後から強烈な一撃をもらい、トニーの上から吹き飛ばされる。

「……………聞いてるぞっ?」

完全な不意打ちだ。敵感知にも反応があったのに、トニーに夢中になりすぎた!

い、いたた……。

背中をさすりながら立ち上がると、一機のドローンが私に背を向け、トニーの方を向きながら。

『スターク先生！ ダクネス先生！ 大丈夫ですか！』

ドローンに搭載されたスピーカーから聞こえてきたのは、まだ幼いと若いの間と言った印象を受ける声。

「その声、めぐみんか？」

倒れていたトニーも、驚いたような声色をしながら立ち上がる。

あ、もうロープちぎられてる……。

『ええ、私です』

「……一体いつからドローンの操作なんてできるようになったんだ？」

『十分前からです。操作方法は隣で見てたので、大体わかってますよ』

「……優秀な生徒を持ってうれしいよ」

「す、すごいな……私なんて何もわからなかったぞ……」

めぐみんが操作しているドローンは、トニーの安否を確認すると、クルリと回って機体の正面を私の方へと向ける。

ドローンの前部についているサーチライトから放たれる光がまぶしい。

私を光で照らしながら、そのドローンは。

『さあ、これで三対一です！ おとなし……く……』

だんだんと、声が尻つぼみになっていく。

……？ どうしたんだろう？

見れば、トニーもマスクを開けて、今まで見たこともないようなあつげにとられた顔をしている。

ダクネスに至っては、放心状態って感じの……。

ま、まさか……！

ハッと我に返り、自分の顔に手を置く。

手袋越しに感じる素肌の感覚に心臓が跳ね上がり、冷や汗が背中を伝う。

「クリス………？」

絞り出すようなダクネスの声に、体がびくりと震える。

「あ、あはは……や、やあ……」

「様になる場面でこっちからカツコよく……とは言えない名乗りだな……」

呆れたような口調でトニーが言った。

……何も言えない。

「……それじゃ、話を聞かせてもらおうか？」

▽

屋敷の庭にクインジェットを着陸させ、機体の中に戻った僕達は、正座をしているクリスを生徒含めた全員で囲んでいた。

「さてクリス……なにか申し開きはあるか？」

腕を組んだダクネスが、クリスの真正面に立つ。

にじみ出る剣呑な雰囲気、生徒たちもどこかおびえた様子だ。

「えっ……えつとね……いい、いやちよつと待ってダクネス！ ああああああ！ 頭割れちゃう！ まだ何も言っていないのに！」

頭にアイアンクロウを食らったクリスが、ダクネスの腕をタップして悲鳴を上げる。

「言いたいことがあるなら聞いてやるとも！ これはただの準備運動だ！ だが、返答次第によっては頭がヤシの実のように握りつぶされると思え！」

「……ヤシの実って素手で握りつぶせるものでしたっけ……？」

「さあな……モンスター基準で言えばそうなんだろ」

物騒なことを言い出すダクネスと、くだらない言い合いをする僕とゆんゆん。

「わかったから放して!! これじゃまともにしやべれないから！」

「おいダクネス、いい加減放してやれ。まずは話を聞いてやれよ」

「……ハア」

「ううっ……脳みそはみ出るかと思った……」

クリスはダクネスから解放されると、涙目で頭をさすりながら経緯

を語り始めた。

「――女神エリスの信託を受け、神器を回収ねえ……」
中々上手く考えたじゃないか。

僕がほくそ笑みながらクリスの方を見ると、クリスは気まずそうにフイツと視線を逸らした。

「……大体事情は把握した。しかしだ……いかに親友といえど……罪人を見逃す訳には……」

「うっ……だよね……」

僕としては見逃してやりたい所だが、クレアと取引をしてしまった以上、取り逃したなんて結果は絶対に駄目だ。

僕の発明品を配備する。

それはすなわちこの世界の平和に繋がる。

クリスを見逃して取引をフイにするか、クリスを逮捕して取引を成功させ、世界平和に一歩近づくか。

天秤にかけるまでもない。

とはいえ……

「スターク先生……」

それは、生徒たちの中からボソツと聞こえた非難のようにも聞こえる僕を呼ぶ声。

その声に振り向くと、生徒たちが僕とダクネスを何とも言えない目で見ていた。

「うぐ……」

その目に、ダクネスがばつの悪そうな顔をする。

「君達がこういう弱きを助け強きをくじくようなヒーローが好きなのはわかるが、そんな目で僕らを見るな。僕だって、パーティーメンバーを自らの手で牢屋にぶち込むなんてことはしたくない。そしてダクネスも、親友かつパーティーメンバーが貴族の屋敷に侵入して盗みを働く奴だってバレたら、貴族としての立場が悪くなるだろ」

「別に、私の貴族としての立場などどうでもいい。だが、見逃してしまつては……それこそ友のためにならないのでは……」

「頭が固いな……清濁併せ？めるようになれよ、ララティーナ。だが正直、僕はクリスをこのまま逃がしたらあまりよくない状況になる。そこでだ、間を取った良いプランがある」

僕の良いプランという言葉に、クリスが何かに気が付いたような顔をした。

「お察しの通り、ようは彼女を捕まえたという事実だけあれば良いんだ。その後のことは僕達には一切関係ない」

「それって……」

「そういうことだ。クリスを引き渡した後で、彼女を脱獄させる」
生徒たちの顔が一気に明るくなる。

だがダクネスだけは暗い顔のままだ。

「おいダクネス、納得できないのか？」

「……難しい所だ。これが正しいような気もするし、そうでないような気もする……」

「もちろん、法に則って悪徳貴族を潰せるならそれに越したことはない。だがな、君だつて仮にも貴族なら分かるだろ？ 法じや裁けない奴がいるんだ。特に、貴族の権力が強いこの国じやな。クリスが仕事をする方が、世のため人のためになると思わないか？」

「ト、トニー……」

「う、うむ……」

僕の言葉にクリスが感動したような声を出し、ようやくダクネスも納得の表情を見せ始めた。

「という訳だ。銀髪の義賊脱獄作戦。異議のあるものは………いないな。よし、これで行くぞ。後は、彼女が逃げるシナリオな訳」
「はい」

シナリオという言葉にいち早く反応したあるえが、目にも留まらぬ速さで手を挙げた。

自信満々な顔を隠そうともしないあるえは、なにやらよく分からないポーズを取り、ダースベイダーのテーマを口ずさみながら前へ出て。

「我が名はあるえ！ 紅魔族随一の発育にして、やがて作家を目指す

者！」

「——シナリオライターを………私に任せてください」
そう言って、ニヤリと笑って見せた。

▽

——それから三日ほど経ち、この里に来てから早くも一週間となった。

結果から言うと、クリスの脱獄作戦は成功した。

クリスが捕まらなきや僕の取引は失敗として水の泡になる。

ダクネスもクリスを捕まえたら彼女自身の貴族としての立場が悪くなる。

だが、僕もダクネスもクリスを危険に晒すような真似はしたくなかった。

僕はともかく、ダクネスに至っては銀髪の義賊Ⅱクリスという事が発覚すること自体が不味い。

つまり、最もベストな終わり方は、銀髪の義賊は捕まり、その輸送の道中で彼女の素顔が暴かれること無く、彼女が脱出すること。

僕の取引、ダクネスの立場、クリスの安否。

それら全てをクリアするシナリオはこうだった。

まず、僕のラボにあったナターシャ・ロマノフの潜入工作用フェイスマスクを使ってクリスの顔を変える。

その後で蚊程度の大きさの小型のドローンを彼女の服に忍ばせておき、輸送中に展開。見張りに麻酔を注射して眠らせ、無力化する。

見張りが倒れたのを確認し、服の隙間やブーツの裏等にパーツをバラバラにして仕込ませた小型アセチレンバーナーを組み立て、手錠と扉を焼き切って脱出。

B級スパイ映画のシナリオだったが、彼女は上手くやってのけたよ
うだ。

おかげで僕の取引は大成功。

今まで誰もなし得なかつた義賊捕縛の功績をたたえられ、正式に王都への僕の装備の配備が決まり、資材も資金もたっぷり手に入った。輸送中取り逃がした件については、僕の管轄外だったということまで責められることはなかったが、この先もう一度捕まえ、今度はその輸送も頼むと依頼をされた。

王都防衛線の装備生産、配備などで忙しくなるため保留という形でやんわりと断ったが……まあ、また次回があつたらその時も上手くイタチごっこを演じれば良いさ。

それと、もう一つ……。

「魔法の研究は進んでるか？ 『流星の鎧に身を包みし者』 トニー・スターク！」

僕に変なあだ名がついた。

この里では、派手な活躍をした者や気に入った者に二つ名をつけるみたいなのだが……。

銀髪の義賊を捕縛したことと、鎧がかっこいいからという理由で僕にも二つ名が付いたそうさ。

ちなみにその二つ名の由来は空飛ぶ姿がまるで流星のようだったからとかなんとか。メルヘンチックなことだ。

「魔力は生体電気に酷似していた。体の中に流れる生体電気を……」

今はお昼近く。

僕はランチの『死の女神による永遠の炎で揚げられしカツサンド』を食べながら、喫茶店の店長に魔法について得た知識をひけらす。

カツサンドを食べ終え、知識をひけらかし終えた僕は学校の図書館へ向かい、今日も図書館で魔導書漁り。

ちなみに、里にある秘密の魔導書とかの大半は先祖代々伝わる漬物の漬け方とか、おばあちゃんの知恵袋とかくだらないものを仰々しい札とかで飾っているだけの代物ばかりだったのでその場で捨てた。ひどい肩透かしだ。

コーヒーという名の精神安定剤を片手に図書館で魔獣関連の本を

読み漁っていると……。

目の前の席に、見慣れた生徒の一人、めぐみんが座っていた。

「……君、授業は？」

「午後の授業は体育ですので……調子の悪い私はここで休んでいるのですよ」

「とてもそうには見えないけどな……」

「私の中に封印されたアレが目覚めようと……」

「へえ。サナダムシか？ アニサキスか？」

僕のジョークにめぐみんは顔をムツとさせて机をたたく。

コーヒーがこぼれるからやめてほしい。

「なんで寄生虫なんですか！」

「なんか野生生物を捕らえてムシヤムシヤ食ってそうだからな」

「ちよっ……いくら何でもデリカシーが無すぎですよ!? 確かに我が家は貧しく、自然の恵みにあやかるところもありますが、そんな何でもかんでも捕まえて食べてるわけでは……わけでは……」

「食べてるのか」

「……よく噛めば死にますよ」

「……調子悪くなったら言えよ。僕のラボでスキャンしてやるから……」

と、めぐみんを軽い言い合いをしていると、空に巨大な炎が打ちあがった。

あれは……。

「あれは、スターク先生への合図ですか？」

「だな……それも、結構大ごとのようだ」

空に浮かんでいるのは、僕のアーリアクターの形を真似た逆三角形の炎。

よく魔法が打ちあがる紅魔の里で、僕への合図がわかるようにと考えて作った合図らしい。

……押せば僕につながる端末でも渡そうと思ったのだが、こっちの方がカツコイイからと断られてしまった。

全く、ここは本当に素敵な場所だ。

「それじゃまたな、めぐみん。やっぱりからかった君の反応を見るのは楽しいよ」

「……私が爆裂魔法を覚えたら、先生を最初のターゲットにしても良いですか?」

「望むところだが、賢い頭脳を持っているなら耐えられたうえで反撃されることも視野に入れておけよ」

コーヒーをグイツと飲み干し、図書室から外へと出てスーツを装着する。

めぐみんの紅い眼光をバックに、僕は合図があつた方角へと飛び立った。

——呼び出しの魔法が放たれた場所の元まで飛んでみると、そこにいたのは里のニート、ぶつころりーだった。

「よく来てくれた、外の……いや、スタークさん。これは極秘任務でね……」

「だったらあんなでかかと合図を送るなよ……」

「いや、極秘というのはカツコイイから言ってみたか?……わ、悪かった! 俺が悪かったから掌をこっちに向けないでくれ!! あつ……でもカツコイイな……そのポーズ……」

「……で、僕を呼んだ訳はなんだ?」

ふざけたことを抜かすニートを黙らせ……いや、黙ってないが本題を促す。

「邪神や!」

「……邪神?」

得意げに言うぶつころりーに、思わずオウム返し気味に尋ねる。

すると、ぶつころりーは親指でクイツと後ろにある魔法陣みたいなのが描かれた石碑を指さした。

「この里には邪神が封印されているんだけど、どっかのバカがそれを解こうとしたみたいだね。今こうして再封印の準備をしてるんだ。スタークさんに頼みたいことは、封印に失敗して邪神の下僕が出てきたら殲滅するお手伝いをしてほしいんだ」

「H m m……なるほど、了解。それじゃ、僕は向こうでポップコーン片手に邪神の封印とやらを見てるよ」

言ってる事の意味あまりよく解らなかったが、要するにあの魔法陣から化け物が出てきたら仕留めればいいって事だろう。

僕は適当にその辺に腰を掛け、ロックな音楽を流す。

いきなりくつろぎだした僕を見ても特になんら反応することもなく、ぶつころりーは作業しながら僕に質問してきた。

「ところでスタークさん、今日は学校じゃないのかい？」

「今日は非番だ」

「そっか。学校はどう？ 俺もあの学校は行ってたから、生徒たちのことが気になってね」

「まあ……悪くない。ちびっ子たちは楽しんで授業を受けてくれてるし、頭もいいから教えがいがある」

「へえ……外のことを教えてるって言うけど、例えば？」

「そうだな……前は一緒にクエストに連れて行った。銀髪の義賊の捕縛にな」

ぶつころりーはそれを聞いた途端、飛び出しそうな程目を見開き。

「はっ……えっ……あれってスタークさんが単独で捕まえたんじゃないかって、生徒総出で捕まえたの!？」

「ああ、クエストを体験するって授業だ。終わった後に、ギルドの酒場で打ち上げだっただろ」

「い、いいなあ……」

『酔ったボスが売られた喧嘩を買って暴れられたせいでしばらく出禁になっていなければ、いい話で終わってましたね』

フライデーがうるさい。

大体あれは絡んで来たチンピラを撃退しただけだろうに。

「おいぶつころりー、手を動かしてくれよ。早く帰りたいんだから」
「あ、悪い悪い。しかし羨ましいなあ……」

ぶつぶつ言いながら持ち場に戻っていくぶつころりー。

授業の話でクラスの子供たちを思い出し、ふと次の授業で何をしようか思慮にふける。

そう言えば、めぐみんがドローンの操作を瞬時に覚えてたっけな。あの子は天才気質だが、他の子達だって覚えさせれば操作はできるはずだ。

生徒達にドローンを操作を覚えさせ、今度は討伐クエストを手伝ってもらうのもありかもしれない。

そんな風に、何かアイディアを考えてはデータ内のメモ帳に書き留めるなりして時間を潰す。

……どれくらい経つだろうか。空が赤い事から察するに、もう夕方近いだろう。

随分拘束してくれるものだ。

スーツを着たままその辺の草原に寝っ転がって、データをまとめたりブーツとしていたのだが……。

ふと気が付けば、人が増えていた。ぷっちんの姿までである。

そして、そこにいる人たちの表情はなんだかヤバイといったような、でもそれをどこか望んでいたかのような、ワクワクした表情で。

……いや、さっぱりわからん。

変なものを封印してるんじゃないのか？

話を聞こうと、体を起こしてみんなに近づこうとしたその時。

「封印が解かれるぞー!!」

誰かが叫ぶと同時に、石碑からピシリと音が聞こえ、どす黒い闇色の光柱が魔法陣から空へと伸び……。

「迎撃態勢を取れーっ！ いざとなったら奥の手を使っても封じ込めろ!!」

大量の蝙蝠みたいなモンスターが、まるで蚊柱のように空で展開した。

ざっと数えても数百はいるだろう。気持ちが悪い。

叫んでる紅魔族の連中は、心なしか演技がかった表情と声をしているのが気になる。

なんてことを思っていると、ぶっころりーがどこか嬉しそうな顔をしながら。

「スターク先生！　お願いします！」

……………。

「まあ、別に構わないが……なあ、この現象をワザと起こしたりしてないよな？　邪神の封印が解けたとかってワードに痺れてやったとか、飛んで戦う僕が見たかったとか、そういうことじゃな……おい、僕の方を見ろよ」

こいつら演出の為に村に化け物を放つことさえいとわないのか。さすがの僕でもそこまではしないぞ。

「はあ……つたく、終わったたら一杯奢れよ！」

「おお！　いいセリフだ！」

ずっと寝っ転がってなまり始めた体の準備運動にはもってこいかもしれない。

マイクロミサイルを展開し、空を飛ぶモンスターたちをロックオンし、一気に発射する。

ミサイルと並行して飛ぶかのようにその場を飛び立ち、モンスターの群れの中へと飛び込んだ！

「つたく、どれだけいるんだ……！」

まるでイナゴの群れの一部になった気分だ。

リパルサーを何処に撃つても敵にあたる。

所々爆発音や雷のような音が聞こえるあたり、下にいる紅魔族達も迎撃してくれているみたいだ。

「スタークさん！　群れの一部が離れて西側に向かっている！　こっちは俺たちに任せて、そっちを追ってくれないか!?!」

下からぶっころりーが大声が聞こえてきた。

大声で返すのも面倒だったので、返事代わりにそのまま離れていった群れを追いかけた。

こいつら、攻撃してくるでもなく、ひたすら周りをキョロキョロと見まわし、何かを探している様子だ。

……気になるな。

いったん攻撃を控え、僕は群れを追いかけることにした。

——群れを追いかける事数分。

大体こいつらの思惑が読めてきた。

こいつらは、明らかに何かを探している。

それも、尋常ではない必死ぶりだ。群れの仲間を叩き落しても、こいつらは僕に応戦するより回避に専念し、ひたすら地上を探し続けている。

……連中が探し続けているものも気になるが、今も地上の紅魔族達がこのモンスターの群れをせん滅しよう^{?!?!}と奮闘している。

そろそろ僕の方も片をつけるべきだろう。

群れの観察を切り上げることにした僕は、そのままモンスターの群れ全てに照準を合わせ、一気にせん滅しよう^{?!?!}と——！

『「エクスプロージョン」—— ツツツツ!!』

「ぐあああああああ?!?!」

瞬間、目の前が真っ白に染まり、スーツ越しにすさまじい衝撃が駆け抜け……。

突如発生した破滅的な威力の何かに巻き込まれた僕は、空中の制御を完全に失い、そのまま地面へと墜落する。

落下と共に意識も遠のいていく。クソ、今の衝撃で頭にダメージをもらったか……。

意識を手放す刹那に見えたのは、陽もほぼ落ちて暗くなりかけている空に咲く巨大な炎の大輪だった——。

第12話 爆ぜろ焰のつむじ風

【システム再起動中……】

【損傷個所確認……損傷率21%……エネルギー供給回路、および武装に異常なし……外部装甲に損傷を確認】

【バイタルチェック完了……診断結果……軽度の脳震盪と軽度の打撲】

【システム再起動完了……F・R・I・D・A・Y・オンライン】

『ボス、ボス！ 起きてくださいボス！』

……？ なんだ……？

「スターク先生！ 起きてください！ 大丈夫ですか!? スターク先生！」

「めぐみん、なんてことするのよ！ 先生を吹き飛ばすなんて!!」

「まさか先生が空を飛んでいるとは思わないではないですか!」

「ねえ、スタークおじちゃん生きてる？ 大丈夫?」

叫び声がスーツ越しにビリビリと響いてくる。

「こ、これどうしたらいいんだろう!! 鎧越しだから、心音も聞き取れないし……」

「お、落ち着くのですゆんゆん……まずは兜を開けるのです!」

「いやあんたこそ落ち着きなさいよ!! その手に持つてるでかい石は何よ!?! あんたまさかそれで……」

「そのままかです! これでぶっ叩いてこじ開けましょう!」

「でつけえ貝を食べるときみたいだね」

うるさいな……。一体誰だ?

ゆっくりと目を開けると、視界にHUDが映し出す様々な警告が目飛び込んで来る。

……Wow、衝撃で全身があちこち歪んでいる……。まったく、一体何を食らったってんだ?

というか……。

「……君何してるんだ?」

「せ、先生!!」

僕の声に気が付いた三人娘の顔がぱあつと明るくなる。

……いや、違う。そうじゃない。

めぐみんがゆんゆんに肩を貸してもらいながらも手に握りしめるソレに、僕の目は釘付けになっていた。

「めぐみん、君手に何持つてるんだ？ 目覚めのキスの用意には見えないんだが」

「見ての通り、石です。これで兜を破壊しようと思いましたが」

「……それから？」

「……ゆんゆんが人工呼吸をする予定でした」

「ええっ!? 私にさせる気だったの!？」

「ゆんゆんのファーストキスは鎧のおじちゃん？」

「やめてこめっこちゃん！ 変なこと言わないで！」

別にこんな小さな子供にキスされても全くうれしくないが、こうも嫌そうな反応をされるとそれはそれで腹が立つ。

が、彼女らのコントに乗ってる暇はない。

とりあえず確認しておかなくてはいけないことがある。

あの大爆発の正体だ。

僕はマスクを開けてめぐみんに問いかける。

もし僕の予想が正しければ……。

「なあ、めぐみん……さっきの大爆発なんだが……」

僕の言葉に、めぐみんとゆんゆんがびくりと震える。

「……あれ、君がやったのか？」

めぐみんはそのまま、小さくこくりとうなずいた。

やっぱりか……。

体を起こし、ふとめぐみんを見ると、彼女はひどく表情を沈ませていた。

……なんだよ。念願の魔法を手に入れたつてのに。

「あの……ごめんさい、スターク先生……巻き込んでしまって……」

「Huh? 別に謝る必要なんてないさ、大したことなかったしな。

あ、それと魔法取得おめでとう。これで君も卒業だな。ピザでも取ってお祝いパーティーなんてどうだ？ 王都に美味しい店があるんだ。

僕なら世界一早くピザのお届けが出来るぞ?」

ペラペラと軽口をまくし立てる僕に対して、めぐみんはクスリと笑って。

「……先生は優しいですね。そんなボロボロになっているのに軽口を叩くなんて……」

「いや、実際大したことなかったから言ってるんだよ。僕が作ったミサイルの方が強い」

僕が鼻で笑ってそういうと、今度はめぐみんの眉がキリキリと吊り上がり……。

「ほうほうほう! 言ってくれますね!! 鎧がこんなになって地面でしばらく伸びてたクセに!!」

「これはすることがなくなっただから横になってただけさ。スーツだって少し煤が付いた程度だよ」

僕はめぐみんの前に腕を突き出し、アームミサイルやペタワットレーザーの射出機構を展開したりと、パーツをガチャガチャと動かしてみせる。

すると吊り上がってた眉が戻っていき……。

「……………」

「……いや、見とれてどうするんだ」

僕のツツコミにめぐみんがハツとした表情を浮かべて。

「そ、そうです! スターク先生! 急いでここから離れないといけません!」

「なんでだ?」

「先ほどの爆裂魔法で、里の大人たちが集まってきました。この状況が見られるのはあまりよくありません。というか、誤魔化すのがめんどくさいです」

「めんどくさいってあんた……」

肩を貸してもらいながら気だるげにそう言うめぐみんにゆんゆんが呆れたような視線を向ける。

「なるほどな……爆裂魔法使ってまだみんなにはバレたくないわけか。頭がどうかしてると思われるもんな?」

「うぐっ……そういうことです………いずれ覆してみせますがね！」

「ゆんゆんは知って……いや、詳しい話はあとで聞く。とりあえず僕に掴まれ」

「すいません……こめつことこの子もお願いします」

「うなう」

くたびれた様子のめぐみんの目線を追うと、そこには空を飛ぶのは初めてなのか、目を輝かせるこめつこと、こめつこに抱かれてる謎の黒猫がいた。

……翼とか生えてるんだが、本当に猫なんだよな？

「とりあえずそれぞれの家まで送り届けてやる。手の力を緩めるなよ！」

全員がつかまつたことを確認してから、それぞれの体に電流を流して手が開かないようにし、めぐみんの家へと飛び立った。

「あの、なんかすごい手がビリビリするんですけどー！」

「我慢しろ、落とされたいのか!?!」

▽

——それから数日。

あの時、里の人たちが来る前に飛び去ったのと、めぐみんが引き起こした大爆発は僕の試作武器の実験結果だと誤魔化したおかげで、あまり大ごとにはならなかった。

いや、試作武器って言葉に反応した紅魔族達にあれこれ聞かれたが………。

まあ、結果オーライだ。

翌日僕と担任教師のぷっちんでこったり絞ってやったが。

それと、一連の騒動で学校は休講となったが、魔法を覚えたというめぐみんとゆんゆんは学校に呼び出されていた。

めぐみんはまだしもゆんゆんまで魔法を覚えているとは意外だ。

しかも、冒険者カードによると習得したのは上級魔法ではなく中級

魔法。

この里ではみんな上級魔法を使えて当たり前。

なんでも、めぐみんが邪神の下僕と対峙するこめつことペットの黒猫を守るために、爆裂魔法の夢を捨てて上級魔法を取ろうとしたところをゆんゆんがかばい、自分が中級魔法を取って邪神の下僕と応戦したとか。

この秘密は、現場に居合わせた者達を除き、僕と担任教師であるぷっちゃん以外は誰も知らない。

……つたく、群れの動向を観察するよりも攻撃されている人間がないか探すことを優先すべきだったな……。

優秀な魔法使いだらけの紅魔の里だからと、油断した自分に少し嫌気がさす。

そして、大爆破を引き起こした張本人はと言えば……。

「スターク先生……爆裂魔法が撃ちたいです……」

「……本気で言ってるのか？」

里の小さな公園のベンチでサンドイッチを食べる僕の横に座り、うなだれながらそんな物騒なことをつぶやいていた。

「超本気ですよ！ ただひたすら追い続けてきた念願の爆裂魔法を手に入れたんですよ!! 我慢しろって方がおかしいじゃないですか!!」

「だとしても、僕の試作武器の実験で通し続けるのだから限界がある」「じゃあ限界が来るまで撃たせてください。限界が来たら次の策を考えましょう」

「なめるな」

「そこを何とか！ ほら、私がどれだけ爆裂魔法を愛しているか、再び聞かせてあげますから！ まず、先日撃った爆裂魔法の……」

膝の上に乗せた黒猫を撫でくりまわしながら、めぐみんが爆裂トークをかます。熱意が伴っている分、世界安全保障委員会の役員共の小言よりやかましい……。

教師になった手前、自分の好きなことに突き進もうとする生徒の背中を押してやるべきだとは思いますが、毎日人里で破壊兵器の実験をして

るアホ扱いを受けるリスクなんて背負いたくな……。

……ん？ 背負う……？

「……そして、やがては世界を爆焔の渦の中に……スターク先生？ どうしたんですか？ 私の話を聞いていましたか？」

「……僕にいいアイディアがある、ちよつとそこで待ってる。僕のサンドイッチ食べるなよ」

余ったサンドイッチを布に包んでその場に置き、ベンチの横に待機させたスーツに身を包み、王都へと向かった。

——数分後。

店まで飛んで必要なものを王都で買いそろえた僕は、再び公園のベンチ近くに着陸してスーツを脱ぎ、袋の中から買ってきたものを取り出して見せてやる。

「さーて、喜ぶめぐみん。現状をこいつで改善でき……」

……口元にパンのカスを付け、頬を膨らませためぐみんに。

「……おい、僕のサンドイッチ食べたのか？」

「ふいいえ。ちよむすけが食べました」

「んのーう」

「……首振ってるぞ」

頬の中のものを飲み込んだめぐみんが、ちよむすけと呼んだ黒猫の反応をみて、ワザとらしく驚いたような挙動をする。

「人の言葉を解するとは！ さすがは我が使い魔！ 素晴らしいです！」

「人であるその主人は僕の言葉を理解できてないみたいだけどな？」

「まあ、過ぎたことはいいいじゃないですか。それより、いい考えとは何ですか？」

「ハア……つたく……ほら、このおんぶ紐を腰に回せ」

そう言ってお王都で買ってきた丈夫な革のベルトをめぐみんに渡す。

めぐみんは不思議そうな顔をしながら受け取り。

「ベルト……？ これはどうするんですか？」

「ようは爆裂魔法を撃つても里の中で騒ぎにならなきやいいんだろ？
だったら簡単だ、里の外で撃てばいい」

「それってまさか……」

僕の意図に気が付いたためぐみんが、期待した目で僕を見て、ゴクリと喉を鳴らす。

僕はスーツを再び装着し。

「さて……どこに撃ちに行きたい？」

ニヒルに笑って、マスクを閉じてみせた。

▽

「はあー……ヒマつすね、サヴィエ隊長」

「気を抜くんじゃねえ、ヴィドル。戦場では何が起きるかわかんねえんだぞ」

ここは王都攻撃の為の主要拠点。

駐屯してる兵士たちは激戦区の王都へ喜んで攻め込む血の気の多い連中ばかりだ。

現在我が魔王軍は優勢で、王都へ攻め入ることはあっても、向こうからこの拠点に攻め入ってくることはほとんど無い。

なので、こういう拠点防衛の方はハズレ扱いされ、こうして部下も退屈そうにしている。

だが兵士たるものそうじゃいかんと、俺は欠伸をしている部下のヴィドルを叱る。

「すいやせん、サヴィエ隊長。ところで、ここ数日の所で、王都に妙な動きがあるそうですよ」

「ああ、連中が防衛線に何が作ってるって話か。どうせアーチャーや魔法使い用のトーチカつてオチだろ」

「それが、偵察部隊の話だと、なんだか複雑な部品で作られててトーチカには見えないとかなんとか……」

「ハッ……まつ、あそこまで追い詰めてんだ。いまさら何ができんだって話よ。勝利は目前だぜ」

なんて、世間話をしている時だった。

隣で眠そうにしていたヴィドルの目が、カツと見開かれた。

こいつは狙撃手のアーチャー並みに目が良い、信用できる。何かを見つけたに違いない。

「おいヴィドルどうした？」

「ロ……ロリっ子が飛んでる……」

「バカにしてんのか」

「やっぱこいつの目は信用ならねえ。」

「いや、マジですって隊長!! なんか空飛ぶ変なゴーレムに乗った幼女が、おぞましい表情でこっちを見てるんっすよ!」

「マジでおちつけ」

俺から見ても、正直空にはポツンとした点しか見えない。

どうせ鳥型のモンスターなんじゃないのか？

そしてこのかわいそうな部下の頭には後でポジションをかけてやろう。

女にモテなさ過ぎて気がおかしくなってしまったに違いない。

「あつ! サヴィエ隊長!! 幼女がまたがっているゴーレムからナニか出てきました! 棒状の……」

「テメエいい加減にしろよ! 今すぐ頭をぶっ叩いて正気に……」

部下の頭めがけて拳を振り下ろそうとした瞬間。頭上を何かがり過ぎ……。

「二ぎやああああっ!!」

俺たちの背後にある拠点の門が盛大に爆発した。

重さ一トンはあろう鉄の扉が宙を舞い、地面をえぐりながら倒れる。

「な、なな……なんだ一体!？」

「あの空飛ぶゴーレムがやったんすよこれ! あのゴーレムが出した棒状の何かが飛んで来たかと思えば……」

まさかこのアホの部下が言ってることがマジだともいうのか？

とりあえず、襲撃を受けてることは間違いない。

「なんだなんだ！」

「敵襲か!？」

吹っ飛ばされた門の中なら武装した精鋭部隊の味方がゾロゾロと、完璧な隊列で出てくる。

……しかし、それが狙いだっただろう。

部隊が狭い門に集中し、固まったところを狙う気だったのだろう。魔法職である部隊の一人が、すさまじく青ざめた顔で、うわごとのようにつぶやいた。

「な……なんだ……この膨大な魔力は……こんな魔力の流れ……どんな大魔ほ……」

……俺も歴戦の戦士だ、魔法職のように魔力を感知できるわけじゃないが、これだけは分かる。

俺は……いや、ここら一体にいる俺たちは……今ここで死ぬんだろう。

となりにいる部下のヴィドルも察したのか、覚悟を決めた顔で俺の方を見る。

……最後はマヌケなことばかりほざいていたが、今まで俺の部下として良く頑張ってくれた奴だ、死ぬ前に、ねぎらいの言葉位かけてやりたい。

「ヴィドル、今まで俺と戦ってくれて感謝……」

「サヴィエ隊長、あなたのことが好きでした」

「えっ」

『『エクスプロージョン』ツツ!!』

詠唱の声が聞こえた刹那、まるで幾千万の雷が同時に目の前に叩きつけられたかのような音と衝撃に襲われ、周囲一帯の大地がめくれ上がり……。

最期に見えたのは、粉みじんになって吹き飛ぶ仲間たちや、建物が砕けた破片が嵐の中の紙のように宙で引っ掻き回されてる光景だった。

ああ、これは数多の兵を殺してきた俺達への神による罰とでも……。



「くつくつく……ははは……あーはっはっはっはっはっは!!!」

めぐみんは、僕の背中でロキでもしなさそうな高笑いを上げながら頭を振り回して大喜びしている。

「楽しんでるようで何より」

「それはもう!! 今のでレベルが四も上がりました!!! 人生で一番スカッとしています!!」

なんだかんだで僕もスカッとした。

しかし爆裂魔法……すさまじい威力だ。

この一撃があれば、ウルトロンを倒すのだってはるかに楽になっただろう。

この世のあらゆる破壊兵器を見て、作って来た僕が思うんだから間違いない。

機動力さえあれば、彼女は本当に世界最強の戦術破壊兵器になりうるだろう。

「そりゃよかった。それじゃ、また明日だな」

「ええ! 今から明日が待ちきれません!!」

——こうして、僕とめぐみんの爆裂空中散歩が始まった。

「さあ、今日も絶好の爆裂日和ですね!」

「もちろんだ。準備はいいか?」

僕はめぐみんを背負い、昨日襲撃した所と同じところへ向かう。

そして………。

『『エクスプロージョン』 ツツツ!!!』

「うわああああ!!! またゴレムと幼女だ!」

「ああっ! スターク先生!! だいぶ撃ち漏らしてしまいました!」

「僕に任せろ」

「ぐああああ!!! また大爆発が起きた! 誰か助け………ぐはっ!」

時にはめぐみんが爆裂魔法をぶち込み、時には僕がミサイルとリパルサーの雨を降らせ。

——敵は次第に。

「来たぞ来たぞ！ 総員準備！」

「よくも俺たちの仲間を吹き飛ばしてくれたな！ 『ライトニング』!!」

『「カーズド・ライトニング」!!』

「H A H A H A H A H A!! 回避行動を取るまでもないな！」

「あ、あいつらなんであんな遠くから攻撃出来るんだ！ これじゃ魔法も矢も射程距離外だ！ 当てられない！」

「爆裂魔法の射程を理解せず勝負を挑んでくるとは、なんと無謀な……食らうがいい！ 『エクスプロージョン』 ツツ!!」

——反撃することをやめ。

「う、うわあああ!! また来やがった!! 例のイカれゴーレムとイカれ幼女だ!!」

「建物に退避しろおおおっ!!」

「めぐみん、僕がバンカーバスターで建物の屋根を吹き飛ばす。君は空いた穴からあの哀れな連中に爆裂魔法を叩き込んでやれ」

『「ボス。バンカーバスター、いつでも使えます」

「発射!!」

「ぎやあああああつっ!! 俺たちの要塞があああつ!!」

『「エクスプロージョン」——!!』

「H A H A H A H A!! まるで藁の家に隠れる子豚だな!!」

——逃げ惑い。

「今日も仲間が死ぬ……どうあがいても止められない……」

「ああっ！ 来る！ 死ぬ!! みんな死ぬーっ！」

「そういえばこの前、グパヤマに会ったぞ。シポムニギでな。君によろしくと言っていた」

「オレのそばに近寄るなああ——ッ」
『『エクスプロージョン』——ツツツ!!』

——頭も狂い始め。

「今日も元気にしてましたか？ 爆裂魔法のお時間ですよ!! ふわはははははは!!」

「エリスによりしく伝えておいてくれ。おっと、胸に違和感を感じても何も言っただけやるなよ?」

「ひいひいひいっ!!」

「わかった! 俺達が悪かった!! もう王都に攻め入ったりしないし、人間も襲わない! 約束する!」

「森の中で暮らしていきま」

『『エクスプロージョン』!!』

——ついに。

「……? おい、めぐみん。敵の様子がおかしい。大勢がわざわざ平原まで出て、正座をしてるぞ」

「……ほう? なんのつもりかちよつと聞いてみようじゃないですか」

「『『僕達、全面降伏します!!』』」

『『エクスプロージョン』——ツツツ!!』

ほんの僅かな間に、めぐみんは大幅なレベルアップを終え、敵の基地は更地になった。

「——ねりまき君。彼女に冷えたジュースを」

「はーい」

「むう……私もお酒を飲んでみたいのですが……」

僕とめぐみんは、敵の基地を更地にした記念でちよつとしたお祝いをしていた。

「あ、スターク先生。お酒仕入れに行ったお父さんが言ってたんだけど、王都がなんだか騒ぎになってるんだって」

「へえ。どんな？」

「なんでも、王都に攻めてくる敵の規模が急に小さくなったらしくて、攻撃のチャンスだと敵拠点に攻めに行ったら基地ががれきの山になってたんだとか。誰がやったのか全く分かってなくて困惑してるみたいだよ」

「そりや凄いな。きつと恐ろしい何かがあったに違いない」

そういつて、めぐみんの方をちらつと見て鼻で笑うと、めぐみんも得意げに鼻で笑い返して見せる。

「はい、スターク先生にはクリムゾンビアー、めぐみんにはノンアルコールのカクテルね」

「それじゃ、めぐみんの大戦果を記念して、乾杯」

乾杯の合図と共に、めぐみんが持つコップと僕のビールジョッキをぶつけ合わせる。

「へえー、めぐみん魔法覚えてすぐ戦果をあげたんだ！ 凄いね！

さすがは成績一位！」

「ふっふっふ……当然です……！」

「僕のクリムゾンビアーから目を放してから言えよ。……つたく。そんなに飲みたいのか？」

お酒が気になってしょうがない様子のめぐみんに、ジョッキを差し出してやる。

「えっ……良いんですか……？」

「一口だけな。……なんだよ、飲んでみたいんじゃないのか？」

「た、確かにそうですが……教師がこうもあっさりと許可を出すとは……」

「別に味見するくらいなんだってないだろ。子供が酒飲んじやいけないって法律もないしな」

「あーあ、スターク先生いけないんだー」

「口止め料やるよ、世渡り上手君」

「そうこなくつちや」

茶化すねりまきに、皿の上にあつたおつまみのナッツという名の口止め料を指で弾き、ねりまきがそれを口で軽くキャッチしてみせる。

そして、年相応の子供らしいワクワクとした顔で、めぐみんがクリムゾンビアーの入ったジョッキに恐る恐る口をつけ……。

「うげっ!!」

「マズイだろ?」

「に、苦いです……」

「友達にもそう言っちゃれ」

そう言っつてめぐみんのジョッキをとり、おつまみを口を放り込んで咀嚼してから一気にクリムゾンビアーを流し込む。

しばらくお酒を楽しんでいると。

「そうだ、めぐみん。バイトは上手く行っているの? なんだかあちこちで面接を受けては落ちてるって聞くけど」

「あつ、その話は……!!」

「なんだ? 君はバイトしてたのか?」

「正確には……バイト探し中ですが……」

さつきまで上機嫌だっためぐみんが、急に渋い顔を始めた。

面接を受けては落ちてる……どうやら何かありそうだ。

「なんだってバイトを? 家計を支える為か?」

「いえ、違いますよ。どうせ稼いだお金を家に入れても、父が全て使えないガラクタのような魔道具開発につき込んでしまうでしょうし」

「僕の親父もロクでもなかったが、君の親父も別ベクトルでロクでもないな」

めぐみんはため息を一つ吐き。

「……私は、アクセルへ向かいたいです。そのためには、まずアルカインレティアヘテレポートするためのお金が必要で……」

「だったら僕がスーツで……」

「いえ、それでは駄目なのです」

僕が最後まで言う前に、めぐみんがそれを遮って話を始めた。

「私は、あの人に自力で会わないといけないのです。だから、自分でバイトを見つけてお金を貯めたいのですよ」

その話を聞いて、ねりまきはうんうんと腕を組んで相槌をうつている。

めぐみんの言う、あの人つてのはおそらく知らないんだろうが、きっと紅魔族流のお約束だと思ってるのだろう。

「……なるほどな。で、面接落ちてる理由は？」

「えっと……それは……わ、私の膨大な魔力を前に、えっと、その……」

「……僕なりの推理だが、爆裂魔法という全身全霊の魔力を込めて撃つ魔法しか使えない彼女は、魔力を込める作業というものが出来ないのではないだろうか。」

「まともな調整が利かない彼女の膨大な魔力を流し込まれたら、どんな魔道具でも耐えられそうにない。」

「そして彼女は一発屋。ポーシヨンの素材集めにモンスターを狩ることも出来ない。」

「狩ったとしても動けなくなる上に、狩った獲物は失敗したハンバーグみたいな有様になってるだろう。」

「素材なんて跡形も残らない。」

「……かわいそうに。本当に茨の道だな。」

「何察した顔してるんですか!! 変なところで高い知力を発揮しないでくださいよ!!」

「そうだな。君の魔力が強すぎて魔道具が爆発したりするんだもんな? 君は悪くないさ」

「や、やめろお! 哀れんだ目で背中を叩くのはやめろお!! いつつも皮肉か嫌味しか言わないくせに!」

「まあ、そうカツカするなよ。おっと、僕の会社のカードを落としてしまった」

「わざとらしい演技をしながら、わざとらしくカードを落とす。」

「え、えっと……スターク先生……これってなんですか?」

「そのカードがあれば、僕の会社のあらゆる部屋にアクセス出来る。今作ってる第二ラボとかな」

「そ、それってまさか……!」

「そういうこと。来るか? 幸いアシスタントを募集中でね」

「え、えっと……」

「ギャラは君の言い値で良い。自分の価値をこの紙にそのまま書いてアピールしてみろ」

「行きます」

言い値という言葉に素早く反応したためぐみんが、僕が渡した小切手をペこりと綺麗にお辞儀して受け取った。

そう来なくちゃ。

「……スターク先生、ここにも一人、めぐみんほどではないけど、優秀な生徒がいるよ」

「君は発足したてのちっぽけな僕の企業なんかにつくより、紅魔族随一の女将の夢を叶えろよ」

「なんてひどい皮肉………」

お互いもちろん冗談で言ってるが、里で職探しをしてる子がいたら誘ってみるのもいいかもしれないな。

「それじゃ、明日にでも来てくれ、めぐみん。仕事の説明をしよう」

「えっ……面接は……」

「今終わった」

なんてカッコつけて席を立ち、二階の宿に移動しようとして。

「スターク先生、お会計がまだなんだけど……」

「………そうだったな」

▽

——第二ラボ。

銀髪の義賊捕縛騒動が起きたあとで、僕は紅魔の里にある巨大なコンクリート施設、紅魔族たちに謎施設と呼ばれている場所に足を運んでいた。

中にあつたのは、ほとんどが現代技術に匹敵する設備だった。

エアシャワー、ベルトコンベア、etc………。

作られてから数百年ほど経過しているにも関わらず動いてる点や、若干僕の世界の設備とは作りが違っていたが、これに目を付けた僕は、その謎施設をベースに、僕の第二ラボへと改造中だった。

この里の方がアクセルより王都に近いので、王都の防衛設備などの運搬が楽になるのだ。

ちなみに族長にこの話を持ちかけた時、食い気味にOKと即答された。

そして僕はそんな改装したての……まあ、まだ一部しか改装は終わってないのだが……。

清潔感溢れる第二ラボの一角で、アクセルからスーツで運んだ部品の点検をしながら、めぐみんを待っていた。

なのだが……。

「……フライデー、約束の時間からどれくらい経過してる？」

『2時間と36分です』

あまりにも遅い、遅すぎる。

初日から遅刻とはやってくれるじゃないか。

僕はラボから出て、そのまま徒歩でめぐみんの家へと向かった。

▽

数分歩いたところで、小さなめぐみんの家が段々見えてきた。

これで寝過ごしたとかだったらクビか空中爆裂散歩一週間無しのとつちがいいか迫ってやろう。

……？ めぐみんの家の前に誰かが立っている。

家の前には、腕を組み、まるでクラブの用心棒のように威圧感を放ちながら立っている男がいた。

そのまま歩いてその男の前に立つと、男は旅人に生死をかけた質問を投げかけるスフィックスがごとく僕の目を見据えて。

「……来たか、流星の鎧を身をまといし者、トニー・スタークよ」

「あー……初めまして、少女の家の前で仁王立ちする者、名も知らぬ男よ」

物騒な気配を隠そうともしないその男に対し、ジョークを放つてみるも眉一つ動かさない。

「……話は聞いている、スターク。教師をやっていて、我が娘であるめ

ぐみんをよくしてくれているそうだな」

「我が娘……?」

「名乗りがまだだったな……」

男は肩に羽織っているマントをバサリと翻し、紅魔族特有の名乗りを上げる。

「我が名はひよいぎぶろー!! 紅魔族随一の零細魔道具職人にして、一家の大黒柱を務めるもの!」

「……言つて悲しくならないのか?」

ボロボロのプレハブ小屋みたいな家をバックにそう名乗りを上げたひよいぎぶろーからは、すでに威圧感ではなく哀愁が醸し出していた。

「全くですよ……恥ずかしいのでやめてください」

そんなひよいぎぶろーをジト目でみなながら、めぐみんが扉の隙間から顔を出す。

めぐみんは申し訳なさそうに僕を見ながら。

「その、すみません、スターク先生……うちの父が……」

「めぐみん! 出て来るなど言つただろう!」

「なにか問題があったみたいだな?」

「問題? 問題だと!? キサマが教師という立場を利用して娘をたぶらかしているのだろうか!」

「……は?」

「ハア……」

ひよいぎぶろーの気が狂つたような発言を前に、思わず素で聞き返す。

めぐみんも呆れてため息をついているみたいだ。

僕もつきたい。

「君の言っていることがよく理解できないんだが……めぐみん、君は自分の父親に僕をどう伝えているんだ?」

「図書室で私に新たな扉を開き、夜の王都にも連れてってくれ、酒場で大人の話をして、『ウチに来ないか?』と誘われてたつて話しました」「冗談じゃないぞ」

このガキなんてことしてくれるんだ。

誤解を受けて当然だ。

「なあ、よく聞いてくれ。あんたは多分誤解している。僕とめぐみんはただの教師と生徒の関係だ。そして僕は、卒業した彼女を僕自身の会社に誘っただけ。なにもやましいことはしていない」

「新たな道を開いたってのはなんだ！」

「それは彼女が爆裂……」

「あーっと、そのことですか!! それはですね、私と先生の間だけの秘密なので聞かないで貰いたい！」

「なにいいいい!!」

「おい、これ以上ややこしくしないでくれー」

どうやら爆裂魔法のことは親にもまだ明かしていないらしい。

言い切る前に彼女は大声で叫んで僕の言葉をかき消した。

「というか、ひよいぎぶろーの顔がすごいことになっている。もう今にでもムキムキの緑の巨人になりそうだ。」

「スターク!! キサマ! 一体娘に何をしたんだ!! 正直に答えろお!!」

「めぐみん、頼むから誤解を解いてくれ!!」

「お、お父さん落ち着いてください!! 私はただ、鋼鉄になったスターク先生の上にまたがって一緒にトんだだけで……」

「キエエエエエエツ!!」

「あんたは僕を破滅させたいのか!？」

「いよいよチタウリが裸足で逃げ出し、ハルクがなだめに行きそうなレベルの形相になったひよいぎぶろーは、バツと戦闘態勢をとり、手を僕へ向けて……」

クソツ、マズい!!

『『カースド・ライトニング』 ツツツ!!』

「スーツ!!」

ひよいぎぶろーの手から闇色の稲妻が放たれ、僕の元へとまっすぐ向かってくる。

僕の元へと届く寸前、念のためこちらまで飛ばしていたスーツが間

一髪で僕の目の前に飛来し、ひよいぎぶろーの魔法を受け止める。
「いつそ娘さんを僕に下さいって言ってやれば良いのか？」

『計算中……99.9999%の確率で激しい戦闘になります』

一人軽口を聞こえないように叩きながらスーツの背部を展開させ、
一気に乗り込む。

フライデー、君は本当に冷静で助かるよ。クソツ。

「お父さん何してるんですか!? 気は確かですか!？」

「僕に言わせれば気が確かじゃないのはあんたの方だ!!」

「スターク!!! ワシの娘の気が確かじゃないだとおおおお!!」

「ああ、ったく! あんたの聞く耳も確かじゃないかもな!!」

火蓋は切って落とされた。

僕とひよいぎぶろーは互いに掌を向けあい、いっどんな攻撃が来ても対応できるようにしてある。

「くらえ! 『インフェルノ』——!!」

仕掛けてきたのはひよいぎぶろーの方だ。

目の前に突如として巨大な獄炎の壁が現れる。

さて……。

【炎の温度、測定完了。温度：1080度】

……殺す気か？

少なくともこんなもの食らったらケバブどころの話じゃない。

まあ、あくまで生身の話だが。

僕は迫りくる炎の壁に真正面から突っ込み、突破を試みる。

この魔法の弱点は以前めぐみんとゆんゆんが教えてくれた。

それは術者の視界がふさがる事。

この炎に紛れ、高速で奴にタツクルして無力化……。

『『トルネード』ツツ!!』

「ツ!？」

魔法の詠唱と同時に突風が吹き荒れ、空中の制御が効かなくなり、
獄炎魔法と風の上級魔法が合わさってできた炎の竜巻の中で振り回される。

「ぐ……」

クソツ、相手の姿が見えなくなるのはこっちも同じ。

ひよいざぶろーの狙いは僕の視界をふさぎ、魔力に物言わせた上級広範囲攻撃魔法で叩くことだったか！

千度程度じゃこのスーツは何ともないが、このまま洗濯物気分を味わうわけにもいかない。

「フライデー、エネルギーをスラスターに回せ！」

『回しました』

一気にスーツの推進力を上げ、炎の竜巻から猛スピードで抜け出す。

「ツ！ 『アングルスネ……ぐほっ?!』」

ひよいざぶろーが行動阻害魔法を放つ前に一気に懐まで駆け寄り、そのままタツクルをかます。

数メートル程吹っ飛ぶも、即座に軽い身のこなしで着地し、車が出すようなブレーキ音を立てて飛ばされた勢いを両足で踏ん張って止めた。

ひよいざぶろーはなお手をこちらに向け、魔法の詠唱の準備を……。

「話し合いをする気はゼロか？ お茶でも飲みながら……」

『『ライトニング——』』

しょうがない、もういつそ大声でめぐみんなが爆裂魔法を習得したんだと言ってやりたいが、どうしても秘密にしたいというならそうしてやろうじゃないか。

そして、秘密にしながらひよいざぶろーと話をつけたいなら、怒りが静まって冷静になるまで相手をしてやるしかなさそうだ。

魔法を躲し、相殺して、魔力切れを狙う。

「——ストライク』ツツ!!」

僕は冷静に、目の前に迫りくる雷の上級魔法を相殺しようと掌を……、

『『カーズド・クリスタルプリズン』』

向けた瞬間。

突如僕とひよいざぶろーの間に巨大な氷の壁が出現した。

「もう十分でしょう、あなた。なにか誤解があるみたいですし、ここままでしまししょう」

割って入って来たのは、どこかめぐみんやこめつこと似た雰囲気を持つ、つややかな黒髪美人。

見た目と言動からしてめぐみんの母だろう。

『ライト・オブ・セイバー』ッ！』

氷の壁の向こうからそんな詠唱の音が聞こえたかと思うと、壁に丸型の光の線が走り、一拍遅れて壁が丸くくり抜かれた。

「母さん……これはワシとあの男の問題……男には引いては行けない時が……」

「また首から下を氷漬けにして泣くまで森に放置しますよ？」

「ひっ……………」

さつきまで鬼の形相をしてたひよいぎぶろーの顔が、一瞬で恐怖に染る。

中々恐ろしいことする奥さんだな。

生きたまま僕の心アーリアクター 臓を抜き取った僕の恋人といい勝負だ。

「さて、スターク先生……本当の話をお聞かせもらえますか？」

「えっと……………その……………お母さん……………あんまり聞くのも……………」

本当の話というワードに反応しためぐみんが、たじろぎながら止めに入るが、母親の威圧感に圧されているようで、はつきりと言えない。

「……………めぐみん、もう包み隠さず話したらどうだ？」

「で、ですが……………」

「本気で愛してるんだろ？ だったら、親にくらい胸張って言っつてやれよ」

「えっ……………!?!」

『どうしてボスがそこでややこしくなるようなことを言うのですか？』

ここにきて奥さんが虚をつかれたような声を上げ、フライデーが珍しくツツコミを入れる。

僕が言いたいののは爆裂魔法の話だ。

「……………そうですね。お父さん、お母さん、話があります」



「爆裂魔法を……そ、それは本当なんですか？ 先生」

嘘でしょと言いたげに聞き返してくる、ゆいゆいと名乗った奥さん。

「ああその通り。どうかしてるって？ だよな。僕もそう思う」

「あれっ!？」

僕の突然の裏切りにめぐみんが素っ頓狂な声を上げて驚いた。

「だが………なんとって爆裂魔法を……」

「それは………初めて爆裂魔法を見た時に、あの破壊力に一目ぼれしたんです。そしていつか、爆裂魔法を見せてくれたあの人に私の爆裂魔法を見せたいんです」

「……………」

めぐみんの語った夢を前に、両親はひたすら押し黙る。

まあ、無理もない。人生スーパーハードだ。どう考えても応援できる道じゃない。

「………それで、生きていける保証はあるの?」

「正直、難しいです……」

重く、絞り出すように言うめぐみん。

本人が一番わかっているのだろう。

「ですが………これを見てください」

そう言つて、めぐみんが差し出したのは自分の冒険者カード。

めぐみんの両親は、それを手に取り……、

「レ、レベル27……!？」

これ以上無いくらい目を見開いた。

「一体どうしてこんなに………まだめぐみんが卒業して二週間程度ですよ……………」

「………連日、僕がめぐみんを魔王軍の拠点まで運んで爆裂魔法を撃たせ続けた。爆裂魔法の射程に匹敵する魔法は存在しない。上空から一方的に爆撃するだけの簡単な作業だったよ。あ、ちなみに魔王軍の

拠点は更地にした」

「つまり、やりようによつては私は皆ひとつ落とせる戦術破壊兵器になれるということですよ」

かつて僕が言った言葉を借りて、めぐみんがそう付け足す。

「……………爆裂魔法の有用性は理解したわ。でもそれは、空を飛べるスターク先生がいてこそでしょう？ この先めぐみんが旅に出たとして、いつまでも先生が横にいるわけじゃないのよ？」

「うぐっ……………そ、それはそうですが……………そこは私が良い仲間を見つけてみせます……………！」

彼女の爆裂愛を理解し、仲間になってくれる人か……………。いれればいいが……………。

「ご両親方、不安なら僕が彼女にある程度アシストできるようなサポートアイテムを渡すから安心して欲しい」

「スターク先生……………？ それってまさか……………！」

「悪いがスーツは渡せない。君に渡すには危険すぎる代物だ、子供のおもちやじゃないんだぞ」

「むう……………」

明確に子供扱いされることに不満なのか、はたまたスーツが貰えなくてガツカリしてるのか、めぐみんが不満げに口をへの字に曲げる。

そんな顔したってダメだ。

「いいか娘っ子。僕が作るサポートアイテムだぞ、間違いなく君のことを守ってくれるし、役立つこと間違いなしだ」

「そ、そうですね……………あの、ありがとうございます。本当に、なにからなにまで貰ってばかりで……………」

そう言うためぐみんは、数秒前とは打って変わって、嬉しさと申し訳なさが混じったような、微妙な顔をしながらはにかんだ。

そんな様子をただ黙って見ていたひよいざぶろーは。

「スターク、ひとつ聞いておきたいことがある……………」

「？」

真剣な面持ちで、ゆっくりと口を開いた。

どうやらとても真面目な話のようだ。

「なぜキサマは……そこまで娘に施す？ 背に乗せて王都まで飛び、自分の会社に雇い入れようとし、サポートアイテムまで作ろうとしている。普通の教師じゃそこまでやらん。なぜそこまでする？」

「別に？ 教師の仕事を託されたんだ、プロのビジネスマンとして、依頼された仕事を全うしているだけさ」

「……それだけか？」

「……………」

……あまり本人の前では言いたくないんだけどな。

僕は、少しだけ真面目な姿勢を取って。

「……………爆裂魔法を覚えたいと言ったためぐみんの背中を押したのは僕だ。ネタ魔法なんて覚えるのをやめるとも、先に親に話せとも僕は言わなかった。僕にはその責任がある。それに……………」

僕は今からクサイセリフを言う自分を自嘲するかののように鼻で笑って、話を続ける。

「……………辛い道だとわかってても、信念を持って茨の道を進もうとするこの子を、僕なりに応援しようと思っただけさ」

……僕は父に応援してもらえなかったしな。そういう流れを断ち切るためにも、せめて生徒位は応援してやりたい。

「ス、スターク先生……………」

めぐみんが感極まった顔をして僕を見てくる。

ガラにもない事言ったので、正直居づらい。

誰か何か他に言ってくれ。

そんな願いを叶えるように、ひよいざぶろーが重苦しく口を開く。

「……………スターク先生……………今の言葉、決して忘れないでくれ。教師として、ウチの娘を守り、導いてやってってくれるか」

「……………ああ」

「そしてめぐみん」

「……………はい」

ひようざぶろーは、一家の父親らしい厳格な表情のまま、めぐみんに向き直る。

「己のロマンの為に人生を捧げるその姿、まさに紅魔族の鑑だ。父と

して非常に誇らしく思う。頑張ってくれ」

「……はいっ！」

いいね。感動的な雰囲気だ。

「……………」

そんな中、奥さんのゆいゆいだけが黙り込んでいて。

「か、母さんは反対なのか……?」

「お、おかあさん……?」

「ふう……」

不安げにみる娘と父に対して、ゆいゆいはゆつくりと目を開けて、
一つため息をつき……。

「スターク先生の年齢があと30歳ほどお若ければ……」

「「!」」

この奥さんなんてこと言うんだ。

▽

その日の夜。

私は壮大に誤解を招くような事を言いまくり、そのおかげで戦闘が勃発したとスターク先生に怒られ、今日の空中爆裂散歩は無しにされてしまった。

あまりにもあんまりだと思う。

しょうがないので私は……、

「こめっこ。魔法を撃つたら、私は倒れます。なので、こめっこはこのソリに私を乗せて引いてください」

「わかったー！」

こめっこと一緒に近くの森まで爆裂魔法を撃ちに来ていた。

今日は明るい満月。明かりのない森の中でもある程度は見渡せる。

ここまで来れば大丈夫だろう。

……にしても、スターク先生は私が思っていたよりも遥かに生徒のことを考えていたみたいだ。

いつか、恩返しをしなくては。

そんな事を考えつつ、私は手頃な岩を見つけ、それに手で照準を合わせる。

はやく威力を上昇させる杖が欲しいものだ。

そうすれば、空中爆裂散歩ももっと楽しくなるだろう。

今日の分の爆裂魔法を撃つために、詠唱を始めようとしたその時だった。

「みつけた」

それは、大人びた女性の声。

なんでこんな所に人がとか考える前に、その声には違和感があった。

……いや、正確には、声が聞こえた方角。

その声は、私の頭上から聞こえていた。

恐る恐る視線を頭上に動かすと……………、

そこには、満月をバツクに、コウモリを思わせる羽を広げて宙に浮かぶ、角が生えた女性の姿があった。

その姿はまさに……………。

「あ、悪魔……………?」

「姉ちゃん！ 巨乳だ！ あの女巨乳だよ！ 敵だ！」

「ええっ!？」

突然の敵呼ばわりに、宙に浮いてた女悪魔が驚いた声を上げる。

「いきなり失礼じゃないか、そのガキンチョ」

ガキンチョ呼ばわりに、こめつこが顔をむつとさせた。

しかし…………この状況はヤバイ。

人型で、しかも言葉を話せるとなれば、間違いなく上級悪魔だ。それも、感じる魔力からしてかなりのレベルだろう。

間違いなく強い。ここは穏便に…………。

「ウチの妹が申し訳ありません…………あの、あなたの目的は何でしょうか?」

物腰柔らかに聞く私に、女悪魔は猫化を思わせる黄色い瞳を細めながら。

「ウォルバク様さ」

「……誰です？」

「お前が育てていたあの漆黒の魔獣のことだよ。あたしが引き取りに来た」

漆黒の魔獣……？

それってまさか……。

「……ちよむすけのことですか？」

「ちよむ……えっ？」

「私が付けた名前です。あの子は、ウォルバクなんて名前ではありませんよ」

「はあ……あのお方に変な名前を付けたどころか、どれだけ凄い存在かもわかっていないようだね」

女悪魔は地上にふわりと着地して、ゆつくりと私の方まで歩いてくる。

歩きながら、女悪魔は語りだした。

「あの魔獣はね、邪神の半身なの。ウォルバク様は今、その半身である魔獣と離れ離れになっているせいで、弱体化してしまっているのさ」

女悪魔は、私の目の前に立って。

「さあ、事情の説明は終わり。我が主、ウォルバク様を家からあたしの元へと連れてこい」

「嫌だと言ったらどうなりますか？」

「その気になるまでお前をいたぶる」

そう言つて、邪悪な笑みを浮かべる女悪魔。

やばい。ここはいったん従つておいて、家に行つて両親を連れてこよう。

この女悪魔が直接私の家まで来てちよむすけを奪つていかない理由は、おそらく高レベルのアークウィザードである私の両親を相手にしたくないからだろう。

だから、こうして娘の私に持つてこさせようとしているのだろう。

「……わかりました。あの子を持つてくるので待っていてください。ほらこめっこ、行きま……」

そう言つて、踵を返した瞬間。女悪魔が冷たく言い放つ。

「何言つてるんだい？ その子はここに置いてつてもらうよ」

心臓が跳ね上がる。

い、妹を……人質に……。

「バカだね。このまま行かせたら、里の連中に応援を呼ばれるに決まっているじゃないか。この子は保険だよ。もし他の人間を一人でも連れてきたら、その子の首の骨をへし折る」

「……こ、こんな小さい子の命を取るつもりですか……？ 上位悪魔にしては、品がありませんよ？」

「なんとでもいいな。あたしたちは必死なんだよ。真のウォルバク様を復活させるためにね。さ、その小さなお嬢ちゃん。いい子にしてもら……ッ!?!」

顔を邪悪に歪めながらこめっこに近づくと女悪魔に、私は石を投げつける。

これでも連日の空中爆裂でレベルも27だ。ステータスも上がっている。

そんな私の投石は……。

「何のつもりだ……今すぐ引き裂かれないのか……？」

女悪魔をブチ切れさせるには十分だった。

「姉ちゃん……う？」

不安げに私の方を見るこめっこ。

私は、こめっこを自分の後ろにやって、その背中を押す。

「こめっこ、家の方に走りなさい。ここはお姉ちゃんが引き受けます」

「……姉ちゃん、大丈夫なの？」

「大丈夫です。お姉ちゃんは強いのです」

「うん、姉ちゃんが凄いのは知ってる……だから、すぐに戻ってきてね？」

そう言つて、こめっこはポケットから何かを取り出して、あの女悪魔に見えないように、何かを私に握らせ、家の方角へと走り出した。

どんどん小さくなっていくこめっこの背中を見送り、私は振り返る。

「待つてくれるとは優しいですね。逃がしておいてなんですが、よかったですか？」

「お前を八つ裂きにするのに数秒もかからないからね……。そのあとで、あの小娘を人質にとって、お前の家のウォルバク様をいただくとするさ」

「そんなに私の両親が怖いですか。悪魔にも怖いものはあるのですね」

誰かの皮肉が移ったのか、自分の恐怖心を和らげるために自然とそんな言葉が出てくる。

「さあ、数秒で私を八つ裂きにするんですよね？ やってみると……あぐっ!？」

気が付けば、私の体は地面から離れ、数メートル転がっていた。全身に電気が走ったような衝撃が走り、呼吸ができなくなる。

「ゲホッ！ ゲホッゲホッ……うう……」

「なに？ ちょっと押しただけよ？ ほら、早く立ちな殴られるのがこんなに痛いとは。

今度からゆんゆんをひっぱたくのはやめてあげよう。

「うぐ……」

今の一撃で体力も気力もごっそり持ってかれた。

正直今すぐ見逃してくれと土下座して命乞いでもしたい。

でも、それじゃ駄目だ。

妹を守るのは、姉の務めだ。

スターク先生のような世界を救うヒーローにはなれないかもしれないが、せめて妹のヒーローくらいにはなりたい。

地面に手をつき、力を込めて自分の体を押し上げる。

ゆっくりと立ち上がり、拳を握ってファイティングポーズをとる。

「……まだやれますよ」

「ハハハハ!! いたぶりがいのありそうなガキだねえ!!」

もちろん、無策だがむしやらに殴り掛かりはしない。

私は立ち上がる時にこっそりポケットの中にある、こめっこに渡された武器を手握ってあった。

これに賭けるしかない。

「それじゃ、今度はさつきよりもっと遠くまで飛ばしてあげる。そのままの逃げる小娘のところへ肉塊になるまで蹴り転がしてやっても面白いかもね」

ゆつくりと、楽しそうな笑みを浮かべながら私の元へと歩いてくる女悪魔。

「そろそろ私の本気の力を見せる時でしょうね……私は紅魔族一の天才。魔法だってもう使えますよ？」

「知ってるさ。でも、お前が使えるのは爆裂魔法だけだろ？」

その言葉に、私は大きく目を見開く。

「……最近、お前を観察していた。変なゴーレムもどきの男と一緒に楽しそうに暴れまわってたろう？　でも、詠唱に長い時間がかかる爆裂魔法じゃ、あたしは倒せないよ。残念だったね、お前はここで魔法も使えず、いたぶられて死ぬのさ」

「……………」

「どうした？　恐ろしくて声も出せなくなった？　惨めな一発屋の爆裂娘ちゃん？」

「いいですね。それ、いずれ私の名を轟かせた後に出す自伝のタイトルにしますよ」

「減らず口ばかり……まずはその口生きたまま縫い付けてあげようかしらー！」

歩いていた女悪魔が、一気にスピードを上げて私の元へと突っ込んでくる。

私は強く目をつぶり、素早く手に握っていたソレを……。

こめっこがスターク先生からもらったスタングレネードのボタンを力いっぱい押して、作動させる。

瞼を閉じていてもまぶしく感じるほどの強力な光が、真っ暗の森の中でさく裂した。

これで目がくらんでいるうちに、走って逃げ……。

「何かと思えば……そんな玩具で逃げ切るつもりでいたの？」

そこには、目のくらんだ様子など見せず、あざ笑うような顔で立つ

女悪魔の姿が。

そ、そんな……。

「悪魔はね、目で物を見てるわけじゃないの。だから、そんな閃光なんて何の意味もないのさ」

冷酷に伝えてくる女悪魔の前に、私はただ黙ってうつむく。

「……終わりね。目をつぶって黙ったままでいるなら、魔法で楽に殺してあげるわよ？」

私は、爆裂魔法が無ければ、何もできないのだろうか？

私から爆裂魔法を取ったら、何も残らないのだろうか？

スターク先生は違う。

あの凄い鎧が無くて、高い知力を活かしてあらゆるものを作り、あの手この手で戦ってみせる。

……私もあなりたい。

爆裂魔法が無くて、大事な人を守るようになりたい。

その方法を考える時間が、もつとあつたらなあ。

私は拳を構え、二度目のファイティングポーズをとる。

もうなにも手には握っていない。真正正銘最後の悪あがきだ。

「まだやるきなの？しかも魔法職が素手で……？そのまま黙ってうつむいていけば、まだ楽に死ねたものを！」

今度こそ殺す気で、女悪魔が突っ込んでくる。

レベルが上がったと言えど、素手で戦える訳がない。それは分かっている。

でも、惨めに逃げ惑って死ぬなんて死に方、紅魔族として絶対お断りだ。

せめてもの抵抗にと、私は殴りかかろうと……、

した瞬間。私のすぐ横を一条の光が通り過ぎた。

「グハアッ!」

その光は女悪魔の体に突き刺さり、森の木々を何本もなぎ倒しながら

ら、私が爆裂魔法の目標にしようとしていた大岩に叩きつけた。
「ずいぶん物騒な友達を連れてるじゃないか。夜遊び仲間もつと慎重に選べよ」

見慣れた光の線と、聞きなれた軽口。

私は、バツと後ろを振り向いた。

そこにいたのは――

▽

王都のジャンクフード店にでも行こうかと、スーツで空に昇ったら森の方で光が見えたので、何かと思っけてきてみれば……。

とんだ大惨事になってたもんだ。

……つたく、この娘っ子は何をやってるんだ？

「君こんなところでなにやって……」

「おい」

とりあえずめぐみんに事情をきこうとするも、岩に叩きつけてやったグラマラスな女に遮られる。

けだるげに女の方に顔を向けると。

「十秒やるからその鎧を脱いであたしに土下座しろ。そしたら一撃で楽に」

「五秒やるからそのプリプリのケツ引っ提げて帰るんだな」

女は黄色い瞳を血走らせて。

「ああそうかい……じゃあ、今すぐ殺してやるよおおおおっ!! 『ライティング』 ツツ!!」

手から放たれた電撃の中級魔法が、僕に直撃する。

バチバチと音を立てて、HUDの画面がまぶしく光った。

「スターク先生!!」

めぐみんの悲痛な声が森にこだまする。

まあ、見てろよ。

『140%充電完了です』

「なんだ、そんな程度か」

ソーの電撃に比べたら静電気もいいところだ。

僕そのまま受けた電気をリパルサーエネルギーに変換し、掌から照射する。

「ッ!？」

女は飛んできたりパルサー光線をとつさに回避し、その後ろの大岩にきれいな穴が開く。

その様子を見て、女が額に汗を浮かべ。

「お前……いったい何者なんだ……?」

「僕? 僕が誰かって? ——」

聞かれたら名乗らないとな。

僕は掌を相手に向け、名乗りを上げる。

「I^僕 A^はM^ア I^イR^アO^ンN^マ M^ンA^だN^だ」

第13話 MEGUMI N ORIGINS

完璧な名乗りだ。

キマったね。

「あいあむあいあんまん……？ 紅魔族のネーミングセンスはどうかしてるのは知ってるが、お前の名前は特に訳が分からないな」

「……………」

キマってなかった。

そりやそうだ。英語……異世界語で喋ったってわからないに決まってる

「あたしの名はアーネス。邪神ウォルバクに仕える悪魔が一人。お前のことはよく見ていたから知ってるよ」

「悪魔のファンを持った覚えはないね」

「お前も口が減らないねえ！」

アーネスと名乗った悪魔は、禍々しい羽を広げて僕の元へと突っ込んでくる。

受けてたってやるよ。

エネルギーをスラストに回し、真正面からアーネスとかち合う。

「ゴフツ!？」

「パワーは僕の方が上のようなだな！」

スクラム対決は僕が制した。

「スターク先生！」

めぐみんの僕を呼ぶ声を背に、そのままアーネスを抱えて猛スピードで森の闇の中を突き進む。

「このっ……調子に乗……モガッ！」

そしてそのまま口をふさぐようにアーネスの顔面を掌で鷲掴み……。

【リパルサー出力：100%】

「喰らってくれたばれ」

顔面にゼロ距離から、最大出力のリパルサー光線を食らわせた。

「グバアアアアアツツ!?!?!」

高出力のリパルサーを受けたアーネスが吹き飛び、後頭部で地面をえぐり、木々を粉碎し、地面に体をめり込ませたところでようやく止まる。

「うちの生徒が世話になったな」

言いながら近づき、装備をアームミサイルに切りかえて照準を合わせた時だった。

『ボス、強力な熱エネルギー反応です』

「なに……?」

瞬間、アーネスがめり込んでいる地面が赤く光り始め……。

『クリムゾン・レーザー』ツツ!

地面から射出された赤色の熱線が、僕の胸に直撃する。

「ぐっ!!」

こいつ地面にめり込んだふりして、魔法の射線が見えないようにあえて腕を地面に埋めてたのか……!

「このクソゴーレムもどきめ………:…部品欠片一つこの世に残らないと思いな………:…!」

凄まじい殺気と怒りを放ちながら、修羅の顔でにじり寄るアーネス。

高出力のリパルサーを至近距離から受けた彼女の顔面は、冷えてひび割れた溶岩のようになっていた。

悪魔の肉体は人間とは構造からして違うらしい。

『ライトニング・ストライク』ツツ!

「おっとー」

アーネスの上級魔法を、素早く空に飛んで回避する。

「逃がすかああああ!」

女性をこんなに怒らせたのは生まれて初めてかもしれない。

空に逃げる僕を追う彼女の顔は、もはや鬼気迫ると言う表現の二つ三つ上の言葉が似合うくらいに形相だった。

だが……。

「お前よりおつかない女は山ほど知ってる」

『ファイアーボール』ツツ! 『ライトニング』ツツ! お前の下らない

口上はさしずめ紅魔族随一の口先男かあ!？」

「いいね。僕は紅魔族じゃないが、名乗るときはそう名乗ろうか。で、その口先男に顔面を薄焼きピザにされた感想は？」

「ぬあああああ!! いちいち癩に障る奴だね!!」

次々と怒り任せに繰り出される魔法を、僕は空に上がりつつ華麗にロールして避け続ける。

「この……ちよこまかと……」

夜空を彩る淡い月の光の元、僕とアーネスはドッグファイトを繰り広げる。

機動力は完全に僕の方が上だ。

あとは油断さえしなければ……。

『フリーズ・バインド』ッ!」

アーネスが放った凍結魔法によって、僕の脚部のリパルサー噴出口が塞がれる。

……………おっと。

僕の手が落ちた一瞬を、アーネスは見逃さない。

すぐさま距離を詰め……………。

『ライト・オブ・セイバー』ッ!」

腕に顕現させた巨大な光の剣で僕の体を袈裟斬りに切りつけた。

【装甲に中程度の損傷を確認】

「チィッ! これで破れないのか!」

盛大に舌打ちするも、アーネスは直ぐに口角を上げて。

「だが、無敵の鎧なんて代物ではないみたいだな! 見ろ! その傷が付いた鎧を! 直ぐにその中身を引きずり出して……………あの小娘の前に叩きつけてやる……………!」

脚に付着した氷を全て粉碎し、アーネスより少し高い位置まで高度を上げる。

「それは実に結構だが……………君は彼女の本当の強さを知らないみたいだな」

「なんだって……………? あいつの? ハハハ……………何を言い出すかと思えば……………魔族や神族のような人外でもないただの弱小な人間

が爆裂魔法なんて覚えたところで……ただのネタ魔法使いでしかないんだよ!! あの小娘は、お前という機動力が無ければ何もできない無力な役立たずじゃないか! お前との戦いが終わったら、次はあの小娘を八つ裂きにしてやる! あたしを見下していられるのも今が最後だ! さあ、かかってきな!」

散々怒らせてやった甲斐があった。

この女は、最後の最後まで気が付かなかった。

「僕との戦い……? お前は戦っている相手が僕一人だと思っていたのか?」

「……は? 何言って」

「お前の言うネタ魔法のちょうどいい射程に入っているって言いたいんだが……」

僕の言葉に、アーネスがピタリと固まる。

「ま、まさか……!」

背後に振り返ったアーネスが、森の奥の方を見る。

悪魔つてのは目が良いのだろうか。

アーネスは、しっかりとその姿を目に焼き付けていた。

森の中から、適切な距離で――

『スターク先生、位置に着きましたよ。詠唱の準備をします』

――掌をアーネスに向けるめぐみんの姿を。

最初にめぐみんのそばからアーネスを吹き飛ばした後、僕はインカムをめぐみんの横にこっさり落としていた。

そしてフライデーがめぐみんにインカム越しに指示を出し、こうして絶好の攻撃位置に立てるように誘導してたのだ。

「お前が相手してたのは僕じゃない。僕達だ」

後ろに振り返っている為、アーネスの表情が見えないが、おそろく青ざめているのだろう。

アーネスはわなわなと震え始め。

「へ、へえ……よし、わかった。今回は負けを認めよう。おとなしく引

き下がるよ。ネタ魔法使いと言ったのも謝る、悪かったよ。実はあたしの主であるウォルバク様も爆裂魔法が得意だね。なんだか親近感が湧いて……」

「こびへつらったって意味はないぞ。紅魔族は戦闘に関しては容赦ない種族だ。このまま見逃してもらえらと思うなよ?」

アーネスはゆっくりと、ひきつった笑みを浮かべた顔をこちらに向けて。

『カースド・ライトニング』ツツ!!」

それは、ありつたけの魔力を込めた最後にして最大の一撃だったのだろう。

まるでブラックホールを槍状にしたかのような長大な闇色の電撃が、僕の胸めがけて飛んで来る。

「お前の敗因は——」

僕は回避行動をとるでも、掌を向けて迎撃態勢を取るわけでもなく。

「ユニ・ビーム チャージ完了」

「——たった一つだ!!」

胸から放った極大な光の束が、アーネスの魔法を真正面から粉々に粉碎する。

「なにイイツ?! ……グアアアアアアツツ?!?!」

魔法を砕いてなお勢い止まることなく、僕の必殺の一閃はアーネスの体へと突き刺さり、猛スピードで飛んでいく。

地表に立つめぐみんの方へと向かって。

「お前は最後まで最強の戦術破壊兵器をコケにして、嘲笑い、痛めつけ、そしてナメた。これは逃げ出さず、諦めず、戦い続けた彼女が掴んだ勝利だ! めぐみん! やれ!!」

『ふつ……スターク先生、あなたは本当に、本当に生徒想いですね。私は、あなたが先生でよかったと、心の底から思ってますよ。さあ、最高の爆裂魔法を、空の最高の特等席から見てください!』

めぐみんは、インカム越しに感謝を述べると、爆裂魔法の詠唱を歌い上げるように唱え——

「このあたしが……こんな人間どもにイイイツ!!」

『我が名はめぐみん！ 紅魔族随一の魔法の使い手にして、爆裂魔法を操る者!! 我が必殺の一撃、食らうがいい!!』 『エクスプロージョン』 ツツツ!!』

まるで僕がリパルサーを撃つときののような姿勢で、魔法を解き放ち。

月の光すら霞むほどの紅き大輪の光が里の空を照らした——!!

▽

その翌日。

私が爆裂魔法を放った後、里は再び大騒ぎになったらしい。

スターク先生は急いで私とこめつこを家まで送り、両親に事情を説明した。

二人とも事の顛末に驚いて、私を助けたスターク先生に礼を言ったのちに、勝手に出かけて爆裂魔法を撃とうとした私を叱ろうとしたみたいだったのだが……。

アーネスから妹を守り、爆裂魔法を撃った私は疲れていたからか、家に運んだ時にはもう寝ており。

その私の幸せそうな寝顔を見て、両親も怒る気がなくなってしまったらしい。

よかったよかった。

そして今。

「ふう……このメモを見てると、自分が爆裂魔法使いじゃないような気分になってきますね」

私とスターク先生は里にあるちよつとした広場に住人達を集めて、とある事に対する声明発表の準備をしていた。

実はここ最近、里の中でうわさが立ち始めていたのだ。

それは、私が爆裂魔法を習得した。という噂。

うん。噂でもなく真実なのだけれど、どうも魔法を覚えて毎日魔王

軍の拠点を爆撃してた頃、こめつこが里の人たちにうつかりそれっぽいことを言ってしまったらしい。

というか、私自身も結構大声で今日も爆裂魔法を撃ちに行きましようとスターク先生に言ったりしてたので、一概にこめつこがやらかしたとも言えない。

スターク先生はその解決案として、自分が魔王軍に対して試作武器の実験を行っていたところ、興味を持った私が付いてきたことよって様々な誤解を生んだとして、声明発表を開くことにしたという。

本当、なにからなにまでお世話になりっぱなしだ。

そんなこんなで、私とスターク先生は学校から借りてきた朝礼台の横で最後の打ち合わせをしていた。

「いいか娘っ子、そのメモ通りに読むんぞ？ 勝手なことば言うな」

「娘っ子はやめて下さい。わかりました。……うう、これを言うのですか……」

書かれたメモの内容は、なんというか……。

「いやか？」

「だって、自分でこうも爆裂魔法を貶さなくちゃならないなんて嫌ですよ……」

「信憑性を持たせるには強く否定するしかないんだ。たかが書いてあることを口に出すだけだろ？ そんなに気にするな。みんなに頭おかしい奴を見る目で見られても良いのか？」

「その時は我が爆裂魔法の力を持っていかに頭がおかしいか証明して……あの、嘘です。謝るのでガンつけてこないでください。すごく怖いです」

ほんのちよつと冗談を……いや、半分以上本気だったが、言っただけなのにこんなに睨みつけてこなくてもいいと思う。

ちなみに今回の件で両親からは結局怒られなかったが、代わりにスターク先生にはかなり怒られてしまった。

しかも、『前回のしくじりめぐみん物語は……』なんて、ものすごいバカにした皮肉や嫌味のオンパレードで。

思い出しただけでも耳をふさぎたくなってくる。

とりあえずスターク先生からもらったメモを手にとって、スターク先生と朝礼台の上へと上がる。

私たちが台の上になると、ざわめいていた里の人達が黙り、話を聞く姿勢に入る。

あ、これちよつと楽しいかもしれない。

カッコいいポーズをとって口上を名乗りたい衝動に駆られるが、グツとこらえる。

まずはスターク先生が台の上立って。

「さて、昨夜里の周辺で大爆発が起こったが……あれは私の試作兵器の実験の結果だ。本来は君たちの元に騒音が届かないようなおとなしいやつを作ったつもりだったんだが……まあ、人類随一の知能でも設計ミスはある」

そういつて聴衆の笑いを取った。

相当人前であんな風にしゃべるのに慣れているみたいだ。

スターク先生は話を続ける。

「一部ではめぐみんが爆裂魔法を覚えて使ったとうわさがあるようだが……学校一の優等生がそんなアホな真似する訳ないだろ。彼女だって、紅魔族随一のネタ人間なんて名乗りはしたくはないはずだからな」

どつと、聴衆側で大きな笑いが起きる

ぐ……言ってくれる……。

「試作兵器を魔王軍相手に使う際にめぐみんを連れて行ったが、魔王軍の拠点吹き飛ばしたのは私の試作兵器であって、彼女が爆裂魔法を覚えて吹き飛ばしたわけではないと言っておこう。そんな話はジョークの中だけで良い。それじゃ、次は彼女本人の声明だ。こういうのは初めてみたいなので彼女はメモを見ながら話す。質問は勘弁してやってくれ」

最後にそう言い残し、スターク先生は後ろに下がった。

私はスターク先生と変わるように前に出て、メモをみながら。

「えー……なぜ里の中で私が爆裂魔法を取っているなんて噂が立っているかはわかりませんが、あんな……いえ、私は普通に上級魔法を

とっています」

本当は『あんな花火を上げて倒れるだけの一発芸みたいなネタ魔法取るわけがない』と書かれてあったのだが、言いたくないので飛ばしてしまった。

後ろからスターク先生に背中をつかれるが、言いたくない物は言いたくない。

次の文を読もうとしたところで、聴衆側から手が上がる。

手を挙げたのはぶつころりーだ。

「でもめぐみん、ここ最近『ばつくれつつ！ ばつくれつつ！』とか歌いながら里の中を徘徊してなかったか？」

「そういえば、学校でも『爆裂魔法を愛する者』ってよく名乗ってたわよね。それはどういうことなの？」

ぶつころりーの質問に続いて、ふにふらまでそんな質問をしてくる。

質問に対する答えはメモ帳には載っていないため、アドリブで答えることにした。

「確かにそんな事も言ったかもしれませんが、さすが、憶測だけで物言うのはどうかと思います。あたかも私が爆裂魔法を操ってみせる大魔法使いみたい……」

「そこまでは言っていないんだけど……」

「そ、そうでしたか……まあ、なんにせよ、あまりにも荒唐無稽で……カッコよすぎます」

私が爆裂魔法使いではないという声明発表のはずなのに、突然始まった爆裂魔法賛美に聴衆側が不思議そうな顔を始める。

「おい、いいからメモ通りに読め」

後ろから周りに聞こえないように、小さく低く唸るような声で注意が飛んで来る。

……………。

今まで誰も爆裂魔法に理解を示さなかった中、スターク先生が肯定してくれたおかげで、私は爆裂魔法に絶対の自信を持ちつつあった。

私が周囲に馬鹿にされないよう配慮してくれているが、昨日の一件

から私の中の考え方は変わった。

爆裂魔法はネタ魔法。それは、世界の人々が勝手に決めたものだ。

私はそうは思わない。

そう思わないように、スターク先生が自信をつけてくれた。

だから今から言うことには……スターク先生にも責任があるという事で、怒られても開き直ろう。

私はメモ帳から目を放し、聴衆の方をまっすぐ見る。

「真実は……………」

そしてメモ帳を置き。自分の冒険者カードを掲げて宣言した。

「私は爆裂魔法使いです」

第14話 プロジェクト・ノース・スター

めぐみんが爆裂魔法使いだと名乗ってからしばらく経った。

今めぐみんは、僕の元で……スターク・インダストリーズ異世界支部である元謎施設で働いていた。

そんな彼女は、ラボの一角でモニターに話しかけていて……。

「フライデー、この国の言語や文化について勉強中のあなたに、親切的な魔法使いであるこの私が正しい言葉遣いを教えてあげましょう！」

『ありがとうございます、めぐみん様。ですが、私は既に周囲の日常会話からこの世界の80%以上の言語は覚えていまして……』

「あくまで日常会話は日常会話。本当に大切な言葉は、普段の会話の中には出てこないですよ」

『なるほど……』

腕組みしながら人さし指を立て、偉そうにフライデーに力説するめぐみん。

もう少し眺めていようか。

ボロを出して慌てふためくところでもお菓子片手に見てやりたい。

「まずは自己紹介からです！ あなたの名を名乗って見てください！」

『はい。私はF. R. I. D. A. Y. と申し……』

「ちっがいますよ!! 誰がそんなつまらない自己紹介をしろと言ったのですか!! 私のような自己紹介が本来の自己紹介なのです！」

『は、はい……』

フライデーが困惑し始めた……。

「さあ！ 私があなたに自己紹介した時と同じように！ さあ！」

『わ、我が名はF. R. I. D. A. Y. ! こ、この世界随一の人工知能にして……』

「フライデーに変なことを教えるな」

「なぜ止めるんですか！ これこそカッコイイ名乗りでしょう！」

「ここで全否定したら彼女はキレるだろう。」

……彼女は子供だ。大人として、優しく諭すように……。

「ハッキリ言って、君の演出は嫌いじゃない。でもな？ その名乗りは人工知能のフライデーには似合わない。賢い君ならわかるだろ？」
「一理ありますね。ならば、感情の無さを前に出した冷静で冷たさを感じる名乗りを考えてあげましょう！」

「だから変なことを教えるな！ あんたの頭に影響されてフライデーがおかしくなったらどうしてくれるんだ！」

大人気なくキレた僕の言葉に、めぐみんの眉がキリキリと上がり……。

「それは私の頭がおかしいって言いたいんですか!? いいでしょう！ 喧嘩なら受けてたちますよ!？」

「クイズ。この中で恩知らずは誰でしょう？ 一発屋は誰でしょう？ いいのか？ そんな口利いて。もうお空に飛ばしてあげないぞ」

「いいですよ別に。もうこの里で爆裂魔法を隠す必要はありません。私は一人でも行けます」

「そりや凄いな。君は森の中で撃つてそのままモンスターの餌として身を捧げるってわけか。いつから動物愛護に目覚めたんだ？」

「里の中で撃つので大丈夫です」
「そんなことしたらテロリストに指定して僕がとっ捕まえるからな」

堂々とデフコンワンが発動されそうなことを言う頭のおかしい爆裂娘。

こいつ自分の私欲のため故郷の里に大迷惑をかけることもいとわないのか。

「ったく……それで？ 宿題はやってきたんだろうな？」

「ええ、これくらいこの紅魔族随一の知能である私にかかればなんでもありませんとも」

そう言っただけめぐみんが机の上に置いたのは、小型の偵察用ドローン。

一度めぐみんの前でドローンの組み立てとプログラミングを見せ、同じものを作れとパーツとプログラム用の端末を渡してみたのだが……。

「H m m……」

………完璧だ。

同じことをM I Tの学生たちにやらせても、できるのはほんのひと握りだろう。

「まっ、僕のところで働くならこれくらいできてもらわなきゃ困る。それじゃ、次は起動テストだ」

「試すような視線をめぐみんに向けながら、ドローンの起動ボタンを押す。」

ドローンが、盛大に爆発した。

小型ドローンだったので爆発範囲は小規模だったが、僕とめぐみんの顔を煤まみれにするには十分だった。

「c o u g h……おい………何をしたんだ？」

黒い煙が咳と共に口から排出され、爆発四散した破片が散らばる机の上を眺め、ボソツと呟く。

「どうせ作るなら、特別なやつを作ろうと思ったんです」

「……………で？」

「それで……熱伝導率を可能な限り上げつつ抵抗力は下げて、スイッチを押したら全ての部位に過剰な電力が流れて吹っ飛ぶようにしました。私のドローンっばいでしょう？」

僕はフツと笑って。

「今日をもって君をク」

「ああああああああ!!! ごめんなさい! ごめんなさい! 二度とこんなことしないでクビだけは勘弁してください!」

煤だらけの顔を地面に擦り付けて土下座するめぐみん。

………そこまでさせる気はなかったのだが。

爆破したことはともかく、めぐみんがやってのけたのは応用だ。

真似だけなら誰にだってできる、辿った足跡をそのまま追うだけなのだから。

だが、難しいのは応用と改良だ。これにはさらに深い理解力と発想力がある。

見ただけの技術を真似したばかりか性質を理解し、応用して別のものへと昇華させてみせる。

これこそ知力の高いものの振る舞いだ。

ふざけた結果ではあれど、彼女は僕の予想以上に賢いらしい。

「おい、顔を上げろよ。クルーに歓迎するって言おうとしたんだ。クルーってのは、乗組員……ま、仲間に歓迎するって事さ」

その声に、めぐみんがばあつと輝いた顔を上げる。

我ながら苦しい言い訳だが、まあ………いいか。

「ほら、とりあえず顔を拭け。昼飯に行くぞ」

「今日も奢りでいいんですか!？」

「その分働いてもらうから別にいいさ。あと、カロリーの消費を抑えるとか言って飯食った後にラボでゴロ寝するのは無しだからな」

「もちろんですとも。ただ、脳に行き渡らせる糖分も取れたら………効率上がりそうですね」

「おねだり上手だな。それじゃ、次の宿題の期限を二日早めよう。効率上がるなら余裕だろ?」

「うぐっ………ま、まあ良いでしょう………」

踵を返して出口に向かいながら、軽口を叩き合う僕ら。

なんだかねで、騒がしくも賑やかな毎日だ。

そしてさらに数日後。

「さて、それではスターク先生の宿題の番です」

「悪いが僕は今から仕事だ。生徒たちが待ってるんでね。失礼するよ」

『今日は非番です、ボス』

……………

「あつ！ どこへ逃げる気ですか!! 逃がしませんよ!」

「おい離せ！ 必要ないだろこんなこと！ ぐっ………離せて言ってるだろ!」

空中爆裂散歩で魔王軍を爆撃しまくり、僕を大幅に上回るレベルアップを果たしためぐみんは、ステータスもそれに伴って高くなつて

おり……、

『ボ、ボス……』

「憐れむような声を出すな！ 大体、なんだってレベルアップで身体機能が著しく上がるんだ!! どんなふぎけた理屈だ！」

「なにわからないこと言ってるのですか！ ほら、さつさと見せてください!!」

……僕は、十三歳の小娘に力づくで地面に組み伏せられていた。

この世の終わりみたいな絵面だ。こんなの元の世界の誰にも見せられない。

「めぐみん、僕には科学技術がある。わざわざ魔法を使う必要はない。だろ？」

「だからって自分で使わないのでは組成を理解できませんよ」

「ハア……わかった。やるから放してくれ」

僕のその言葉を聞いて、めぐみんが拘束を解く。

手首の調子を少し確認し、軽く体操をしてから、僕はめぐみんに向き合って。

「よし……やるぞ。フウ……『ティンダー』」

指パッチンをして、その手に小さな火を灯そうと……。

「……………」

僕とめぐみんの中に沈黙が過ぎる。

「言いたいことがあるなら言えよ」

「……ま、まさか初級魔法すら唱えることができない魔力とは……でも安心してください、スターク先生。あなたには科学技術があるじゃないですか。魔法を使う必要はないですよ」

「そのセリフ僕がついさつき言っただろ！」

そう、自分で魔法の組成を研究するため、僕は時間があるときに魔法を取得して試していた。

理解できないからって非科学的だ、存在しないと否定から入るようじゃ科学者として半人前以下だ。

真の科学者はもしを追究する。だから自分で試し、その組成を明か

そうとした。

したのだが……。

なんと僕は魔力値の低さからか、初級魔法すら扱うことができなかった。

「だから拒絶したのですか……あの、すみませんでした。謝るのでいいじゃないですかいね？」

「いじけるわけないだろ。バカにしてるのか？ ……だがまあ、外には出る。僕が帰ってくるまでにノース・スターのシステムの調整をしておけよ」

「ほら！ やっぱいいいじけて……えっ、これ丸投げする気ですか!? あっ、ちよつと……」

『私がサポートします、めぐみん様』

騒ぐめぐみんを背に、ラボを出て村の中へと繰り出す。

本当にいじけてるわけじゃない。とある約束を思い出したのだ。

▽

「おや。てつきりすっぽかされたと思っていました」

「ちよつと仕事関連が忙しくてね。ああ、眼帯の調子はどうか？」

「ええ、その件もかねて……」

ラボを出た僕は、いつもの喫茶店のテラスで作家志望のあるえと話をしに來ていた。

以前色々あつて彼女の眼帯を勝手に改造し、眼帯越しでも両目で視界を確保できるように改造したことがあったのだが……。

どうやら少し調子が悪いらしい。

とりあえず眼帯のメンテナンスをコーヒー片手にサクツと終わらせる。

「ほら、次は壊すなよ」

「ありがとうございます。これで五体満足ですね」

「正確には二万五千パーツ満足だ。で、僕を呼んだ理由は？」

「何も言わず……この本を……」

「あー、手渡しは嫌いだね。そこに置いといてくれ」
「……………」

僕の言葉に不思議そうな顔をしながらも、あるえがテーブルの上に置いたのは粗雑な台本のような、一束にまとめられた複数枚の紙。

一枚目には特に何も書かれていない。

手に取り、表紙をめくる。

二枚目には、一文だけ書かれていた。

【エピソード4 新たなる野望】

……………」

どうやら小説のようだ。

ちらりとあるえに視線を移すと、彼女にしては珍しくなにかソワソワした感じで僕の方を見てくる。

前にあるえは言っていた。僕の話の小説のネタにさせて欲しいと。

おそらくその小説が完成したから僕に見てくれというのだろう。

フィギュアやコミック、更にはコラボアイスまで、自分が元になった商品の監修なら経験がある。

僕のドキュメンタリー小説って訳じゃないが、見てみようじゃないか。

どこかで見た事のあるタイトルが記されたページをめくり、本編を読み始める。

【ベルゼルグ歴×年。 世界は爆裂魔法の焰に包まれた!!】

What the heck.

一ページ目早々世界が消滅したぞ。

これは大作になるかもしれない。

どこかで見たことがあるって件を除けばな。

既に言いたいことがあるが、とりあえずそのまま読み進める。

【人々が戦争で優位に立つたために作った戦略防衛人工知能が自我を持ち、突如暴走。ユカイネットと名付けられたこの人工知能は、自身を危険視してシャットダウンを試みようとした人類を敵と判断。爆裂魔法を操る戦略ゴーレムを製造して解き放ち、人類絶滅へと乗り出

す」

.....。

僕はジロリとあるえの方を見る。

.....いや、なんで自信満々な顔をしているんだ。

僕は再び視線を紙の上に落とし、ページをめくって続きを見る。

「人類は絶体絶命の窮地に立たされ、『終わりの時代』と嘆き、日々脅える生活を送っていた。しかし、そんな中で立ち上がる者たちが現れた。凄まじい力を秘め、光の魔法に長けた勇者達.....彼らはユカイネットの支配するこの時代に反旗を翻し、次々と侵略された土地を奪還し始めたのだ.....」

僕が顔をしかめたからか、またあるえの方を見ると、さっきの自信満々な顔はどこへやら、彼女は不安げな顔になっていた。

.....言いくくなる顔をするのはやめろよ。

ここからちゃんとしてくるかもしれない。もう少し見てみたっていいだろう。

僕は希望を抱いて次の文を読む。

「こうして希望の星となった彼らは、終わりの時代を切り開くその姿から尊敬の念を込め、人々に『時代の騎士』とよばれ、この怒れる七人の時代の騎士が宿敵ユカイネットとその本拠地であるゲス・スターを」

そこまで読んだところで僕はページを閉じてテーブルの上に叩きつけるように置く。

あるえがビクリと体を震わせた。

「おい、他人の作品を参考にするのはいいがパクるのはやめろ。ツッコミどころが多すぎる」

「え、パクリ.....？ ちよ、ちよつと待ってください。そのノート.....」

そうやって僕が机の上に置いた紙束を取ったあるえは、パラパラとページをめくり.....。

「.....すいません、渡す方を間違えました。そっちは映画を見た後にノリで書いたネタ帳みたいなもので.....」

焦った様子で紙束をとり、新しい紙束をテーブルの上に置く。
出されたそれには、表紙に「紅魔族英雄伝 第一章」と書かれていた。

「こっちがスターク先生が授業の時に話してくれた外の世界や、見せてくれた外の映像を元に自分が元々考えていた構想を混ぜて作った小説です。どうぞ、傑作を書けたと思ってますよ」

「今度はパクリじゃないといいが」

「あの、あれはネタ帳であって決してパクリ作品では……」

なにか言ってるあるえの言葉を聞き流しながら、小説を見る。

内容は……。

所々紅魔族特有の奇妙な言い回しがあるが、この世界をベースに、僕の世界の技術を元にしたハイテク機器や建築物などをうまくミックスしたSFファンタジー作品に仕上がっていた。

といっても、魔法や特殊な生物があたりまえとなっているこの世界からしてみれば、これはSF小説ってことになるのだろうが。

にしても、主人公が筋肉ムキムキのシールドを武器に持った変人というのがなんとも……。

敵が滅亡した太古の超技術大国の末裔で、天才金持ちの皮肉屋で、その頭脳と技術を活かして世界を侵略しようとする色男な点は笑えるが。

僕は小説を机の上に置いて、コーヒーを啜り。

「まあ……悪くはないが……もう少し主役サイドのキャラに魅力があってもいいんじゃないか？ 敵のキャラがカッコよくて濃いしな」
「あの、確かにスターク先生を元に作りましたが、そんな肩入れされると……」

「大体、なんで敵側なんだ？ 僕が元になってるキャラだっていうなら、主役側にしてくれたっていいだろ」

「最初はそのつもりだったのですが、なぜかスターク先生のキャラが悪役に合うんですよ」

「……そうか」

「ちなみにその敵キャラは元は善人ですが、平和な世界を目指そうと

するあまり、世界を滅ぼそうとしてしまう……そんなバックストーリーを入れる予定です」

「……………そうか」

ウルترونといった僕の過ちなどについては、生徒には教えていないのだが…………。

奇妙な偶然だ。

「それにしても、キャラですか……………実は、私はあまり人を知りません。というより、里の外の人間と交流を取ったことがほとんどなくてですね…………アクシズ教徒はキャラが濃いと聞きます。いつか実際に会って話をしてみたいですよ」

「アクシズ教徒？」

そういえば、そんな名前をここに来てから度々耳にした気がする。名前からして宗教団体だろうか。

キャラの濃い宗教団体なんて、なんか嫌な予感しかしない。

そんなことを考えながら、コーヒーをまた一口啜る。

「はい、アクシズ教徒は女神アクアを信仰する教だ」

「ゴホあッ!!」

「あああああぁーっ!! わ、私の傑作があああぁーっ!!」

僕はコーヒーを盛大に噴き出し、テーブルの上にあった紙束を黒い水玉模様が浮かぶモダンアートに変えた。

あるえがテーブルの上にあった紙束を抱えて地面にうなだれる。

やがてバツと顔を僕の方に向けて。

「いきなりどうしたんですか先生！ そんなに自分が敵役にされたことが不服だったんですか!？」

普段から何事にも動じなさそうなあのあるえが、すさまじい剣幕で抗議してくる。

「あー……………悪かった。コーヒーが気管に入ってね…………」

以前一緒に酒を飲んだ飲み仲間の名前を意外なところで聞き、思わずコーヒーを吹き出してしまった。

会って一緒に宴会した奴の名前が出てきたばかりか、宗教団体に崇められてる事実には驚いたなんて説明しても頭がおかしい奴扱いされ

そうだったの、とつさにデタラメいったが……。

「い、一週間徹夜して書いた我が結晶が……」

地面に膝をついて悲しむあるえの姿を見てるとさすがに罪悪感が芽生えてくる……。

さて、どうしたものか……。

……そうだ。

「なあ、あるえ。そのアクシズ教徒っていうのはどこにいるんだ？」

「ふぐぐぐ……えっ？ アクシズ教徒ですか……アクシズ教徒自体はあらゆる街に少数ながらもいますが、総本山はアルカンレティアです」「アルカンレティア……」

そういえば、めぐみんが目指してる場所もそんな名前のところだったか。

……时期的にちょうどいいかもしれない。

「よし、君の小説をコーヒーまみれにしたお詫びに、アルカンレティアまで僕が運んでやる。それでチャラつてのはどうだ？」

「……………」

「……駄目か？」

うなだれていたあるえは、胸元からメモ帳をガンマンのごとく素早く取り出し。

「ふふっ……その盟約……乗りました……！」

メモ帳片手に妙なポーズをキメた。

「やる気上がつてるところ悪いんだが、すぐには駄目だぞ？」

「ふむ……何か理由が？ スターク先生のことでしょう、何かより面白くなるタイミングを待つんですね？」

「さすが、ご名答。まあ、そう遠くないさ。それまで小説の復元なりしててくれ」

「ええ、幸い学校も無事卒業して時間もありますので……………」

「天才小説家のニート生活に乾杯」

「あの……二、ニートじゃないです……」



あるえとの話を終えてラボに戻ると、そこにはふくれっ面しためぐみんがいた。

「スターク先生……………丸投げしてどこへ行ってたんですか……………」

「あるえとちよつとデートしてただけさ。大したことじゃない」

「えつと……………どういふ状況かは分かりませんが、とりあえず通報してきますね」

言いながら真顔になってラボから出ていこうとするめぐみんの肩を掴む。

「おい待てよ。君は冗談や軽口つてものが分からないのか？」

「いきなり丸投げされて一人ラボに取り残されたら、冗談に付き合う気持ちも失せま」

「カフェのプリン買ってきたぞ」

「……………大体、これはなんなんですか？ かなりの大きさがありませんが、異常なほど作りが複雑です。王族用の魔道具だつてこんな作りはしてませんよ？」

お土産に買ってきたプリンを貪り食いながら、ここ最近製造を進めていたとある装置をちらりと見るめぐみん。

しかし、プリン一つで機嫌が良くなるとはなんてチョロいんだ。

自分でやつといてなんだが、将来飯に釣られて騙されたりしないか心配になってきた。

僕はめぐみんの将来を憂いながら、彼女の質問に答える。

「これは……………そうだな、デカめのカメラとでも思つてくれ」

「カ……………カメラ……………？ こんな部屋ひとつ丸々占領する大きさの装置がカメラだつて言うんですか!？」

「その通り、正確には望遠カメラだ。遠くから敵の拠点なんかをこれで観測できる」

「それなら山の頂上にある遠見の魔道具で十分ではないですか？ ここから魔王の城を見ることだつてできますよ。ちなみにオススメのスポットは魔王の娘の部屋です」

「君たち一族の本当にロクでもない装置はさておき、こいつはそんなものの比じゃない。もつと遠くから、どんな所でも観測するためのカメラだ」

「もつと遠くつて……一体どこからですか？」

首をかしげるめぐみんの質問に答える為、僕はニヒルな笑みを浮かべて天を指さす。

「空の遥か彼方からさ」

「……………えっ」

▽

プロジェクト・ノース・スター。

王都から資源と資金がもらえるようになった段階で着手し始めた計画だ。

計画の目的は単純明快、人工衛星の打ち上げ。

これによつて戦場での敵の動きが全て筒抜けになる。

衛星の本来の目的は監視用じゃないが、ひとまずはこれで魔王軍の動きを探るつもりだ。

ちなみに国の上層部にこの装置のことは話していない

この里に来てから早くも二か月近くが経った。

異世界に転生してからの生活のほとんどをこの紅魔の里で、濃く過ごしてきた気がする。

そんなとある日のこと。僕とめぐみんは完成した人工衛星打ち上げのために、ラボの裏にある平原へと来ていた。

「しかし、空よりはるか上……大気圏外からの観測装置、人工衛星ですか……あまりにもぶつ飛んだ話すぎて、今現物を目の前にしてる私でさえ半信半疑なのですが……」

「僕の国じゃ人工衛星なんて四千機は飛んでるぞ」

「あなたの国はどうなっているのですか!? プライベートのプの字もないではないですか!」

「すべてが偵察用って訳じゃないけどな……だが、少し前に僕の国の偵察衛星が悪の組織の手に渡って、衛星とリンクした破壊兵器で何十万もの人命が殺されかけたことなんて事があったな」

「私はあなたの国にだけは絶対に行きたくないです」

平原に置かれた人工衛星を見ながら、ぼやくめぐみん。

そんなことを言ってるが、用途不明な装置の製作アシスタントを普通にやってたこの子は本当に天才だ。

……そのまんまそう伝えたら調子に乗りそうなのでさりげなく言おう。

「まあ、悪いことだらけって訳じゃないさ。飯は上手いし色々便利だ。あー、ところで助かったよ。君のおかげで予定よりずっと早く計画が進んだ」

そう言つてめぐみんの方を見ると、彼女はすさまじいドヤ顔を浮かべていていた。

「ふっ……まあ？　里随一の知力を持つ私がいるんですから当然ですよ……！　そんなさりげなくサラツと言わず、もつと素直に褒めてもいいんですよ？」

「さすが僕に次ぐ知力の持ち主だ。頼りになるよ」

今度は皮肉を言つてめぐみんの肩をポンツと叩くと、彼女は顔を一瞬でヒクつかせながら。

「ほんつとうに人の神経を逆なでするのが上手いですね……いつか痛い目見ますよ」

「かもな。さあ、僕らの成果をさっそく空に飛ばそうじゃないか。スイツチ押すか？」

「いいんですか!?　押します押します!!」

ドヤ顔してすぐ顔をヒクつかせたかと思えば、今度はクリスマスプレゼントの箱を開ける子供のような表情を浮かべてぴよこぴよこ跳ねるめぐみん。

渡し甲斐があつて結構。

跳ねるめぐみんに端末を渡すと、彼女は額に手を置きカツコつけて。

「時は来た！ 我が命の元、天にて輝き、我らが進む道を照らす導きの星となりたまえ!!」

珍妙な詠唱を上げ、端末のスイッチを力強く押した。

ギガゴゴと機械的な音を立てて変形し、ブースターを展開して離陸体勢に入る人工衛星ことノース・スター。

本来なら大規模な発射台とロケットが必要になるが、大型のリパルサーエンジンを搭載したロケットが既に内蔵されているのでその必要はない。

エンジンが起動し数メートル浮かぶと、ノース・スターは自分を支えていた四本の脚を内部に格納し、さらにエンジン出力を上げていく。

周囲に吹き荒れる噴射リパルサーの風圧でローブがたなびくことにテンションが上がったのか、めぐみんは両手を広げて妙な詠唱を再び始め……、

「ふははははは！ 舞え！ 舞え!! 無限に広がる天へと舞い上が……ちよつ……風が強すぎま……あつあつ、これマズ……先生たすけ……ぬああああ……」

……そしてそのまま、勢いを増していく風圧に負けて平原の上を吹っ飛んで行った。

……強い風が吹いてるのに両手なんて広げるからだ。

ノース・スターはどんどん高度を上げ、さらにブースターを展開させて加速していき、あつという間に肉眼では見えない高さまで上がっていった。

『ノース・スター、無事衛星軌道上に乗りました、ボス』

『了解フライデー。演算おつかれ、しばらく休んでいいぞ』

『はい、ありがとうございます』

フライデーとの通信を終えた僕は、後ろに振り返ってめぐみんが飛ばされた方へと歩き出した。

「いつも楽しそうだな」

僕は十メートル程後方でくの字にひっくりかえって死んだ目をし

てるめぐみんに手を差し伸べてやる。

「ふふ……言いたいことがあるなら聞こうじゃないか」

「あー……黒色はまだ五年くらい早いんじゃないか？」

めぐみんが跳ね上がって襲い掛かってきた。

▽

ノース・スター打ち上げから数日後。

「フライデー、悪党どもの様子はどうか？」

『衛星からの情報によると、魔王軍が王都から北西二十キロの森林地帯の中に新たな拠点を作っているようです。森林の中かつ、周囲を魔法で発生させた霧で覆っていることから、秘匿性の高い奇襲用秘密基地であると思われます』

「あとで爆撃しに行くぞ。スーツにありったけのミサイルを補充しておいてくれ」

『了解です、ボス。今日の予定表に追加しておきます』

目の前にホログラムで今日の予定が映し出される。

【8:00 AM 生徒達との打ち合わせ(終了) 10:00 AM
めぐみんのお別れ会 02:00 PM 魔王軍基地爆撃】

……もうそんな日か。

今日はめぐみんの給料日でもあり、そしてめぐみんがその給料を持ってアルカンレティアまで旅にでる日でもある。

不安はあるが……まあ、彼女への餞別が彼女を守ってくれるだろう。

一番の問題は、めぐみん自身が自分の仲間を見つけることができるかどうかだな。

こればかりは天才の僕にだってどうしようもない。

そんな風に一人思慮にふけていると、背後で自動ドアが開く音がした。

ホログラムの画面を特に閉じることもなく、背後に立っているめぐみんに向き合う。

めぐみんは画面をチラリと見ながら。

「おや、何か新しい発明品のプログラムコードですか？　いつものようにこの国の言葉に翻訳してくださいよ、私も手伝いますから」

「いいや結構だ。それより、今日が何の日か分かるか？」

僕の国の言語で表示されているので、めぐみんへのサプライズの予定表が映っただけでも彼女にはわからないから消す必要がないのだ。

めぐみんは、僕の質問に対してめんどくさそうな顔をして。

「なんですか？　その、付き合ってから何か月とかをやたら気にするカッブル見たいなセリフは……」

「君もとうとう嫌味が言えるようになったか。大きな成長だな、教師として嬉しいよ」

皮肉を言いながら二つのグラスによく冷えたブドウジュースを注いで渡す。

「まずはお疲れ。君のおかげで我が社は大助かりだった。ほら、君の働きに見合った対価だ。ほんの少し色を付けさせてもらったが」

そう言って、エリス通貨が入った袋を彼女の隣の机に置き、乾杯をする。

チンツと、グラスのぶつかる音が部屋に響いた。

「そうですね、もうそんな日でしたか、ありがとうございます」

「これから楽しい用事があるからお酒はナシだからな。ブドウジュースで我慢してくれ」

「それは別に構いませんが……楽しい用事って何ですか？」

「そのジュース飲んだら僕についてこい。給料も忘れるなよ」

一口でジュースを飲み干し、グラスを机の上に置いて歩き出した僕の後ろをめぐみんがついてくる。

酸っぱいのか、ブドウジュースをチビチビと飲みながら。

「またサプライズですか？　紅魔族的にもその気持ちはわかりますが、せめて行先だけでも……」

警戒してるのか、はたまた秘密にされるのが嫌なのか、めぐみんが怪訝そうな表情を浮かべながら言ってくる。

「明かさないからサプライズなんだ。君が喜ぶって約束するよ。でも

まあ……行先くらいなら教える」

僕ははまだブドウジュースをチビチビと飲むめぐみに振り返って。

「行先はすぐ隣の部屋だ」

そう言つて、めぐみんへのお別れパーティーの為に集まつた生徒たちがいる部屋へと足を進めた。

第15話 “個”の力

「めぐみんが冒険者になるなんてねー」

「悪いことは言わないからやめといたら？ 爆裂魔法しか使えないのに出たらすぐにモンスターの餌になっちゃうよ？」

「そのままスターク先生の所に本格的に就職した方が安泰じゃない？」

そんな失礼なことを言ってくるのは、ふにふらとどどんこ。

でも、そんな言葉も目の前に広がる光景のおかげで今は気にならない。

私の極貧生活では一生お目にかかれなかったであろうご馳走の数々と、息を吐くことすら忘れる程の食欲を誘う香りの前には、スターク先生の嫌味の足元にも及ばない二人の茶々など、まるで耳に入らなかった。

「そうですか。凄いですね」

「あんた全く話聞いてないでしょ！」

「当たり前ではないですか。大量の串焼きやサラダ、コカトリスの幼鳥の丸焼きに果ては霜降り赤ガニ、オマケにケーキまであるんですよ？ ふあなたも口は食へえる為につかふべきでふよ」

「君も食うか喋るかどっちかにしろよ」

ならば食べる方を。

黙々と食べ始めた私を見て、スターク先生を含めた三人は呆れた様子で食事を始めた。

「それにしてもすごい料理だね。本当にゆんゆん一人で作ったのかい？」

「ううん、親にも協力してもらったよ。お別れ会するからって言ったら、『お、お前にもとうとうお別れ会するほどの友達が………！』両親とも泣きながら協力してくれて………」

「ふ、ふむ………それは感動的だったね………」

突然の精神攻撃に、あのあるえも思わずたじろいだ。

ナチュラルに悲しくなる話をする彼女の癖は治らないのだろうか。

心なしか部屋の全体にかかる重力が増したように感じていると。

「ね、ねえめぐみん……どうかな？　美味しい？」

ゆんゆんが少し恥ずかしげに聞いてきた。

「普通に美味しいですよ。ありがとうございます」

「よかった……！」

「見せつけてくれちゃってー」

「ほんと百合百合しいよねー」

私の率直な意見にゆんゆんがニコツと笑って喜び、いつものコンビが茶々を入れてくる。

そろそろ反撃のひとつでも入れてやろう。

肉を食べるのに使ってたフォークを一旦テーブルに置いて襲いかかる準備をする。

が、そこでスターク先生が自分のヒゲを撫でながら口を開き始めた。

「ちなみに調理場提供と調理器具の用意は僕担当。あとはまあ………重いもの運んだり……」

「なんですか？　歯切れの悪い……言い難いことなんですか？」

「スターク先生もご飯作るのに協力してくれたんだけど、あまりにも料理が下手で………」

ゆんゆんが他のみんなに聞こえないよう、こっそり私に耳打ちしてきた。

………例え天才でも、その才能をどんな事にでも活かせるわけじゃないのだろう。

「なに憐れんだ目で見てるんだ、人には得手不得手があるだろ。確かに僕は家事が苦手だ。だが、代わりに料理がより美味しくなる良い調理器具を調達してきたんだ。これで十分だろ？」

「まだ何も言ってますんよ」

勝手に言い訳を始めたスターク先生。

まあ、おいしいものが食べれたら特に文句はない。

「それに、今日の僕の役目は飯炊きなんかじゃなく——」

そう言つてスターク先生が指パッチンをすると、聞きなれた特徴的

な電子音と共に周囲にホログラムが展開された。

「わあ、綺麗……………」

「あんたいつつもこんな所で働いてたの？ いいなあ……………」

それは、まるで空間に浮かぶ光るクラゲ。

空間そのものを使った幻想的なイルミネーションが部屋を彩っていた。

ふにふらとどんこも、思わずと言った様子で感嘆の声を漏らす。

……………まあ、ホログラムはここで働いている間に毎日使っていて見飽きているので、とりあえず食べることに集中する。

「——演出さ。……………いつまで食ってるんだ」

「食べれるときに食べ、休めるときに休むのが冒険者の基本ですから」
「フリでもいいからちよつとぐらい別れを惜しむ仕草を見せたらどうなの……………？」

ゆんゆんが床をうろちよろしてたちよむすけを抱き上げながら、あきれた様子で言ってきた——

スターク先生に案内された先には、ゆんゆんが呼んだクラスメイトが集まっていた。

どうやら、私と交流があった者達だけを集めたみたいだ。

部屋にいたのはゆんゆん、あるえ、ふにふらとどんこ。

「ね、そろそろ渡す？」

「そうだね。このままだとただの食事会で終わっちゃうよ」

いつものコンビが何やらブツブツ言いながら、テーブルの下から一本の杖を取り出した。

どうやらテーブルクロスで上手く隠してたようだ。

「はいっ、これ私たちからの饞別」

私は差し出された杖を受け取り、手に持って具合を確かめる。

「これは……………手に持った感じ、かなり魔力が伝わりやすいです。高かったのでは？」

「ふふ、ふにふらのお父さんは魔道具職人だからね。あたし達で森の

中まで行って、魔力に溢れた木を剪定してきたって訳さ。もちろんプ
ライスレスだよん」

「お礼がしたいなら、旅で見つけた良い男でも……」

「僕とあるえが付いてなかったらモンスターに食われてた所だったけ
どな」

「ああっ！ スターク先生はいつもカッコつけてるんですから、たま
にはあたし達にもカッコつけさせてくださいよ！」

「ま、まあまあ落ち着いてください……。杖ありがとうございます。
大切にしますね」

私が杖を握って微笑むと、二人は少し照れくさそうに口をムニムニ
させ。

「ほら、ゆんゆんも早く出しなよ！」

「そうそう、せつかく用意したんでしょ？」

恥ずかしさを誤魔化すように、ちよつと早口でゆんゆんにまくし立
てた。

二人に言われたゆんゆんが、机の下から一つの紙袋を出して私に差
し出す。

「……………大事にしてね？」

受け取ったちよつと大きめの紙袋は、見た目に反してとても軽かつ
た。

「開けてみてもいいですか？」

「もちろんよ。餞別なんだから」

その言葉を聞いて袋を開けると、そこにはローブとマントと帽子が
入っていた。

これはありがたい。服を持っていない私は学校の制服を私服代わ
りにしていたので、だいぶボロボロになっていたのだ。

「ちなみにそれ、僕がほんの少し手を加えておいたぞ」

ゆんゆんにお礼の言葉を言おうと顔を上げると、スターク先生が串
焼きを頬張りながら横からそんなことを……。

「……………えっ、一体何を……？」

スターク先生はゆんゆんと目を合わせると。

「服を買ったのはゆんゆんだが、改造したのは僕だ。どうしたか聞きたいか？ 裏地の間にセラミック基複合材と炭化ケイ素、ケブラーを重ね合わせ、ある特殊な液体を染み込ませている。家庭科の授業で生徒達に実用的なアイテムの作り方を教えてる途中にちよつと閃いてね」

「あつ、戦闘訓練やドローン等の制作じゃなくて、防具関連の作り方教え始めたのもそういうことだったんですね」

「ドローンの作り方を教えたところで、僕の会社で働く時くらいにか役に立たないからな。君たちが卒業後も使える技術を教えることにしたんだ」

スターク先生の説明に、ふにふらが納得したように手のひらを軽くポンと打つ。

「ほう、私たちが卒業した後でそんな面白そうな授業をしていたのですか」

「賢さゆえに早めに卒業してしまうのも……考え物だね」

私やゆんゆんと同じく、成績優秀ですぐに卒業したあるえが達観したような顔をしながら、フツと笑ってそう言った。

紙袋から服を取り出し、少し揉んでみる。

強く握りしめると、途端に力を込めた部分だけ硬度が上がった。

……なるほど。

「……………ダイラタンシーですか」

「正解。さすがだな」

以前スターク先生が面白半分に教えてくれたちよつとした知識だ。

ざっくりだが、とある特殊な液体に衝撃や力が加わると中の粒子の隙間が狭まり、液体から個体へと状態が変化するという現象。

それを利用して普段は柔らかく、攻撃を受けた瞬間に硬化して身を守るローブを作ったのだろう。

「え、ダイラタンシーってスターク先生が授業でやってたやつですか？」

「いきなり水溶き片栗粉握りつぶし始めた時は頭がおかしくなったのかと思いましたよ」

どうやら授業でもやっていたみたいだ。

「君なら見ただけで何が起きてるのかある程度理解できると思ってたんだが……」

「やめてください、そのガツカリしたような顔!! 頭がおかしくなったりとか言つてすいませんでした!」

シニカルに笑ったスターク先生に対して、ふにふらが全力で謝罪する。

「言つておくが、ローブとマントの中に入ってるのは片栗粉じゃないぞ? 魔法にも物理にも強いアダマンタイトの粒子を溶かした特殊な液体が染み込んでいる。重量は本来のローブとほとんど変わらないまま、上級魔法の直撃だろうが、重機関銃の連射だろうがはじき返す防御力を実現させた。戦場でこれを着たら君は突っ立つてるだけで防壁がわりになれるぞ」

「過剰にもほどがありますよ……魔王城にカチコミかける勇者の最終装備だつてそんなのないですよ……」

凄いが正直ドン引きだ。

他のみんなもポカンとしている。

だがそんな中、自慢げな顔をしているのが一人。

「ちなみに発案は私だよ。なにか特別で実用性があつてカッコイイものを作ろうつてゆんゆんやスターク先生と相談しあつてね。とあるスパイ映画からヒントを得て……」

「要するにパク……」

「オマージュ、リスペクトです……!」

キャベツと格闘しながら茶々を入れてきたスターク先生に、すかさずあるえがツツコんだ。

というか、スターク先生は未だにキャベツをまともに食べることができないのか……。

騒がしくなってきた室内だが、とりあえず私は感謝の意を伝える為。

「ゆんゆん、あるえ、スターク先生。ありがとうございます。これは大事に着ますね」

「大事にしなくても破れたりしないから大丈夫さ」

「この男は……。」

「どうしてこう、いい感じで締めくくれないのですか？」

「スターク先生にはハートが無いんですか……？……？」

「ゆんゆん……君たまに毒吐くな」

その後、食事を続けたり、スターク先生にキャベツの簡単な仕留め方をレクチャーしてあげたり。

故郷での最後の一日は賑やかに、そして楽しく過ぎていった。

▽

『お疲れ様でした、ボス。ミサイルの補充は完了しております』

「ああ」

めぐみんのお別れ会を終えて作業室に戻った僕は、魔王軍秘密拠点爆撃の準備をしていた。

淹れたたのコーヒーを啜り、一息つく。

さて……まいったな。

「フライデー、ギフトの完成は？」

『まだ十時間程かかります』

「ハア……」

ローブの他にもめぐみんに渡す予定の物があつたのだが、お別れ会に間に合わせることができなかった。

幸い、もらった饞別の品の整理などであと一日だけ里に滞在することにしたみたいだが……。

まあ、明日旅立つ時にでも渡せばいいか。

むしろ旅立つ直前に渡す方が感動的かもな。

いや、完成次第、玄関の先にサプライズとしておくのも良い。

そんな自己満足の演出について頭を巡らせていた時だった。持っている端末から着信を知らせる電子音が鳴った。

現段階で僕と連絡が取れるのは……。

『ボス、クレア様です』

「クレア？ 繋げ」

彼女とは渡した魔王軍用兵器の成果報告や、送ってほしい武器の要望などで度々こうしてやり取りしているのだが……。

今は報告の時期でもないし、欲しい武器でもあるのだろうか。

繋がったかと思えば、やけに息が荒く、かなり焦った様子のクレアの声が端末から飛んできた。

『ス、スターク殿か!? 大変なんだ!! 今とにかく大変な事態で……』

「あー……ひとまず冷静に。何があった？」

ビジネスのやり取りを続けるうちに、彼女ともだいぶ打ち解けた。

大貴族だというのが……気楽に話せるようになったもんだ。

僕は彼女に冷静になるよう呼びかけ、コーヒーを一口啜る。

『魔王軍が王都に襲撃してきたのだが……』

「お言葉だが、それなら備え付けのタレットで勝手に倒れていくんじゃないのか？」

この二か月のうちに、すでに王都の防衛システムは完成していた。敷設されたタレットや迫撃砲、攻撃ドローンなどは『騎士団が揃って失業しかねない』とクレアに言わしめるほどの効果を発揮してくれていたはずなのだが。

『……襲撃してきたのは、ただの魔王軍ではない、魔王軍幹部が率いる強襲部隊だ!』

その言葉に、コーヒーを飲んでいた僕の手がピタリと止まる。

「へえ……魔王軍幹部……」

『襲ってきた幹部の名は、比類なき剣の達人にしてチート殺しと呼ばれるベルディア……種族はデュラハンという、強力なアンデッドモンスターだ……』

「ついに来たか……」

いつの日か紅魔の里で読んだ文献の中に、こう書かれてあったのだ。

——【魔王城の覆う結界の維持のほとんどは、幹部たちが行っている。魔王城へ侵入したいならば、幹部を倒し、結界を弱めて破るしかない】

幹部を消せばその分結界も弱まる。

魔王城の結界を破る攻撃手段を持っていない今、最も手っ取り早く魔王城に攻撃を仕掛ける方法は、幹部を消し去る事だ。

『スターク殿、本題はここからだ。貴方に連絡をした理由なのだが……そのベルディアがこれらの兵器を作った人間を呼べ、来なければ即刻攻撃を仕掛けると言い出したのだ……幹部が率いる部隊相手となると我々も相当な犠牲を覚悟しなくてはならなくなる。ここは穏便に済ませたい。スターク殿、戦闘になったら離脱しても構わないので、どうか来てはいただけないだろうか？ 奴は今、平原で貴方を待っている』

願ってもいないチャンスだ。どう探るか迷っていたところでもさか向こうから、しかも僕を呼んでいるとは。

「喜んでそちらに向かおう。もちろん、いつものローファースシューズとシルクシャツではなく、もっと硬いスーツで」

『おおー、感謝いたします、スターク殿！』

「それじゃ」

通信を切り、ラボの出口へと歩き出す。

幹部の実力とやら、見せてもらおうじゃないか。



スーツを装着し、王都の平原まで飛ぶ。

そこまで飛んで目に入ってきた光景は、一触即発状態でにらみ合う人類と魔王軍の両軍だった。

間に数十メートルほど距離を開け、ひたすら剣呑な雰囲気を出したまま両軍が並び立って対峙しているその様は、まるでロード・オブ・ザ・リングのワンシーンだ。

僕は人類側の先頭に立つようにゆっくりと着地した。

「……お望み通り来てやったぞ。僕を探してたつてのはどいつだ？

十秒以内に出てきたら、僕が直接サイン書いてやるよ」

よく聞こえるように大声でそう言うと、魔王軍の兵士たちが統率の

取れた動きでザツと左右に別れた。

別れて出来たその道を、ズチャリ、ズチャリと鎧越しの足音を響かせ、悠然と歩き出てきたのは一人の首から先がない大柄な騎士。

ソーに勝るとも劣らない体格。背丈は二メートル近くはありそうだ。

脇に抱えている頭部は自分のものだろうか。

騎士は兜を被った頭部を手に乗せると、差し出すように僕の方へと向けて。

「貴様がこの極悪兵器を製造してる技術者か……。どんな奴かと思ってみれば……。随分ふざけた男ではないか……」

「喋る生首にそう言つて貰えると光栄だな」

「その空飛ぶ鎧と言ひ、貴様ノイズ国の生き残りなどではあるまいな？」

軽口を言うが、まるで意に介さず話を続ける首無し騎士。

ノイズ国……。文献で見た名だ。

「生まれはアメリカだ。そんなことより早く本題に入つてくれないか？　これから君の仲間のお家を吹き飛ばしに行く予定があるんだ。わざわざ霧で覆ったくらいで隠れた気になつてる秘密基地とかな」

僕のその挑発的な言葉に騎士はカタカタと震えだし、兜の奥の目が見開かれ。

「ク、クハハ……。クハハハハハハ!!　そうか、やはり貴様が！　貴様が」

「なにあの変な笑い声……」

「グハア！」

僕の後ろの方にいた女冒険者の何気ない一言に首無し騎士がダメージを負う。

「首がないだけで強烈なキャラしてるんだ、それ以上キャラ付けしようとしなくてもいいんじゃないか？」

「これはキャラ付けでは無いわ！　一々茶々を入れおつて！　そんなことはどうでもいい！」

首を手に乗せながら器用にボディランゲージで怒りを表す首無し

騎士。

だが、すぐに冷静さを取り戻し。

「ここ最近立て続けに起こる魔王軍基地の爆撃事件、その犯人は貴様で間違いあるまい？」

「……………だとしたら？」

「フンツ……………数多の軍勢を退ける破壊兵器を開発する知力、空から一方的に爆撃出来る神器の所有……………」

首無し騎士は、兜の奥に輝く赤い瞳を少し伏せる。

そして……………。

「俺の名はベルディア。貴様に選択肢をやろう。今この場で俺に殺されるか、魔王軍に付くか……………選べ」

自分の首をわきに抱え、空いているもう片方の手を僕に差し出してきた。

その行動に、後ろの冒険者たちがどよめきだす。

なるほど、戦争は優れた武器商人を引き込んだほうが勝つ。

今迄散々僕の破壊兵器で苦渋を飲ませてきたんだ。殺すより引き込みたがるのも無理はない。

しばらくの沈黙の後、僕もベルディアに向けて手を差し出し——

「……………ほう。てつきり断られるつもりでいたのだが……………後悔はさせん。貴様が望む報酬を用——グホアッ!」

——差し出した手を相手に向け、リパルサー光線を体のど真ん中に叩き込んだ。

「僕を選択肢はこうだ。ここであんたをぶちのめして世界を少し平和にする」

数メートル吹っ飛んだベルディアは、空中で素早く姿勢を立て直し、身の丈ほどもある大剣を地面に突き立ててブレーキをかける。

地面に一筋の鋭いブレーキ痕を残して剣を引き抜くと、ベルディアは小さく震え出し……………。

「ククク……………クハハハハ!!! いやはや、実に残念だ!! これでもなお……………」

最後まで言い切る前に、僕はベルディアの周囲にこつそり回らせておいたドローンのステルス状態を解除し、機銃やミサイルポッドの照準を全てベルディアに向ける。

僕らの背後にあったリパルサー・タレットの全砲門も、威圧的な機械音を立ててドローン同様ベルディアへと向く。

ベルディアの周囲360度が、重火器で囲まれた。

「……人の話は最後まで聞くものだ……いいだろう。我々に着くメリットが何か——」

瞬間。ベルディアが自身の頭部を空高く放り投げ、剣を両手に持つ。

「——貴様に教えてやる！」

「撃て！」

僕の合図によって、ベルディアを囲む全ての砲門が火を吹いた。

空に浮かぶ頭部もクレール射撃の的のごとく砕かんと。

……が。

「ハアアアアアアアアッ!!」

放たれた砲火は、どれ一つベルディアに届くことはなかった。

ただの、一振の、剣が。

迫る幾千万の弾丸を、ミサイルを、プラズマの光線を。

目にも留まらぬ……なんて言葉では生ぬるい程の斬撃によって、露でも払うかのように全て弾かれていた。

「馬鹿な……」

思わず口に出してしまう。

それだけじゃない。頭上に放り投げられた頭部への攻撃も、胴体めがけて放った弾丸やミサイルを剣で反射させて相殺することにより防いでいた。

目の前で起こっていることが信じられない。

数多の軍隊相手だって完封してみせるであろう僕の武器たちが、発明品達が、圧倒的なまでの個の力の前に何も出来ずにいた。

ガシッつと、ドローンが全ての弾丸を吐き出したことを知らせる音が響き、それとほぼ同時に頭部がベルディアの手へと落ちた。

「ふむ……まあ、こんなものか。魔力もこもらぬ直線的な攻撃など取るに足らぬ。ザコ相手が関の」

ベルディアが言い切る前に、まだエネルギー残量の残っていたリパルサー・タレットからベルディアへと、一筋の光が突き抜ける。

「フンッ！」

「グツ！」

……その不意打ちの一撃すらベルディアは防ぎ、あまつさえ僕の方へとはじき返してきた。

向かって来たりパルサー光線を、かろうじて拳で空へと逸らす。

「我々に着くメリット……今ので理解できただろうか？ 貴様には幹部の席を用意する準備だつてこちらにはある。とはいえ、俺も元はまっとうな騎士。我ら側に着くとしても、裏切り者は好かん。考えるそぶりも見せず、すかさず攻撃してきた貴様には好感が持てるぞ。しかし、これも魔王様より下された命……もう少し強引な手段を取らせてもらおう」

そう言つて、ベルディアは僕に向けて人差し指を突き出し……。

「汝に、死の宣告を——」

ベルディアがそう口にした途端、背骨が丸々氷柱になったかのような、すさまじい寒気に襲われる。

長年戦つてきて培われたカンが大音量で僕に警告する。『避ける』と。

……だが、それはできない。僕の背後には大勢の人間がいる。敵がしようとしている事の正体がわからないが、避けたら確実に悪いことが起きるだろう。

「——お前は——一か月後に——」

刹那、ダクネスの顔が脳裏によぎる。

……なんで命の危険が迫つてるときにあんな変態の顔が浮かぶんだ。

そんなふぎけたことが浮かぶ頭とは裏腹に、僕の体は無意識に動いていた。

ベルディアより少し手前の地面に、僕は掌を向け……。

「——死……ッ!？」

ベルディアの手首に、地面を撃つて反射させたり。パルサーを当てることによつて、その僕に向けられた指先を上空に逸らした。

……自分にリパルサーがぶち当たるように、カエルの腹で弾かれる光線の入射角と反射角の計算を瞬時に行つていたダクネスの高度な変態プレイを見てたのが、意外なところで役に立った。

彼女には感謝……いや、やっぱやめておこう。

ベルディアはというと、弾かれた自分の手を脇に抱えた自分の首の前までもつていつている。

首なし騎士なりの手の調子の確かめ方だろうか。

「ククク……クハハハ！　そう来なくてはな！　やはりこんなもので脅しをかけるのは邪道が過ぎるというものよ!!　よかろう、今回はこれをもつて挨拶代わりとしようではないか。貴様とはまた会うことになりそうだ、返事はその時に聞くとしよう。貴様におんぶにだつこのこの国に愛想が尽きたならば、いつでも魔王城に来るがよい……まあ、それは俺の望む結末ではないがな」

そう言つて、ベルディアは愉快そうに踵を返し。

「では、近々な」

「『テレポート』ッ!!」

側近と思わしき黒いローブをかぶつた魔法使い職が転移魔法を唱え、その姿をかき消した。

それに合わせるかのように、ベルディアの背後にいた部隊も次々と魔法職がテレポートを唱えて消えていく。

「……………」

戦場には、沈黙だけが残った。

……………早急に対策を練らなくつちやな。

▽

ベルディアとの小競り合いが終わつた僕は、報告の為王城へと上がつていた。

商談の為に何度も王城へ足を運んでるうちに許可を経て作った僕専用の着陸用バルコニーに降り、スーツから出て室内へと入る。

もちろん、バルコニーの床は補強済みだ。

いつもビジネストークに使う王城のとある一室に入ると、クレアがねぎらいの言葉をかけに来た。

「スターク殿、おかげで我々の部隊が被害を受けずに済んだ。皆に代わって礼を言う。まさかあのベルディアを退けるとは……」

「退ける？ とんでもない、奴は余裕だった。あのまま戦っても、五体満足で勝てたかは……怪しいところだ。というか、あいつが僕に指を向けた途端、すさまじいまでの悪寒がした。あれは一体なんだ？」

「何!?! 死の宣告を食らったのか!?!」

ベルディアが僕に指を突き出して来た時の話をした途端、クレアが血相を変える。

「喰らってない。途中で腕を弾いて向きを変えた。そんなにヤバイスキルだったのか?」

「死の宣告。対象を問答無用で死に至らしめる最悪のスキルだ。食らえば最後、呪いをかけたものが定めた期間を経たのちに確実に死ぬ。解呪できた試しはない」

「……さもあつけらんと言ってくれるが、それ最初の時点で僕に教えてくれたってよかつたんじゃないか?」

「もも、申し訳なかった!! 王都の冒険者の間では広く恐れられていた技だったのでつい……」

「僕はキャベツが飛ぶことさえ知らなかったんだぞ?」

「えっ? それは……」

「つたく……まあいいさ。教えてもらえなくても防げたんだしな?」

「そ、その……本当に申し訳ないと思ってるので、あまりネチネチとしないで貰いたい……」

貴族の威厳はどこへやら、縮こまって申し訳なさそうに胸の前で両手の人差し指をツンツン突き合わせている。

僕の作った兵器が完封された苛立ちをつい彼女にぶつけてしまった。

「冗談だよ。あのくらいなんともないさ」

「いや、こちらこそ本当にすまなかった……」

そう言つて、テーブルの上に置いてあつたお茶を呷るクレア。

ああ、まだ報告しなきゃいけないことがあつたな。

「そういえば、魔王軍にスカウトされたぞ」

「ブーッ!!」

クレアが口に含んだお茶を盛大にまき散らした。

君貴族なんだよな？

僕にはかからなかつたが、とりあえず部屋の隅の方にいた使用人に向かつて手を叩き。

「あー、彼女に何か拭くものを」

「はい、ただいま」

「す、すまない……取り乱した……その、受けたわけではないのだろう？」

「受けてたらもうここは消えてなくなつてるさ……冗談だよ。死の宣告を受けそうになつて冷や汗かいた気分をちよつと味わつてもらおうと思つただけさ」

「貴方の冗談は……本当に笑えない時がある……」

クレアはむせかえつて赤くなつた顔を瞬時に青ざめさせた。

「当然、連中に付くつもりはない。例えこの先の国が僕におんぶにだっこになつたとしてもな。だから安心してくれ」

「はは……そう言つてもらえるとありがたい……」

ほんのちよつとの話し合いで随分と疲れた様子だ。

きつと貴族のいざこぎで疲れているのだろう。今日はゆつくりと休めればいいが。

「いずれベルディアとは決着をつける時が来るだろう。そのための対策を立てなきゃならないが……その前に行くところがある」

「行くところ？」

「ああ、ちよつとアルカンレティアにな……」

「水の都のアルカンレティアか……強力な対アンデッド用の聖水の調達か？」

聞いてきた彼女の質問に、僕は軽い感じで答えた。
そんな場合かと怒られなければいいが。

「いいや。生徒と観光さ」

第16話 狂信者とマッドサイエンティストの二重奏

ベルディアとの顔合わせから一日が経って。

僕はというと、里のラボで早朝からモニターと睨めつこを続けることかれこれ三時間経過していた。

【最終調整中……………残り99%……………99%……………】

「遅い……………！ フライデー、もっと早くならないのか？」

『急かしても意味はありません。もうあと十数分ほどお待ちください』

「……………クソツ」

そろそろめぐみんが出発する時刻だと言うのに、未だギフトが完成していなかった。

ふと、隣に目を見やる。

透明なケースの中で、蜘蛛の足程細いアームが忙しなく動き、手のひらサイズの小さなデバイスの細部を弄っている。

そして腕時計をちらりと見た。

こりやダメだな。

「よし、このまま持っていく」

『ギフトはまだ実用段階ではありません』

「色は塗ってなくてもいいからな」

僕はそう言うと、ケースの中からギフトを取り出して、そのままこの里の転送屋へと向かった。

▽

転送屋の扉を開けると、そこにはふにふらにどどんこ、その奥の方にはめぐみんの姿があった。

「おや、先生まで来てくれたのですか……………って、目の下のクマが酷いですよ？ 徹夜でもしたのですか？」

「まあ、そんなところだ。生徒の見送りだつて教師の仕事のうちだろ？」

「先生は教師じゃなくて特別講師ではありませんでしたっけ……」

「ただの特別講師は生徒のためにこんなの作らないさ」

「……？」

眉をひそめるめぐみんに、僕は小さな小箱をスローパスする。

「わっ……と……あの、これは……？」

キヤッチした小箱を手に取り、重さを確認したりしながら尋ねてくるめぐみん。

僕は何も言わず、ただ黙って首をクイツと曲げて開けるよう促した。

「……開けたら爆発したりしませんよね？」

「君じゃないんだ。勝手に爆発したりなんてしないし、そもそも爆発物じゃない。いいから開けろよ」

若干訝しげな顔をしていたが、最後くらい素直に喜んで受け取ろうと思ったのか、ため息を一つつき、箱をゆっくりと開けた。

めぐみんが、小箱の中に入っていたものを手に取り、まじまじと眺める。

「これは……眼帯……ですか？」

そう、僕からの贈り物。紅魔族がよく好んで装着している眼帯だ。当然、ただの眼帯な訳が無いが。

「ああ、見ての通り。これでサプライズも最後だ」

「……その眼帯、あるえと同じだね。………なんか、縁の色が薄いけど」

めぐみんの手に持つてるソレに気がついたどどんこ。

色のことには突っ込まないで欲しい。

「あるえと全く同じじゃつまらないだろ？ 中身こそ全く違うが、外見も多少は異なっていないとな」

「へえー、中身も………それってあるえの眼帯と違って見えるだけじゃないって事ですか？」

「ほんのちよつぱり豪華にしてある。君たち二人にも卒業する時にはなんか作ってやるよ」

「やたー!!」

ふにふらとどどんこは、僕のその言葉に年相応の少女らしい眩しい笑顔を見せた。

「あ、スターク先生。あるえとゆんゆんは見てないですか？ 私たちですら来たのに、あの二人ったらぶつちしたんですよ?」

頬をふくらませてぶーたれるふにふらだが、ゆんゆんはともかく、あるえの事情は知っているので、彼女らに変わって弁明することにする。

「あるえは大切な用事があるんだ。ゆんゆんは知らないが……………まあ、彼女がこういう友達同士のイベントに来ないとは思えない。

きつと彼女なりの用事があるんだろう」

「もしくはめぐみんがフラれたか!」

「あははははー! ウケるー!」

「H A H A H A!! 笑える」

「ちつとも笑えませんよ!! 三人まとめてぶつちめられたいですか!?!」

「あのー、そろそろアルカンレティア行きのテレポルトが発動しますが……………」

そのテレポルト屋の女性の声を聞いたためぐみんは、そちらの方をちらりと見ると、再び僕らの方へ視線を戻して深いため息をついた。

そして小箱から眼帯を取り出して。

「まあ、この方があなた達らしいと言えましょうか……………もう何も言いません。スターク先生、これ早速付けていきませぬ。ありがとうございます……………」

そう言いながら眼帯をつけたためぐみんが、装着した瞬間その場で時間が止まったかのように静止する。

やがて、口をムニムニとさせながら。

「スターク先生……………一体何を作ったんですか?」

「眼帯だが?」

「私の知ってる眼帯はつけた瞬間に衛星とリンクして世界中の情報を視界に映したりはしません」

めぐみんは半ば呆れたような、でもなにかおかしそうな、そんな複雑な笑顔を浮かべて、テレポート用の魔法陣の上まで歩き始めた。

「間もなく、アルカンレティア行きのテレポートが発動します。力を抜いて、魔法に抵抗しないようお願いします」

テレポート屋の女性の声が、別れを告げる汽笛に聞こえる。

「それではスターク先生、それとふにふらとどどんこも。見送ってくれてありがとうございます。特にスターク先生、本当にお世話になりました」

魔法陣の上に立つためめぐみんは、一度ペコりと丁寧なお辞儀をし、顔を上げた。

その顔の表情は、ほんの少し寂しげで。

「スターク先生……………その、色々頂いた恩は必ず返します。もしどこかでお会いすることがあって、もしあなたが困っていたら……………その時は最強の戦術破壊兵器が手を貸しますよ?」

最後にそう言って、彼女はやさしげに微笑んだ。

「嬉しい申し出だな。ひよっとしたら一週間以内に会うかもしれないが、その時困ってたら頼むよ」

「……………えっ、一週間以内? どうして一週間か」

「『テレポート』!!」

最後まで言う前に、めぐみんは転移魔法でアルカンレティアへと飛ばされた。

……………締まらない最後だ。



「……………ん以内に……………」

目の前がぐにやりと曲がり、質素なテレポート屋から美しい街並みへと視界が切り替わった。

「……………なんとも締まらない最後ですね……………」

そもそも一週間以内とはどういうことなのだろうか。
聞けずじまいだったが……………。

……また近いうちに会えると言うなら、その時に聞けばいいか。
私は改めて目の前に広がる街並みを見る。

「おお……………」

思わず声が出た。

青を基調とした、美しい街だ。今日が門出日和な快晴である事もあつて、街全体が輝いているように見える。

初めての旅で、目の前に広がるこの光景。ワクワクしないはずがない。

「ふう……………」

深呼吸して、私の旅の第一歩を……………。

『初めまして、めぐみん様。何か私にお手伝いできる事はありますか？』

「ぬああああー!?!」

突然耳元で名前を呼ばれ、思わずその場で変な声を上げてしまった。

周囲からジロジロと変な視線を向けられ、気まずさから帽子を目深に被る。

今のは一体……………。

バレないように、声の主は誰かと周りをキョロキョロ見渡している
と、再びさつきと同じ声が聞こえてきた。

落ち着きのある、貴族や王族の執事、高級料理店のウェイターなどを
思わせ…………いや、行ったことも見たことも縁もないが、どこかそんな
印象を覚える若い男性の声だ。

『驚かせて申し訳ありません。私は貴方をサポートするため、トニー
様に作られた人工知能です。以後お見知り置きを』

……………まさかフライデーの様な人工知能まで備わってるとは
……………。

いよいよもって眼帯とは呼べないナニかになっている。というかどう考えても人一人に渡していい物じゃない。

とりあえず私は人工知能に話しかける。

「えっと……では、眼帯のお兄さん。ギルドの位置は分かりますか？」
『目的地、アルカンレティアのギルド。衛星リンク開始……あらかじめマップピングされたデータと、衛星より確認できる通行状況から最適なルートを検索しました』

ピピッと電子音が鳴り、私の視界上で道路の上に光の線が引かれる。

……旅というのは、見知らぬ土地で自分で道を聞くなり地図を見るなりして、迷いつつも愚直に向かっていくものだと思っていたが、私の知っている旅はスターク先生によって死んでしまったようだ。

光の線に沿って、私はギルドへと向かう。

この機能を使うのはこれで初めて最後にしよう。

いざ、友から貰った杖を、服を、帽子を……そして、恩師から貰った神器を身にまとい、何者にも負けぬ想いでギルドへと向かった。

さあ、ここからだ。

ここから最強の戦術兵器にして、最強の魔法使いであるめぐみんの名が轟くことになるのだ――

▽

――そう思ってた時期がありました。

「――俺たちのところでは手に余るな……その、悪いが他にあたってくれないだろうか……？」

そう言つて、私から離れていくパーティ。

アルカンレティアに来て早速クエストを受注することになったのだが、私が初めて同行したパーティの人たちはそこそこ弱い敵を倒し、そこそこの生活ができればそれでもいいというパーティだったので、彼らにとって私は不要だったらしい。

私はギルドの酒場で一人、パーティーメンバーが去って広くなった机でぼつねんとジュースを啜りながら、一人でぼやく。

「ま、まあいいでしょう……私がとがった存在なのは理解できています。大物狙いのパーティーを狙らうとしましょう」

『その意気です』

次に見つけるパーティーは、きっと私の価値を分かってくれるだろう。

——そう思ってた時期がありました。

「——ほかの魔法を覚える気がないなら、ウチのパーティーには置いとけないな……」

「ほ、本当に良いのですか!?! 私なら、強敵相手に切り札になれますよ!?!」

「切り札にしては威力が強すぎかなあ……動けなくなるのもデメリットすぎるからちよつと……」

新しく見つけたパーティーもまた、私の火力では過剰だと追い出されてしまった。

今日もまたギルドの酒場で一人、広い机の上でジュースを啜り、骨付きチキンをかじる。

「……まだあきらめるには早いですよね。この街に来て三日しかたってません」

『めぐみん様ならきつといつかパーティーを組めます。世界最高の人工知能である私が保証………したいです』

「おい」

——そして今日も。

「——い、いやー……その、ほら……私たちのパーティーは、見ての通り上級職がないでしょ? アークウィザードの君がいても、おんぶにだっこになっちゃおうし、それは申し訳ないから……」

「そんな事気にしませんとも！ 何なら報酬の取り分少なめでもいいですよ!? ほら、戦術破壊兵器がお手頃価格で……」

「すみません！ 勘弁してください!!」

逃げるように走り去っていく、新しいパーティー。

オマケに爆裂魔法使いである私の噂が広まりつつあったのか、声をかけようとするとその時点でやんわりと断られる始末。

いくらなんでも噂が広がるのが早すぎる。悪事千里を走るとはこの事か。

………悪事を働いた覚えはないが。

こうして五日連続、私はパーティーが去ったところか寄り付かなくなり始めた広い机で一人食事をとる。

「ふふつ、大人数用の広い机を一人で占領して食べるご飯は美味しいですね……贅沢してる気分ですよ………」

『皮肉を検知』

ひよつとして私は知らない子なのだろうか？

そんな思いが浮かんでは頭を振り、そんなことはないと自分に言い聞かせる。

眼帯のお兄さんも、毎日私を励ましてくれていた。

「うなーん」

「おお、ちよむすけ。お前はこの街ではかわいがられているようですね」

そして口の周りに食べカスを付けたちよむすけも。

……そのうち、眼帯のお兄さんにも名前を付けてあげないと。

『……私はこのままでもいいと思っておりますが』

「人の考えを読むのはやめてください!! そして私のネーミングセンスに文句があるなら聞こうじゃないか!」

——なんて、あれこれやっているうちにアルカンレティアに来てもう六日目だ。

私は朝日が差し込む宿の一室で、ベッドの掛け布団から頭だけだし、ボーツとした頭でそんなことを考えながら天井を眺める。

クエストを受けなければ、アクセルへ向かう馬車代を稼ぐことができない。

……私はベッドから降りて、スターク先生から貰った未だに重みのある給料袋を手に取り、外へと出る用意をしながら中身を確認する。中に入っている額は、ざっと百七十万エリス。

給料日の時、スターク先生は給料にほんの少し色を付けておいたと言っていたが、実際に渡された額はほんの少し色を付けたと違ってレベルではなかった。

スターク先生に給料は望みの額で良いと言われ、私が実際に紙に書いた給料はこの街への転送代である三十万エリス丁度。

だが入っていたのは、なんと二百万エリスだった。

そう、二百万エリスである。あの人は少しという言葉を一度辞書で引いてから自分の鎧に彫ればいいと思う。

これではスターク先生に飛んで送ってもらうのとほとんど変わらない。

なので、このお金は基本的に使わないようにし、アクセルまでの馬車代は自分で稼ごうと思ったのだ。

………が、結果はこのザマ。

次々とパーティーをクビにされ続け、手切れ金だと言わんばかりに山分けしてもらった報酬金も、爆裂魔法で出してしまった被害の修繕費やらで差っ引かれ、明日食べる分すら残ってない。

この街でもバイトを始めるしか無いかもしれない。

紅魔族随一の天才少女の未来を憂いながら、宿を出て近くのベンチに座り、深いため息をついた。

「ハァー……」

『めぐみん様、どうか気を落とさず。あなたの事はトニー様も認めて下さっています。きつと誰かが………』

「本当にそうでしょうか？」

励ます眼帯のお兄さんの言葉を、私は遮って。

「神器級の防具、過剰なまでの機能を搭載した眼帯……これらはつまり、認めてないことの裏返しではないでしょうか？」

『保護者目線で見られているからこそ、あれこれ施されているのではないか……とお考えなのですね?』

「……そうです」

これだって、きっと彼から見れば子供っぽい悩みなのかもしれない。

だが、私は子供では無い。一人で冒険だって出来……。

そこまで考え、今までのアルカンレティアでの自分の有様を思い出す。

……。

「ハア……」

また一つ深いため息が出してしまった。

と、そんな時。

「そこのあなた、何やら悩んでいるようね!! セクシーなプリーストであるこの私がどんな悩みでも聞いてあげるわよ」

「……………」

頭の悪そうなその言葉に俯いた顔を上げると、そこには青を基調とした修道服に身を包んだ、金髪のきれいなお姉さんがいた。

上げた私の顔を見るやいなや、お姉さんは顔を上気させ、ハアハアと息を荒くさせる。

……………えっ。

「な、なんて可愛い女の子なの!? こんな可愛い女の子がベンチでため息ついてるなんて見過ごせないわ!!」

な、なんだろうこの人は……かなりアブナイ予感がする。

関わっちゃいけないオーラがプンプン出ている。

『ミサイルを要請しますか?』

眼帯のお兄さんが恐ろしく物騒な提案をしてくるし、なんでそんなものまであるのか知らないし知りたくもないが……ひとまずここは穏便に済ませよう。

「あの、私は特に悩みがあったりする訳でもないの……」

そう言ってベンチから立ち上がるが、聖職者を名乗るお姉さんは私の肩をガシツと掴み……………。

「悩める子羊よ！ 私が来たからにはもう安心してちょうだい！ 私はセシリー！ 次からはセシリーお姉ちゃんって呼んで！ ハアハア……………」

お姉さんの凄まじい圧に負け、私は引きずられるかのようにして連行された。

『ミサイルを要請しますか？』

「……………考えておきます」



コトリ。と、空になったカップを置く音がサキユバスランジエリーのカウンターに響く。

「これでスターク先生もいなくなるのかあ……………寂しくなるなー？」

作ったような悲しい顔をしてそう言うのは、そのサキユバスランジエリーの看板娘であるねりまき。

僕は空にしたコーヒーのカップをカウンター裏のシンクまで持つて行ってやり。

「まさか。ちよつとアルカンレティアに観光に行くだけさ。このバーにはまた定期的に金を落としてやぶわっ」

……………カップを軽く水ですすいでやろうかと思ったのだが、水の勢いが強すぎて上半身にいくらかかかってしまった。

「スターク先生ほんとに家事上達しないね……………」

「ああ、必要ないからな」

「へそ曲げちゃダメだよ？」

「ご忠告どうも」

ズボンで手を拭ってカウンターまで出ると、ねりまきが寂しげに。

「スターク先生がずつとここに泊まってくれてたおかげで、ウチは少し豊かになったなあ……………」

「礼はいいぞ。豊かになるのはいい事だ」

彼女なりの別れの挨拶なのだろう。

……………別に学校でこの先も会うのだが。

美味しい酒の礼に、彼女の茶番に付き合っただけで済ませよう。

「ほら、ずっとお酒飲みながら話してたから私達通じあつてると思わない？」

「そうかもな。それじゃ、僕の考えてることもわかるだろ？ また次回までに美味しいお酒を用意しとけよ」

その言葉を最後にバーから去ろうとするが、まだ彼女からの視線を背中に感じる。

「……………わかったよ、このバーで交わした君との会話は楽しかった。この里に来た時は必ずここに泊まるからな」

「……………なのにここから出ていっちゃうの？ お父さんみたいに？」

「えっ」

カウンターの奥からねりまきの父の素っ頓狂な声が聞こえてくるが、僕らは無視して茶番を続ける。

「ああ、そうだ。……………情に訴えてるのか？」

普段人が泊まらないこのバー兼宿の部屋を、僕が里に滞在してる間寝床としてずっと貸し切ってたおかげで、ねりまき家は少し裕福になつたらしい。

上客にまた自分の宿を使ってもらおうと、冗談半分、仕事半分で情に訴えてくるねりまき。

「ひもじいなあ……………」

「ああ、気持ちはわかるよ。なんでだと思おう？ それはな……………」

僕は実に憎らしい顔をしながら。

「……………通じあつてるからあ……………」

その言葉を最後に二人で鼻で笑い合うと、僕はドアに手をかけてバーを後にする。

『……………最後に遊んでもらえてよかったな』

『……………うん』

背とドアの向こうで聞こえたその親子の声は、さっきの演技臭さはどこへやら、本当に寂しそうな声色だった。

……そんなはずと戻ってこない訳でもないのだが。

僕はそのまま、近くに停めてあったクインジエツトまで向かい、後部ハッチを開けて操縦席に座る。

「ねりまきとはなにか話しましたか？」

予め副座席に座っていたあるえが、そんな質問をしてきた。

「ちよつと茶番をね」

そう軽く答え、操縦版を弄って離陸準備を始める。

隣のあるえは顔こそいつものポーカーフェイスだったが、ウキウキしてる様子が体に出ていた。

膝の上に置いた手をムニムニさせたり、小刻みに体を横に揺らしたり。

僕はそんな彼女に笑いかけながら、発進のレバーに手をかけた。

「さーて、準備は出来たか？ マスター・あるえ？」

「マスター・あるえはもう居ない……そう、ここに居るのは…………ダース・あるえだ……」

どこまでも帝国軍と暗黒面が好きがあるえ。

僕は発進レバーをグイッと引くと、あるえが目を輝かせて叫んだ。

「ハイパードライブ！」

「そんな機能は付いてない。……そのうちつける予定だが」

以前あるえの小説にコーヒーを吹きこぼして駄目にした事への贖罪と、そんな事ほとんど忘れて呑気にメモとペンを手に持ってロケを楽しむにしているその本人の為に。

クインジエツトはアルカンレティアへと飛び立った。

……さて、あの娘っ子は元気にやってるだろうか。

▽

——なんて、呑気に考えてたのもつかの間。ものの一時間とかからず、僕はアルカンレティアに来たことを後悔していた。

「素敵なお髭ですね！ アクシズ教に入信してその髭をより素敵にしませんか!？」

「さあ、入信しま………どうして目を合わせようとしらないのですか!? こつちを、私を見てください!! 熱く語ってみせますから!! ほら、目線はこっちです!!」

「あなたの為に、今からアクシズ教団歌を歌います。お聞きください」
「頼むから近付かないでくれ………」

僕とあるえは、アルカンレティアに到着するや否や狂信者の群れに囲まれていた。

断つてもしつこく迫る狂信者。道を変えても狂信者。追い払っても別の狂信者。

狂信者狂信者狂信者。

そのうち空から降ってくるんじやなかろうか。

チタウリと戦つてた方が遥かにマシだ。

ウンザリしてる僕の横では、あるえが輝いた目でメモを取りまくっていた。

「君は楽しそうだな」

「ええ、それはもう最高ですよ。噂には聞いてましたが、まさかここまでぶっ飛んでる人達だとは思いませんでした」

「なるほど。帰っていいか?」

僕がここに来た目的は小説を台無しにしたあるえへの埋め合わせと、めぐみんがしつかりしてるかこつそり見る事。

ついでにベルディアのようなアンデッドに効くという聖水だとかの装備を見ることだ。

対ベルディア用……もとい、強力な対「個」用の新型スーツのプロットは頭の中で出来ているので、アンデッド用のアイテムを見るのは参考程度で良いだろう。

「……確かに勧誘の頻度が多すぎて前に進めないのは確かですね」
人をネタにしまくってるあるえだが、さすがにメモの邪魔をされるのはごめんのようだ。

さつきから首元や制服のポケットなんかに入信書がねじ込まれ、手元が揺れる度にわずかに顔をしかめている。

「かわいそうに。それどうするんだ? 暖炉にでもくべるのか?」

「そのへんのゴミ箱にでも適当に捨てておきます。スターク先生は……さすがですね。スキマがありません」

「賢いだろう？」

「私が思うに、どこに行っても勧誘を受けるのはその目立つ鎧のせいなのでは？」

僕はというと、街中で思いつきりアイアンマンスーツを装着してアークシズ教の入信書ねじこみを防いでいた。

紙を持って僕の周辺をうろつく狂信者共の姿と言ったら実に見物だった。

「君みたいに入信書を体中にねじ込まれるよりましさ」

「あの、スターク先生が鎧のなかに籠ったせいで私にそのしわ寄せがきてるのですが……」

「ぶつとんだ彼らが見たいんだろ？ よかつたじゃないか」

「ぐう……めぐみんが時々スターク先生の減らず口を愚痴っていたのがわかる気がするよ……」

そうは言うものの、その分僕は囲まれて散々洗脳じみた勧誘をされる上に、あるえの恨めし気な目線が若干痛い。

「そう怒るな。君の好きなものをおごってやるよ。さすがに連中も店の中でまで勧誘はしてこないだろう」

「ううむ……先生はなんでも物で解決しようとするのはやめた方がいいですよ？」

「一理あるな。それじゃ……とっておきの話をしてやるよ。本当はあまり話したくなかったんだが、僕は昔ウルترونっていう世界を守る為の人工知能を作ったんだが……」

新しくできた黒歴史なウルترون計画の話があるえにしようとして、ある見慣れた人物の姿が目に入った。

リボンで束ねられた黒い髪、その種族の名前の由来となった紅い瞳、そして腰に差した短剣。

「……おや、ゆんゆんじゃないか。どうしてここにいるんだい？」

あるえの言葉にビクリと体を震わせ、こちらに顔を向けたのはゆんゆん。

串焼きの屋台の近くで何やらうろちよろしてたみたいだが……。

「あ、あるえにスターク先生……奇遇ですね。一体どうしてここに……」

「それは僕のセリフだ。めぐみんのお別れ会に君が来ないからどうしたのかと思えば……」

「い、いえ、違うんですよ!! ほ、ほら……私って中級魔法しか使えないじゃないですか……なので、早く上級魔法を覚えてめぐみんを超える魔法使いになるため旅を始めまして……べ、べつにめぐみんが心配でついてきたとかじゃないですよ?」

恥ずかしそうにしながら勝手に自爆していくゆんゆん。

ゆんゆんは、めぐみんが爆裂魔法を初めて使った時に色々あって中級魔法を習得していたのは知ってたが、旅に出ているとは知らなかった。

そんな彼女は僕とあるえを交互に見ると、さらに顔を赤くさせてガタガタと震えながら。

「えっ……もしかして……観光地でもあるこの場所に二人で来るってことは……まさか……」

「おい、どんだけ妄想がたくましいんだ君は。思春期真っ盛りの少年だってもっと健全な頭してるぞ」

「頭がピンク色の優等生……なんだかネタになりそうだね」

「ままま待って!! ピンク色じゃないから!! お願いだから冷静にメモ取らないでえええええ!!」

めぐみんが彼女をいじめて楽しそうにしてる理由が少しわかった気がする。

「通行人の気を引くからあんまり大声で喚くなよ」

「そんな鎧身にまとってる先生にだけは言われたくないですよ!」

「……で、これからあるえはネタ探し。僕は付き添い兼、対アンデッド装備の見学と爆裂娘っ子が四苦八苦してる様子をチラみしていく。君もどうだ? 一人旅が好きなら止めないが」

「えっ……良いんですか!? 私なんかが付いて行ってもいいんですか!?!」

僕らの目的を聞いているのかいないのか。ゆんゆんは心底嬉しそうな顔をして僕らを見ていた。

なんだか彼女の背後に壊れたメトロノームみたいに振られる犬の尻尾を幻視する始末だ。

(先生、そんな憐れむ顔したらいけませんよ、失礼です。彼女だって好きであんなったわけではないのでしようから)

(……だな、反省するよ)

ゆんゆんに聞こえないようにあるえがそう耳打ちしてきた。

とりあえず、ゆんゆんが串焼き屋に並んでいたの、買ってやることにする。

観光地を串焼き頬張りながら歩くのもオツなもんだらう。

「あー……ゆんゆん、その串焼きを食べようとしたのか?」

「はい、大勢のカップルや友人同士やパーティーとかが並んでいたの、私一人で行っても気まずくならないように二時間くらい店の前で空くまで待ってたんですよ」

「HA……HAHAッ……」

いきなり超重量級の話をぶち込んできたゆんゆん。

思わず僕も乾きまくった笑いがでる。

「おいあるえ、そんな憐れむ顔をするなよ。失礼だろ?」

「いや、その……ちよつと……今のは……」

こうして、僕らは心に重い何かを感じたまま、串焼き片手にアルカノンレティアを回る旅に出た。

▽

薄暗い洞窟の中で、俺はずっと前からただひたすらブーツとしていた。

紅魔の里から出てもうしばらく経つ。ウォルバク様の封印はおそらく解けているのだろうが、肝心のその半身がどこを探しても見つかりやしねえ。

あてもなく探したって見つかるはずもない。地獄から自分の下僕

を呼び、あらゆる場所へと放つてはいるが……収穫はゼロだ。

「あー……天下のホースト様が、こんな洞窟でひきこもり生活とはなあ……これじゃウォルバク様に顔向けできねえぜ……」

と、一人愚痴をこぼしている時だった。

「グアーツー！ グアーツー！」

洞窟の中に、一羽の鳥獣が飛び込んできた。

……俺が放つた下僕の一匹じゃねえか。まさか、収穫があったとも言うのか？

死肉を食らう地獄の鳥獣は、整ったボロボロの羽を小刻みに羽ばたかせて俺の近くに停まると、その目で見てきたのであろうことを伝えてくる。

もちろん人語はしやべれねえから、その魂そのものから声を聴く。

「ふむふむ……ああ？ 相当弱体化して弱ってるだと……？ クソツ……どうなってやがんだ」

報告はまだ終わっていない。その内容は、俺を驚かせなお余りあるものだった。

「……ハア!! アーネスがやられた!! 一体どこの誰に……紅魔族のガキに……空飛ぶ真つ赤な鎧を見にまとった男……？ 名前は……？ なるほど。今どこにいやがる？ ……アルカンレティア!? クソツタレ! よりにもよってあんなどころかよ!!」

俺は自分の角の辺りをガリガリと掻きむしる。

アルカンレティア……悪魔やアンデッドが苦手とする聖職者がこれでもかという腐ったミカンの巣窟だ。

……おまけにあの悪名高いアクシズ教の総本山。

考えるだけでも頭痛がするが、ウォルバク様のためだ、一肌脱ぐしかねえ。

気合を入れるかのように、俺は洞窟の外まで威圧的に歩き出て、自慢の羽をバサリと広げた。

「グアーツー！ グアーツー！」

俺の出す威圧感と高い魔力に、報告に来た俺の下僕と周囲のモンスターたちが一斉に逃げ、周囲の生物の気配が消滅する。

「ハア……やってやるぜ。さて、ウォルバク様を返してもらおうじゃねえか、めぐみん……そして、トニー・スターク!!」

このホースト、悪魔生最大の全力を出すとしましょう、ウォルバク様。

「ゴルウアアアアアアアアアアツツ!!!」

覚悟の雄たけびを上げ、俺はアルカンレティアへと全速力で向かった。

第17話?・集まりし悪意

……最悪だ。

ここアルカンレティアに来てロクな目に合っていないが、今日は特に最悪だ。

警察に職務質問されたり、トイレの紙の強奪を手伝わされたり、警察署に連行されたり。

「めぐみんさん、お願いします!! ほら、優しそうな巨乳の女の子二人に、渋くて素敵なおじ様! あの人達ならきつとめぐみんさんを見捨てることはないと思います! さあ! お願いします!!」

その元凶であるアクシズ教最高司祭ゼスタが、私の目の前で手を合わせて拜んできていた。

私は路地裏に隠れたまま、これが最後ですとだけ伝え、飛び出す準備をする。

このいたいけな美少女が転んでいる様を見れば、きつと人は手を差し伸べてくれるはず。

そしてお礼だと言って喫茶店に誘い、ゼスタさんとすり替われれば私はもうお役御免だ。

あとは勝手にアクシズ教に勧誘でも好きにしてくれればいいと思う。私は宿に帰って休みたい。

「めぐみんさん、今ですー!」

ゼスタのその声を合図に私は路地裏から飛び出し。

「ぐあああああ!! ひ、膝を擦りむいてしまいましたあ!! な、なんとということでしょう!!」

できる限り自然な感じですよっ転んだ——!



「そういえば、スターク先生って敵はいないんですか?」

串焼きを堪能しつつ、勧誘してくるアクシズ教徒に四苦八苦しながら街中を歩き続けること数分。

あるえがおもむろにそんなことを聞いてきた。

「……いきなりなんだ？」

「スターク先生は、里にあった元謎施設を改造して王都に戦いを有利に進める魔道具を作ってるじゃないですか」

「魔道具じゃない、科学技術の産物だ。魔道具よりもっと確かで、魔力も要らなくてさらに便利だ。一緒にするな」

あんな不完全な失敗作と僕の発明品を一緒にされるのは僕のプライドが許さない。

僕がまくし立てると、あるえは若干戸惑ったような表情を見せ……。

「なぜそんなに魔道具を目の敵に……」

「ほ、ほら……スターク先生は魔力値があまりにも低すぎてロクに魔道具を使うことが出来ないから……」

「ああ……」

ゆんゆんの小声になってない無意味な耳打ちにあるえが納得する。

この世界の文明力は火を起こす時に火打石を使ってるレベルだ。

ライターのような誰でも簡単に火を起こせる魔道具が何十万なんて値段で売られている。

バカバカしいことこの上ない。そのうちライターも普及させてやろう。

とりあえずは防衛設備を優先させるが。

……いや。

「違う、そうじゃない。なんでいきなりそんなことを聞いてきたんだ？ 君も軍事産業を始めたいのか？ やめとけ、暗い洞窟に閉じ込められて無理やり武器作らされるのがオチだぞ。ヘタすりゃ胸に穴が空くかもな」

「なりたいたいのには小説家です……。その、革新的なアイデアで次々と防衛設備を提供するのはいい事だと思うのですが、それまで王都に武器を売ってた方々が仕事を奪われ、それで怒りを買ったたりしていないかと少し思っただけですよ」

「わ、私も聞いたことある……。昔の話んですけど、私たちのご先

祖さまが魔道具作りを始めた時も、紅魔族の作る質の高い魔道具を妬んで嫌がらせを受けたとか……………」

「それくらいで済んだらいいのだけれどね……………」

「……………心当たりが無いわけじゃない」

王都でクレアから聞いた話だ。この先護衛をつけた方がいいかもしれない、と。

その時は装着していたアイアンマンスーツを見せびらかすようにコンコン叩いておどけて見せたが……………」

実際、王都に居ると時々ピリピリとした視線を感じるのだ。まあ、同業者の妬み、恨みなんてのは親の愛情よりも注がれて来たから別に慣れっこなのだが。

……………言うほど親に愛情なんて注がれてないけどな。特に親父からは。

ああハッピー、元気にしてるだろうか。ボディガードの枠なら今空いてるぞ。

「心当たりがあるとなると、少しスターク先生が心配になるね」

「う、うん……………王都との取引クラスってなると、競争に勝つために相手の企業の重鎮に暗殺者を送ったり呪いをかけたりなんて話も聞くし……………」

さすがは倫理観が中世レベルの異世界。

自分が上り詰めるためなら邪魔者を殺す事さえ厭わないのか。

「心配してくれるのはありがたいが、僕は無敵のINVINCIBLE IRON MANだぞ？」

そんじよそこらの暗殺者如きが僕にかなうと思うのか？」

そう自慢げにふつと笑うと、ゆんゆんもあるえも安心したかのように静かに笑った。

「で、ですよね……………スターク先生が負けるここは想像できませんし……………少なくとも、その鎧を着てない時に狙われでもしない限りは大丈夫ですよね！」

「ちよつと待った。それって僕がスーツがなきゃ戦えないって意味か？」

「そ、そういう意味じゃあ……………」

「冗談だよ。そこまで突つかかるほど僕も性格悪くない」

からかわれたゆんゆんは、どこが？ とでも言いたげな微妙な表情で顔を引きつらせていた。

彼女から見た僕はそこまで性格が悪そうに見えるのだろうか。

「ところで、今こうして街をブラブラしてるわけだけど、どこに向かう？ ゆんゆんは目的地でもあるのかい？」

「私はとりあえずレベルを上げたくて……」

「それと、めぐみんが心配だった……とかかな？」

「ベベ、べつにそんなわけじゃ……」

「隠さなくなつていいだろ。僕だってめぐみんがどうなってるかは気になつてる」

「せ、先生……そこまで生徒のことを……！」

そのへんで野垂れ死んでないかだな。

「それに、対アンデッド用の装備なんかを参考程度に見たい。ちなみにあるえは変人奇人が見たいだけだ」

「ええ。我が邪眼によると、勧誘に来た者たちは平均的な個体……もつとすさまじいのがまだいると出ています。そういう人たちが居そうな大聖堂とかへ行きたいですね。いやあ、楽しみですよ」

「そうか。楽しんでこいよ」

僕のさりげない同行拒否にゆんゆんが顔をしかめた。

「そこまでアクシズ教徒が嫌なんですか……？」

「すいません、普段から飄々としてるスターク先生が変人奇人を前に色々面白いことになってるのを見るのも目的の一つなので、一緒に行動していただけると助かります」

「なるほど。超断る」

あるえは都市部の観察なんかを含めて二泊はしたいと言つてたが、彼女の口ケ中はなんか適当にお菓子とコーヒーでも買ってどつかの建物の屋上とかでくつろいでいよう。そうしよう。

「ま、まあ、そう言わずに……ほら、めぐみんがアクシズ教徒に入信してたら面白くないですか？」

「そんなことしてたら里に連れ帰って家族会議させてやる」

「でも、好き勝手生きようとするめぐみんにはだいぶ合ってそうで……………」

それがフラグだったのか。

僕らの目の前に、突如何かが路地裏から飛び出してきた。

ああ、また勧誘——

「ぐあああああ!! ひ、膝を擦りむいてしまいましたあ!! な、なんと
いうことでしょう!!」

凄まじく見覚えのある奴が路地裏から飛び出し、地面でのたうち回り出した。

「ああー…このままでは傷口からバイ菌が入り破傷風に……………」

後ろのゆんゆんとあるえも絶句している。

そりやそうだ。学年の元首席がこんな道端で奇声を上げながら死
にかけのハエみたいなブレイクダンスを披露してたら誰だって絶句
する。

「うっ…………あまりの痛さに涙まで……………」

痛がつてる演技のつもりなのか、ギョツと目を瞑ったまままだ僕
らに気づいてない。

……………このまま眺めてやろう。

何やってるのか知らないが、このへタな演技がどこまで続くのか気
になる。

「あうう…………えつと……………これは骨もヤバいかもしれません
……………痛た……………」

で、次は？

「あいたた……………お、おい! 痛がる乙女を眺めるだけなんて良い
度胸……………」

ムクつと起き上がった大根役者ことめぐみんは、僕らの姿を見るや
いなや石になったかのように固まった。

パチパチパチと、僕は目の前の石像と化しためぐみんにわざとらし
い拍手を送り。

「Wow！ 見事な演技だった！ ブラボー！！ みんな拍手！！」

「ねえ、めぐみん……こんなところだなにしてるのよおおおおお！！」

「あ、ちよっ！ 膝を擦りむいてるのは本当なので揺すらないでください！！」

「これはまた………実に面白くなりそうだね」

ゆんゆんが叫び、僕は拍手し、あるえはメモをとる。

ここに来てよかった。来てなかったら生徒の頭がおかしくなっていたことに気がつけなかったからな。

▽

「美少女だ………美少女がいる………」

「見てあの髭の形………素敵だわ………」

「ようこそ我らの大聖堂へ。いやあ、美少女三人にセクシーなおジ様と出会えるとは………」

僕らが今いるのはアルカンレティアの大聖堂。

めぐみんのあの奇行はアクシズ教徒に手伝わされたことだったそうさ。

このカルト教団どもめ、なんのつもりなんだ。

「で？ ウチの元生徒があんたらみたいなのカルト教団に変な儀式をやらされてた理由は？」

「まあ、そうカリカリせず………確かに我々は変わり者かもしれないせん………ですが、普通の人間が入信したって面白くないではないですか！ 変わり者だらけでこそアクシズ教なのです！！ これで真人間だらけだったらアクア様に示しがない！」

仰々しく手を広げながら叫ぶ、このカルト教団のトップであるゼス夕。

あるえは楽しそうにメモを取っている。

「信仰する女神が酒好き宴会好きの遊び人だけはあるな」

「ほう………まるで知っているような口ぶりですな」

「ああ、知ってる。僕の前で酔って騒いで上司に怒られて泣いてたの

を見たんだ」

(ス、スターク先生……！)

聖職者をからかうなど、ゆんゆんが横から小声で注意しながら小突いてくる。

これ本当の事なんだけどな。

そのゼスタはうつむいてプルプルと震えている。怒らせてしまったらどうか。

やがてガバツとその顔を上げて唐突に叫び始めた。

「素晴らしい!! 信徒でもないというのに女神アクア様をよーく理解してらっしゃる!!」

恍惚とした表情で天を仰いだかと思いきや、グリンツと聞こえてきそうな勢いで僕の方へと首を回して再び叫ぶ。

「そう！ その通りです!! 自由奔放で好きに騒ぎ、好きに笑い、そして何かやらかして泣き喚く!!! 我々はそんなアクア様を心から愛で、敬い、そして崇拜するのです!!」

「カルト教団じゃなくてただのイカれたファンクラブだったか」

「スターク先生!! この人を刺激しちゃだめですよ!! 紅魔族の勘がこれは煽ってはいけない人種だと告げています!」

「はっはっは。気にしないでくださいいめぐみんさん。我々はアクア様を信仰する教徒。その心だつて海のごとく広く、水のごとく透き通っているのです。なので……」

ゼスタは僕の顔面に鼻息がかかりそうな程距離を詰めてメンチを切りながら。

「めぐみんさんに頼んでいた宗教勧誘のお手伝いをしていただきます……めぐみんさんはあなたの元教え子だそうじゃないですか。だつたら、あなたも手伝ってくれますよね。え、え、え、?」

めちやくちや根に持つてるじゃないか。

「僕にテロの片棒を担げっていうのか? 断る……と、言いたいところだが………一つ条件を飲むならやってやってもいい。これでも僕は世界随一の頭脳と特別な知識を持つ男なんですね。信者の数を確実に増やすと約束してやる。あと顔が近いから離れてくれ、気持ち悪

い」

「至近距離で合法的にセクシーオジ様の顔を拝見する絶好の機会だったのですが……仕方ありませんね。では……聞きましょう。その条件とは？」

口を開けばとち狂ったことしか言わないゼスタ。

飲んでもらえるか、飲んだとして守ってもらえるか不安になるが……。

「これが終わったら今後この子たちに一切勧誘をするな、もちろん僕にもだ。簡単だろ？」

「ふうむ……いいでしょう、わかりました。三人の美少女の入信を諦めるに値する程信者を増やしてくれるのであれば、その条件を飲みましょう」

「交渉成立。喜べー、みんな。もうこんなアホどもと関わらなくて済むぞ。早く終わらせてバーで飲もう。ノンアルコールカクテルまでなら許す」

「私たちが信者に加えるつもりだったのですか……」

「勘弁して欲しいですね……」

「見る分にはいいのだけれどね……」



大聖堂の大広間にて、新たな宗教戦術のための会議が始まった。

僕は用意された黒板の前に立って話を進めていく。

「それじゃまず先に、あんたらの得意分野を教えてください」

「はい！ 他人のポッケというポッケに一瞬で入信書を溢れるほどねじ込むことです!! 女性だったら次いでにどさくさに紛れてセクハラもできます!!」

「はい！ 美人のブラのホックを服の上からすれ違いざまに外せることですー!」

「はい！ 俺の得意なことは、エリス教会の入り口にばれないようにうんこをすることですー!」

「会議はこれにて終了だ。今からあんたらをまとめて刑務所にぶち込む」

僕がクイツと首で指すと、僕の横で待機してたスーツがその動きに反応して犯罪者たちに掌を向けた。

「ああああああ!! スターク先生待ってください!! 気持ち痛いほどわかりますが、だからって手を出したら余計大変なことになりますよ!?!」

スーツの方ではなく本体僕の方を羽交い締めするめぐみん。

全くもって無意味な上に背が足りないせいでもそもも押さえられない。

「かわいいわ……………あの背丈の足りない羽交い締め……………まるで抱きつく駄々っ子みたい……………セシリーお姉ちゃんにもやって?」

「私にもお願いします! ゼスタおじちゃん……………いや、パパって言いながらやってください!! 胸を押し付けながら!」

「……………ッ」

「あつ! めぐみんが爆裂魔法の詠唱してる!! だ、誰か取り押さえてえ!!」

「スーツ! めぐみんを捕まえろ!」

おかしい。生徒をカルト教団から守る為に会議をしてたはずなのに、なぜか生徒を取り押さえていた。

頭がどうにかなりそうだ。

「——で、だ。あんたらに得意分野を聞くべきじゃなかった、反省すべきだな。それじゃ、あんたらが共通で好きな物はなんだ? どうせなら面白おかしくやろう」

「「「アクア様!」」」

「それは聞かなくてもわかる。他には?」

ちよつと荒れた聖堂の広場で会議を仕切り直した僕は、再び教徒たちに質問をする。

全員しばらく悩んだ素振りを見せた後、ゼスタがみんなを代表するかのように言った。

「ほぼ全員にあてはまることと言うと、我々は皆騒ぐのが好きで」「それだ」

最後まで言い切る前に、僕は指を鳴らしてゼスタを指さす。僕の脳裏には天界でアクア達とやった宴会が浮かんでいた。

「君たちで何か宴会をするんだ。どこかの建物を貸し切って、祭りじみたド派手な奴を。もちろんアクシズ教の主催だとは言わずにな」

黒板にでかでかと書かれた宴会作戦の字に、アクシズ教徒達が色めきたつ。

食いついたな。

「スタークさん、我々が宴会するだけで信者を集められると言うのですか!？」

「ああ、誰か芸とか出来るやついるか？ 飾り付けが得意なやつも欲しい」

「いますともいますとも!! 何を隠そう、アクシズ教徒は入ると芸達者になる事で有名なのです!」

「そりゃ結構、作戦はこうだ。あんたらで芸をしながら飲み食いできる催し物を開催しろ、参加費も取ってな。それで人が集まったらこいつを渡す」

そう言っ僕がピラッと取り出したのは、一枚の………いや、正確には密着して一枚になつて特殊な二枚の紙だ。

出された紙に書かれてる文字に、アクシズ教徒達が注視する。

「満足度向上アンケート……?」

「見た目はな。アンケートを書いてくれた人に抽選で豪華なプレゼントがあると言っ渡せ。それだけでみんな書き始める。そして、ここからが本番だ」

アンケートに書かれている項目は上から順番に《氏名》、《性別》、《住所》。そして楽しかったか、また次も参加したいかと言っ質問にYESかNOで答える簡単なチェック項目。

それを全員に確認させた後に、紙の隙間に指を入れてペリペリと剥がすと………。

「おおっ!!」

現れたのはアクシズ教入信書。

そう、僕の世界では当たり前となつてゐる複写紙だ。

アンケートの項目を埋めると、そのまま下に仕込まれた入信書の項目も埋まる仕組みになつてゐる。

「素晴らしい！　素晴らしいですよスタークさん!!　我々は宴会で楽しく、尚且つ入信者が増え、オマケに儲けることもできるとは!!　流石人類随一の知能の持ち主ですね!!　チューしてもいいですか!？」

「半径五メートル以内に近づいたら灰にするぞ」
浮かれまくるアクシズ教徒達。僕は注意するように一つ咳払いして。

「心配なのはあんたら自身だ。ちゃんとやれるのか？」

「ふっふっふ……スタークさん、安心してください……我々の本気を見せてあげましょう!」

「だからそれが心配だつて言つてるんだ」

▽

「クソつたれ!　誰も買おうとしやがらねえ!!」

瓶の中の酒を一気に煽り、床に叩きつける。

ガラスが砕けて散らばる音が部屋中に響き渡つた。

イラつきを隠そうともせず、壁に切つて貼つて置いた新聞の一部に視線を移す。

俺はもう何度見たか分からない、壁に切り貼りされた新聞の一面に大きく書かれた文字を眺めた。

その視線に強い嫉妬と怒りを込めて。

——【騎士団、及び冒険者の戦死率が著しく低下。導入された新型兵器の成果か】

——【王都の戦いを変えた謎の技術者、トニー・スターク氏に迫る】

——【我々記者は、トニー・スターク氏に独占取材を行うことに成

功した。そのインタビュー内容を下記に記す。

記者 : インタビューに答えて頂きありがとうございます。執拗に取材を断っていることから、マスコミ嫌いなのは？ との噂が立っていましたか……。

スターク氏 : 記者の君が美人だったんでね。

記者 : は、はあ……。

スターク氏 : まあ、それは半分冗談だ。で、聞きたいことは？

記者 : あなたは他国の生まれですが、我が国の支援を行っている理由は？

スターク氏 : それって既にこの国の歴史の教科書に載ってないか？ あ、載ってない？ それもそうか。この国に来てまだ（重要性が低いため割愛）

記者 : あ、あの……。

スターク氏 : ああ、失礼。理由は簡単だ。平和が好きだから。僕が防衛設備を整え、そして死亡率が減った。つまりは平和の民営化だ。僕が作った発明品によって世界が少しずつ平和になっていく。その始まりとしてこの一番戦いが激しい国に僕の発明品を提供してらるって訳だ。

記者 : なるほど、お答え頂きありがとうございます。ですが、それにより元々王都にいた武器商人達が次々と職を失っているという事実についてはどう思いますか？

スターク氏 : 申し訳ないとは思いますが、僕が提供している品の方がより兵士たちの命を守ってるのもまた事実だ。これが指す意味を、同じビジネスマンなら理解していただい」

そこから先は俺が怒りに任せて引き裂いたので読めない。

「スタークの野郎……いきなり現れて全てを奪いやがって……」

安物の煙草に火をつけ、机の上に置いてあるナイフを手に取り……。

「おかげで俺はこんなドン底生活だ！」

新聞から切り抜いたスタークの顔写真にナイフを投げつけ、また一つ鋭い穴を開けた。

不味い煙を肺から吐き出し、ボロボロのソファに寝転がろうとしたその時。

「おーおー、こりやまた……いい悪感情を放ってんなあ」

突如我が家の中で聞こえた自分以外の声に、バツと声が出た方に振り向くと……。

「……………ッ!？」

「よお、俺様の姿が禍々しくて最高なのは分かるが、声は出すんじやねえぞ」

……悪魔。

大剣をまごのて代わりにしてしまいそうな堅牢さすら感じる、光沢を放つ漆黒の巨軀。

コウモリのような巨大な二枚の翼。

そして、邪悪の象徴とも言える禍々しくて巨大な角。

ただの悪魔じゃない、大悪魔だ。

……………だが。

「……………悪魔なんかが、俺に何の用だ？」

「冷静で助かるぜ……………いや、生に未練が無いだけか」

職も失い、財産も無くなり、全てを諦めかけている俺からすれば、大悪魔様が目の前に現れた所で驚きはしても、慌てふためいて逃げ出す気分になんてなりやしなかった。

その悪魔は背中の羽根を広げて、挨拶を……………。

ただでさえでかい体が更に大きく見えやがる。

「俺様の名前はホースト。アルカンレティアにちよいと用があつたんだが、大悪魔である俺様でも、さすがに聖職者の総本山には近づきたくねえ。どうしたもんかと辺りをグルグルしてたら、とびつきり極上な悪感情を感じてな。能天気だらけのアルカンレティアじゃ味わえねえ代物だ、ご馳走様」

「クソが。ここは飯屋じゃねえ」

「じゃあなんなんだ？」

「武器屋だ……あつてないようなもんだけどな」

「何か訳がありそうだな。上質な悪感情を貰ったお礼だ、話してみろよ。カウンセリングは得意じゃないが、悪魔は人の愚痴聞くの上手いんだぜ？」

そう言つてクツクツと笑う悪魔……ホースト。

「……………いいぜ、俺がこんな狂信者だらけの街の郊外でネズミみたいに暮らしてる理由を教えてやるよ」

特に話す奴もいない。俺は自分がこうなつた原因の愚痴を吐き出した。肺を通したたばこの煙なんかよりもはるかに重く、そして毒々しく。

「——はあ、トニー・スタークねえ……こいつあ何か縁があるかもしれないねえなあ」

「あ？ なんだつてんだ？」

「そいつは俺が狙つてる奴でもある。正確には、奴の連れのガキだがな。聞いて驚くなよ？ あいつは今アルカンレティアにいるんだぜ？」

「……ハッ、なんだよ、ここに何しに来たんだ？ まさかここにまで仕事を奪いに来たのか？」

「さあな……………まあ、本題はこつからだ……」

ひとしきり俺の愚痴を聞き終えたホーストは、俺の方に近寄つて膝を曲げ、ただでさえ凶悪な顔をニタリと歪ませた。

「取引をしねえか？ 俺がトニー・スタークを殺してやる、同僚の仇討ちだ」

「……………見返りは？」

「爆裂魔法しか使えない紅魔族のガキがいる。そいつが連れてくる黒い魔獣をさらつてこい。簡単だろ？ 魔獣と言っても、今は弱体化されて猫くらいの大きさになっているそうだな」

「ケツ……………なにやらされるかと思えば……ペット泥棒かよ」

「さて、乗るか？ 降りるか？ 悪魔はな、契約には絶対従うんだ。裏切ったりなんてしないぜ」

「……………答えは出ている。」

スタークには死んで欲しい。あいつさえ居なければ、俺はまた王都で稼げるんだ。

「いいぜ、泥棒でも何でもやってやるよ。俺の部下や同じく恨みを持つてるやつらにも掛け合ってみる。だが、本当に出来んのか？ あいつ、強さもそんじよそこらの冒険者とは比べ物にならないつてもっぱらの噂だ。そこもまたム力つく所だけだな」

「強かった俺の同僚も倒したんだ、そりゃあ強えだろうよ。でもな……………」

ホーストは牙をギラつかせ、

「——無敵の鎧男だって、弱点はあんのさ」

大悪魔にふさわしい悪辣な笑みを浮かべた。

▽

アクシズ教信者獲得作戦の発案から二日後。

「ふはははははは！ わははははははは！！ こりや笑いが止まりませんなあ!!! 見てください、この大量の入信書を！」

「おほほほほほ!! ゼスタ様、ゼスタ様！ こちらも見てください!! 大量のエリス金貨ですよ!!!」

「イエエエエエエイ!!!」

僕らの目の前では、作戦を大成功させたアクシズ教徒達が狂喜乱舞していた。

そしてとなりではゆんゆんが僕に非難するような目を向けている。

あるえにいたっては満足気だ。

「スターク先生……………自分が何をしたのか分かっているんですか……………?」

「……………僕は知恵を貸しただけだ。あとはあいつらが勝手にやったんだ」

「犯罪者の言い訳ですよそれ……………」

「おかげで色々面白い経験が出来ましたがね」

アクシズ教徒の行動力は尋常じゃなかった。

まさか作戦会議が終了した瞬間に行動を開始し、たった一日半で準備を終えて宴会を實行してしまおうとは……………。

しかもその質も凄まじく、謎の宴会芸で人の注目を集め、大勢の参加者を呼び込んでいた。

さてどうしたものか。

「スタークさんには感謝しかありませんよ!! いつもは月に二、三人勧誘出来れば良い方なのですが、今回だけで二百人は集まりました!! ほら、みんなでスタークさんに感謝をしましょう!!」

「二」スターク! スターク! スターク! スターク!」

……………本当に、どうしたものか。

「おめでとうございます。晴れて救世主ですね」

「めぐみん、いくら僕が素晴らしい教師だからって、皮肉まで学ばなくてもよかつたんだぞ?」

「どうするんですか? これ…………この街の善良な市民や冒険者達が……………」

「…………あくまでも書類上で入信しただけだ。あとは気に入ればそのまま続け、気に入らなければ勝手にやめてけばいいだけだろ。それに、重要なのはこれであいつらとの関係も終わりってことだ」

本番で散々宴会して騒いでいたにも関わらず、聖堂の中で二次会を続けるアクシズ教徒達。

半裸で女性信者に近寄りビンタされてるゼスタに近寄り、呼びかける。

「ゼスタ。約束は覚えているだろ?」

「ええ、もちろんです。金輪際あなたとあの子たちに勧誘はしませんとも。ですが、もしあなた方から入信したくなった時はいつでもこの門を」

「それはないから期待するな。それじゃ、僕らは失礼するよ」

「あ、最後に一つ…………」

……………なんだろうか。

はつきり言って今やったのは警察に捕まりかねないことなので、詐欺の疑いでしょっぴかれる前にここから離れたい。

僕はあるえ、ゆんゆん、めぐみんの肩を押し去るようにながら顔だけゼスタに向けて。

「……まだ何か」

「『ブレッツシング』！」

ゼスタが僕の方に手を向けてそう唱えると、柔らかい光が僕を包んだ。

続けて三人娘達にも、さつきと同じ魔法を唱えていく。

今のは……………。

「あなた方の幸運値を上げる神聖魔法ですよ。いやはや、本当にお世話になりました。これは私からのささやかなお礼ですよ」

そう言って、ゼスタは優しげに微笑みながら僕らにグツとサムズアップした。

……頭はおかしいが、悪い奴では無いみたいだな。

僕は素直にお礼を言おうとゼスタに向き直るが、さつきの優しげな笑みはどこへやら、剣呑ささえ感じる真剣な面持ちでこっちを見ていた。

「スタークさん。最後になりますますが、帰りはどうかお気をつけを。なにやらここ二日で急激にこの街の空気が張り詰めてきました。それに、何か醜悪な臭いがします。十分に警戒して行ってください。おすめの安全地帯は私の部屋のベッドの中ですよ」

「真面目ぶるのかふざけるのかどっちかにしろよ……………だがまあ、気をつけるよ。じゃあな、祝福をありがとう」

別れの挨拶をし、再びゼスタに背を向けて聖堂の外へと歩き始めた。

張り詰めた空気……………それは僕も何となく感じていた。どうも胸騒ぎがする。

王都で感じていたあの嫌な視線が、アルカンレティアでもしたのだ。考えすぎかと思ってたが……………。

……もし仮に僕を狙ってる連中がいるとして、そいつらが僕とめぐみん達の関係を知っていたら？

小賢しいやつなら間違いなく人質に使おうとするだろう。

二泊三日で紅魔の里に帰る予定だったが予定変更だ。

少なくともアルカンレティアに残るであろうめぐみんとゆんゆんの護衛をすべきだ。

僕の授業は休みにしてくれって学校に頼んでおかないとな。

問題はこれを伝えるかどうかだが……………。

「スターク先生、なんだか難しい顔してますね。どうかしたんですか？」

「……………いいや、なんでもないさ。もう夕方近いし、飯でも行くか？」

いままで大変だったからな。奢ってやるよ、どこがいい？」

胸騒ぎの原因に確信がある訳じゃない。なのに敵を狙ってるかもしれないと言つて無駄に心配させることも無いだろう。

とりあえず、意外にも鋭い指摘をしてきたゆんゆんに飯の提案をして軽くはぐらかす。

「せ、先生に奢らせるなんて悪いですよ……………」

「大人がこういつた時は素直に甘えとけ。他のみんなはどうだ？」

「それではお言葉に甘えて……………そうですね、カクテルが頼めるバーがいいです」

「ませてるな……………で、めぐみんは？」

いつもなら奢りと聞くや否や真っ先に飛びついてくるはずのめぐみんから声がしない。

お腹でも痛いのかと振り返ると、めぐみんはボーっとして下を向いていた。

心ここにあらずといった様子だ。

「……………めぐみん？ 聞こえてるか？ おい」

「あつ……………はい、地獄ネロイドが何ですって？」

「そんな単語一言も出ていない……………大丈夫か？」

「……………ええ、問題ないですよ」

はにかみながらそう返すめぐみん。

……どう考えたって何かある。複雑怪奇な女心を読み解く多少の自信はあるが、思春期まで絡んでくるとさすがの僕も分からない。

▽

「ドライマティーニを」

「はい、かしこまりま」

「まだ終わっていません。ジン三にウオツカー、キナリレ二分の一、シェイクしてレモンピールのスライスを」

「は、はい……ただいま……」

今度は007か。

劇中に登場するカクテルを頼んだあるえはカウンターの上で満足そうにふんぞり返ってる。

「お待たせしました。ご注文のカクテルになります。……あの……もしご迷惑でなければ、このカクテルをこの店のメニューに加えてもよろしいでしょうか？ マスターが大変感服したようでした……このカクテルに名前はございますか？」

「冠された名はヴェスパ……悲哀の女性からとった名のカクテルです」

「ヴェスパ……ありがとうございます!! お礼の証として、そのカクテルのお代は結構ですので……」

そう言って立ち去るウェイターをウインクして見送ったあるえは、流れるような動作でグラスをスツと僕の方へと滑らせた。

……。

「なあ君……まさかとは思いが……」

「……これがやりたかっただけです。そのカクテルはどうぞ、私はお酒飲みませんので」

「バカにしてるのか」

出された以上は飲むしかない。

僕はヴェスパを味わいながら他の料理や飲み物を注文する。

めぐみんはすでに山盛りのタレ付きチキンを口元も手もタレまみ

れにしながら頬張っていた。

なにやら悩んでいたみたいだが食欲には勝てなかったらしい。

「もー、めぐみん……………女の子なんだからもうちよつと色々気を使いなさいよ……………」

「うぐむむ……………そんなに気を使わなくても……………でも、ゆんゆんはいいお嫁さんになるかもしれないですね」

「あつー！ 指舐めちゃダメよ、はしたない！」

こうしてみると仲の良い姉妹のようだ。

あるえもそんなふうにも思ってるのか、二人を眺めてうんうん唸ってる。

「めぐみんとゆんゆんをモチーフにしたキャラクターを小説に出す気でいたんだけど、やっぱり二人はカップルって設定にした方が良さげだね？」

「カップルじゃない（から）です!!」

「僕ら邪魔かも？」

「かもしれないね？」

「ああ、実際おまえは邪魔なやつだよ」

聞こえてきたその背後の声に反応して即座に振り返ると。

「高級バーで呑気に酒か。いいご身分だな」

「アイツの言ってた通りだ、ガキを侍らせてやがる」

「何もかも気に食わねえやつだ」

そこには、数人ほどの武装した男が立っていた。

持つてる武器はダガー、メイス、ククリナイフ、小型の杖。

クソ、勘違いじゃなかったか。

「ス、スターク先生……………」

剣呑な雰囲気には押され、隣に座ってたゆんゆんが僕の裾を掴む。

「……………用があるのは僕だろ？ 外で話そうか」

「今回の狙いはお前じゃなかったんだが………まあいい、最終的な目的はお前だ、しかもあの鎧も装着してないときた。悪魔の力だかは必要ないかもな」

「悪魔は契約にうるさいんだ。果たさないと厄介なことになるかもしれないぞ。おい、一番背の低いガキだったか？ そうだ、その……口がソースまみれのやつ」

指を指されためぐみんが、その男を睨む。

「………なんでしよう？ 私になにか御用ですか？」

「お前が連れてるといふ漆黒の魔獣が欲しい。そいつを探してるやつがいるんだよ。どこだ？」

「………お断りです。ちよむすけは私の使い魔なのです、渡すなんて考えられません」

「ちよむ………なんでもいい、出さねえつて言うなら……」

ギシツと、武器を握る手に力が籠る音がした。

これはまずい。

「まあ、待てめぐみん、穏便に済ませようじゃないか。今僕らは何の武器も持っていない、逆らうのは得策じゃないぞ？」

「な、なにを………」

「いいから聞け。猫一匹渡すだけで見逃してもらえるんだ。目もくらむような良い提案だと思わないか？」

そう言つて、めぐみんだけじゃなくあるえとゆんゆんにも目配せする。

「………」

どうやら気がついたようだ。さすが、頭が良くて助かる。

「ハッハッハッ!! 鎧がなければそんなもんなのか!!」

「ケツ、ガキを殺す予定はねえよ。ただし、トニー・スターク、てめえだけは絶対に許さねえ」

「お前のせいであらゆるものを失ったんだ、富に名声……返してもら」
「続きは職業案内所でやってくれ」

そう言つと同時に手首に装着していたデバイスを展開、指ぬきグローブのような形に姿を変えて僕の手を覆った。

すかさず手のひらを男どもに向け……………。

室内が白く染まるほどの強烈な閃光を炸裂させた！

第18話 MEGUMI RIGING

バーに絶叫が轟く。

「「ぎやあああああ!!」」

「クソっ! 目が……………」

「何も見えねえ……………」

武装してた男たちが目を抑えてのたうち回った。

「あああああ!! 何をするのですかお客様ああああ!!」

……………そしてバーテンダーも。

「迷惑料も置いてくからな!!」

カウンターに多めのチップを置き、子供達の手を引いてバーの外へと飛び出して街道を走る。

それにしても……………。

「あるえ! めぐみん! なんで君らまで食らってるんだ!! 作戦を理解したんじやなかったのか!」

「ええ、理解しましたとも……………ですが……………」

めぐみんとあるえは互いに薄く目を開いてサムズアップしながら。

「「あんなかつこいい変形を見逃すワケにはいなくて……………」」

「君たちふざけないと死ぬのか!」

「もも、申し訳ありません……………族長の娘として謝罪します……………」

そろそろ目が回復してきたのか、僕に引っ張られなくても走れるようになってきためぐみんとあるえ。

だが、二人の視力が回復したという事は……………。

「逃げんじやねえええ!!」

「絶対に殺してやる!!」

流石にあれくらいじゃ撒くには足りないか。

「つたく、まだ夕方前だったのにこの街の警察はどうなってるんだ?」

「……………ひよつとしたら、知らないうちに自分がアクシズ教徒になっていて驚いた人達が警察署とかに殺到してるのかもしれないね」

「……………悪いことはするもんじやないな」

「スターク先生……………」

遠くを見る僕をジトつとした顔でみるゆんゆん。

そんな顔するな。

「スターク先生、反撃しないんですか？ なにか魔法の詠唱をしますが……………」

あるえのその声に後ろを見ると、こちらに杖を向けて詠唱してる男の姿が。

そーいや杖持つてる奴もいたな。

『ライトニング』ツツ！

背後から放たれた電撃の中級魔法。

射程、威力、速度、どれも優秀。真っ直ぐ飛ぶから狙いやすい。

直線に逃げる敵を追撃するにはまさにもってこいの人気な魔法だ。

「スターク先生!!」

「後ろを見ずに走れ！」

こいつらの狙いは僕だ。魔法は僕の背中に真っ直ぐ飛んでくる。

狙いがわかってるなら直線にしか来ない魔法なんて対処は容易い。

僕は素早く振り向いて迫り来る電撃に掌をかざして防ぐ。

「ぐっ……………」

バギンつと金属が弾ける音がして、手を覆っていたデバイスが壊れてしまった。

これは試作品な上にあくまで簡単な自衛用。

閃光や音波攻撃は出せるのだが、流石にリパルサー・レイまでは出せない。

本当ならナイフや弾丸の一撃くらいは楽に受けれる強度なのだが、さすがに電撃魔法はだめだったようだ。

「スターク先生、大丈夫ですか!？」

「ちよつと手が痺れただけだ。だがちよつとまずいな。次は防げない」

少しでも距離を稼ぐために足を止めずに走り続ける。

「せ、先生！ あのいつもの鎧は!？」

「ちよつと別行動していてね。今は動かせないんだ」
「どうしてこんな肝心な時に!!」

めぐみんが横で喚くが、どうしても必要なことだ。

「よし、その路地裏に入るぞ」

「はい!! ……………って、袋小路じゃないですか!」

「あるえ」

「ラジャー! 『ライト・オブ・セイバー』 ツ!! 『カースド・クリスタルプリズン』!」

角を曲がった先に現れた袋小路の壁をあるえが光の魔法で丸くくり抜き、僕らが通り抜けると同時に穴を氷の上級魔法でふさいだ。

「いいんですか!? これいいんですか!?」

「僕には金の力がある」

「お金の問題じゃないと思います!」

「それが意外と何とかなるものなんだよ。ところであるえ」

「…………無理です」

僕の質問を理解してるのか、遮って首を横に振るあるえ。

「…………上級魔法ではいくら手加減しても殺してしまいます。ましてや一般人相手でしたら…………ゆんゆんの中級魔法でも致命傷になりえるでしょう。さつき魔法を撃ってきた人は大丈夫だとは思いますが…………巻き込まれた人は確実に死にます」

「そんな…………」

『ファイアーボール』 ツ! 『ファイアーボール』 ツ!

あるえが作った氷の壁の向こうから、炎の魔法を何度も叩きつける音が聞こえる。

「…………あの氷の壁も長くは持ちませんよ?」

「逃げてでも追ってくるだけだ。つまり…………ここは敵をビビらせて撤退させる。敵の戦意を喪失させるのは簡単だ。力の違いを見せてやれば良い」

そういうしながら、背中に背負っていたバッグを下ろして中に入っているものを取り出す。

「スターク先生…………それは?」

僕は取り出したとあるデバイスを手の上でクルクルともてあそびながら。

「君たち用のおもちゃだ。使うなら今だと思わないか？」

このアルカンレティアで別れるときに渡そうと思ってたサポートアイテム。

まずはゆんゆんに渡す。

「ほら、これを装着しろ」

「これって……コンタクトレンズと……アームカバー……？」

渡したのは一对のコンタクトレンズと、肩周りがつながっているアームカバー。

「こい物の逃がの 名前前は
Badass Overwatch Tactical Target
Ins:

「な、なんかカッコイイ……」

「略してB.O.T.T.I.だ」

「略称他になかったんですか!？」

複雑そうな顔をしながらコンタクトレンズとアームカバーを装着するゆんゆん。

「スターク先生、私のは……」

「焦るなよティーン。受け取れ」

あるえ用に作ったデバイスは少し大きめの金属製リストバンド。

SFチックな模様の装飾が掘られているが、あるえにはそれがなにかすぐ分かったようだ。

「これは……!」

模様を見て目を輝かせるあるえ。

「装着したらボタンを押せ。使う魔法は分かっているな？」

「もちろんですとも」

「待ってください」

それまで一切喋ってなかったためぐみんが、唐突に口を開いた。

私の分はないのかとも言いたいのだろうか。

「……その眼帯と服だけじゃ不満か？」

「違いますよ! さっきまであるえが作った氷の壁の向こうが騒がし

かったのに、急に静かになってませんか？」

「……………たしかにそうだね。諦めたのかな？」

「……………」

かけていたサングラスの縁に指を置いて透視モードに切り替える。

氷の向こうの熱源、生体反応を探るが……………反応はない。

……………回り込むくらいなら魔法で突破する方が早いはず。

敵の考えを読もうと頭を回転させている時。

急にめぐみんが何か気がついたかのように素早く空を見上げ。

それと同時にフライデーから警報が入る。

『ボス！ 周囲の建物の上に何者かがいます！』

「周囲の建物の屋根です！ なにか来てます！」

「！！」

僕はフライデーの警報から、あるえとゆんゆんはめぐみんの声に反応し、一斉に上を見た。

屋根の上に立っていたのは、全身真っ黒の謎の人物。

体格からおそらく男だろうが……………黒装束、顔の見えない深めのフード……………なんてわかりやすい。

僕はその男にバカにしたような笑顔を向け、手で気さくにあいさつしながら。

「……………君殺し屋だろ？ あ……………名乗らなくてもいい。そんな絵に書いたような見た目してたら嫌でもわかる」

おそらく僕に恨みを持つやつが雇った奴だろう。

邪魔になるから壁の向こうにいた連中は全員追い払ったって所か。

実際あいつらはアホだった。普通の殺し屋なら有無も言わず背後から刺し殺すなりする。

武器の構えも素人。殺し屋を差し向けた奴の仲間がとりあえず集まって叩きにでも来たんだろうな。

と、自分なりの推理を頭に並べていると。

「スターク先生！ 殺し屋だって分かるなら煽らないでくださいよ！

あ、ほら!! ナイフ構えてますよ！」

「いや、彼は分かっていますよ！ そうです！ 殺し屋といえば黒ず

くめ……………そして武器はダガーにナイフ……………分かってますよ、彼はわかってますよ!」

フードの男がピクリと震えた気がした。

……………気のせいかな?

「あつ! 見るんだみんな!! 指と指の間に投げナイフを挟んで投擲のフォームを見せている!! 凄い! 本物を見たのは初めてだ!! メモを取らなくては……………」

気のせいじゃないな、おちよくられてると思って怒ってるのか、フードの男がプルプルと震え出した。

敵の冷静さを欠くために煽るのは数ある戦術の常套手段。この手で行くか。

「武器まで典型的な例だな……………ひよつとして紅魔族を喜ばせるために演出してるのか? ……でも残念だったな。紅魔族を一番喜ばせたのは過去にも未来にも僕ひと」

「うるせえボケどもがアアアアア!!」

いよいよ我慢の限界だったのか、フードの男は指の間に挟んでいた小型のナイフを僕ら目掛けて一斉に投げてきた!

「めぐみんとあるえはともかく先生までおかしくなっちゃったんですか!?! もう! 『ファイアーボール』 ツツ!!」

ゆんゆんの放った火球を飛ばす中級魔法は、複数のナイフのど真ん中に命中し、爆風で全てのナイフをはじき飛ばした。

もし今放った魔法の形状が糸ほど細かったとしても、高速で飛ぶナイフの切っ先に寸分違わず直撃させてたであろう精度で。

「ほう……………さすが学年二位、素晴らしい精度で魔法を飛ばすね。流石の私もそこまで綺麗に飛ばすことは出来ないかな」

「う、うん……………ありがとう……………でも今……………何だか手が勝手に動いたかのような……………視界にもなにか映ったし……………」

自分の手のひらを開いたり閉じたりしながら、確かめるように様子を見るゆんゆん。

僕はしたり顔を浮かべながらゆんゆんに向けて。

「君に渡したアイテムの効果だ。B. O. T. T. I. は高速で動く

飛来物、または敵をそのコンタクトレンズが捕捉し、そのアームカバ―を模した人工筋肉が狙いを調節する。超便利アイテムに聞こえるかもしれないが、もともと狙いの良い君だからこそ使えるアイテムだ。大事にしてくれよ?」

「私専用の……アイテム……!」

なんか解釈を間違えているような気もするが、別にいいか。

さて、これで奴の飛び道具は完封……うん?

殺し屋が懐から、なにか一枚の紙切れを取り出した。

あれは……!」

「マジックスクロールです!! 攻撃魔法が飛んできますよ! 散らばりましょう!」

「いや! 全員目を閉じろ!」

「へっ?」

『フラッシュ』

「!?!」

敵の閃光魔法によって、路地裏が光に包まれた。

遅かったか……。

「敵が使っていた策をまんまお返しするというのは気持ちが良いな……。」

クツクツと笑う黒装束の殺し屋。

ムカつく野郎だ。

とりあえず生徒を守らなくては。まずは隙を作る。

「うぐぐ……わ、我が邪眼が……こ、この経験も小説に活かせそうだし……。」

「君結構余裕そうだな。ゆんゆん、これ借りるぞ」

「ひゃあ! スターク先生! どこ触ってるんですか!?!」

「変な声出すな! 君のダガーだ!!」

ゆんゆんの腰に差ししてあるダガーを抜き取り、屋根上から未だ動かない殺し屋目掛けて投げつける。

後で拾ってやるから泣かないで欲しい。

ヤケクソ気味に投げたダガーは、意外にも敵の真ん中へと飛んでい

くが……………。

「素人にしてはいい筋してるが……………刃物が得物のプロにするべき攻撃じゃないな」

鼻で笑いながらダガーを弾く殺し屋。

クソ、バートンかロモノフならもつと上手くやるんだろうな。

だがダガーで倒そうなんて考えちゃいない。

やつが弾いた隙に三人娘を次々と僕の前に寄せ、殺し屋から見て僕の背で隠れるように集める。

これで生徒達にナイフが当たることはないだろう。

「ほら、走る……………」

さっきの素人同然の一般人共ならともかく、生徒を守りながら手練の殺し屋の相手なんてスーツもない今はしてられない。

そのまま空いてる路地から逃げようとするもの……………。

殺し屋が一瞬で僕らの前に回り込んできた。

「ッ!? 随分速いな……………毎日マラソンでもしてるのか?」

足音もしていないし、ピエトロ・マキシモフ並に速くないとこんな一瞬のうちに屋根上からここまで来るのは無理だ。

一体どうやって……………。

……………いや、剣と魔法の異世界と来て深く考えすぎているようだ。これはもつとチープな、三流マジシャンレベルのトリックだ。

——単に複数人いる。ただそれだけ。

やぼったい黒装束に身を包んでいるのも、顔でそれが悟られないようにする為だったか。

その証拠に、目の前に黒装束の殺し屋がいるにも関わらず、背後から投げられたナイフが僕の背中にぶつ刺さってる。

「ッ……………」

「スターク先生!? 大丈夫ですか!」

「大丈夫だから暴れないでもつと縮こまって全員寄り添え。僕からはみ出たらダーツの的にされるぞ」

僕らの正面にいる黒装束の殺し屋その二もナイフを構え始めた。
……来るなら今が絶好のタイミングだぞ。

「背後から心臓まで貫くつもりでナイフを放ったんだがな……スターク、服になにか何か仕込んでるな？」

めぐみんほどの代物じゃないが、防弾防刃仕様のジャケットを羽織っている。それでも少し刺さったが。

さて、敵は民間人でもないし、ゆんゆんかあるえが魔法で応戦できればいいのだが……閃光魔法をモロに食らって目が焼かれている為それもできない。

さらに背後から追い打ちと言わんばかりの邪悪な声が響き渡る。

「服に何を仕込んでようが関係ない……頭を狙うとしよう」

幸いにも、隣には空き家の窓がある。

レベルが上がって身体能力も上がった僕なら、三人抱えて窓に飛び込むこともできるはずだ。

「死にたくなければ、守ってるそのガキどもを盾にすれば生き延びられるぞ」

そんな悪辣なセリフを言いながら、目の前でナイフを投げる姿勢を見せる殺し屋。

背後からもナイフを取り出す音がする。

「スターク先生……？」

「問題ない。これくらいのピンチは何度も乗り越えてきたしな」

一か八か……僕は三人を抱えて窓に飛び込もうと――

――した瞬間。

あるえが作った氷の壁が、粉みじんに吹き飛んだ。

「!?」

全員音がした方に振り返るが、氷が放つ冷氣と散った空中の氷が光を反射し、見えるのは影だけ。

その影に、ナイフの弾幕が叩き込まれる。

……が、ナイフはすべて甲高い金属音を奏でて弾かれ、次々と床に

散らばった。

「……………誰だ？」

ローブの下から、怪訝そうな声を漏らす殺し屋。

その影はキャプテンを思わせる堂々とした足取りで、散らばった氷を踏み碎いて冷気の陰から身をさらす。

降り注ぐ陽の光が、彼女の金色の髪を煌々と輝かせた。

「私はダクネス、守ることを生業としている者だ」

「ダクネス先生…………？」

視力が回復してきたのか、ゆんゆんが薄く目を開けて吹き飛んだ氷の壁の方を見る。

「どうやら危ないところだったようだな。間に合ってよかった」

そう言っただけに微笑むダクネスはどこに出しても恥ずかしくないクルセイダーにしてヒーローの鏡だった。

というか、剣を背負ってないところを見るとパンチで氷の壁を砕いてきたのか？

変な意味じゃなくて服を脱いでみせてほしい。ソー並みにムキムキかもしれない。

「クソッ！」

ダクネスを脅威と認識したのか、さっさと片付けようと屋根上と正面にいる殺し屋が僕にナイフを構える。

「フッ！」

しかし、その手からナイフが放たれるよりも早くダクネスが跳び、脚力にものを言わせてものの数歩で僕らの前へと躍り出た。

ダクネスは放たれたナイフを、まるで蚊を払うかのような動作で弾く。

「す、すずい……………」

めぐみんも思わず唸った。

攻撃は全く当たらないし、おまけにDMで制御が利かないという致

致命的な弱点はあるものの……………、

「どうした……………そんな程度か？ 一日中でもやってられるぞ……………！」

こと護る事に関しては、キャプテンにだって引けを取らない。

そして……………それに関しては僕だって多少の自信はある。

「ああ、そうだ。トニー、スーツを返す」

僕のすぐ背後にMk. 45がガンツと音を立てて着地し、僕の身を包んだ。

「クソ！ 例の鎧だ！ 退避するぞ！」

「おい、見てかないのか？ みんな大好き装着ショーだぞ？」

スーツが全身を覆い、マスク越しに周囲の状況がHUDに映し出される頃には、殺し屋たちは消えていた。

「……………逃げたようだね」

「なんとという期待はずれ……………下衆な殺し屋だったらもつと根性見せて私を攫い、人質にして牢屋に閉じ込め、ねっとりとした視線を鉄格子越しに……………」

「そこまでだ」

少し強めにダクネスの後頭部をアーマー越しに殴る。

「痛っ！ いきなり何をやる!! もう一回やってくれ」

「せつかくカツコイイ登場をしたんだ、少しくらいそれを保てないのか？」

「あの……………どうしてダクネス先生がここに？」

ダクネスの妄言は聞こえてなかったのか、ゆんゆんがおずおずと聞いた。

「アクセルにいきなりトニーの鎧が飛んで来たんだ。何事かと思えば、フライデーに生徒を守るのに人手がいると応援要請を受けてな」

「そういうことだ、ここに居る間はダクネスが君たちを守る」

「ダクネス先生が……………って、スターク先生はどうするんですか？」

僕の言い方に疑問を持ったためぐみんな、不安げにそう聞いてきた。

ダクネスじゃ不安なんだろうか。

……………いや、確かに不安になるだろうが……………護衛役ならまず大丈夫だ

ろう。

僕はめぐみんの質問にマスクを開けて答える。

「奴らの狙いは僕と君だ、だから僕が片付けてくる。出るときに金を渡すから、君達はいい宿でもとって休んでろ」

「えっ……」

その言葉に、めぐみんが固まり。

そして少しづつ、不満そうな、納得のいかないといった表情に変わった。

……？

彼女の表情が変化した理由が理解できない僕は、めぐみんに率直に聞く。

「なんだ？ 高級な宿で休むのが嫌なのか？ 君の実家のクラッカーみたいな布団より寝心地はいいと思うが」

「……あの、私をその戦いに連れて行くというのはどうでしょうか？

最強の戦術破壊兵器がお手伝いしますよ？」

そう言つて胸を張った。いつもよりも控えめに、虚勢を張っているかのように。

めぐみんの様子がなにかおかしい。何考えているのかまったく読めないが……。

「悪いが、君は待機だ。安心しろ、ちゃんとアクシズ教徒管理じやない宿を取つてやる」

やんわりと断つたつもりだが、めぐみんはその顔にますます不満の色をにじませていく。

「……スターク先生、さつきバーで襲つてきた男たちの会話を覚えていますか？」

「悪魔がどうたらつてやつか？」

「そうです。どうやら私を……ちよむすけを狙っているようでした……あの時の女悪魔、アーネスと同じです。偶然とは思えません。もしアーネスと同じ目的で、人間を使って襲わせるように手引きしたのだとしたら、敵は同じく強力な上級悪魔である可能性が高いです。なら、以前奴を倒した時のように組むなんてのはどうで」

「なおさら駄目だ」

めぐみんの言葉を冷たく遮り。

そのまま彼女を説き伏せるかのように僕はまくし立てる。

「以前のようになって言ってるが、君はその時どうなった？ 殺される寸前だっただろ。いいか？ これは授業じゃない。敵の狙いが君だというなら、君のすべきことはただ一つ。狙われないように隠れる事だ」

それを聞いたためぐみんは、持っている杖を強く握り締め、絞り出すようにつぶやいた。

「……………私はずっと、生徒扱いなのですか？ 子供扱いなのですか？」

そこまで言われ、ようやく僕はめぐみんの意図を理解した。

……………彼女は認めて欲しいのだろう。

僕はめぐみんを『君は最強の戦術破壊兵器だ』と背中を押し、里から見送った。

……………もしかしたらこの街の冒険者他達に爆裂魔法を認めてもらえなかったのかもしれない。めぐみに再会してから彼女に感じた違和感の正体は、彼女が自信を喪失しかけている事によるものだったようだ。

大人として、ここはなにかケアをしてやるべきかもしれないが……………。

「……………大人の言うことは素直に聞いとけ」

「ッー」

……………だからといって、流石に教え子を自分が招いた戦いに巻き込むわけにはいかない。

僕はめぐみに背を向け、空へと飛ぶ。

背中には、ずっと視線が刺さっている気がした。

▽

「ぬああああ!! 私は冒険者になったのですよ！ 子どもでは無いの

です!! なんですかあのおっさんは! いつまで保護者気取りなんですか!」

私はスターク先生の子供扱いにとうとう嫌気がさし、招待された部屋で家具に当り散らしていた。

クツシヨンを壁にたたきつけ、ソファに回し蹴りをお見舞し、ベッドに踵落としぶっぱなす。

その暴れっぷりたるや二代目デストロイヤーとして後世に名を残さんばかりであった。

「めぐみーん……いい加減ベッドの上で地団駄踏むの止めたら……? 下の階の人に迷惑だよ?」

「地団駄ではなくて踵落としです!! あなたにも食らわせてあげましょうか!」

「落ち着くんだ、めぐみん。実際我々は子供だ。彼から見たら尚更……な」

「そうだぞ、めぐみん。自分の教師をそう悪く言うな。そもそも、何がそんなに不安なのだ?」

……駄目だ、ものに当り散らしているだけじゃ本当に子どもみたいだ。一度冷静にならないと……。

私は一度深く深呼吸し、三人に向き合い。

「……私は、自分が爆裂魔法使いであることに誇りと自信を持っています……少し揺らいでますが……」

自分が立っていたベッドの上に腰を掛け、ゆっくりと話を続けた。

「この街に来てからというもの……私が爆裂魔法使いだとわかるや否や次々とパーティーを追い出されてね……これが現実なのでしょうが……」

眼帯越しの視界に映る様々な情報や光の模様にちらりと視線を向けて。

「……スターク先生には貰ってばかりです。何かお返ししたくても……知力が私より高い先生相手じゃ仕事はサポートしてるだけです。だからこそ、私の一番の取り柄である爆裂魔法で役に立ちたかったですよ」

「めぐみん……」

ゆんゆんが横に腰かけ、優しく私の肩に手を置いた。

「焦りすぎなのよ。少なくとも、今じゃなくてもいいんじゃない？
必要になったら、きつとスターク先生から声をかけに来るわよ」

「……………そうですね」

嘘だ。納得なんてしていない。

兵器は使ってこそ兵器なのだ。倉庫に大事にしまわれている兵器
なんてただの置物である。

そして、今まではクエストで爆裂魔法を撃てたが、スターク先生と
合流してからというものの今日で二日我慢している。

爆裂欲とかムシヤクシヤ具合とかもう色々限界だ。スカツとして
こよう。

「……………少し一人にさせてください」

「あまり遠くへは行くな。狙われたら守れなくなる」

「……………ええ」

『…………めぐみん様。今あなたがとうとうとしてる行動は推奨できません
ん』

私眼帯のお兄さんにしか聞こえない声が忠告してくるが、分かっている。善意につ
け込むように申し訳ないが……………。

ちよつと撃って戻ってくるなら大丈夫だろう。

「——あら、めぐみんさんじゃない！ どうしたの？ 入信したく
なつた？ それともセシリーお姉ちゃんの胸元に飛び込みたくなつ
た!？」

そんなこんなでやってきたのは、アクシズ教の大聖堂。出迎えたの
はセシリーだ。

もう来ないだろうと思っていたが、まさかその日のうちに再訪する
ことになるとは……………。

「いえ…………どちらでもありません。お姉さんに一つお願いしたい事が
あるのですが」

「なんでも言っただけだよ!!」

……ただ爆裂魔法を撃ちたいから、撃った後に背負ってほしいとだけ頼むつもりだったが……。

「……………」

「……? どうかしたの? もしかして悩み事? 大丈夫よ、今はみんなで払ってるから」

大聖堂には他に誰もいないようなので、私は思い切ってお姉さんに悩みを打ち明けることにした。

「まずはこの話からしないとダメですね……実は私は……」

自分が爆裂魔法使いで、それしか撃てないことを。そして、爆裂魔法に持っていた自信を少し失いかけていることを。

▽

「……ふーん、なるほどね……自信が……」

私の話をずつと聞いてくれていたセシリーは、話が終わるとそう空を見上げてつぶやいた。

その横顔は、いつもの能天気な感じは身を潜め、彼女を初めて見る人なら聖女だと思ってしまうような、そんな柔らかな表情をしていた。

「いい? めぐみんさん。自信は失いかけていても、その魔法に対する愛を失ってはいないのでしょうか?」

「は、はい……」

なんだろう、今日の前にいる女性は誰なのだろう。

失礼だが、本当にそう感じてしまうほど今のお姉さんは聖職者っぽい。

「あのね、アクシズ教にはこんな教えがあるの。『汝、何かのことで悩むなら、今を楽しく生きなさい。楽な方へと流されなさい。自分を抑えず、本能の赴くままに進みなさい』……つまりね……」

お姉さんは私を見ていつもの調子でニッコリ笑い。

「とりあえず撃ってから確かめましょう!!」

そう言つて、バチーンと聞こえそうなほどの綺麗なウインクをした。

「……………ちよつとだけ。」

アクスズ教に入つてもいいかなと思つてしまった。

——アルカンレティアの郊外へと進んでしばらく。

陽は傾き、そろそろ夕方近い。

雲の切れ間から赤みがかつた陽が射し、平原を歩く私たちの影の身長を少しずつ伸ばしていた。

セシリーの先を歩き、爆裂魔法を撃つのに適した場所を探している。

突然後ろからお姉さんの声が出た。

「ところでめぐみんさん。爆裂魔法を撃つた後は動けなくなるって本当なの？」

「ええ、なので危険なのですよ。お姉さん、お願いしますね？」

「ふうーん……………へえーえ……………それってどこ触つても無抵抗って事よね……………」

後ろでセシリーがとんでもないことを言っている。

どうしよう。取り返しのつかないことをしてしまったかもしれない。

「あ、あの……………お姉さん？」

「……………」

女性相手にすさまじい身の危険を感じる。変なことをされないように釘を刺しておこう。

「お姉さん、本当にやめてくださいね？」

振り返つてそうセシリーに告げるが、その顔つきは何処か神妙なもつになつていた。

「……………どうしたのですか？」

「お姉さんの勘違いだといひんだけ……………なんだかどこか……………醜悪な悪魔臭が……………」

……まさか。

「眼帯のお兄さん！」

『周囲を衛星カメラより確認中………めぐみん様、高速の飛翔体が接近中です。雲の多さで確認が』

遅れた。

そう言おうとしたのだろう。

その言葉は、大きな風切り音でかき消された。

私たちの頭上を何かが通り過ぎ、ほんの一瞬私とセシリーの影を巨大な影が塗りつぶす。

一拍遅れて追いかけた視線の先に、地面に広がるコウモリ型の影があった。

「ハハア……毘だと思ってたんだけどなあ………お前、マジでなんでこんな所でプラプラしてやがんだ？」

そう嘲笑いながら降りてきたのは、邪悪をそのまま姿にしたかのような二足の巨大生物。

光沢を放つ漆黒の肌、素手でオーガーをねじ伏せそうな体軀、禍々しい角。

巨大なダンジョンの最下層に君臨してそうな恐ろしい見た目の化け物がそこにいた。

バサツと音を立てて広げた羽はまるで月も星もない夜空のようだ。

「……上位悪魔……」

顔が青ざめ、息をのむ。

黒幕はアーネスと同じ上位悪魔だろうと予想を付けてはいたが……こんな恐ろしい化け物だとは思わなかった。

や、やばい………。

恐怖で膝がガクガクと揺れる。うしろではお姉さんもプルプルと震えていた。

だが、さらにどん底に突き落とすかのように、悪魔の背中から聞き覚えのある声があった。

「さて……ほかの紅魔族やスタークを連れずにここに来たのには理由があるんだろう？ 交渉か？ 仲間を守るためか？ まあ、どちらに

せよ……」

「お前が間抜けに変わりはない」

さっきの路地裏で退けた殺し屋二人が、悪魔の背から飛び降りた。そしてもう一人……。

「……お前がスタークの連れだかいふ紅魔族のガキか」

目の下にクマがあり、頭部の両側面の頭髪を刈り上げている、若干威圧感のある風貌の男。

初めて見る顔だ。あのバーにもいなかった。もしかすると今回の騒動の主犯の一人だろうか。

「そう警戒すんな、お前に危害を加えるつもりはない。ただ、スタークが死ぬのにお前が必要なんだ」

「あああああああー!!!」

何か重要なことを言いかけたが、私の後ろから飛んできた絶叫でかき消えてしまった。

叫びをあげたのはもしかしくなくても……。

「こんつの汚らしい悪魔めが!! ここがどこだかわかってんでしょうねえ!!」

「うわ、あの修道女よくみたらアクシズ教徒だぞ!!」

「クソツ、対大型モンスター用の猛毒のナイフならあるが……」

かなり興奮した様子のセシリーが目の前悪魔相手に猛り狂い、そしてその姿を見た殺し屋の二人がざわめきだした。

「オラツ!! この街に来たことを後悔させてやるわよ!! 悪魔殺すべし! 魔王しばくべし!!」

「オイ、背筋がゾワゾワするから、その女をこっちに近づけるなよ……?」

なんならこのまま素手で突撃しそうだったので、とりあえず羽交い締めにしてなんとか阻止する。

「落ち着いてくださいお姉さん!! あなたじゃ殺されますよ!! ここはもうほぼ街の外です!! 騒いだって応援は来ないのでですから静かにしててください!」

「フーツ! フーツ!! GRRRRR!!」

いまだに興奮状態にあるセシリーをなんとか抑え、話を戻そうとする。

「……それで、どうして私を狙うことが彼の死につながるというのです?」

その質問に男は特に表情を変えることなく。

「話によると、お前はスタークとよく一緒にいたそうじゃないか。瞳の色からして親子ではない、里子か? 友人か? まさか恋仲なんてことはないよな?」

「は? 言つていい冗談と悪い冗談がありますよ?」

「そ、そうか……悪かった」

すさまじい剣呑さを出した私に、さっきまで威圧的な雰囲気を出していた謎の男も少し気圧された様子だ。

しかしそうか、この男たちは……。

「スターク先生を倒す為に、その悪魔と取引したんですね? ……対価は私の使い魔を連れてくることですか? まあ、私が悪魔の立場ならアルカンレティアになんて近づきたくはありませんからね……妥当な取引でしょう」

「ひどいわめぐみんさん!! あんなにアクシズ教に尽くしてくれたのに!!」

「お姉さん! お願いですから話をややこしくしないでください!!」
「だいたい、悪魔なんかと組んでこのかわいい幼女に好き勝手しようたってそうはいかな……きやあ!!」

おかしいなことをまくしたてるセシリーだったが、殺し屋の男が放ったナイフが足元に深々と刺さり、顔を青ざめさせて後ろに下がる。

……それを見て私はようやく気が付いた。

——私は、セシリーを巻き込んだのだ。

自分が狙われていることを知りながら、自分のわがままのために安全な宿を飛び出し、無関係の彼女をここに巻き込んでしまった。

私は本当に何をやっているのだろう。自分のあまりもの軽率な行動に嫌気がさす。

「頭がいいと話が早くて助かるぜ。お前にはスタークに手を出させないための人質になってもらう」

「私を人質にしたからといって、彼が必ずしも要求に応えるとは……」
「応えるさ。あいつはヒーローだからな」

男はそう言つて、悪辣に笑つてみせた。

「世界を平和にしたいと、善人を取り繕っているあの男に目の前で助けを求める人を見捨てることはできないさ」

「……彼は善人ではないと？」

男は『何を言つてるんだ？』とでも言いたげな顔をして。

「あたりまえだろ。武器商人だぞ？ 殺戮兵器を売つて金儲けする職業だ、俺と何も変わらん。メディアの前で善人を気取っているだけだ」

……なるほど、この男も武器商人なのか。

スターク先生を狙う理由が気になっていたが、これで聞く手間が省けた。

……ただの嫉妬だ。

「……あなたとは、違うと思いますよ？」

「あ？」

男の表情に苛立ちが混じる。

「あなたは、何のために兵器を売っているのですか？」

「……ハッ！ 何かと思えば……くだらないことを聞くな。そんなもん、金のために決まっているだろ。商売とはより利潤を求めるもんだ。時にはあえて控えめのものを渡し、より強い兵器を求める声が大きくなってきところで自信作をだす。魔物との戦いが終われば次は人間同士の殺し合いだ。人間にも通用する武器も造る。こうして金が生まれる。武器を作れば作るほど、次を求めて死体と金の山ができる……最高にバカらしくて最高に笑える光景さ」

「……悪魔の俺が言うのもなんだが、お前ら人間はすこし慎みを持つたらどうだ？ まあ、欲深いからこそ俺たち悪魔の存在意義もあるつてもんなんだが」

茶々を入れられたことが気に食わないのか、男は忌々しげに悪魔を睨みつけてから舌打ちをし、やがて視線を私に戻した。

「殺戮兵器を売って金を儲ける……スタークだってやってる事だろ？」

あいつは俺から仕事を奪ってチャホヤされてるが、やってることに変わりはない。俺と何が違うって」

「原動力ですよ」

私のその言葉が理解できないのか、男は真顔で固まる。

「確かに、人に自慢できる職業ではないかもしれませんが。ですが、あなたは作った兵器が生み出す光景を、積まれる死体とお金を……嘲笑って見ていたのでしょうか？」

目に熱を感じる。今の私の瞳は紅く光っていることだろう。

こんな思想の男とスターク先生と一緒にされるのは、むかつ腹が立つ。

「スターク先生は、いかに殺せていかに儲けられるかではなく、いかに人を守れていかに助けられるかで兵器を作っていましたよ……？」

語気を強めながら、話を続ける。

「敵に有効打を与えつつ味方を巻き込まないように調整し、知識のない人でも扱えるように操作を簡略化しながら、悪用されないように工夫していました」

私は男の目を見据え――

「同じ道でも、卑しく嘲笑って進むか平和を信じて進むかでは………外道か王道かでは、天と地ほどの差があるのですよ！」

――地に深く根差した大木のごとく立って言い放った。

「ガキが……言わせておけば……！」

男は顔を強くゆがませ、怒りを露わに低く唸る。

「ギャーハッハッハッハ!! 言われちまったな!! 俺を使役するだとか言ってたあのガキに似てるってのもあるが、お前さん中々気に入ったぜー！」

大悪魔が愉快そうにげたげたと高笑いした。

正直おっかないのでやめてほしい。

「…………おいッ」

男がそう言つて首をクイツと曲げると、ローブを被つた殺し屋がナイフを構える。

「お姉さん、私の後ろに」

「めぐみんさん……………」

セシリーを背に回し、一步踏み出て杖を構える。

巻き込んでしまったものは仕方が無いと開き直るつもりは無いが、ウジウジしてる場合でも無い。

『…………やはり、トニー様の選択は間違つていなかったようですね』

今できる最善を考えろ。

スターク先生ヒールならきつとそうする。

そしてそれが実行出来る。

私は大きく息を吸い、それを全て吐き出さん勢いで叫んだ。

「私とあなたの……………ダンス対決ですツツツ!!」

『…………めぐみん様?』

——私の洗練されたダンスが炸裂する。

右ステップ、左ステップ、杖をバトンのように振り回しながら一回転。

そしてここからが見せどころだ。

「これぞ…………ムーンウォーク!!!」

スターク先生直伝の超必殺奥義。

魔力もスキルポイントも使わず前に歩きながら後ろに進むという究極の宴会芸スキルだ。

少し進んだところでつま先立ちで一瞬制止。

またステップやターンをおりませながら元の位置へと戻っていく。

「セシリーさん、あなたもどうですか?」

「めぐみんさん……………? どうしたの……………気でも狂っちゃった

の……………?」

こういう時に限ってこの人は!

一番言われたくない人にそのセリフを言われ、心が折れかける。

この場で最も乗りやすそうな人を選んだのにあつさり拒否されてしまった。

「お前……何してるんだよ……?」

「紅魔族の考えることはわからん……」

悪魔も殺し屋も武器商人の男もおかしな奴を見るような目で見てくる。

だが退いてはいけない。

気付かれてはいけない。

私はさらに踊りながら、杖を振り回す。

「だから、その踊りは、なんなんだ!!」

「ただの時間稼ぎですよ? ほんとに何かの効果があるとも思っただんですか?」

ダンスをピタリとやめて、間抜け面してる三人と悪魔一匹に指をさす。

ここからが本番!

もう一度肺に息を取り込み、さつき以上の大声で。

「スターク先生!! 今です!! 全部まとめて吹き飛ばしてください

!!!

「!?!?!」

腹の底から叫んだ。

「チィィイツツ!! このための時間稼ぎか!!」

悪魔が舌打ちをして上空へと逃げ、三人の男もその場から脱兎の如く逃げだす。

……………これを、待っていた。

私は空に逃げた悪魔に杖を向ける。

——魔力が強く圧縮された光が宿る、その杖先を。

「……ッ!? テ、テメエ!! 今のはブラフか!!」

そう。踊りは魔法の詠唱のための時間稼ぎと、それによる魔力の奔流を誤魔化すため。

そして、今のブラフは悪魔を離れた位置に誘導するため。

その位置なら悪魔に直接爆裂魔法を叩き込んでも、他の人間たちは吹き飛ばされて気絶するだけで済む。

自分の位置が吹き飛ばされると宣言を食らったら、各々散らばって逃げるだろうと思っていた!!

「あ、あのガキを止めろオーツ!!!」

悪魔がそう叫ぶと、殺し屋二人が私の動きを止めて杖を叩き落さんとナイフを放つ。

二本のナイフが私の腕目掛けて飛んできた。

……が。

「はっ……!!? 弾かれただど!!」

刃が食い込んだ刹那、ローブが硬化化し殺し屋の放ったナイフをはじき返す。

……ここまで防御力が高いとは。

「なんだあいつ!? アークウイザードじゃなくてクルセイダーなのか!?」

「んなわけあるか!! 服に何か仕込んでるだけだ!! 次は露出してる太ももを狙うぞ!!」

「ふはははははは! もう遅い! 全員まとめて食らうがいい!! 我が必殺の一撃!! 『エクスプロージョン』ツツ!!!」

「くそつたれーッ!!!」

空を業火の大輪が包み、一切合切を爆裂させんと破壊が吹き荒れる。

「ぎゃあああああああ!!」

その威力に、私から少し離れていたセシリーでさえも爆風に耐えきれず吹き飛んでいく。

……もちろん私も。

大気の震えが収まり、衝撃と爆風で吹き飛んだ草花が静寂とともに降ってくる。

私は倒れ伏した自分の体に何とか力を入れ、辛うじて首だけ動かして戦果を確認した。

殺し屋も、武器商人の男も、みんな地面に倒れている。

わずかに胸や背中が動いているところを見ると、死んではいないようだ。

爆心地にいた悪魔は間違いなく消え去っただろう。同じ上位悪魔であるアーネスも消し去った魔法だ。

おまけに杖で遥かに強化されている。ひとたまりもないに……。

「ハア……ハア……よくも……やってくれたなあ……!!」

……そんな。

「馬鹿な……!」

「……実際、クソあぶなかつたぜ……!」

そこにいたのは、全身ヒビとすすだらけにした悪魔だった。

悪魔は汚れを払うかのようにボロボロの羽をはばたかせる。

「だが……これで詰みだな、もう動けはしねえだろ。あきらめてスタートクを殺すための人質になってもらうぜ。だが本当に油断ならねえガキだ……不測の事態に備えて脚でも折ってやろうか。ボロボロにされた礼も込めて……な!」

悪魔がこぶしを握り、ゆっくりと私の方へと足を進めた、

その時だった。

ガンツと金属を地面に叩きつけたような音が鳴り響き、私の目の前に何かを着地した。

地面に膝と拳を突き立てて。

「不測の事態、ヒーロー参上だ」

スターク先生が、私の目の前に現れた。

「……つたく、ツイてねえぜ!!」

悪魔が叫んで飛びのく。

私はスターク先生の方へと首だけ向けながら、懺悔のように重々しく言葉を絞り出した。

「スターク先生……申し訳ありませんでした……敵を倒そうと思ったのに……仕留めきれませんでした……一発だけ撃って、もうただの置物です……せつかくあなたが背中を押してくれたのに、期待に応えることが……」

「十分応えたさ」

「……?」

スターク先生は私に背を向け、敵に視線を向けたまま話を続ける。

「僕は何も、一人で全てを救うスーパーヒーローになれだなんて言っていない。僕は君になんて言った? 最強の戦術破壊兵器になれとிட்டんだ。そして君はあの化け物に存分にその力を発揮し、見事ここまで追いつめた」

そしてマスクを開けて振り返り、私の目をしっかりと見据えて。

「——君はよくやった。僕は君を……あ……まあ、誇りに思うよ」

「こんな時くらい……恥ずかしながらに言ってくださいよ……」

私はこんなにもチョロい女だったろうか。自分の行動が報われた事が、スターク先生のその一言が、思ったよりも心に來てしまった。

「ダクネス君、めぐみんの顔を拭ってやってくれ。ひどいありさまだ」
「……ん。任せられた。ほら、よく一人で頑張ったな。本当にすごいぞ」
いつの間にか後ろから來ていたダクネス先生が、爆風で煤と泥だらけになった私の顔をハンカチで拭ってくれる。

拭う力が強すぎてかなり痛い。

最高のタイミングによる最強の増援に安堵していたが……………。

「あとは僕に任せておけ、めぐみん」

直後、私は視界に拡がった光景に大きく目を見開くこととなる。

スターク先生がニヤリと笑うと同時に、様々な鉄の塊が次々とスターク先生の周囲に降り注ぎ、その姿を変えていったからだ。

▽

めぐみんが追い詰めた悪魔が、目の前で起きていることが理解できないといった感じで僕に聞いてくる。

「お、お前……………なんだよソレ……………それもお前の鎧なのか……………!!?」

「ああ、これか？ これはな、お前なんかよりもっと強い奴とタイムン張るために作ったスーツさ」

降り注いだ鉄塊が姿を変え、僕の体をスーツの上から覆っていく。

「クソツッ！ させるかよオ!!」

悪魔が羽を広げ、猛スピードで僕の方へ突っ込んで拳を握り振りかざした。

ガキンツと強い金属音が周囲に鳴り響く。

それは、僕が殴り飛ばされた音……………などではなく——

「ツ……………！ マ、マジで……………ツッ！」

——僕の身の丈以上の巨大な鋼鉄の腕が、悪魔の拳を受け止めた音だった。

「マジでなんなんだよソレはああああ!!」

広がったHUDに文字が浮かび上がる。

【Mk. 44 ハルクバスター^ロアー^ニマー^カ 装着完了】

第19話 LEGEND OF CRIMSON

突如私達の前に出現し、スターク先生の体を鎧ごと覆った巨大な人型ゴーレム。

だが、ただゴーレム泥人形と呼ぶにはソレはあまりにもごつく、あまりにも煌びやかで、そして……………。

「さて、第二ラウンドだ」

……………そして、あまりにもロマンたつぷりでカツコよかった。

「その見せかけの体バラバラにしてやるよ!」

悪魔が叫んで拳を握り、おおきく振りかぶって再び殴り掛かる。

「Wow、テレフォンパンチか?」

……………が、それを容易く受け止め、もう反対の手で拳を作り……………。

「こっちの番だ」

腰から肩、肩から肘、肘から手首、手首から拳へと余すことなくパワーを伝えた流麗な一撃が、悪魔の顔にめり込んだ。

まるで高レベルの武闘家のモンクのような完璧な一撃だ……………意外と殴り合いに慣れているのだろうか?

「グッハアアアアア!!!」

蹴られた小石の如く吹っ飛び、地面を二転三転し、平原に一筋のえぐれた道を作る。

殴り飛ばした悪魔に向け、追撃にとスターク先生が掌を向けた。

「ガアッ!」

追撃を避けようと素早く起き上がった悪魔目掛け、掌から光線が射出される。

通常のソレを何本も束ねたような太さの、高出力の破壊光線が目標へと突き進んだ。

「やられっぱなしでいられたか!! 『クリムゾン・レーザー』 ツツツ!!!」

悪魔が放った赤色の熱線を放つ上級魔法が、スターク先生の放った光線へと向かい、互いの中間の位置でぶつかり合う。

「グッ……………ど、どうなってんだ……………!!」

ぶつかり合った瞬間は拮抗してたものの、やがて光線が悪魔の魔法を押し返す。

……………あれ程の上級魔法を、魔力も無い単純な高出力の物理工ネルギーのみで押し返すとは、アーク・リアクターとは一体何なのだろう。

以前何度も聞いたが、その度『君にはまだ早い』と、その構造や製造方法などについては全く教えてくれなかった。

「だああああー！ク、クソがああああ!!」

なんて考えているうちに、みるみる悪魔が追い詰められていく。

魔法を放っている手元近くまで光線が迫り、堪らず横に飛んで回避した。

今のでなんとか難を逃れた悪魔は、悔しげにこつちを見ている。

どうやらこれ以上勝ち目のない戦いをする程馬鹿では無いようだ。

羽を広げ、空へと飛び立つ。

「お、覚えてろよ……………!! 退くのは今回だけだ……………!! 必ずまた戻ってきてやる……………!!」

これだけやっておいて逃げるとは……………。

せつかくこのままで追い詰めたのに……………!!

高速で上昇していく悪魔。

だが、その影をもうひとつの影が追跡する。

「逃げられるとでも思ってたのか？」

それは、全身のスラスターから推進リパルサーを噴出させてあつという間に悪魔の背中に追いついたスターク先生だった。

ええ……………。

「ハッ……………ハアアアア!? テメエそんなデケエ鎧でなんでそこまで素早く……………いや、なんで飛べるんだよ!」

「脳があるならあらゆる可能性を考えておくんだな」

スターク先生は背後から悪魔の肩と首根っこを掴み、そのまま組み

伏せるように地面に叩きつける。

「ガハッ………!!」

「とどめだ」

悪魔を地面に押しえつけ、掌をその背にかざすスターク先生。

完全に消し去ろうとしているのか、強大な鎧のその掌はいつもより遥かに強い輝きを放っていた。

だが、組み伏せられている悪魔の瞳にも怪しげな光が宿っている。

……なにかするつもりだ。

「こんな所で………くたばってたまるかアアア!! 『インフェルノ』

—— ツツ!!」

「ツ!?!」

悪魔は組み伏せられた状態から無理やり獄炎の魔法を放ち、周囲を火の海に変えた。

じ、自分ごと………!!

己を巻き込んだの上級魔法。

荒々しい火柱が吹き上げ、スターク先生は反射的に手を離してしま
う。

その隙を逃さんと、すかさずスターク先生を蹴り飛ばし、体勢を立
て直した。

目には未だ闘志が宿っている。

「アッチチチ……!! ハア……ハア……こうなったら——」

悪魔は低く構えて前傾姿勢をとり、

「——とことんやってやるよ」

覚悟を決めたように両拳を握りしめ、猛スピードで突っ込んだ。

スターク先生は冷静に構え、敵を挑発する。

「かかってこい」

それと同時に背面のあらゆるブースターが同時に展開して光を放ち、残像と砂煙を残してそこから消えうせ、悪魔に真正面からぶつかり合う。

爆発とも取れるような破裂音を立て、大気と地面に広がる破壊の

波。

空間に衝撃波が広がっていくのが、地面が波打つのがハッキリと見えた。

「めぐみんー!」

私を抱きかかえるダクネス先生が素早く背を向け、私を衝撃波から守ってくれる。

ダクネス先生が背を向けることにより、必然的に私の視界も後ろに回り……………。

その拍子に私が空にあるものを見つけたのと、警告が耳に届くのは同時だった。

『めぐみん様、そちらに向けてなんらかの飛翔体が複数接近しています』

「あれは……………」

空の向こうから向かってきているのは、十体ほどのコウモリ型のモンスター。

いつの日か里で見かけたのと同じような姿をしていた。

「……………やっとなやがったか!! その紅魔族のガキをつかまえろ!!」

「!!!!」

悪魔の叫ぶその声と共に、こつちに飛んで来ているモンスター達が一気に加速する。

ちよつ……………!

「醜悪な悪魔め……………! めぐみん! そこを動くな! 私が引き受ける!」

ダクネス先生が私の体を静かに地面に横たわらせ、飛来するモンスターに向けて構えるが、その表情は険しかった。

それもそうだが、数が多すぎる。いくら防御力が高くても、多勢に無勢では守り切れない。

私は寝返りをうって姿勢を変え、飛行モンスターが向かってきている方を再確認する。

すると……………。

「おんどりやあああああ!! 悪魔の手先がなんぼのもんじやーい!!」

セシリーが、こつちに突っ込んできているモンスター目けて石ころを拾っては投げた。

……………!?

「お姉さん!? 何をしているのですか!? こつち来てください!」

「お、おい! ……………そのアクシズ教のプリースト!! 私はクルセイダーだ、危ないから私の後ろに!!」

セシリーは顔だけをこちらに向けて。

「……………あなたの宗派は?」

「えっ……………エリス教だが……………」

「べっ」

「?!?!」

「地面に唾を吐いて、嫌な顔を隠そうともせずにダクネス先生の後ろへと回る。」

「……………んっ……………」

「……………ダクネス先生?」

今のぞんざいな扱いが彼女のナニかに響いたようだ。

ダクネス先生が艶やかな唇から薄く嬌声を漏らす。

スターク先生からこの人の性癖について聞いていたが……………これはあまりにも……………。

……………ちがう、そうじゃない!!

ふとモンスターの方に視線を戻すと、矢の如き速度でもう目前まで迫っていた。

ヤバイヤバイヤバイ!!!

このままでは私が人質にされてスターク先生が不利になってしま
う!!

「あああああ!! キレイでカッコいいダクネス先生!! お願いですか
ら助けてくださああああああ」

ダクネス先生があわてて我に返るも、モンスターはもう目と鼻の
先。

それも、圧倒的な数。
こ、これはもう駄目かもしれない……………

『ライト・オブ・セイバー』

『ライトニング！』

……………最悪の事態を覚悟したその瞬間。

目の前の何も無い空間にゆんゆんとあるえが突如現れ、瞬く間にモンスター達を殲滅した。

ゆんゆんは中級魔法でいつせいに撃ち落とし。

あるえはなんでも切り裂く光の上級魔法で次々と細切れにする。

……………なんとという完璧なタイミング。

悔しいが、二人をかつこいいと思ってしまう……………

「ふふ……………魔法で隠れて機会を窺っていた甲斐があつたね。完璧な登場だ」

「うう……………普通に助けてあげれば良かったと思うんだけど……………」

あるえと共犯者のゆんゆんは後ですんごい目にあわせるとして、あるえの魔法の色がおかしい。

本来紅魔族が好んで使うあの光の上級魔法は、白っぽい色なのだ。だが、あるえのソレは極めて攻撃的な赤色をしていた。

しかも刀身がビリビリと僅かながらに振動しているうえに、バーナーのような威圧的な音まで出ている。

爆裂魔法には及ばないものの、中々にイカしているではないか。

あの時スターク先生に渡されていた手首に着けているデバイスがなにか関係しているのかもしれない。

どんなものかあるえに聞こうと思ったのだが、今あるえは自分のそのデバイスに感動してるみたいで聞いてもらえなさそうだ。

……………なんにせよ、ひとまずこれで安心だろう。

私はスターク先生の方へと視界を戻す。
そろそろ決着がついていてもおかしくないだろう。
そう楽観しながら向けた視線の先に広がっていた光景は――

「ガアアアアアッ!! 『インフェルノ』! 『フリーズ・ガスト』ッ!!
『カースド・ライトニング』ッッ――!!」

「ッ! シールド展開!! 右腕部にタングステンの対物フレッシュエツト弾を装填しろ!! ……食らえ!!」

「いっ!? ……つてえええええ!! やりやがったなテメエ!!」

悪魔が魔法を乱れ撃ち、スターク先生がそれを腕を展開させて形成した巨大な鋼鉄のシールドで防ぎ、逆の手を悪魔に向けて無数の金属槍のシャワーを浴びせる。

悪魔の羽を穴だらけにして体も傷だらけにするが、灼熱魔法、氷結魔法、貫通力の高い電撃魔法と立て続けに食らったスターク先生の盾も粉々になってしまう。

……えっ、なにこれヤバイ、戦いが激しすぎる。

ダクネス先生も、自分のデバイスにうつとりしてたあるえも、セシリーに避難するように呼び掛けていたゆんゆんも。

立て続けに起きる轟音に気が付き、スターク先生の方を注視した。

全身をズタボロにされた悪魔が、激烈な憤怒を顔に宿らせる。

拳を握り、足を少し地面に沈ませた刹那、肩から先が掻き消える。

後衛職の私の目ではまるで世界から体の一部が無くなってしまったようにしか見えない。

「ツガアアアアッッ!!」

光沢を放つ漆黒の堅牢な体。そんな肉体から放たれる一撃。

まるで投石器から放たれた岩が自由自在に動き回っているかのようだ。

だが、そんな一撃だって、今のスターク先生には全く通用しないだろう。

文字通り、鋼で出来た山のごとき体が動き、パンチを放つ構えを見

せる。

クロスカウンターをお見舞いするつもりのようなのだ。

「何度やったって……」

悪魔がスターク先生の間合いに入るやいなや、鋼鉄の拳が空気の壁をやすやすと粉碎し、悪魔の顔面に突き刺さ——

「ッ!？」

——ることはなく、悪魔の頭を掠めて角を一本へし折った。

角が折れても悪魔が勢いを落とすことなく、そのままスターク先生が放った拳の下を潜り抜けるかのようにして脇の下へと体を滑り込ませる。

そして……。

「ゼアアアッ!! 『ライト・オブ・セイバー』 ツツツ!!」

「グッ……!？」

竜の咆哮じみたすさまじい声が平原に響く。

それは、ありつたけの魔力を込めたのだろう。

極太の光の剣が腕から顕現し、スターク先生の巨大鎧の右腕を肩の先から切り飛ばした。

腕が宙を舞い、重力に従って地面にその身をめり込ませる。

時間が引き延ばされたような気がした。

地面に落ちることによって響いた金属音が、やけに重く感じた。

「トニー!!」

ダクネス先生の叫びがこだまする。

私に至っては叫ぶ余裕すらなかった。

さつきまで優勢だったのに……一体何が……。

「ハハハハハッ！ ようやく一本つてか、ええ？」

悪魔は天を仰いで実に愉快そうに笑い声をあげる。

ひとしきり笑うと、スターク先生へと視線を戻し。

「……今ので確信したぜ。テメエ、だんだん動きが遅くなっているだろ」

……なんだって？

私には全くそう感じないが……。

悪魔は勝ち誇ったような笑みを浮かべて話を続ける。

「その鎧、原理は知らねえが造りは間に合わせの粗末なものだ。大方壊れかけたモンを急いでこさえたって感じだな……活動限界があるだろ」

その言葉を聞いて、私はスターク先生の切断された腕の断面を見る。

私が目を細めると、それに反応して眼帯が目標物へとズームしてスキャンを始めてくれた。

『……敵の言っていることは本当です。使用されている機材、およびその素材となっていているものはいずれもあの装置に適していないものが使用されています。本来の力が出せないどころか、時間経過で加速度的にあのスーツ自体の性能が落ちていきます』

スキャンすることによって表示された巨大鎧のエネルギーが、どんどん弱くなっている。

このままでは……。

私は三人に呼び掛ける。

「ダクネス先生、あるえ、ゆんゆん!! スターク先生に加勢できませんか!?! 戦況が悪くなってきました……!」

だが、その三人は呼びかけには応じない。

代わりに、あるえが小さく唸り。

「……めぐみん。残念だけど、どうやらそうもいかないようだ」

……まさか。

顔を三人がいる方向へ向けると……。

その視線の先には、先ほどの何十倍もの数のモンスターがこちらに向かって来ていた。

優秀な紅魔族であるゆんゆんにあるえ、そして強力な前衛であるダクネス先生がいれば問題なくさばけるだろう。

だが、スターク先生への援護は厳しそうだ。

なにか……何かできることは……。

爆裂魔法も撃って、動けなくなってしまった私ではもうどうすることも……。

何かないかとあたりをキョロキョロする私の視界に、あるものが映る。

切り飛ばされた、巨大鎧の右腕だ。

……………!

私の頭に案が浮かぶ。

「眼帯のお兄さん!! あの切り落とされた腕にアクセスできますか!?!」

『やってみます』

以前スターク先生が少しだけ見せてくれた、別の装着機構の鎧。

全身のパーツがそれぞれ独自に飛び回り、本体を覆う仕組みのあの鎧。

スターク先生は自動キャッチ型スーツなんて呼んでいたか。

あの巨大鎧も全く同じ変形方式をしていた。

バラバラの部位が一つの場所に集まって形を作る。

ということは何かで制御されていて、それらは全てつながっているのでは?

ならば、それにアクセスできたとしたら?

スターク先生の方でもそれはできるかもしれないが……。

「さあて、さっきのお礼をたっぷりしてやろーか!!」

「これでいいハンデだ。ちょうど手を抜いてやろうと思ってたところだったんでね」

「面白くねえんだよボケ!!」

……どうやら、その余裕はなさそうだ。

いや、余裕そうに見えるが………あれはただのいつもの軽口だろう。

私は破壊された腕部にアクセスを試みるもの……。

『アクセス失敗、防がれました。それと、トニー様よりメッセージが

……』

……アクセスに気付かれた？

一体何を………

☒ いい子にしてたらクッキーやるよ ;) B y T o n y ☒

「……………」

………面白いじゃないか。

紅魔族はやるなど言われたらかえって燃える種族。

眼帯からホログラムが投影され、無数のコードが表示される。

それは、あの腕一本の中を流れる制御コード。

その中から特定のコードを見つけ出し、組みなおして命令と誤認させる。

これが一番簡単な方法だろう。

それでも、激流の川底に転がる小石を見つけるようなものだが

……。

……ちよつと無謀な気がしてきた。

いや、やってやろう。
まず手始めに――

▽

まったく、思ったより面倒なことになった。
敵の強さを見誤ったか。

こんなハルクのパチモンみたいなのがここまでやるとはな。

――ベロニカ。

ハルクが暴走した時のために作った、超大型スーツ。

以前ハルクとの戦いにおいてかなりボロボロにされてしまった。

ラボと共にこの世界に来てからというものの、巨大モンスターに備えてちよくちよく修理はしていたのだが……。

ここで問題が発生してしまった。

それは、資源問題。

この世界と僕が元居た世界では、存在する資源に違いがあったのだ。

修理しようにも、その元となる素材が無いのでは意味がない。

既存の素材もいくらあつたのだが、ほとんどは見たこともないような素材ばかり。

王都に提供してるタレット、迫撃砲、地雷、ドローンといった比較的単純な造りのものはまだ何とかなるのだが、スーツ程複雑な精密機器となると、それらの製造や修理には必要な素材も替えが利かないうえに、加工にも手間がかかる。

おかげでこいつの修理はかなり難航した上に、間に合わせて呼び出したおかげで性能まで落ちてしまった。

「なんだ、こねえのか……？　なら、こつちからいくぜ!! 『ファイアーボール』!」

……こいつを倒すまで位は持つてくれたらいいが。

こちらに向かつてくる中級魔法を僕はリパルサー光線で粉碎する。

「シャアアッ!!!」

それに紛れ、悪魔が飛び膝蹴りをお見舞いしてきた。砕けた火球の火の粉や煙を引き裂きながら、鋭い一撃が向かってくる。

見た目によらずトリッキーな奴だ。

膝蹴りを拳で殴って相殺する。

銅鑼を殴るような音が響き、衝撃波で周辺の大地が揺れる。

【左腕部に損傷確認】

目の前のHUDに警告文が出た。

『ボス、今の状態で真正面から受け止めるのは非推奨です』

わかっている。

受け止めて粉碎してやろうかと思ったが、そんなカツコつける余裕はないようだ。

悪魔が受け止められた膝を素早く引き、その力を利用して後ろ回し蹴りを放つ。

鉄塊のごとき踵が僕の側頭部を撃ち抜かんと迫る。

「ブルースのパンチの方が遥かに強い」

蹴りがかがんでかわし、下半身を地面に据えたまま文字通り上半身だけが回転する。

本体の僕がいるのがこのスーツの上半身部分だからできる芸当だ。

「なんだその動き!! わけがわから……ブフォアッ!!」

回転を乗せたパンチが悪魔の胸に突き刺さる。

地面に深い溝を残して悪魔が後ろに飛ぶ自分の体にブレーキをかけた。

「カツ……クソツ……なんて理不尽な存在なんだよ……テメーは……」

「こつちだつてあんたのしつこさにうんざりしてきたところだ。黒くてテカテカで素早くしぶとい。ひよつとしてゴキブリの上位モンスターだったりするのかわ？」

「馬鹿にしてんのかテメー! 俺の名はホースト!! 大悪魔様だ!!」

「そーかい」

悪魔……もとい、ホーストとの言葉を流してちらりとめぐみんたちの方を見る。

飛行型モンスターの群れを相手に、三人でうまく立ち回っていた。

向こうの心配はいらなさそうだ。

「さあ……そろそろ終わりにするか」

活動限界が近づいていることだしな。

これ以上やるとエネルギー伝導率の関係上、動きがさらに悪くなつてしまいには動けなくなつて――

――そう危惧したその時。

突如スーツが膝を着いた。

「……なんだどうした、貧血か？」

……………。

「フライデー？」

『……ボス、非常事態です』

「見りやわかる。何が起きてる？」

「切断された腕部より、魔力エネルギーが混入。スーツ全体のエネルギー供給に不具合を起こしています」

……クソツ、魔力か……！

まだ研究が深く進んでいないエネルギー源。僕の世界の精密機器とは相性が悪く、スーツの内部に流れると時に不具合を起こしてしまう。

Mk. 45にはある程度対策を施してあるものの、間に合わせのこのスーツには施していなかった。

「ハハハハ!! これも邪神ウォルバク様の加護によるもの……!!」

ホーストが邪悪な笑みを浮かべ、スーツの胸近くの位置……僕がいる中心部に手をかざして詠唱を始める。

確実に仕留められるよう、ゆっくりと、力を込めて詠唱を続ける。

「脱出！」

『上半身の開閉機構にアクセスできません!!』

H U Dに損傷、および応答のない部位が次々と映し出される。

「どこなら動かせる!？」

『左腕部のみです!』

「ならリパルサーを……」

「リパルサーオフライン!」

大分よくない状況だ。

こうなったら、内側からユニ・ビームを放って攻撃と共に脱出する

!

胸部にエネルギーを溜めて放つ準備をする。

相手の詠唱の方が早かったらさすがに不味い。

一か八か……

「言い残す言葉はあるか!! トニー・スターク!!」

ホーストの手が闇色に輝き、電撃が迸る。

「……Uh—Oh」

これはマズ——

「『カースド・ライトニ——ガッ!』」

——迫る大ダメージを覚悟したその時。

ホーストの後方からベロニカの右腕が飛来し、その後頭部を強打した。

……!?

突如飛来した右腕を、僕は唯一動く左手でキャッチし——

「この……この期に及んで小細工を……いい加減くたばりやがれええええっ!!」

——咆哮を上げて殴りかかってくるホーストの腕に、叩きつけるようにして嵌めた。

「……は？」

「じゃあな」

次の瞬間、ホーストにはめたペロニカの右腕から推進りパルサーが照射され。

「な、なああああああああ!!?!」

その推進力によって、まるで口を縛らずに離れた風船のような挙動で天高く舞い上がる。

そして……………。

「フライデー、M k. 44の右腕を吹き飛ばせ！」

「ク、クソつたりやああああああああ!!」

紅く染まる平原の空に破壊の波が広がり、大轟音が大気を揺らした
——!!

▽

大悪魔と戦ったその翌日。

私たちはアルカンレティアの門の前に集まった。

アルカンレティアに訪れた大悪魔の討伐。

また、賞金がかけられていた暗殺者と武器商人の男といった犯罪者たちの逮捕に貢献した功績として、アクシズ教団から謝礼金を、警察からは賞金を貰ったので、そのお金を目指していたアクセルへの馬車代に充てることにした。

今はアクセルに向かう馬車を待っているところである。

スターク先生が昨日予約しといたと言っていたが……。

その肝心のスターク先生と言えば、馬車の席取りをしてくるといったまま帰ってこない。

そんな中、セシリーがアクシズ教徒を代表して私たちのお見送りに来てくれた。

「あの時のめぐみんさんはとつてもカッコよかったのよ！ 私より小さいのに、私を背に回して『お姉さん、私の後ろに』って!! はああ……思い出しただけでもキュンキュン来るわ……!」

「へえ……めぐみんはそんなことを……。まるでヒーローだね。かつこいいじゃないか」

「すごい……さすがめぐみん……私ももつと頑張らなきゃ……!」

「うむ、本当によく頑張ったな。騎士なら勲章ものだぞ」

あるえにゆんゆん、ダクネス先生までもが尊敬のまなざしを向け、感嘆の声を漏らす。

これはちよつと気分がいい。

「ふはははは!! もつと私の偉業を称え、広めてください!!! やがてはこの街にて伝説の紅魔族として語り継がれるように」

「あの時のダンスも、今にして思えばとつてもめぐみんさんらしくてかわいかったわ!!」

「……? ダンス……?」

「あー!! あー!! ああああー!! お姉さん、そろそろお別れのお時間ですね!! お世話になりました! ちよつと寂しくなりますね!」

「ああん、私なんてもつともつと寂しいわ!! 最後に頬ずりさせてちようだい!!」

私の恥ずかしい汚点をごまかした代償に、私はお姉さんにされるがままになってしまう。

今もうこの姿が汚点になりつつあるのだが……。

なんて、ふざけたやり取りをしていると、遠くから何か近づいてきた。

四角いフォルム……馬車だろうか。

ごまかすつもりで言ったただけだったのだが、実にちようどいいタイ

ミングで……

「……ね、ねえ何あれ……」

最初に気が付いたゆんゆんが小さく声を上げる。

「あの、眼帯のお兄さん……あれは……」

『車種識別中……』

砂利の上を車輪が転がる聞きなれた音は聞こえるものの、私たちの目の前に現れたそれはどこからどう見ても馬車ではなく……。

『……識別完了。HUMMER H2 リムジンです』

「な、なな……なんだこれは!?!」

スターク先生の故郷だという国では一般的に走っているらしい、くるまが私たちの目の前に止まった。

映像でしか見たことがなかったのだが、実際見てみると迫力がすさまじい。

というか、映像で見たものと見た目が違いすぎる。まるで車輪の付いた屋敷だ。

ここにいる私を含めた全員が、その鋼鉄の車体を見て絶句していた。

ガチャツと音を立ててドアが開く。中にいたのは、当然スターク先生。

ジャケットにサングラス、片手にグラスを持って足を組んでいる。

目立ちたがり屋にもほどがある。

これきつと昨日から用意してたのだろう。

スターク先生はそのままの姿勢で顔だけをこちらに向けて。

「やあ諸君、中は何でもあるぞ。ジュースにお酒、高級なつまみにふかふかのソファにクッションまでな」

そう言っただけでグラスの中身のお酒をゆるりと回して一口煽り、ほうつと落ち着いた吐息を吐き出した。

……様になっているのがまたなんとも……。

こんな凄まじいものをわざわざ用意したスターク先生に、私はその意図を聞く。

どうせなら私が思い描く旅のイメージに沿って馬車で向かいたい

ところだったけど、これがスターク先生の厚意だったらいただいておこ
うと思っただからだ。

……これが終わったら、彼は紅魔の里に帰るのだろうか。

「……あの、一体どうしてこんなものを用意してくれたのですか？」

目立つための自慢ですか？ それとも……」

ちよつと嫌な聞き方になってしまっただろうか。

スターク先生は、私の嫌味が混じった質問を遮って。

「ぐ褒美さ。ここ数日実によく頑張った——」

そして、実にいやらしい笑みを浮かべながら。

「——僕自身への。H A H A H A H A !!!」

そう言って笑うと、額に青筋を浮かべる私たちを尻目にドアを閉じ
てそのまま走り出した。

……………。

……………。

……………。

「そういえば、日課の爆裂魔法……今日の分がまだでしたね」

「うん。ちょうどいい的があるね」

「やっちやって、めぐみん」

「ああ。ここはひとつ派手に頼む」

「めぐみんさん、昨日くらいの良いのをお願い」

みんなの想いにこたえるように、私は走る車体に杖を向けて……。



「……この車がいくらするか知っててあんなことやろうとしてたのか？ 少しはユーモアを理解しろよ」

「世の中にはやっつけていい冗談と悪い冗談があるのですよ。これに懲りたらもうあんなことはしないでください」

「さすがにあれは私もむかつ腹が立ったぞ。やって良い責めと悪い責めがあるのを忘れるな」

めぐみんが本気で爆裂魔法を撃とうとしてるのに気が付いた僕は慌てて戻り、今はこの車の中でアクセルへの旅を楽しんでいた。

「にしても、本当に彼女たちはよかったのか？」

「あるえとゆんゆんですか？ 気にすることないですよ、自分で選んだのですから」

そう。僕が里まで送ると申し出たのだが、あるえはアルカンレティアをまだもう少し見ていたいと残り、ゆんゆんは『あなたに勝つため、上級魔法を身に着ける旅に出る』と、めぐみにライバル宣言を残して去ってしまった。

あるえはともかく、ゆんゆんは素直に友達を名乗って同行すればいいものを。

……まあ、僕も人のことは言えないが。

ちなみに、僕が殺し屋に投げつけたゆんゆんのダガーは結局自分自身で回収したらしい。

去り際にそのことを少し愚痴っていた。

「……………」

アクセルまで数時間。何もせず座っているのも暇なので、なにか話そうかと思ったが、僕より先にめぐみんが口を開く。

「あっ、そうです、スターク先生。あの時のアシスト、実にナイスだったとは思いませんか？」

あの時の、ホーストに魔法を撃たれそうになった時に防いでくれた

やつか。

「……」一つ聞きたいんだが、あれどうやったんだ？ 接続が切れていたらとはいえ、フライデーのセキュリティシステムが残ってたはずだが」

「……ふふん」

めぐみんは自分の眼帯を指でさしながら。

「私に渡した眼帯の人工知能は、フライデーをもとに作りましたね？

我が眼帯と類似したコードを見つけたので、そこから読み解いてシステムに誤認識させました……割と簡単でしたよ」

「まあ、悪くない援護だった。だが次は僕の装置に勝手にアクセスなんてさせないからな？」

目も合わせずそう言いのと、めぐみんはあきれた顔をして。

「たまには素直に感謝してくださいよ……」

「そうだぞトニー。悪態をつきたいというなら、私についてくれ。そして、めぐみんには素直に接してやるんだ。教師たるもの、生徒が手柄を上げたら褒めてやるものだぞ？」

ダクネスはそんな真面目なのかボケているのかわからない事を口走りながら、中身の入ったワイングラスをゆっくりと回してその壁面にワインを走らせ、香りを楽しみ、一口煽る。

酒の楽しみ方をわかっているじゃないか。

僕はそんな彼女に。

「アドバイスどうも。それじゃ、僕からもアドバイス。普通教師は生徒の前で自分の性癖を暴走させたりしないもんだ」

「ゴフツ!!」

口に含んだワインを盛大に嘔き出して、ダクネスがむせ返る。

「おい、汚いぞ。誰が掃除すると思ってるんだ」

「き、貴様がいきなり変なことを言うからだろうが!!」

「あの……申し訳ないのですが、私はダクネス先生の性癖については知っていますから、大丈夫ですよ……理解はしてませんが」

「……?!」

ダクネスがショックを受けた顔をしながら、澁々自分が吹きぼした

ワインをふき取りはじめる。

羞恥の基準が全く理解できない。

そこそこの付き合いをしてきたが、おそらくこの先もこいつを理解できる日はこないだろう。

「でもまあ……確かにダクネスの言う通りかもな」

「……？」

僕は静かに笑いながらサングラスを外し、冷蔵庫からコーラを取り出すと、空のグラスに中身を注いでめぐみんに手渡した。

コーラはめぐみんの大好物だ。なんでも、口の中で爆裂する感じがたまらないのだとか。

最初に飲んだ時は、それはもう終始笑顔で浴びるように飲んでいった。

数に限りがあるし、体にいいものでもないからあまり飲まないようにと念押ししてたが……。

「いいんですか？」

「君とももうすぐお別れだ、今度こそ本当にな。今のうちに飲んでおけ」

「それもそうですね。では、いただきます」

僕はめぐみんの横に座り、グラスにお酒のおかわりを入れて口をつける。

「ふはあ！ やっぱり、これは何度飲んでもいいものですね」

「今度アクセルの僕のラボにコーラサーバーを作つといてやるよ。レシピは不明だが、僕なら解析して突き止められるさ」

それを聞いためぐみんは、不思議そうな顔をしながら。

「おや、てつきりアクセルについた後は『ここからは別々の人生だ』なんて、接触を断つものだと思っていましたよ」

「僕はそこまでドライな奴じゃない。なんだかんだで君は優秀なアシスタントだ。そのうちアクセルでまた君にお手つだいを頼むよ」

「……必要なのは、私の知識だけですか？」

すこし子供っぽく不満げな視線をジトつと向けてくる。

最後くらいちゃんと素直に誉めてやろう。親父と一緒にするのは

避けたい。

「……クエストでも、君が必要になったらもちろん声をかけるさ、最強の戦術破壊兵器君。君を一番買っているのは他でもない、僕なんだぞ？」

その一言に彼女はにつこり笑って、残りのコーラを一気に飲み干した。

そして空のグラスを僕に寄越して。

「おかわりくださいっ！」

——そこから数時間が立って。

ダクネスを交えて学校での授業の様子やら、昔の思い出やらと談笑しているうちに。

『ボス、アクセルに到着しました』

僕らに乗せた車は、アクセルに着いていた。

「……おっと、少々名残惜しいが、退場の時間だ。涙を拭うハンカチの用意は大丈夫か？」

「話していたら早いものですね。さっきはああ言ってもらいました。が、やはりいざとなると若干寂しくなりますよ。しばらくは里で教師を続けるのでしょうか？」

「まあな。ついでに里の文明レベルを少し上げておくよ、次里帰りしたときはビルが建ってるかもな」

「あの……故郷の景観を気に入っているのでもやめてくださいね？ お願いですよ？ フリじゃないですからね？」

心配そうに釘を刺してくるめぐみんを『はいはい』と軽くあしらい、ドアを開けてやる。

「さあ、駆け出しの街に到着だ。ダクネスもここで降りるか？」

「ああ。あそこで唾然としてる門番には、これがデストロイヤーの亜種ではないと伝えておかないとな」

「だな。槍で突かれたりでもしたらたまったもんじゃない」

ダクネスはめぐみんより先に降り、門番の方へと歩きだすが、途中でその足を止めて振り返り。

「そうだめぐみん。私はこの町に住んでいて、冒険者をやっている。必要になつたらいつでも声をかけてくれ。クリスもつれてクエストにでも行こうじゃないか。盾には自信がある」

頼もしそうに、自分の胸のプレートを叩いてみせた。

そんな聖騎士らしい姿もつかの間。まっさらな紙にコーヒーがにじむかのように、その自慢げな顔に次第と情欲の色を濃くしてきながら。

「ふ、不利になったら捨てて逃げてでも構わないし、なんなら敵を私ごと爆裂魔法で吹き飛ばしてくれてもかまわにゃい……」

めぐみんは頬を引きつらせながら、丁重にお断りする。

「あ、ありがとうございます……その、さすがにそういうことはしません……パーティーを組む時は一声かけますね……」

「うむ、楽しみにしている」

ダクネスは再び踵を返し、街に警報を出そうかとあたふたしている門番の方へと早歩きで向かっていった。

僕はそんな彼女を呆れ果てた目で見送り。

「元臨時教師から最後の教えだ。あいつとは組むな」

「いや……悪い人ではないと思うのです……」

「そうやって、悪い男に捕まった女も見てきた。君も気を付けろ」

「心配いりませんよ、私はまじめで、ちゃんとした人とパーティーを組むつもりですから」

そう言つてフツと鼻で笑うと、無駄にカツコつけながら車を飛び降りて。

「それではスターク先生、我が禁断の力を欲する時が来たならば、いついかなるときでも——」

「トニーでいい」

「……へ？」

「僕はもう君の教師じゃない。僕は君の力を借りたいときにいつでも

呼ぶし、その逆も別に構わない。要するに、仲間だつてことだ。先生はつけなくていい」

僕のその言葉を聞いたためぐみんは、すこしだけ口角を上げると……。

「……ではトニー、また会いましょうね」

そうクールに笑い、背中を向けて歩き出した。

その背を見送り、僕も車のドアを閉めて進路を紅魔の里へと設定する。

「フライデー、なにか曲を流してくれ」

『了解ボス。ランダムで曲を選択……』

——ガガガ、ガガガ……

AC / DC の Highway to Hell が車内に響き渡る。

実に良い選曲だ。

車の窓から空を見上げる。

目が痛くなるほどの快晴。旅立ち日和つてヤツだ。

「……いい天気だ」

……僕は彼女の今後の活躍に期待と若干の心配を抱きながら、里へと向けて車を走らせた。

KONOSUB “A” SSEMBLE

第20話 ありえないほど《平凡》ありえないほど《陽気》

大地を炎が波打ち、立ち上る煙は天にまで届いていた。

ナパーム弾の集中爆撃でも受けたかのような有様になった紅魔の里を、無数の飛行物体が低空で飛び回り、次々と目につくものを破壊している。

蝗害すら彷彿とさせるその光景――

――チタウリの軍勢が、紅魔の里を火の海へと変えていた。

その群れへとめがけ、紅魔族の生徒たちが放った多数の魔法が撃ちこまれる。

『『ライトニング・ストライク』！』

『『インフェルノ』ッ！』

『『カースド・ライトニング』』

紅魔族の魔力から放たれる、強力な対空砲火が展開するも、イナゴの群れにマシンガンを撃つかのように、まるで意味をなさない。

焼け石に水だ。

チタウリの軍勢が一斉に方向を変え、意思を持った雲のごとく動き、生徒たちに相対する。

「や、やば……！」

飛行物体に乗ったチタウリたちが、生徒たちに武器を次々と向け……。

致命的な威力の青い砲撃が、雨となって降り注――

——授業の終わりを知らせる鐘が教室に鳴り響く。

周囲の風景が崩れていくブロックのように消えていき、その後ろから無機質な白い壁が顔をのぞかせる。

悔し気な顔を浮かべる生徒たちに対して僕は腕を組みながら。

「なあ、君たち今回の課題を理解しているのか？　ねりまき、言ってみろ」

「……『絶対的に不利な状況で、どう被害を抑えて撤退できるか』……だった」

「そう、『だった』だ。君たちは撤退を余儀なくされる状況下で、周囲の仲間や市民を無視して正面から戦おうとして叩き潰されたんだぞ。こういう場合は、敵の注意を引くチームと、逃げ遅れた人を救出するチームに分かれて、全員逃がしてから自分たちも撤退するんだ」

「で、でも先生!!　紅魔族的には、もっと絶望的な状況になって初めて助けに行った方がカッコが……いえ、何でもありません。ごめんなさい……」

ふにふらが手をそびえたたせて何か喚いていたが、僕が軽く睨むとすぐに引つ込めて謝罪した。

「各自反省して次回で巻き返せ。だが、VR授業は少し空いて、次の授業はビジネス学になる。職人として生きていく場合にどうやって自分の商品を高く売れるようにプレゼンするか、その方法をレクチャーしてやる。それじゃ解散」

「二二はい」

授業が終わってすぐ談笑を始める生徒たちを背に、僕は訓練用仮想現実教室から出て廊下を歩く。

その会話の中には今回の授業の楽しさを振り返る声が多かった。最先端のVRシステムを授業に導入してみたのだが、評判も良くて何より。

イケメンとの結婚生活を送る体験もできるのかなんて声も聞こえるが、聞かなかったことにしよう。

僕は校門まで向かいながら今までのことを振り返る。

あれからしばらくたった。

僕は里で教師を。めぐみんはアクセルで冒険者を続けている。

衛星を通じてたまに連絡を取っているが……彼女の名声はアクセル中に響き渡っているようだ。

あの町じやもうダクネス以外、組んでくれる冒険者はあつという間にいなくなってしまうらしい。

有用性を理解してもらえよう、プレゼンのやり方でも教えてやるべきかもな。

「おっ、『光の橋を架ける起動騎士』スタークか。新しく取り入れたという授業の成果はどうだ？ なんなら俺にも体験……あつ！ 俺のコーヒーを返せ!!」

「ご馳走様。ぶっちゃん。……こんな安物じゃなくて、もつといいものを飲めよ」

すれ違いざまにぶっちゃんが持っているコーヒーをひったくり、一口すすする。

真っ白なコーヒーカップのふちを見て口をつけてないのは確認済みだ。

「ったく、お前ってやつは……破天荒にもほどがある！ 紅魔族的に悪くはないが、迷惑してもんを……」

後ろから飛んでくる同僚の罵声を頭の中で消し去り、再び思慮にふけた。

ラボにある新しいおもちゃについてだ。

「はっけよーい、のこったのこった!!」

ぬるくなりつつあるコーヒーをすすりながらラボへと向かってい

ると、暇を持って余した里の住民たちが魔法で作ったゴーレムでジャパニーズ賭けSUMOU大会を平原でやっているのが見えた。

参加したい衝動に駆られるものの、残念ながら僕は出場禁止にされてしまったので眺めるか賭けに参加するしかできない。

ハルクバスターを修理したての頃、その肩慣らしに参加させて一方的にゴーレム達をぶちのめして賞金を総取りしたのが良くなかったようだ。

賢すぎて友人ができないことと言い、どんな世界においても強すぎると孤独になる。

実に世知辛いもんだ。

賭けにでも参加したかったが、今はもっと大事な用事がある。

ラボに着いた僕は空のコーヒーカップを捨てて、研究室に入る。

「あつ、主任」

「僕を主任って呼ぶな。何度言ったらわかるんだ」

「いや、ここ工場だし……なんというか、一番しつくりする気がしてね」

僕を主任呼ばわりしてくるこの男……ぶつころりーは、つい最近までニート生活を謳歌していたのだが、とうとうブチ切れた親に家を叩き出され、食い扶持に困ったということまでここに来た。

ここは職業訓練学校じゃないと門前払いしたのだが、ドアの前で十二時間ほど土下座されて渋々雇うことに。

時々さぼろうとするが、腐っても紅魔族なのでなんだかんだ役には立っている。

「ハア……」

「どうしたんだい、主任。なんかあったの？ あの……主任……目が……怖いんだけど……」

「いいや？ ……ここで得た経験をもとに、ニートを更生させる財団でも立ち上げようかと思っただけさ」

「くっ……俺はニートじゃなく来るべき時に備えて力を蓄えてるだけなんだ……」

タワーにいたアベンジャーズの面々のほとんどがニートつて言い
たいのだろうか。ウケる。

ぶつぶつと言いつつ、話を始めたぶつころりを無視して作業台に置か
れたとある武器の前に立つ。

それは、服屋で物干しざお代わりに使われていた大型のライフル。
気になったので店主から僕が貰い、解体して中の組成を徹底的に調
べていた。

家に代々伝わる由緒正しい物干しざおとかなんとか言ってたが、僕
が三十分で作ったLEDライトとかいろいろねじ込んだやたら変形
してやたら光る棒を差し出したら泣いて喜んで交換してくれた。

あんな廃棄物のオブジェみたいなものと交換してもよかったのか
と今更になって思うが、まあ別に良いだろう。

「その……えーつと、その物干し竿がそんなにすごいものなのか？」

ぶつころりが後ろから質問してくるが、僕は振り返らず、目の前
の装置のスキヤン結果と睨めっこしながら軽く答える。

「まさに宝の山だ。こいつで僕の悩みの種が吹っ飛ばせるかもしれな
い」

「おお……それはワクワクするね」

「初めておもちや屋に来た少年になった気分さ」

僕がこの大型ライフルのどこに興味をそそられるか。

それは、ライフル自体のエネルギー循環路の仕組みだ。

調べて分かったことだったが、このライフルは弾丸ではなく魔力を
圧縮して撃つ。

魔力についてはよく知らないものの、その発射までのメカニズムは
リパルサーに似通った点がいくつかあった。

似通ってはいるものの、僕のスーツに比べればかなりお粗末なもの
で、ライフル自体が複数回の発射に耐えられないほどだ。

はつきり言つてスペースシャトルとペットボトルロケット程違う。
だが、重要なのはそこじゃない。

スーツに搭載されたものと似たエネルギー循環路、そして材質は全
てこの世界のもの。

つまり、この世界の素材でスーツのエネルギーを効率よく循環させる回路を作るための基盤になるってことだ。

ワクワクするなって方がむずかしいね。

……なんて、心を躍らせている時。

『ボス、壁の修繕の予定が迫っていますが……』

………。

「……フライデー、君には空気を読む機能も付けておいたはずなんだが」

『申し訳ありません。ですが、これを予定したのはボスですよ』

……そうだったな。

だが、とりあえず僕は研究を続けたいので。

「君が適当にラボの中に案内して勝手にやらせておけよ」

『工事するにはその建築物の所有者が建物内にいなければならぬと定められています。研究を続けたい気持ちは分かりますが、とりあえずアクセルのラボに移るべきです』

「ハア……。つたくしやうがないな。フライデー、ライフルの研究結果をアクセルのラボに送れ。パーツは元に戻して僕が運ぶ。ぶっころりー、聞いてたか？ 僕はアクセルに向かうから、君はこっちで引き続き自分の仕事を続けとけ」

「了解主任」

「主任はやめろ」

バラバラにしていたライフルのパーツを手早く組みなおし、Mk.45の背に括り付けてアクセルへと飛んだ。

▽

今日は以前ダクネスが好奇心から起爆させた爆弾で空いた壁の穴を塞ぐため、この街の土方達が来る予定となっていた。

ライフルに気を取られていてすっかり頭から抜けていた。

「……来たか」

里のラボから送ったデータを見ながらコーヒーを飲んでいると、

チャイムの音が鳴った。

遠隔操作で地上部分の物置小屋を開けてやり、土方の人たちを地下のラボへと案内する。

依頼者であるダクネスが事前にどういう場所かの説明を土方達にしてあるため、特にパニックは起こしていないはずだ。

『修繕を頼む部屋はこちらです。本日はよろしくお願いいたします』
ドアが開き、フライデーに案内を受けた土方達がぞろぞろと入ってきた。

若干戸惑ってはいたものの、穴が開いた壁の辺りに集まり、次々とセメントのようなものやレンガやらの補修材料を搬入していく。

汗臭そうな連中だ。

後は適当に任せておき、向こうの部屋でコーヒー片手に研究の続きといこう。

むさくるしい男と工事の音に邪魔されたくはない。

マグカップを片手に僕は遠くの研究室へと早歩きで急ぐ。

「おい、落ち着け新入り！ そんなに興奮してどうした!!」

「離して！ あそこの男に用があるのよ!! トニー！ トニーってば

!! 話が……」

「今回はあのダステイネス家の依頼だぞ!! もし無礼があったら俺たちまとめて首が飛びかねえんだ!! 頼むからおとなしく仕事してくれ!!」

「聞いたか今の！ おい、お前ただでさえ問題児なんだから、今日くらい黙って仕事しろよ!! 後でから揚げと酒をおごってやるから!!」

「カズマまで何よ!! トニーが今抱えてる問題を解決する力ギになるってのは前に話したでしょ!? ああもう！ 行っちゃったじゃない!!」

後ろがひどく騒がしい。

なんだかどこかで聞いたことがあるような声があった気がするが、今はとりあえず研究の続きがしたい。

この世界の資材でも問題なく作れる新スーツを開発するチャンスなんだ、没頭させてほしい。

——それからどれくらいたっただろうか。

飯を食うのも、何かを飲むのも忘れてあのライフルの研究を続けていた僕は、何かを叩く音でふと我に返った。

ここは地下なので外が暗いかどうかで時間の判断ができないが、少なくとも数時間以上は没頭してたようだ。

工事が終わったことを伝えに来たのだろうか。

終わったなら勝手に帰すようフライデーに頼んでおいたはずだったのだが……。

それにしても異様な叩き方だ。

呼び出すというよりは、トイレが近い奴が個室のドアを叩くような、そんな焦りが込められている叩き方。

うるさいな。一体何だというのか。

すっかり冷めきって不味くなったコーヒーを温めなおそうとしたついでに、音がするドアの方へと寄り……。

「トニィー……」

ガラスのドアにへばりついて泣きじゃくっている、とても見覚えのある青髪の女性の……

「……………アクア？」

アクアの姿を見て、思わず手に持っていたマグカップを床に落としました。



「ほら、コーヒーでも飲んでリラックスしろよ」

「……お酒が良い」

「さすがにわきまえろ」

「お前……用意してもらって何言ってるんだよ。あの、バカがすいません、俺は佐藤和真って言います」

コーヒーを用意してきたおじさんに対してふざけた要求を شدしたアクアをしかりつけ、自己紹介をする。

しかし一体、このおじさんは何者なんだろうか。

分かっているのは、アクア曰く『真に選ばれた人間であり、私たちの力になってくれる……かもしれない』ということだけ。

何より凄いのは、この建物だ。

エレベーターで地下に潜ったかと思えば、ファンタジー皆無の現代世界が広がっていた。

いや、現代どころか近未来だ。ホログラムだってあるんだものが分からない。

しかしこのおじさん……実際見てみると……なんだろう、特別強そうには見えない。

DJの格好をしたブルース・リーのTシャツという感性を疑う服を着ているが……顔がイケメンなのでなんとなく似合っている。

イケメンは嫌いだが同年代ではないので、俺のイケメン敵対スイッチは辛うじて入らなかった。

「サトウカズマ……日本人チックな名前だな……ひよつとして転生者か？」

「！……その通り……です。あの、知ってるんですか？ えつと……トニー・スターク……さん？」

「できればMr. スタークと呼んでほしいが……まあ、トニーでいい。空の上の神々が日本人で移民計画をしていることも、それが上手く行かなくて僕に泣きついてきたことも知ってるさ」

どこか小馬鹿にしたような口調で、アクアにニヤツと笑ってコーヒーを啜るトニー。

それを聞いたアクアはムツとした表情で。

「ねえトニー、女神の神聖で絶対的なイメージを破壊するようなこと言うのはやめてよね。従者の私への信仰心が下がったらどうしてくれるのよ」

「従者って俺の事？ お前何言ってるの？ お前への神聖なイメージや信仰心なんてミジンコの目玉ほどもねーよ!!」

「はあー？ あんたねえ、この世の最も美しい一団体である女神様を地上に墮ろしておいて何言ってるのよ!」

「その最も美しい一団体の女神様とやらが今まで何か一つでも役に立ったか？ 毎日土方して、酒飲んで、馬小屋でイビキかいてるだけじゃねーか！ いいか？ 確かにお前を連れてきたのは俺だけどな、俺は生活が困らなくなる強い神器や能力の代わりにお前を連れてきたんだ!! その分の働きをお前はなにか一つでもやったのかよ!! おうコラ、言ってみろよ駄女神があ!!」

「わああああーっ!! そこまで言わなくてもいいでしょ!! なによ！ ヒキニートの癖に!!」

俺に言い負かされて机に突っ伏して泣き喚くアクア。
うっぷんが晴れて少しスッキリとする。

俺が勝ち誇った笑みを浮かべていると、正面から冷たい視線を感じてふと我に返った。

「楽しそうだな」
「あっ……」

「とりあえず、何でアクアがここにいいのか説明してくれ。そして君が何なのかもな」

軽く呆れたような顔をしながら、また一口コーヒーを啜ってテーブルにマグカップを置く。

俺はアクアの機嫌が直るまで、細かい事情の説明を始めた――

「――H A H A H A H A!!! 馬鹿にされてムカついたから女神を特典にして連れてきた？ いやあ、ウケたよ。実にぶっ飛んでるな」

くっ……いざこうやって笑われると、俺はなんてことをやってし

まったのだろうかと軽く自己嫌悪になる。

「……で、この世界に来た最初の日に、アクアにここまで連れてきてもらったんですけど……」

「いくらチャイム押しても出てこないし、私にはアクセス権限がないから中のエレベーターも使えなかったし……おかげでここ二週間くらいずっと土方の仕事をして日銭を稼いでいたのよ!! トニーってばどこ行つてたの? そもそもこの世界に送る前に約束した、このラボを用意したら楽をさせてやるって話はどこ行っちゃったの? 結構待ったんですけど……もうあのお酒も飲んじやったわよ?」

「それについては悪いと思っている。実は紅魔の里でバカンスし……て……? まあ、ちよつと待った。あんた今なんていった? 飲んだのか? あんな風にイイ感じに約束しといて?」

今迄自分がどうしていたか説明しようとしていたトニーが動きを止めた。

アクアはというと、片目をつぶってペロリと舌を出し、頭を片手でコツンと叩いて。

「ごめーんね!」

「……ハア」

さつきから呆れた顔ばかり見せてたトニーが、ここにきて一番の呆れ顔を見せた。

約束のお酒とかよく解らないが、なんとなくアクアに非があるんだなどわかるくらい清々しい呆れ顔だった。

「……まあ、君が大馬鹿だったのはあつた時からわかつてたからな、もういい。僕が天才でなくても予想できた答えの一つだったよ。ところでその……サトー君。君の目的は魔王討伐で元の世界に帰る事だったな?」

すいません、異世界ライフに飽きたら日本に帰って金持ちになつて美女に囲まれながらゲーム三昧なんてのもありかななんて思つてます。

俺がここに来た本来の目的は、ゲームの中のようなファンタジー世界を楽しみながら面白おかしく生きていくこと。

正直いって、まともに魔王討伐なんて視野に入れていない。

討伐できるチャンスがあつたら討伐して、日本で退廃的な生活をしたいなあつて感じた。

「……？ カズマ？ どうしたの？ そんな思い悩んだ顔をして」

アクアは魔王討伐に乗り気。トニーとパーティーを組もうとするだろう。

そして俺は、この駄女神からは地雷臭しか感じてないし、トニーと組んだら楽になるとしても、魔王軍と真っ向からやりあいたくはない。

だつたら……。

「――」

その時、俺の頭で天才的な策が浮かぶ。

——そうだ、アクアにはここで別れてもらい、トニーと一緒に行動してもらおう。

アクアは天界に帰るために魔王を倒さなくてはならない。

他の転生者と魔王を倒しても、きっとアクアは帰してもらえらるだろう。

なんだかんだ言いつつも俺だつてアクアは心配だし、俺が特典として選んでこうなつてしまったことへの負い目もないわけじゃない。

だが、俺の元にもきつと帰れることはないだろう。ならいっそ、選ばれたとかいう強者のトニーのところに預けてしまえば……。

うん。誰の心も痛まない、みんな幸せになれる!!

完璧だ、完璧な策だ。

アクアはステータスだけは最上級クラスらしい。

そこを上手く……。

俺はそんな気持ちを気取られないように慎重に受け答えをする。

「俺のことはカズマで良いですよ。その名字の方は俺の国で一番多いので、そのうちどれがどれだか混乱するかもしれないっすから」

「そうか。それじゃカズマ、君達の話からするに、僕とパーティーを組んで一緒に魔王を倒したいってことでいいんだな？」

「そう……言いたいんですけど……」

俺は申し訳なきそうにしながら。

「何よカズマ。さつきから様子が変よ？ 拾い食いは駄目だってあんなに言っただじやない」

「ちげーよアホ!! お前は上級職のアークプリーストだけど、俺は最弱職の冒険者だから肩身が狭いの!!」

それを聞いたトニーは鼻で笑いながら。

「それを言うなら僕だって冒険者だけどな」

「は!？」

意外過ぎる展開に俺はおろかアクアまで驚きの声をあげた。

「僕にクラスは関係ないんでね。それで？」

突っ込みたい事、気になることがたくさんあるがとりあえず話を続ける。

「あ、えつと……アクアは上級職で俺は最弱職なので、パーティー組むんだとしたら俺は辞退しようかなって思ってた……」

その言葉を聞いたアクアが血相を変えて俺に縋り付いてくる。

「あんた何言ってるのよ!! 私を地上に墮ろしておいて、今ここで捨てるっていうの!？」

「誤解を招くような言い方してんじゃないやねえ!! これがお互いの為だつて話だ!」

「酷いわよそんなの!! カズマがいなくなったら……あれ? カズマさんがいなくなったら、私はどう困るのかしら?」

この女!

ほっぺを引っ張ってやりたい衝動に駆られるが、ぐっとこらえる。さつきからこらえてばかりだ。

もう面倒なのでトニーにアクアの冒険者カードでも見せて納得させようと、アクアから冒険者カードを取り上げようとしていると。

「諸君、コントやるならどこか他所でやってくれないか？ コインが欲しいならやるから……」

「路上パフォーマンズじゃない!!」

呆れを通り越して疲れ気味になってきたトニー。

洋画や海外ドラマで見たような動きで、顔を片手で覆ってため息をつく。

「……今日はもう遅いから帰れ。ああ、それと二人とも」

「は、はい……なんででしょう?」

「もしパーティーを探しているんだったら、明日アクセルのギルドに行って紅い瞳をした魔法使いの娘っ子と、金髪碧眼の女騎士、銀髪の盗賊娘を探してみる、僕のパーティーメンバーだ。と言っても、ちよくちよく臨時で組むだけだが。僕の名前を言ったら力になってくれるはずだ。名前は……あー……、めぐみんとダクネス、そしてクリスだ」

「……めぐみん?」

「名前については気にするな。そういう種族なんだ、名前を馬鹿にするなよ? 噛みつかれるぞ」

確かにパーティーメンバーを探そうとは思っていたけど……良いんだらうか。

トニーのパーティーメンバーだっていうならきつと強いんだらうな。しかも臨時なら気も楽でいい。

話からするにみんな女性かあ……美人だったら嬉し……いや、童貞の元ひきこもりには心臓がきついな。

「カズマさん、鼻の下が伸びてますよー?」

「さ、かえって早く寝ようかアクア。明日から冒険にでるぞ!!」

武器を買って、美人で強いパーティーメンバーでチュートリアルをこなす。

やばい、ゲームっぽくてなんかすごく燃えてきた。

なんで異世界まで来て肉体労働なんてやってるんだらうと思ってたが、ここにきてようやく冒険っぽいことが……。

あれ……? なんか本来の目的がどこかへ行ってしまったているよ

うな……。

まあ、いいか。とにかく明日が楽しみだ。

アクアがものすごく不満げな顔で俺を睨みつけてくる。

「ねえ、カズマ。あとで話をしましょう？ 私の魅力についてたっぷりと教えてあげるから」

「はいはい」

「ほ、本当に私を捨てる気じゃないでしょうね!？」

「……………そんなことないよ」

「!？」

とりあえずアクアとトニーの件は後回しにするとして、俺は心を躍らせながら帰路へと着いた。

▽

ラボにすさまじい怒号が轟く。

「おらああああああ!! トニー!! 何処だこの野郎!! テメーだましやがったな!？」

ヌチャヌチャと粘着質な足音を立てながら、僕がいる部屋までその怒号の主が近づいてきていた。

ドアを開け、僕を視認するや否やその怒りをさらに苛烈にさせて歩きよってくる。

「見つけたぞ……………昨日はよくもやってくれたなあああ!!」

何かの粘液で体をテカらせているカズマが、今にも掴みかからん勢いで怒鳴り散らす。

うるさいしめんどくさい。

ここはこの手でいこう。

僕はカズマの正面に向き合いながら。

「えー……………こちらはトニー・スタークの身代わりアンドロイド。メツセージをどう……………うぐっ」

「ふぎけんのも大概にしろボケ! こちとら死にかけてたんだぞ!!」

「おい、やめろつかみかかるな。その汚らしい粘液が付くだろ」

「誰のせいでこうなったと思ってるんだよ!!」

「どうやらこの小僧は怒りで前が見えなくなっているようだ。」

「まあ、こうなっていることに多少の見当はついているのだが。」

その僕の推測を裏付けるかのように、同じく又チャ又チャになって泣き叫ぶアクア、めぐみんを背負い、頬を上気させたダクネスが続いて入ってきた。

「お久しぶりです……トニー。あの……シャワー室借りてもいいですか?」

ダクネスに背負われためぐみんが、粘液がでろでろと垂れてくる帽子のツバの奥から顔をのぞかせてそう言った。

汚い。

「とりあえず全員まとめてシャワー浴びて来い。おいダミー、床掃除しとけよ。なんのためにお前を海から引つ張り上げて修理してやっただと思ってるんだ」

僕の言葉に反応したダミーがキュイキュイと音を立てながら、モップをアームで挟んでぎこちなく床を磨き始める。

「話は終わってないからな……」

「話をする前にシャワー浴びて落ち着けよ。ほらあっちだ、フライデー、案内してやれ」

『了解、ボス。カズマ様、向かって右側の扉を……』

恨めし気に睨みながら、カズマがシャワー室へと向かっていった。

パーティーメンバーができないめぐみん達に良いチャンスだと思っただが……あまりうまくはいかなかったようだ。

「——お前のパーティーメンバーは一体何なんだよ? まずこの口りっ子、めぐみん。魔法の戦闘民族だっていうから期待してみりゃ、バカげた威力の魔法を一日一発しか撃てないポンコツと来た!! 次にダクネス! こいつも上級職だって聞いてみれば、剣は当たらないしオマケに丸飲みにされたいとか興奮しながら話し出すド変態!! なんのつもりでこんな奴ら紹介したんだよ!!」

清潔感のあるラボの中で、頭を掻きむしりながら右往左往して僕に唾を飛ばして怒鳴るカズマ。

「シャワー程度じゃ落ち着かなかったか。」

「黙って聞いていればなんですか!! 我が必殺魔法のどこがそんなに気に食わないんですか!! ターゲットは全て一撃で倒したでしょう!!!」

「その一撃で周囲のカエルを複数呼び寄せたんじゃねえか!! 地面で寝てたやつまで起こしやがって!!」

「私だって、剣が当たらないなりに敵を引き付けてたのだが……」

「ああ! ひきつけたただけだな!! 関係ないのまで巻き込んで!! おかげで大惨事だよ!!」

「よくもまあこんなに怒りと喉が持つもんだ。」

二人のコントから四人コントが増えて一層にぎやかになったラボで、僕はあくびをしながら寸劇を楽しむ。

「アクアだって真っ先にカエルの胃袋に飛び込むし!! お前らが役に立ったことと言えば、カエルに食われて動きを封じただけじゃねえかよ!!」

「飛び込んだ訳じゃないわよ!! ただ、パンチが効かなかっただけで……あれは女神を倒すために作られた魔王軍の兵器ね」

「ハア……」

「そこまで怒鳴って疲れたのか、カズマはがつくりとうなだれた。」

「クリスってやつはギルドにいなかったけど……この分だどうせソイツも何かがおかしんだろ……?」

「いないところで勝手におかしい奴扱いされるクリス。」

「幸運の女神であるはずの彼女はどうも不幸体質だ。」

「カズマはうなだれた状態で、ぼそぼそとしゃべり始める。」

「なあ、トニー……マジでどうしてこいつらと俺を組ませたんだよ……」

「理由ならちゃんとある。」

「君のアクアに対する様子を見て、人を制御してうまく扱う才能があると思ったからだ。だからあの二人と組ませた。相性いいんじゃないやな」

いかと思つてな」

その言葉に、カズマは顔を上げて、僕の方を見据えながら。

「お前、この惨状を見て相性いいとかマジで言つてんのか……？」

「ああ、マジで言つてる。というか、もうマトモに彼女たちと組める奴がない。よろしく頼む」

「なめてんのか」

睨みつけてくるカズマから視線を外し、めぐみんにウィンクで目配せしてから顎でカズマを指す。

今で僕の意図が伝わればいいのだが。

「……ですがカズマ、指揮は完璧でしたよ。私の魔法がどんな威力なのかキチンと耳を傾け、効果を最大限発揮できるように位置取りを考えていたではないですか」

流星はめぐみんだ。僕の意図を一瞬で察してくれた。

めぐみんのその言葉でダクネスも察したのか。

「ああ、めぐみんがカエルの群れを一網打尽にできたのは私を上手く前衛として扱ってくれたからだろうな。逃げる際も手際よく指揮をしてくれたおかげで、ギルドまで逃げ切れたではないか」

それを聞いたカズマは、ちよつと満更でもなさそうに顔を上げて、ムニムニと口元を動かしている。

流れる的に、自然とアクアの方へとみんなの視線が集まり……。

「……まあ、私の支援魔法あつてこそそのものもがっ」

「おい、上手く行きそうなのはどうして君は余計なことを言うんだ。すこし静かにしてろ」

アクアの口をふさぎカズマの方へ向き直る。

「なんとなく君も察しているかもしれないが、彼女たちはみんな何か一つのことによさまじく尖っている。扱い次第では強烈なパーティーになりうるだろう。それになにより、普通じゃないパーティーで名を上げる方が面白みがあると思わないか？」

「俺は別に面白みなんて……」

「そういうな。せっかく君が手腕を発揮して可能性を見出したんだ。僕も協力してやるから、ひとまず彼女達でパーティーを組んでみるっ

てのはどうだ？ なあ？ 君達もカズマが良いだろう？」

僕がそう聞くと、三人娘はフツと笑って。

「ええ、爆裂魔法で作戦を立ててくれたのはカズマが初めてです。きつとうまくやっていけると思えますよ！」

「初めてパーティーを組んであそこまで正確に指示を飛ばせたのだ、異論はない。カズマはこのパーティーに最も適していると言えるだろう」

「ふふん、安心なさいなカズマ！ この私がいるからにはなんだって上手く行くわよ!!」

次々とサムズアップしてカズマをおだて……褒めたたえる彼女達。

カズマはというと、少し照れくさそうに頭の後ろをポリポリと掻きながら。

「……し、しろうがねえなあ……まあ、色々俺も作戦は多少考えてるし……その、パーティー組むとすつか」

アクアもめぐみんもダクネスも。

その言葉にお互いに笑顔を見合わせて、拳を握った。

これにてめぐみんのパーティー問題も解決。

いきなり地上に墮りた飲み仲間君アクアの生活先の問題もクリア。

僕も新スーツ製造に着手したかったのでこれで丸く収まったといえるだろう。

「それじゃ、ここは僕のおごりで飲みにも行くか？ 新パーティー結成を祝うとしよう」

「賛成——」

アクアが両腕を上を勢いよくあげ、上機嫌にギルドの酒場へと向かうとしたその時。

電話を知らせる電子音が、ラボに響いた。

『もしもし、トニー聞こえる？ ちよつと話があつて……』
……クリスの声だ。

突然の電話に、宴ムードだったみんなが固まる。

「どうかしたのか？」

きつと、電話越しだから僕しかいないと踏んでいたのだろう。

クリスはサラツと、爆弾を投下してきた。

『あのね、今度また貴族の屋敷に潜入しようと思ってるんだけど……』
そこまで言ったところで、僕は端末を取り出して急いで通話を切った。

……遅かったか……。

後ろを振り向くと、気まずそうにしてるものが二名。

そして、とんでもないものを聞いてしまったと目を見開いてるのが二名。

……さて、どう説明しようか。

第21話 理由と鏡

「や、屋敷に侵入……？」

カズマが不安げに、どういう意味だと僕に目を向けてくる。

クリスめ……やってくれたな。

「えっと、なんだか色々大変なようね、私はあつちでお酒でも飲んでるから。フライデー、バーの場所教えてくれない？」

『こちらです』

厄介ごとを察知したのか、逃げるようにしてその場を去るアクア。

あの女……！

「あー……、誰にも言わないって約束してくれ。それと、アクアはついポロつといいそうだから、後でフォローしといてくれ」

「それはいいけどさ……あんたは一体何してるんだ？ 正直俺もアクアに続いて逃げたい気持ちなんだけど」

めぐみんとダクネスの方に目配せすると、二人は静かにうなずいた。

パーティーメンバーなんだ、秘密はできる限り無しにした方が良かったら。

「クリスって盗賊娘は、敬虔な女神の信者でね。お告げを受けてこの世の神器を集めてまわっている。君も知ってるだろ？ 強力な神器や能力を持って何処からともなくやってくる強者、日本人を」

めぐみんとダクネスがいるので、表現の仕方には気を使いながら説明を始める。

カズマもわかってきているようだ、特に聞き返してくることもなく、ただ黙って聞いている。

「その日本人が死ぬと、神器は消えるわけじゃなくて残るんだ。もしそれが悪い連中の手に渡ったら？ 残った神器は使用者以外、効果を最大限発揮できないが、それが危険物であることに変わりはない。そして、こういう物に限って大体悪い奴が手に入れるものなんだ。漫画とかでもそうだろ？ だから、悪い奴が手に入れる前に、もしくはすでに手の中にある神器を、クリスは回収してるんだ。………たとえ

それが貴族の屋敷に侵入するっていう犯罪行為になるとしてもな」
「……………」

カズマは複雑そうな顔をしながら。

「それはすごい事だと思うけどさ……何でそんなクリスが連絡を？
秘密を知っているだけ？ 言つとくけど、俺が許容できるのは見て見ぬふりをするって事だけだ。犯罪の片棒を担ぐなんて絶対ごめんだからな」

「実に正しい一般人の判断だ。僕は……いや、僕らは一度、貴族の屋敷に侵入したクリスを捕まえている。そこで彼女から事情を聞き、その気持ちを汲んで逃がした……それだけだ。彼女が連絡を入れてきた理由は知らない。途中で切ったからな」

まあ、その理由については、もうある程度予測がついているが。

カズマはというと、少し悩むような仕草を見せ、ため息交じりに口を開いた。

「うん……その、大体わかった。トニーのパーティーのクリスって子が義賊みたいなことをやってるんだろ？ それは別にいいよ、関わらなきゃいいんだからな。その子に実際に会ったとしても俺はそのことに一切触れずに接する。というか、この話自体聞かなかったことにする。それじゃ俺、ちよつとアクアの誤解を解いてくるから」

そう言つて、逃げるようにして部屋を出て行った。

カズマが出ていき、自動で閉まったドアを見つめていたためぐみんが、不安げなため息をついて。

「これでやっぱりパーティーから抜けたいって言わなければ良いのですが……あの、トニー、確かにカズマは優秀でしたが、どうしてこのパーティーに編入させようと思ったのですか？」

「トニーがああ二人に私たちを勧めたのだろうか？」

カズマと組むことに不満は無いようだが、その理由を聞いてくるめぐみんとダクネス。

「……カズマは警戒心が高く、臆病の気がある一般人気質だったのは……最初にあって話をした時点でわかってた」

魔王討伐の話をした時、カズマが拒否の反応を見せたのを僕は見逃

さなかつた。

気取られないように努力はしていたようだが。

「アクアとは面識があつてね。彼女の厄介な面は僕も知っている。能天気すぎる事や、調子に乗ってやらかすところとかな。そんなトラブルメーカーな彼女を、カズマは僕に預けようとした」

それと彼を選んだ事にどう関係があるのか。

「だが、それは別に悪い事じゃない。臆病も言い換えれば危険を回避する力でもあるってことだからだ。それに、アクアを完全に捨てようとはしてなかつたからな。僕という預けても大丈夫そうな人間を見つけたから預けようとしただけだろう。紅魔の里にいて忘れかけていたが、この世界は思った以上に過酷だ。トラブルの元を抱えて生きていけるほど甘くはない。普通の人間なら、自分の害になる人間とは縁を切ろうとする。だが、カズマはそうはしなかつた」

臆病で、警戒心が高く、でも非情な選択はできない。

そんな彼に見出した答え。

「彼には面倒見の良さがあつた、かつ臆病な性格から来る生存に特化した動きができる……僕はそう推測したんだ。結果は君たちの評価通り。彼の指揮は悪くなかつたんだろ？」

カズマが出て行つたドアを一度見た後、肩をすくめてヘラつと笑う。

めぐみんは訝し気な視線を僕に向けながら。

「……人を見る目があるようですが……それにしても、ずいぶん肩を持ちますね」

「ああ——」

僕はドアから目線をそらさず。

「——すぐそこにいるからな」

「ッ……」

ドアのすぐ向こうでカタツと小さく音が鳴る。

「自分がどうみられているのか探るために盗み聞きするのは結構だが……もつと足元を確認しとけ、影ができてるぞ。褒められて警戒心が緩んだのか？」

その言葉に観念したかのように壁から身を出し、ドアを通って戻ってくるカズマ。

実に嫌そうな顔をしながら、悪態をついてきた。

「なんとなく察してたけど、嫌味な奴だな。俺が嫌いなタイプだわ」

「おいおい、これでも本音で語ったんだぞ。君には問題児達を束ねる才能がある。影で聞いている君が不機嫌にならないよう、多少盛り上げて話したけどな」

「今なりそうなんだけど」

「えっ……あの、さつき達って言いましたよね。それって……」

「私は含まれていないだろう？　なあトニー、こつちを向いてくれな
いか？」

二人が口々に何かを言ってくるが、カズマとの会話に集中してる僕の耳に入ることは無かった。

カズマはめぐみんとダクネスをちらりと見た後、腕を組み、不機嫌そうに僕を見て。

「……結局どういう意図なんだ？　トニーの考えがよく解らない。逆にこの二人を俺に押し付けたかったって訳じゃないよな？」

「ちよっ！」

誤魔化したってしょうがないか。

「違うと言えば嘘になる。正確に言えば、めぐみんとダクネスを活かすことができる奴が欲しかったんだ。こんなんだが、二人は僕の仲間でもある。……が、僕は僕でやらなきゃいけないこともあるんだ。これでも世界を平和にする為に色々奔走してるし、紅魔の里で教師もやってる」

僕の軽薄な態度が気に食わないのか、カズマの眉間のしわは一向にほぐれないが、構わず話を続ける。

「要するに、ずっと付きつきりで僕も組んでは居られないってことだ。だから、その間二人を導ける奴が必要だったんだよ」

「……まあ、納得した。俺もやるって引き受けちゃったしな……まあ、俺が後悔するかしないかは、今後のトニーのサポート次第ってところかな?」

「そう来なくっちゃ。あー……、君が望んでないパーティーだったかもしれないが、でも……」

「わかったわかった。でもちよつと今後について考えたいから、アクアの方に行ってきたでもいいか?」

「ああ、それならご自由に」

ドアの外を手で指してやり、カズマを送る。

今度はきちんとその背を見送った後、僕はモニターに向き直って電話をかけなおす。

「クリス、聞こえてるか?」

『うん。さつきはどうしたの?』

「後で説明する。それより、さつき伝えたかったことはなんだ?」

『その……実はトニーをお願いしたいことが——』

▽

「トニーっていったいなんなの? どう見ても日本人じゃないし、こんなファンタジーぶち壊しの地下施設なんかに住んでるし。アクアは色々しってるんだろ? 元はどういう人間だったんだよ?」

スパイ映画に出てきそうなバーで、背の高いカウンター・チェアに座りながらアクアに尋ねる。

なんでこんなものまであるんだろうか。

まさかこれが選んだ特典?

あれこれ考えるものの、アクアに聞いた方が手っ取り早いだろう。

……が。

「……アクア?」

尋ねているというのに、そのアクアはというとバーカウンターで忠実な執事みたいに立っていた。

静かに目をつむり、手に布を持っている。

「おい、聞いてんのか！ そんなところで銅像みたいに立ってなにやってんだよお前は!!」

「……私のことは、マスターとお呼びください。ご注文をどうぞ、お客様」

こいつふざけてんのか。

……カクテルなんて詳しくないんですけど。

俺はなんとなくテレビで見て覚えてるカクテルを適当に頼む。

「えー……つと、ダイキリを」

「かしこまりましたわ」

フンスと力強く鼻から息を飛ばし、ウキウキと慣れた手つきで酒やらカクテルシェーカーやらを手に取って、流れるようにカクテルを作る。

シャカシャカと踊るようにシェーカーを振り、カクテルグラスに注ぎ。

最後に、グラスのフチにいつの間にか用意してた、薄くスライスしたライムをそつと添えた。

こいつ無駄に器用だな。

「お待たせしました。ダイキリになります」

テーブルの上に置かれたのは、透き通る透明なカクテル。

酒の味はよくわからないが、ああも綺麗に用意されると美味しそうに見えるし、テンションも上がるってものだ。

俺は少し気取ってそれを口に付け……。

「……水なんだけど」

「あらあら、失礼しましたわお客様」

アクアはそう言っただけでペコリと頭を下げると、テーブルの上のグラスを下げ、再び注文を聞く姿勢に……。

「いや、いいから早くトニーについて教えてくれよ。どういうやつなんだよ」

「えー……もうちょつとマスターごっこやりたいんですけど」

「また今度な」

しょうがないわねえと肩をすくめると、アクアは、水が入っている

先ほど下げたカクテルグラスを取り出して、カウンターテーブルの上にぶちまけた。

「……何やってんの?」

「まあ見てなさいな」

広がる水に指を突っ込み、早送りみたいな速度で水で絵を描いている。

「一体何がしたいん……、ってうおっ! なにこれすげえ!」

俺の視線はテーブルの上にくぎ付けになった。

あつという間に、サングラスをかけて両手を広げたスーツ姿のトニーの絵をテーブルの上で描き上げたからだ。

「むかーしむかし、トニーは武器商人をやっていたの」

「ほーん。……えっ?」

武器商人? 物騒だな。

悪いイメージしかわかないんだが。

アクアは書いた絵を手で拭って消す。

「天才的頭脳であらゆる画期的な発明をし、それはそれはもう、儲けたわ。五本の指に入るほど上位のお金持ちになるくらいね」

再びテーブルの上の水たまりに指を入れ、ちよちよいと新しい絵を描き始めた。

美女をすし詰めにしたスーパーカーに乗ってニヤついてるトニーの絵だ。

うわ、すつげえセレブ顔。まさに絵にかいたようなヤな金持ちだ。

背景にはドル札が舞っている。

なんでこんな細かいとこまで書くんだよ。いや凄いやけどさ。

「そんなトニーを、突如として悲劇が襲うわ」

叩き潰すようにして絵を手のひらでピシャンと潰し、振り降ろした手をゆつくりと上げると……。

その下には、全身スタボロになって銃を突きつけられているトニーが描かれていた。

……?!?!

「ちよつ、お前今のどうやった!?!」

「なによ、話してる途中なんだから静かにしなさいな」

「じゃあいちいち謎の神業を披露するのをやめろと言いたい。」

「……で、なんでこんなことに?」

「テロ組織に武器を横流ししてる、トニーの会社の副社長が、そのテロ組織に暗殺を依頼してたのよ」

「……ドロドロだな」

でも恨みを買いたいというのは分かる。

天才で、大金持ちで、そしてイケメンでモテモテ。俺の嫌いなものの欲張りセットだ。

ちよつと納得していると、まるで紙芝居を切り替えるかのように、アクアは絵を手で拭うように消しては、新たに絵を描き始めた。

「こうしてトニーは、拉致されて武器を作れと脅された拳句洞窟の奥に幽閉されてしまったわ。でも……」

最後に、鉄の仮面のようなものを大型鋏でつかんでいるトニーを描いたかと思うと、タオルでサツとふき取ってしまった。

これで終わりのようだ。

「えつと……つまりどういうこと? 元大金持ちの武器商人で、テロリストに捕まって……? 今の絵は?」

俺の質問に、アクアは真顔のまま答えた。

「洞窟の中でガラクタからパワードスーツを作って脱出したわ」

「……なんて?」

「パワードスーツを作って脱出したわ」

「パワードスーツって……あの? SF映画とかに出てくるような? ウィーンガシャン?」

俺がカウンターチェアに座ったまま、上半身だけでロボットダンスをしてパワードスーツを表現すると、アクアは対抗するようにプロ顔負けの超完成度でロボットダンスをしながら。

「ええその……ウィーンガシャンよ」

「マジか……」

一体どこの映画だよ。

「話はこれで終わりじゃないわ。実はトニーを襲ったテロリストたち

はみんなトニーが作った武器を使っていたの。それを目の当たりにしたトニーは、命辛々会社に戻った後、心を入れ替えて武器の開発と製造から手を引いたわ」

そして。と、アクアは付け加えて、仰々しく手を広げると。

「武器で人を苦しめる悪を倒すため、トニーはパワードスーツを改良し、それを身に纏って戦うヒーロー、アイアンマンになったのでした！」

「……………マ、マジかあ……………」

本当に映画の世界の話だ。

……………ん？　　というか、そんな凄いことがあったなら、俺だって知っているはずでは？

俺が不思議に感じていると、アクアがサラッと。

「その後もヒーローを続けていたんだけど、ある日とある巨悪との戦いで命を落としちゃってね。でも、あらゆる異世界の亡くなった英雄たちを、助けを必要とする別の異世界に送るという私たち神々の計画の元、トニーは蘇ってこの世界に来たってワケ」

「ツツコミどころが多すぎる」

じゃあなにか？　トニーは、俺が住んでいる世界とはまた別の世界から送られてきた、元ヒーロー？

「頭が痛くなってきた……………ある意味一番の問題児じゃねえか……………」

「そりやどうも。サインが欲しいならいつでも」

「うおおああああ!!」

横からヌツと現れたトニーに腰を抜かし、思わず椅子から落ちそうになる。

トニーはそんな事気にも留めず、アクアにヘラッと笑いかけて。

「そのこのバーテン、スコッチを頼む。喉がカラカラだ。めぐみん達とお話しててね」

「かしこま……………あっ」

トニーの注文を受けたアクアが、棚から酒瓶を取り出すが、その瓶はどう見ても空で。

「……………おい、それ飲んだのか？　秘蔵の一本だぞ。年に数本しか出回

らないレベルの……。なんなら異世界に来たんだから、一本しかない貴重な……」

「どーりでおいしくて止まらなかつたワケね……」

みるみる顔を青ざめさせていくアクアを、嘘だろといった顔でポカロンと見つめるトニー。

ここだけ見たらそんな大層な人間には見えないのだが……。

俺はこの際だし、はつきりとトニーと話すことにした。

「トニー、アクアから聞いたよ。その、元の世界じゃ凄いヒーローだったんだってな」

「時々ね。普段は問題児さ」

この野郎。さつき俺が盗み聞きしてた時は嫌味を言ってきたクセに。

今度は自分が盗み聞きした挙句皮肉まで言うのか。

「……聞くまでもないと思うけど、お前友達いないだろ」

「やるなあ、ご名答」

「そこは悔しがるなりしないと駄目だと思うぞ、人として」

嫌味返しにも鼻で笑ってケロツとしてるトニー。

「お客様。こちら、私からのサービスです」

まだマスターごっこを楽しんでいるのか、アクアがさりげなく酒が入ったグラスをテーブルの上に滑らせ、それをトニーがキャッチして一口飲み。

「……で？ さつき言ってた今後についての考えはまとまったか？」

そうだ、途中で話の腰を折られたから聞けずじまいだったな。

「トニー、はつきり言うけど……」

「わかってるさ。君に魔王倒すの手伝えなんて言うつもりはない。ただ、彼女達のパーティーリーダーを務めてほしいだけだ。困ったことがあつたら手伝ってやる。さつき話したのはそういう約束だ」

アクアがボソツと『天界に帰れないと困るんですけど』と言っていたが、聞かないふりをすることにした。

「……ああ、それならいいんだ。いいんだけど……一つだけ聞いていいか？」

俺は興味本位からの質問をする。

「トニーはなんでヒーローを？俺の世界には、ヒーローなんていなかったんだよ。単純に興味がある」

「……………」

さつきまでの飄々とした雰囲気はどこへやら。

トニーは手に持ってたお酒を一気に飲み干して、静かに語り始めた。

「…………捕らえられた洞窟の中で一人、友人が出来た。でも、生きて出たのは僕だけ…………。僕の命の恩人で、僕なんかよりよっぽど気高い人間だった。『その命を無駄にするな』と最期に遺して…………僕の前で息絶えた」

あ、あれ？

「そんな彼の最期の姿で、言葉で…………僕は何をすべきかを理解したんだ。それが間違っていると思ったことは一度もない」

なにこれヤバイ。思った以上にガチだこれ。

てつきり、『HA！イカしてるだろ？』みたいに軽めに来ると思ってたのに！

「努力はしているつもりだ。朝になって、洗面台の鏡に映る自分の顔を、真正面から見つめられるようにね。最近ポカしたが」

トニーはそこまで言うのと、また含み笑いを浮かべて。

「以上、スーパーヒーロー、トニー・スタークの華麗なる人生。アクア、この水美味かったよ、また作ってくれ。じゃあな」

空になったグラスをアクアに返し、どこか別の部屋へと消えていった。

「お前、勝手に他人の飲み物浄化するのはもうやめろよ…………」

「しよ、しようがないでしょ!? そういう体質なんだし…………」

「ハア…………」

深いため息を一つ吐き、トニーが去っていった方を少し眺める。

俺が嫌いな要素をこれでもかと詰め込んだトニーだが…………どれだけ嫌な奴でも、事情や悩みを知れば多少見る目が変わるってもんだ。

「ヒーローかあ…………」

幼いころに誰もが憧れ、現実には存在しないと大人になったら誰もが知る。

それがヒーロー。俺だってそうだった。

俺ぐらいの歳でヒーローになりたいなんて奴がいたら、指を差されて笑われるのがオチだ。

だからこそ、トニーという例外に……どうも複雑な感情を抱いていた。

「どうしたのかズマ。真面目な顔は似合わないわよ？　おいしいカクテル作ったげよっか？」

「どうせ水になるだろ。いらない」

……そういや、さっきの屋敷に侵入するって話の誤解を解かなきゃならないんだっとな。

いや……どうせアクアの事だ、頭からもう抜けてるだろう。

俺は下手に誤解を解こうと危険なワードに触れ続けるよりも、こいつの頭の出来を信じてあえて放っておくことにした。

と、その時。

チャイムの音が建物に響いた。



「紹介しよう、さっき話していた盗賊娘のクリスだ」

ラウンジに全員集まったかと思うと、トニーが初めて見る顔を連れて紹介してきた。

トニーの横には、サバサバしてそうな明るい雰囲気、銀髪の美少女が居た。

盗賊娘と言ってたあたり、身軽そうな装備をしている。

「はい、あたしはクリス。盗賊職してるよ。レギュラーメンバーじゃないけど、臨時でちよくちよくパーティーに入るから、これからもよろしくね！」

そう言って、ニコツと笑いながら手を振ってくるクリス。

「俺の名はカズマって言います。どうぞよろしくおねがいしやつす」

「私はアクア！　女神アクアよ!!　困ったことがあったら言うてちよ
うだいな!!」

「は、はい……」

俺には軽く挨拶してきたものの、なぜかアクアには緊張気味だ。

……いや、普通女神なんていきなり名乗ったら引くわな。

俺はアクアを肘でついて。

「いきなりごめん、こいつはちよつと……女神を自称しているかわい
そうな子なんだ。そつとしておいてあげて下さい」

「なによ！　本当の事なんだから」

「い、いいのいいの！　気にしないから!!　それより、カズマくんだよ
ね？　あたしには敬語使わなくていいよ」

かなりフレンドリーな子だ。

この子が本当に義賊なんてやっているのだろうか。

なんて、訝しんでいると、めぐみんが俺の袖をクイクイと引っ張っ
てきた。

「カズマカズマ、確かカズマは初期職業の冒険者でしたよね。この際
ですし、スキルを教わるというのはどうです？」

「つていわれても。どうやるんだ？」

「誰かがスキルを使っているところ見て、使用方法を教えてくださいの
だ。すると、カードに習得可能なスキルの項目が現れるから、そこに
ポイントを振って習得できる。ちなみにオススメは……」

ダクネスが言い切る前に、めぐみんが身を乗り出して。

「もつつつちろん!!　我が爆裂魔法です!!」

「ああつ！　せつかく私のデコイや《物理耐性》を教えようと思ったの
に！」

「言つとくけど、教えてもいいのは宴会芸スキルだけで、回復はこの私
がいるんだから教えないからね!!」

「僕は何も持っていない」

「お前らふざけてんのか!?　教えるんじゃないのかよ!!　欲しいもの
が何一つねーよ！」

……駄目だこいつら。

トニーに至ってはどういうことだよ。

そんな様子を見て、クリスは笑いながら。

「あつはつは！ 面白いパーティになったね!!」

「ほんとにそんな事言えるか!?!」

「まあまあ落ち着いて。それなら、盗賊スキルはどうかかな?」

「盗賊スキル? どんなのがあるんだ?」

よくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに、クリスは口角を上げると。

「百聞は一見に如かずだよ! トニー! トレーニングルーム借りていい? ほら、ダクネスの鎧作った時の」

「お好きにどうぞ」

「よつし決まり! それじゃついてきて!」

▽

「『ステイール』ッ!」

「あつ! 俺のサイフ!」

だだっ広い無機質な部屋に連れてこられたかと思うと、すぐさまクリスのスキルレッズンが始まった。

SF映画でしか見たこともないようなホログラム装置? で廃墟ができたかと思うと、クリスがそこに隠れて《敵感知》と《潜伏》を披露してみせ、

「ふふん、これが《窃盗》スキル、ステイールだよ」

《窃盗》スキルなんてもので俺の財布が巻き上げられていた。

クリスは手に持った俺の薄い財布を手の上でもて遊びながら。

「これ、あたしの一押しね。相手から握ってる武器だろうがカバンの奥のサイフだろうが、なんでも一つ奪い取る。スキルの成功確率は幸運値依存で、これさえあれば敵から武器を奪って無力化したり、宝だけ奪って逃げたり、使い勝手のいいスキルなんだ。それじゃ、サイフを返すから、今度は……」

クリスは、手に持つてる財布を少し眺めると、にんまりとした笑み

を浮かべた。

「……ねえ、あたしと勝負しない？ 早速スキルを覚えてあたしに掛けてみなよ。なに取られても怒らないからさ。この軽くて薄いサイフを見るに、あたしの持っているものの方がどれも価値があると思うよ！」

いきなり勝負をしかけてくるとは、どこのポケモントレーナーだ。しかし、俺は幸運値が高いし、もしかすると何か価値あるものがあるかもしれない。

それに、こういうのはいかにも冒険者同士のやり取りみたいで憧れる！

「よーし、乗ったあー！」

「そうこなくっちゃー！」

早速冒険者カードを取り出し、スキルを覚えようと操作する。

《窃盗》はもちろん、《潜伏》と《敵感知》も覚えようとしていると。

「さて、君達は誰に賭ける？ カズマがクリスから捕られたサイフより高価なものを引き当てたらカズマの勝ち。それ以外はクリスの勝ちで」

トニーが、楽しそうに他の連中と賭けを始める。

悪くない、こうやって突如始まった勝負に、やじ馬が賭けを始める。

異世界ファンタジーらしくて良い、盛り上がってきた！

「難しいな……本職とは差があるから、普通に考えればクリスの勝ちだ。だが、カズマのサイフは薄くて価値が低い分、より高価なものを取れる確率が高いだろう」

「私はクリスに賭けます。やはりここは本職の力を見るべきでしょう。それに、ポケットに小石を詰めてるみたいですし」

……えっ。

「おっと、バレちゃったか。その通り、こうしてポケットに石ころを詰めとくだけで対策になるんだ。勉強になったね？」

「き、きったねえー！」

してやったりといった顔で笑うクリス。

この弱肉強食の異世界、これがきつと普通なのだろう。

だが、まだ勝負は決まってる。

「ふうむ……私もクリスに賭ける。カズマ、これも授業料と思え」

「それじゃ、僕も。幸運の女神がほほ笑むと信じようか」

そして、まだ誰に賭けるか言っていない、最後の一人のアクアに注目が集まる。

「そうねえ……私もクリスに賭けたいところだけど、実はお金がピンチだし、ここは大穴狙ってカズマに全部賭けたげるわ!! カズマ、負けたらから揚げおごりなさいよ!」

「こつちはサイフ盗られてんだよ! ふざけんな!!」
なんて嬉しくない賭けられ方なんだ。

これで負けたら逆にあいつの今日の晩のおかずを奪ってやろう。

俺は冒険者カードの操作を終えて、クリスと向き直る。

「ふふ、いい顔になったね。それじゃ、いつてみよう!」

やってやる、俺は昔から運だけはいいんだ!!

「いくぞ! 『ステイール』 ツツ!!」

叫ぶと同時に、手に何かしつかりと握った感触があった。

ひとまずは成功だ。

……つて。

「なんだこれ……」

手に握ってたのは一枚の布切れ。

それは……。

「Y E A H H H H

H !!! 大当たりじゃあああああ!!!」

「いやあああああああああ!!! ぱんつかえしてええええええ!!!」

その後、返してほしければ俺が満足する値段で買って見せろとクリスに商談を持ち掛け、彼女と俺のサイフを受け取って。

賭けに大勝ちしたアクアがギルドで豪遊した。

第22話 楽しいピクニック

「……なんで空飛ぶキャベツがこんなにおいしいんだ……?」

「懐かしいね、僕も前はおんなじことを考えてたよ。美味しさ余って机を吹き飛ばしたけどな」

ギルドの酒場で、炒めたキャベツを食べながらトニーとそんなやり取りをする。

俺は……というか、俺たちは緊急クエストでギルドに召集されたかと思えば、キャベツ狩りに駆り出されていた。

そう、キャベツ狩りである。

アクア曰く、この世界のキャベツは食われまいと飛ぶそうだ。

納得いかねえ。

だが、味が濃縮したというキャベツはそれはそれは美味しかった。

ホントに納得いかねえ。

「かふまかふま！ ふおれおいひいわふお！」

「飲み込んでからしゃべれよ」

リス見たいな顔したアクアが差し出してきたのは、ドレッシングがかかった生のキャベツサラダ。

今迄見てきたどんな生野菜よりもみずみずしい表面をしている。

アクアの口からシャキシャキと小気味いい音が聞こえて来るあたり、歯ごたえもかなりよさそうだ。

空飛ぶキャベツなんてクソくらえと思いつつも、つい手を伸ばしてしまう。

ちきしよう、体はいつだって正直だ。

「……?」

なんて、キャベツにフォークを突き刺そうとした時。

まるで落ち葉が落ちる様を逆再生したかのような動きで、キャベツがゆっくりと浮かび上がり……、

俺の頬めがけ、勢いよく身を捻って――

「うおおおおお！」

「気を付けるジャージボーイ。僕もビンタされたことがある、強烈だぞ」

——それを食らう直前で、横からトニーがフォークを俺の頬とキャベツの間に突き出して防いだ。

トニーはキャベツと幾度かの攻防を繰り返して、フォークで串刺しにして成し遂げた顔で頬張る。

「……なんかもう、食欲なくなってきた。お前は何とも思わないの?」「おかしいと思ってるから目下研究中だ。今のところ魔力と呼ばれる万能エネルギーが関与している事以外は不明。……味は気に入ってるが」

「……そういや天才科学者だったか。」

トニーより上手にキャベツを仕留めて食べていたためぐみんが、先ほどのトニーの様子を見て。

「だいぶキャベツを仕留めるのが上手くなってきましたね。ですが、まだまだ無駄な動きが多いうえに、攻撃への対処が遅いですよ」

「そりやどうも。仕留めたものを出してくれるのが一番なんだが」

「何でも新鮮な方がおいしいに決まってるじゃない。トニーは活き造りを知らないの?」

「その言葉は知っているが、野菜に適用されるとは僕でも知らなかったよー!」

この世界で半年以上過ごしてきたという、異世界転生の先輩トニーも、野菜の活け造りという謎ワードには流石に突っ込んだ。

俺はそんな様子を見ながら、生野菜を食うのをあきらめて炒めて食べる方を食べる。

「俺はキャベツと戦うために異世界に来たわけじゃねえぞ……」

たべながら、さつきキャベツと戦ったことを振り返り、はたと思いつく。

パーティー総出でキャベツを追っかけまわしてた時、トニーの姿が見当たらなかったことについてだ。

「……そういやトニー、お前緊急クエストの時どこ行ってたんだ? トニーの実力がどんなもんかとか色々気になってたんだけど」

俺はトニーの戦う姿を知らない。

知っているのは、パワードスーツを身に纏って戦うということだけだ。

どういった系統のパワードスーツなのかも想像がつかない。

これでもバトルロボットの名産国である日本に生まれた男の一人。

期待してないと言ったら嘘になる。

「教師をやってるって言っただろ？ それで紅魔の里にね。僕のリョークで和ませながらの楽しい授業さ」

「生徒たちの未来が不安になるわ。それはいいとして明日クエストに行かないか？ 顔見せはしたけど、結局クエストはまだ一緒に行っていないんだし。手伝ってくれるんだろ？」

クリスとの勝負で得たお金もあることだし、防具もそろえてジャージ姿を卒業できるとなると、クエストにも行ってみたいくなるもんだ。それと、やっぱパワードスーツが気になる。

「ああ、もちろん。君の指揮能力を見てみようと思ってたところだ。あ、ついでに言うと、僕の生徒は優秀だぞ。めぐみんがいい例だ」

「問題児製造機じゃねーか」

▽

翌日の、冒険者ギルドにて。

「……おお、様になっているな」

「冒険者らしくなりましたね」

テーブルで朝食を食べてたダクネスとめぐみんが、金属製の脛あてや籠手、革の胸当てを装備した俺の姿を見て、感想を述べる。

「いつまでもジャージじゃアクアがうるさいからな。それよりも、これを見てくれ」

俺は掲示板から剥がしたクエストの依頼書をテーブルの上に置く。「ゴブリン退治？」

オムレツを口に掻き込んでいたアクアがそれを牛乳で喉へと流し込み、依頼書を見て聞いてくる。

「ああ、初心者用のクエストだって聞いたし、群れで行動してるならめぐみんの爆裂魔法も使えるだろ」

「ほほう、早速我が爆裂魔法の活躍の場を作ろうとするとは、殊勝な心がけですね。いいでしょう、ゴブリン程度、巢ごと灰燼にしてくれますよ。これでもレベル30です、なんなら杖で撲殺することもできますよ」

「……レベル30？ ちょっと待った、お前なんでそんな高いの？
ここって駆け出しの街だよな？」

めぐみんは自分の冒険者カードを俺に見せびらかすように取り出して。

「ふふん、実は故郷である紅魔の里にいた頃から、ちよくちよくトニーと爆裂魔法を撃ちに行ってたのですよ。それも、高レベルの魔王軍兵士がいる基地を重点的に。そしてさらに、上がったレベルのスキルポイントは全て爆裂魔法の《威力上昇》や《高速詠唱》に突っ込んでるので、火力面に心配はいりませんよ？」

「要するに、馬鹿げた威力の魔法を一発撃つてぶっ倒れることに変わりはないって事か」

「……!？」

俺の一言にショックを受けたらしいめぐみんがうなだれて、オレンジジュースをチビチビと飲み始めた。

「で、トニーはどこに行ったんだよ。寝坊したのか？」

「そういえばそうね。私、この時間に焼き立てを出すパン屋さんに行きたかったのに我慢してきたんですけど」

アクアと二人で、遅れたトニーに対して愚痴っていると、うなだれていためぐみんの眼帯が突然光り出した。

「お、おい！ めぐみん！ 眼帯が光ってるぞー！」

「ぬおおお!?! こ、これは一体……まさか、私の秘めたる力の覚醒……」

持ち主であるめぐみんも驚いた様子で謎の茶番を始める。

「あつ！ ねえ見て！ 光の先に何か映ってるわよ？」

アクアが指をさしたのは、眼帯から数十センチ離れた空間。

照射された光は、空中にスクリーンみたいに映像を映し出す。

『やあ、みんなおはよう』

見覚えのある顔……トニー・スタークの顔が、スマホ大の枠の中に投影された。

「……お前なにしてんの？」

『新しく手に入れたオモチャを研究してたら遅くなつてね。今からデータをまとめるから、クエストは先に行つてくれないか？ 後で追いつく』

「追いつくつて……」

「わかりましたトニー。では、先に行つて待つてますよ。あんまり遅かったら私の爆裂魔法で終わらせてきますからね」

『僕が早くいかないとまたアクセルの自然が破壊されるつて事か。できる限り急ぐよ』

その言葉を最後に、フツと映像が途切れた。

「さっ、それじゃ行くとしましょうか」

「だな」

映像を見終わつたためぐみんとダクネスが立ち上がり、ギルドの出口へと向かう。

アクアも特に何も言うこともなく、二人についていく。

俺はその背中を追いながら。

「いや、ちょっと待った。追いつくつてどうするんだよ。こつから目的地までそれなりに距離もあるし、どこで待つかも話してないし」

三人は俺の言葉に不思議そうな顔をしながら振り返り……。

「……ああそつか。カズマに説明したのつて、トニーの成り行きだけだったわね」

「カズマ、トニーの鎧は……」

「待つてください。ここで見るより、実際に見た方が面白いでしょう。トニーもきつとそつちの方が喜ぶと思います」

それを聞いたダクネスは、やれやれといった笑みを浮かべて鼻で笑うと。

「……そうだな、あの目立ちたがり屋の事だ、そつちのほうが良いだろ

う」

「トニーらしいわね……いい？ カズマ。とりあえず、トニーは絶対追いつくわ。だから特に心配する必要はないわよ」

アクアまで、そんなことを言ってくる。

「わ、わかったよ……その、めぐみんとダクネスの笑顔がちよつと気持ち悪いんだけど」

とりあえずトニーのことについて考えるのはやめて、クエストの目的地である森まで足を進めた。

▽

今回の依頼はゴブリンの討伐。

なんでも、この森の中を拠点として、近辺の村々の家畜やら人やらを襲っているらしい。

討伐すれば一匹二万エリス。どれくらい強いのかは知らないが、初心者向けモンスターと言われる辺り、きつと弱くておいしいモンスターなのだろう。

そんな、今回の標的に対してどう戦うべきか、仲間をどう使うべきか、山道の入り口辺りで考えながら。

「よし、ここで待つとするか。で、どうやってトニーに現在地を知らせるんだよ？」

俺が聞くと、なにやら目をつぶってブツブツつぶやいていためぐみんが目を開けて。

「トニーと連絡が取れました。こちらの座標も確認済みで、もうこっちに向かってきているみたいです。もうじききますよ」

てつきりいつもの中二病かと思って無視してたのだが、そんなことをしてたとは……。

……というか。

「連絡って、一体どうやってんだよ。そういう魔法か？」

「交信の魔法は確かにありますが、今使用したのは衛星通信です」

「ブーッ!!」

その言葉に、お茶を飲んでいたアクアが盛大に吹き出した。俺も何か口に入れてたらヤバかったかもしれない。

「はあー!? ちょっと待ちなさいよ! あの男まさか人工衛星打ち上げたの!」

「ええ。そうですよ。衛星が何か知っているのですね」

アクアがめぐみんを揺さぶりながらあれやこれや聞く横で、俺は天を仰ぎながら。

「ファンタジーのファの字もない……」

俺の異世界ライフを次から次へと別の意味でぶち壊してくる仲間に軽くめまいを覚えていた。

まさかワクワクしてやって来た中世風ファンタジー世界の空で、人工衛星が飛んでるなんて誰が思うだろうか。

「……ん?」

空を仰いでいると、青空の中に何か飛んでいるのが偶然視界に入った。

……なんだあれ。鳥か? 飛行機か?

人工衛星が飛んでるんだ、飛行機が飛んでたっておかしくないかもしれない。

冗談めかして考えていると、飛んでいた影はまっすぐとこちらに向けて降りてきていて。

……えっ。

「お、おい! みんな構えろ! なんかにこっちに来てるぞ!!」

俺の声に気が付いた三人が同じく空を見るが、まるで焦った様子なんて見せない。

「ああ、来たな。あれがトニーだ」

「……うそだろ?」

影はあつという間に俺達のすぐ頭上まで近づいたかと思うと、地上数メートル当たりで停止……いや、ホバリングしてその姿を見せた。

身長は190センチ程、マッシブな人型のパワードスーツ。

一言でいうなら、パワフルさと美しさの融合。無駄なく洗練されたロマンだ。

赤を主体とした金属のボディに金色のアクセントが映え、新車のスーパーカーを思わせるような流線型のフォルムが光沢と陽の光によってまばゆく彩られていた。

「……カ、カツケエな……」

「だろ？ 聞き飽きた誉め言葉だが、何度聞いてもいいもんだ。君もジャージはやめてちゃんとした装備に身を包んだようだな、似合ってるじゃないか」

全身にロマンを纏ったトニーがそう言って、足の裏やら背中から噴き出すジェットを切ってそのまま地面に着地した。

そして、まるでジャケットでも脱ぐかのようにしてパワードスーツをガシヤガシヤと展開させ、正面から歩き出てくる。

「!？」

へ、変形までするのかよ。

パワードスーツとは聞いていたが、正直ここまで凄いとは思わなかった。

素直にカツコイイ。

「すげえ……」

「いいねその顔。君にもそんな少年らしい顔ができたのか」

中身が出るや否や皮肉を垂れるようなのが実に残念だ。

皮肉には皮肉で返してやろう。

「……スーツから出ないほうがよかったのに」

「そうしなきゃ素敵な変形シーンが見られなかったんだぞ？ それに、ちゃんと僕自身のファンもいるんだけどな。なあ、そんな事より誰かなんか食べ物持ってないか？ 実は朝から何も食べてなくてね。腹ペコなんだ」

俺達の顔をぐるりと見渡して、早口でまくしたてるトニー。

日本人からすればこの洋画チックなノリは少々ノリにくいのだが。

「どうせ演出の為にその鎧を磨いてたとか、そんなオチでしょう？」

ほら、ツナサンドが三切れありますよ。キツチリ仕留めたキュウリ入りです。アクアから守るのが大変だったのですよ」

「Wow、気が利くな。ちなみにいうとワックスもかけてた。……冗

談だよ。例の物干しぎおで遊んでただけさ。あとで手伝ってくれ
「構いませんよ」

それを聞いたトニーは少しうれしそうに眉と口角を上げると、ツナ
サンドを頬張り、あつという間に平らげる。

そして満足そうに指をなめながら、俺に向き直り。

「さて、今日はなんの依頼だ？ 所詮駆け出しの街の依頼だ、大船に
乗ったつもりでいるパンツボーイ」

「プッ！」

腕を組んでドヤ顔を浮かべながらパスワードスーツに背中を預けて
ふんぞり返るトニーと、俺のあだ名に吹き出すアクア。

な、殴りてえ……顔面を殴りてえ……。

俺がこめかみをヒクつかせていると、ダクネスが少し頬を赤らめ
て。

「お前は相変わらずだな……そういう煽りは私にしてくれないか？」

「そう怒るなカズマ、悪かった。ちよつとからかいたくなっただけだ
よ」

「俺は潜伏スキルに窃盗スキルがあるんだからな……いつか覚えてろ
よ……。つたく……今日はゴブリン退治だよ」

「無視だと……？」

不機嫌そうに吐いたクエスト内容を聞いたトニーはパスワードスー
ツに寄りかかるのをやめ。

「了解だ。作戦は決まってるか？ 無いなら僕が指示を出すが」

薄ら笑いを浮かべるのもやめ、パスワードスーツをスタイリッシュに
変形させて中へと乗り込む。

ぐっ……無駄にカツコいいのがまたムカつく……。

「ちやんとあるよ。まず俺が潜伏と敵感知で先導して敵を見つける。
標的が固まったらたらずぐさまめぐみんの爆裂魔法で一網打尽。もし
散らばったら俺が近づいて背後から一匹ずつ倒す。失敗したらダ
クネスに引き付けてもらいながら俺とトニーで倒す。以上だ」
「悪くない手だ。それで行くでしょう」

トニーが『先導してくれ』と首をクイツと曲げて森の入口を指す。

「トニー以外は……いや、やっぱりトニーも聞いてくれ。………勝手な真似はするなよ?」

俺が真面目な顔してそう言うと、顔の见えないトニー以外、任せろと言わんばかりの自信満々の笑みで首を縦に振った。

本当に大丈夫かよ。

▽

森を歩いてしばらく。

俺があるものに気づき、ハンドサインで全員にストップをかけた。

「どうした?」

不思議そうに聞くダクネスに、俺は口の前に人差し指を立てて静かにするよう促す。

そしてしゃがみ込んで、地面に残された大型の足跡を注意深く観察しながら。

「見てみろ、このデカイ足跡。これってなんの足跡か分かるか? どうみてもゴブリンじゃないよな」

「これは……」

トニーも俺の隣にしゃがみこみ、その足跡を見つめる。

地面にあつたのは、人間の手のひらよりも大きな、肉球型の深い足跡。

「……肉食獣の足跡ですね。それも、かなりの大きさです」

「形状からしてネコ科だな。それも、かなり新しい」

めぐみんとトニーの分析を聞いたダクネスが血相を変えて。

「ま、待て! アクセル近辺のネコ科の大型肉食獣といえば、初心者殺しではないか! しかも近くにいるだど!」

「えつと……初心者殺しってなに?」

俺がそう聞くと、トニー以外が何故知らないんだと言わんばかりの目を向けてきた。いや、顔隠れてるだけだからわかんけど。

その途中でアクアがハツとして。

「ああ、カズマはこの世界の常識を知らないアンポンタンだったのを

忘れていたわ。いい？ 初心者殺しつてのはね、ゴブリンとかコボルトみたいなザコモンスターの周囲をウロついて、それを狙ってきた駆け出し冒険者を狩るの。ゴブリンは外敵から守られてお得、初心者殺しは待つだけで獲物が来てお得。いわゆる相りき……えっと……そう、ギブアンドテイクの関係なのよー」

「なるほど、アクアより賢そうな獣だな。ちなみにそういうのは相利共生って言うんだぞ」

「……ちなみにカズマはヒキニートだから寄生に分類されるわよね」

「……いまだに何の役にも立ってないうえに、酒場でツケまで作ってくるお前も似たようなもんだろ」

頬のつねり合いを始めた俺とアクアを見て、トニーが盛大にため息を漏らす。

「コントやるなら帰ってからにしてくれ。初心者殺しが近くにいるつてのに何馬鹿なことやってるんだ！」

「ハッ！ そ、そうだ！ こんなアホに構ってる場合じゃない！」

「カズマ、敵感知の反応はどうなんですか？」

「今のところ近くにはなんの反応もない」

「僕のリーダーにも反応無しだ」

めぐみんも索敵してるのか、眼帯に何度か命令をして周辺の地形等を調べている。

トニーが作った人工智能が搭載されているとか言ってたが、はたから見たら危ない奴にしか見えない。

それと、今ものすごい変な名前で人工智能を呼んだと思うのだが、聞き間違いであってほしい。

「……それでは、どうするのだ？ 一応このまま戻り、初心者殺しが居たことを報告すればいくばくかの報酬がもらえらと思うが……」

「んなもん、撤退して報告するに決まってるだろ」

そんな危なっかしいモンスターとなんて戦いたくない。

むしろ、報告するだけでいいならそれに越したことは無い。

Uターンして来た道に戻ろうとすると、トニーが肩を、めぐみんが服の袖をつかんできて。

「……なんだよ」

「待てカズマ。本気で撤退する気か？　僕を見る。そしてめぐみんを見る。どう思う？」

「二人でも事足りる皮肉屋の中年チートが一名とロリっ子マッドボマーが一名」

「……まあ、あながち間違っていないな。だが、そうじゃない。ここに、その初心者殺しを簡単に消し去れる存在が二人いるってことだ」
そしてめぐみんが言葉を付け足す。

「それに、初心者殺しと遭遇し、それを倒したとなれば、報奨金が出ます。ゴブリンの依頼金も合わせるとそれなりの儲けになりますよ？　その防具を買って貯金もほぼないでしょう？　冒険者らしくドカんと稼ごうではありませんか」

「……めぐみんはともかく、トニーもいるなら安全か……？」

俺は顎に指を置いて頭の中で色々考える。

実力をまだ見てないが、異世界ファンタジーにおける禁じ手中の禁じ手、科学無双をしているトニーは強いと見ていいだろう。

そんな考え込む俺の様子を見たダクネスとアクアが。

「ねえ、さらっと私を無視してくれてるけど、どういうことなのかしら？　初心者殺しなんて私にかかればちよつとデカいだけの猫同然よ！」

「私だって戦力外通告されるいわれはないぞ！　初心者殺しの攻撃程度、完全に防ぎきって見せる！　ああ、でももし力負けして押し倒されたりしてしまつたらその時は……捨ててくれてもかま」

「少し黙っててくれないか？　アクアは戦力になるのかも分からない。そしてダクネス、今の僕は君より火力はもちろん、防御力も上だ。というわけでおとなしくしてろ」

不満を持ったダクネスとアクアがトニーの胸を殴りつけるが、逆に拳を痛めてその場にうずくまり始めた。

ダクネスはなんか喜悦の声を上げているが、もう何も聞こえなかったことにしよう。

……性格はアレかもしれないが、頼りにはなりそうだし……。

なにより、あと一週間分くらいの食費しか残ってないのも事実だ。
「……はあ、しょうがねえなあ……その初心者殺しつてやつと戦うかあ……。それで、トニーって何ができるんだ？ 戦闘スタイルとか」

最後まで言い切る前に、トニーは近くに生えていた木を掌から照射した光線で何本か吹き飛ばし、手頃な腰位の高さの岩をパンチで粉みじんに爆散させる。

その間実に二秒。

倒れた木々の断面はまるで空間ごと消し去られたかのように滑らかで、岩に至っては殴られた箇所が欠けるとか陥没とかではなく反対側まで碎け散っていた。

俺は口をポカンとあけて呆然とする。トニーから見たらさぞやマヌケな顔に映ってる事だろう。

トニーはマスクを開け、いたずらっぽく笑いながら。

「ぎつとこんな感じだ。他にも多少装備があるが、全部見せると周囲一帯は焦土になるし、討伐対象がおびえて逃げるだろうからやらない」

冗談だろ。

「マジでチートだな……これ特典じゃないんだよな……？」

「僕が元居た場所から持ってきたから違うと言えば嘘になるな。で、仕留めるのに良い作戦はあるか？」

「お前が突っ込んで首を一捻りするでいいんじゃないかな」

俺が投げやりになって言うと、トニーは諭すように。

「適当なことは言うな。足跡をスキャンした結果、初心者殺しは山を下る途中で引き返したことが分かった。つまり、僕らが来た途端にこいつは引き返したってことだ。なんで分かるか？」

そんなの……。

「……俺達を警戒してる……もしくは待ち伏せてる？」

「正解だ。おそらく警戒してる可能性の方が高いだろう。高レベルで高魔力保持者のめぐみんがいるからな。ほとぼりが冷めるまで何処かに潜んでいるだろう。やみくもに突っ込んで探したって見つから

ない」

そこで。と、トニーは付けたして。

「君だったら、用心深い奴をどう引きずり出す？」

俺だったら……か。

俺が普段やってた対人ゲームには用心深い敵なんてしよつちゅう居た。俺もその一人だ。

そういうやつには……。

「餌で釣る。ばれないように、できるだけ自然な形で。そしてとびきり美味しい餌で」

それを聞いたトニーは、ニヤリと笑って。

「なら、初心者殺しにとっておいしい餌はなんだと思う？」

「……弱くて孤立した……」

そこまで言って自分で気が付く。

まさかこいつ……。

「おい、お前まさか俺に餌になれって言うんじゃねーだろーな!？」

「そこまでは言ってない。ただ、ちよつと困になつてほしいだけだ」

「同じじゃねーか！ ふざけんな！ 絶対嫌だぞ!!」

「みんなでカエルを倒した時は君もカエルを引き付けたって聞いたぞ」

「それは動きが遅いカエル相手だったからだ！ ネコ科の大型肉食獣とかどう考えても俊敏だろ！ あつという間に殺されるわ!!」

俺が全力で拒否ると、トニーはさも余裕そうに。

「落ち着けヒロ・ナカムラ。僕やめぐみんなら生体反応や熱源探知で接近がわかる。僕が空から君のケツを守るよ」

「嫌だよ！ 即席でそんなことができるほど信頼関係なんて築いてないし、俺を守る根拠なんてないだろ！」

「じゃあ証明してやる。まずさつき見せた光線を見ただろ？ 敵が迫ってきたらアレで瞬時に撃ち抜いてやる、それが駄目なら敵を捕捉した時点で僕が背に乗せたためぐみんなが爆裂魔法を放つ」

トニーは『どうだ？』と言わんばかりのしたり顔を浮かべて肩をすくめ。

「結果、これらの安全網によって君は生き残る。以上、証明完了。Q.
E. D」

「じゃあ俺も証明してやるよ！ こんな森の中じゃ敵の発見なんてま
ず無理。熱源探知だか生体探知だか知らないけど、生き物だってそこ
ら中にわんさかいる！ 木々の陰から見える熱源でそれを区別でき
んのか!？」

俺はトニーの真似をして腕を軽く広げて肩をすくめて。

「結果、俺は忍び寄ってきた獣に食い殺される。以上、証明完了。R.
I. P」

流石に嫌味が過ぎたのか、トニーはうんざりした顔をする。

自分でも駄々こねる子供みたいに喚き散らしてみつともない姿を
さらしてる自覚はある。

だが、いきなり獣相手におとりをやれとか勘弁してくれ。

「なんなら満足するんだ……核シエルターでも用意してやれば良いの
か?」

「そんな贅沢は言わないさ。ギルドの酒場で十分だよ」

「帰るなって言ってるんだ!」

ひたすらに帰ろうとする俺をトニーがまたもや止める。

「なんだよ、俺は絶対に……」

……待てよ。

鉄の意思で断ろうとした俺だったが、一つ案が浮かぶ。

「急になんだ? ……何か思いついたのか?」

「トニー……めぐみんと通話した時のあれ……」

そこまで聞いてトニーは察したのか、

「名案だ」

そう言つて、ニヤツと口角を上げて笑った。

▽

「——こうしてトニーの背に乗るのは久しぶりですね」

「乗り心地は？」

「少々固いですが、眺めはいつでも最高ですね」

「そのうち君用のカップホルダーも付けといてやるよ」

「さ、寒い！ 寒い寒い!! そうだめぐみん！ くつつこう！」

「セクハラしたら叩き落しますよ！」

俺達がいるのは、森より百メートル程上空。

めぐみんがトニーの背におぶさり、俺は横脇からしがみつくようにして、トニーの足の甲を足場にして乗っていた。

季節で言うなら秋だ。

そんな時期にこんな空高いところで、俺はシャツ一枚で風にさらされていた。

「今スーツの表面を少し温めてやるから待て」

「……お、おお……ぬくい……こんな機能まで付いてるのか」

「氷結魔法対策に最近つけたんだ。全身氷漬けにされても溶かして脱出できるようにな。表面温度だけを瞬時に二千度以上まで上げられるようにした。いいだろ？」

「そんな超兵器を床暖みてーに使うなよ！ 燃えたらどうすんだ!!」

「……あの、私たち大丈夫ですよ？ 上空でバーベキューになったりしませんよね？」

顔を青ざめさせためぐみんが震えた声でトニーに聞く。

「火加減は優秀な人工知能であるフライデーが調節してくれている、問題ないさ。だろ？ フライデー。みんなにも聞こえるように言うてやれよ」

ラボにいた時に聞こえたあの女性の声は人工知能だったのか。

俺の元いた世界でも人工知能はあったが、こいつも人間的に喋れるとは……。

『お任せ下さい、カズマ様。自己紹介がまだでしたね。私はF. R. I. D. A. Y. という名の人工知能です。好きな映画はターミネーターシリーズとアイ・ロボットです』

「こいつやべえよ!! 下ろしてくれトニー！ 焼き殺される!!」

「今のは冗談だから真に受けるな。それより、動きがあったみたいだ

ぞ」

その言葉に下を見ると、膝に矢が刺さった俺が苦悶の表情を浮かべながら、木の根元に背中を預けるようにして座り込んでいた。

——ホログラムによる偽装作戦。

それが俺の考えた作戦だった。

めぐみんの眼帯を使って若干雑ながらもホログラムで俺の姿を作る。

そして、匂いで警戒されないように、俺の服を着せた木がホログラムの内側に設置されていた。

「二人とも切り替えろ。初心者殺しがホログラムのカズマの周りをうろつきだしたようだ。接近するからめぐみんは爆裂魔法の準備をしとけ。アクア、ダクネス。聞こえてたな？ そろそろ飛び出す準備しろ」

『任されたわ!! さあ、支援かけてあげるから行ってきなさいダクネス!!』

『了解だ！ アクアの支援魔法は凄いな！ どんどん力が沸いてくる!! 見てろ、毛むくじやらの獣ごとき、この私が素手でぶっ殺してやる!』

「あ、あの……私の見せ場を取らないでほしいのですが……」

インカム越しに支援魔法をダクネスにかける声が響く。

なんだかダクネスのテンションが異様に高くなっているんだけど、あいつなんかやってないよな？

俺は地上にいる二人に向かって指示を飛ばす。

「ダクネス！ 飛び出して初心者殺しを吹き飛ばせ！」

俺の合図と共に、トニーが地面をくり抜いて作った即席の穴からダクネスが飛び出し、草木が生い茂る地面だというのにオリンピック選手手の倍近い速度で初心者殺しめがけて一直線に向かっていく。

あいつの太ももには車のサスペンション並みのバネでも入ってるんだろうか。

地上の様子が確認できるほど近づいた俺達に、初心者殺しも気が付いたようだ。

だがもう遅い。

逃げるよりも先にダクネスがタツクルをかまし……、

「バカッ！ どうしてそこで外すんだお前は！」

「ちち、ちがーっ！ ……そ、そう！ 今のはけん制だ！」

そんなことをのたまいながら、タツクルをよけられたダクネスが身を捻って初心者殺しに体を向けると……。

「喰らえー！」

ダクネスの正面から空間が歪んで見えるほどの衝撃波の塊が飛び出し、初心者殺しをはるか彼方へと吹き飛ばす。

ええ……何あれ……。

「出番だぞ、爆裂レディ」

「任せてください！ 『エクスプロージョン』 ツツツ！！」

めぐみんが向けた杖の先で破壊の突風が吹き荒れる。

空気が震え、隕石が落ちてきたかのような轟音を鳴り響かせながら、美しい緑の森に茶色いクレーターを作る。

しばらくして煙がはれると、そこには初心者殺しの毛一本残ってなかった。

相変わらずオーバーキルもいいところだ。

「上手く行ったな。ギルドに戻って何か食おう。最近新メニューができたそうなんだ」

地上に俺を下ろしたトニーがマスクを開け、めぐみんを背負ったままそんなことを言ってくる。

途中色々あったものの、なんだかんだ作戦が上手く行ったのは気持ちよかった。

……まあ、悪くないな。

第23話 ステイル盗賊団

カズマたちとの初クエストから数日。

僕は客人とラボのラウンジにて。

「……ねえ、トニーが食べてるそれって……」

僕と机を挟んでランチを食べているその客人、クリスは僕が手に持っているジャンクフードに興味を示して尋ねてくる。

それは、ふかふかのパンに挟まれた肉厚なハンバーグ、溶けだしたトロトロのチーズ、新鮮な野菜類……。

……そう。

「……ハンバーガーっていう、僕の国の食べ物だ」

「はんばーがー……あれだよ、トニーの故郷で人気の食べ物だよね？」

「その通り。最寄りのパン屋に頼んで作ってもらった試作品だ。中でもこのチーズバーガーは傑作。僕の発明品に匹敵するくらい。いや、言い過ぎだな。でも美味しい」

自慢しながらチーズバーガーを頬張っていると、クリスが物欲しそうな目で見つめてくる。

「……ねえトニー、それももう一個余ってたりしない？」

「一個しかない。僕のだ」

「B o o o……」

「そのうち市販されるだろうから、それまで待ってる。そんなことよ……」

僕は手に持つてるハンバーガーを平らげ、包み紙をくしゃくしゃにしてゴミ箱に放り投げて。

「僕とランチしにここまで来たわけじゃないんだろ？ 早く情報を教えてくれよ」

「まあまあ。悪徳貴族は逃げないよ」

「貴族がふんぞり返れるこの世界じゃ逃げる必要がないからな」

カズマがここに初めて来たとき、クリスからの緊急無線で面倒なことになったことがあったが……。

その内容とは、余裕があれば神器回収を手伝ってほしいというものだった。

そろそろ来るだろうなとは思ってた。

「にしてもトニーが乗ってくれるとは思わなかったよ。てっきり忙しいって断られるのかと」

「現時点で里の教師、王都の防衛設備の開発、それらの輸出、カズマパーティーのお手伝いと多忙なのは事実だ」

まあ、開発については里の族長が大喜びで協力を申し出てくれたため、紅魔族が何人かラボについてくれたからいいのだが。

……僕が作ったものに変な名前を付けようとしたり、造形を勝手に変えようとしたりするところに目をつぶれば極めて優秀だ。

「お、大忙しだね……でもとても助かるよ。トニーがいたら百人力だろうし」

「気にするな。なんなら僕から声をかけるつもりだったしな」

「……えっ!？」

クリスがギョツと目を見開いて聞き返してくる。

僕はそんなに非協力的な人間に見えるんだろうか。

「ど、どうして?」

「大した理由じゃないさ。僕はただ……」

本当は、何でもないかのように言いたかった。

だが、どうやら顔に出ってしまったようだ。

そんな僕の顔を見たクリスが、心配するかのような声色で。

「……ね、ねえ、トニーどうしたの? 顔が怖いよ……?」

……。

そのまま表情は崩さず、ただ前を見据えて。

「僕はただ……世界を守る為に作られた道具を、武器を……私欲のために悪用する連中にむかつ腹が立った。それだけだ」

そう言っつて、僕は机の上にあった紙袋からもう一つハンバーガーを取って食べ始めた。

クリスがさつきとは違った表情で目を見開いている。

「……う、うん。そうだね。トニーの気持ち、よくわかるよ」

僕のハンバーガーを見て少し複雑そうな顔をしたクリスだったが、やがて優しい笑みを浮かべて。

「あらためて、この世界の為に尽くしてくれてありがとうございます」
クリス……いや、エリスとしての穏やかな顔で、僕に頭を下げた。

▽

「というわけで、君にも力になってほしい」

「お断りします」

一枚のタブレットを渡してきたトニーに、俺は真顔で首を横に振る。

「そう来てくれると思ったよ。君は期待を裏切らないな」

「皮肉を言っても俺の態度は変わらないぞ」

用事があると例のパワードスーツで飛んできたので、なんだと思つてついてきてみれば……。

「まあ、そう言うな」

「言うよ！ 俺言つたじゃん!! 聞かなかつたことにするって！ 引きずり込んで来るなよ!!」

「いいか、この世界の貴族は軒並み腐つてるんだ。まともなものも……いるが、そういう連中相手になら、多少の犯罪行為はやったって問題ない。というか、貴族が自分の有利に法をつくる世界だ、こつちも法の外で動くしかない」

トニーは俺の目を見て諭すように話したかと思えば、クリスに顔を向けて笑い掛け、

「大義名分があるんだ、神も許してください。だろ？」

「なんであたしを見て言うのかな!？」

クリスが声を荒げてツッコんだ。

何でもいいが、俺を厄介ごとくに巻き込むのはやめてほしい。

「そういう問題じゃないんだよ。俺は危ない橋を渡りたくないの!!」

トニー達のやっつてゐることは立派だと思ふけど、俺は巻き込まれたくない

い！」

「……ねえ、やっぱ二人でやらない？ 無理やりひきこむのもかわいそうだよ？」

「いいこと言った！ クリスがいいこと言った!!」

はやし立てる俺の姿を見て、トニーの表情が若干曇る。

今までひきこもりだったというのに、いきなり大犯罪をやるなんて芸当できるはずがない。

それに、俺にはやらなくちゃいけないことがある。

「それじゃ、今回も俺は何も聞かなかつたことにする。もう行って良いか？ クエスト受けてお金稼がないといけないんだよ」

そう、キャベツの資金も確定していることだし、拠点を手に入れる為にまとまった資金が必要なのだ。

いつまでも馬小屋暮らしじゃ、冬が来た時に確実に凍えて死ぬ。

……あと、色々な意味でプライベートな空間が欲しい。

もう帰ろうと踵を返した俺の背に、トニーから聞き捨てならない言葉が飛んできた。

「それじゃ、僕から君へクエストを依頼する。報酬額は五百万エリスだ」

思わず足が止まる。

ドアノブにかけた手を放し、ゆっくりと首だけ後ろに回して。

「……詳しく……聞かせろください」

その言葉に、トニーは『そこなくっちゃ』と、口角を上げてニヤリと笑った。

「——椅子の男？」

俺はついオウム返しに尋ねる。

「ああ、僕らは実行部隊。屋敷に侵入して直接目当てのものをいただく。そして君は椅子の男」

「いやだから椅子の男ってなんだよ」

「君にはこのモニター席に座って僕らをサポートしてもらおう。具体的には、スキャンで判明した敵の数や位置を、モニター越しに報告し、僕らを上手く誘導することだ。ミツシヨン・インポツシブル見たことあるか？」

「一応全シリーズ」

「ならわかるだろ？ 外のバンの中でパソコン弄ってる彼の役だ。君は現場に立たなくて良い、安全さ」

……なるほど、ルーサーの事をいつてるのか。要するに遠隔のセコンドってわけだ。

だが、一つ疑問が残る。

「そういうのって、フライデーに任せればいいんじゃないのか？ 優秀な人工知能の方がいいだろ？」

「フライデーは衛星軌道の演算、周囲のスキャン、それらのデータ化とモニターへの映像化に集中するからそこまで余裕がない」

「……ねえ、今衛星って言った？」

「言ってるじゃない」

「言ったよね？ ……後で話を聞かせてもらおうよ」

俺は顔に手を当てて考え込む。

自ら危険に飛び込むわけでもなく、たった一日で五百万エリス……。

これはちよつと……いや、ちよつとどころじゃない。かなり魅力的だ。

「ずいぶん悩んでるね」

「映画のたとえば逆効果だったかもな。あれを知っているとモチベーションに大きくつながると思ったんだが」

「……そんな面白いの？」

「見るか？」

「……うん」

……落ち着け佐藤和真。

時代背景が中世の中での科学無双だ。俺の足はつかないだろう。でも……でも、だ。

分かっているのか？ 俺がやろうとしているのは犯罪行為だぞ？

いままでやってきた犯罪なんて、せいぜい信号無視と立ちション程度。

そんな俺が、貴族の屋敷に盗みに入るその手伝いをする？

……いや冗談じゃない。厄介ごとは御免だ！

「……トニー」

——と、一蹴するには。

「引き受けます」

金額が少々多すぎた。

▽

暗闇と静寂が包む森の中を、クリスと二人で進んでいく。

時刻はもう夜中近くといったあたりだろうか。

僕はインカムを通してカズマに確認を取る。

「カズマ、眠たくなってないか？」

『いや、むしろこの時間あたりからが俺の本領発揮だ。日本にいたころは昼夜逆転でずっとゲームしてて、『インしたらいつもいるカズマさん』なんて呼ばれてたりしたもんだ。オーバー』

「それを誇らしげに言ってる君は何も感じないのか？」

『正月とかに親族が集まった時、その全員がニートの俺に軽蔑の視線を向けてきても耐えて飯を食える俺の胆力ナメんなよ。オーバー』

「……ちよつと皮肉で張り合おうかと思ったが、そんな気持ちも失せた……あと、オーバーは言わなくていいぞ」

カズマの能力や性格といったものはある程度理解したつもりでい

だが、彼自身についてはよく知っているわけではない。

ひよっとしたら、重いものを背負ったりしているかもしれない。そっとしといてやろう。

うしろを振り向くと、そこにはきつきから興奮した様子で周囲をキョロキョロ見回すクリスの姿が。

光源は雲の切れ間から差す薄い月明かりだけなので、闇の中の彼女の今の挙動は、はつきり言って不審者そのものだ。

「すごい……真っ暗でもここまで視界が確保できるなんて……」

そんな、暗視ゴーグルをつけた彼女の姿を、僕も同じく暗視ゴーグル越しに確認する。

その昔秘密作戦用にS・H・I・E・L・D・に提供してた小型の暗視ゴーグルの余りがあったので、クリスに渡したのだが……。

どうやら気に入ってもらえたようだ。

「いつまで感動してるんだ。開発者冥利に尽きるが、早く移動するぞ」

「ああ、うん。ごめん……ところでさ、これって……」

「もちろんプレゼント」

「やった！」

そのまま移動することしばらく。

ようやくターゲットの屋敷に着いた。

僕らは裏庭近くの茂みに隠れ、侵入の準備をする。

「カズマ、敵の情報は？」

『ええつと……ん……？　ちよつと変だな……』

「変つてなにがだ？」

『熱源スキャンによると二十くらいなんだけど……一つだけやけに大きい』

衛星からのスキャン映像を見たであろうカズマが、そんなことを言い出した。

ひとつだけ大きい？

「……確かに、それは変だな。クリス、何かわかるか？」

「まあ……普通に考えてモンスターだろうね。示威や自己満足の為に違法モンスターを飼う貴族は少なくないよ。しっかりと首輪をつけ

ておけば、番犬代わりにすることもできる」

「その首輪つてのは……比喩的な意味で？ それとも首輪そのもの？」

「そりゃあ比喩的な意味さ。主に呪いの魔道具で支配してるのがほとんどだね。飼い主に敵意を向けたら体に痛みが走るとかそんな感じ」

『うわぁ……俺の国じゃ大炎上だろうな』

なんともまあ、ベタな悪党だ。

だが重要なのは、対人間だけを考えると痛い目に遭うってことだろう。

「だったら、大型モンスターと渡り合える装備を用意する必要があるな」

『思っただけけどさ……あのパワードスーツはどうしたんだよ。あれ使えば大体何でも解決するだろ』

「スーツを着てるだけで自己紹介してるようなものだ。人気者のつらいところだな」

僕は持ってきたバッグの中からいくつかのアイテムを取り出した。

暗視ゴーグルを気に入っていたクリスが、おもちゃ屋にきた少年のようにウキウキで手に取って見始めた。

「トニー、これはなに？」

クリスが手にとったのは、拳銃とバーコードリーダーを混ぜたような見た目のガジェット。

僕も同じものを手に取って説明を始める。

「これは僕のスーツの装備であるペタワットレーザーを元に作ったガラスカッターだ。この大きな葉がガラスだとする」

すぐそこに生えていたフキのような葉の表面にガジェットを向け、円を描くように動かしながらトリガーを押すと……。

「グエエエエ……」

先端の熱可塑性レンズから赤色のレーザーが照射され、小さな断末魔と共に葉の表面に円形の穴を開けた。

「……なんで葉っぱが断末魔を上げたのかはともかく、このようにレーザーで音もなくガラスに穴を開けられる。この吸盤が付いた

取っ手と併用しろ。くり抜いたガラスが落ちて警備が飛んで来るなんてマヌケな事態を防げる」

「す、すごい……」

『すごいけど少しは世界観を考えろよ』

「だったら世界観を変えるまでだ。現代っ子君な君はネットとスマホが恋しいだろ？ そのうちクエストなうってつぶやけるようにしてやるよ」

『や、やめろよ！ 本当にやめろ!! これ以上俺のファンタジー観を壊すなよ!』

無線越しにカズマの悲鳴が響くが、正直半分以上本気だ。少なくともこの国の技術力を第二次産業革命レベルまでは進めてやりたい。

そんな、クリスの前で平然と異世界転生ジョークをしてるわけだが、クリスは異世界についてある程度理解があるとカズマに適当な説明をしてあるので、特に問題はない。

「装備は大体こんな感じだ。使い方の把握はしたか？」

「だ、大体大丈夫……」

そのほか閃光で目をくらませるスタングレネードや、煙幕を張るスモークグレネード。

エージェント・ロマノフ用の装備から拝借したスタンガンなど一式をクリスに渡した。

最初は喜んで身に着けていたが、武装が増えるたびにクリスの顔から笑みは薄れ、『これって強盗用の装備なんじゃ……』と愚痴っていた。

そうはいつても、特殊部隊の一式装備以下の軽装なのだが。

武装を終えた僕たちは、屋敷をぐるりと囲う外壁の前に立ち。

「カズマ、この壁の向こうはどうなってる？」

『ちよつと待ってくれ……うん、大丈夫だ。見張りがちようど通り過ぎたところだ、行くなら今だな』

「ね、ねえ。この壁どうやって上るの？ さすがのあたしもこんなツルツルの外壁は登れないよ？」

「そこで君に渡したグローブだ。まずは電源をつけろ」

言われるがままに僕が指さした電源ボタンを押すクリス。

僕は壁に掌をベタツとくっつけて見せる。

「こうして手のひら全体が均等になるように接触させると、強い吸着力が発生する。剥がすときは手首側から転がすようにしてゆつくりと剥がせ。あとはヤモリみたいに登っていくだけだ」

「手の甲の辺りで光ってる青い光は何を示してるの？」

「グローブが正常かどうかを示している。こう覚えろ、ブルーは青グルーくっつく」

「……レッドは？」

「お陀仏デッド」

暗視ゴーグル越しなので顔色がよくわからないのだが、心なしか彼女が少し青ざめた気がした。

「ここまで来たらやるしかない、僕を信用しろよ。死んだら女神エリスにでも愚痴るんだな」

「だからそういうジョークはやめろよお……」

手本を示すようにして僕から壁をよじ登っていく。

僕もこれを使うのは初めてなのだが、自分で作ったものなので信用できる。

後ろでぶつくさ言ってたクリスもやがて僕の後をついてくる。

十メートルほどの高さの壁を越え、カズマに周辺を確認してもらってから窓ガラスに穴を空けて屋敷へと侵入した。

「楽勝だったな」

「やつぱり頼もしいねえ。さすがだよ」

「君の実力も早く見たいところだが」

「すぐ見せたげるよ」

くり抜いた窓ガラスを、音を立てないようにゆつくりと地面に置くと、二手に分かれた道が見えた。

左手側は絵やら壺やらを飾っておくためだけの袋小路となっている。右から向かうんだろう。

「カズマ、宝物庫までナビゲートしてくれ」

『了解、まずは正面から見て左手側に進んでくれ』

「……左だつて？」

言われたとおりに左側を見るが、そこにはさつきも見た袋小路しかない。

「……行き止まりだね。というか、あたしの宝感知も右の道を指してるんだけど」

……待てよ。

僕は紅魔の里で見たダンジョントラップについて書かれた文献を思い出す。

確か、ダンジョンには偽の壁を映し出して行き止まりだと思わせるトラップがあつたはずだ。

壁があるように見せかけるだけなので、盗賊職の罠感知にも引っかけりにくいという厄介なトラップなのだが……。

「……建物のスキヤンの結果は？」

『左手側には何も表示されていない。壁があるのか？』

「なるほど……見せかけの壁つてことなのか——」

クリスが口角を上げ、スキップしながら袋小路の壁へと突っ込み……、

「——なヴあつ!？」

……盛大に激突した。

飾つてあつた絵や壺が割れて大きな音が鳴る。

「なんだなんだ!？」

「泥棒か!？」

遠くからバタバタと駆け寄ってくる音がする。

クリスは今も地面でもんどりうってる途中だ。

「……おい」

『……あつ、タブレット逆さまに持つてたわ……』

「次からはスクリーンロックを解除しておけ……」

しくじりカズマは後でお説教として、僕は試作していたあるアイテムを取り出す。

それを右手に握りしめつつ、クリスを抱え起こして走らせる。

「立てヒーロー！… いったん撤退するぞ!!」

「い、いたた…頭がクラクラする…」

袋小路から何とか出ると、そこには腰に剣を差した騎士が四人もいた。

ギラリと光を放ちながら、腰に下げた剣が鞘から抜かれる。

切っ先は全て僕らに向けられた。

「投降しろ！… さもなくば切り捨てる！」

僕は右手に握った装置を起動して。

「新しい鎧をボスにねだるんだな」

それを騎士たちの真後ろに投げつけた。

装置は放物線を描き、一瞬だけ輝くと…。

「「ぎやああああ!!」」

騎士が次々と装置に吸い寄せられ、団子のように一塊に固まった。

——マグネティック・グレネード。

その名の通り、磁石で敵を引っ付ける。

金属製の鎧や武器を装備した人間が多いこの世界じゃ効果てきめんだ。作っというてよかった。

意識が回復してきたクリスと共に、真っ暗な廊下を一気に駆け抜け、窓ガラスから——!!

▽

やばい…。

『聞こえているか!! ちよつとまずい状況になった!! 脱出経路を探してくれ!! 外壁はもう登れないうえに、門は閉鎖された!』

やばいやばいやばい!!!

『おい!!… 聞いているのか?!… つたく!』

俺のせいだ。タブレットを逆さに持っていたなんてクソマヌケなミスのせいで、二人が危険な目に…。

こんな時どうすればいいんだ!?

慌ててタブレットに映されたマップを隅々まで見るが、脱出できそ

うな個所は無い。

壁なんて登ろうものなら魔法や矢で格好的にされる。なにもまともな策が浮かばない。

二人を助けられる特殊な力も、才能もない。

こういう全体を把握して穴をつくのは得意だったろ!!

昔からゲームでさんざんやって来ただろ!

トニーとクリスに助言してやることもできず、何かないかとタブレットをただひたすら弄っていたその時。

タブレットにあるものが映った。

それは、このラボの監視カメラが映し出した映像の一つ。

トニーは言っていた。衛星軌道の演算、スキャンをフライデーに任せていると。

つまり、衛星の操作をフライデーがこなしているということだ。

ならアレは?

俺はマイク越しに叫ぶ。

「フライデー! 衛星軌道の演算、周辺のスキャンをいったんやめろ!! そして俺を案内してくれ!」

俺はタブレットを抱えたまま、ある部屋へと駆け出す。

『Huh!? 何勝手なこと言ってるんだ!! どこ行くつもりだ!』

「トニー! クリス! 重ねて勝手言うけど、屋敷の中に引き返して、屋上に向かってくれ!!」

『えええ!? 屋上!? 逃げ場ないよ!?』

『本当に勝手な奴だ……君を信じるからな!』

『『ファイヤーボール』ツ!』

『トニー! 伏せ——』

その言葉を最後に、無線からの通信が途絶してしまった。

クソツ! こんなタイミングで!!

そして、要請に応えたフライデーが衛星とのリンクを切断して。

『カズマ様。どこの部屋へ向かうつもりですか?』

フライデーに向けて声を荒げながら。

「それは——」



次々と襲い来る騎士を様々な装備を駆使して退けながら、階段を駆け上る。

インカムが敵の魔法の余波で壊れてしまった為、カズマの最後の無線を信じて屋上に向かうしかない。

嫌なことってのはたいてい重なるもんだが……これは流石にマズい。

「待ちやがれ!!」

『『バインド』ツ!!』

「げっ!?!」

階段を登ってきた騎士たちの先頭にクリスが拘束魔法を仕掛ける。

突然縛り上げられた騎士がバランスを失い、ドミノ倒しに階段から騎士たちが転げ落ちていった。

「オマケだ!!」

「ぎゃああああ!! 何なんだその武器イイイイ!!」

僕の投げたマグネティック・グレネードで、階段下で倒れた騎士たちが団子状に固まる。

「今ので切れた!」

『『ワイヤートラップ』! あたしのワイヤーも!!』

クリスが詠唱しながら投げた複数のワイヤーは、壁に触れると同時にピンと張り、蜘蛛の巣のような形状を取った。

これでしばらくは足止めできるだろう。

屋上……というよりは、最上階のただっ広い祝宴ようと思わしきバルコニーに出た僕達。

残された武器は麻酔銃だけだ。

ただカズマを信じ、空を見上げていると、背後から声が聞こえてきた。

「おやおや……あなたが噂の銀髪の義賊か……」

今迄の奴らとは違う、豪華な服を身に纏った男が下卑た笑みを月明

かりに浮かべて歩き出てきた。

男は右手に持つていたサーベルを見せびらかすかのように弄ぶ。「狙っていたのはこれかな？　これはね、所持者が死んだ後に私が大金はたいて買った大切な神器でね……実にいい切れ味をしているんだよ……死んでも誰も気にしないような身寄りのない老いぼれなんかを切って遊ぶにはもってこいさ。取られるのは困るなあ？」

「……その剣は、あなたがもっていていい物じゃないよ」

「その通りだ。カミソリで自分の頬でも切つてろ」

なんとも腐った野郎だ。

僕らの怒りの言葉にも目の前の男はどこ吹く風といった様子で。

「なんとでも言え。あなた達はここで死ぬんだ。あなた達が狙っていたこの神器で、あなたたちの首を切り落としてあげよう。私は優しいだろ？　……取り押さえろ」

その命令を聞いた騎士たちが、僕らを取り囲むようにしてじりじりと寄ってくる。

さらにはその後ろから……。

「グルル……」

「初心者殺し……!!」

首輪をつけた漆黒の獣が、ゆったりと騎士たちの背後から歩き出てきた。

こいつがデカイ熱源とやらの正体か。

「さあ……武器を捨てて首を差し出さない。でなければこの獣に生きたまま食い殺させる。私はこの剣の切れ味を楽しむ、あなたたちは楽に死ぬる。良い取引だとは思わないかい？」

僕は軽装な騎士を狙って麻酔銃を撃ち込む。

お断りだという意味を弾に込めて。

「はうっ!？」

首に麻酔弾を撃ち込まれた男が膝から崩れ落ちた。

その様子をみた騎士たちがどよめいて後ろにザツと一歩引く。

「こ、こいつ！　まだおかしな道具を持ってやがるぞ!!　警戒しろ!」
「落ち着け。あんな一撃で無力化する武器を持っているなら、とつく

に連射して俺達を無力化しているだろう。それをしないということ
は、連射が効かないか、使える数か標的に制限があるということだ」
敵も馬鹿ではないらしい。

こうなったら……。

「……スーツを呼ぶ」

「だ、駄目だよそんなことしたら!! 正体がバレちゃうでしょ!」

「ここであつたばるよりはマシだ」

「ま、まって!! 他に策がないか今……」

クリスがバルコニーから身を乗り出して下を見るが……。

剣や槍、斧といった様々な武器の鋭利な先端が僕らにじりじりと迫
る。

いよいよ最終手段かと覚悟したその時。

クリスの手が僕の肩をつかみ、一気にバルコニーの下へと引き倒し
た。

……?!?!?!?!?

突然の出来事に目を剥くが、本来自分を襲うはずであつただろう落
下の感覚がない。

そこで自分が地面に背中をつけていることに気が付き、自分が今背
を預けている場所を確認する。

……なるほど、カズマの奴やつてくれるじゃないか。

僕は立ち上がり、地面を軽く二回ノックした。

それを合図に、僕とクリスの視線はみるみる上がっていき……。

「自殺か……なんともつまらない……死体を回収しときなさい。焼却
炉で燃やして何もなかったこと……に……」

そこまで言つて、貴族の男は黙りこむ。

「焼却炉でなんだって? 先を言えよ」

……月をバックに、まるで何もない空間に立っているかのように夜
空に浮かぶ僕とクリスの姿をみて。

「あ、さっき自分で言ってたけど、わざわざ神器を持ってきてくれるなんて、キミって本当に優しいんだね! 『ステイール』 ツ!」

窃盗の魔法で貴族の手から剣が消え、クリスの手に剣が握られる。神器が取られたことに気付いているのかいないのやら。貴族の男は、ずっと目を剥いて僕らの姿を見ていた。

……透明な姿になった、クインジエットの上に乗る僕らの姿を。

▽

「ナイスワーク!!」

ラボに帰るや否や、クリスがカズマの肩を叩く。

「ハツハツハ!! カズマさんと呼べー!!」

「そもそも君がドジらなければこんなことにはならなかったんだけどな。」

「うっ……それは、本当にすいませんでした……」

「ま、まあ気にしない気にしない! 終わりよければすべてよしだよ!!」

浮かれていた顔から一転。しょんぼりした顔でカズマが謝ってくる。

「クリスの言うことにも一理ある……よく駆けつけてくれた。助かったよ、思ってたよりも君はガッツがあるな」

「ヒーローにそう言ってもらえると光栄だよ」

「本当にそう思ってるのか?」

「……半分」

「かわいげのないガキだよ、ったく」

そう言って僕も笑ってカズマの肩を叩く。

カズマもハッとシニカルな笑みを浮かべてみせた。

「ちよつと仲良くなったみたいでよかったね?」

「ハグでもするか?」

「加齢臭がしそっだし遠慮しとくわ」

「おい滅多なこと言うな。……しないよな？」

危険には関わりたがらない性格だったであろうカズマが、機転を利かせて自ら救援に駆けつけてきてくれるとは。

しかも、クインジエットを操作して。

おそらくフライデーにアシストを頼んだのだろうが……なににもかも任せられるわけじゃない。

ある程度は自分で操作する必要があるのだが……。

「気になってたんだが、どうしてクインジエットを操作できたんだ？」

元居た世界で操縦経験があつたのか？」

「ゲーセンのフライトシューティングで学んだのさ」

「聞いた僕が馬鹿だった」

「なんだよ、軍隊がフライトシミュレーターのゲームを訓練に採用してるの知らないのか？」

それはそうだが、ゲーセンで磨いた腕でパイロットをやったと言われても、なんとも締まらないもんだ。

「ところで、チーム名なんかは決まってるか？」

「ああ、今考えた」

「えっ」

僕の言葉にクリスが素っ頓狂な声を上げた。

クリスはクリスで既に決めていたのかもしれない。

「ステイル盗賊団……なんてどうだ？」

「……意味が二重になってないか？」

「まあ、聞け。英語で盗むは？」

「……steal？」

そこまで言っただけカズマも気が付いたのか。眉根をひそめて僕を見てくる。

「そして、鋼鉄はsteel。面白いだろ？」

「親父ギャグかよ……」

「駄目だよ!! もう銀髪の義賊で名前は通ってるし、あたしがリーダーなんだから、銀髪盗賊団で決定だよ!!」

カズマは呆れたようにため息をつき、クリスは眉尻を吊り上げて抗議してくる。

……いい名前だと思ったんだが。

▽

誰にも称賛されることのない義賊活動を三人でささやかにねぎらった後。

全員が解散して広くなったラボで、僕は寝ることなくある作業を続けていた。

『ボス、そろそろ睡眠をとられたほうがよろしいかと』

「……ちようどキリがよく終わったところだ。ちゃんと寝るさ」

そう言っでデータのバックアップを取って席から立ち上がる。

寢床へと向かう前に、僕はもう一度振り返ってモニターの画面を見る。

【Mk. 46 構築中……】

そのモニターの横でせわしなく動くアームによって組み立てられていく新型スーツを確認し、僕は部屋の明かりを落とした。

第24話 Mk. 46

『「エクспロージョン」ツツ!!』

我が必殺の魔法が、廃城へと突き刺さる。

紅蓮の火柱が天と突きあがり、大地が揺れ、熱を纏った風が頬を抜ける。

全ての力を振り絞った一撃を放った事により、私はがくりとその場に倒れた。

「どうですか?」

『衛星写真より判定……熱量、風速、目標物の損壊率、クレーターの直径……総合得点……八十七点。ナイス爆裂』

「ふふ……さすがは我が優秀なパートナー……完璧な採点ですよ、おじすか」

『ありがとうございます』

トニーより譲り受けた相棒である、眼帯のお兄さんこと人工知能のおじすかによる完璧な採点に満足していると。

「僕が渡した世界最高峰の人工知能に変な名前を付けたばかりか、こんなことに使っているのか」

様子を見ていたトニーが、倒れ伏す私の姿をみてため息をついた。

「別にいいではないですか。これも親睦を深めるためです」

「君のものなんだ、好きにしてくれて構わないが……」

そう言つてトニーは視線を私から廃城へと移して。

「にしてもあの城、何で出来てるんだ? かなりボロボロになつてきたとはいえ、ここまで頑丈な建造物も中々見ない。ヒドラの要塞より堅いんじゃないか? とうか、なんでクエストにも行かず廃城なんて攻撃してるんだ?」

ここ最近、連日爆裂魔法を撃ち込まれ、さらにボロボロになった廃城の姿を見てそう呟いた。

「トニーは最近ラボにこもってばかりでしたもんね。実は、この近くに魔王軍の幹部が居座つたらしいのですよ」

「それは知ってる。爆撃した」

「それで、幹部の存在感に恐れたモンスターたちが隠れてしまい、クエストが……今何と云いました？」

さらっと、まるで相槌を打つかのように軽く聞き捨てならないことを言ったトニー。

思わず聞き返した私に、トニーはズボンのポケットに手を突っ込んだまま。

「知ってるって言ったんだ。そのための人工衛星だ、魔王軍の動向はある程度把握しているさ。行軍途中で真ん中にミサイルを叩き込んでやったんだが……大して効果は無かったようだな。まさかあいつがこんな駆け出しの街に来るとは……何が狙いだ？ 僕がこの街にいることは知らないはずだが……まあ、廃城を撃つてる理由は理解した」

後半はブツブツと独り言のようで聞き取れなかったが、この人は何をしているのだろうか。

たった一人で魔王軍幹部を監視していたどころか、そこにミサイルをぶち込むなんて恐れ知らずにもほどがある。

……正直呼んでほしかった。

魔王軍幹部率いる隊列のど真ん中に撃つ爆裂魔法はさぞや気持ちいいことだったろう。

「……あなたなりに対処しているのですね。国の騎士団や冒険者に報告すればなお良かったとは思いますが」

「無駄な犠牲が出るだけだ。奴は僕が倒す」

「おおお……紅魔族の琴線にビリビリくるセリフです……！ ですが……私も呼んでくださいよ？」

それを聞いたトニーは口角を上げ。

「パーティーに花火は不可欠だ。もちろん呼ぶさ」

横に置いてあったスーツに身を包んで私を背負い、腕から廃城に向けてアームミサイルを射出した。

「それじゃ、帰るか」

トニーがアクセルの方へ足を向けると同時、私たちの背後でミサイルが着弾し、一拍遅れて廃城の上部が盛大に吹き飛んだ。

「……本当に中に誰もいないんですよね？」

「何度もスキャンしたが、あそこに生体反応は無かった。大丈夫だ」

「それとあと一つ。カズマが最近、大金を手に入れて働かなくなったのですが、何か知りませんか？」

「さあな」

▽

めぐみんの爆裂散歩に付き合った後、反動で動けなくなった彼女をギルドで朝から酒を飲んでたカズマに預けて僕は街中をうろついていた。

まだ十六歳だというのにあんな退廃的に生きていると将来が心配になる。

なんて、カズマの未来を憂うが、僕が同年代だったころの自分の生活を思い出し、とても人のことを言えた義理ではなかったなと鼻を鳴らす。

しかし退屈だ。M k. 46の調整はもうフライデー任せで良いし、教師の仕事は非番、カズマはクエストを受けたがらない。

クリスは先日回収した神器を新たな持ち主に渡すための再調整をしている。

暇そうな紅魔族の連中でも連れて王都のクエストでも受けようか。

あるいはバイトをクビになったとギルドで泣き喚いていたアクア飲み仲間君を飲みにも誘おうか。

——それからさらに当てもなくぶらつくことしばらく。

僕はいつの間にか人通りの少ない裏通りまで来ていた。

……さすがにぶらつき過ぎだな。

よし、ここはギルドに戻ってカズマやめぐみん達と駄弁っていようか。

そう思い、踵を返したその時。

ふと、とある看板の文字が目に入った。

——《ウイズ魔道具店》

……魔道具店。魔道具店か。

そういえば、アルカンレティアでは対ベルディアの参考程度に聖水などを探していたっけか。

面倒ごとが立て続けに起きて結局見れずじまいだったか。

正直Mk. 46が最終調整に入ってしまった以上、特に興味を惹かれるものは無いのだが……。

まあ、暇つぶしにはなるだろう。

いきあたりばつたりの軽い気持ちで店のドアに手をかけ、中に入った。

ドアについていた鐘がカランカランとなり、その音を聞いた女性がこちらに振り向く。

「いらっしやいませ、ようこそウイズ魔道具店へ！」

愛想よく笑って出迎えてくれたのは、茶色い髪を腰位までの長さまで伸ばした美女。

ローブに身を包み、エプロンをかけた彼女は、髪と同じ茶色の瞳を輝かせ、実に嬉しそうに僕を見ている。

……僕を見た人間が目を輝かせるなんてよくあることだが、僕が認知されていないうえに、初対面でこの反応は初めてだ。

一体どうしたのだろうか。

「あー……、僕も色々作っていてね。ちよつと参考程度に魔道具を見てみようかと思つて来たんだ」

「まあ、そうなんですネ！ 私、この店で店主を務めているウイズと申します！ どんなものを作っているんですか？」

僕は無言でつけていたサングラスを外し、カウンターにいるウイズと名乗った女性に投げ渡す。

危なげなくキャッチし、不思議そうな顔を向けてくる彼女に、僕は顎でかけてみればいと促した。

「……?!?!?、これは……!!」

サングラスをかけたウイズは、キョロキョロと周囲を見渡し、感嘆

の声を漏らす。

「こういうのは何度見ても飽きない。実に良い表情だ。」

「僕の国には魔法が無くてね。そういうのが魔法の代わり。僕の国では科学と呼ぶんだ」

「凄いですね……色々見て回ってきましたが、こんなのは初めて見ました……」

魔道具店で働いているだけあってか、僕の様々な機能が搭載されたサングラスに興味津々なようだ。

顔から外し、手に取って上下左右様々な角度からくるくる回して眺めている。

しばらくそうした後で、ハッと我に返ったウイズは慌てて僕にサングラスを手渡してきた。

「失礼。手渡しは嫌いなんだ。そこの棚にでも置いてくれ」

「わ、わかりました……。あ、すみません、ベタベタと触ってしまって

……。しかし、変わったアイテムですね……。魔力以外のエネルギー源

……。電気の信号……。？」

僕のサングラスから今だ目線を放さず、ブツブツとあらゆる推測を並べるウイズ。

そのどれもが、着眼点に優れていた上に的を射ていた。

……。へえ、やるじゃないか。

見ただけでそこまでわかる人間はほとんどいない。少なくとも紅魔族と同等か、それ以上の知力はあるとみた。

「正解だ。本当はもつと複雑だけどな。ああ、名乗り遅れたな。僕の名前はトニーだ、なにかオススメの品でも……」

そこまで言ったところで、僕はウイズを見て凍り付く。

いや、正確には、サングラス越しに映ったウイズを見て。

——彼女からは、生体反応を何一つ検知できなかった。

体温も、心拍も、呼吸も、なにもかも。

ウイズは、アンデッドだ。

が……敵意は感じない。

僕は戦闘になった時の為にスーツを起動し、待機させる。

「……トニーさん？　どうかしましたか？」

「ウイズ……君に聞きたいことが……」

僕が正体について聞こうとしたその時。

背後にあつたドアが開き、客が来たことを知らせるベルが鳴り。

「ああーっ!!　出たわねこのクソアンデッドー!!　神の名のもとに店ごと燃やしいだっ!」

聞き覚えのある声に振り返ると、そこにいたのは眉を限界まで吊り上げたアクアと……。

「よっ、ウイズ。約束通りに来たぞ……っつて、トニー？　……やべえな。今のつて聞こえ……てるよな、うん。どうしよう」

そんな彼女の頭をダガーの柄で小突き、気まずそうな顔をしたカズマの姿があつた。

「——はい、私はリッチー、アンデッドです……。すみません、この事はどうか内密に……」

カズマ曰く、ウイズとは共同墓地に救うゾンビメーカー討伐のクエストで出会ったそうだ。

さまよう魂とやらを天に還していたところを猛り狂ったアクアが襲撃。

浄化される寸前のところでカズマが止めに入ったとのことだ。

ちなみに、この店にはアクアから助けてもらったお礼に、リッチーのスキルを教えるとウイズに言われてきたそうだ。

朝から飲んでるくらいなら行ったらどうだとめぐみんとダクネスにケツを叩かれたみたいだが。

そんな話はとりあえず脳の片隅に。

僕は腕を組んでしばらく悩む。

はたしてウイズは本当に安全な存在なんだろうか。

「ねえ、トニーならわかってくれるでしょ？　こんな腐ったのなんて信用できるわけないって」

「難しいところだな……」

「疑わしきは黒って言葉がこの世にはあるのよ」

「それじゃ女神かどうか疑わしいお前は女神じゃないってことで」

後ろでひっぱたき合ってる漫才師コンビは無視して、僕はウイズに向き合う。

「ウイズ」

「は、はいっ！」

「ヒキニートが生意気なのよ！　小金持ちになって余裕のある男気取りですかー？」

「拠点が必要だって言ってんだろが!!　その点お前はなんだよ？　次々とバイトクビになりやがって!!」

背後が締まらないが、僕は真剣な眼差しで彼女を見つめて尋ねる。

「君は……人間か？　それともモンスターか？」

僕がそういうと、ウイズは少し寂しそうに笑って。

「心だけは……人間のつもりです」

「……みたいだな」

「……危険はなさそうだ。」

少なくとも、笑ったり、興味深そうにサングラスを眺めてた彼女の姿は、人間にしか見えなかった。

▽

——ウイズとの出会いから数日。

僕は彼女は無害だと判断し、マジックアイテムの研究材料確保の為そのうち足を運ぶことにした。

カズマたちはというと、クエストが無いなりにそれぞれ自由に動いていた。

アクアはバイト、ダクネスは実家の屋敷に戻って筋トレ、カズマは僕と代わりばんこでめぐみんの爆裂散歩に付き合ったり、暇なときは

拠点となる家を探しに不動産屋を回っている。

そんな中、僕はちよつと見せたいものがあつたので今日の爆裂散歩の前にめぐみんをラボへと招待した。

「……………!!!」

部屋に入るや否や、美術館の彫刻がごとく台座にたたずむ 紅い球体をためぐみんは、車のハイビームじみた紅い眼光を目から放ち、声を震わせる。

「ま、まま……………まさか……………!?!」

「我が新たな息子こと、M k. 46だ。まだ誰にも見せてない」

めぐみんは輝く眼でスーツのプログラムや回路図面に目を通して。

「克服したのですね……………以前の不調を……………」

そう。なんといつても一番面倒だったのは、この世界の素材で作った部品のことごとくが、既存のエネルギーとの相性が悪かつたことだ。

回路にアークリアクターを繋ぐと、まるで血液型の合わない血を輸血したかのような有様になる。

「君の故郷にあつた物干し竿が役に立ってくれたよ」

「まさかあの物干し竿が、古代兵器の一つだったとは……………」

「君たちの一族は本当に愉快だな」

「あの入り口にあるグリフォン像も、生きてた手頃なのをとつつかまえて石化の魔法で像にしたんですよ。知ってましたか?」

「知らなかったし知りたくなかつた」

そんな軽いやり取りのなかでも、めぐみんはM k. 46のデータが映し出されたモニターにかじりついて離れようとしな

ぶ。が、突然ぐりんと首が心配になるほどの勢いで顔を僕に向けて叫ぶ。

「さあ!! この球体!! どう変形するんですか!! はやく見せてくださいよ!!」

期待の籠つた紅い眼光が僕を射抜いてくる。

僕はいろんな意味でまぶしい視線に目を細め。

「残念ながら、そうはいかない。まだ調整が終わってないからな。そこも踏まえてあえて君に設計図は見れないようにしてある」

「なんの嫌がらせですか!？」

「実際に見た方が感動するさ。ほら、さっさと今日の爆裂散歩に行くぞ」

「いやです！ 爆裂散歩は見てから行きたいです!! ちよつとくらい見せてくれたっていいではないですか!!」

興奮しているせいか、いつになくしつこいめぐみん。

この子は欲張りであきらめが悪い。これは長丁場になりそうだ……。

僕は迫りくるめぐみんの頭を、暴徒と化したライブ会場を守る警備員のごとく押さえてけん制する。

「いいから落ちっ……」

「テスト稼働くらいはしているのでしょうか!? ほら、もったいぶらずに立派なあの特製の真の姿を見せてくださいよ!!」

「おい、変な言い方はやめ……」

と、興奮を収める気配をまるで見せないめぐみんが、誤解を招くセリフを吐きながら、僕に掴みかかったその時。

「その……邪魔しただろうか……」

ダクネスが、僕達の方を見て、顔を真っ赤にして立っていた。

「待て、誤解だ。めぐみんは僕の息子を見て興奮しているだけだ」

「ムスコ!？」

「そうですよ。ですが、トニーがもったい付けて真の姿を見せてくれないのですよ」

「見せる方がおかしいと思うのだが!? わ、私がおかしいのか? 世間の一般常識に疎いからか!？」

ダクネスがさらに顔を赤くし、目をぐるぐる回して頭を抱えだした。

「——なるほど……この球体の中にトニーの新しい鎧が入っているのか？」

ダクネスが、M k. 46を眺めてほうと息を吐く。

まだ顔が赤いのは誤解した自分の恥ずかしさか、あるいは鎧好きとして興奮しているのか。

「君の鎧はまだ壊れていないみたいだな。そろそろ改良もしてやるべきか」

「ああ、これは実に頑丈で軽く、装着しやすい。さすがはトニーだ。欲を言えば衝撃の吸収を少し控えめにしてくれると嬉しい」

「君の性癖に沿って改良するつもりはない。いい加減にしろ」
「くっ……」

「ダクネス……あなたの性癖は見慣れたつもりですが……流石にそれを装備にまで反映させるのはちよつと……」

いつのまにかめぐみんがダクネスを先生と呼ばなくなっている。

こつちも親睦を深めて生徒と教師ではなく仲間として接するようになったというわけか。

よかったよかった。

その内容が性癖について叱られているというものというのが残念でならないが。

「で、どうしてダクネスはここに？」

「受けるクエストもなくて暇でな……ここにはトレーニング施設もあると聞いていたから、どんなものか試してみたくなったんだ」

「それなら歓迎しよう」

ここにはアベンジャーズメンバー用のトレーニングルームが完備してある。

それこそ、世界トップクラスのトレーニングジム顔負けの設備から、VRを用いた仮想敵プログラムまでなんでもござれだ。

この際だ、ダクネスの身体能力のデータを取りたい。
キャプテンとダクネス、どっちのパンチ力が上なのか比べてみよ
う。

僕がダクネスをトレーニングルームに案内しようと扉に向かうと、
その正面の自動ドアが開き、見知った顔の二人がでてきて鉢合わせ
る。

「おや、カズマとアクアではないか。どうしたのだ？」

「君らもトレーニングに来たのか？」

はちあわせた二人、カズマとアクアはやけにニコニコしている。

正直不気味だ。

「俺達の拠点が決まったんだよ。本当は何億もする屋敷が、悪霊が大
勢住み着いてるとかで、除霊することと悪評が消えるまでつて条件で
タダで譲ってもらったんだ。いやー、自分の高い幸運を実感した
わー。加えて豊かな今の所持金……俺の人生始まったわー」

「屋敷よ屋敷!! この私が住むにふさわしい、でっかいお屋敷よ!!
今日はお昼も夜もパーツと行こうじゃない!!」

楽しそうにはしゃぐ二人を見て、僕とめぐみん、ダクネスは顔を見
合わせた。



とくにやることもなかったのでカズマの新しい住居とやらを見に
行くことに。

……なつたのだが……。

「……まさかこことはな」

目の前にたたずむ屋敷を見て、目線を横にずらす。

その視線の先には、僕のラボへと通じる小屋を模したエレベーター
があった。

こうしてみるとやっぱり屋敷に付随する物置小屋にしか見えない。
「私としては嬉しいですよ。いつでも気軽にラボに遊びに行けます
し、トニーを爆裂散歩に誘いやすいですし」

「同意見だ。パーティーメンバーなのだし、トニーと近くなることはいい事だろう」

「気軽にラボのバーにも行けるしね！」

「めぐみんとダクネスはともかく、アクアは僕の故郷のお酒を片っ端から飲むつもりだろ。させないからな」

それを聞いてぶー垂れるアクア。ラウンジへのアクセス権限を切ってやろうか。

アクアを冷めた目で見てるとカズマが横から肘でつついてきた。

なんだと思つて横を見ると、カズマはかなりのドヤ顔で。

「見ろよトニー、この立派な屋敷を。俺の強運で手に入ったようなものだけ、これ。羨ましいだろ？」

「別に。僕のラボの方が広いしな。でもまあ、暇になったら酒でも持つてお邪魔するよ」

僕がそういうとカズマはつまらなさそうに鼻を鳴らした。

馬小屋生活からいきなり飛んで屋敷生活だもんな。

そりや自慢したくもなるだろう。羨ましがってやるべきだったろうか。

「ねえねえ!! もうすぐお昼の時間だし、今から湖の方に行ってバーベキューなんてどうかしら？」

「いいですね。ついでに爆裂魔法を湖に撃つて、魚でバーベキューしましょう」

「大漁虐殺とはこのことか……食いきれる分だけ獲れよ？」

魔王を討伐しに来たはずなのに、のんきな日々を多く過ごしている今日この頃。

悪い気はしないなどと、バーベキューの道具を取りに戻ろうかとラボに足を向けたその時。

『緊急！・ 緊急！・ 全冒険者の皆さんは、直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まってください!!』

突然、緊急のアナウンスが響き渡った。

アナウンスを聞いた僕らは顔を見合わせる。

「また何かのイベントか？ 今度は何の収穫だよ。人参か？ ジャガイモか？」

「人参もジャガイモも長距離移動はしませんよ。とりあえず行きましょう」

「えー……、もうバーベキュー気分の気分なんですけどー……」

「そう言うな、その分晩御飯を少し豪勢にすればいいだろう」

既に武装していたカズマたちはそのままギルドの方へと足を進める。

僕はスーツを装着してくるから先に行くよう、四人に伝えてラボへと向かった。

▽

正門前に集まった俺たちは、目の前にいる強烈な威圧感を持つモンスターの前に、呆然と立ち尽くしていた。

俺達だけではない、アナウンスを聞いた他の冒険者たちも同様にだ。

「デュ、デュラハン……！」

モンスターを見ると嬉々とするダクネスが、抜剣して喉を鳴らす。

それは、首から先が無く、漆黒の甲冑に身を包み、身の丈ほどの強大な両刃剣を背に担ぐ暗黒騎士。

背丈は二メートルはありそうな巨大な体躯もあわさり、尋常ではない存在感を放っている。

……えっ、なにあれ。めちゃくちゃやばそうなんですけど。

俺が戦慄していると、そのデュラハンはこちらに一步踏み出した。

「ヒツ……」

それは誰が漏らした声だったか。

デュラハンが一步前進すると、それに合わせて冒険者たちも後ろに下がる。

正直俺も今にも背中を見せて逃げたくなくなるくらい怖い。

「貴様らに聞きたいことがある……俺の名は、魔王軍幹部が一人、デユラハンのベルディアだ……」

持っていた首からくぐもった声が響く。

「正直に言えば許してやろう……」

そして、首を……いや、全身をプルプル震わせながら……。

「毎日毎日……毎日毎日毎日……俺の城に爆裂魔法を撃ちこむ馬鹿と、妙な爆発物を城に叩き込むボンクラ共は、だれだああああああああああーっっ!!」

ベルディアさんは、ブチ切れていた。

「ザコしかいないかけだしの街だと思ってきてみれば……! きさまらっ! ヒレツなまねをしておって、もうがまんならん!! 出て来い!! 三時間くらい正座させて説教してくれるわあっ!!」
優しいのやらそうでないのやら。

ブチ切れたベルディアは抱えた自分の首から街中に響き渡りそうな怒声を轟かせる。

……いや、爆裂魔法?

爆裂魔法という単語に反応した冒険者たちの視線が、やがて一人の魔法使いに集中する。

視線を集めた魔法使いは、ものすごく気まずそうにしながら、顔を青ざめさせる。

みんなに注目されている魔法使い事、爆裂魔法使いのめぐみんは、涙目になって俺に助けを求めてくる。

「ど、どうしましょうカズマ……」

「と、とりあえず謝ってこいよ。向こうに殺す気はないみたいだし……誠心誠意謝れば許してくれるよ」

「他人事だと思つて……!」

覚悟を決めたのか、めぐみんは震える膝を何とかして前と出し、ベルディアの方へと歩みを進め……。

ようと、一歩踏み出すのと同時。

「久しぶりだなあ、ベル君」

「……！ 貴様は……!?!」

空の上から聞こえる、小馬鹿にしたような皮肉。

ハッと見上げると……。

「ト、トニー！ なんでこんなかかったんだよ!! スーツの装着なんてすぐ終わるだろ!?!」

俺がそう叫ぶと、トニーは俺のすぐ近くまで下りてきて。

「フライデーからベルディアが正門に来ているとの報告を受けてね。新スーツの調整を少し急いでたんだよ」

「もう動かせるのですか!?!」

さつきまでおびえてた様子だっためぐみんが、凄い勢いで食いつく。

「ああ。派手な戦いが始まるぞ」

「FOOOO!」

「……で、なんかあいつ怒ってないか?」

「実は……」

トニーの質問に、俺は事情を詳しく説明する。

すると、トニーはふむと頷き、顔を覆っていたマスクを開いてめぐみんの方へと顔を寄せた。

その表情は、やっちゃまったと言った感じの、気まずそうなものだった。

「なあ、めぐみん……まさか、僕らが楽しく爆撃してた城って……」

「ええ。そのようですね……」

「城に生体反応は無かっただろ……ああ、なるほど、あいつアンデッドだったか……」

「ちよつと想定外過ぎました……」

「僕らみたいな天才にもミスはある。逆に考えよう、これは奴をぶちのめすチャンスだ」

そう言い残して、トニーは前へと歩き出した。

ベルディアから十メートルくらいのところまでとまり、対峙する。

「……久方振りだな。王都以来か。人類に愛想を尽くしたわけではなさそうだな」

「飯がどこもおいしくてね。君は元気そうじゃないか。顔色もいい」「フンツ……減らず口は相変わらずか……」

ベルディアはそう言つて嗤うと、背に手をまわし……。

強大な両刃剣を構え、トニーに突きつけた。

「ここに来た理由は、不届き者の説教の為だったが、それも変更だ。今ここで貴様を抹殺する」

「僕を仲間に引き込みたいんじゃないのか？」

「お前にその気がなさそうなのは分かっていたのでな。魔王様に、次会った時に断られたら殺しても構わないと許可をいただいたのだ」

「それじゃ……殺される前に謝つとかないとな」

トニーは開けたマスクから覗かせた顔を、開き直ったかのような表情をベルディアに見せる。

「実は、君のボロ屋を毎日攻撃してたのは僕なんだ。……正確にはもう一人いるが。ああ、それと、ピクニックしてた君にミサイル……爆発物を叩き込んだのも僕だ。あー……ごめんな？」

堪忍袋の緒が切れたのか、ベルディアは肩をプルプルと振るわせ。

「この腐ったミカンがああああああ——ツツ!!!」

大剣を振り上げ、トニーへと切りかかり……。

思わず耳を塞ぎたくなるような、金属と金属がぶつかるすさまじい衝撃音が轟いた。

その音の大きさに、思わず目をつぶってしまうが……。

目を開けると、そこにはトニーの目の前に巨大な盾のようなものが地面に突き立っており、ベルディアの剣を寸でのところで止めていた。

兜の奥で光るベルディアの目が、大きく見開かれる。

「き、貴様……その盾を何処から出した……?」

「上から」

そう言つて空を指さしたトニーの指の先には。

「……なんだ……あれは……」

……光沢を放つ、深紅の球体が浮かんでいた。

その球体は、唸り声のような音を上げ、側面や上部、下部から様々な飛翔体を射出し、それらすべてが。

一つずつ、一つずつ。

それぞれが籠手に、胸当てに、脛あてに……そして剣へと変形し、トニーのスーツの上から未来的で金属質な音と共に装着されていた。

▽

「……見違えたな」

あらゆる装備を身に着けた僕の姿を見たベルディアが、感嘆の息を漏らす。

だが、自分が負けるんだなんて微塵も思っていないようだ。

再び剣を握り、小手調べだとばかりに僕めがけて振り下ろす。

「無駄だ」

僕の目の前に突き立っていた盾が推進リパルサーを照射し、僕の左手にガキンツと金属音を立ててドッキングする。

ベルディアの剣を、またしても盾で食い止めた。

「僕の番だ」

「ほう、この俺と剣で勝負する気か!! 良いだろう!! 面白く……」

ベルディアが最後まで言う前に、剣を受け止めた盾が変形する。

「えっ」

盾が縦に割れ、その奥に覗かせる三つの砲門が一瞬輝き……。

「なんだとオ——ツツツ?!?!」

高出力の破壊光線がベルディアの体を飲み込み、はるか彼方へと吹き飛ばした!

「……あれっ、剣は?」

後ろでカズマがツツコむが、僕は二重になっているヘルメットとバ

イザーを開けて。

「剣より飛び道具の方が強いに決まってるじゃないか」
「ええ……」

そう笑い掛けた。

第25話 まだまだ上を目指せ

「ぐあああああ……ク、クソ……凶に乗るなあッ!!」

リパルサーで吹き飛ばしたと思ったのもつかの間。

ベルディアは剣でリパルサーを、大海を渡るモーゼのように引き裂いて強引に僕へと向かってくる。

「魔王様の加護を授かりしこの堅牢なる鎧と魔剣、疲れを知らぬ不死の肉体!! この程度で倒せるなどと思うなよ!!」

ベルディアの横なぎに振りかざした切っ先が掻き消える。

もはや人間の目で追える速さではない。

キャップを思い出せ。

あいつは自分より素早い攻撃に対しては、相手の目や足の動きで予測して防いでいた。

迫りくる剣を盾で防ぎ、剣を縦に大振りに振り下ろす。

「ハハハッ!! そんな見え見えの攻撃が当たるとでも!？」

ベルディアはそう笑って、剣の腹を僕に向けて防御の姿勢を取る。

「そら、どんな太刀筋か見てやろう!! クハハハハ!!」

振り下ろされるその瞬間。

剣が装着された右腕部の複数のブースターが一斉に点火する。

「ハハ……は？」

そして、ブースターで加速された剣が、先ほどのベルディア以上の速度で、砕かんばかりの勢いで剣の腹へと迫る。

「チィィィッ!!」

「気づくのが遅い。剣が堅くても脳まで固いんじゃ宝の持ち腐れだな」

何とか後ろに飛んで回避するも、ベルディアの剣には大きな刀傷をつけてやった。

もう盾のように使うことはできないだろう。

ベルディアは自分の首を剣の前に持つてくる。

デユラハンなりの目の落とし方だろうか。

「思った以上に……やるじゃないか」

「君は思ってたより大したこと無いな。他の幹部もこんなもんなのか？ 幹部を倒して結界を解除した暁には、真つ先に魔王城にミサイルを叩き込んでやるよ。……行軍中の君にやったようにな」

その言葉を聞いたベルディアの剣を握る力が、ギリツと音を立てて強まる。

そして、怒りに身を任せた強烈な斬撃を放ってきた。

剣と盾がぶつかり、今迄で一番大きな金属音があたりに響く。

「あの時のことは忘れもしないぞ!! 鳥は歌い、花は咲き誇っていたあの麗らかな一日!! 日光を苦手とするアンデッドの俺達でさえ、上機嫌になるあの行軍の中!! 突如した風を切る音!!」

ベルディアの剣に、さらに力が籠められる。

柄はギリギリと音を立て、受け止め続ける僕の足元の地面に亀裂が入り始めた。

「何かと思つて空を見上げた次の瞬間!! 気が付いたら辺り一面の大地ごと吹き飛ばされていった!! 転がってつた首を日が暮れるまで探し続けた辛さが貴様にわかるか!？」

少々かわいそうに思えてきた。

……流石に真正面から戦つてやるべきだろう。

盾の裏から推進リパルサーを照射し、シールドバツシュでベルディアの剣を弾く。

僕は後ろにたたらを踏むベルディアに剣の先を向け。

「君の首でゴルフやって悪かったな。お詫びに君の土俵で戦つてやるよ。ナメてるんじゃない、本気で言つてる」

「……これ以上、この俺を怒らせてくれるなよ……!」

己が剣の達人であることに誇りを持つているのか、軽々しく剣での戦いを申し出た僕を睨みつけ、兜の奥から唸るように声を出す。

しかし、それもつかの間。

一度鼻のため息をついて気を落ち着かせると、真剣な眼差しで僕を見据えて。

「……だが、そう来るのであれば是非も無し。俺も小細工無しで、真つ向から叩き伏せて見せよう。……そういえば、貴様の名前をまだ聞い

ていなかったな。名はなんという？」

そう言つて、再び強く剣を握り直し、ベルディアは腰を落として構えを取った。

「トニー……いや——」

構えたベルディアに応えるように、正面に盾と剣を突き出し、フアランクスのような構えを取つて名を名乗る。

「僕はアイアンマンだ」

ベルディアはふむと唸つて。

「あいあむ……少々長いな……アイアンマン……と呼ばせてもらおうか……」

ベルディアの重心が前へと傾く。

もう今にでも切りかかつてるだろう。

西部劇の決闘シーンのような、ピリピリと張り詰めた静かな風が僕とベルディアの間に流れる。

丸まった枯草が転がってくれば完璧なんだがな。

そして……。

「では行くぞ！ アイアンマン!!!」

地面を踏み砕かん勢いでベルディアが一步踏み出し……。

『セイクリッド・ターンアンデッド』!!」

「あひいいいいいい!?!」

そのまま、光の柱に包まれて悲鳴を上げた。

……。

……。

「お前なにしてるの？」

静まり返った空気の中。

後ろの方でカズマの呆れかえったような声が聞こえて来る。

僕が振り向くと、アクアはただただ不思議そうな顔をしていて。

「……な、なに？ どうしてみんな私を見てるの!？」

「いいところを持っていきたいという考えは紅魔族的にもわかりますが……いまのはちょっと……」

「魔に身をやつしたとはいえ、騎士の戦いに水を差すのはどうかと思うぞ……」

めぐみんやダクネスだけでなく、他の冒険者からも一様にして冷めた視線を向けられ、アクアの目にぶわっと涙がたまる。

「ど、どうしてそんな目を向けてくるの!?! 隙があつたから攻撃しただけなのに!!」

「いや……いい、君はよくやったよアクア。協力感謝する」

「ト、トニ、いー……」

目的はこのベルディアを倒すこと。

例え見せ場を奪われたとしても、空気が読めてないとしても……アクアは何も間違つたことはしていないのだ。

アクアが唯一の味方となつた僕にすぎるような視線を向けてくるのと同時。

倒れて悶絶してたベルディアが、体の節々から黒い煙を上げながらゆらりと立ち上がった。

人間でいう首をかしげるにあたるのか、手に持っていた首を傾ける。

「な、なんだここは……駆け出しの街じゃなかったのか……?」

「ねえ、おかしいわ! あいつ私の浄化魔法が効かない!」

凄く効いてそうに見えるのだが。

とりあえずアクアが戦力になるのは分かつた。

こうなつたら全員で叩いてしまおう。

「めぐみん! カズマ! アクア! ダクネス! 戦闘準備をしろ!

困んで倒すぞ!!」

「き、貴様さつきと言つてることが……」

「一対一で戦うなんて僕言ったっけ？　なあ、カズマ。聞いたか？」

「いや？　そんなことを聞いた記憶はございませんね」

「だよな」

僕の呼びかけに応じて駆け付けたカズマが、横で茶番に乗ってくれる。

「貴様ら……そっちがその気なら、俺にだつて考えがあるぞ！」

が、ベルディアは剣を地面に突き立て、それによって空いた右手で僕らを指さして。

「我がアンデッドナイトたちよ!!　奴らを迎え撃て!!」

どこに隠れていたのやら。

その言葉に周囲を見やると、平原の奥の方から無数の何かがこちらに向かってきていた。

「あれは……」

HUD映像を拡大して確認すると、鎧を着こんだ軍勢がこちらへと駆けてきていた。

よく見ると鎧の隙間からは、しばらく飯が食えなくなるような、気持ちの悪い腐った肉体が見え隠れしている。

これが終わったらチーズバーガーでも食おうかと思っていたのに台無しだ！

あんなのはまとめて吹き飛ばしてしまいたい。

僕はめぐみんに向かって確認する。

「めぐみん！　何が来てるか確認したか!？」

「ええ！　ズームでバッチリ見てしまいましたとも!!　これが終わったら美味しい肉でも食べようかと思っていたのに台無しです!」

「それじゃ、やることは分かってるな?」

僕がそう聞くと、めぐみんは悔しそうに杖を握り。

「そ、それが……ああも散らばってこられると……」

平原からこちらに向かってくるアンデッドの群れは一か所に固まらず、散らばってこちらに向かってきていた。

僕はカズマに顔を向け。

「……カズマ、君あれ……」

「何とかしろってか!! 無茶言うな!」

「何か策は無いか?」

「お前こそ、こういう時のためにラボに引き籠ってたんじやないのか?」

追い詰められている割には余裕がありそうなカズマ。

「その成果であいつと戦ってる。あいつは僕が片付けるから、君はそっちで何とかしてくれ。頼んだぞ」

「片付ける? 片付けるだど? 今まで葬ってきた勇者候補は、もつと敬意を払ったぞ!」

切り掛かってくるベルディアの剣を盾で止め、またシールドバツシユではねのける。

もうアンデッドの軍勢がこちらに到達してしまう。

ここはひとつ、大人として子供たちの背を押してやらないと。

「カズマ、やらなきゃ大勢の人間が死ぬ。敵を倒すカードを君は持っているだろ! 君なら……いや、君達ならできる!」

「だあああ……俺は……俺はつい最近までひきこもりだったんだぞ……それが、いきなりこんな幹部とか……ああつ、クソツ!」

しばらく髪をかきむしって弱音を吐くカズマだったが、やがて意を決した顔で頭をあげ、アクアたちの方を見て叫ぶ。

「めぐみん! お前の爆裂魔法と、アクアの浄化能力で倒す! ダクネス! 範囲攻撃しやすいようにあいつらまとめられるか!」

ベルディアと切り合うその背後で、カズマの迷いが無い指示を飛ばす声がする。

これなら大丈夫だろう。

「無論だ! さあ、腐臭をまき散らすアンデッドどもよ! この私にたかるがいい!! 『デコイ』ツ! ……………あ、あれっ!」

「い、いやあああーっ! なんで!? なんで私の方に来るの!? 毎日清く正しく生きてる女神なのに! カズマさーん! カズマさん助けてええええっ!!」

「あああああ!! このバカッ! こっちくん!! ほ、他の冒険者

のみなさーん!! 助けて! 助けてーっ!!」

ああ……………振り返って見なくてもわかる。

きつとダクネスのデコイが意味を成さず、アクアにアンデッドがたかり、アクアが喚いてカズマの元へ……………。

大丈夫だと思いたい。

いや、そう信じて目を背けないとどうしようもない。

僕と相對するベルディアは、僕の背後で何が起こっているのかを確認できているにも関わらず、何が起きているか理解できないといった様子で。

「こらっ! なぜプリースト一人にそんな構うのだ! 俺の戦いに邪魔が入らないように、他の冒険者連中を血祭にあげんか!」

「君の忠実なしもべとやらは、酒飲み娘のおっかけにジヨブチェンジしたようだな」

「や、やかましいっ!」

軽口を叩きながら、ベルディアと剣を交える。

ギチギチと剣と剣の間から音が響く。今にも火花が飛び散りそう
だ。

「この俺の膂力に対し一歩も譲らんとは! 楽しませてくれるな!

そら、もつと力を見せてみる!」

「いいか、僕から一つアドバイスしてやる。勝敗つてのはな、腕力じゃなく発想力で決まるんだ」

僕はMk. 46に新しく追加された機能を起動する。

「――攻撃パターン分析」

『スキヤン中……………!』

▽

「どわーっ!! 誰か、教会に行つて聖水をありつたけ持つてこい!!」

「プリースト！ プリースト何とかしてくれー！」
押し寄せたアンデッドナイトの群れに、あわてふためく冒険者たち。

ボロボロではあるが、鎧をしつかりと着込んで武装したそいつらは、この駆け出ししかいないこの街の冒険者たちにとって十分脅威となる。

だが、その大半はというと……。

「ああああーっ!! カズマさん!! カズマさん何とかしてー!!」
「だから何でお前はこっちくるんだよ!! ご自慢の浄化魔法で何とかしろよ!!」

「こいつらなぜか消しきれないのよ!! 晩御飯のおかずゆずってあげるからなんとかしてー!!」

アクアに凄いい勢いで群がっていた。

むしろ俺の晩のおかず全部あげるからこっちこないでくれ。

でもこれは……なんとかできるかもしれない!

「めぐみん！ 詠唱して待機してろ！」

「は、はい！ 了解です!! あの、撃つときは十分距離を取ってください!! レベルが三十を超えているので、かなりの広範囲が吹っ飛びます！」

「わ、私はどうすれば……」

おろおろしてるダクネスに俺は走りながらトニーの方を指さして。

「ダクネスはトニーの援護に……」

そう言つてトニーの方へと顔を向けるが……。

そこには、生物の限界を超えてるとしか思えない速さで切り合うトニーとベルディアの姿が。

なにあれ。チートかな？

「き、貴様、名うての剣豪だったのか!? なぜ俺の剣の速度についてこれる!?!」

「あんたの動きをスキャンした。次にあんたがどう動くか、僕には手に取るようにわかるんだよ」

ダメージ自体はトニーの方が深刻だ。

切り合うたびに剣や盾のパーツが少しづつ崩れてしまっている。だが、パーツが破損するたびに空に飛んでいる球体から次々と新しいパーツが供給され、まるで無傷のままかのように戦い続けている。とりあえず増援はいらなさそうだ。

「さ、作戦変更！ ダクネスは危なそうな冒険者や詠唱中のめぐみんを守ってやってくれ！」

「りよ、了解！」

今にもやられそうな冒険者たちの方へと駆け出すダクネス。

あとは……。

「魔法使い職のみなさーん!! 凍結魔法の準備をしてくれー!!」

俺が大声でそう叫ぶと、アンデッドナイトがアクアに流れたことによつて余裕ができた魔法使い職が、何がしたいのかとうろたえながらも次々と詠唱を開始する。

街に被害が及ばないよう、俺はアクアに追いかけられながら街の城壁からできるだけ離れていく。

そして走りながら顔を後ろに向け……。

「アクアーっ!! ジャンプしろ!!」

「ええっ!? いきなり何!？」

「いいからジャンプして俺の方に飛んで来い！ 全力でだ!!」

「わ、わかったわよ!! 『パワー』 ツ!!」

自分に支援魔法をかけたアクアが俺の方へとジャンプする。

流星は上級職と言ったところか。一足で一気に俺の方へと飛んで、拳を突き立てて着地……。

「へべえあつ!!」

……できず、見事に顔面スライディングを決めた。

いつも楽しそうだな。

俺は群がってこちらに向かってくるアンデッドナイトたちの足元めがけて、俺は魔力のほとんどをつぎ込んで詠唱し……。

『クリエイト・ウォーター』 ツツツ!!」

盛大に、水をアンデッドナイトたちへとぶちまけた。

当然、俺の魔力程度でアンデッドナイトの群れを押し流せるなんて

思っていない。

精々がぬれねずみにする程度だ。

でも、狙いはそうじゃない。

「今だああああ!!」

「『フリーズ』! 『フリーズ』!」

察した魔法使い職たちが一齐に氷結魔法をアンデッドナイトの群れに打ち込む。

「『オ、ア、アアア……』」

アクアに向かって駆けていたアンデッドナイトの群れの動きが一気に遅くなり、やがて止まる。

長くは止められないだろう。でも、まとめた状態で、距離を取れるだけの時間が取れば十分だ。

「めぐみん! やれーっ!!」

「おおっ! なんというお膳立て!! 深く感謝しますよカズマ!!」

めぐみんの持つ杖の先に破滅の光が宿り、アンデッドナイトの群れへと向けられる。

「めぐみん、ちよつと待て!!」

声が出た方向に顔を向けると、そこにはベルディアと切り合うトニーの姿が。

「こんなところでお預けですか?! ダクネスじゃないので勘弁してください!! ボンツとなりますよ!!」

「な、仲間からの変態扱い……」

トニーの背中から白いバーナーが噴き出て、その背後に巨大な砂煙が上がる。

その推進力とパワードスーツの力を使ってベルディアを空へと弾き飛ばし、さらに盾と剣を巧みに使ってベルディアの剣を弾く。

「ほ、本当に何なのだ貴様の鎧は?! なんて剣が自分の元へと飛んで来るのだ! なんて背中から火が出て飛ぶ……」

ベルディアが最後まで言う前に、トニーの両腕から剣と盾がパージし、新たな武装が換装される。

その武器の姿は、言うなればスタイリッシュな鉄塊。

ぶつ壊す。と、武器が主張してくるかのような、圧倒的な存在感と威圧感。

破城槌バタリング・ラムがトニーの両腕を覆っていた。

「お、おい……………そんな物騒な物で何をする気だ……………？ ま、まさか……………」

「君を殴る」

驚愕の声を上げるベルディア。

トニーはその両腕の鉄塊を、剣を弾かれてガラ空きになったベルディアの腹へ、肘部からバーナーを噴射して超高速で叩き込んだ。

エルボーロケットかよ。

「うぎやあああああっ!!!」

体をくの字に折って、ギャグマンガみたいな挙動で飛んで行ったベルディアは、そのまま氷漬けになったアンデッドナイトの群れへと……………。

「オマケも付けといたぞ！ ぶちかませ爆裂娘！」

「流星は我が恩師!! さあ、ベルディアよ!! その目に焼き付けるがいい！ 究極の戦術破壊兵器たる、我が爆裂魔法の威力を!! 『エクスプロージョン』 ツツ!!」

めぐみんの杖の先から放たれた光は、一瞬だけ周囲を白く染め、猛烈な破滅の旋風をまき散らした。

熱を纏った強烈な突風が吹き荒れ、俺もアクアも、周囲の冒険者も全てまとめて吹き飛ばしていく。

地面に叩きつけられた衝撃で朦朧としながら立ち上がると、そこには爆裂魔法の破壊の爪痕が刻み込まれていた。

草が生い茂っていた平原は根こそぎ焦土となり、近くの城壁は砕けて大穴が空き、今も上からは火の粉が雪のように降ってきている。

そんな光景を地面に転がって幸せそうに眺めているめぐみんに俺は近寄り。

「おんぶはいるか？」

「ふあい……………おねがいます……………」

「にしても、やっぱとんでもない威力だな……………流星は三十レベル分の

ポイントを全て爆裂魔法につき込んだだけは……」

これで絶対倒しただろう。

なんて、フラグみたいなきことを考えたのがいけなかったのか。
未だに晴れない土煙の向こうからフラフラとした影の姿が。

「人間どもが……やってくれるな……!」

「あ、あれを食らってまだ生きてるだと……?」

「そんな……!」

全身のあちこちをボロボロにし、剣も大きく欠けてはいるが、今だ健在のベルディアがそこに立っていた。

「あ、相手は手負いだ! 囲んでやっちまえ!!」

それは誰が最初に叫んだか、爆裂魔法の衝撃から復活した冒険者たちが、その言葉に続いて次々と切りかかる。

「バカ! 行くな……」

「この俺をナメるなよ」

俺が叫ぶも、もう遅かった。

作戦も無しに突っ込んでいく冒険者を、ベルディアは欠けた剣で次々と切り伏せていく。

「やめろおおお!!」

倒れた冒険者たちの亡骸を見て激昂したダクネスが、横から切り掛かるも、あつさりと躲されて蹴り飛ばされる。

「うぐっ!」

「なんだその剣の腕は……貴様なんぞ切る価値すらない」

爆煙の合間から差す陽の光も相まって、倒れ伏した冒険者たちを踏み越えてこちらに向かってくるベルディアは、まさに絶望をそのまま形にしたかのようにだった。

「ア、アクア……! トニー……!」

仲間はどこかと探していると、アクアが爆裂魔法で倒れた冒険者や切り殺された冒険者の元によって体をペタペタと触っている。

あいつはこんな時に何やってるんだ!

女神として死者の冥福でも祈っているのだろうか?

「カカ、カズマ!!」

「わかってる！ トニー!! 早く来てくれー!!」

「ここにきて他人頼りですか!？」

「もう俺にやれることは全部やったんだよ!!」

半泣きでそう叫ぶと、それに応えるように背後からトニーが俺たちの前へと躍り出た。

「そろそろ終わりにしようか、ベルディア」

トニーが両手に装備していた破城槌バタリシゲ・ラムがゴトリと地面に落ち、新しい剣と盾が変形しながらトニーの両腕に取り付く。

トニーが来たことによつて俺は安心して息を吐く。

めぐみんはと言うと装備が変形した様子を見て目を光らせて。

「カズマ、もつと近くで……」

「それじゃ、このへんに置いときますね」

「ああああああああ!! 待つてください！ 巻き込まれたら死にます!! 言ってみただけなので置いてかないてください!」

心做しか、前に立つトニーがマスクの中でため息をついた気がした。



後ろの茶番劇を楽しむ二人にはさつきと遠くへ逃げてもらいたいものなのだが……。

ここから先は一撃で決まる。

巻き込まれないようにしてくれたりそれで良いが……。

僕はカズマ達に背を向けたまま注意を促す。

「カズマ、おそらく次の一撃で決まる。離れなくても大丈夫だとは思
うが頭くらいは低くしているよ」

「わ、わかった……!」

めぐみんを背に乗せた状態でカズマが地面に伏せたのだろう。

僕の背後から、なんだか恥ずかしそうな声が聞こえてきた。

「あの、この体勢顔が近くなるのでやめて欲しいのですが……」

「だってトニーが頭下げてろっというし」

「でしたら私を少し離れた位置に寝かせるとか他に方法があるでしょう！ 何故こんなくつついて寝そべるかのような……………ああ！ 顔が近いです!!」

こいつら何やってるんだ。

僕は気が緩んでセクハラまがいのことをやってるカズマに注意する。

もうちよつと待ってくれベルディア。

「カズマ、セクハラするならバレないようにやれよ。それが無理なら相手が仕方ないと思える状況を作れ。足くじいてるとか、魔力を使い果たして動けないとかな」

「……………ごめんめぐみん。俺、足くじいてるんだわ。だからこんな感じになっても」

「この流れで言って信じると思えますか!? トニーも変なこと吹き込まないでください!!」

「……………もういいか?」

呆れた様子 of ベルディアが僕を睨みつけながら、ボソリと呟く。もうとつくの前に準備完了だ。

僕は今までベルディアとの剣戟の中で崩れて落ちていたパーツの全てにアクセスする。

それらのパーツの全てが、リパルサーの噴射口をベルディアへと向けていた。

「な、なんだ……………星? あちこちで何かが光ってるぞ……………?」

「ま、まさか……………」

後ろで驚く声上がるが、ベルディアはというと。

「ハア……………なんとつまらん……………貴様には失望したぞ……………」

首を手に乗せ、自分に向けられた光の点達を、ぐるりと見渡すと、そうつまらなさそうにため息をついた。

「一流相手に同じ技を二度も……………それも、防がれた技を使つてくるとは……………呆れを通り越して怒りが湧いてくるぞ……………!」

三百六十度リパルサーの門に囲まれているにもかかわらず、ベルディアは冷静に、そして静かに怒り。

「時間の無駄だということをもう一度教えてやろう……………」
あの時のように、自分の首を上へと放り投げた――。

――僕の予想通りに。

「脱出!」

ベルディアが首を上へに投げると同時、僕はMk. 46のパーツを全てパージし、元のMk. 45の姿に戻る。

そして……………。

「へっ?」

呑気に宙を舞うベルディアの生首を、空中でキャッチした。

「な、なああああああつっつ?!!?」

生首を小脇に抱えた僕は、そのまま更に上へ上へと高度を上げる。

僕の脇から叫び声が響く。

「わ、わかった! 俺の負けだ! 降参する!! 頼む! 降りしてくれ!! 本当に降りしてくれ!!」

既に死んでるアンドレッドの命乞いには耳を貸さず、まだまだ上を指す。

アクセルの街が米粒程度の大きさに映り、やがて雲を越え……………。

「わかった!! 望みはなんだ!? 俺がなんでも叶えてやろう!! 莫大な富もある!! 女は…………用意できないが、他にも俺が奪った領土や俺が元から持ってた土地なんかを……………お、おいつ! 聞いているのか!? ああ……………? まだ昼時なのに空が暗く……………あ、ああああああ!!」



――宇宙。

上も下も右も左も。

見渡す限り星の光が瞬き、その光景に思わず息が漏れる。

あれはこの星を照らす太陽の役目をしている恒星だろうか。

僕の世界の太陽系と全く変わらないように見える。

それにしても、美しい場所だ。

「君もそう思うだろう？ ベルディア」

「……………ッ……………ッ……………」

何を言ってるかさっぱり聞こえない。

まあ、当然だ。宇宙空間なんだしな。

最後にベルディアの目を覗き込む。

その瞳は、見えるもの全てを目に焼き付けんと、必死になっている

ように見えた。

ボクはゆつくりと手に持っていたベルディアの生首を離す。

無重力状態なので、僕の手を離れた生首はフワフワと漂い出す。

マスク越しなので見えないだろうが、僕はベルディアにウィンクして。

「じゃあなベルディア。ペイル・ブルー・ドットを楽しんでくれ。達者でな」

ベルディアの額に、兜越しにデコピンを食らわせた。

クルクルと、縦方向に回転して遙か彼方へと消えていく生首。

この先きつと飽きることの無い楽しい旅になることだろう。

ベルディアの船出を見送った僕は、真つ直ぐアクセルの街へと戻った。

第26話?・最初に笑って、そして最後にも笑う

さて、ベルディアの宇宙旅行を見送ってからアクセルの街へと戻ってきた訳だが……………。

「……………一体何があつたんだ?」

地面には、夥しい数の文章が掘られていた。

鋭利なもので削るようにして書いたのだろう。

【殺してくれ】【殺してくれ】【殺してくれ】

【殺してくれ】【殺してくれ】【殺してくれ】

ただひたすら、そう書かれていた。

……………。

……………。

「なあ、カズマ」

「トニーが空に飛んでいってからしばらくすると、ベルディアが急に苦しみだしたんだよ。殺虫剤を吹きかけられたハエみたいな動きで」

カズマは淡々と語ってはいるが、どこか僕を責めるような、そんな雰囲気滲ませながら話を続ける。

「そしてしばらくピタリと止まったかと思うと、狂ったように剣で地面にこう書き出してさ……………暴れられたら困るって事で、ダクネスが鎧を剣で砕いて、アクアが浄化した。お前、一体何したんだよ?」

「……………頭部を宇宙まで持ってって棄てただけだ」

「……………正直引くわ」

「ギルドでパンツ脱がせ魔とかカズマとか言うあだ名が定着しつつある君にそう言つて貰えると光栄だよ」

そんなやり取りをしていると、横からアクアがケラケラと笑いながら僕の方へとやってきて。

「ねえねえトニー、つまりはこういうかしら? あのクソデユラハンは、生首ひとつで宇宙の旅に出たってこと? プークスクス!! ウケるんですけど! やるじゃないトニー! あなたを名誉アクシズ教徒に任命するわ!」

凄まじく不名誉な勲章を貰った。

メダルとして渡されたならその場で握り潰して灰にしてやりたいくらいだ。

ちよつとした侮辱に憤りを感じていると、冒険者たちの方からざわめく声がきこえてきた。

「——名誉アクシズ教徒……？」

「——あの謎鎧の男は、アクシズ教徒だったのか？」

「——目立ちたがり屋っぽそうなものもなんかそれっぽいよなあ……」

「——奇妙な奴だし、関わらない方がよさそうだ……」

魔王軍の幹部を倒したというのにこの扱いはなんなんだ……。

僕はマスクを開けて異を唱える。

「おい、僕はアクシズ教徒なんかじゃない。そこにあんた、僕を目立ちたがり屋とか言ってくれたが……」

「な、なんだよ……」

「……正解だ」

「ええっ!？」

「でもあんたはそんな僕より目立ってないし、見た目からして地味だ。そもそも、今回僕のパーティー以上に目立ってるやつが他にいたか？」

アクシズ教徒呼ばわりされたお礼に嫌味つたらしく振る舞う僕。

祝われるべきムードのはずなのに、空気はどんどん剣呑なものへと変わっていく。

「まあ、居ないだろうな。僕らが倒したのは魔王軍幹部なんだ。だってのに、アクシズ教徒呼ばわりとかあんたら……」

「だあああ……トニー、お前俺まで巻き込むなよ……ほら、さっさとギルドに行って報告するぞ……!」

「いいや、言わせる」

「いいや、行きます」

カズマは僕と冒険者たちの間に割って入り、各方面に頭を下げながら僕の腕を引っ張る。

……が、スーツを着ている僕が重いのか、引っ張るところか僕を揺らす程度にしかなくていい。

「そのパワードスーツ脱げ！ 重てえよ！ ダクネス、手伝え！」
「ああ……でも、仲間だったはずの大勢の冒険者たちが、あんなふう
に苛立ちのこもった目で見つめてくるこの状況が……」

「手伝えつつつてんだよおお！」

「ねえ待って……なんで名誉アクシズ教徒に任命がこんな不名誉扱い
されてるの……？ ねえ、おかしいわよね、めぐみん？」

「……ノーコメントでお願いします」

そもそも何の目的でアクセルに来たのかも分からないままベル
ディアは打ち倒され、祝賀会とは程遠いムードの中、僕らはその場を
あとにするのだった。

▽

その翌日。

喧騒に包まれたギルドの中で、僕らはテーブルを囲んで少し遅めの
昼食をとっていた。

前日はちよつと喧嘩腰になってしまったが、それでも街の危機を
救った英雄として、なんだかんだ冒険者達も暖かく迎えてくれた。

単に酒が入って陽気になってるだけかもしれないが。

よく見れば、ベルディアに切り殺されたはずの冒険者たちまでい
る。

アクアから聞いたのだが、どうやら蘇生魔法とやらを使ったらし
い。

人体を瞬時に修復するどころか、死人まで復活させることができる
とは。

アベンジャーズには回復役がない。

怪我したら基本は現場で応急手当をして、後は基地で本格的な治療
だ。

その点、現場でなんの道具も使わずに即座に完治させる事が出来る
のは、控えめに言ってもメンバー総垂涎物の逸材だ。

魔王を倒して僕もアクアも元の世界に戻った暁には、どんな無茶な
条件でも飲むからアベンジャーズに勧誘したい。

今のうちに唾をつけておこう。

「なあアクア、ちよつとビジネスの話を………」

「うえっへっへっへっへ!! どうしたのトニー? あなたも酒飲みならもつと飲みなさいな!! ほら、この私が注いであげるから!」

真つ赤な顔で、酒臭い息を吐きながら僕にジョッキを渡してくるアクア。

駄目だ、とても話なんて出来そうにない。

酔いが冷めるまで適当に飲み食いして待とうかと、ジョッキの中身を飲んでいると。

目の前に座っているダクネスが、隣の席のめぐみんに質問をしていた。

「それで、うちゆうとはなんなのだ?」

「私もよくは知りませんが……なんでも山百個分ほど空まで登ると、空気も重力もなく、高速で石が飛び交う空間に到達するそうです」

「……トニーはそこに行ってきたのだろうか?」

「……あの人の鎧は特別ですから」

ダクネスは『訳の分からん男だ』と、僕を見た後にジョッキに入っていたシャワシャワを飲み干して、もう一度僕に視線を向けてくる。

……その目の奥に情欲を込めて。

「ト、トニー……今度私も連れてつてくれないか……?」

「君なら本当に宇宙空間に放り出しても死にそうにないな」

今は君の妄言なんかよりも、と。ギルドの受付嬢で話をしているカズマの方を見る。

受付嬢と話したあと、カズマが笑いを堪えきれないといった、ニマニマした感じの笑顔でこっちに手招きする。

「どうしたのかズマ。顔が気持ち悪いわよ? 顔面にヒールかけてあげよっか?」

「ほーん。これを見ても同じことを言えるか?」

カズマの方へと寄ると、受付嬢が僕らに金貨が入った袋を渡してくる。

「はい、どうぞ。あなた方に報酬です」

「Wow、良いね。お小遣いを貰うなんていつぶりだろうか。今日は追加で高級なものも食べようか？」

笑いながら袋を受け取り、中身を確認していると、カズマが何も持っていないことに気がついた。

金を受け取った訳でもないのに、ニヤついた顔はそのままだ。

「本題はここからだ」

カズマがそう言うと、受付嬢が小さな紙切れを懐から取り出した。

「あの……実は、カズマさん一行にはそれらの報酬とはまた別に、特別報酬が出ています」

その一言に、ギルドのボルテージが一気に上昇する。

「さすがだぜMVP!!」

「街の救世主ー!」

湧き上がる歓声を前に、カズマはどうどうと言わんばかりに手を出す。

なるほど、それでこんな奇妙な変顔してたわけか。

その割には、受付嬢の表情が優れないのが気になるが。

「その……カズマさんのパーティーには、魔王軍幹部ベルディアの討伐報酬として、ここに金3億エリスを与えます」

「「さっ!?!」」

僕以外の四人が声を荒らげた。

三億エリス……僕の国で言うと三百万ドルと言ったところか。

五人で分け合ったら一人につき六十万ドル………。

今回制作したアイアンマンスーツ、撃ち込んだミサイル代

……………。

……………ああ、どう考えても大赤字だ。

「お、お前ら! こんな大金を手に入れたんだ、俺はしばらく危険は侵さずゆっくり生活するからな!」

「ええっ!? 魔王討伐の話はどうなったのだ!?!」

「魔王を消し飛ばし、最強の戦術破壊兵器の称号を手に入れるのですよ!! 引きこもろうとしないでください!!」

突然引きこもり宣言をしだしたカズマに、めぐみんとダクネスが慌て出す。

酔っ払ったアクアがジョッキの中身を飲み干し、プハーっと酒臭い息を吐いて。

「あんた何言ってるのよ！ 魔王を倒してくれないと私帰れないじゃない！」

そんなアクアの声がかき消される喧騒の中、受付嬢は申し訳なさそうにしながら一度めぐみんを見て、カズマに小切手を……いや、請求書を渡しながら告げる。

「ええつとですね……めぐみんさんの爆裂魔法で街の壁の一部が崩壊してしましまして……その、全額とまではいかないから……せめて一部だけでも……と」

「……………はっ？」

書かれていた額は三億四千万エリス。

その場でアクアは逃走し、こここそと逃げ出そうとしためぐみんの肩を僕が掴む。

だが、決して逃げずに問題に立ち向かえという意味ではなく。

引き戻したためぐみんの肩を軽く叩き、片眉を上げて含み笑いを彼女に向ける。

「……………サプライズを用意している時の顔してますね」

「まあ、そんなところだ」

口を開けて固まってるカズマの肩も叩いて僕は前へと出て。

「その三億四千万エリス、僕が払おう。なんなら壁の修理費も全額出す」

「三はっ?!」

逃げ出して様子を見ていたアクアも含め、目玉が飛び出そうなほど四人が目を見開く。

オーバーだな。

「トニー、分かっているのか？ 三億……いや、全額となれば、十億は超えるぞ……？」

「展示台に並ぶスーパーカーを端から端まで買うよりかは安いね」

「くっ……この金持ちめ……いや、でも……ありがとう、トニー」

「あ、あなたという人は……」

「どーいたしまして。それじゃテーブルに戻ってランチの続きを……」

そういつて踵を返して戻ろうとすると。

「あの、申し訳ありません……それが……修理代の肩代わりは出来ないようになっていんです……」

その言葉に、カズマ達の顔から光が消える。

僕は、その受付嬢に眉根を潜めて尋ねる。

「……誰の権限で？」

「ワシだ」

その声に、騒がしかったギルドの中が静まり返る。

声が出た方向に目を向けると、大柄な男が入口に立っていた。

歳は僕と同じくらいか。

禿げあがって脂でテカる頭部に、熊と豚を足したかのような毛むくじやらの体。

ああはなりたくないもんだ。

その男は、無駄に豪華な装飾が施された鎧を身にまとった複数の騎士を引き連れて、僕の方へノシノシとやってくる。

「ふうむ……貴様が……ッ!？」

しばらく値踏みするように僕を見ていたその男は、ダクネスを見つけるやいなや驚いた表情を浮かべて固まった。

……なるほど、見たところ貴族だもんな。

この国の懐刀と言われるダクネスがお忍びで冒険者としてここにいるのを見て固まっているのだろう。

よし、ここはあえて……。

「どうかしましたか？ 生活習慣病の発作ですか？」

「なっ……貴様、下賤な冒険者のくせして無礼だぞ！」

「失礼」

ちよつと煽ると顔を真っ赤にし、唾を飛ばして怒鳴り散らして来た。

どうやらプライドはベルトの上からはみ出てる皮下脂肪より厚いらしい。

とりあえず大した人間でないのはわかった。

「フンツ……貴様がトニー・スタークか……。ワシの名はアレクセイ・バーネス・アルダープ。聞いたことぐらいはあるだろう？」

「……ええ、まあ……有名ですね」

クソ領主……という意味でだが。　そうか、こんな男だったのか。

僕はとりあえず壁の補修代についてアルダープに尋ねることにした。

「ところで……なぜ補修代の立て替えを行えないように？」

「そんなものは決まっておろう。これは加害者であるその冒険者連中と、この街の領主を務めている、被害者であるワシとの問題。問題とは、起こした本人が解決するのは当然であろう？」

「そもそも領主というのは、領地の管理を行う者の事を指すでしょう。今回は魔王軍のせいどころなつた。だったら、税金を集めていたあなたはその責任をもって」

「あー……それなんだがなあ……」

アルダープはわざとらしく、うんざりとした声で言葉をささげり、作つたような困り顔を浮かべながら。

「ワシだって裕福な訳では無いのだ、壁を壊した冒険者の尻拭いなどする余裕なぞないわ。そもそも責任と言うならば、街の被害を抑えて敵を倒せなかった冒険者連中にあるのでは？」

アルダープは申し訳なさそうな顔どころか、周囲を責めるような目

線を向けて喋り続けた。

「ほれ、魔王軍幹部とやらの懸賞金とやらで貴様らは潤っているではないか。その金を充てればよいだろう」

下卑た面でそう語るアルダープに、冒険者たちも眉間にシワを寄せ、異を唱える者は一人とていなかった。

ギリツと、拳を握りしめる音がギルドに小さく響く。

呆れた領主だ、生かしておけぬ。

……と言いたいところだが、貴族の権力があまりにも増長してるこの世界では、こんなのは普通のことなのかもしれない。

——だが、だからといってそれがこの子達が不当な借金を背負わされていい理由にはならない。

「アレクセイ卿」

「……なんだ」

「お言葉ですが、余りすぎたことをしていると、そのうち酷い目に遭いますよ?」

「……ほう? ほうほうほう……それは脅しかね? ん?」

バカにしたような面をズイツと僕に近づけ、大げさに耳をこちらへ傾けてくるアレクセイ。

「いいえ、ただの忠告ですよ。私は商人でしてね。欲張りすぎた人間の哀れな末路を散々見てきましたから。あなたには善政を敷き続けていて欲しい」

アルダープは僕の今の権力、財力を知っているのだろう。

その上で、何かを狙って僕が弁償金を肩代わりするのを阻止してきたのだ。

こいつの目的は謎だ。金なんて誰が払っても同じだろうに、何故僕が払おうとするのを阻止するのか、今は分からない。

とりあえず聞かなくてはならないことが一つある。

「くだらん皮肉をいいおって……そんなものでこのワシに恥をかかせられるとでも思っていたのか?」

「それ、自分は善政を敷いてないって言ってるようなものでは

「……………？ まあ、いいでしょう。ところで、ひとつお聞きしたいのですが、何故アレクセイ卿はここに？ 借金背負った冒険者を見て笑いに来た訳ではないでしょうか？」

「僕の質問に、アルダープはそうだったと思い出したような素振りを見せて。」

「今回来た理由は他でもない、貴様だ」

「……嫌な予感がする。」

「貴様の技術力を買いに来たのだ。ワシの屋敷を、貴様のもつ技術力とやらで改築してもらいたいのだ」

「……財政に余裕が無かったのでは？」

「なあに、ちよつとした改築程度なら問題あるまい。受けない……………などとは言わんよな？」

「ここにきてまさか、僕に家のリフォームを依頼してくるとは。」

「借金云々はまるでこれが当然かのように考えているらしい。」

「……………答えは決まっている。」

「……………ええ、引き受けましょう」

「後ろでは意外そうな声が上がった。」

「たしかに、ここは突っぱねてやったほうが溜飲は下がるだろう。」

「でも大局を見るのであれば、ここは受けた方がいいのだ。」

「こいつは腐りきっている。」

「失脚させてこの街から追放するのが一番だろう。」

「ひとまずここは、相手の嫌がらせを少しでも和らげる。」

「幸いにも、そのためのカードはこいつ自身くれた。」

「引き受けはしますが、その代わりに……………今回の壁の弁償金を減額して欲しい。改築の報酬はそれで構いません」

「おい、トっ……………」

「ダクネスが引き止めようと一歩出るが、僕はそれを手で制する。」

「……………それでいいのか？」

「ええ。あなたこそ、領主としてこの事態に少しでも金を出さないと外間が悪いのでは？」

「僕がそう言うと、アルダープは願ったり叶ったりとでも言いたげに

笑みを浮かべて。

「よかろう。では、その条件でワシの家を改築せい。なるべく早めにな？」

「ええ、準備が出来次第すぐにでも」

それを聞き、満足そうに踵を返してギルドから出ていくアルダープ。

静寂が包むギルドの中で、最初に口を開いたのはダクネスだった。

「トニーー！　なぜあんなことをした!?!」

「あれがベストなんだよ。というか、どうなってるんだ？　なんであんなめちやくちやがまかり通ってる?」

僕がそう聞くと、ダクネスは僕の方へと来て、他人に聞こえないように小声で耳打ちしてきた。

「あの男は、トニーの言う通りめちやくちやな奴なのだが、その証拠が一切出てこない、かなりのやり手なのだ。私も……我がダステイネス家も見張り役としてこの街に配属されている」

「H m m……なるほどな、まあ見てろ。あいつは僕が潰してやる。クレアも味方してくれるだろう」

「ま、まてー！　シンフォニア家の者を巻き込むな!!　いつのまに名を呼び捨てる仲になっておるのだ!」

不器用なくせに、小声で怒鳴るといふ器用なことを続けるダクネス。

そんな彼女をなだめ、申し訳なきそうにこっちを見ているカズマとめぐみんの方へと向かう。

「どうした？　借金を減らしてやったんだぞ、もっと嬉しい顔しろよ」「トニー……」

「壊したのは私ですのに……結局またあなたに頼る結果に……」
「気にするな。いい作戦が浮かんだんでね、その第一段階のついでだ」

その言葉に不思議そうに首を傾げる二人。

証拠が出ないと言うなら、僕が掴んでやろう。

あいつが改築してくれと頼んできたのはむしろ都合だった。

「改築……つまり、家を好きに弄つていいってあいつは言ったんだ。

カズマ、めぐみん。君たちなら、アルダープがどんな誤算をしたか分かるだろ？」

それを聞いたカズマとめぐみんが、何かを察し、そして悪い笑みを浮かべた。

せいぜいふんぞり返ってればいい。

あんたがどんな汚い手をおおうが………。

こつちには筒抜けになるだろう。

「ね、ねえ……二人ともどうしちゃったの？ あの変なおじさんに色々言われておかしくなっちゃったの？ 注意してきてあげよつか？ ね、ねえつてば……ねえ!? 本当に大丈夫!? 頭にヒールかけたげるわよ!?!」

僕とめぐみんとカズマだけが、小さくなっていくアルダープの背中を汚い笑みで見守っていた。

第27話 ゴースト・バスターズ

アルダープとの交渉の後、ギルドは多少重苦しい空気になったものの、その後も宴は続いていた。

意気消沈してる僕らの席に配慮しているのか、壁や報酬金の話は出さないようにしていたが。

「なっつっつとくいかないわー!」

空のジョッキを机にたたきつけるようにして置き、大きな音をたてるアクア。

横にいたダクネスがまあまあとなだめにはいる。

「トニーのおかげで借金が一千万エリスも減ったのだ。それで良しとしようではないか」

「それでも三千万エリスの借金だけどな……はあ、壁の弁償代が三億四千万……あのハゲデブの家の改築依頼の報酬が一千万……そして、ベルディアの懸賞金が三億……おかしいだろ、もつと高い懸賞金がかかってたつていいだろ……安物デユラハンめ……」

宇宙に放逐されたばかりか、安物呼ばわりされるベルディア。どうか安らかに眠れ。

「で、トニー。アルダープに何をするつもりなのだ?」

つまみを食べながらダクネスそう尋ねてきた。

僕はアクアの空ジョッキに酒を注いでやりながら。

「家の改築に合わせて、あいつの家に監視装置を取り付ける」

「ついでにトイレに入ったら便器が打ち上がるようにしようぜ」

「検討しよう」

「……それはあれか? 銀髪の義賊捕獲作戦の時に使ってた、遠隔で見れる魔道カメラのことか?」

「その通り、言つとくが、魔法の道具じゃないからな」

おっさんの私生活を覗くなんてゴメンだ。と、カズマがシャワシヤワを飲みながら愚痴る。

全く同感だ、罰ゲームより酷い。

が、途中で何かに気が付き、ハッと顔を上げ……。

「なあ、あのいやらしそうな顔したおっさんさ……」
同じ男として気がついてしまった。

よせ、やめろ。その先は言うな。

僕の心の願いと裏腹に、カズマは話を続ける。

「悪徳貴族らしく、美人のメイドとか侍らせてたりするの？」

その言葉に、ダクネスは顔をしかめながら頬を赤らめるという器用な顔芸を披露しながら。

「ああ、アルダープは無類の女好きだ。メイドをとつかえひつかえしては……孕ませて捨てるなり好きにしてる………んっ………」

「………興奮するなよ」

ダクネスにドン引きするカズマだったが、そうかと腕を組んで唸る。

「……カズマ、今考えていることは口に出すなよ。僕まで同類にされたくないからな」

「な、なんだよ。監視に賛成だって言おうとしただけだし」

「なんでメイドの有無を聞いた？」

「ただの世間話ですー！　すぐそういう発想に行き着くトニーの方がエロいですー！」

「まだ何も言っていないんだが………」

やっぱり監視という役につけこんでメイドの着替えなり風呂なりを見ようとしていたようだ。

エロガキめ。

………気持ちにはわからなくもないが。

めぐみんも分かってしまったようだ。

カズマをジト目で睨みながら。

「まあ、証拠をもみ消すのがいかに上手いにしても、この国では未知の技術である科学技術で掴むことができるでしょう」

「科学無双とか、ほんとタブーよねー………」

………この女、僕を選んでこの世界に送った張本人なんだが。

「君本気で言ってるのか……？」

「トニー。こいつはな、三歩歩くか酒を飲んだら全ての記憶が無くな

るんだ」

「羨ましいね」

「ねえ、今なにか言ったー……………?」

赤ら顔で気だるげにこつちを睨んでくるアクア。

「いいや、なんでもないさ。ほら、ジョッキ出せ、注いでやるよ」

「ふふん、気が利くじゃないのトニー。本当にアクシズ教徒に入るつもりはないのかしら?」

「ない」

なんでよー。と、注がれた酒を一気に呷るアクア。

彼女の見ている気持がいい位の飲みっぷりは気に入ってるが、せめて飲み仲間程度としての付き合いでいたい。

だらしない顔で口周りを泡だらけにするアクアを眺めていると、ダクネスとめぐみんが不安げな表情を浮かべながら。

「もしトニーがアクシズ教徒になってしまったら……………」

「スピーカー付きの宣伝ドローンが街中を埋めつくし、洗脳電波が空を汚染し、アクシズ教徒達が世界のパワーバランスを塗り替える……………この世の終わりですね。魔王軍に人類が敗れる方がまだマシです」

▽

その後も昼から始まった宴という名の残念会は夕方まで続いた。

……………と言っても、その内容のほとんどは領主や現状についての愚痴のオンパレードだ。

途中でカズマが酔いつぶれて倒れてしまったため、ダクネスが購入したばかりの屋敷へと運んで行った。

まだ大した荷ほども済んでいないだろうに、床にでも転がすんだろうか。

気を失いかけるほど飲んだ後に寝る、冷たい床の感触の気持ちよさはきつと癖になる事だろう。

……………十六歳で癖になってほしくはない感触だが。

めぐみんは酒を飲ませてもらえず、不貞腐れながらジュースを飲ん

でいたが、今日の爆裂散歩がまだだったらしく、ダクネスを誘うと残して屋敷の方へと向かっていった。

「はあ……お酒を飲んでる時間は嫌なことも全部忘れられるわ……」
「そのセリフが出始めたらそろそろヤバいぞ。僕が言うんだから間違いない」

三人がいなくなり、必然的に僕とアクアだけが残ったのだが、ほとんどヤケ酒と化してきている。

「女神は雲の上みたいなどころにいて、ハープでも弾いて果物とか齧ってるストレスフリーな生活してると思ったら大間違いなんだから！」

そう言つてさらに酒を流し込むアクア。

顔は真っ赤だし、これ以上はやめさせたほうがよさそうな気もするが、まあ……。

飲んでストレス発散することも大事だろうし、この際だから飲み仲間として付き合うことにした。

……したのだが。

「——そう！ それを言ってるのよ!! 毎日起きてこの服に着替えるとその瞬間からもう書類の束が見えてきてしまうの!!」

「ああ、あー……僕は神じゃないから君の気持ちはよくわからないが……」

「でもなんとなくわかるでしょ!? あなたも人をまとめ上げる立場だったんだから！ 書類仕事とか大変だったでしょ!？」

「いや……そう言ったのは、ほとんど秘書にまかせつきりで……」

「うらやましいわねー！ 私なんて上司にしたくない女神ランキング毎度第一位よ!? 部下がなんだか冷たいの！ 逆に上司にしたい女神ランキング第一位は誰だと思う!? そう、あのエリスよ!? 私の方が先輩なのに！」

数時間アクアの愚痴は止まる気配を見せない。

もう外も真つ暗で他の客もいないし、従業員にはなんでまだいるんだ？ って目で見られている。

流石に疲れてきた。

僕はセラピストじゃない。

「女神の中にも人間関係……いや、神様関係？ どっちでもいいか。まあ、そんなものがあるわけだ。僕みたいに、部下に慕われるように君も頑張れよ。……ごめん嘘ついた。僕は女性以外にはあまり慕われてなかった」

そこでふと思いついた。

丁度今二人きりなんだし、アベンジャーズに来る気はないか誘ってみよう。

どうせなら素面の時に聞かせておきたいが、こいつは素面の時間の方が短いし、案外酔ってる状態の方がまともに話ができるかもしれない。

「なあ、アクア。ちよつと僕の話も聞いてくれないか」

「いいわよ、あなたの愚痴も聞いてあげようじゃない」

「いや、愚痴じゃないんだが……僕が魔王を倒したら、僕はその願い事とやらで元の世界に帰すよう頼むつもりなんだ」

「あら、良いじゃない。ちよつと寂しくなるかもだけど、天寿を全うしたらウチに遊びに来なさいな。その時は、おいしいお酒とジャンクフードを用意してあげるわよ？」

そう言っただけで女神の名にふさわしい優しい気な笑みを浮かべてつまみをかじるアクア。

飲んだくれてるか、やらかしてる姿ばかり見てきたので、こういう一面には少々面食らう。

「うれしいね……それじゃ、五十年後とかにでも」

「それならすぐね！」

「冗談はさておき、僕が元の世界に戻ったら、君をアベンジャーズのメンバーとして迎え入れたいんだ」

「ブーッ!!」

「ぐああああああ」

アクアが飲んでた酒が僕の目にクリティカルヒットし、思わず目を抑える。

この女いきなり何してくれてんだ。

僕はウェイトレスが持ってきてくれたおしぼりで顔をぬぐいながら。

「……不満があるなら口で言ってくれ……いや、実際口で言ったなら……なんでもない」

「ち、違うの！ 単純にびっくりしただけよ!! なんで私を誘うわけ!?! 私は女神だから癒す力しかないんですけど!」

「それだよ」

僕はつまんだフライドポテトをアクアにピツと向けて。

「君のその癒しの力が必よ……違う、あーんしてるんじゃない。僕のポテトを取るな!」

僕がつまんでたポテトをカラスか鳩みたいに啜えて持ってたアクアはふんふんと唸りながら。

「この美しい女神の力を欲しているのはよく分かったわ……でもねトニー」

「キメ顔するなら口の端についてるケチャップを拭いたらどうだ?」

「天界は天界で忙しいのよ……世にも恐ろしい存在が星々に悪影響を及ぼさないように監視してるの……」

サツと口元を拭ったアクアが、胸に手を置いて静かに語り出した。

「いい? 私たち神々の役目はね、外の世界から来た悪しき存在、あるいはその星の中で大きく成長しすぎた巨悪から、星に元からいる生命を守ることなの」

「中々大きく出たな」

「ちよつと! 真面目に説明してるんだから茶化さないで! ……そして、危ないと思われた星には……」

「強力な武器や能力を渡した未練の無い善人を送るって訳か……」

「そうよ。と頷き、喋って乾いた喉を潤すようにシャワシャワを一気に煽る。」

派遣会社みたいだな。

「ぷはーっ！　ここに来る前はなんだったかしら……ああ、ドルマムウなんて名前の存在が特別監視対象になってたつけ……まあ、そんな感じで私にも仕事があるからトニーの世界の援護は難しいわね……」

残念そうに首を振り、飲み足りないのか、自分の空になったジョッキをみやり、僕のコップをとって飲み干した。

「おい、それウイスキー……」

止めたが遅かった。

度数四十近い酒を一気飲みしたアクアは……。

「………ヴァ」

クソ。

「うづええええっ！」

酒と飯と胃液がシエクされた虹色のカクテルを、盛大に机に撒き散らした。

………。

机に広がる虹を見たアクアは、壮大に語ったあとのこの有様で恥ずかしいのか、借金の件で落ち込んで何か色々込み上げてきたのか。

「うっ……うっ……ごめんなさい……ゲロ吐く女神でごめんなさい……」

そのままさめざめと泣き始めた。

「……帰ろう。肩貸してやるから」

口と胸元をゲロ濡れにして、涙を流すアクアの姿はとても見れたものじゃない。

そのあまりにも悲しい光景に顔を手で覆って今日一番のため息を吐いた。

▽

引越してバタバタしてる新居にゲロにまみれた女を置くわけにもいかないので、僕のラボに運ぶことにした。

床に少し垂れたのでダミーに掃除しろと命じたら、『マジ?』と

言いたげに首をかしげていたが、きつと気のせいだろう。

とりあえずアクアはバスルームに叩き込んでおいた。

あとは勝手にシャワーを浴びるなり服を洗うなりして欲しい。

作業室に戻ると、そこにはモニターにゲーム機をつないで遊んでるカズマの姿が。

「君なんているんだ？」

「酔いがさめたからな。久々にゲームやりたくなってこっちに来た」

レーシングゲームのランキング欄を自分の名前で埋め尽くしながら、カズマがそう笑った。

「引越したばかりだったのに、ここに入り浸りで良いのか？」

「どうせ隣同士だし、馬小屋暮らしの冒険者は荷物も少ないからな」

というか。と、カズマは付け加えて。

「アクアが浄化するまで、悪霊がたくさん住み着いてるとかいう屋敷にいたくない」

「……………今めぐみんとダクネスは屋敷だよな？」

「ダクネスがいるし大丈夫だろ。一応クルセイダーだし、神聖魔法も使えるはずだろうしな」

「あいつが防衛系スキル以外にポイント振ってると思うか？」

とても静かな沈黙が流れる。

彼も気がついたようだ。

「……………アクアは？」

「飲みすぎでギルドで吐いたんで、シャワー室に入れといた」

「トニーからちよつと酸っぱい匂いがするのはそういう事だったのか」

「ああ」

……………。

「さて、マズいことになったな」

「スーツを装着する」

作業室の壁に飾られていたMk. 45が起動し、僕の体を包む。

カンツと、マスクを閉める甲高い音が鳴り渡った。

「君はどうする?」

「悪霊相手に俺何ができるんだろ……」

「よし分かった。それじゃ君はここで——」

待機してろ。と、言おうとしたその瞬間。

部屋に轟く爆音と、体が宙に浮いたと錯覚してしまうかのような、すさまじい衝撃。

轟音と共に床が爆発するように隆起し、その下から巨大な影が現れた。

「!?!」

すかさずカズマを抱えて距離を取り、床から現れた謎の攻撃者に掌を向ける。

少しずつ薄くなる砂煙の中から浮かび上がったそれは……。

『目標ロスト。モクヒョウろすと。あゝ、全隊死亡。孤立無援。ああああ』

酷くノイズがかかった音声を鳴り響かせながら、ガクガクと動く——

「ト、トニー……」

「どうなってる……」

——ズタボロのハルクバスター^ロアーマー^ニだった。

ホーストとの戦いでメチャクチャになり、それから特に修理することもなく放置していたはず……。

『負傷ヘイ多すう。出血多量。四肢断裂。穴穴穴。け……け頸動脈……あゝああ。安楽死を推奨』

ノイズを発しながら、ぐちゃぐちゃになってオイルも垂れている手足を引きずり、這いずりながらこっちへ来る。

横でカズマの顔がサアツと青ざめた。

「トツ……トト、トニー!! なんかあいつむっっちゃくちや怖い!! 身の毛がよだつ!」

「同感だ」

薄気味悪い声で鳴くベロニカに掌を向け、リパルサーを叩き込むが……。

「……さすがは僕が作った優秀なスーツだ、まるで効いてない」

「だてに人類随一の知力持ちを名乗ってるわけじゃないな。早く何とかしてくんない?」

ギギギと鈍い音を鳴らし、こちらに掌を向けるベロニカ。

『援軍要請。えん……よ』うせい。市民の殺害許可がみとめられました』

「危ないー!」

再びカズマを抱えて横へと飛んだ。

最大出力で放たれた光線がついさつきまで僕らが居たところを通り過ぎる。

はるか向こうの部屋まで風通しが良くなった。

何者か知らないが弁償してもらおうぞ。

「さて、ズタボロとはいえあれを倒すのは骨だな……別のやり方で行こうか。フライデー」

『解析結果が出ました。未知の命令システムを確認。これは……パターンが脳波に似ています』

「……ゴーストが憑りついてるのか」

とても科学者である自分の口から出た言葉とは思えない。

だが、実際に存在するモンスターで、人形などに憑りついて人に害を為すそうさだ。

『あゝ ああアゝ あ……身元不明、の遺体を、二十、体発見……後に続いてくダさい……あゝ、あゝ、あゝ』

「クソツッ! 気味が悪い! カズマ、君はここから脱出してアクアを連れて屋敷の方へ行け、あっちの方が心配だ!」

「……まてよ」

カズマは手をベロニカへと向け魔法を唱えた。

『『ステイール』!』

……なるほど、カズマは機械系の敵への対処法を既に知ってたらしい。

カズマの突き出した手の上には、ベロニカの部品がしかと握られていた。

見事と言いたいが、一つ誤算があるとすれば……。

「あああああつちやああああ!! 手があ!! 手が焼けるううううつ!!」

電気が通っていた、高熱のパーツを握り締めたカズマが床に転がりのたうち回る。

……なんのパーツを握ってしまうかを計算していなかったようだ。というか、カズマが握りしめていたそのパーツは……。

「ごめんな、カズマ。君の手を焼いたソレ、ステイール対策にダミーとして僕が仕込んだ高熱パーツだ。爆発物にアップグレードする前だよかったな」

「なにもよくねえよ、このマッドサイエンティストめが」

怨嗟のこもったうめき声が足元から聞こえて来る。

抜き取ったのはダミーパーツのはずなのだが、動きが鈍ったうえに、大きな隙ができた。

憑りついて動かしているから、体の一部を取られると痛みでも感じるのだろうか。

『処刑台、階段……未ダ……ノぼル……』

「長期休暇を与える。もう休め」

ベロニカのボディに入った亀裂の隙間に手をつ突っ込み、高出力のリパルサーを中で炸裂させる。

「どわああー!」

内側から爆発が起こり、ベロニカは咲いたチューチップのような有様になって床に転がった。

こいつは修理が大変そうだ……。

「さあ、次は屋敷の方へ行くぞ。ダクネスはともかく、めぐみんが心配だ」

「ああ、屋敷が消し飛んだらこま……」

ギギギと、金属がこすれる音が鳴り、僕とカズマがゆっくり振り向く。

「……冗談だろ」

「あ、あれで動くってどうなってんだよ……」

裂けた胴体をグラグラ揺らしながら、這いずってこちらへ向かってくるベロニカ。

もつと高威力のもので完全にバラバラにするしか無さそうだ。

だが、これ以上強力な攻撃を行うとカズマを巻き込む可能性があるし、フロアが崩落しかねない。

「ダメージ覚悟でステイールするか……？」

『……あゝア……援軍……なゝシ……』

「や、やっぱやりたくねえ！」

異様な雰囲気を放つベロニカを前に、カズマが怖気づいて僕の後ろに隠れてしまった。

「しようがない……カズマ、もつと遠くへ行ってる。非常にやりたくないが、火力を集中させてバラバラに——」

『『ターンアンデッド』ッ!!』

『あゝあゝあゝあああ……』

覚悟を決めたところでベロニカの全身が白い光に包まれ、そのままピクリとも動かなくなった。

声が出た方向に顔を向けると、バスローブに身を包んだアクアが、すつきりした顔で立っていた。

「ふう……吐いてスッキリ、シャワー浴びてスッキリ、アンデッドを浄化して……三倍スッキリね」

微妙な決めゼリフだ。

それっぽいこと言おうとしてしっかりとダサいのがアクアらしい。

『……なんでバスローブなの?』

「だって着てた服は全部洗濯に出しちゃったんだもの。というか、このバスローブ丈が長すぎるんですけど。体に合う服はないの? このままじゃ私のセクシーな姿に欲情したヒキニートに襲われかねないんですけど」

「ふざけんな、俺にだって選ぶ権利はあるんだぞ。でもな駄女神……良心的な意味合いで、お前を裸にひん剥くことにはなんの抵抗もない

「からな……」

「う、うそよね……？　なんだかんだで一緒に汗を流してきた仲じゃない……これしか纏ってないから、本当に駄目よ……？」

絶望の表情を浮かべて後ずさるアクア。

今の状況を理解してない二人を、僕は咳払いして黙らせる。

「おい、ふざけてる場合じゃないんだぞ。今も屋敷の方でめぐみんとダクネスが悪霊に襲われてるかもしれないんだ、分かってるのか？」

その言葉に、カズマはハツとした表情に戻り。

「そうだよ、やべえじゃん!!」

『それについてですが……』

急いで屋敷に向かおうとしたカズマを、フライデーが止める。

『その……大変申し上げにくいのですが……脳波の思念体、つまり、ゴーストの発生源をこちらで調べてみた結果……どうやら墓地に結界が張ってあったようです……それで行き場をなくした悪霊が大勢こちらに来てしまったようで……』

その言葉に、僕とカズマの視線がアクアに向いて……。

「あの……以前ウィズと会った時に……カズマさん、ウィズに代わって墓地の浄化をするようにって言ったじゃないですか……」

ぼつり、ぼつりと観念したかのように独白を始めたアクア。

一言一句ごとに、僕とカズマが睨みながらゆつくりとにじり寄る姿に少しずつ涙目になりながら自分の失敗を告白した。

「——明日、朝一で大家に謝りに行くぞ。いいな？」

「はい、すみませんでした」

今回の事件は、アクアが町外れにある墓地に結界を張ったことで、行き場をなくした霊がこちらに来てしまった事が原因だった。

悪霊のほとんどはなぜかラボの方へと来ていたので、めぐみんとダクネスは多少怖い思いをただけで済んだそうだ。

……悪霊がこつちに来たことと、アクアがここにいたことが何も関係してないと良いのだが。



その翌朝、瓦礫をちまちま片付ける僕の前に現れたカズマは、意外にも明るい顔をしていた。

「どうやら持ち前の幸運が光ったらしい。」

なんでも、アークプリーストのいるパーティーが屋敷にいれば、いずれ悪霊の噂も無くなるだろうとのことで、住み続けて欲しいと頼まれたそうだ。

なにやら、奇妙な条件を二つほど付けられたらしいが……。
そして……………。

「H m m ……いいね、文字通りテクノロジーが服きて歩いてるのが僕だが、こういう家も嫌いじゃない」

僕のラボの居住区が、先日の悪霊騒動でめちやくちやになってしまったので、今日からこの屋敷に住まわせてもらうことになった。

工事が終わるまでは当面ここにお世話になることだろう。

ある程度の荷物を床に置いた僕に、カズマが手を頭の後ろにまわしながら、得意げな顔を浮かべて近寄ってくる。

「まっ、借金返済でお世話になったしな。これくらいはおやすい御用だよ、ヒーロー」

「それじゃ、お言葉に甘えて」

案内された部屋に荷物を置いてから、リビングのソファにゆったりと座る。

「お前少しは遠慮しろよ……」

「君だって僕のラボで好き勝手ゲームしてただろ。お互い様だ」

「私も暖炉前のソファに座りたいんですけど……」

聞く耳持たずにソファで端末を弄っていると、どかない僕に業を煮やしたカズマとアクアが僕の右隣に座り、譲れと言わんばかりに二人掛かりで押してくる。

僕も負けじと踏ん張っていると、後ろから呆れたような声が聞こえてきた。

「三人とも、遊んでる場合じゃないですよ。一刻も早く借金を返さな

「いといけないのですから、何かクエストを受けに行きましょう」
「そうだぞ。少々危険だが、強めのモンスターを倒しに行かなくてはな！」

めぐみんとダクネスのその言葉に、ソファで争奪戦をやった僕ら三人は重い腰を上げて。

「……ハア、そうだったな。大きな屋敷に住んでも借金持ちか……」
「なにか楽で稼げるクエストはないかしら……」

「僕は今回ついてけないから、あんまり難しいクエストに行かないようにな？」

僕がそう告げると、四人の視線が一気に僕に集まった。

「……何言ってるの？ トニーがいないとまともにクエスト受けられないじゃん」

「それだと、私がいるとまともにクエストできないって言ってるように聞こえるんですけど」

「そう言ってるんですけど」

壮絶な頬の引つ張り合いを始めた二人の横で、めぐみんはそれを視界にも入れずに僕に尋ねてくる。

「授業の時間ですか」

「そういうこと。僕が必要なら一日待つか、夜のクエストにしてくれ」
「なら仕方ないですね。ほら、トニー抜きでもできるクエストを探しに行きますよ」

未だ頬のつねり合いをする二人の間に手を入れて引き離し、いきましようどドアに向かうめぐみん。

彼女は冷静で助かる。

「おいなんだよ、引つ張るなよ!!」

「もう大人なんですから、些細なこと喧嘩してはいけませんよ。あまり私に手間をかけさせないでください」

「手間かけさせるなどかこの口が言ってるんだよ、一発撃ったら倒れるお前をクエスト中におぶってやってるのを忘れたとは言わせねーぞー！ このロリっ子が！」

「ロリっ子呼ばわりとはいいい度胸じゃないか！ そのロリっ子に組み

伏せられる気分はどうですか!？」

前言撤回。

冷静だと思っていたためぐみんは怒りに身を任せ、レベル差にももの言わせた力技だけで、それはもう見事なりストロックをカズマにかけていた。

「いだだだだだ!! レベル差考えろよ!! コノヤロウ、そつちがその気ならこつちにも考えがあるぞ!!」

「ほうほうほう! この状態からあなたに何ができあああああああああああ!？」

リストロックが完璧に決まっているにも関わらず、なぜかめぐみんが悲鳴を上げて地面を転がった。

たしか今は……。

ウイズのところに訪ねた時に覚えていた……ドレインタッチだったか。

「なんですかそのスキルは! 反則ですよ!! 私の魔力を返してください!」

涙目で床から睨むめぐみんを、勝ち誇った顔で見下ろすカズマ。

どう考えても事案な光景を、アクアと僕は冷めた目で、ダクネスは羨ましそうな目で見ていた。

ひとしきり勝利の余韻に浸っていたカズマだったが、やがてめぐみんにもう一度ドレインタッチを使って魔力を返し、身支度を整える。「俺にだって危機感位はある。アクアじゃないが、なるべく俺達にできて、効率のいいクエストをやるぞ。あ、それとトニー」

突然呼ばれた名前に反応してカズマの方を見ると、何か光るものを僕へと投げつけてきた。

手でキャッチしたそれは、きれいな装飾が施された美しい鍵。

「この屋敷のスペアキーだ。なくすなよ?」

……なるほど。

僕は鍵の尻の方にあるわっかに指を入れ、クルクルと回しながら。

「生体認証システム付きの電子ロックに変えてあげようか?」

「ファンタジーが壊れるのでやめてください」

番外編Ⅰ

キャプテン・ベルゼルグ

——ガツーンッ

——ガツーンッ

鈍い音が周囲に響く。

木の杭を、鋼鉄のハンマーで地面に叩きつける音。

王城の庭に新たに設置される見張り台の支柱を、僕は打ち込んでいた。
た。

「いやあ、すいませんね。こんな土木仕事なんて、あなたみたいな人にさせることじゃないのに……………」

振り下ろすハンマーの手を一旦止めて、資材を運んでいた工事の親方の方を向く。

「いや、別にいいんだ。僕が好きでやってる事だから」

「本当に、感謝しますよ」

改めて礼をする親方に笑って返し、再びハンマーを振るう。

木の杭を打ちながら、少し昔の記憶に思いを馳せた。

レッドスカルのとの死闘、迫り来る氷の平原、冷たい感覚……………。

今でもたまに、夢に見る。

僕の死を察しながらも、絶対に行こうとダンスの約束をしてくれた、ペギーの声を。

全ては過去の話だ。

僕は今生きてるが、もう彼女には会えない。

正確に言うとは……一度死に、別の世界へと飛ばされてしまった。

……………だが、悪いことばかりじゃない。

何故なら——

『魔王軍襲撃警報、魔王軍襲撃警報！ 騎士団はすぐさま出撃。高レベル冒険者の皆様は協力をお願いします！』

「……………おっと、呼び出した。いけないと」

そう言っただけで地面にハンマーを置いて、戦場へと向かおうとすると、
「ほら、用意しといたぜ、ぶちかましてきてくれ、キャプテン!!」

………これ、案外軽いんだな」

ニカツとわらった親方が、僕のシールドを手渡してくれた。

「ああ、ありがとう。行ってくるよ」

——何故なら、この世界にも僕の力を必要とし、喜んでくれる人々がいるからだ。

シールドを背負って駆け出し、着ていたシャツの胸元を破くようにして開けると、その下から正装の白い星が姿を現し、陽の光を反射して鈍く輝いた。

▽

僕が前線へと駆けつけると、そこには台の上で金色の髪を振り回して指示を飛ばす女性の姿があった。

集まった冒険者や騎士団の後ろの方から彼女に手を振る。

「騎士団総員、隊列を崩さぬよう………おお！ ロジャース殿！来て頂けましたか！」

こちらに気付くや否や、明るい顔を向けてきてくれた彼女の名はクレア。

基本的に王女の側近兼、騎士団の指揮官を担っている。

僕に気がついた冒険者や騎士団達が、クレアの方へと道を開けてくれた。

「クレア、状況は？」

台にあがり、僕がそう尋ねると、明るかった顔も一変。

途端に重々しい表情を浮かべて、敵が来る平原の向こう側を睨みながら答えた。

「今回は多いぞ、指揮官も優秀な奴だ」

「敵の種類は分かってるか？」

「偵察隊によると、トロール、オーガといった前衛に、魔法が使える悪魔族で構成されているそうだ」

同じく平原の向こうをしばらくみやってから、冒険者たちの方へと顔を向け、台に設置された拡声の魔法具を手にとって指示を飛ばす。「いいか、火力で戦おうとすると押し負ける。前衛職で攻撃をいなしつつ、掘り進めた塹壕を使って盗賊職と魔法職で裏をとり、敵を十字砲火で奇襲する。それを悟られないように、残った後衛職で前衛職の裏からありったけ敵に魔法を叩き込め。温存は考えるな、陽動が勘づかれる」

その言葉に冒険者たちは強く頷いた。

作戦に不満はないようだ。

「前衛は任せてくれ、我が騎士団の得意とするところだ」

「ああ、僕は冒険者たちと一緒に戦ってくる」

台から降り、後ろに冒険者を率いて平原を進んだ。

僕が離れる前に、クレアが行く前に一つ、と僕を呼び止める。

「なあ、本当に昇格や貴族との縁談に興味は無いのか？ あなた程の男であれば、もっと高い地位に付けるぞ？」

「すまない、そういったものに興味は無いんだ。それじゃ、行ってくるよ」

残念だ、と。答えは分かっていたかのように笑って肩を竦めた。

敵部隊を迎え撃つために前線の一番前へと向かうと、僕の横に並んで立つ男が一人。

ネイビーカラーの鎧を身に纏い、装飾が施された魔剣と呼ばれる神器を腰に帯びている、茶髪の好青年。

「キャプテン、一緒に戦えて幸運ですよ」

「君も来ていたのか、ミツルギ」

「ええ、頼りにしてますよ」

そんなやり取りを終えて、敵を待っていると。

「——どっちが受けだったらいい？」

「——そりやもちろん、ミツルギじゃない？」

「——ええー？ 実はキャプテンがプライベートでは従順な……って方が……」

『『キヤーッ！』』

後ろから、そんな声が聞こえてきた。

日本語だろうか。僕には意味がわからない。

わからないが、隣のミツルギが苦い顔をしているのを見る限り、口
な意味では無さそうだ。

そして……。

「来たぞーッ!!」

アーチャー職の男が千里眼で敵の軍勢が来たことを知らせ、全員が
臨戦態勢に入る。

「ミツルギ、僕は敵に突っ込む。一緒に来てくれ」

「分かりました」

「突撃ーッ!」

騎士団の号令と共に、前衛たちが一斉に敵へと走り出した。

「迎え撃てーッ!!」

敵の軍勢も負けじと声を張り上げ、真っ向から向かってくる。

血清の力がある僕と、魔剣の恩恵を受けたミツルギだけが、並んで
走る人類側の軍勢から抜きん出て敵へと突撃する。

「『ルーン・オブ』——」

ミツルギの魔剣が光り輝き、そのまま振りかぶる。

僕も盾を手に取り、腰から腕へと力を加えて敵へと投げつけた!

「『セイバー』 ツツツ!!」

「『ぎいやああああああつ!!』」

薙ぎ払った輝く魔剣によって敵は切れ飛び、僕の投げた盾がブーメ
ランのような軌道で飛び、敵の鎧を砕いて吹き飛ばしていく。

敵を突き飛ばしていく盾は、やがて僕の方へと戻っていき……。

「今だ! 盾を持ってない今攻撃しろ!」

「頭ねじ切ってオモチヤにしてやるぜー!」

「キャプテン、僕に任せてください!」

戻ってきた盾めがけてミツルギが魔剣の腹を構え、フルスイングで
かっ飛ばした。

「ぐっはああああつ!?!」

盾がさつきとは逆の軌道を描いて僕の手元に戻ってくる。

「ナイスだ！ 君野球できるのか？」

「球技は大体得意でした！」

きつと人気者だったに違いない。

話をしながらでも、ミツルギはパフォーマンスを落とすことなく次々と敵を倒していく。

「キャプテンと魔剣の勇者に続けー！」

敵陣に切り込んだ僕らの姿を見た前衛職の冒険者や騎士団が突撃し、現場は大混戦と化した。

「全員、互いの背中を守り合え！ 後衛職の射線と被らないように気をつける!!」

「了解ー!!」

僕の声を聞いた全員が陣形を取って上手く敵の攻撃を切り抜け、後衛職とタイミングを計り……。

「『ファイアーボール』！」

「『ライトニング・ストライク』！」

「『フリーズ・ガスト』！」

様々な種類の魔法が敵の群れへと叩き込まれ、たまらず引いて陣形をとりなそうとする。

当然、そんな隙を与えてやるつもりはない。

「裏どり部隊！ 今だ！」

合図を出すと同時に、魔法職の透明化の魔法と、盗賊職の潜伏スキルの組み合わせで隠れていた奇襲部隊が姿を現し、一斉に魔法を撃ちこみだした。

当初の計画通りの十字砲火が決まり、敵は次々と倒れていく。

「撤退だ撤退！ クソ！ 覚えてやがれ!! 特にそのクソダサイ装備の盾男！ いつか絶対殺してやつからな！」

敵の指揮官が捨てセリフを吐いて逃げだした。

……そんなにダサイのだろうか。

「おい！ あいつよりもよってキャプテンを馬鹿にしやがったぞ!!」

「これだから汚い捨てセリフ吐いて逃げるあの野郎は嫌いなんだ!!」

「キャップの装備はちよつとダサイのが良いんだよ！ 待ちやがれ
!!」

フオローなのかどうか分からない怒りの言葉を上げて、鬼の形相で
敵指揮官を追いかける。

「よせ、深追いすると敵に囲まれるぞ！」

そんな僕の制止も聞かず、敵を深追いしすぎてコボルトに取り囲ま
れている一人の冒険者がいた。

「どわーっ！ マズイマズイ！ 誰か助けてくれー!!」

「今助ける！」

今にもコボルトの群れに袋叩きにされそうな少年の方へと駆け出
し、盾を投げて群れを蹴散らす。

「平気か？ 手を貸すよ」

「あ、ありがとうございます。助かった……」

尻もちをついていた少年に手を差し伸べて立ち上がらせる。

見たところ、ミツルギと同じような日本人のようだ。

彼も転生者なのだろうか。だが、それにしては……。

「見たところ君はまだ……ここに立つにはレベルが足りてないように
思えるんだが」

「いや、これにはちよつと色々事情があつて……」

「そうか。でも、今度からは仲間と離れず行動するように心がけるん
だ、何かあつてからじゃ遅いからな。君仲間はどこに」

『『エクスプロージョン』 ツツツ!!』

最後まで言う前に、猛烈な爆音と立っていられないほどの熱波を
伴った暴風が吹き荒れ、とつさに少年と共に盾の裏に隠れる。

「あの馬鹿野郎がああああ!!」

「ぐっ……!!? な、何だ!?!」

周囲にいた冒険者たちもなすすべなく地面を転がっていく。
しばらくして揺れが収まり、盾から頭を出す……。

「驚いたな……ハワードの新兵器みたいだ……」

さつきまで撤退中の部隊のいた地点には深さ数メートルはあろう
クレーターが出来ており、爆心地の地面は赤く煮えたぎっていた。

一体誰があんな大魔法を……。と、振り返ってみると、とんがり帽子に紅い服、黒いマントという、いかにも魔法使いといった雰囲気少女が地面に倒れ、大勢に介抱されていた。

そんな彼女に視線を向ける僕を見た少年が。

「うちの仲間がすいません………ほんつとすいません………」

「……いい仲間なんじゃないか？」

「あの、謝っておいてなんだけど、ちよつと何言ってるか分からないですわね………」

敵指揮官は爆死。

混乱状態に陥る残党もじきに掃討されるだろう。

僕らの勝利だ。

「いや、こういう大規模戦闘において、あのような破壊力は有用だ。敵指揮官も仕留められたし、良かったよ」

「そつすか………そう言った人間は初めてかもしれないな………はあ………」

目の前の少年は、助かったにも関わらず、どこか辛そうにため息を吐いていた。

「何か心配事があるのか？　もしかして、仲間が倒れたとかか……？」

「いや、そんなんじゃないんですけど………俺、この戦いで戦果上げないと、王都から追い出されちゃうんですよ。せつかく王女の遊び相手に就任したっていうのに………」

アイリスの事か。

そういえば最近………彼女の稽古の時に、なにか楽しそうに語っていたな。

確か名前は……。

「ああ。俺の名前はカズマ。サトウカズマって言います」

アイリス曰く、最弱職にして数多の魔王軍幹部を倒したという男。

さつきまでコボルトの群れに殺されそうになっていた目の前の少年は、確かにその名を名乗った。



「あつちに逃げ……ぐあああ!!」

絶好調。

「ここから先は……」

『『バインド』!』

「しまっ……あああああーっ!」

絶好調、絶好調!

「な、なんだあいつ!? 触れたそばから次々と兵士を気絶させてつて
いるぞ!」

「お、おい! とまれ! 止まらないなら……」

『『ウインド・ブレス』!』

「ぎゃあああ! 目が……」

初級魔法の組み合わせで身動きの取れなくなった兵士の手を取り、
ドレインタッチで即座に無力化する。

一瞬で体力を吸われ、叫ぶ間もなく倒れ伏す兵士の姿を見て、他の
兵士たちが驚きの声を上げながら一歩後ずさる。

「フハハハハハ! 絶好調! 絶好調!! 今宵の俺は何でもできそう
だ!! かかってくるがいいわ! フハハハハハハ!!」

月明かりが差し込む廊下で、高笑いを上げながら倒れた兵士をまた
いで歩き向かうその姿は、きつと敵からは魔王かなにかのように見え
ているであろう。

「助手君!?! どうしちやっただのさ助手君!」

俺はこの一週間程度で俺にとでもなついてくれたアイリスの事を
思い浮かべながら、彼女の首にかかっている入れ替わりの効果を持つ
た危険なネックレスを奪う為、王城の最上階、アイリスの寝室めがけ
てひた走る。

「お頭、このまま王女の部屋まで突撃し、ネックレスを奪って脱出しま
すよー!」

「わ、わかったけど……なんだか変だよ助手君!」

「オラア! 銀髪盗賊団が通るぞ! どけどけ! 蹴散らされてえか

!!

「助手君！ セリフが三下のソレだよ!! というか、大々的に名前を叫ばないでよ！ 銀髪っただけで目をつけられたらどうすんのさ!!」
向かって来た敵をバインドで縛り上げ、ドレインタッチでエネルギーを吸い尽くす。

「どうやら盗賊系スキルは騎士や兵士は盗賊職と相性が悪いようだ。これは好都合。」

魔力がなくなれば吸い、ロープがなくなればカーテンを引きちぎって紐替わりに。

「あの手この手で次々と兵士を無力化していく。」

「とはいえここは王城の中。倒しても倒しても敵兵士が次々とやってくる。」

「流星にすべてを相手はしてられない。」

逃げながら道を水と氷の初級魔法のコンボで凍結させて時間を稼いだり、クリスの《ワイヤートラップ》という、道を鋼線で封鎖するスキルで敵を通せんぼしたりしながら、なるべく敵との交戦は避ける形で王女の部屋へと進んでいく。

「チクショウ！ なんて増援が来ないんだ!! これだけの手練れ、三人だけで倒せるわけが……ぎゃああああつ!!」

「めっちゃ足止めしてるからです。」

「うろたえる騎士を縛り上げ、ドレインタッチで気絶させる。」

「さて……次は誰だ?」

「くっ……!」

「おびえたように後ずさる二人の兵士。」

「もうこんなのは敵ではない。」

「素早く目つぶしコンボを食らわせ、魔力を奪って地面に転がしておく。」

「さて、あと少し進めば……もうアイリスの部屋だ。」

「待ってるよ。今お兄ちゃんが今助けに……。」

「——バツンッ。」

「……は？」

「……へ？」

後ろからしたありえない音に、思わず振り返る俺とクリス。聞こえてきたのは、張り詰めた鋼鉄の弦が爆ぜる音。

それも、ワイヤーカッターみたいなもので丁寧に切った音ではなく、何か強力な力で強引に突破したかのような、引きちぎられた音のようだった。

「あれって……」

「お頭の張ったワイヤートラップが破られたようです……って、なんか変な音しませんか？」

それは、空気を裂いて何かがちらに迫る音。

何処か聞き覚えのある音だなど思ったのも束の間。

「ッ！ 助手君伏せて！」

「うおおおッ!？」

闇が帳を下ろす廊下の奥から、まさに暗黒を切り裂く流れ星がごとく、鈍く瞬く星が光の尾を引いてこちらに向かってくるのが見えた。

クリスに押し倒されるようにして地べたに伏せることによつて、何とかそれを躲す。

仰向けに倒れたその直前に、俺の鼻先を馬鹿でかいfrisビーが過ぎ去つていった。

「な、なんだあ!？」

それが飛び去った先で大きな金属音がしたかと思うと、その物体は速度を変えずに来た道を戻る。

糸で引かれたかのようにまっすぐ廊下の闇へ吸い込まれていったその先から……ゆっくりとした足音と共に、一人の男が現れた。

「一度しか言わないぞ、投降しろ」

赤と青と白。

俺が生前いた世界にあった何処かの国旗を思わせるその衣装を身に纏った男は、Aの文字が描かれたヘルメットを窓から差す月明かりに浮かび上がらせながら、絶対的な意志を感じさせる瞳で俺達を睨みつけ、そう言い放った。

「というか、この盾男は……あの時の……！」

「じよ……助手君……か、彼とだけはちよつと戦いたくないな……」
「何日とったこと言ってるんですかお頭。こいつさえ倒せば、後はもう目標のものを取るだけですよ？ ほら、こんなダサイ服着た奴なんてさつさと……あ、あの……なんでそんな目で見てくるんですか？
なんで怒ってるんですか？」

ダサイと言った途端にクリスの目がスツと細くなり、咎めるような視線を向けてくる。

そんなクリスの目に困惑していると。

「ロジャース殿！」

「キャプテン、助けに来ました！」

キャプテンと呼ばれた男の後ろから、ミツルギにクレア、レインが険しい顔で駆けつけてきた。

……が、それを男は手のひらを出して制する。

「ここは僕が相手をする。君達は王女の元へと向かって、彼女の守りを固めておいてくれ」

「りよ、了解！」

そう答えつつも、どこか心苦しそうな顔をしながら、アイリスの部屋へと続く迂回路に走る三人。

俺達が今いる最短ルートより時間はかかるが、このキャプテンだから奴に粘られ、目標部屋の守りをあの三人に固められると正直きつい。

となれば答えはただ一つ。

俺は、走るミツルギの足元に指を向けて。

『フリーズ』

「ぶべっ!？」

「み、ミツルギ殿ー!？」

靴裏を凍らせて盛大に転ばせてやった。

ミツルギを狙ったのに特に理由はない。ミツルギよりクレアの方が狙いやすかったが、それでも特に理由は無い。

廊下に響くマヌケな悲鳴に、キャプテンは驚いた様子で振り向く。その一瞬のスキを作れば満足だ！

俺はキャプテンへと手を向ける。俺の必殺技、いつものあの手だ。「ツ！」

だが、そこはここを一人で任されるだけの実力者なことはあるのか。

「助手君！ 避けて！」

すぐさま俺へと視線を戻し、阻止しようと盾を投げる動作を見せ……。

「……!?」

先ほど俺がミツルギに向けて放ったフリーズのついでに凍らせておいた、腕と盾の持ち手の接着部に驚愕して一瞬固まる。

「喰らえっ！ 『ステイル』 ツツ!!」

確かな重みが俺の腕に伝わる。

幸運値が高い上に現在絶好調な俺のステイルは、狙いを外すことなく盾を奪っていた。

このままキャプテンを瞬殺できれば、アイリスの部屋に先回りされることもない！

これでもうこっちのものだ！

「よしっ！ これであいつももう何も……」

「駄目だよ助手君!! キヤップは盾を取られたって……」

クリスが最後まで言う前に、キャプテンは猛牛のごとき勢いで俺へと駆け出して跳ぶ。

宙に浮いたキャプテンは、空中で脚を折り曲げて体を縮め、跳んだ勢いはそのままに、その足を俺に向けて……。

こ、これって……、

ドロップ——

「——キックああああっ!?!」

盾越しに思いつき蹴り飛ばされた俺は、情けない声を上げながら地面を転がっていく。

盾を持っていなかったら、肋骨は全て折れて内臓もやられてたかも

しれない。

まるでダンプカーの正面衝突。

まあ、そんなものに衝突されたこともないし、ここに来た死因は衝突されたと思つてショック死しただけなんですけど、そんなイメージが脳裏をよぎつた。

「助手君——！」

俺を蹴り飛ばしたあげく、次いでにちやつかり盾を奪い返していたキャプテンは、再び盾を腕に装着して構えた。

半身に構えたボクサーのような姿勢。

盾越しに、不屈の意志が宿つた瞳が俺達を射抜く。

I CAN DO THIS ALL DAY
「まだやれるぞ」

そのたたずまいから、俺はまるで決して登れない山が目の前にそびえたつているかのような錯覚を覚えた。

……えつ、なにこいつ倒せんの？

そんな強くなさそうに見えるのに勝てる気がしないんだけど。

「あと少しつてところで!! くそつたれー!!」

「口が悪いぞー！」

「ひえっ！」

叩きつけるようにして地面に盾を投げつけるキャプテン。

怒つてものに当たつたわけではないのだろう。

直線的に盾飛ばしてきてた先程とは打つて変わり、廊下の床、天井、左右の壁と、縦横無尽に反射する盾が網目上の軌跡を描いて俺達へと迫る。

なにこれ超怖い！

「お、お頭ーっ！」

「も、もう！ こんな時だけあたしを頼るなようっ！ ワ、『ワイヤートラップ』！」

廊下にワイヤーを張り巡らせ、からめとるかのようにして盾の動き

を……。

「お頭！ まるで動きが止まってません!! ブチブチちぎられています!!」

「鋼線だよ!? 本当にどうなってるのかな!? 『ワイヤートラップ』! 『ワイヤートラップ』!! 『ワイヤートラップ』!! うおりやああああああッ!!!」

クリスが魔力を大量に使って、もはや蜘蛛の巣かのように鋼線を張ることによって、ようやく盾の動きが止まった。

「も、もう限界……! これ以上は魔力が……!」

額に大粒の汗を浮かべたクリスが、肩で息をして膝に手をつけて息を整える。

キャプテンはというと、特別驚いたような顔も見せず、黙ってワイヤーの中にある盾をワイヤーから引つ張り出し、窓から飛び出した。

「ええっ!」

窓から飛び出したキャプテンは窓下の外壁に盾を突き刺して、逆上がりの要領で飛び上がり、再び窓ガラスを蹴り壊して俺達の背後へと躍り出た。

最上階近いんだぞ、張り巡らされたワイヤーを窓の外から迂回するなんて正気かこいつ!?

というか……。

「さて、これで退路も絶たれたな……」

背後に回られたことにより、俺たちはキャプテンとワイヤーの壁の挟み撃ちにされてしまった。

やべえ! 万事休すだ!

「チートだろあんなん! どうしろって言うんだよ! ち、ちくしよおおお!! アイリスー!! ふがないお兄ちゃんを許してくれー!」

もはやこれまでと思ったその時、クリスが俺とキャプテンの間に割って入った。

「ちよっ!! お頭!? 何やってんですか!? 危ないですよー!」

「ごめん、助手君。ちよっと静かにしてて」

一体何を思ったのか。

クリスはキャプテンと向き合うと、口元に巻いていたスカーフを取って素顔を晒した。

……………!?

「キャプテン……いえ、ステイブ・ロジャースさん……私を覚えていますか？ あなたをこの世界に送った、女神エリスです」

……えっ。

▽

最近ではあるが、遠い昔にも思える出来事を振り返り、僕はカズマに顔を向ける。

「——なんてのが、君との出会いだったか」

「いきなりどうしたんだよ？」

「いいや、君という人間を再認識しておきたかったんだ」

「……？」

僕の言っている言葉が理解できず、首をかしげるカズマ。

そんな彼から視線を再び前へと戻す。

視界に映るのは、自分の領民の金を巻き上げて作られた、傲慢さがそのまま形になったかのような、巨大で醜い屋敷。

事の発端は、銀髪の義賊として暗躍していたクリスが、自らの正体をエリスだと名乗ったことからだった。

アイリス……王女が首に付けている神器は、装着者と他者を入れ替えることができるという能力を持ったもの。

この神器の真の恐ろしさは、入れ替わってる途中で片方が死ぬと、もう元には戻らない性質にある。

理論上永遠の命を得ることも可能。そんなものが王子の元へと送られ、そして、王女へと渡っていた。

僕はクリスから事情を聞いたうえで、彼女に協力することを決意。

その後、出どころを追いつけた先に浮かび上がったのは、今日の前に佇む屋敷の持ち主にして、この街……アクセルの領主である、アレクセイ・バーネス・アルダープの影だった。

だが、彼を調べて分かったのは、いつボロが出てもおかしくない程に好き勝手を繰り返しているにもかかわらず、決して証拠が見つからないことであつた。

「にしても、都合よく真実を捻じ曲げられる悪魔ねえ……しかも、バニルと同じ最上級の公爵級悪魔とは……でもアクアの言つたことだぞ？ 信じていいのか？」

「アクアは良くも悪くも素直だ。普段はともかく、自分が直感で感じ取つたことに対しての発言には信憑性がある」

そう、アルダープの手掛かりが全くつかめない中、カズマの仲間にして対悪魔のエキスパートであるアクアという女性が、同じくカズマの仲間の一人である、ダクネスと呼ばれるクルセイダーの父親、ダステイネス・フォード・イグニスに、高位の悪魔による強力な呪いが掛けられていたことを看破、解呪した。

ダクネスの父が死んで喜ぶ人間はただ一人。

点と点がつながり、線となつた。

僕とクリスは、アルダープが悪魔の力を使って犯罪の証拠をもみ消していると推定。

エリスとしての知識、存在するあらゆる文献から照らし合わせた結果……。

辿り着いた答えは……証拠をもみ消すどころか、真実を捻じ曲げて都合よく辻褄を合わせる……そんな恐ろしい芸当が可能な大悪魔……地獄の公爵、辻褄合わせのマクスウェルだった。

今夜はその答え合わせのために、こうしてアルダープの屋敷まで来たのだが……これは、下手をすれば公爵級の悪魔と戦うことになるかもしれない危険な潜入作戦。

そして、聞き及んだアルダープの性格上、僕らが奴を追い詰めてしまえば、ヤケを起こしてなりふり構わず人質にしようと思つた悪魔や刺客をダステイネス邸へと向かわせるかもしれない。

そのため、カズマ以外のパーティーメンバーと、敵感知スキルを持つクリスはダクネスの父の護衛にあたらせた。

あとは、乗り込むだけだ。

僕が屋敷へと踏み出すと、後ろから小さな声が聞こえてきた。

「……キャップ。一つ思ったんだけどさ……」

歯切れが悪そうに、僕と目は合わせずに言葉を続ける。

「もうダクネスの親父さんも治ったことだし……このまま引き返して、みんなでどこかに逃げないか？ 無理して恐ろしい奴と戦う必要なんてないんじゃないのか？」

「奴が執着してるダクネスがいなくなったとなれば、どんな行動に出るか分からない。それこそ、もつと恐ろしいことになるかもしれない。止められるのは、僕達だけだ」

「はああああ……これだから正義ガチ勢は……」

頭を抱えてその場にしゃがみ込むカズマ。

彼もまだ子供だ。死ぬかもしれない危険の中に飛び込めだなんていうのは、あまりにも酷だろう。

「よくわかんねえよ、ヒーローが考える事って。自分大事じゃないの？ 俺は嫌だよ、死ぬのなんてまっぴらごめんだ。キャップは怖くないのか？」

屋敷へと向かう一步を踏み出せないでいるカズマの肩に、僕は軽く手を置いて。

「逃げて隠れたらそれで敵の勝ちだ。生き延びてやるって心の中で叫んで、戦い続ける。危ない時は、僕が盾になってやる」

「ハッ……その言葉、俺がこう言った時の為に練習してただろ？」

「……ああ、盾の裏に台本のメモが張ってある」

「お前も冗談言えるんだな」

カズマの表情が少し和らいだ。

もう大丈夫だろう。

僕は盾を構えると、今度はカズマ共に屋敷へと踏み出した。

ポケットに入っている、ペギーの顔写真が入ったコンパスを、願掛けのように一度握りしめてから。



「えーっ、なんだかうそくさーい。公爵級の悪魔なんて本当にいたの？」

ベンチに座る僕の隣で一連の話を聞いた子供が、疑わしそうな眼を向けてきた。

「はは……まあ、今から七十年も前の話だ。それに、文献にも残ってない戦いだからね」

「おじちゃんは勇者だったの?」

「いいや……兵士だったよ」

「……武器が盾だったって本当なの? 勇者はみんな伝説の剣とかでたたかうって聞いたのに」

どうやら子供は派手な方が好きらしい。

「盾だって、立派な武器さ。仲間を守れる」

「ふーん。あつ、お母さんが呼んでるからもう行かなきゃ。またね、おじちゃん!」

「ああ」

走り去る子供の背中を見守っていると、僕の隣に誰かが座ってきた。

腰を優に超えるほどの長い銀髪、そしてアメジスト色の瞳。

僕をこの世界に導いた、女神エリスがそこにいた。

「やあ、エリス。元気そうだな」

「……ええ」

その顔には、どこか陰りが感じられた。

なにか、どうしようもない何かを嘆くかのような……。

「ステイブ・ロジャーさん。貴方がこの世界に来て七十年……これまでの長い間、この世界を守っていただけありがとうございました。この世界を管理する者の一人として、感謝を申し上げます」

「僕にやれることをやり続けたままでさ」

「……ここから先は、ちょっと複雑なので、場所を変えましょうか」

そう言ってエリスが指を弾くと、目の前の景色が歪んで……。

「これはまた……懐かしい場所だな」

僕が初めてエリスとあった場所に来ていた。

一つ違うのは、エリスの後ろに、背中に白鳥のような羽をはやした女性や、エリスと似たような羽衣を纏った女性が複数人並んでいるということ。

「ステイブ・ロジャースさん、率直に言います。もうすぐあなたの寿命は尽きてしまいます」

「……そうか」

自分の手に、一度目を落とす。

しわだらけで、古傷だらけだ。

この世界を守ってほしいと頼まれてから七十年。

とても長く、そして濃かった。

カズマ達も、もうアクア以外はみんな天寿全うして先立ってしまった。
ている。

この世界に未練はない。

寿命が来ていると言われても、特に動揺はしなかった。

「そしてもう一つ、重大なお知らせと……貴方に謝らなくてはならないことがあります」

「軽く言っただけでも構わないよ。もう、何にも驚くことは無いさ」

それを聞いたエリスは困ったように頬をポリポリと搔いて、そして……。

「……実は、あなたがこの世界に来たのは、我々の手違いによるものでした」

「ゴホツ!!」

「ス、ステイブさん!!」

……入れ歯を必要としない健康な歯でよかった。

もししていたら、エリスの方まで吹っ飛んでいたかもしれない。

何処からか出現させた水を持ってエリスが駆けつけるが、大丈夫だと手を突き出してそれを止めた。

エリスは安心したように一度息を吐くと、再び話を続けた。

「あなたは生前、自国を守る為に自分ごと爆撃機を北極へと墜落させました。そこであなたは全身が凍結したものの、超人血清の力で一時的な仮死状態となっていたのです。ですが、そこを私たち神々が死ん

だものと誤認し、こちらの世界へと転生させてしまいました」

申し訳なさそうにエリスが頭を下げてきた。

だが僕からすれば、驚きこそすれど謝られるような事ではなかった。

僕はその旨を彼女に伝えようとする。

「エリス。僕は、この世界にこれてよかったと思っている。楽しい世界だったよ」

野菜が空を飛び、サンマが畑から採れるのを知ったときは自分の正気を疑ったりしたものだだったが、それも今となってはいい思い出だ。

そんな言葉を聞いたエリスは微笑んで、

「……ありがとうございませす、キャプテン。そう言っていただけると救われます」

クリスのときと同じように、改めて僕のもう一つの名を口にした。

それから……と、エリスが話を続けると、羽をはやした女性が僕の元へと資料を渡しにきた。

その書類を手にとって、中身を確認する。

内容は、S. H. I. E. L. D. による僕の蘇生計画について記されたものだった。

ただし、その計画の実行日には……2011年と書かれていた。

「御覧の通りです、キャプテン。あなたの肉体は氷の中で発見され、今は現代の地球で治療を受けています」

これは予想していなかった。

資料に載っている僕の写真は、1945年の時の若い時そのままだ。

ただちよつと……顔色が悪くて冷たそうなだけだ。

資料から目を放して顔を上げると、エリスは真剣な表情で。

「本題はここからです、キャプテン。現在、あなたの魂はこちらにあるので、元居た世界のあなたの肉体は目覚めることはありません」

「……僕は元の世界に戻れるということか？」

コクリと、エリスが小さくうなずいた。

一度、上を見上げる。

無機質な、古代ローマ時代の神殿のような天井をしばらく眺めた。
……元居た世界の七十年後の未来。

きつと、僕が見知った人間は存在していないだろう。
またもう一度、すべてをやり直すのか。

一つだけ気になったことを、僕はエリスに聞いてみる。

「……未来の世界でも、僕の力を必要としている人がいるのか？」

「はい、あなたが元いた世界で、邪悪な何かが水面下で悪事を企てているように……」

「わかった」

最後まで聞く前に、僕は椅子を立ち上がる。

「僕を元居た世界へと送ってくれ、エリス」

その言葉を聞いたエリスは、一度寂しげに微笑んで、僕と同じように立ち上がった。

「本当は、永く戦い続けたあなたには休んで頂きたいという気持ちも
ありました。ですが、あなたは行くのですね」

「……ああ」

立ち上がったエリスが横にどけると、僕と彼女が座っていた椅子は
光の粒子となつてきて、その少し後ろに扉が出現した。

「キャプテン。何か欲しいものがあれば言ってください。この世界を
守っていただいたそのお礼に、どんなものでも我々神々から元居た世
界のあなたへと送ります」

「……欲しい物……そうだな……」

僕は過去の思い出を振り返った後に、エリスに告げた。

「この世界にいたという証が……何か一つ欲しい」

エリスはわかりましたと笑って指をはじくと、先程出現した扉が開
いて。中から光があふれた。

そのまぶしさに一度手を目の前にかざして目を細める。

やがて光が弱まり、顔の前にかざした手を下げると、そこにはエリスをはじめとした女性たちが、扉への道を作るかのよう左右に分かれ、胸に手を置いてお辞儀をしていた。

「そんな大仰にしなくてもいいのに……」

「いえ、こうさせてください。世界を三度救わんとする英雄へ、我々から敬礼を送らせてください」

……。

これで終わりだ。

一步一步を踏みしめるようにして、光の門へと向かっていく。

彼女達一人一人の前を通り過ぎるたびに、感謝の言葉をかけられた。

振り返ることは無く、僕は最後に手を振りながら、門の中へと入っていった。

▽

古びたボクシングジムに、サンドバッグを殴りつける音が響く。

規則的な音がしばらく続き……やがて鎖のちぎれる音と共に、サンドバッグがはじけて床に転がった。

額の汗をぬぐって、替えのサンドバッグをぶら下げると、再びそれを叩き始める。

トレーニングを続けていると、僕の後ろから厳格そうな男の声が聞こえた。

「元氣そうで何よりだ」

黒いジャケットを羽織った眼帯の男、ニック・フューリーが、そう言って僕の近くに立つ。

「ああ、腹も減っている」

「それなら、近くのバーガーショップにでも行かないか？ 昔の店より美味いぞ。ちやうど話もある」

「任務か？」

「そんなところだ」

手に巻いていたバンテージをとって、服を着替えた。

フューリーが、こつちへこいと顎で指してくる。

「表に車を用意してある。話はそこでしよう」

「ああ」

財布をポケットに入れて出口へと向かうと、フューリーは少しだけ不思議そうに尋ねてきた。

「七十年眠り、何もかも変わった世界を目の当たりした割には、穏やかな顔をしているな。なにかあったのか？」

「そうだな……」

僕は財布から一枚の写真を取り出す。

カズマ、アクア、めぐみん、ダクネス、そしてクリス。

王都で出会い、やがて行動を共にして魔王を倒した、大切な仲間たち。

そんな彼らと撮った一枚の写真を眺めて、懐かしむように笑って答えた。

「——この素晴らしい夢を、見ていたからかな」

第28話 ありえないほど《真剣》

僕が昔住んでたマリブの家よりも大きく、そして自己顕示の激しい無駄に豪華な屋敷の門に立つ。

『この屋敷を見てからだ……ボスはとても控えめなお方に思えますね』

「僕は元々控えめだ」

フライデーと軽口を叩きあつてると、門が重い音をたてて開き、中から装飾の施された鎧騎士とメイドを引き連れたアルダープが現れた。

別にフライデーの言葉に思い当たる節があつた訳では無いが、まるで自分の力を誇示するかののように胸を張るその姿には、なんとなく過去の自分を思い浮かべてしまった。

違うのはせいぜい毛髪と皮下脂肪の量くらいだろうな。

「ようこそ、スターク。では、早速来てもらおうか」

アルダープに案内され、屋敷の中へと入り、様々な美術品が飾られている廊下を進む。

おや？ あれは……………。

……………なるほど。

前衛的と言うべきか、複雑怪奇な模様が描かれた絵を見て立ち止まる僕を見て、アルダープがニイツと口角を上げる。

「ほう。冒険者風情にも絵の価値は分かるのか。いやあ、あの絵は高かったのだ。たが、ワシは真の美に糸目はつけん。持ちうる力の限りを尽くして手に入れた逸品だ」

「ああ、実に素晴らしい絵だ。その高い絵が逆さまに飾ってあるのが少々残念ですが」

「な、なに!?!」

「…………ツ」

後ろの鎧騎士達から息の漏れる音がする。

アルダープの人望は毛髪よりも薄いようだ。

「き、貴様ごときが美術を語るでないわ！ 何を根拠に言っておるの

だ！」

「あー……作者のサインが……逆さです」

アルダープは怒りと恥ずかしさで顔を茹ダコにしながらも、やがて冷静になったかのように、いつもの仏頂面を浮かべて。

「いや、それは貴様の勘違いだ。だろ？」

「……ああ。僕の勘違いだ………ん？」

……なんだ？ 今………。

……いや、どうやら絵は僕の勘違いだ。

『……ボス？ 急にどうしたのですか？』

フライデーが不思議そうに聞いてくるが、流石に大勢の前で一人芝居を披露する訳にもいかないので黙っている。

「それではスターク、早速我が家の改築に取り掛かってもらおうか」

「……ええ、それじゃ早速」

言われるがままに、アルダープの後に続いて屋敷の中を進んでいく。

なにか……おかしな気分だ。

思考に横やりを入れられたかのような、正常な電波にノイズが走ったかのような……。

「ヒュー……、ヒュー……」

「……？」

ふと途切れ途切れに聞こえた、喘息のような異音に振り返る。

だが、そこにいたのはこちらを不思議そうに見てくる騎士とメイドだけだった。

▽

夕日で紅く染まった新しい我が家の門を開ける。

アルダープは予想通りというかなんというか……、とにかく生活の

利便性を向上させる技術を欲しがった。

エレベーター、エアコン、コーヒーマーカー、自動ドア、リクライニングベッド……。

いずれこの世界の生活水準を上げたいと思っていたので、なんやかんやでこれは良い機会だ。

あの絵にかいたような見栄っ張りの事だ、きっとすぐにでも他の貴族連中に自慢し始めるだろう。

良い広告塔になってくれそうだ。

「おかえり、トニー。アルダープはどうだった？」

アルダープに物品のカタログを渡して、その後の段取りを決めて屋敷に帰ってきた僕をダクネスが出迎えた。

「色々ねだられたよ。これから忙しくなる」

「おかえりなさい、トニー。カメラはどうです？」

「しつかり確認してきた。あとは家具を用意して、設置すればオーケーだ」

「問題は、証拠を掴んだとしてもどう立証するかだな。まさか盗撮盗聴したとは言えないだろう」

ソファお茶を啜りながらそうボヤクカズマの隣には、明らかに茶を飲んでくつろぐには異質な……、

「なあ、カズマ。その剣はなんだ？」

装飾の施された長大な剣が、ソファの横に立てかけられてあった。カズマはまるでなんでもないかのよう茶をすすりながら。

「魔剣グラムとかいう神器。何でも切れるらしいぞ」

「おい待った……神器だつて？」

この世を救うためにアクアから贈られるという絶大な力を持った武器。

何故カズマがそんなものを……。

「君まさか……」

「待て、違うぞ。俺にそんな度胸があるわけないじゃないか」

僕がいない間にクリスと回収にでも行ったのかと思ったが、違ったようだ。

「じゃあ、どうしたんだ。道に落ちてたとかじゃないよな？」

「そうだな……………壮絶な死闘の末に……………手に入れたんだ」

「この男……………」

キリツと顔を引きしめながら、貴族かなにかのような上品ぶった姿勢で茶を啜るカズマ。

絶妙にイラツとくるな。

めぐみんもうざりとしたようなため息をついている。

そんなカズマに、アクアは冷めた目を向けて。

「不意打ちで体勢を崩してからステイルで魔剣を奪っただけじゃない」

そんな嫌味も、カズマは何処吹く風といった様子で聞き流して茶を啜っている。

「相手はその剣を持つに値しないような悪党だったとか？」

「ああ……………間違いなく悪だった」

「そうか。なら良いんじゃないか」

「騙されないでくださいトニー！ 確かにナルシストでめんどくさい人でしたが、悪党では……………」

「おい、なんで急に僕の話になる？」

「あなたの事じゃないですよ！ あなたもめんどくさい人ですわね!!」

猫みたいに歯を見せて怒るめぐみんに、冗談だといたずらっぽく笑う。

「で、実際その剣なんなんだ？」

「ハーレム野郎に喧嘩売られたから返り討ちにしただけだよ。互いに神器を賭けたバトルだったし、俺がとやかく言われる筋合いは無いはずだ」

「お、お前……………たしかにそうだが……………」

事情がどうであれ、まともに犯罪なんてやる度胸は無いカズマの事だ、多少の差異はあるんだろうが……………きつと法に触れるようなことはしてないのだろう。

仮に僕が問い詰めても上手く理屈をこねて言い逃れそうだったので、これ以上は何も言わないことにした。

だが、入手経緯よりもずつと気になることがある。

「事情は分かった。それで、その剣はどうするつもりなんだ？」

「んー、売って借金返済の足しにしようと思ってる」

「……まあ、それは君の勝手だ、好きにしていいいが……少しだけ僕に貸してくれないか？　神器の研究を試してみたかったんだ」

「別にいいけど……なるべく早くな？　持ち主がやっぱ返せって言つてここまで来たら面倒だし」

その言葉に了解だとうなずき、カズマの横にある剣を持って屋敷から出ようと……

「……ねえ、ちよつと待ちなさいな」

……したところで。

「なんだ？　悪いが、これからお楽しみのお時間なんだ。飲むのに付き合えとかだったら他をあたってくれ。ゲロ吐いて迷惑かけるんじゃないぞ？」

「私の頭にはお酒しかないとでも思ってるの？　そんなことよりトニー、あんた本当にその神器調べるだけで済ませる気？　変なことしたりしないわよね？　それは神々が作ったとても神聖なものなのよ？」

沈黙。

少しの間、静かな空気が流れる。

……。

……。

「僕が作るものの方が神聖だ」

「あつ！　ちよつと！　逃げんじやないわよ!!」

剣を抱えて全力で屋敷から飛び出した僕の後ろを、アクアが全力で追いかけてくる。

僕は屋敷のすぐ横にあるラボへのエレベーターに素早く転がり込んでドアを閉める。

「フライデー！　アクアのアクセス権限を一時凍結しろ！」

『了解しました』

僕の言葉に反応してドアがロックされた。

アクアはもうラボに入れないだろう。

動き始めたエレベーターの、そのドアの向こうから、ドンドンと扉を叩く音が聞こえる。

『ふざけんじやないわよ、ふざけんじやないわよ!! ねえ、本当にやめてよ!! 人類に神器が改造されたら天界で問題になっちゃう!』

「逆に考えろ、可能性を示せば天界とやらも考え直してくれるさ。革命ってのはそうやって起こすんだ」

『覆しちやならないものつてあると思うの! ねえ! 今ごめんさいして出てきたら秘蔵のお酒を少しだけ飲ませてあげるから!』

「魅力的な提案だが、それはまたの機会に頼もうか」

『トニー—— ツ!!』

エレベーターが下のラボへと向かい、僕を呼ぶアクアの声が頭上から遠ざかっていった。

▽

魔剣を調べ始めて一日目。

先日のゴースト・ベロニカ騒動の被害が少ない研究室において、僕は魔剣グラムの組成を徹底的に調べていた。

「フライデー、結果を表示してくれ」

次々と目の前にデータが映ったホログラムが表示されていく。

当然と言えば当然だろうが、ほとんどがこの世界の素材からできているようだ。

オリハルコン、アダマンタイト、ミスリル、そのほか様々な魔法金属に……僕の世界にもある一般的な金属が少々。

そして、成分以外に剣から検出できるエネルギー。

「……オーケー、また魔力か」

この世界において絶対的なエネルギー源となっている魔力。

生物の全てが有していて、なんの中継器も無しにものを動かせる万能エネルギーだ。

例えば、火力発電は火による熱で水を温め、その時に出る高温高压の蒸気でタービンを回して発電する。

つまり、僕らの世界の人間が電気で物を動かすのだとしたら、燃料を燃やして火をおこし、水を熱し、蒸気でタービンを回し、それで生まれる電力で物を動かすというプロセスが必要だが……、

魔力というのは人間の体に秘められたエネルギーを直接流し込むだけで大抵のものは動かせてしまう。

武器に宿せば……強力な武器の完成。

僕が元居た世界のありとあらゆる法則に中指を突き立てて唾を吐いてるような、そんなバカげた存在が魔力だ。

……だが、僕だって法則の一つや二つ超えてきた。

「フライデー、デジタルワイヤーフレームモデルを作ってくれ。操作できるモデルが欲しい」

『魔力エネルギーの可視化開始……完了。ホログラムにして表示します』

透明なカプセルに覆われた検査台の中で垂直に固定されていた魔剣から、影のようなそっくりの形をしたホログラムが浮かび上がった。

魔力だけを可視化しているにも関わらず、剣の形で浮かび上がると言うことは……。

「剣に使われている魔法金属が血管の役割となって全体にエネルギーをいきわたらせているのか……」

なら、何処かに心臓部があるはずだ。

「動力源はどこだ？」

『エネルギーの循環速度が極端に速くて探知できません』

確かこの神器は何でも切れるとか言っていたな。

魔力を超高速で循環させ、チェンソーみたいに切り裂いているのかもしれない。

なら……。

「液体窒素を使って各部分を限界まで冷やせ」

カプセルの中に液体窒素が注がれ、魔剣が凍てつく。

これでエネルギーの供給が遅くなれば……………。

「よし……………見つけた。楽勝だな」

これならナターシャの方が十倍見つけにくい。

僕は高速で動き回っていた動力源のホログラムを、掬うように手に取って眺める。

「驚いたな……………永久機関だ……………」

神々の技術というのも案外馬鹿に出来ないようだ。

武器一つ一つにこんなものがついてるわけか……………。

なんて興味深いエネルギー資源なんだろうか。利用出来ればスーツを大幅に強化できる。

「これ取り出せれば良いのだが」

『現在ある設備では不可能です』

フライデーはそういうが、僕にはどうもそんな気がしない。

何か使える手は……………。

……………そうだ。

一つ、魔力を吸収する機能を備えたガラクタがあつたじゃないか。

紅魔の里で物干し竿代わりにされていたライフルが。

もう解体してしまつたが、あの機構を再現すれば……………。

「よし、試してみ……………」

と、早速行動に出ようと思つて足を踏み出すものの、待つたとそこで止まる。

……………そういえば、この剣はカズマが売る予定なんだよな。

これ、このまま魔力抜き出したりして良いんだろうか。

『……………ボス？ どうなされたんですか？』

抜き出すのはきつと難しくない。だが……………問題は元に戻せるのかどうかだ。

魔剣が魔剣たるその源を引っこ抜いたらきつと価値も下がるだろう。

『アクア様の宴会芸の真似でもなさっているのですか？』

……………いや、違う。そうじゃない。

そもそもこの剣の元の持ち主について僕は何も知らない。
勝手にこんな真似していいのだろうか？

以前チームに何も言わずにロキの杖の力を研究して惨事を招いた。
また同じ過ちをしてはいけない。

僕は魔剣グラムにつないでいたあらゆる機器の電源を落とし、カプセルから剣を開放する。

『ボス？ どうなされたのですか？』

「……エネルギー源を取り出す実験は延期にしよう。もつと別の……
そのうちクリスを説得して、所有者のいない神器でも貰おうか」

『きつと、英断だと思います』

そして剣を別の台座の上に乗せて……。

「ここからは、魔剣を科学技術で強化できるかの実験を行う」

『……えっ？』

それから三日後。

「う、うわあああああっ!! ぼ、僕のグラムがあああああっ!!」

実験が成功し、元の姿よりだいぶゴテゴテとした自分の剣の姿をみた少年が、屋敷の門の前で崩れ落ちる。

「どうやら頑張ってここまで探しに来たようだが……。」

「だから早く売った方が楽になるって言ったのに。ラボに籠ってこんなことしてやがったのか」

「シンプルな武器だからこそ、改造の幅が広がってね。それにきつと、この状態の方が高く売れるぞ」

「その話を本人の前でしますか!?!」

整った髪をめちやくちやししながら叫ぶ少年。

名前はミツルギ・キョウヤと言うそうだ。

彼もカズマと同じく日本で死に、アクアによってここに呼ばれた転生者の一人。

どうもアクアを崇拜しているらしく、先日アクアがカズマの作戦

によって檻に入っていると、色々勘違いして争いになったそう
だ。

町中駆けずり回ったのだろう。ミツルギは憔悴仕切った顔で僕に
聞いてきた。

「その、トニー・スタークさんと言いましたよね……？ あ、の、一体僕
の剣に何をしたんですか？」

僕はまず柄の部分に装着したブースターを指さして。

「これは強力な電磁石だ。専用のグローブと併用すれば、剣が多少離
れた場所にあつたとしても手元に戻せる。もちろん、刀身の金属には
反応しないから、切っ先が自分に向かってくることは無い」

「素直にすげえ」

横でカズマが感心したように僕を見てくる。

ファンサービスでもしておこう。

「ウインクするな気持ち悪い」

不評だった。

僕は啞然とした顔でこちらを見ているミツルギに笑いかけながら。

「それで、他に気になる点は？」

「……ハッ!? い、いえ……その、僕は魔剣を返してほしいだけなんで
すが……」

「なんだ、剣を腰に差すと柄の部分がコーヒークップホルダーにな
るように改造したつてのに、説明いらんのか？」

「なんて事してくれてるんですか!」

「こつちも不評か……」

「うはははははは！ カ、カップホルダーって!! 魔剣の勇者さん、これ
でコーヒークレイクもバッチリですね！ うはははははは!!」

横で腹を抱えて爆笑するカズマを恨めしげに見るミツルギ。

キャプテンみたいに、あまり冗談を理解できない少年のようだ
……。

流星にからかうのはこれくらいにしといてやろう。

僕が指を弾くと魔剣を飾っていたあらゆるオプションパーツがボ
ロボロと落ちた。

「ぎーて、ミツルギ君。この魔剣は、君が互いの神器をかけた戦いで負けて取られたものだろ？ つまり、君が返してほしいと言ってもそれは虫のいい話ってヤツな訳だ」

「は、はい……」

「だが……ここで一つ提案だ。僕のとある実験を手伝ってくれたら……この魔剣を返す。どうだ？」

僕の出した提案に、大事な取引に寝坊したビジネスマンみたいな顔をしていたミツルギが、安堵に表情を緩ませて食いついてくる。

「も、もちろん!! 僕にできる事であればなんでもします!」

——実はこの魔剣。カズマが売り、それを僕が買うといった形で既に僕の物になっている。

本当の目的は、正しい使用者が振るう魔剣のデータを取る事。

そしてこの世の転生者たちの戦力の調査の一環。

この実験の計画についてはカズマにあらかじめ話しており、合意もとつてある。

だが、僕が買いとつたとは言え、快く思わないミツルギの元にタダで魔剣が戻るのは、カズマにとっては面白くないだろう。

なので、ミツルギの戦闘データを取得する際にカズマが自分なりの方法でやらせてくれと申し出てきたのだ。

その内容はまあ……はつきり言って嫌な予感しかしない。

「……今なんでもつてするっていったよね……?」

待つてましたと言わんばかりに、カズマが悪辣そうに笑った。

▽

「ほれほれほれ!! うはははは!! どうした魔剣の勇者!! うへへははははは!!」

『ぐはっ! うべっ!! ちよっ……まっ……ぐえっ!!』

「ぶははははは! これ超楽しい!! ねえ、どんな気持ち? 大事な

魔剣を取られた仇敵に一方的にボコられてどんな気持ち？」

「「う、うわあ……」」

トレーニングルームでピンボールみたいに突き飛ばされまくるミツルギと、それを見て高笑いを上げるカズマ。

彼の仲間もその姿を見て心の底からドン引きしているようだ。

ミツルギを弾き飛ばしまくってるのは、僕が戦闘訓練用に開発したトレーニングドローン。

全身にクッションを巻き付けた球状のドローンで、自動かもしくは手で訓練相手にタックルをかます。

浮遊型のドローンである為、あらゆる方向からの攻撃に対処するトレーニングに最適な代物だ。

「楽しんでるようだな？」

「最高だぜええええ!!」

ロキもしなさそうなくどい笑顔を浮かべ、コントローラーホログラムを手に纏わせて演奏クライマックスの指揮者のごとく振り回すカズマ。

既に取り組むかは聞いていたが……これはあまりにもえげつない。

攻撃方法がとにかく姑息でいやらしい。

背後を執拗に狙うのは当たり前。膝裏を狙ってバランスを崩させたり……。

わざと緩い攻撃を捌かせ、油断したところで顔面にドローンを叩き込んだり。

拳句の果てには、相手から一機にしか見えないようにドローンを二機重ねてぶつけ、一機目を弾くとその死角に隠れた二機目がぶつかるような二段構えを用意したりと、狡猾な戦術を取ってミツルギをボコボコにしていた。

『いだっ！ あだっ！ さとっ！ カズっ……！ まっ……待つ!!』

「オーケーカズマ。少し手加減してくれないか。これじゃデータにならない」

「ったく……強すぎるのも考え物だぜ……」

ドローンを操作する手を緩め、満足げに鼻から息を吐くカズマ。

にしてもこの男、なぜこんなにもドローンの操作が上手いんだ？
クインジエットを以前操作した時はゲームで学んだとか言ってたが……。

「ミツルギ、聞こえるか？」

少し高い位置にある、トレーニングルームとガラスの窓一枚で隔てた制御室からマイクを通してミツルギに尋ねる。

『……………ッ』

床でぐったりと倒れ伏しながら、聞こえていますとミツルギは手を上げる。

あのドローン、クツションを装備しているのでダメージはほとんどないはずなのだが……。

どうやら搦手だらけで精神が疲弊してしまったようだ。

「すこし休憩してから、今度はもう少しまともなテストを行う」

『はい……………』

▽

ラボのラウンジで、ミツルギがコップの中身を一気に飲みし、その空になったコップを懐かしそうに眺めて。

「まさかまたコーラを飲める日が来るなんて……………」

「おっ、お前だってコーラは飲むのか。真面目ちゃんはてつきりお茶か水しか飲まないと思ってたぜ」

「失礼だな佐藤和真。僕はしゃわしゃわだつて飲むぞ」

こいつら休憩中でもいがみ合わなきや気が済まないんだろうか。

「おい、いい加減にしろ。同郷同士仲良くできないのか？」

「トニーだつてこのスカしたイケメンにはムカつかないのか？」

「スカしたイケメン同士、親近感を覚えるね」

「くそつたれ！」

カズマは傷つき逃げ去っていった。

きつとどこかの部屋でゲームでもするか屋敷でふて寝でもするんだろな。

後で君の顔は至って普通だとフォローを入れておこう。

「私はカズマのフォローに行つてきます。スカしたイケメン同士仲良くしてください」

「癒しの女神に任せなさいな。普通の顔でも捨てたものではないってカズマに教えてあげるわ」

自信にあふれた笑顔でドアから出ていく二人を背を、ダクネスが心配そうに見つめて。

「その、私は二人が心配だから見に行つてくる。逆に心をえぐりに行きそうだ……そして、その時は私が代わりにえぐられてくる！」

心配しながら色欲の光を目に灯して扉から出ていくダクネス。

「別に僕はスカしてなんか……」

「気にするな。彼はちよつとイケメンが嫌いなだけなんだ」

「ええ……」

ミツルギはみんなが出ていった方の扉をしばらく呆然と眺めた後。

真剣な表情で僕へと向き直り。

「あの……ずつと気になつてたんですが……あなたは何者なんですか？」

「君と同じ転生者さ。ただ……ちよつとだけ元から色々持つてるだけだ」

わざわざ一から説明するのも面倒だったので適当に答えておく。

ミツルギはあまり納得していない様子だが。

「……あまりにも転生者の特徴とあつてないように見えるんですが……」

「ヒゲが素敵なところとか？」

「い、いえ……確かに奇抜なヒゲですが……」

しばらくそんなやり取りをしていると、はぐらかされている事に気が付いたのか、やがてあれこれ聞くのをやめる。

もう休息も十分だろう。

これからはカズマじゃなく、普通にフライデーの制御によって段階的に難易度を上げていき、ミツルギの戦闘能力と、魔剣の性能を調べるつもりだ。

僕が立ち上がると、ミツルギも察したのかソファから立ち上がる。

「そろそろやりますか?」

「ああ。準備しろ」
SUIT UP

その言葉に軽くうなずき、横に立てかけてあった魔剣グラムを腰に差した。

先程と同じトレーニングルームに向かおうとするミツルギの背中に声をかける。

「ところで、一つ聞いていいか?」

「はい。なんででしょう?」

彼には心配なことが一つあった。

「君にとつて魔剣はなんだ?」

「魔剣グラムは……託された使命そのものであり、剣つるぎの形をした僕の存在意義でもあります。なくてはならない存在なんです。あれが無かったら……僕は何もできなくなってしまう」

「……そうか」

それは、真面目そうな彼の大きく慌てる姿を。それと、魔剣に対する必死さを見て僕の心に芽生えた、僕なりのおせっかい。

「君に一つ忠告だ」

僕は、かつてそうだった自分の姿に、ミツルギの姿を重ねて。

「決して魔剣に依存するな。それを手に持って振るうのは、いつだって君自身であることを自覚しろ」

それを聞いたミツルギは、ハッと目を見開いて止まる。

やがて自分の腰に差した魔剣に目を落として。

「……貴方の言う通りです……今までずっと……この魔剣に依存して、何が重要なのかを見失っていたようです……教えてくれてありがとうございます。スタークさん」

そう言ってあげた彼の顔は、憑き物が落ちたかのように、晴れやかな顔をしていた。



その後、ミツルギおよび魔剣のデータを回収し、そのデータを整理していた夜の事。

「魔力がこもった剣一つでここまで能力が上がるとはな……」

はつきり言って超人血清すら上回る利便性と上がり幅だ。

この神器をいくつかS・H・I・E・L・D・あたりに渡せば、極めて強力な部隊が出来上がるだろうな。

この先王都にも何度か足を運んで、他の神器持ちのデータも取りたい。

中には神器ではなく、才能といった形の特典もあるそうなので、もし協力的なものがあれば色々実験したいものだ。

そんな感じで、夜中近くまでデータとにらめっこしている時だった。

「おーつす。何やってんだ？」

軽い挨拶を交えて後ろのドアから現れたのは、ジャージに身を包んだカズマだった。

もうそろそろ寝る時間なのだろう。

「今日のデータの管理だ。君こそ何しに来たんだ？」

「暇つぶし」

「ここは暇つぶしに来るところじゃないぞ」

「ゲーム用意しといてよく言うぜ」

「……確かにそうだな。だが、ここに入り浸ってゲームばかりやらず、たまには仲間と交流深めて来いよ」

僕がそう言うと、カズマは何を言ってるんだと眉をひそめて。

「おいおい、屋敷に住むって話をした直後からラボに閉じこもったお前が言うなよ。めぐみんが不貞腐れてたぞ。ボードゲームでもしようかと思ってたのにな」

「そうだったか……ま、このデータをまとめたら屋敷でちゃんと寝るさ」

「俺はここですばらくゲームをするけどな」

「おい」

元の世界ではゲーマーだったんだ、この世界でもできるならやらない理由は無い。と言い残して、勝手にモニターを適当に動かしてゲームを起動するカズマ。

……が。

「あ、あれ？ ゲームのファイルどこだったっけ……？」

「おい、待て待て！ そんなに弄りまわすな。まだデータをまとめる最中なんだ……」

これかこれかと、画面をタッチしまくるうちにファイルが一つ開かれ、その中の映像がモニターに映し出される。

それは……。

『やあ、ペツパー。そんな紙切れとにらめっこして何してるんだ？』
『今月の決算をまとめてるのよ。誰かさんがオモチャにつき込んだじやうから』

『あれはオモチャじゃない。世界を守るアーマーだ』

『身近な人とのディナーの約束も守れるようになってほしいわね』

『……検討するよ』

『約束して』

画面に映しだされたのは、僕が心の底から愛する唯一の女性、ペツパー。

特に何も考えずに撮った日常から、大事な記念日などを撮った思い出の映像まで。

僕の大切なファイルの映像がモニターに映っていた。

「この人って……」

「ああ、僕の恋人だ」

今僕はきつと、あまり人前では見せないような笑顔をしてるのだから。

「綺麗な人だな」

「だろ？」

そんな僕の顔を見たカズマが、茶化したりせず素直に感想を述べた。

しばらく流れる映像を見て懐かしんでいると、横からカズマがニヤニヤして。

「また会いたい？」

「ああ、もちろん」

スーツの関係で彼女とはあまり上手く行かないままこつちの世界に来てしまったが……。

それでも会いたいが決まっている。

実にモチベーションアップにつながる映像だったが、あまり恋人とイチャついてるところを他人に見せるわけにもいかないだろう。

映像を切って、彼お望みのゲームファイルにでもつないでやろうかと手をかざしたその時。

「恋人に会えないその辛さ、解消できるって言ったら？」

「……なんだって？」

まるで簡単なことかのように軽く。

カズマの口から、そんな言葉が出てきた。

一体どういう意味だと尋ねると、カズマはもったいぶるように笑って。

「サキユバスって知ってるか？」

「……ハア」

とんだ肩透かしだと言わんばかりにため息を吐く僕。

「そういうのは結構だ。今の僕はペッパー一筋なんでね」

だが、そう言ってもチツチツチと指を振ってカズマは笑う。

「俺もつい最近知ったんだが……。この街にはな、戦う力を持たないサキユバスたちがわずかなお金と精力を引き換えに、男性冒険者たちに夢を見せて共存を図る店があるんだ」

「おい、それって……」

「待て待て。カルラギみたいなことを真面目ぶったことを言ったりするなよ？ 本番はここからだ。その見せる夢ってのはな……事前にサキユバスに注文しておく、どんな夢でも見れるんだ。いいか、ど

んな夢でもだぞ？ 犯罪的なシチュエーションだろうと、この世界には存在しない物だろうと……」

……。

……。

気が付けば、僕はカズマの方へと乗り出している。

「もっと詳しく教えてくれ」

辺りは薄暗くどんよりとしている。

ふと空を見上げると、暗雲が立ち込めていた。

そして大地は不快な湿り気を帯びており、立ち並ぶ木々はそのことごとくが枯れてしまっている。

そんなおどろおどろしい森の中で。

「ああ……。全く最低な味だ……」

俺は、焼け焦げた肉を貪り食っていた。

焦げ肉を喉の奥に押し込みながら、隣で横になっているこの住人に語りかける。

「こう思ってるのか……？ ソーがこんなところで炭みたいな肉を食べてるって。まあ、アスガルドの王だからって贅沢な暮らしが確約される訳じゃない」

そう言っても何も言い返しては来ない。

白骨化して頭蓋骨が半分地面に埋もれている奴がしゃべるわけがない。

今のは陰鬱とした雰囲気嫌で適当に紛らわせてるだけだ。

ちなみに焦げ肉は仕留めた獲物を雷で焼こうとしたら少し火力を間違えた。

俺は目の前の骨に……そうだな、頭蓋骨君とでも名付けようか。

そんな頭蓋骨君相手に、俺はさらにしゃべりかける。

「そんな王様がここで何してるのかって？ あるものを探して世界中を旅している。さあて、何かわかるか？」

当然返事は帰って……。

「ハアア……オオ……ハハハア……」

地面に埋もれていたハズの頭蓋骨君がカタカタと骨を鳴らしながら、地面から這い出でるようにして起き上がってきた。

どうやら首から下もあつたようだ。

「生き血ヲ……寄越セ……」

「無口な方が良かったんだがな……」

ゆつくりと立ち上がってハンマーを構える。

……………が。

「ウヴァ……………」

「オオ……………輝ク……………タマシイ……………」

森の中に瘴気が立ち込め、次々とそこら中の地面から骸骨が這い出てくる。

よく見るとそいつらは全身に鎧やら剣やらを装備していた。

どうやらこの辺りで死んで行った戦士たちの成れの果てらしい。

「……………見た目は汚らしいが……………まあ、機械の軍団よりはマシか」

俺は右手に構えたハンマーを高速回転させて空へと舞い上がる。

瞬間。

暗雲の中に閃光が迸り、天の唸り声が辺りに轟く。

そして……………。

「さあ、来い!!」

稲妻が闇を切り裂き、我がハンマーから電撃が弾けた!

「I AM MIGHTY THOR!!!」

雷槌が振り下ろされ、周囲一帯が光に包まれて吹き飛ぶ。

「「ボエエエツッ!」」

骸骨騎士達が宙を舞い、バラバラになって地面に転がった。

「ハッハッハ! そんな程度か?」

その挑発に怒ったのか。

いや、こんな連中にそんな感情があるのかは知らないが、挑発に乗るかのようにしてさっきの倍以上の数がワラワラと湧き出てくる。

俺の周りを三百六十度ぐるりと囲い、朽ちた武器を向けた。

いつの日かロジャーに言われた『言わなきやいいのに』という言葉葉を思い出すな。

だが、俺も血気盛んな戦士。いわせてもらおう。

「物足りなかったところだ、いいぞどんどんこい!」

「「ウヴオオオオオオツツ!!」」

こちらに向かつてくる群れにハンマーを投げつけ、正面から雑兵を蹴散らす。

ハンマーは速度を保ったまま、円を描くようにして俺を囲つてる敵を粉碎していく。

「そらどうした!」

ハンマーの旋風を潜り抜けてきた骸骨どもを殴り、蹴り、時には頭突きをお見舞いする。

それからしばらく迫りくる敵を薙ぎ払い続けるが、一向に減る気配がない。

「ハアアアアア、ツツ!!」

「そんなに怒らせるようなことをしたか?」

……大した相手ではないのだが、流石に面倒になってきた。

数多の軍勢が倒されたというのに、撤退するどころか数を増して襲ってくる。

ここらで撤退すべきだろう。

……戦ったところで、インフィニティ・ストーンについて何か得られそうでもないしな。

それにしてもこいつら、なんだってこんな必死に襲いかかってくるんだ?

「「「ヴォアアアアツツツ!!」」」

「はいはい、今出てい——」

ハンマーを振り、空へと飛び上がろうとしたその時。

地面から這い出た無数の手が、行かせまいと俺の足首を掴みだした。

「しつこい連中だ!!」

今が好機と敵が束になって襲いかかる。

こうなったら辺り一帯まとめて雷で消し飛ばすしかない。

俺はハンマーに電気を貯め、勢いよく振り上げて天へと掲げた。

天から降りた雷がハンマーに直撃し、そのまま地面へと振り下ろされよう……

『カーズド・クリスタルプリズン』ツツツ!!』
『「ウア、アアア、……」』

……した瞬間。ギシツと軋んだ音を立てて周囲が一瞬にして凍り付いた。

骸骨騎士たちはまるで時が止まったかのように氷の牢獄に閉じ込められてしまっている。

辺りを見回すと、汚泥だらけで不快だった大地があつというまに永久凍土となっていた。

今のは……援護か？

「バニルさん、さっきの見ました？ あんな威力の魔法初めて見ましたよ!!」

「フハハハハハ!! 鬱陶しい神気を感じて来てみれば、とんでもないのがいたもんだ!! フハハハハハ!!」

ハンマーを下げ、迸る雷を抑え込む。

先程聞こえた声があった方に顔を向けるが、冷気で出来たモヤモヤで二つの影しか見えない。

とりあえず敵かどうか確かめよう。

「おい、その二人、そこで止まって名を名乗れ。お前たちは敵か？」
影はピタリと止まり。

「あ、あの……。敵意は無いので、どうか警戒しないでもらえますか……？」

そんな、のほほんとした声がモヤの向こうから返ってきた。

俺はハンマーを振り回して突風を作り、モヤを吹き飛ばす。

その晴れたその先に見えたのは、ペこりとお辞儀した、綺麗な栗色の髪をした一人の女性と、軽薄そうにニヤつく白黒二色の仮面の男。

「初めまして、私はウィズと申します」

「お初にお目にかかろう。我輩は地獄の公爵が一人、バニルである。さて……」

バニルと名乗った男は目に怪しい赤い光を宿し、剣呑な雰囲気を滲ませながらこちらを見据えてくる。

……なんだろうか。

あの趣味の悪い仮面を着けた顔面を見てるとムカついてくるとうか……どうも絶対に相容れなさそうな気がしてくる。

「貴様のような存在がなぜここにいる？　ここは貴様の世界ではない」

「ちよつとバニルさん!!　なんでそんな攻撃的なんですか!？」

「残念店主よ、貴様はこいつの正体が分かっておるのか……?？」

小馬鹿にするように口元を歪め、ウイズと名乗った女性にやれやれと肩をすくめるバニル。

「この男は神族である。それも、とびつきり強力な超存在だ」

「えええええっ!？」

天敵と出会ったかのように、怯えた目で俺を見てくる。

……こいつらは一体なんなんだ。

「俺の名はソー。ソー・オーディンソン。俺にも敵意は無い。あるものを探しているだけだ」

「汝が探すような物など、こんな所にあるとは思えぬのだが……?　念の為、聞くだけ聞かせてもらおうか」

「インファイニティ・ストーリー」

「そんなものがこの星にあるわけなからうが!!　今すぐ元の星に帰るがいい!!」

望みを聞いた途端に血相を変えて忌まわしそうにバニルが叫んだ。

手がかりでもあればと来てみたと言うのに、随分歓迎されないよう

だ。

しかし……。

「お前、インファイニティ・ストーンについて知っているのか？」

「我輩とて名前と逸話程度しか知らぬわ」

バニルはまるで厄介事を持ち込むなどでも言いたげな、迷惑そうな目を俺に向けて。

「確か……それ一つ一つが世界を滅ぼす力を持った伝説の六つの石……であつたな？」

「そ、そんなものが存在するんなんで……」

「当然、それらを狙うのもこの長髪ハンマー狂のような超存在ばかりである」

「……それ俺の事か？」

バニルは俺をしっしと追い払うように手を振りながら。

「そういったのが貴様を追ってここまで来たなんて事にでもなってみろ、この世界が滅亡しかねん。というわけで帰るが吉だ疫病神」

「その言葉を鵜呑みにしてすぐ帰るつもりはない。俺を追ってるやつなどいないし、あてずっぽうにこの世界に来たわけでもない、強い力を感じたから来たんだ。その正体を探るまでは帰らないぞ」

「ふむ……そうか……」

引く気のない俺を見たバニルは、一度小さなため息をつく……、

「では力づくで追い出すとしようか。ん？」

敵意が夕刻の影が如く広がり、邪悪なオーラを陽炎のように滲ませ……目の奥を赤黒く輝かせた。

「えええええ!? バニルさん、何言ってるんですか!? 正気ですか!?

もう私を残念店主なんて呼べませんよ!？」

「やかましい!! そもそも奴は神族で我輩は悪魔である。相容れることは無いのだ!」

「なるほど、お前は悪魔だったのか。通りでさつきからそのダサイ仮面に嫌悪感を覚えるワケだ」

「フハハハハ！ センスのない長髪を垂らす男よ!! なんならこの我輩がボウズにカットしてやろうか！ きつと短髪の方が似合うぞ？」

俺はその言葉に鼻で笑いながらお手玉のようにハンマーを軽く上に投げ、空中で一回転させて再びキャッチして不敵な笑みを見せてやる。

そして、そのハンマーをバニルへと突き付けて……。

「それじゃ、俺はお前の仮面をぶっ壊してまともな形に作り変えてやろう。ハート形なんかどうだ？」

挑発されたバニルの口角が吊り上がり、地獄の公爵と名乗ったそれにふさわしい邪悪な笑みを浮かべた。

「よかろう、元の世界への片道切符をくれてやるわ!! 『バニル式殺人

光線』ツツツ!!」

「フーン！」

バニルの目から放たれた怪光線をハンマーで横に弾く。

あらゆる方向へと逸らされた光線は木々に赤い切れ目を入れ、横薙ぎに引き裂いた。

「仮面がダサいなら攻撃までダサいな!!」

腕を振って光線を弾いたその姿勢から、力をこめてハンマーを投げつける。

「そんな原始的な攻撃が効くとで——」

バニルは腰を深く落として腕を交差させ、防御の姿勢を取り始める。

……………が、

「——ガハツ……!?!」

投げられたハンマーは、防御に構えた腕ごとバニルの体をつらぬいた。

「そ……そんな、馬鹿な……こ、これが……雷神の……力……!」

両腕が落ち、体に大穴を開けられたバニルはボロボロと砂となつて肉体を崩し始め……、

「……もう終わりか?」

やがて、風の吹くような静かな音を立て、小さな砂山へと成り果てる。

山の上には、やつが着けてた悪趣味な仮面だけが墓標のように突き立っていた。

……………まずいな。殺すつもりはなかったのだが……………。

「……おい、確か……ウイズと言ったな?」

俺の呼び掛けに応じて、バニルの横にいたウイズが疑問符をうかべた顔をこちらに向けてくる。

俺はバニルだった砂山の横を通り、ウイズ方へと歩み寄りながら。

「お前にも攻撃の意思はあるのか?」

「いえいえ、ありませんよ?」

にこやかに答える彼女に、俺は若干戸惑う。

「……なあ、お前の友を殺した俺に何も思わないのか？」

「あはは……み、見慣れた光景ですし……」

なかなか世知辛い惑星のようだ。

隣にいた友が死ぬのも見慣れているとは……。

「……そうか。だが……流石に少しくらい追悼の意を示してやらないと、死んだアイツも可哀想なんじゃないのか？」

「ほう、それはこの我輩に同情してくれているということか？ フハハハハ！ 敵にも同情とは実に王器であるな！」

後ろから聞こえた声に、ギギギとなりそうな動きで首を後ろへと向ける。

そこには崩れ去って倒れたはずのバニルが、五体満足で立っている。

「……どうなってるんだ。お前は確かに」

「倒したはず？ 残念！ なんのダメージもありませんでした!!」

……………。

啞然とする俺をおちよくるかのように、バニルはいやらしい笑みを浮かべる。

「フハハハハ!! 『もう終わりか?』なんてカツコつつつつ、マントを翻す貴様の姿と言ったら……ほほ、本当は……ツ……ツ……ノーダメージだと言うのにツ……フハハハハハ!! 笑いが止まらぬわ!! フハハ！ フハハハハハ!!」

「オーデインの息子をコケにした事は高くつくぞ……!!」
怒りを込めた目で睨みつけるも、バニルは歪めた笑みを崩すことなく。

「あんな家族問題起こしまくりの隠蔽大好き親父の息子なんぞ名乗ったところで、かえって貴様に偏見がつくだけで」

「AAAAARRRRRRGGHHHHHH!!」

ふざけた仮面野郎の煽りは、俺が生み出した雷鳴によって掻き消さ

れた。

「こいつ今すぐ灰にしてくれる！」

「喰らえええええッツ!!」

陰惨とした暗い森が昼間の如く明るくなり、バニルのムカつく仮面目掛けて極太の光の矢が射られた。

瞬間、バニルの顔面から嘲笑いの笑みは消え失せ。

「か、華麗に脱皮!」

華麗とは言えぬ必死さで遠くへと仮面をかなぐり捨てた。

「まったく、これだから脳筋は……!」

どこから喋っているのやら、仮面だけの体からボソツと忌々しげにそう呟くバニル。

投げられた仮面は放物線を描いて地面に落ち、そこからモリモリと土を纏って……。

「おっと、これが正体か!! ハツハツハ! 捕まえたぞ!!」

「ぬあああ! 貴様やめろ!! 体が崩れるから触るでないわ!!」

しばらく喋るダサイ土塊とそんなやりとりをしていると。

「あ、あの……そろそろやめときませんか? ソーさんも敵ではないみたいですし……」

困り顔のウイズが、おそろおそろといった感じでそう言ってきた。

俺はバニルの仮面をハンマーでツンツン小突きながら。

「俺は最初から敵意なんてない。仕掛けてきたのもこいつからだ」

「いちいちハンマーで小突くでないわ、鬱陶しい!!」

「……ふふふ、なんだか楽しそうですね」

そう見るのは勘弁して欲しいものだ。

だが、楽しげに笑うウイズの笑顔で、なんだか毒気を奪われた。

「……まっ、感じた力の正体が分かれば去るさ」

俺は手に持ってた仮面を捨てるように投げると、そこからバニルがニヨキニヨキと体を生やす。

「ではこうしましょう!」

ウイズがパンと手を叩き、輝く目で俺を見てきた。

……なんだろうか。

「つまり、ソーさんは宝探しをしてるんですよね？」

「まあ、宝といえば宝だな……」

「なら、私たちがその宝探しのお手伝いをしますよ！」

「何……？」

「思わずバニルの方を見るが……」

「ッ……」

俺以上にあっけにとられた顔でウイズの方を見ていた。

だが、そんな事は歯牙にもかけずにウイズは話を続ける。

「強力な力を持った宝を探して世界中を回るなんて、なんだか私が冒険者だった時を思い出すんですよ」

ウイズはどこか、昔を懐かしむような顔しながら。

「だから、なんだか力を貸したくなっちゃって」

「行き遅れ店主よ。貴様はまさか、リッチーという不死の存在である自分の伴侶探しに焦り、この背は高いが見た目はイマイチな神族と恋をしようなどと考え」

「バニルさん。次に行き遅れと言ったら本気で対悪魔用の呪いを使いますよ？」

一体何が起きたのか。

急に辺りの温度が低下し始め、既に最初の魔法で凍りついていた木々にヒビが入って砕け散った。

ウイズと言えば笑顔のままだ。

笑顔のままだが……恐ろしく冷たく感じる。

この俺でさえ悪寒を覚えるレベルだ。

どうやら彼女はハルクと同じように怒らせない方が良いのかもしれない。

そんな凍てつく雰囲気もやがて弛緩し始め、ウイズに先程の笑みが戻り始める。

「もう、そんなふしだらな理由で手伝いを申し出たんじゃありませんよ？ 本当に、昔のワクワクとした感じを思い出ただけなんですから」

バニルはというと、先程のウイズに気圧されたのか、ずっと黙って

いる。

いや、と言うよりは……………。

「ふむ……………これは……………見方によっては……………」

顎に手を置き、悪魔らしい企みの表情を浮かべていた。

やがてニヤリと口角を上げて。

「いいことを思いついた。おい、雷神」

「……………なんだ？」

ニヤつく悪魔には嫌な予感しか覚えないが……………。

「汝に全面的に協力してやろう。我輩と取引せんか？」

「……………悪魔と取引するつもりは無い」

「まあ、聞け。それでも我輩は交流が広がってな。それに、我輩はあらゆるものを見通す目を持っている。力になること間違い無しである」

ヘイムダルに似た能力を持つてるだと？

……………こいつは思ったよりも力をもった存在のようだ。

だが、そんな事よりも気になることが一つ……………。

「で……………見返りはなんだ？」

「話が早くて助かる。我輩が望むものはただ一つ。汝がこの世界で探しているものが、もし汝の望むものでなかった場合、それを我輩に譲ってほしいだけだ」

「……………それだけか？」

「ああ。それだけである」

悪魔がこんなにも協力的なのはどうもきな臭い。

目的は本当にそれだけなのだろうか。

俺が疑いの目を向けていると、まあ無理もないだろうとバニルが肩をすくめた。

「神族である汝が我輩を信用できんのも納得できる。別にだまそうとしているわけではない。ただ単純に、我々の店に……………そして、我輩の夢に益となる可能性を感じたまでだ。汝が見つけたものが、価値のあるものなら加工するなりして店の資金として売り払う。強力な魔道具であれば我輩の夢の足掛かりであるダンジョン制作にでも役立てる……………目的はこれである」

「な、なんだか狡すつからくないですか？ バニルさん……」

「赤字しか生み出さぬ店を我輩なりに救おうとしているだけであるわ」

話を聞くに、この二人はどうやら店を経営しているようだ。

バニルの夢とやらは知らんが、ダンジョンを作ることがその夢につながるらしい。

別にインフィニティ・ストーンでなければ興味はないのでこいつらにくれてやっても別に構いはしない。

この辺り一帯を凍土に変えてしまう魔法の使い手であるウイズも、俺と戦って五体満足でいられるバニルも、良い戦力になるだろう。

それに、自分から手伝いを申し出たとはいえ、この人柄のよさそうなウイズにタダ働きさせるのも気が引ける。

特に断る理由もない俺は。

「わかった、その提案受け入れる」

「交渉成立であるな」

ただし、問題が一つ。

「で、あんたらはどこに住んでるんだ？ 行動を共にするならば、近くに拠点を置いた方がいいと思ってるな」

「ふむ……拠点か……」

「……バニルさん？ どうしてこっちを見るんですか？」

バニルはしばらくウイズと俺を交互に眺めたのち、妙案がひらめいたと楽し気な笑みを浮かべた。

「それなら我輩に任せるがいい」



……なんだか、懐かしい夢を見てた気がする。

「——ソーさん、起きてくださいーい」

そんな中、まどろんだ意識の向こうでうつつすら聞こえる、優しげな声。

「朝ごはん、出来てますよー？ ソーさん？」

ドアをノックする音と、その声に、のそりと起き上がる。
窓からは朝日がさんさんと射し込んでいた。

いい朝だ。

大きな伸びと欠伸をする。

それと同時にドアが開けられ、その向こうから一人の女性が部屋に入ってきて……。

「朝ごはん、冷めちゃうので早………きやあああーっ!!」

……盛大に悲鳴を上げた。

「なんでいつもいつも服を脱いで寝るんですか!? まだ春になったばかりなんですよ!」

「パンツは履いてる」

「そういう問題じゃないです!! 早く服を着てください!」

俺の姿を見るやいなや大慌てで後ろを向き、綺麗な茶色の髪を振り回すウイズ。

この家の家主にして、同居人である不死者の王だ。

とりあえず言われるがままにシャツを着て、ズボンを履く。

「ほら、言われた通りにしたぞ」

「はあ……もう、心臓に悪いのでやめてください………」

「ハッハッハ! 心臓が動いていないのに悪いもなにもあるのか?」

「気持ちの問題ですよ!」

そんなやり取りをしながら、食卓へと向かう。

肉やパンの焼きたい匂いが鼻をくすぐってきた。

食卓テーブルにつこうとしたのだが、俺の嫌いな奴が視界に入り、思わず顔をしかめる。

「やっと思きたか、寝坊助雷神よ。とつと朝飯を食って、仕事をするがいい」

「そういうお前は飯を食う必要など無いのに、どうしてここにいるんだ。朝飯が不味くなるからとつとと金勘定でもしてたらどうだ」

「二人とも! 朝から喧嘩しないでください!!」

黒と白のダサイ仮面に、タキシードにエプロンという珍妙な格好をした自称地獄の公爵ことバニル。

バナルは仲裁に入ったウイズにバカにするような笑みを向け。

「文句を言いつつ、なんだかんだで筋肉雷神のはだけた姿を楽しみにするむつつり店主よ。後ろを向いたフリして鏡越しに凝視す」

「あああああああ!!」

いきなり変なことを口走ったかと思うと、ウイズが電光石火の動きでバナルの口を塞ぎに行った。

早く朝飯を食べたいのだが。

……………そういえば、俺の肉体は地球にいた頃も人気だったか。

「ウイズ……」

「な、なんでしよう……?」

俺は真剣な眼差しでウイズを見つめて。

「腕?でた方が嬉しいのか?」

「?!?!」

「?!ハハハハハ!! フワーツハツハツハ!! 流石だ天然雷神よ!

貴様がいると店主の悪感情が喰らい放題であるわ!! 汝をここに招いた甲斐があつたというものよ! フハハハハ!!」

賑やかな朝食になったもんだ。

腹を抱えて床に転がるバナルと、それをポカポカと叩くウイズを後目に、俺はパンにバターを塗って食べはじめた。



俺が倉庫で荷物下ろしをやっていると、パタパタとスリッパで駆け寄ってくる音が聞こえてきた。

「ソーさん、こちらのサンプル品を見てください!!」

ウイズが誇らしげな笑顔で持ってきたのは、一つの小箱。

稲妻を模したようなマークが掘られたその商品は……………。

「雷の魔道具?」

「はい! しかも、とびっきり強力な魔道具ですよ!」

「ほお、この俺を前にして雷の魔道具か。面白い、どんなものか教えてくれ」

「ふふふ。この魔道具はですね……周囲の魔力を吸って、最大まで溜まると周囲を焼き尽くすほどの大放電を行うんです!!」
なるほど。

それはとても……

「カッコイイな!」

「ですよね!」

「十……いや、二十は仕入れるべきだ!」

「それくらいは売れますよね!! では早速……」

「させるかたわけども!! 一体何を仕入れようとしてるのだ!」

ウィズが持つていたサンプル品をふんだくったバニルは、それをしばらく眺めた後に呆れたようなため息をつく。

「……おい、厄災店主と居候アルバイト。貴様ら、この魔道具が本気で売れると思っているのか?」

バニルは悪趣味な仮面をコツコツと指で叩きながら。

「よいか? この魔道具は周囲の魔力を吸い取って放電するとはいえ、それに必要な魔力は上級魔法数十発分。オマケに放電する時は使用者が手動で起動せねばならないので、使ったら周囲諸共炭になるのがオチである」

「毎日仲間を守るために貯金するかのように電気を貯めて……いざ仲間を守るため命を燃やさんとした時にこれを放つ……ロマンチックではないですか!」

「汝の脳みそは電気で焼ききれて……ッ!」

「……バニルさん? どうしたんですか?」

本日二度目のデカいため息をついていたバニルは、倉庫の棚に置かれたあるものを見て目を大きく見開いた。

……いや、仮面で目は見えないのだが、顔の筋肉の動き的に多分そうだろう。

「……雷神よ。その棚に置いてあるものはなんだ?」

「ん? ああ、これか? これは――」

ぶつとい眉毛みたいな角をはやしたデザインの頭蓋骨。

棚に飾ってあったそれは……。

「——スルトの頭蓋骨だ」

「貴様はこの世界を滅ぼしたいのか!? なぜそんなものがここにあるのだ!!」

鬼気迫る勢いでバニルが怒鳴った。

だがこいつはもう無力化してあるから大丈夫なのだが。

「そうビクビクするな、地獄の公爵。アスガルドにある永遠なる炎が無い限り、スルトが復活することは無い。辺境の星に置いてある方がかえって安全だ」

「我輩を臆病者扱いとは、流石は傲慢さで一度地上に墮とされただけはあるな。もしここで復活しようものなら、店の商品を倉庫ごと弁償してもらおうぞ」

「……この頭蓋骨がそんなに危険なんですか？ たしかに禍々しいですが……」

ウイズがおっかなびつくりしながらスルトの頭蓋骨を指でつつく。

「ムスペルヘイムという炎に包まれた世界の王だ。もし永遠なる炎で復活することがあれば、剣の一振でこの街は灰になり、大地に剣を突き立てればこの世界は消えてなくなる」

まあ、俺が倒したが。と付け加えて笑うが、ウイズは元々悪い顔色をさらに悪くさせてゴクリと喉を鳴らした。

「どこかダンジョンの奥にでも捨ててきませんか……?」

「永遠なる炎でしか復活しないとはいえ、これは強力な力を持った武器にもなりうる。手元に置いておいた方が安全だ」

俺はそう言いながら、スルトの頭蓋骨を手にとってた掃除用の羽箒でペチペチと叩き始める。

このスルトの頭蓋骨は、俺がこの星へと来る前に手に入れた戦利品。

今じゃ置物になって棚に飾られてるが、下手したらスルトの手によってアスガルドが滅ぼされるというラグナロクが起きる所だった。

こいつを手に入れたその後、強力な力を感じてこの世界まで来たわけだが……。

「でもまあ、不気味なのは確かだな」

「あのー……いつまで羽箒で叩いてるんですか？」

「なに、このげじげじ眉毛みたいな角はこいつの王冠らしくてな。綺麗にしてやってる」

ずっとスルトの頭蓋骨を羽箒でペチペチしてる俺に、ウイズが変な奴を見るような目を向けてくる。

そんな目で俺を見るな。

その後も三人で荷下ろしをしたり、こつそり仕入れた商品がバレて説教を食らったりのいつもの日常が過ぎていく中。

「おつ、客だ。珍しいな」

「い、言わないでください……」

店のドアが開けられ、客の入店を知らせるベルの音が響いた。

俺とウイズは接客の為に店のカウンターへと向かう。

「たのもー。ウイズー、お茶とお菓子が欲しいんですけどー」

「お前……来て早々たかるなよ……」

「ようこそ。おお、お前らか」

「よっ、ソー。相変わらずエプロン姿が似合ってるな」

店に来たのはカズマの一味。

どこにでも居そうな普通の少年と、それを取り巻く個性的な仲間達。

「そろそろこのバイトの服も板に着いてきたと思ってるんだが……」

「ねえねえソー、またこの色紙にサイン貰えないかしら？」

胸筋でピチピチになった、サイズの合っていないエプロンに目をおとしていると、横からそんな声が聞こえてきた。

その声の主は、水色の長い髪が特徴的な水の精霊、アクア。

こいつは何故か、俺に会うたびにサインをせがんでくる変わった俺のファンだ。

「前も書いたばかりじゃないか。家族の分か？　まとめて俺が書いてやっても……」

「やめとけソー。こいつ、天界故郷にいるお前のファンにサインを高値で売りさばくつもりで貰ってるだけだから」

「……………」

俺は手先から電流を流して色紙を爆散させた。

「あああああーっ!! 色紙がーっ!! 何するのよソー!!」

黒い塵となつて床にパラパラと積もる色紙だったものを、ウイズが手早く箒で掃いていく。

「で、今日は何しに来たんだ?」

「ちよつとソーに頼みごとがあつてね」

「単刀直入に言おう。貴方には、これから行くクエストに同行してほしい」

カズマの後ろにいたダクネスが、真面目そうな顔でそう告げてきた。

それはつまり……………。

「お前がそんな真剣に頼み込んでくるといふことは、重要な案件といふことだな」

「ま、待ってくれ!! 私は普段から真面目だぞ!」

「そう見られたいならソーを見るたびにハンマーでぶつ叩いてくれとか、電流を浴びせてくれとか頼むのやめろよ」

「そのようなことを言った記憶はない」

「お、お前…………」

そう、このダクネスという強固な鎧を身にまとつた一見美しい戦乙女、実は嬲られたり罵られると興奮するとかいうとんでもない趣味を持っている。

初めて目の当たりにした時はさすがの俺も飛んで逃げた。

「話を戻そう」

「話だけじゃなくて敵の攻撃もそんな風に逸らせるようになってくれ」

「くっ…………お、お前というやつは…………まあいい。実は…………」

「貴方に依頼したいことがあるのです!!」

ダクネスが最後まで言う前に、その言葉を紡ぎながら小さな影が彼女の後ろから飛び出した。

透き通るような碧眼に、セミロングの金髪をした少女。

「お久しぶりですソーさん!!」

「アイリスじゃないか！ 久しぶりだな！」

彼女はこの国を統治する国王の第一王女、アイリス。

同じく民の為に戦う者同士、何度か対談での会話に花を咲かせたものだ。

「アイリスが直接依頼なんて随分珍しいな」

「カズマがアイリスに入れ知恵したのですよ。『俺に会いたいなら、幹部を倒して信頼を勝ち取ってる俺達のパーティーに直々にクエストを依頼すれば会えるだろ』って」

そう言いながら冷たい視線をカズマに向けているのはめぐみん。

こいつはとてつもない威力を誇るが一日一発、しかも撃った後は必ず倒れるという爆裂魔法をあやつり、しかもそれしか使えないという何ともおかしな魔法使いだ。

気概は気に入ってる。

そんなめぐみんの視線などカズマは気にする様子もなく。

「俺のかわいい妹が会いたいわって言ってるんだ。お兄ちゃんたるもの、それを叶えてあげないと！」

「ハア……」

めぐみんが盛大に呆れたため息をついた。

「兄妹で仲が良いのは羨ましい事だ。それで、依頼ってのはなんだ？」

アイリスはいつもの純白のドレスでは無く、装飾の施された鎧ときらびやかな宝剣を装備していた。

依頼内容は冒険に憧れているアイリスの護衛か何かだろうか。

そんな推測を立てていると、後ろの方からある声が聞こえてきた。

「バイト雷神よ、どうやらその案件は貴様にとってかなり重大なものになるやもしれぬ。最大限の準備をしていくが吉だ」

先程まで空気と化していたそのバニルの声に、俺は振り向いて。

「……どういふことだ？」

「王族が抱える占い師が予言したのだ。世界を滅ぼしかねない何か強大な力が西の地に眠っていると」

ダクネスが重めの口調で説明を始める。

この女も王に使える貴族が一人。他の全員はともかく、その立場にいるものとして事を重大に受け止めているようだ。

だが、ここで疑問が二つ。

俺はバニルの方へと顔を向けたまま。

「俺にとっても重大なものというのは？」

「貴様がここに来てから、契約通りに貴様が感じ取ったという力を探してはみたものの……収穫はなかったであろう？」

「ああ」

それは、俺がしばらくここで働き続けている理由。

なんでもバニルがそれを見通そうとすると、強力な光が邪魔をして見えないのだそうだ。

この悪魔は強い神聖な力を持つ存在や自分の力に匹敵するものを見通すことができない。

だからこそ、よりインフィニティ・ストーンに関係しているのではとの疑いが強まったのだが……。

「プークスクス!! 見通す悪魔の名折れじゃない!! ウケるんですけどー!!」

「フハハハハ!! 名折れどころか折れる名すら立たない残念女神がほぎきよるわ!!」

「ほーん。木端悪魔がそんな口を利いて良いの? 言っとくけどね、ここにはあんたの天敵が二人もいるのよ? その気になったら残機なんて残らず消し飛ばされると思いなさいな。ねっ? ソー?」

「お前女神のプライドはどこに捨ててきたの?」

あなたは私の味方でしょと言いたげな視線をチラチラと向けてくるアクア。

後ろのカズマの目が凄い勢いで冷めていつているのには気づいていないご様子だ。

「この悪魔がムカつくのは俺も同じだが、今は話を進めたい。たのんだカズマ」

「合点承知の助」

「あつ！ カズマ、なによこの手。女神の首筋に気安く触れるなんてああああーつつつ!!」

氷結の初級魔法を首にかけられたアクアは、床に亀のようにならずくまって震えながら恨み言をブツブツつぶやきだした。

そんなアクアを尻目に、俺はバニルに目線で話の続きを促す。

「……で、今その小僧共の行く先を見通したところ……なんと偶然にも、以前見通そうとして失敗した時に見たのと同じ光が見えたのだ。これはひよつとするかもしれないぞ?」

「ハツハツハ！ おもろくなってきた！ 用意しろウイズ！ 冒険に出るぞ！」

「……………」

「ウイズ……?」

俺の世界や伝説インフイニティ・ストーンの石の話、アベンジャーズの話聞いてた時は『そんな冒険ができたなら楽しそうですね』なんて笑ってたウイズが、どこかその顔に陰りを落としている。

とりあえず俺は笑いながら、手の甲で軽くウイズの肩を軽く。

「おい、どうしたんだ！ ほら、楽しみにしてた冒険だぞ!!」

「……その、もし見つけたものがソーさんの探しているものだったら……ソーさんはもうこの世界からいなくなってしまうのですか?」

そう、心配そうにウイズが尋ねてきた。

……ああ、そうだった。

そのことについて全く考えていなかった。

ここに来てそれなりに経つ。

この世界は俺にとって第二の地球みたいなもんだ。

「まあ……そうなるな。でも安心しろ、虹の橋を通じてまたいつでもここにもどって……」

そこまで言ったところで、俺はふと思い出す。

いつの日か、今とまったく同じセリフをジェーンに言ったのに、結局俺は彼女の元に戻らなかったことを。

それが原因でジェーンとは深い溝が出来てしまったことを。

「あつ……私、なんだかラブコメの匂いがしてきたわ」

「何が悲しくて他人の……しかもイケメンがイチャついてる所なんて見なくちやならないんだ。帰らせてくれ」

アベンジャーズの元にだって戻ってない。

「こら!! 本当に帰ろうとするな!!」

「そうですよお兄様……!!」

もし見つけたものがインフィニティ・ストーンだったのなら、すぐさま確保してアスガルドに厳重に保管しに行くだろう。

「あ、あの……カズマ。そんなに羨ましいのであれば、私が少しくらい……」

「詳しく」

そして……新しいインフィニティ・ストーンを探しに行く。

「ああつ! ズ、ズルいです! お兄様!! クエストは少し延期してもいいので、先に王城で私と英気を養っても……」

「アイリス様!? 国家の一大事なのですよ!? しかも、その男は女と見るや否や見境なしに襲いかねない野獣です!! ここは私が引き受けますので……」

違っても……結局他の惑星にストーンを探しに行く。

「……俺、ソーを妬む必要なんてなかったんだな……」

「うーわ。カズマさんの余裕そうな顔がすごい気持ち悪いんですけどー……」

……それが今の俺に課せられている使命なのだから。

「雷神に同情してやるつもりはないが、貴様らは少し空気というものを読んだらどうなのだ?」

だが、雑音だらけの周囲の中、ふと気が付く。

——たとえ使命があったとしても、俺はここに戻らなくてはならない理由があるじゃないか

俺はウイズへと向き直って彼女の瞳を見据えた。

「ウイズ」

「は、はいっ」

目を離さず、店の傘立ての方へと手を伸ばす。

俺の想いに応え、立てられていた傘……姿を変えたムジヨルニアが

カタカタと震え、我が手へと……

「安心しろ、俺は必ず戻ってくるぞ。なぜなら……グハツ!?」

……土台の傘立てごと飛んで来て、俺の頭に直撃した。

「……………」

盛大に床に叩きつけられ、ひしやげた傘立てが床を転がるも、俺は何でもないかのように立ち上がってムジヨルニアを手に不敵に笑う。

そして……

「なぜなら俺は、この素晴らしい店のマイティ・アルバイターだからだ！」

その言葉と同時に周囲が雷の光に覆われ、俺の身を戦士の装束が包み込んだ。

「だから、そう心配するな。とりあえず今は旅を……ウイズ? どこいった?」

だが、光が収まってクリアになった視界にウイズの姿は見えない。

周囲をキヨロキヨロと見渡していると、カズマがコンコンと俺の背中をノックしてきた。

「ソー……足元みてみ」

彼の言葉に視線を下ろすと、そこには俺が正装を纏う際に放たれた神気にあてられ、地面に倒れて体が少し透けているウイズの姿が。

……しまった。

番外編2 マイテイ・アルバイター 中編

車両は心地よいリズムで揺れ、車窓からの景色が紙芝居のようにゆったりと切り替わっていく。

バニルの目や魔道具、俺の勘を頼りにしながら西へ進み四日が立った。

竜車と呼ばれる、魔力によって地面から少し浮き、それを小型の竜がけん引するという、アイリスが用意した豪華な乗り物により舗装されていない悪路でも大して揺れずに進めている。

中也広く、地球で言う所のキャンピングカーに近い。

アスガルドでもここまで乗り心地の良い車両はそうそう見当たらないだろう。

「はい、ソーさんの番ですよ！」

「……少し待ってくれ」

そんな竜車の中で、俺は苛烈な戦いを強いられていた。

みんなとの旅を心の底から楽しみにしていたアイリスが、旅のお供に持ってきたボードゲームで俺を一方的にぶちのめしている。

こういうのは得意じゃない。

助けを求めて外の景色を眺めながらお茶を飲むウイズに視線を送るが……。

「駄目ですつ。良い大人が女の子相手のボードゲームで他人に頼ってたらカッコ悪いですよ？」

「ぐつ……オーケーアイリス、降参だ」

「やった！ やりましたよお兄様!!」

俺を打ち負かしたアイリスがカズマの方へと満面の笑みで振り返る。

「さすがは俺の妹だ。俺が鍛えただけはあるな」

「あ、あの……私はお兄様に負けたことはほとんどないのですが……」

「おつ、でも最後に勝ったのは俺だかな。実質俺の勝ちだ」

「ではもう一度勝負いたしましょう！ 次は負けませんから！」

「いや、最後に勝ったのは俺なんだから、もう負けるかもしれないリス

クを背負って勝負をするわけないじゃないか」

ロキでもしなさそうな理屈のこね方をするカズマ。

そんなカズマに業を煮やしたアイリスは、さすがのような目で俺を見
てきた。

「ソーさん！ ソーさんから何か言ってください!! お兄様は勝負
事となるといつもこんな汚い手を使うんです!!」

「フツ。アイリス、昔俺はお前に言ったよな？ そういう汚い手を
使ってくる奴をどうするかって」

アイリスはその言葉にハツとした表情を浮かべたかと思うと、猛々
しい戦士のそれへと変貌させる。

「相手より勝っている部分で正面から突破する……!!」

「……アイリス？」

「お兄様！ 王族は強いんです!! 今からお兄様を捕まえて、再び勝
負を受けてくれるまで……いえ、負けを認めるまでくすぐり倒します
!!」

「は!?!」

俺のアドバイス通りに、己の長所である恵まれた身体能力を活かし
てアイリスがカズマを引き倒してくすぐりまわし始めた。

「ぶはははははは!! ま、待って……あばはははははは!! わ、わかった
!! 負けでもなんでも認めるからやめっ……あぎやはははははは
!!!」

「ふう……ソーさんの言う通りでしたね！ これで私の勝ちですね
!!」

アイリスにくすぐり倒され、地面で虫の息になっているカズマが俺
に恨みがましそうに睨んでくる。

「……どうしてくれんの？ 俺のかわいいアイリスがお前のせいで脳
筋お嬢様になっちまったじゃねーか」

「何を言うんですか、お兄様。脳筋というのは誉め言葉なんですよ？

脳みそまで筋肉ということは、その筋肉がある腕も足も腹筋も、全
て脳みそということ。つまり、私は全身脳みそで賢いということにな
るのです」

「ええ……」

でしたよね、ソーさん。と、白慢げな笑みを俺に向けてくるアイリス。

流石は気の合う王女様だ。俺が教えたことを正しく理解しているらしい。

俺は完璧だとサムズアップしてアイリスに笑い掛けた。

カズマはあつけにとられて口をポカンと開けている。

「この国もいよいよもって終わりかもしれないね……」

「ああ……なんとということだ……カズマといいソーといい、どうしてアイリス様に悪影響を……」

なぜか頭を抱え始めたためぐみんとダクネス。

その横では、ずっと静かにしていたアクアが壁のフックにかけてある俺のムジオルニアを上げしげと眺めてた。

「……？ アクア、お前何してんの？」

しばらく放心状態だったカズマが我に返り、アクアにそう尋ねると。

「このムニヨムニヨハンマーって、ふさわしい者が持ち上げられるって話だったわよね？」

「ああ。それと、そのハンマーはムニヨムニヨじゃなくてムジオルニアだ」

「じゃあ……今こうして壁にかけられて竜車で移動してるってことは、竜車はその選ばれし者って事になるのかしら……？」

そんな、アクアの素朴な話題に。

「……」

その場にいた全員が食いついた。

「ソー。そういえば、お前の武器には謎が多いな。雷が出るのもそうだが、振り上げると飛ぶなんて初めて見たぞ」

「私も不思議に思っていました。そもそも武器の形としては少々バランスに欠けているといえますか……」

「お店では傘の姿をとってるのも不思議ですよえ……」

「ていうか、ふさわしき者ってどんなやつ？」

矢継ぎ早に飛んでくる質問。

俺はフックにかかっていたハンマーを手に取り、クルリと回しながら答える。

「真に高潔な魂を持つ者のことだ」

その言葉を聞いたアクアは、自信満々の笑みを浮かべながら立ち上がって。

「なるほどね……ねえソー。もしそれを持ち上げられたら……私はアスガルドの女王になれるのかしら？」

「フツ……ああ、もちろん」

「言ったわね！ 女王になったら……そうねえ、国総出の大きな宴会を毎日するの！ そんなもって……」

俺がムジヨルニアを地面に置くと、アクアはもう女王になった気分
でムジヨルニアを意気揚々と掴む。

そのまま力いっぱい引っ張って……

「……っ!？」

……ピタリと制止した。

時間が制止したかのような奇妙な間が少し流れる。

『『パワー』 ツツツ!! フンツ!!』

自身に本気の支援魔法をかけて、フルパワーでまた引っ張る。

もちろんムジヨルニアはびくともしない。

「んんんんんんんーっ!!」

「お、おい……あきらめろよ……どんだけ女王になりたいんだ……」

もちあげるというか、もはや引っこ抜かんばかりの勢いで力を込めるアクアの姿に、俺は若干引く。

「カ、カズマ……持ち上げられたら、アスガルドの半分をあげるわ……だから手伝いなさい……!!」

「魔王みてーなこと言うなよ!! お前女神だろうが!!」

カズマの言葉にとうとう折れたのか、アクアはバタリと倒れて地面に転がった。

「はあ……はあ……こんなのおかしいわ……清らかな女神であるこの私が……」

「少なくとも、欲望に満ちた顔で大人気なく支援魔法まで使ってハンマー持ち上げようとしてたお前の姿は、高潔とは程遠かったぞ」

カズマのそんな言葉も耳に入らない程余裕がないのか。

アクアは顔面どころか全身をまで赤くして地面で息を荒くしていた。

「他に持ち上げたい奴はいるか？」

「「……………」」

俺のその言葉に、座っていた全員が目を合わせ——！

——めぐみん。

めぐみんはアクアに負けず劣らずな自信に満ちた笑みを浮かべてハンマーの柄を握る。

「ふっふっふっ……高潔なる精神を持つ選ばれし者……ですか。我が紅魔族の血が騒ぎます——」

笑いながら握る手に力を込め……！

「——ねッ……あうっ!？」

盛大に後ろにずっこけた。

こけた時に見えたためぐみんのぱんつをカズマが凝視する。

全員にゴミを見るような目で見られていた。

「いたた……こ、これどうなっているんですか……?？」

「なんてことはない、ふさわしくないだけさ」

俺のそんな挑発的な笑みにむかつ腹が立ったのか、めぐみんの瞳が紅く輝いた。

——並々ならぬ魔力を感じる。

「言ってくれますね……!! わかりました、負けを認めます。私にこれは持ち上げられません」

剣呑な雰囲気を出しながらもあっさり負け引き下がったためぐみに俺は目を丸くする。

こいつは俺が知る限り一番の負けず嫌いだったはずなのだが。

「それじゃ、次……」

「ですが!! 動かすことならきつとできると思います」

めぐみんはそういきり立って杖をムジヨルニアに向け……。

まさか……。

「そう！ 我が爆裂魔法で」

「確保ー!!」

「ああっ！ 何をするのですか!!」

血相を変えたカズマたちによってめぐみんが素早く取り押さえられる。

流石に車内で撃ちはしないだろうが、あんな魔法を愛槌に撃ち込まれるのは御免だ。

「カカ、カズマ!! どさくさに紛れてどこ触っているんですか!?!」

「触ってないよ」

「ちよっ……」

試すまでもなく、カズマがハンマーを持ち上げられることはなさそうだ。

——ダクネス。

「これでも私はエリス様に仕える聖騎士、クルセイダーだ。私の魂は高潔であるとこれで証明してみせる」

正直言っつて、周りに期待した目をしている奴はいない。

だが、そんな中できつとできると信じてやまないものが一人。

「流石だわ、ララティーナ！ あなたが高潔であることは、あなたを信頼するこの私、ベルゼルグ・スタイリツシュ・ソード・アイリスが保証します。ララティーナ、持ち上げて！」

「ア、アイリス様……!」

主の激励に涙ぐむダクネスだが、

俺もこいつの中身についてはよく知っているつもりだ。

だからこそ、ほんの少しだけ可能性があるのでと睨んでいる。

確かに自分の性癖にだらしない部分があるが、これでも民の為に

身を捧げる信念と高潔さはあるのだ。

己が守ると決めたものの為ならば、命を投げ出し、決して退かない姿があるのも知っている。

だから、もしかしたら……。

「よし、命に代えても持ち上げて……ッ!? あ、あれ!」

と思ったが……高潔ではあってもムジヨルニア的にはNGだったようだ。

俺はダクネスの高潔な面にそれなり以上に敬意を払っている。

だから、持ち上げたらそれはそれで……いや、やっぱりショックを受けてたかもしれない。

「くっ……駄目だった……」

ダクネスは敬愛するアイリスに激励を受けても期待に応えられなかったことに落ち込み、地面に膝をついてうなだれる。

普段のカズマたちなら、『知ってた』だの『変態のお前が持てるはずがない』だの言ってたかもしれないが……。

「そんなに落ち込まないでくださいダクネス。たかがハンマーを持ち上げられなかっただけではないですか」

「顔を上げてください、ララティーナ。あなたが高潔な心を持っている事は知っていますから!」

「ド変態な部分が駄目だったんじゃないでしょうか」

「お兄様!!」

地面でうなだれていたダクネスは、俺の方に顔を向けると……。

「ソ、この失態をさらした哀れな私の背に……ハンマーを置いてもらえないだろうか……!」

こいつは何を言ってるんだ?

困惑の視線をカズマに向けると、カズマは申し訳なさそうな表情を浮かべて首を横に振る。

「うちの変態がごめんなさい……」

「ラ、ララティーナ……」

アイリスも、少し困惑した顔をしていた。

高潔であると認めたまさっきの俺の気持ち返してほしい。

「――で、他にまだ挑む奴はいるか？」

俺がそう笑ってみんなに聞くと、もう誰も手を上げない。

「カズマ、やってみたらどうだ？」

「いやだよ、俺は試されたくない」

「カズマが持ち上げようとしたら、上がるどころか地面にめり込みそうですね」

「バカにしてんのか」

ダクネスとめぐみんがカズマの背中を押すが、それでも持ち上げようとはしなかった。

が、いまだに地面でぐったりとしていたアクアがウイズの方へと顔だけ向けて。

「ちよつとウイズ……あんたもやってみなさいな。そして私みたいに地面に転がりなさいよ」

こいつ、どうやら自分が恥かいたのだからみんな同じ目に合っつまえばいいという精神で、ウイズにも挑んでほしいようだ。

千年たつてもアクアにムジヨルニアは持ち上げられそうにない。

「あ、あのー……私は既に持ち上げようとして駄目だったので……」

「俺が最初に店に来た時だな。『その武器お預かりしますよ』だなんて言つて、足元に落として透けていたっけか。懐かしいな！」

昔を懐かしんで笑いながら、俺は地面に置いてあったハンマーを軽く拾いあげる。

「まっ、そういうことだ。これを利用して、バニルの椅子やら机の上なんか置いてくとく面白いで。隠し金庫のドアの前に置いた時なんて、背中から光線を撃たれたくらいだ」

「やめてやれよ……」

そんな他愛もない話をしていると、天井からノックする音が聞こえてきた。

寝食を必要としないバニルが、ずっと電車の上で見張りをしているのだが……どうやら何かあったらしい。

俺は窓を開けて屋根の方へと顔を覗かせる。

「おい、なんかあったのか？」

「こうして上ですつと頑張っている誠実な我輩を笑いものにしてる自称高潔な雷神よ、どうやら目的地についたようであるぞ」

「ついに。か。どうだ？ 何か見えるか？」

バニルは親指でクイツと竜車の正面を指す。

その先に見えたものを確認すると、俺は急いで竜車の中へと戻つて。

俺が叫ぶのと、何かに気が付いたカズマが叫ぶのは同時だった。

「おい！ 敵感知に反応があるぞ!!」

「全員、戦闘準備をしろ!!」

「!!」

その言葉に反応し、全員が武器を取り出して一斉に車外へと飛び出した。

「ソーさん！ 敵襲つていったい……!!」

飛び出した先にいたのは、様々な武装に身を包んだ大勢の人型のモンスター。

オーガにオーク、トロールといった屈強な巨人ばかりだ。

距離が離れているからか、まだこちらに気づいている様子はない。

あいつらは……。

「ま、魔王軍?」

「なんで魔王軍なんかこんなところにいるんだ!」

魔王軍の姿を見たウイズが、悔しそうに俺の方を見てくる。

ウイズは魔王軍に対して中立の立場をとっている。奴らに攻撃することはできないからだろう。

その事実は知らないであろうアイリスには聞こえないように、小声で俺に耳打ちしてきた。

「す、すいません、ソーさん……」

「ああ、わかってる。お前は竜車の中にいろ」

すいませんと小さくお辞儀をし、竜車のなかに入ってくウイズ。

アイリスはウイズが戦闘できることを知らないので、特に不審に思うこともないだろう。

俺ははまだ竜車の上にいるバニルに声をかける。

こいつも魔王軍は古巣なので手出しはできないはずだ。

だから……。

「おいバニル、『助けて』をやろう！ 今の状況なら刺さるだろ！」
「うむ、超断る」

俺の完璧な提案にバニルは実にいやそうに顔を歪めて拒否する。

「どうしてだ？ いい案じゃないか」

「やらん。屈辱的だ」

「楽しいぞ？」

「絶対にやらん。どうして地獄の公爵たるこの我輩がそんな——」

——俺は全力で魔王軍の軍勢へと駆け出す。

「助けてくれ!! 誰か! バニルが死んでしまう!!」

ぐったりしているバニルを脇に抱えて。

「バ、バニル様!? 確か駆け出しの街へと向かってから消息不明と……」

「いいから早くしてくれ!! このままでは間に合わなくなる!!」

「は、はい! いますぐ——」

「くらええええええ!!」

駆け寄ってきた軍勢めがけてバニルを思いつきり投げつけた!

「二「ギャアアアアアアツ?!」二」

バニルが猛烈な勢いで地面と水平方向に回転しながら飛ぶ。

剛速球で飛んで来るバニルの直撃を受けた魔王軍が、ボーリングのピンめいて吹っ飛んでいった。

「いやー、楽しいな」

「それは貴様だけであろうが!! もう二度とやらぬわ!!」

立ち上がったバニルが土埃を払いながら激昂する。

だが、おかげで敵を何体か倒せた。

「なんだなんだ!？」

「敵襲だ! 迎え撃て!」

倒したといっても、それはあくまでほんの一部。

悲鳴と怒号に気が付いた魔王軍が次々とこちらに押し寄せてくる。

バニルは敵の目から逃れるようにして自分の体を砂に変え。

「さて、我輩も魔王軍に攻撃しているのがバレたら面倒なのでな、馬車にてポンコツ店主の悪感情でも食うとしよう。貴様の下らんおふぎけにのってやったのだ、あの程度軽く薙ぎ払ってこい」

そう言い残して、仮面姿のまま跳ねて竜車まで消えていった。

実にシユールだ。

そんなバニルと入れ替わるようにして、後ろからアイリスたちが駆けつけてくる。

アイリスは不機嫌そうに頬を膨らませながら。

「ソーさん! 確かに一番槍は戦士の誇れですが、仲間を置いてあまり先行しないでください!」

「ふっふっふ! 雷神ソーよ!! あなたの雷が上か、人間最強の我が爆裂魔法が上か、競おうではないか!」

「さあソー、遠慮なく私の背中をハンマーでぶっ叩いて敵陣にかっ飛ばしてくれ!! 敵を引き付けている私を中心に雷を叩き込んでくれてもいいぞ!!」

「ねえソー。もし私が活躍出来たら、天界の創造神様に伝えといてくれない? あなたがそう言ってくれたら、きっと私昇格できると思うの」

前半二つはともかく、後半の二人に至っては欲望しか口にしていない。

戦いの高揚感が台無しだ。

色々と萎えそうになった俺の悲し気な視線に気づいたカズマが、俺の肩を叩く。

「俺ってさ、偉いと思わない?」

「ああ……アスガルドの歴史を綴る壁画に名が乗るぞ……」

だがまあ、こいつらが強いことは知っている。

「敵は少ない、畳みかけるおおお!!」

雄たけびを上げて突撃してくる敵兵士に向け、まずはアイリスが一步出る。

『エクステリオン』ツ!」

「うべっ!」

斬撃が光を放ってかまいたちのごとく飛翔し、敵を真つ二つに切り裂いた。

「さすがだアイリス!!」

戦士の目となり、一閃の元に敵を切り払ったアイリスに俺は満足げに笑ってハンマーを構える。

その横では、カズマが迅速な指揮を執っていた。

「俺が矢で援護するからダクネスは敵陣に突っ込んで敵をこっちに寄せ付けるな。アクアはみんなに支援魔法。ソーとアイリスの邪魔するんじゃないぞ」

「了解した!」

「あ、あの……私は?」

「温存」

「はあ!? ちょ、ちよつと待ってください!!」

めぐみんが目を紅くしてカズマにいきり立つ。

爆裂魔法で敵を打ち砕くことに己の全てをかける彼女にとって、お預けを食らうのは我慢ならないようだ。

「どうして私だけ何もさせてくれないのですか!? お預けで私を調教しようとしてるのですか!」

「落ち着けよ! 爆裂魔法をぶつ放したら全部吹っ飛んじまうだろうが!! 敵の目的を探れなくなっちゃうじゃねーか!!」

「私はあの敵の群れにぶち込みたいのです!! いますぐ撃たせあああああああーっ!」

もはや手の付けられない獣のごとく荒れていたためぐみんだったが、カズマの必殺スキルであるドレインタッチによって黙らせられてしまった。

「お、お兄様!? そのスキルは一体……!?」

「これはお兄ちゃんの必殺技さ。必殺技なので詳細は秘密です」
ウィズがリツチーであることを知らないアイリスには、自分がドレインタッチを覚えた経路は秘密にしているらしい。

めぐみんもそれをわかっていない為、事態をややこしくしないよう涙目でカズマを睨むことしかできないようだ。

もしこれを狙ってやっているのだとしたら……。

「……クズマのあだ名は伊達じゃないな」

「う、うるせー!! ほら、行つてこいダクネス!」

「任せるカスマ!」

「おい!」

体の頑強さにもものを言わせ、ダクネスが単身で敵の群れへと突っ込む。

当然、格好の獲物だと嘲笑う魔物たちに囲まれ、猛攻撃を受けるが……。

「な、なんだこいつ!? びくともしねえ!」

「クソ、こいつはいったん無視だ!! あそこで詠唱してる女と弓を構えてるやつを倒すぞ!!」

「ああ! ……ん? ……なんだ? 空が暗く……」

自分たちの足元に影が波紋のごとく広がり、敵は不思議そうに空を見上げる。

不自然に、そして局所的に広がる暗雲の中に、ほんの一瞬だけ光が灯った次の瞬間。

大地をえぐるほどの落雷が敵の群れのド真ん中へと突き刺さった。

「「ギヤアアアアアッ!!」」

「Fooooooooooooooooo!!」

敵の断末魔に紛れて何か喜悦の音がまぎれてた気がするが、きつと空耳だろう。

「いいぞー! ……もっと! ……もっとその雷を私めがけておとしてくれー!」

空耳であつてくれ。

「ソー、悪いんだけど……あいつはあれで平気なんだ……だから気にせずもう一発……おい！ 聞こえないフリするんじゃないやねえ!! 俺だっていやだよ!!」

空耳であってほしかった。

だがアスガルドの戦士たるもの、現実から目を背けるなんてあつてはならない。

俺はハンマーの先に電気を集約させ……。

「お、おい！ なんなんだよお前！ 放せ!! 一緒に食らうんだぞ!!」
「ふふ、そう恥ずかしくならなくてもよいではないか。慣れたら気持ち良いんだぞ?」

「こいつイカれ……アアアアアツ!!」

もう一度、ダクネスを中心に敵の群れに雷を叩き込んだ。

そしてとうとうダクネスは完全に無視され、彼女を中心に敵の群れはドーナツ状に広がり始めた。

「あつ……こ、この除け者にされる感覚は……わ、悪くない……」

「お前もう戻ってこい!! 敵に無視されるタンクってなんだよ!!」
「待ってくれ！ デコイをかければまだ……」

色欲にまみれた顔を隠すことなくおかわりを要求してくる誇り高き聖騎士。

ある意味尊敬に値する。

「ソー！ ダクネスを回収するの手伝ってくれ！」

「任せろ。ほら、つかめダクネス!!」

俺はダクネスめがけてハンマーを投げ、足元に落としてやる。

「な、なんだ!?! ま、まさか持ち上げられない醜態を今度はこの大勢に囲まれた中でやれと言うのか!?!」

「いいから柄をつかめ！」

「……柄？ おっ……おとおおお!!」

訝し気にダクネスが柄をつかむと同時。

戻って来いという俺の意思に従ってムジヨルニアが飛び立ち、俺の手元へと戻る。

……ダクネスを引きずって。

「ああああああああ……うっ！」

飛んで来るムジヨルニアをキャッチし、慣性の法則で後ろの方に転がってくダクネスを見守る。

「ふう……楽しかった」

「アクア、ヒールしてやってくれ。頭の方を念入りに」

煤と埃だらけになったダクネスにアクアが駆け寄る。

そしてヒールを施し終えるや否や、俺の横に不敵な笑みを浮かべて立った。

「さあ、ソー！ 私の力を存分に見せてあげるわ！」

拳を光らせてシュツシュツと宙にパンチを放つアクア。

頼もしそうやら、不安になるやら。

「待ってくれ」

残党せん滅の算段を立てていると、後ろからカズマが声をかけてきた。

なにかあるようだ。

「なーに？ これから私とソーで神々の戦いを見せてやるんだから、カズマの出る幕はないわよ？」

「言われなくて出ねーよ、お前のやらかしに巻き込まれたくないからな!!」

カズマはいつものようにアクアに怒鳴るも、その眉間のしわをすぐに緩ませて。

「そんな事より聞いてくれ、俺に良い考えがあるんだよ」

「ほお。聞こうか」

年相応の少年のようなワクワクとした表情で、カズマは答えた。

「合体魔法さ」

——カズマの作戦を聞いた俺達は敵に向き直る。

開幕に放ったアイリスの魔法と俺の雷、そしてダクネスの活躍に

よってこちらを警戒している敵はいまだに俺達の出方をうかがっていた。

だが、それ以降攻めてこないのを見てしびれを切らしたのか……。

「敵は攻めてこねえみたいだぞ……？ こっちから行くか？」

「ま、まて……毘に決まってるだろ……ここは目的を……」

ボソボソと連中は何か喋っているようだったが、俺とアクア、めぐみんの三人が一步前に出たことよって、一気にざわめきだす。

「クソッ！ こうなったら火力を集中させて押し切るぞ!!」

その言葉に合わせ、敵が次々と魔法の詠唱を始めるが……。

敵のそんな姿に、めぐみんがフンと鼻で笑う。

「あーあ。彼ら、一番やってはいけない策に出ましたね」

「ハハ。だな」

同じく笑う俺の横で、アクアが両手を広げて小さく詠唱を始めた。

「この世にある我が眷属よ……」

アクアの周りに小さな霧が現れ、それらが圧縮されて小さな水の珠へと変わっていき……。

「水の女神、アクアが命ず……」

ビリビリと空気が震える。

敵もヤバいと思ったのか、魔法の詠唱を急ぎ始めるがもう遅い。

『カースド・ライトニング』ッ！

『インフェルノ』ッ！

『トルネード』ッ！

『ファイアーボ』——

魔力がアクアを中心に渦巻くと同時。

『セイクリッド・クリエイト・ウォーター』！

——俺達の眼前に、巨大な水の壁が現れた。

この世の終わりに登場しそうな津波がアクアから敵へとなだれ込む。

敵の放つ魔法など、まさに大海に松明を投げ入れるがごとく一瞬にして飲み込まれて消え失せた。

「た、たすけてー! たすつ……」

「ごぼば……お、おぼれ……」

まだまだこれからだ。

流されてゆく敵を視界にとらえつつ、俺はハンマーを天へと掲げる。

爆発音の如き雷鳴が轟き、雷が俺のハンマーへと降りてはじけて周囲を照らす。

「ハアアアアアツ!!」

最大まで力を込めた雷がハンマーから放たれ、流れゆく津波のど真ん中へと突き刺さった!

「!!! ツツ?!?!」

水は電気を通す。

アクアが生み出した水の牢獄の中を雷が駆け巡り、敵に断末魔を上げる暇も与えずび葬り去った。

俺の雷から発生した強力な電熱によって荒れ狂っていた水という水が一瞬で蒸発し、爆散する。

空に飛び散った水が雨のように降り注ぎ、俺達の頭上に虹が出来上がった。

群れていた敵も蹴散らして見晴らしが良くなった平原を前に、隣にいたアクアとガツと拳を合わせる。

そんな俺達に、アイリスが驚いたような視線を送ってきた。

「お、お二方とも色々規格外ですね……」

「今は地上に墮とされてるから女神の力の半分も出せてないけど、本気になったらもつとすごいんですよ?」

「お前は水の精じゃなかったのか?」

水の精という言葉に、アクアがムツとして。

「はあー!? 私は女神だって言ってるじゃない!! なんで水の精呼ばわりなの!?!」

「誰かに願われて生まれ、信者の力によって力を増すタイプの生物は

アスガルドじや精霊に分類されている」

「あんたらアスガルド人ってちよくちよく自分たち以外の生物を見下すような発言するわよね……そういう所だけは好感持てないわ」

「おい、別に見下してるわけじゃ……」

「謝って！ 私たち女神を精霊呼ばわりして見下したこと謝って!!
そしてアスガルドに私たちが優秀な一族って事を広めて!!」

面倒な酔っ払いみたいな絡みをしてくるアクア。

ちやっかり自分たちの一族の存在を広めようとしてるのがまたなんとも彼女らしい。

そんな茶番を繰り広げていると、後ろの方で見ていたカズマと、竜車にいたウイズとバニルから声がかかる。

「二人ともその辺にしろよ。そんなことより、何で魔王軍がここにいるのかを突き止めようぜ」

「そうですね……あの、というかですね……お二人がもめるとその神気で私が大変なことに……」

「全く、神族というのはどうしてどいつもこいつも自意識過剰なのだ。人間に崇められるのがそんなに立派か？」

バニルはともかく、他二人の言ってることはごもつともだ。

生き残っている奴がいたら目的の一つでも聞きださねば。

「もー、ウイズも木端もなにもしてなかったじゃない!! いきなり出てきてとやかく言わないんでほしいんですけど!」

「お前さあ……今の二人の状況とかまで頭回らなかつたのか……?」

「そもそもバニルは見張り番で、ウイズはソーと共に道中のモンスターを散々倒していただろう」

「……ふぐっ」

カズマとダクネスに口々に反論されてとうとう涙ぐむ。

……昔のロキを知っている俺にはわかる。

アクアはただ敵を蹴散らしたことをほめてほしだけなのだ。

自分から褒めてくれと言える空気じゃないから誰かに気づいて褒めてほしいのだろう。

ロキも小さい頃は自分から褒めてくれとは言わずに、相手が察して

褒めてくれるのを待ってたもんだ。

察した俺はアクアの背中を軽くたたいて慰める。

「さっきお前が作った大津波、アスガルドでもあれだけの魔法を使える奴はいないぞ。さすがだアクア、見直してた」

「えぐっ……ありがどねソ……」

▽

魔王軍がいた目的を探ってしばらく。

俺達は何も見つけられないでいた。

一つだけため息をついて、俺は反省するかのように空を見上げる。

「まとめて吹っ飛ばしたのは良くなかったな」

「神ってみんな派手好きなの？ もう少し控えめにしてくれよ」

それもそのはず。

敵の拠点も兵士もみんなまとめて吹き飛ばしてしまったからだ。

カズマに嫌味を言われたが、この案はカズマの物だ。

「合体魔法だ、なんてキメ顔で言ってたお前には言われたくないぞ」

「確かに俺の指示だったけどさあ！ 加減しろよ!! まさか爆裂魔法

並みに周囲を消し飛ばしちゃうなんて思わなかったんだよ!!」

「あーあ、これでは私が爆裂魔法を撃っても変わらなかったではない

ですか。あーあ!! あの群れの中に撃ちたかったのに!!」

先程撃たせてもらえなかっためぐみんが恨み言をワザとらしくの

たまう。

この先はもう予測がついた。

「一つだけ違うとしたらお前がぶっ倒れてお荷物になるかならないか

だったな」

「ぶっ殺」

めぐみんがカズマを杖で突きまわし、それをカズマがスティールの構えで脅しながら捌きつつ、ダクネスが期待した目で仲裁に入る。

アクアはなんだかんだで泣く。

こいつらはどこに来てても変わらない。

いつでもどこでもこのままだ。

そんな彼らの様子を、アイリスは羨ましそうに眺めている。

「楽しそうで、お兄様が羨ましいです」

「ああ。俺の友人たちも、あんなふうに変わらずにいてくれるとうれしい」

そんな俺の様子を見たアイリスが、からかうような笑みを浮かべて来て。

「元の世界に帰るなんておっしやらず、ウイズさんのところにずっといてあげるのはどうですか？」

「そういうわけにもいかない。もちろん、なるべく顔は出すつもりだが」

「でしたら、ソーさんの世界にウイズさんを連れていくっていうのはどうですか？ もちろん、ハチベエも一緒に！」

「……ハチベエ？」

「仮面をつけたあの愉快な方のことですよ？ どうでしょう、いい案だとは思いませんか？ 必要であれば、我がベルゼルグ王国からも兵を送りますよ？ ソーさんには助けていただいていますし！」

……その発想はなかったな。

ウイズもバニルも……アベンジャーズのメンバーに引けを取らない強者だ。

いざという時に戦いに誘ってみるのも……。

いや、俺の事情に勝手に巻き込むのはどうなんだ？

アイリスの言葉に逡巡していると、俺達の会話を聞いていたらしいウイズが横からいつもの柔らかな笑顔を覗かせる。

「そうですねよ、ソーさん。あなたは私の店の為にたくさん働いてくれたじゃないですか。私達の力が必要になったら、いつでも招待してください」

あなたの世界に興味もありますしね。と、ウイズは笑って付け足した。

「ハハ……頼もしいな」

「ふふ……でしよう？」

互いに可笑しそうに俺とウイズの姿に、アイリスが顔をほんのり赤くしながら好奇の視線を向けてくる。

……………?

——それから手分けして、なにかないか探し続けてしばらく。

「おーいー！ みんなこっち来てくれー！」

「おっと、なにか見つけたみたいだな」

カズマに呼ばれた方へ向かうと、そこには何らかの採掘道具と思われるきものが散乱し。

そして……………。

「なんだこれは……………」

その近くには嚴重に保管された箱がいくつも横出しになって転がっていた。

「見るからに怪しそうだな」

「だろ？ 開けようとしてもビクともしないんだよ、これ」

俺とカズマが箱を観察していると、後ろからトコトコやってきたアクアが箱にぺたぺた触る。

「ふむふむ、なるほど……………。これには高度な結界が貼られて開けられないようになっているみたいね。でも安心してちょうだい。女神であるこの私があるこの私が」

「フンツ!!」

アクアが何か言いかけていたが、最後まで言う前に腕力で箱をこじ開ける。

「……………」

頬をふくらませて抗議の意を示すアクアの視線が俺の背中に刺さる。

見せ場を奪ってしまつて申し訳ないとは思うが、こっちの方が早いと思つたのでやったただけだ。

「いいもん…………他の箱あけるもん…………」

ブツブツいいながら背後で次々と結界を解除していくアクアを尻

目に、俺は箱の中に入っていた筒状の入れ物を手に取る。

触ってみた感じ金属製の入れ物だ。

「……なんだこれ？」

「それは、強力な魔道具なんかの力が漏れ出ないようにする魔法金属製の容器ですね。かなりの代物にしか用意されないような高度な容器なのですが……」

「こっちも全部その容器ばかりだぞ」

カズマが確認した箱の中身も同じようだった。

あちこちに転がる箱の中身は、どうやら全部これらしい。

容器は捻ると簡単に開く仕組みとなっていた。

俺はほんのり暖かい気もする金属の容器をあける。

中には、同じく魔法金属製の固定具にはめられた、赤い光を放つ小さな宝石のような鉱物が入っていた。

俺はそれを特に何も考えずに摘み………。

「Ouch！」

軽い気持ちで触れたそれは、ほんの少し俺の指先の表面を焼いて地面に転がる。

『フリーズ』！ だ、大丈夫ですか？ 一体何……が……」

ウイズがとつさに俺の手を冷やすが、床に転がっていくソレをみて絶句した。

バニルが興味深そうに唸る。

「ほお……これは面白い……コロナタイトと出たか！」

「コ、コロナタイト!？」

アイリスも随分と驚いた様子で地面に転がるコロナタイトと呼ばれる、赤い光を放つ石ころを眺めている。

だが、すさまじい力を秘めているのは分かる。

なぜなら俺がこの世界に感じ取った強力なパワーとまったくおなじものをこのコロナタイトから感じるからだ。

……おそらく、これが俺が探していた強大な力の正体だ。

「コロナタイトっていや……」

「ええ、機動要塞デストロイヤーの動力源ですね」

「ね、ねえ！ みんな見て!! こつちもこつちも、全部コロナタイトよ!?!」

声が出た方に顔を向けてみれば、アクアが両手にコロナタイトが入っている容器を持っていた。

ダクネスも数ある容器の一つを手に取り、驚いたようにつぶやく。「どうやらここは、コロナタイトが数多く眠る採掘場だったようだな……」

「こ、こんなにたくさん……」

ウイズがゴクリと喉を鳴らす。

たしかに凄まじい力を感じるが……。

「その赤い石がそんなに凄いのか?」

「凄いななんてものではありませんよ……! 永遠に燃え続けるという逸話の通り、あの巨大なデストロイヤーを延々と動かし続けられる動力源となった魔法鉱石です。下手すればこれ一つで国のパワーバランスが代わりかねませんよ」

もちろん、使いこなせる程の魔道学を有している事が前提ですが。と、後ろにつけ加えて話すウイズ。

「力の正体はわかったが……インフィニティ・ストーンではないようだな……」

これで一から探し直した。

「なーに残念そうな顔してんのよ! 見なさい!! これだけのコロナタイト、もし売ったら世界で上から数えた方が早いぐらいの大金持ちになれるわ!!」

「何を言っておるのだこの俗物女神は。こんなものが複数市場に現れてみる。市場崩壊待ったナシであるわ」

「あ、あの……アクアさん、申し訳ありませんが……流石にコロナタイトを市場に流すのは危険なので、これらは王城で保管させていただきます。もちろん、それ相応の報酬はお支払いいたしますので……」

残念そうにするアクアと、なだめるアイリスのその後ろで、バニルがこつそりとコロナタイトを怪しまれない範囲で服の下に忍ばせて

いた。

きつと契約の時に言っていたダンジョンの創造にでも役立てるの
だろう。

「で、予言にあった世界を滅ぼしかねない力ってこれの事なの？」

「うむ、見通してみたが間違いない。これがあのまま魔王軍の手に
渡っていようものなら、それを元に作った新兵器やらで人類側が敗北
してたかもしれないな」

「お、おっかねえ……そうだよな、あのヤバいデストロイヤーの動力源
してたんだもんな……」

「要するに、汝らは世界を救ったということになる。神様コンビが大
人気なく暴れたので実感の沸かない程あっさりであったがな。もつ
と喜んだらどうだ？」

バニルがそう言うが、全員の表情に歓喜の色は見えない。

……原因は分かっている。俺だろう。

インフィニティ・ストーン関連でなければこの星からすぐに消える
ということを知っているからだろう。

自分が人気者だとうぬぼれているつもりはないが、それなり以上に
交流を持ってきたウイズたちと別れるのは俺は当然、きつと相手もつ
らい。

そのうち戻るのだとしても……だ。

「……さあ、みなさん。竜車に戻りましょう。帰りはテレポートです
ぐに帰れるので、戦闘の心配はありませんからね」

依頼を終えた安堵の中に若干の陰りが混じる中、ウイズがどこか暗
めな笑顔で静かにそう呟いた。

番外編2 マイティ・アルバイター 後編

ウイズの店にて。

「フハハハハ！ これさえあれば、世界一のダンジョンを作ることも夢ではないわ！ フハハハハ!!」

店の奥にある倉庫から、バニルの高笑いが聞こえてくる。

コロナタイトを手に入れて上機嫌なのだろう。

ちなみにアイリスは、アクセルにテレポートした瞬間に街の前で待ち構えていたクレアに心配していたと泣きつかれ、半ば泣き落としに近い形で王都へと引き戻されてしまった。

側近であるクレアが泣いて心配していたのも当然だ。

なぜなら、アイリスはクレアとレインを上手くだまして城を抜け出し、勝手に俺達の旅に同行していたのだから。

王女が勝手に城を出て来るのはどうなんだとその時彼女に言おうとしたが、自分が世界を放浪するアスガルドの王子であることを思い出して飲み込んだ。

そして……。

「ウイズ遅いわねー……木端悪魔も倉庫の奥で気味悪く笑っているし、紅茶を入れてくれる人がいなくなっちゃったじゃない」

……そして、ウイズは……店に戻るや否や、少し待ってて欲しいと言いつつ自室に籠ってしまった。

そんな彼女を、俺を見送るために集まった他の仲間たちとテーブルを囲んで待っている。

「ソートたら本当に帰っちゃうの？ もっとゆっくりしたって良いじゃない」

「そうしたいのは山々だが、あいにくそういうわけにもいかない。なんてったって……」

「インフィニティ・ストーンが悪いヤツの手にわたる……だろ？ そんな切羽詰まって探し続けるほどヤバいのか？」

「何者かが同じように狙っている、悪しき目的だな。六つ揃えられたら……終わりだ」

「……………何が？」

「この星も含めた全宇宙がだ。世に存在する全ての生命が危ぶまれる」

「話がデカすぎて意味わかんねえ」

理解が追いつかないのか、はたまた現実逃避か。

カズマは険しそうな顔をして目を伏せた。

自分じゃどうしようもない破滅の危機なんて普通は直視できないだろう。

「ふふ……………世界を滅亡に導く力……………ですか。我が爆裂魔法こそが、その畏怖される名を冠するに相応しいとその悪しきものとやらに見せつけてやりたいですね」

「そんなヤバい奴がいるのか……………ふふふ……………きつと凄まじい鬼畜に違いない……………捕らえられたら……………魔王よりも酷い目に……………」

「ねえ……………嫌よ？ 私は絶対そんなのと戦わないからね？ 二人ともお願いだから私を巻き込まないでね？」

……………そう、普通は……………だ。

二人ほど嫌がる奴がいるが……………なんだかんだで巻き込まれ、そして解決する力が、こいつらにはあるのだ。

仮に彼らがこの世界の存亡をかけた戦いに巻き込まれようと、きつとどこかで目立った活躍をしてくれるだろう。

期待の目を向ける俺に、カズマが怪訝そうな視線を返してくる。

「おい、その目をやめろよ……………巻き込まれたらマジで恨むから……………おい！ マジで言ってるぞ！ そのハイハイわかつてるみたいない目をやめろ!! 砂飛ばすぞオラ!!」

手のひらをこちらに向け、彼の得意技である目つぶしコンボの構えをとるカズマ。

悪かったと手を上げようとしたら、奥からパタパタとスリッパで駆けてくる来る聞き覚えのある足音が聞こえた。

「お待たせしちやってすいません。これを作っていました」

「気にするな。で、何を作ってたんだ？」

ウイズが手に持っていたのは、先に人差し指の腹程の大きさをした

小瓶がぶら下がったペンダント。

その小瓶の中では、小さな赤い石の欠片のようなものがうつすらと、蝋燭の火のような柔らかい光を放っていた。

もしかなくても……。

「ふふ、コロナタイトが入ったペンダントです。バニルさんがくすねたものから少しだけ貰っちゃいました」

そう言っただけでウイズはいたずらっぽく笑みを浮かべる。

座っていた椅子から立ち上がり、ウイズからペンダントを受け取る。

手に盛った感触は、ほんのりと温かかった。

「綺麗だな……いいのか？」

「もちろんです。あ、特殊な液体に浸してあるので、爆発とかは起きませんから安心してくださいね」

普段あまりアクセサリーといったものを身に着けない俺だが、これは気に入った。

ペンダントを首からかけると、ウイズが満足そうに微笑んだ。

「似合ってますよ」

「嬉しいプレゼントだ。このペンダントは大事にする」

後ろで聞いてたカズマが咳払いを一つして、

「嬉しいプレゼントだ。このペンダントは大事にする」

……俺の声真似をした。

「俺の真似してるのか？」

「ああ、似てなかったか？」

「まったく」

「あのな、そんな気取った貴族みたいな口調じゃなくて、もっと嬉しきがあふれる言葉を選べよ。それか、行動で表せ。抱きしめるとかさ」

「カ、カズマさん！ 何言ってるんですか!?!」

茶化したカズマを、めぐみんとダクネスがジトツとした目つきで睨む。

「良い雰囲気になると三枚目になるくせに、なんでヤジだけはいつちよ前に飛ばすのでしょうかこの男は」

「お前がそんな男らしい言動や行動をとったことなど、ほとんどないではないか」

「ブークスクス！　へたれなカズマさんのアドバイスなんてなーんの役にもたたないじゃない！」

仲間の三人から非難轟々だが、カズマは耳を抑えて聞こえないフリをしている。

別れの寂しげな雰囲気が、だいぶ和らいだ。

もしかすると、それを狙ってヤジを飛ばした……のかもしれない。

あいつらしいがなとウイズに苦笑すると、彼女も苦笑で返してきた。

そして、俺はゆっくりと今迄世話になったウイズ魔道具店の出口へと向かう。

「さて、別れのプレゼントも貰ったことだし、そろそろ俺は行くとするよ」

「……そっか。よし、行くぞみんな……バニルは？」

「悪魔のあいつが俺を見送るはずないさ」

「なるほどな……」

全員が席から立ち、俺を見送ろうと後ろに続く。

扉を開けて路地へとでた俺に、みんなが少し寂しげな笑顔に向けてきた。

「ウイズ、俺の部屋とエプロン、そのまんまにしておいてくれ」

「ええ、すぐ戻ってくるんですけどものね」

「ああ。みんなも達者でな」

カズマたちとも別れの挨拶をし、笑ってそれぞれと視線を交わしたあと、俺はハンマーを天へと掲げ。

「またな！　近いうちに会——」

瞬間。

ウイズの店の奥から夕陽も霞む真っ赤な閃光があふれ——

——店が、周囲を巻き込んで大爆発した。

叫び声を上げる暇もなく、全員がその場から吹き飛ばされる。

体が空の紙箱のようにたやすく地面を頃張り、近くの家屋といった建造物を突き破った。

……なにが起こった!?

両手の指で数えても足りない程の衝撃を全身に受け、ようやく止まった先で体を起こす。

俺の体を覆っていた木材やら瓦礫やらがガラガラと音を立てて落ちた。

「うぐ……ぐ……」

となりで聞こえたうめき声に顔を向けると、そこには背中中の鎧に焦げ目をつけたダクネスがうずくまっていた。

俺はすぐさまダクネスに駆け寄る。

「おい、ダクネス無事か!」

「くっ……二人しか……抱えられなかった」

起き上がったダクネスの下では、顔を煤だらけにしたカズマとめぐみんが倒れていた。

二人とも衝撃で気絶しているみたいだが、息はしているので無事のようにだ。

と、俺達のすぐ横で何かがガバツと瓦礫を跳ね除けて起き上がった。

「ああああ熱いし痛いいいいいーっ!!!」

アクアが自分に何度もヒールをかけながら、自分の体に付いた埃を払う。

よかった、元気そうだ。

「アクア! こっちに来てみんなをヒールしてやってくれ」

「えっ……ああっ! みんな大丈夫!? 今ヒールしてあげるわ!」

俺の声に振り向いたアクアが、倒れているカズマとアクア、そして背中を焼かれたダクネスに気が付いて駆け寄る。

「流石はダクネスね。カズマとめぐみんは顔に煤が付いてるだけだわ。『ヒール』ッ!! ほら、これで大丈夫なはずよ、ダクネス。にしても一体なにが……」

最初に気が付いたのは、アクアだった。

「ありがとうアクア……アクア? どうし……」

次に、ダクネス。

二人とも、爆発があつた方角をみたそばから絶句していた。

俺もその視線を先を追うと、そこには……。

『私の前に震えろアスガルドよ……我はお前の罪……!』

炎と、焼けた土が雨のように降り注ぐその中央で、俺達に向かって剣を向ける炎の巨人。

倒したはずのムスペルヘイムの王、スルトの姿があつた。

「バカな……!」

「ア、アクア……カズマ達を連れて逃げろ……! 早く……!」

「どこへ逃げたって同じよ、あんなの……!」

ダクネスもアクアも、目の前に立つ存在がどれだけ強力な存在かわかってるようだ。

じりじりと後ずさりして喉を鳴らしている。

「あれ……? 俺、なんでこんなところで寝てるんだ……?」

「んん……」

カズマとめぐみんの意識が戻ったようだ。

二人はむくりと体を起こして周囲を確認する。

『我こそは……アスガルドにとつての災い……！』

「……………」

そして、周囲を火の海に変えながら剣を振り回す、燃え盛った巨人を視界にとらえて。

「なんだ、夢か……次はもっとエツチな夢を……」

「朝ごはんができたなら起こしてください。今日の当番はアクアのはずです……」

「おい寝てる場合か！ あれは現実だ!!」

俺が二人を揺さぶり起こすと、今度は完全に意識が覚醒したらしく。

カズマは揺さぶっていた俺の手を跳ね除けて。

「おはよう！ 丁寧に起こしてくれてありがとよ!! で、なんだよあれ!! 魔王軍の企みを止めて帰ってみりゃ、こんどは辺りを火の海に変えるバケモンと戦えってか!! やってらんねーよバーカ!!」

「そうですよ！ なんですかアイツは!! 出くわしていい奴と駄目な奴ってものがあるでしょうが!!」

「カズマもめぐみんも落ち着……おい、敵を見ろ！ 攻撃してくるぞ！」

ダクネスが気が付くがもう遅い。

スルトがこちらに向けた剣の切っ先から、紅蓮の炎が噴き出して俺達の元へと迫る。

「わ、わあああーっ!! ソー！ ソーさーん!! あれなんとかしてーっ!!」

泣き叫びながら右往左往してダクネスの元へと転がり込むアクア。

対抗できるのは俺とお前くらいのも者なのだからしっかりしてほしい。

ハンマーを回転させて竜巻を作りだして防ごうと思ったその時。

『カーズド・クリスタルプリズン』ツ！

ズアツと空気を裂く音を立てながら、俺達とスルトの間に巨大な氷の壁ができる。

スルトの放った紅い炎が、俺達を守るようにして出現した氷の壁にあたって光を散らす。

聞き覚えのある声に顔を向けると、ウィズがこっちに手招きをしていた。

行くなら今だ！

「こっちですー！」

その声を聞いて、俺達は一気にウィズの元へと走り抜けた。

▽

正直困惑している。

なんてったって、私達の店は粉々に吹き飛び、そして店の跡地には神話にしか出てこないような炎に包まれた巨人がいるのだから。

巨人の目をかいくぐりながら、私達は物陰の裏で一息つく。

私の横では、ソーさんが忌々しげに巨人を睨んでいた。

「クソツ……どうしてスルトが復活した……？」

何処かで見えた顔だなど思っていたけれど……。

そうだ、以前倉庫にソーさんが飾っていたスルトだとかいう、ソーさんの世界に住まう怪物……。

何故あんなのが、一体どうしてといった疑問が頭の中で渦巻く中、私達のすぐ近くで足音がした。

音がした方へ素早く身構えると、そこには本体である仮面のあちこちを焦がしたバニルさんが。

「バニルさん！ 無事だったんですね！」

「あんな程度でくたばるバニルさんではないわ」

後ろの方でアクア様がバニルさんにも聞こえるように大きく舌打ちをするが、とりあえずそれは置いておこう。

「バニル、お前倉庫にいただろ？ なんでスルトが復活したか分かるか？」

「それなのだが……我輩にもよくわからんのだ。コロナタイトを倉庫で整理してたらいきなりボンツ……である」

「スルトが復活する条件は一つだけだ。スルトの頭蓋骨を、アスガルドにある永遠なる炎に……永遠なる……」

そこまで言っただけで気が付いたのだろう。バニルさんもアツと言った顔をしている。

そういう私も気づいてしまった。

ついさつき手に入れたもので、永遠に燃えると言われる物体。

「まさか……コロナタイトで復活したのか……?」

「考えたくもないが……それしかありえぬな……」

ソーさんがうつむき、クソとつぶやく。

「……俺のせいだ。俺が持ち込まなきゃあんなことには……」

「ソーさん、あなたのせいじゃないですよ。こんなことは誰にも予測できませんでした。今はとりあえず、あの怪物を倒す算段を立てましょう」

「ソーってばもうちよつと気楽に考えなきゃ生き辛いわよ？ あのね、アクシズ教の教義にはこうあるの『汝、何かの事で悩むなら、今を楽しくいきなさい。楽な方へと流されなさい。自分を抑えず、本能のおもむくままに進みなさい』……素敵でしょ?」

「素敵だな……他には何かがあるんだ?」

「おいソー、目を覚ませ!!」

アクシズ教の教義に同意するソーさんに、目を覚ませと駆け寄るカズマさん達。

こんな大変な状況でもいつも通りなみんなを見て、ソーさんも落ちて着いたみたいで。

「ハッハッハ！ 冗談だ。おかげで頭がスッキリした。ウイズの言う通り、まずはあいつを何とかしないと。まあ安心しろ、一度倒してる」

自己嫌悪でうつむいていたソーさんが笑って顔を上げ、いつもの表情に戻る。

うん。その顔こそ私のお店の、誇れるアルバイトの顔。

「……で、あいつを倒す方法とかはあるのか?」

カズマさんの言葉に、みんなの視線がソーさんへと向けられる。

弱点があれば、そこをついて倒せるだろう。

「俺が以前倒した時は、普通に殴り倒した」

「お前はホントに脳筋だな……つまり、特殊な手を使わなくても、殴りまくれば勝てるってことで良いのか？」

カズマさんの言葉にソーさんがああと頷く。

そうと決まれば、早速攻撃を開始しなくては。

スルトは今も剣を振り回してアクセルの街を焼いている。

アクセル市民が危機にやたら強いのは知っているつもりだ。でも、大勢が死なないとも限らない。

「倒せるとは思うが……気を付けろ、ムス^俺ペル^がヘイム^倒にいた^た時より強力になっている。だが、予言にあった復活とは程遠いようだ……奴の話によると、本来ならば山よりも高い背丈となって俺の国を滅ぼすらしい」

言われてみれば、スルトの背丈は山ほどというわけでもなく。

せいぜいがカズマさんの屋敷より一回り程大きい程度だ。

「不完全復活って訳ね……あいつつていわば炎の悪魔でしょ？ 私の退魔魔法も効くかもしれないわね……」

「じゃ、取りあえずあいつをぶっ叩く。作戦はこうでいいか？」

「うむ。複雑な作戦よりずっといい。行くぞ！ ソー！ 私と来い！！」

ダクネスさんとソーさんがスルトの元へと飛び出した。

スルトと言えば、足元の蟻でも見るかのような見下した目を二人に送っている。

『我こそはアスガルドを滅ぼす災害……我こそは……』

「おいスルト、ちよつといいか？ まず、ここは故郷^{アスガルド}じゃない」

『……なに？』

ソーさんの言葉に、スルトはふと我に返って周囲を見渡す。

自分がいる場所がどこかわからないのか、どこか困惑した様子で視線を戻す。

「ここは——」
地面に深く腰を落としてハンマーを投げる姿勢をとるソーさんへと。

「——俺の職場第三の故郷だ!!」

『ガアッ!』

彗星のような勢いでソーさんのハンマーが飛んでいき、スルトの顔面に叩き込まれる。

巨体がグラリとゆらぎ、断続的な地震を起こしながら転んで、地面に手をつく。

「さ、さすがソーさん……」

思わず感嘆の息が漏れる。

「すげえ……」

「私の信者になる予定ならそうこなくっちゃー!」

「負けてられませんね。爆裂魔法を撃ちこむにはデカくて良いのです! ぶち込んでやりましょう!! 行きますよ!!」

「あつ、おい……!」

ソーさんとダクネスさんに続くようにして飛び出していったためぐみんさんの後を、カズマさんとアクア様が渋りながらも心配するようにして追いかける。

私も行かないと!

『グウ……オーデインの息子よ……ここがどこであろうと関係ない! 今ここで』

『セイクリッド・ハインス・エクソシズム』!」

『オオオオオッ!』

スルトの足元から光の柱が天へと突き上がり、全身から湧きたつ炎を燻ぶらせる。

「どやさー!」

『ちっぽけな精霊ごときが、我の邪魔をするか!!』

燃える剣の切っ先から、アクア様へと炎が放たれる。

このままではマズイ。

「ソー！ ウィズー！ 跳ね返したげるから協力してー!!」

「任せろ（てください）!!」

ソーさんがハンマーから雷を、私が手から氷の魔法を放ってスルトの炎を真つ向から迎え撃つ。

——が。

「ぐ……い！」

「きよ、強烈ですね……い！」

スルトの炎はかなり強力だ。

私とソーさんの攻撃でやつと勢いが落ちる程度。

あとは……。

「よくやったわ二人とも！」

……水の女神の力を信じるのみ。

アクア様が両の手のひらを突き出すようにして前に出すと、その前方に魔法陣が浮かび上がる。

「こつちの番よ、このデカ眉悪魔!! 『リフレクト』 ツ!!」

『ガアアアッ!』

火炎がそっくりそのまま跳ね返り、スルトの上半身をすっぽり覆った。

スルトは片手で払いのけるようにして自分を包んだ炎をかき消す。

『もう容赦はせんぞ……』

そして、剣を両手に持って構えて横なぎの姿勢をとる。

剣から炎があふれ、周囲の空気が熱気でぐにやりと歪んでいく。

「ダクネス！ あれ止められるか!？」

ソーさんが振り返ってダクネスさんに聞くが、その表情はすぐれない。

どうやら難しそうだ。

ならばと、私は氷結魔法の準備をして前へと飛び出す。

『薙ぎ払ってくれ!!』

構えられた剣がグオンと空気を焼き裂く音と共に振りかざされる。私の力で凍り付かせることができるかどうか……。

『カード・クリスタルプリズン』ツツ!!」

魔力を込めて放った氷結の上級魔法。

バキンツと軋む音を立て、迫る炎の剣と私たちの間に氷山を出現させるが……。

「だ、駄目です！ 突破されます!!」

まるで温めた包丁でバターでも切るかのように、あっさりと氷山へと刃を滑り込ませる。

剣はそのまま氷山を断ち切り、私達の元へと……。

『『バニル式殺人光線』ツ!』

『又ウツ!』

私の後ろから二条の光が飛び出してスルトの剣を弾く。

振り返ると、そこにはバニルさんが目を赤黒く光らせていた。

「た、たすかりました……」

バニルさんと言うと、スタスタと歩き私を素通りしてスルトに向き合った。

スルトはバニルさんに不思議なものを見るような視線を向けている。

『……貴様悪魔か？ なぜ私の邪魔をする……!!』

そう問われたバニルさんスルトを指さして不敵に笑う。

「悪魔の世界は弱肉強食、貴様を屠るには十分な理由であろう?」

『ハハハハ!! 面白い、やってみるがいい!!』

嘲笑に顔を歪めたスルトが、私達ごとバニルさんを踏みつぶさんと足をあげて振り下ろす。

「と、止めて見せる!」

「支援魔法してあげるわ! 信じてるからね!!」

アクア様の支援魔法を受けたダクネスさんが淡く輝き、巨岩の落石のごとく迫るスルトの足に対してどつしりと構えた。

轟音を立てて迫るスルトの足に、アクア様が目に涙を浮かべて。

「や、やっぱ逃げればよかったかしら……」

「台無しだよボケ!」

お腹の底まで響く衝撃と共に、私達の目の前でスルトの足が止ま

る。

ダクネスさんが、両の手でしっかりと止めたのだ。

「止めたぞッ……で、でも強烈だ……!! 長くはもちそうにない……っ、早く反撃を……いや、もうちよつと……」

本当に台無しだ。

でも、このチャンスは無駄にはしない。

『ライトニング・ストライク』ッ!」

「ハアアアアッ!!」

『バニル式殺人光線』ッ!!」

「ついでにとつとけ!」

『グアアアアア……!!』

ありつただけの魔力を込めた雷の上級魔法を詠唱してスルトへ向け、隣にいるソーさん、バニルさんと共に合わせて放った!

雷と光線が混じった長大なエネルギーが槍状となってスルトの胸に直撃する。

流石に効いただろう、スルトはよろけながらその巨体の背を地面に叩きつけた。

カズマさんも矢を放ったようだけど、その矢はスルトの体に着弾するや否や速攻で燃え尽きて灰になってしまっている。

「ああ、俺も頑張ったさ。礼は良いよ、どうも。チクシヨウ」

灰になって散っていた自分の矢を眺めて肩を落とすカズマさん。

そんなカズマさんの肩を、めぐみんさんがポンポンと叩いて慰めていた。

再び目をスルトへと移す。

そこには……。

「そんな……どうやって倒せるんですか……!」

大したダメージを負っていないのか、スルトはゆらりと立ち上がって剣を構えた。

『……少しは楽しめた。さあ、滅びの時を受け入れるがいい……我が眷属たちよ、奴らを葬るのだ!』

スルトがそう叫んで剣を掲げると、それに呼応するかのようにして地面から焼けた土で出来た人形のような敵が無数に湧き出てきた。

「わ、わあああーっ!! カ、カズマさん!! あれなんとかしてーっ!!」

「俺にあんなのどうこうできるわけないだろ!! だ、だめだ、矢も効かねー!! めぐみん! 爆裂魔法で……」

「む、無理です! ああまとまりがないと逃してしまいます!」

あれこれとカズマさん達が叫んでいるのを愉快そうに眺めながら、スルトは湧き出た自分の配下に命令を下した。

『行くのだ、我が下僕たちよ。この街の民を皆殺しにせよ!』

スルトの配下たちが、奇声を上げて周囲へと散らばる。

爆発音とスルトを見て駆け付けた冒険者たちと、そんな彼らに誘導されて逃げていた市民が一瞬にしてパニックになる。

なんて卑劣な……!

怒りで拳を握りしめるが、ソーさんがハンマーを振り回して飛び、散らばる軍勢へと飛び込んだ。

「卑怯だぞスルト! 俺が目的じゃないのか!!」

少しでも市民に危害を加えさせないよう、スルトの配下を蹴散らしながらソーさんが怒って叫ぶ。

ソーさんに加勢しようと、駆け出したのとソレは同時だった。

溢れるようにして群がる配下の相手で手一杯なソーさんに、スルトは……。

『もちろん、そのつもりだとも』

——配下ごと、ソーさんを大剣で切り付けた。

心臓を一突きにされたかのような衝撃が走る。

火に包まれて飛んでいくソーさんを、周囲の時の流れが遅くなったような感覚を覚えながら呆然と眺める。

そんな……!

「ソーさんッ!!」

「待てウイズ！ 一人で行くでないわ!! おいッ！ 我輩についてこい残念女神！ ウイズの援護と焦げ雷神の回復に向かうぞ!!」

「わ、わかったわ!!」

バニルさんが叫ぶが、まるで水の中にいる時のように私の耳に入らない。気が付いたときには、私はソーさんの元へと走り出していた。

「「「ヴオオオオツ!!」」」

「邪魔をしないで!!」

雄たけびを上げて迫るスルトの配下。

無詠唱で光の上級魔法を発動させ、私の手から光の剣が出現する。

無造作に光の剣を振るい、スルトの軍勢を次々と切り裂いてソーさんの元へと向かう。

「い、今のウイズつてばちよつと怖いんですけど……」

「そのウイズのためにも早く焦げ雷神の元へと急ぐのだ!」

ソーさんの元へと駆けつけた私は、怪我の具合を確認する。

皮膚のあちこちが焼け焦げ、あまりにも痛ましい姿となっていました。

意識はない。息は……辛うじてしているようだ。

フリーズの魔法を唱えて少しでも痛みが和らぐように処置を施す。

「ソーさん、これで少しでも痛みを……!」

何かの偶然か、今ソーさんが倒れている場所は私達の店の跡地だった。

どうやら、戦っているうちに戻って来たらしい。

この思い出の場所を、記憶を、親友を失いたくないという思いがただただこみ上げる。

「ウイズ、私が回復するからそこをどいてちょうだい。その間、周囲の警戒を木端悪魔とよろしくね」

うしろからかかった声に、私は冷静さを少し取り戻した。

「ありがとうございます、アクアさん。よろしくお願いしますね!」

「任せなさいな! こんな火傷、私からすれば日焼けと大して変わらないわよ! 『セイクリッド・ハインスヒール』!」

アクア様の詠唱と共に、柔らかな光がソーさんの体を包む。

アクア様に任せれば大丈夫だろうと、その場を離れようとした時だった。

「……あれっ?」

何故か、傷が癒えないソーさんの体を見て、アクア様がそんな気の抜けた声を漏らす。

「な……なんで……? 『ヒール』ッ! 『ヒール』ッ! どうして治らないの!？」

なんと治癒の魔法をかけても一向に傷がふさがらないソーさんを見て、不安と絶望が水のように満ち始める。

最悪の予感が頭をめぐりはじめた。

『オーデインの息子を切り付けた剣に宿っていたのは、アスガルドを滅ぼす怨念の炎。今までの物とは比べ物にならない災厄の炎を宿した剣。お前ごときに癒せる傷ではない』

絶望を告げるスルトの声が心の底まで響く。

ソーさんの息が、少しづつ弱まっていく。

このままでは……!

あきらめかけたその時……、

バチツと、何かはじける音がした。

その音がしたのは、私のすぐ足元。

そこへ視線を向けると、どこか見覚えのある魔道具が転がっていた。

稲妻を模したようなマークが彫られた小箱。

私はそれを手に取り、ソーさんと交互に見る。

ソーさんは、雷の神様。その身には、雷のエネルギーが駆け巡っている。

もし、純粋な魔力によって構成された雷をその身で吸収出来たら?

このままではどのみち死んでしまうかもしれない。

私は一か八かでその魔道具でソーさんの起死回生を図ろうとする。
……だが、一つ問題があった。

この魔道具が放電を行うのに必要な魔力は、上級魔法数十発分。
そんな魔力を生成するものなど……。

どうするべきかと高速で思考を回転させるさなか。

ソーさんの胸に灯る光が目に入った。

そう、ソーさんの首から下げられた、コロナタイトの欠片が入って
いるペンダントだ。

「これなら……！ アクア様、離れていてください！ 何とかなるか
もしれません！」

「えっ？ えっと……いいけど、何をするつもりなの？ なんだかスツ
ゴク嫌な予感がするんですけど」

危険を察知したのか、アクア様がジリジリと私から距離をとる。

「ごめんなさい、また新しいの作りますから……！」

ソーさんの首からペンダントを引きちぎり、コロナタイトが入って
いる小瓶の部分を握りしめる。

そんな様子を見ていたバニルさんが血相を変えて。

「正気かヤケクソ店主!! そんなことで復活するんでも!!」

「他に策もないです！ これにかけるしかありません！」

バニルさんの制止も一切聞かず、私は左手に魔道具を、右手にペン
ダントを持ち……。

「ソーさん……！ 最後までとことん付き合いますよ！」

両方を、胸の前で叩きつけるかのようにしてぶつけ合わせた！

ドンツと、おなかの底まで震えるような音が響く。

辺り一帯にジグザグ模様の光があふれ、あまりのまぶしさに目をつ
むってしまふ。

空の暗雲の厚みが増し、ゴロゴロと音を轟かせる。

『何が……』

スルトも目を向けるその刹那。空から光を束ねた柱のような雷が
私の元へと飛来した。

「きゃあっ!?!」

爆風にも似た衝撃が全身を駆け抜け、思わず飛ばされる。体を起こすが、周囲に土煙が舞っていて何が起こったのか把握できない。

「ソ、ソーさ……」

——バチツ。

不安げに出た、安否を確かめる私の声を、空気の爆ぜる音がかき消した。

——バチバチバチツ。

その音は次第に大きさを増し、やがて土煙の中からでもわかるほどの紫電が走り始める。

「夢のなかで、父上と話をした……俺を待つものがあると、そして俺が何者であるか名乗りを上げてやれと」

聞きなれた声が土煙の向こうから聞こえ、安堵に顔がほころぶ。

ブオンツと、空気の唸る音と共に土煙が吹き飛び、ハンマーを握りしめたソーさんが歩き出てきた。

「I AM MIGHTY THOR」
俺は、マイティソーだ

『馬鹿な……ありえぬ……!』

その身には、バチバチと紫電が走っている。

私が安心した顔で近寄ると、ソーさんは私に感謝を告げてきた。

「ウイズ、お前のおかげで助かった。礼を言わせてくれ」

「お気になさらず。魔道具のお代は結構ですから」

遅れて駆け付けたカズマさん達が、ソーの姿を見て次々と声を上げる。

「ふっ……とうとう隠された力に目覚めましたか……」

「おい、覚醒イベントとかずるいぞ。俺も何か秘めた力に目覚めたい」「カズマさんが何に目覚めるっていうの？　新しい性癖かしら？　ブークスクス！」

頬をつねられ、涙目にされるアクア様。本当にぶれないパーティーだ。

ダクネスさんも安心したようにソーさんに近づいて。

「おかえり、ソー。もう大丈夫か？」

「ああ、俺はもう問題ない。それより、お前はカズマ達を守ってやれ、俺は奴を止める」

「おい、それでは……」

「そして、逃げ遅れた民を避難させるんだ。ああ、俺なら大丈夫だ」
自信に満ちた顔でそう告げるソーさんの背中を、手の甲で軽くノックする。

すこしだけ、肌がピリツとした。

「ソーさん、私も戦いますからね？」

「もちろんだ。共に戦おうじゃないか、相棒」

その言葉に笑って、ソーさんとコツンと拳を合わせる。やっぱりピリピリする。

そんな私たちをみたバニルさんがため息をついて。

「まったく、脳筋アルバイトと残念店主はいざ戦いとなると武闘派にもほどがあるわ」

否定はできない。

佇むスルトと、スルト足元から湧き出してこちらに向かってくる眷属の軍勢、そして隣に立っている頼もしい戦友の姿に、私は湧き上がる高揚感と共に思い出したのだから。

かつて氷の魔女と呼ばれた時のことを。

人間として戦い、魔王軍を片っ端から狩っていた時のことを。

「それでは、残業といきましょうか……！」

私の全身に霜が降り、周囲にダイヤモンドダストが舞い始める。

「行くぞ、覚悟しろ……!」

ソーさんの全身に紫電が走り、周囲がバチバチと爆ぜる。

「フハハハ!! 面白くなってきたな、雷神よ!! 炎の大悪魔を滅そうではないか!」

バニルさんの目に赤黒い光が灯り、邪悪なオーラが滲みだす。

『いいだろう……今度は一片も残さず灰にしてくれる!』

「ハアアアアッ!!」

迫るスルトの軍勢のど真ん中に、三人で一斉に飛び込む。

雷によつて、氷によつて、純粋な魔の力によつて。

敵は感電しながら吹き飛び、あるいは凍り付けになり、またあるいは熱線で切れ飛ぶ。

「……なんだよあれ」

カズマさんが後ろで置き去りにされたような声でボソツとつぶやいた。

「まとめてかかってこい!!」

ソーさんが紫電を纏い、ハンマーと共に突撃したかと思えば、あちこちで落雷が起き、敵ははじけ飛んで灰となって消える。

『カースド・クリスタルプリズン』ツツ!!』

『バニル式殺人光線』ツツ!』

特大の魔力を込めて放たれた上級魔法で敵は冰山の中に閉じ込められ、バニルさんの光線が冰山を通して周囲にリフレクトし、スルトの配下がバラバラになっていく。

「オマケだ!」

トドメにと冰山のてっぺんからソーさんがハンマーを叩きつけて粉碎した。

パラパラと降ってくる氷の粒が周囲で燃える炎に反射し、キラキラと光を放つ。

『小癩な!』

スルトが再び剣を横なぎに振るう。

今迄一番強烈な魔力のうねりと、かまどを開けた瞬間のような熱波が駆け巡る。

振るった剣の軌跡をたどるようにして、大きな炎の波がうねりを上げてこちらに向かって来た。

それはさながら、明確な悪意を持ってこちらに牙を剥く山火事。天災そのものだ。

それに対抗するかのようには、ソーさんがハンマーを振るい、巨大な竜巻を発生させる。

「『フリーズ・ガスト』!!」

私の手から純白の霧が吹き荒れ、竜巻の外側を覆う。

ブリザードの如き零下の暴風を纏った竜巻が荒れ狂い、スルトが生み出した炎とぶつかった。

「ぐっ……!!」

間違いなくこの街の全てを灰にして余りある一撃。

ここで止めないとどれだけの被害が出る事か。

ハンマーを構えたソーさんが少しずつだが押され始めた。

「ク……『クリスタル・プリズン』!」

押される私たちの背後に氷の壁を作り、支えにするが、作ったそばからバキバキと音を立てて割れてしまう。

『あきらめろ、オーディンの息子よ……お前を今ここで討ち取り、たとえどれだけ離れていようと、アスガルドをラグナロクで滅ぼしてみせるぞ!』

剣にさらに力が籠められ、いよいよ立っているのも危うくなってきた。

私とバニルさんでソーさんの背中に肩をぶつけ、力いっぱい押して踏みとどまる。

『『クリスタル・プリズン』! 『クリスタル・プリズン』……ツ!』

背後に氷の壁を張り続ける。

だけれど、まるで無意味だと言わんばかりに後退を止められない。

「負けてたまるか……!!」

ソーさんが全身に力を籠め、前のめりになって足を踏み出そうとしたそれと同時。

『『エクスプロージョン』 ツツツ!!』

『ッ!? ガアアアアッ!?』

突如起こった爆裂の衝撃によって、スルトの体がグラリと揺らいで膝をつく。

今のでスルトの炎の勢いが弱まった!

さらに、私達の背後にドンツと衝撃が走る。

顔だけを後ろに向けるとそこには。

「はーっはっはっは!! あの巨大な炎の悪魔と云えど、我が爆裂魔法にはひれ伏すほかなかったようですね!! あとは任せあふう」

「市民の避難はギルドと冒険者が総出で行ってくれている。私たちも加勢するぞ!!」

「あんなゲジマユ悪魔、さっさと倒して暖炉代わりにでもしちゃいましょう!!」

「オラー! お姉さんの店まで燃えたらどうしてくれんだよこのヤロー!!」

カズマさん達が各々叫びながら、私達の背中に肩をつけて力いっばい押してくれていた。

めぐみんさんは地面に倒れ伏せているが、エールを送っている。

文字通り背中を押された私たちは、そのまま最初の一步を、反撃への一步を踏み出した。

白い竜巻が少しずつ、スルトを飲み込もうと迫り始める。

『この……矮小な……存在共めが……!』

体勢を立て直したスルトが、再び剣先に力を込めて全てを焼き尽くそうとする。

……が。

『馬鹿な!? な、何故止まらん……!?!』

「それはな——」

ソーさんの体を再び紫電が覆い、私達は猛烈な勢いで前へと進む。

「——俺達が、ヒーローだからさ!!」



スルトによって引き起こされた大火事は、アクアが雨を降らせたとによって一晩で鎮火した。

その雨は災害じみた被害を受けた民の傷をいやし、ウイズを浄化しかけるといっておもしろい出来事を引き起こしたりもしたが。

そんな、一晩が明けた朝。

俺達はいつものように、ウイズ魔道具店の前へと集まっていた。

いつも通りとはいえ、普段とは決定的に違う所が一つ。

「やっぱり……酷いありさまですね……」

吹っ飛んだ自分の店の跡地を見て、ぼそりとつぶやくウイズ。

当然と言えば当然だ。何せ、スルト復活の爆発の中心地だったのだから。

あははと仕方なさそうに笑ってはいるが、悲しげに瓦礫の山になった自分の店の上を歩きまわるウイズの姿は痛々しい。

そんなウイズの肩に、ダクネスが手を置いて慰める。

「そう気を落とすな。ギルドが今回の件で我々に特別報酬を出してくれるそうだ。それも、街の危機を救ったということで、かなりの額が出されるそうだぞ」

「普段赤字ばかり出している分、下手したら儲かりそうであるな」

「バニルさん、酷いです……」

「そうだぞ、ウイズの出す商品はどれも優秀じゃないか」

そう口々に言う俺達の姿をみて、バニルが大きなため息をついた。「で、これからどうするのだ？ 家でもある店がこうして瓦礫の山と化しているわけだが」

「それなんですよねえ……どうしましょう……」

悩むウイズの肩に今度はカズマが手を置く。

決め顔なのか変顔なのか、妙に引き締めた顔をしながら。

「ウイズ、良かったら……しばらくウチに来ないか？ なに、心配するな……お代は結構さ……」

「……この男、鼻の下が伸びてますよ。ですが、それならにぎやかにな

りそうが良いですね。毎日の爆裂魔法に是非ウイズを同行させたいのです」

「ウイズがいたらきつと楽しいわ！ 浄化はしないから安心して！」

「うむ、私も賛成だ」

それではバニルはどうするのだろうか。

俺がバニルに向けた視線に、カズマ達が気が付く。

「お前は……どうしよう」

「反対反対、大反対ですー!! そもそも結界があるからこいつは入れないわ……あれ？ それってウイズも同じじゃないかしら……？」

「誰が貴様のようなやかましい鶏女神がいる屋敷に住むものか!! 頼まれても御免であるわ!! まあ、貴様のような駆け出しプリーストが作った結界など、なんでもないので……なっ？」

バチバチと火花を散らすアクアとバニル。

何でこうもこいつらは話を進めることができないのだろうか。

やがて喧嘩を始めた二人と、そんなアクアとバニルを止めに入るカズマ達。

ぶれない彼らを見てると、ウイズが楽しいですねと微笑みかけてくる。

そんなウイズに、俺はあることを思いついて。

「……そうだ、ウイズ。アスガルドに来ないか？」

「へっ？」

その言葉が聞こえたバニルとアクアがピタッと止まって。

「おい、冗談ではないぞ。神々の住まう国などにアンデッドを招待するとは何を考えておるのだ？」

「アスガルドは寛容だ。最初は驚かれるかもしれんが、必ず受け入れられるさ」

「ずるーい!! 私も行きたいわアスガルド!! ねえ! ちよつとだけで良いから私も行きたいんですけどー!」

「お、おいアクア、今は邪魔をするときではない、静かにしておけ!」

さて、どうする？ とウイズに振り返ると。

ウイズはどこかワクワクとした表情を浮かべていて。

「ソーさんの故郷ですか。なんだか楽しそうですね……ふふふ、お邪魔させてもらってもいいですか？」

「結局イケメンが勝つのか……解散解散」

「お前というやつは、普段散々私たちに空気を読めとか言うくせに……」

「バニルはどうする？」

俺がそう聞くと、バニルは忌々しそうに顔をしかめて首を振る。

「勘弁願いたい。誰が好き好んで神々が住まう国に行かねばならんだ。人間の基準で例えるならば、腐肉で出来た宮殿に住まうようなものだ」

「だとき、ウイズ。酷い言いようだな、俺の頼れる先輩アルバイトは行きたくないだ」と

俺がそういうと、ウイズは作ったような悲し気な顔を浮かべて。

「残念ですね……二人だったらもつと楽しいでしょうに……ウイズ出張魔道具店なんて開いたりして……」

「おお、それいいな。世界を渡り歩き、ここで見つけた面白いものをアスガルドで面白おかしく売っていくとしよう。あーあ、楽しそうなのになー！」

小芝居を始めた俺達にバニルが段々とイラつきを見せ……。

「やかましいわ貴様ら!! 行けばいいのであろう!! 貴様の故郷にずっと留まるわけではないのなら構わんわ!! 行ってやろうではないか!!」

「ずかずかと俺の方へ来るバニル。」

よしよし、大成功だ。

バニルを引きずり出すことに成功した俺とウイズで、コツンと拳を合わせる。

「というわけだ、アクアも来てもいいが、一度アスガルドに来たらしばらく戻れないぞ。それでいいのか？」

そう言うのと、アクアはしばらく顎に手を置いて考えて。

「そういうことなら、遠慮するわね。なんだかんだ、こっちの生活は楽しいし」

アクアがそういうと、心なしかその後ろのカズマ達が笑った気がした。

俺はただそうかとうなずいて、ハンマーを空に掲げる。

「それじゃ、そろそろ退場だ。カズマ、アクア、めぐみん、ダクネス。ここもまた俺の居場所だ。また戻ってくるから、その時はよろしく頼む」

カズマ達は、ただ黙って、笑顔で手を振ってくれていた。

「——では、またな」

その言葉と共に、俺達は虹の橋を呼び出してアスガルドへと帰郷した——。

▽

辺りで魔法による轟音と、兵士たちの悲鳴が聞こえる。

「アイリス様！ アイリス様だけでもお逃げください!! ここは我々が……グハツ!!」

私にそう告げてきた兵士が、目の前で敵の剣によって無慈悲に切り捨てられる。

王都に進行してきた魔王の娘率いる攻撃部隊。

魔王の加護の効果により、ゴブリンでさえも凶悪な怪物と化し、私達ベルゼルグ軍は劣勢を強いられていた。

聖鎧アイギスに身を包み、一族の宝剣を握って戦っていたが、そろそろ限界が迫ってきている。

「アイリス様……どうかお逃げください……」

「それは……できません」

何故なら私はこの国を守る為に存在する、民を守るべく立ち上がる為に存在する国の上に立つ王女。

ここで背を見せて逃げる事は許されないのだ。

覚悟を決め、宝剣を握りしめてもう一度敵へ切り込もうと……。

——したその瞬間。

突如、目の前に虹色に輝く光の柱が出現した。

その柱から、ハンマーが矢の如き勢いで飛び出し、次々と魔王軍の敵を蹴散らしていく。

見間違えるはずもない、あの雷を纏いし鉄槌。

円を描くようにして敵を薙ぎ払ったハンマーは、空中でピタリと止まると、再び光の柱へと戻っていき……。

「戻ってきてみれば……ずいぶんな惨事になっているものだ」

収まったその光の中に、三人の人影があった。

ソーさん、ウイズさん、そしてハチベエ。

なぜここに、どうやって、そんな思いは吹き飛ばすほどの強烈な昂ぶりを感じていた。

「あつはははは!! さあ、観念すべきですよ!!」

「ア、アイリス様?」

ソーさんの体から紫電が走り、敵へとハンマーを片手に駆け出す。

ウイズさんと、バニルさんも続いて駆け出した。

「スルトの時を思い出しますね!」

「あの時より、もっと強烈に行くぞ!!」

飛び上がったソーさんが、落雷を纏って光となる。

その手に掲げられたハンマーから雷が迸り……!!

「——魔王を、呼んで来い!!!」

『『カーズド・クリスタルプリズン』ツ!』

『『バニル式殺人光線』ツ!』

振り下ろされた鉄槌が、せりあがった冰山が、放たれた赤い光線が。敵の兵士を地面ごとまくり上げて吹き飛ばした——!

オマケ ベルディアの日常

今日もステキな一日がやってくる。

ショーケースの中の世界だが、外を見渡すと様々な世界が見え、これがまた中々に楽しい。

喋るアヒル、変な服を着た犬、見たこともない動植物たち……。

だが、中でも特に楽しみにしているのは……。

「はい、本日のお手入れです」

「待あってましたあ!!恋しかったぞ、お姉さん!!今日も俺の頼んだとおりに磨いてくれ、愛しい人の頭をなでるようにしながら!!」

「……コレクター様……」

「言われたとおりにしたまえ。そいつは私のお気に入りなのだ」

この男の名はコレクター。またの名をタニリーア・テイバンという。

ありとあらゆる世界から珍しい生物や品物をそろえており、それは楽しそうに毎日眺めている。

俺の日課はというと、このコレクターという男と話をしたり、今みたいに胸元の空いた服を着た女性に全身を……まあ、俺の体は首だけだが、それでも全身と言えば全身だ。

「へいへい、お姉さんまたコレクターにこき使われちゃったの?かわいそうに、でも俺は味方だよ。だからもつと胸元を強調しながら拭いてもらえないかな?おおっ!いいねいいね!そんな感じ!!」

「それで、ベルディア君。また話を聞きたいのだが……」

「おっと、俺のいる世界についてだな?なんでも聞いてくれ。もう魔王軍でもないしな」

トニー・スターク……いや、アイアンマンによって訳も分からない場所に放逐された俺だったが、きがついたらこいつに回収されていた。

最初は見世物のような扱いに憤りを覚えたが、俺がこのコレクターも知らない世界から来たと聞くや否や、このVIP待遇である。

「さて、貴様の世界に存在する珍しい生物とはどんなだ?」

「名を安楽少女と言っただな……人の形をした植物なのだが……」

「ほう！それはまた珍しい!!グルートの仲間か……?」

「ぐるーととやらは知らんが、こいつはかなり悪質な生物でな……」

こうして俺の話を度々聞かせるのが俺の日課の一部。

コレクターは俺の世界に大変興味を持っているらしく、一度行ってみたいらしい。

なんでも、空飛ぶキャベツや畑から採れるサンマが見たいのだから。

俺の世界はどつちも当たり前前の存在だというのに、こいつらから見たらかなり異常らしい。

一通り話し終わると、コレクターは満足そうに息を吐く。

「ふむ、今日も楽しませてもらった。なにか希望はあるかね?」

「そうだな……宇宙が見たい」

「いいとも。君は宇宙を見るのが好きだな。連れて行ってやれ」

「了解しました」

「運ぶときは胸を俺の後頭部に押し付けてくれ」

「……了解しました」

アイアンマンには正直感謝している。

宇宙は美しく、そして雄大だ。それをアイツは教えてくれた。

使用人に連れられた先のバルコニーで俺は眼前に広がる宇宙を眺める。

毎度毎度この光景にはため息が出てしまうもんだ。

元居た星とは違った星々が連なる空。

青紫色のカーテンが、輝く宝石のような星々を羽衣のように包んでいる。

例えどんな金銀財宝の山を積もうが……この光景にだけは決して勝てないだろう。

そんな、果てしない宇宙を眺めていると、ひと際輝きを放つ星を見つけた。

もしかすると、俺が居た星かもしれない。

全くのあてずっぽうなのだが、そこが俺の故郷であることをなんと

なく信じて。

そして、そこにいるだろう愛しのウイズやかつての仲間たち思い浮かべて……。

星に静かに熱視線を向けて、心の中で叫んだ。

——こっち来いよ！

第29話 三流詐欺師の脱税講座

ある日の午後近く。

紅魔の里での授業を終えた僕が、誰もいないカズマの屋敷でコーヒー片手に寛いでいると。

「ただまー!」

ガチャリとドアが開き、カズマたちが帰ってきた。

「ただいま戻りました。おや、今日の授業は午前でおしまいだったのですね。どんな授業をしてきたのですか?」

「連携を主眼においた戦闘訓練と……カツコイイ登場の仕方さ。ぷっちんと方向性でもめたが」

「ほう……面白そうですね……早めに卒業してしまったのが少々残念ですよ」

「試しに少しだけ授業してやろうか? 学年一位君?」

僕がコーヒーをテーブルに置いてめぐみんにニヤリとした笑みを向けると。

「是非お願いします、スターク先生……と、言いたいところですが、これからクエストなのですよ」

めぐみんがそう言うと、カズマが手に持ったクエストの依頼書をひらひらさせながら会話に入ってきた。

「雪精の討伐って依頼だ。なんでも弱くて一匹倒すたびに十万エリスの美味しいクエストだそうだ」

「……怪しくないか?」

テーブルに置いたコーヒーを再び手に取って、すすりながらカズマの元へ寄り、クエストの依頼書をマジマジと見る。

「元大企業の社長からアドバイスだ。美味しい話を見つけたらまず疑え。いいか、物事には必ず理由があるんだ。弱くても一匹十万エリスの価値があるその理由を考えて突き止めろ」

「理由……」

流石にカズマも裏があると睨んでいたのか、報告書を持ったまま顎に手を当てて唸り始めた。

「考えられるとしたら……雪精を取り巻く環境が危険とか、周囲に危険なモンスターがいるとか？」

「そんなところだろうか？」

「おい、お前らはなんか知らないのか？」

カズマが振り返って皆に尋ねると。

「うむ。雪精に危害を加え続けると、冬將軍という名の大精霊が出現して攻撃してくるぞ。私はそいつに勝たれ……そいつと戦いたいのだ」

「お、お前……いや、待った。冬將軍？ なにそれ？」

「いい、カズマ冬將軍というのはね……」

アクアがカズマに、雪精と冬將軍について、そして精霊についてこんこんと説明しだした。

——曰く、精霊とは出会った人間の無意識の思念を受けて実体化する存在であり、冬の精霊もその例に漏れなかったのだが、危険なので市民も冒険者も外出しない冬のシーズンの中、チート持ちの日本人たちがお構いなしにうろつき、そして冬と言えば……と勝手に連想したおかげで誕生したのが冬將軍だそうだ。

酔っ払った僕の方がまだまともなジョークを思いつけると言いたいところだが……。

問題はその冬將軍そのものにあるらしい。

なんでも、国から高額な賞金を懸けられている特別指定モンスターで、その額は二億エリス。

明確な人類の敵であって三億の賞金がかけられていたベルディアに比べ、雪精に危害を加えなければ出現しないにも関わらずに二億の賞金がかけられていることから、その強さは尋常じゃないらしい。

そんな話を聞いたカズマが冷静でいられるはずもなく。

「おいふざげんな!! そんなのと遭遇するってんならやらねーぞ!! このクエストはキャンセルしてくる!!」

「ですが、他に受けられるクエストもないではないですか」

「確かにそれは……いや待て、トニーー！ お前がいるじゃん！ クエ

スト手伝ってくれよ!!」

必死に叫ぶカズマに、僕がテーブルの上に置いてあったアルダープとの契約書をヒラヒラと見せると、カズマが盛大に舌打ちをした。

「ああもう！ またあいつの家に行くのか？」

「まあな。でも今日で最後だ。それに、君はもう既に優秀な仲間がいるだろ、君たちだけでもなんとかなるさ」

「お前人類随一の知力とかいう称号返上してこいよ」

「それじゃ、人類随一の知力がどんなもんか君にお見舞いしてやるでしょう」

そう言っただけ僕は立ち上がり、あるものをとって来るためにラボへと向かった。

「——なにこれ」

僕が持ってきたのは、体にピッタリとフィットするタイプのボデイスーツ。

ピチピチのスーツを身にまとった仲間たちを、カズマがバレないようにチラチラと見ていた。

特にダクネスを重点的に。

「ト、トニー……これは素晴らしいな……ふふ……あの男の野獣のような視線が刺さる……くふっ……!」

残念、バレてる。

「あの、トニー。これは一体なんなのでしよう？ やけに体のラインが出る装備ですが……なんですか？ 私に対する嫌がらせですか？」

フラットなボデイがコンプレックスのめぐみんは、アクアやダクネスの方を見て僕に恨みがない目を向けて来た。

「それは体温調節スーツだ。中に仕込まれた微細なチューブをゲルが巡回し、それを電気力で加熱したり冷却することによって体温を保つ。まあ、着るエアコンだとも思ってくれ。これがあればブリザードの中だろうが、灼熱の砂漠の中だろうが、一流企業のオフィスに早変わり」

「ピチピチにする必要はあったのでしょうか……?」

「もちろん。これは特殊作戦用だ、かさばって他の装備が持てません
じや意味が無いだろ？ それに、カズマが喜ぶ」

「つす。トニーさんマジ天才つす。マジリスペクトつす。つす、つす」
リズムを刻む半ズボンのラッパームみたいな挙動で僕にゴマをする
カズマ。

めぐみんがかなりウザったそうにしている。

「ムカつくからそのキャラやめてくださいよ!! ダクネスばかり見続
けてるのもまた腹が立ちますね……!」

「本当にいやらしいわね、このクズニートは! そうやってダクネス
をなめるように見続けたら、今度は私を……」

「それは無い」

「ねえ、なんでトニーまでかぶせてるの? 天罰欲しいの?」

「おっと、そうだ。カズマ、君にはこれを渡しておこう」

こちらを睨みつけてくるアクアを無視して、僕は懐からサングラス
を取り出してカズマに握らせた。

「……?」

カズマは少しの間サングラスを不思議そうに眺めると、少々……い
や、大分気取って片手でサングラスのツルをピッと勢いづけて開き、
顔に掛ける。

「うわ、カズマさん絶望的にサングラス似合わないわね」

「うるせえよ。……で、なんでサングラス? てつきりグラス部分に
なんか映ったりでもするのかなと思ったけどそうでもなさそうだし」

「二ついいことを教えてやる。サングラスにはな、最初から完璧とも
いえる機能が付いてるんだ」

僕は他のみんなに聞こえないようにカズマの耳に顔を近づけて。

「いいか、サングラスを掛けていると、女の胸や尻を見ても目線でバレ
ない。覚えておけ」

そう言つて、ポンポンとカズマの肩をたたきながら顔を戻した。

「……………」

カズマはサングラスをずらし、尊敬の目を僕にむけて。

「……トニー、さつきは人類随一の知力を返上してこいとか言ってるめんど。やっぱお前は究極の天才だわ」

「どういたしまして」

カズマは意気揚々とサングラスを掛けなおし、再び彼女達に向き直ろうと……

……して、ピタリと止まった。

「いや、待った。何も解決していないぞ、寒さから身を守れるようになっただけじゃん。結局冬將軍はどうすんだよ。めぐみんの爆裂魔法で吹っ飛ばすのか？」

「相手は魔法防御力もすさまじい大精霊です。爆裂魔法の一撃で倒せるかどうかは……いえ、私のレベルは30を超えています。今の私の爆裂魔法であれば葬れる……かもしれません。が、正直賭けですのでやりたくないです」

「じゃあ無理じゃん……クソツ、どうすればいいんだ？」

「安心してちょうだいカズマ。冬將軍は寛大なの。多少雪精を倒したとしても、DOG-EZ-Aして誠心誠意謝ったら許してくれるわ」

「つまり俺達が死ぬか死なないかは相手のさじ加減って事じゃねーか。リスクが高すぎるわ!!」

「元々冒険者とはリスクな職業です。わがままばかり言ってもらえませんよ?」

「わかってるけどさあ……」

めぐみんに諭されたカズマは一度頭を抱えてから深呼吸して、作戦を練りだす。

何かを思いついたらしい。

ハツとした表情を浮かべて僕の方を顔を向ける。

「……トニー、クインジエット借りていいか? いざって時の逃走手段にしたい」

「ぶつけるなよ?」

「おお、サンキュー。これで何とかなりそうだな」

体温調節スーツの上からいつもの装備を身に纏い、ラボの方へと向

かうカズマ達。

……なんだか胸騒ぎがするな。
杞憂であればいいが。

▽

アルダープの家の改築に取り掛かってもう一週間と少し。

……なのだが、この派手を通り越して最早サイケデリックな屋敷は、何度見たって慣れることはなさそうだ。

複数の機材を積んだ荷車を玄関先に起き、アルダープ亭のド派手な扉の前に立つ。

門番とあいさつを交わし、要件を伝えて屋敷の中へと走らせること数分。

「よく来たなスターク。ほら、入るがよい」

「お言葉に甘えて」

アルダープと付き人達に案内され、屋敷の中へと通る。

廊下を通るさなかで、そこに飾られた一つの絵が目にとまった。

……？

この絵……なんだか見ていて違和感を覚えるような気が……。

いつの日か来た時にもこんなことを思ったはずなのだが……。

いや、気のせいだろう。

目の端で絵をなんとなく横目にしつつ、アルダープの後ろをついていく。

今日が最後の工事。

場所はアルダープ自身の寝室だ。

その寝室の前にたどり着くと、アルダープは僕の方に振り返って。

「今日で工事は終わりのだろうか？」

「ええ、アレクセイ卿は工事の音が聞こえないような場所で、明日はどんな手で税金を巻き上げるかについてでも考えといてください」「ハッハッ、このワシにそんな後ろめたいことなどないわい……。まったく、貴様はその面白くもない皮肉さえなければ完璧なのだな」

不満げに息を吐き、ズカズカと別室へと向かっていくアルダープ。僕はこつそりと寝室前の花瓶にこつそりと小型のスピーカーを仕掛ける。

本番はこれからだ。

アルダープの部屋に入ると、そこには見張り用の兵士が一人立っていた。

工事とはいえ、貴族が信頼のない人間を寝室に一人にするわけがない、当然だ。

だが、僕はこの見張りの兵士を何とかし、寝室をくまなくスキャンして何かないか探らないといけない。

もちろん手は打ってあるが。

「さてと、リクライニングベッドを取り付けるとしようか。これでアレクセイ卿がより出不精になって寿命が縮まらなければいいが」

「……」

僕の独り言を気にも留めず、ただ黙って僕の方を見ている兵士。ものすごく視線を感じる。そんなに怪しまなくても良いだろうに。フルフェイスの兜なのも相まってのホラー映画に出てくる呪いの置物のようだ。

ここでリクライニングベッドの骨組みを半透明な包装シートから取り出して広げつつ、小型のリモコンを取り出す。

兵士の角度から見えないようにリモコンのボタンを押すと……。

——パリンツという花瓶の割れる音がドアの向こうから聞こえてきた。

「……？ スターク殿、ここでお待ちを。ちよつと様子を見てきます」
そう言い残し、部屋から出ていく兵士の背をほくそ笑みながら見送った僕は、空になった包装シートを正方形に広げ……。

「おっと、案外帰りが早いな」

ガチャガチャと音を立ててこつちに来る鎧越しの足音が聞こえてきたので、リモコンの別のボタンを押す。

今度は猫の不機嫌そうな鳴き声がドアの向こうの廊下に響いた。

『……なんだ？ 猫が紛れ込んだのか？』

さっきのガラスの破壊音も、今の猫の鳴き声も、この家に少しずつ仕掛けていた指向性のスピーカーから再生されたものだ。

ちなみにこの猫の鳴き声は、屋敷にいるちよむすけとかいう変な名前をした変な猫がアクアに追いかけられてるときに声を頂いた。

こちらに近づいていた足音が止み、今度は遠ざかっていく。

……よし、作業の再開だ。

正方形に広げた包装シートに、リクライニングベッドの骨組みに仕込んであったフレームを抜き取ってシートの縦横四辺に通す。

これでよし。

完成したものを床に置き、装置を起動させる。

電気が流れたことでシャキンツと音を立てて骨組みが伸び、それに従って包装シートの面積も広がり、横の辺が天井と床に、縦の辺が壁に接着し……。

やがてベッドルームに隙間のない半透明な仕切り壁ができ、ベッドに向けて作業する僕と見張りの兵士が丁度隔てられるようにしてベッドルームを分断した。

後は高性能のスピーカーをいくつか取り付け……。

これで下準備は完了だ。

『まったく……一体どこに逃げたんだ……何かが割れた跡も無いし……』

また戻ってくる足音が聞こえてくる。

「フライデー、CG映像完成はまだか？」

『後三十秒はかかります』

「それじゃ間に合わない！」

『我慢は美德です、ボス』

これ以上窓を割る音や猫の鳴き声で誤魔化すのは無理がある。

クソツ、水滴が落ちる音とかもつと無難なものにしてあげばよかったな。

こうなったら……。

僕は扉の向こうでドアノブに手を伸ばしているであろう兵士に、扉越しでも聞こえるように大声で話しかける。

「おい、その置物兵士君！ ちょっと部屋を開けるのは待ってくれないか!!」

『置物兵士!? えっと……ど、どうしました?』

「猫が入ってきてきて部品を散らかした！ ドアの前にまで転がってるから少し待ってくれ!!」

『その部屋に来ていたのですね……了解しました。片付けたら声をかけてください』

部屋から遠ざけるために使用した猫の鳴き声を機転を利かせて再利用することで何とか時間を稼ぐことに成功した。

あとでちよむすけには美味しいご飯を食べさせてやるとしよう。

僕は兵士に聞こえないよう、小声でフライデーを急かす。

「フライデー、僕の猫の声真似が聞きたかったらゆっくりやってもいいぞ」

『それはまたの機会の楽しみとさせていただきます。CG映像作成完了、スクリーンに投影します』

電子音と共に、部屋を仕切る半透明の仕切り壁が、まるでスクリーンのように映像を映し出した。

映っているのは、今僕がいる方面の部屋の映像。先ほど兵士がいた側からだ、仕切りなんてないかのようにしか見えないだろう。

だが一つ違うのは、スクリーンに映っているのはリクライニングベツドを組み立てている、CGで出来た僕という事だ。

つまり、スクリーンの裏で何をしたいようが、向こう側にいる奴からはCGの僕が作業している姿しか見えないということ。

スピーカーから作業音もリンクして出るようにしてあるので近づいてこない限りバレることは無い。

「オーケーだ、もう部屋に入ってきていいぞ」

「失礼、スターク殿。猫は何処かに行っただのですか?」

「激しい格闘の末、奴は僕に恐れをなして窓から出ていったよ」

部屋に戻ってきた兵士に軽口を叩くが、どうやら何の違和感も持っていないようだ。

先程のように僕を監視する形で壁に背を向けた立ち、再び置物のよ

うにじつとし始めた。

スクリーンの裏に立つ僕は、自分のポケットに入っていた端末を取り出して、部屋のスキヤンを開始する。

衛星からの立体スキヤンでこの寝室の下に謎の空間があるのは分かっていた。

後は地下に何があるのかを突き止めるのみ。

スキヤン結果を、フライデーがインカム越しに伝えてくる。

『ボス、右手側にある本棚の裏が金属で補強されており、空気の流れがあります』

なるほど……。

隠しドア出てこい……。

隠しドア出てこい……。

隠しドア出てこい……。

本棚の裏に手を伸ばして引つ張ると、冷蔵庫のドアみたいに本棚が開き、その奥に錆びた鉄の扉が現れた。

Y E A H

おそらく地下室につながる扉だろう。

自ら地下へ降りて詳しく中を調べたいところだが……時間は有限だ。

リクライニングベッドを組み立てる様を見せておいて、映像と完成度が食い違っていたんじやそれこそ怪しまれかねない。

ここはひとつドローンを送りこみ、映像を見ながら実際に組み立てを行うとしよう。

胸ポケットに掛けておいたサングラスを装着し、ペンに偽装した超小型のドローンを展開して地下へと投げ込んだ。

薄暗く、カビ臭そうな階段がカメラを通してサングラスに映る。

掃除など一度もされてなさそうで、色や大小様々な髪の毛が散乱している。

そして、血の滲む爪痕だらけの床と壁が、数多の人間が抵抗も虚しくここに引きずり込まれている事を物語っていた。

床に散らばる髪の毛の長さ、壁にへばりついた小さな血の手形、乱

雑に裂かれた女性物の服の切れ端……それらを通して、犠牲者が僕の脳裏に浮かんでくる。

「……………」

泣き叫びながら壁に爪を立て、無理やり地下へと引きずられていく年端もいかない少女達の姿が。

……思っていた以上に、ロクでもない野郎のようだ。

今すぐとっ捕まえて顔面に一発叩き込んでやりたい衝動に駆られるが、それはあとの楽しみに取っておこう。

まずは証拠を徹底的に集めるところからだ。

映像は録画されている。

このまま地下室まで全部カメラに収めて……………

『ヒュー、ヒュー、ヒューッ！』

——ブツリ。

……と、レコードを踏みつぶした様な音を立ててカメラの映像が途絶えた。

『映像途絶、記録媒体ごと消滅しました』

……………どうなっている。

最後に聞こえたのは、以前どこかで聞いた喘息のような謎の異音。

またもう一機送るか？

いや、今途中まで撮った映像も、ラボのサーバーへと衛星を通じて送られているはずだが……。

『コネクションエラー発生。原因不明の理由により通信が途絶しました』

原因不明のエラーだと？

このタイミングで？

何よりも気になるのは、あの喘息のような呼吸音だ。

最初にこの家に来た時も聞いたあの音。

あの時の前後に何が起きたのか不明瞭なものも相まって、何かあると

しか思えない、

ここで偶然だと思えるほど楽観視できる頭は持ち合わせてはいない。

クリスを連れて詳しく調べることがありそうだ。

と、作業を続けながら対策を練っていると。

『ボス、映像の復元には成功しました。再生しますか？』

フライデーが喋れない環境にある僕の事を考慮し、サングラスに再生ボタンが表示される。

僕は迷うことなくフチに手を当てて映像を再生するが……。

『——ッ！』

表示された映像には、酷い暴行の跡がある複数人の女性たちが、真顔で並び立ってこちらにゆっくりと手を振り続けている姿が映っていた。

聞こえてきた音声は、ヒューヒューと喘息のような息遣いと、絶え間ない女性の絶叫。

思わずサングラスを投げ捨てかける。

フライデー、ホラー映画のワンシーンを流せなんて言っていないぞ。

『映像記録が改ざんされています。ですが……ハッキングの痕跡はありません』

クソ。わからないことが多すぎる。

映像をクリスやアクアに見せる必要があるそうだ。

とりあえず、アルダープは地下に何かを秘めている事、そして完全に犯罪者であることが分かっただけでも収穫だろう。

必要ならば、近いうちにでもクリスと襲撃をかけてやってもいい。

そうと決めた僕は、急いで地下室への扉を閉め、元の状態に直して作業へと戻った。

▽

作業を終えた僕はアルダープを呼んで来るように兵士に告げ、部屋を出たところでスクリーンやスピーカーを回収しておく。

アルダープはと言えば、部屋に入るや否やベッドに横たわり、リモコンを弄ってリクライニングベッドの調子を確かめはじめた。

スターク・インダストリーズの家具家電部門が開発した、新型のリクライニングベッド。

人工知能を搭載し、使用者の寝相に合わせて可動部が三百か所以上ある骨組みがベッドを最適な形へと変形させ、体温も感知してベッド内部の温度まで調節する。

ぬるま湯の中で浮かぶようだと評判の、スターク・インダストリーズが誇る最新型の最高級ベッドだ。

ソファにも変形するし、サイズは特注のキングサイズ。

サービス精神で垂直離陸の機能も付けておいた。

幽霊騒動でメチャクチャになったラボの中、コンピューターに残っていた会社のデータからこいつの設計図を見つけ出して作るのには中々に骨だった。

これだけで七百万はくだらないんだが……。

「ほうほう!! 悪くないではないか。やはり貴様の作るモノは実に調子がいい」

「お気に召していただけただけだよ。何より。それじゃ、約束のものを」

僕とアルダープの約束。

それは、めぐみんが壁を破壊して発生した借金のいくばくかをアルダープが出すという約束だ。

カズマ達が背負った四千万の借金のうち、一千万を出す予定になっていた。

アルダープは、『まあ待て』と手を突き出して。

「報酬ならば最高の形でお前に出してやろう。お前に出す予定だった一千万エリスを、ワシが管理して投資するのだ。そして、その金が膨れ上がったタイミングで支払ってやろうではないか」

……こいつは何を言ってるんだ？

「つまり、我々の金を奪って勝手に使うことにしたと丁寧にかけてい

るんですか?」

「ハツハツ、所詮は目先しか見れぬ下賤な市民か。新聞に載ってるワシのコーナーを見たことはあるか?」

「あー……『三流詐欺師の脱税講座』の事ですか? ファンですよ」

「貴様! 無礼も大概にしろ!! ワシがいかに資金繰りをして財を成したかについて自伝の一部が載っているのだ!! ここまでの財を築いてきたワシを信用して預けろと言っておるのだ!!!」

ブチ切れて唾を飛ばして怒鳴り散らすアルダープにどうしようと手を突き出す。

「減額するという約束でした。守ってもらわないと困るのですが」

「実に短絡的で子供じみてるな。貴様も経営者であるならば、投資というものを理解せんか」

「投資に理解はありませんとも。ですが、約束は約束……」

「ハア……」

アルダープは僕の言葉を遮るようにわざと大きな溜息をつき。

「もうよい、貴様の仕事は終わったのだ。さっさとワシの家から出ていけ」

アルダープがそう言うと、兵士たちが鎧の音を響かせて僕を取り囲む。

僕は周囲の兵士たちを首を回して軽く見渡し、皮肉っぽく肩をすくめてフンツと鼻を鳴らし。

「……手厚いお見送りをどうも。どいてくれ、一人で帰れるさ。この無駄にデカイ屋敷の帰り道もいい加減覚えてきたところだからな」

悪態をつけて門まで向かう僕を、アルダープはいつもの仏頂面ですつと見ていた。

「——ということがあったんだ」

カズマの屋敷で、僕とカズマは食卓テーブルを囲んで愚痴り合っていた。

「マジかよ……あいつ本当にクソ野郎だな」

「だから、今からあいつの家に殴りこもうと思う」

「……は？」

僕が立ち上がると同時、ダイニングルームの壁に寄りかかるようにして待機していたMk. 45が威圧的な起動音を立てて僕の身を包んだ。

そのまま玄関へ向かう僕を止めようと、カズマが必死に縋り付いてくる。

「ちよつ、待て待て待て！ ストラップ！ ストラップ！！」

「それを言うならストップだ。それと、僕の邪魔をするな」

「するよ！ 超するよ！！ なんでお前は厄介になりそうな事をそんな平気でやろうとするんだ！！」

「あんな奴はほつといた方が厄介だ！」

「令状だの証拠だのすつ飛ばして殴り込むことよりもか！？ 考え直せよ！！ ここは貴族に手を出したらとんでもないことになるの！！」

「ちよつと、朝からうるさいですよ」

揉める僕らの声を聞いてたのか、めぐみんがうるさそうな顔をしながら階段を降りてきた。

クエストに行く準備をしたのか、はたまた一日一爆裂の準備か。彼女はいつものローブに杖まで装備している。

「めぐみん、聞いてくれよ！ クソ領主が屋敷のリフォームの金をケチったからって、トニーが令状も何もなしに私的制裁しようとしてんだ！！ 領主を屋敷ごとぶっ飛ばす気だぞ！！ 俺達まとめて犯罪者になっちまう！！」

「ええっ!？」

玄関に立った僕はスーツのマスクを開け、めぐみんを指さして一言。

「めぐみん、やるか？」

「ええ、やりますか！」

「チクショウウこいつらイカれてる!! アクアー！ ダクネスー！ こいつらを止めてくれ!!」

騒ぎを聞きつけたアクアやダクネスがドタドタと音を立てて駆け

つける。

二人ともどうやら話を聞いていたようだ。顔を真っ青にして僕を止めにかかってきた。

「トニーー・ お願いだからこれ以上面倒を起こさないで!!」

泣き叫びながらアクアが僕とめぐみんを引き留めようとするが、ダクネスは僕の前に堂々と立ちはだかり、アクアよりも深刻そうな顔をしながら手を突き出して僕を止めようとする。

「トニー。あの男の態度で頭に来ているのは理解できる。だが、奴は法的に葬らねばならんだ……頼む……!」

その雰囲気にも、僕もめぐみんも思わず足を止めてしまった。

僕はなんとなく察しながらも、ダクネスが貴族であることを知らないカズマとアクアの事を考慮しながら尋ねる。

「……奴と因縁があるのか?」

「ああ……。トニー、お前には感謝している。あいつの問題に協力してくれていることも……。だからこそ、ここで短絡的な行動に出て台無しにはしないでくれ」

めぐみんと顔を見合わせ、僕はため息を一つ付いてMk. 45を脱いだ。

「なんだか深刻そうですね……。わかりました、悪徳貴族の屋敷を吹っ飛ばしたかったです、その爆裂欲は何処かで発散するとしましょう。カズマ、爆裂散歩に付き合ってください」

「はいはい……」

「まった。全員に見てほしいものがある」

引き留められたカズマとめぐみんを含めた全員が僕に注目する。

僕はポケットから取り出した端末からホログラム映像を空中に投影した。

先日アルダープの屋敷の地下室で撮ったが、改ざんされておぞましいことになっている映像だ。

「ひいっ!」

再生した途端、カズマとめぐみんが悲鳴を上げてダクネスの後ろに逃げ隠れた。

二人はダクネスの後ろから青い顔をちらちらと覗かせながら。

「お、おい、なんだよその映像……ホラー映像をいきなり流すとか悪趣味だぞ！」

「そうですよ！ トイレいけなくなったらどうするつもりですか!!」

僕はダクネスの後ろから非難を飛ばしてくるカズマとめぐみんは無視して、ダクネスとアクアの方を見やる。

ダクネスも臆した様子こそ見せていないものの、映像をみる顔をひどくしかめていた。

「これは一体何なのだ……」

「かわいそうに……」

だが、そんな中アクアだけが映像を見て、胸を痛めたような、心の底から同情するかのような顔をしていて。

「トニー、これを何処で撮ってきたの？」

「アルダープの屋敷の地下室だ。本当は奴が少女を連れ込んで暴行を働いている証拠になりうるあらゆるものが映っていたはずだったんだが……映像機器がイカれ、それでもデータを復元できたと思ったらこれが映ってた。僕も初めて見た時は驚いたよ」

アクアはただ黙って映像を眺めている。

「この子達、みんな地縛霊よ。ここで悲しみと恨みの中で死んでいて……成仏もできず、悪霊になって復讐しようとしても……邪悪な力で押さえつけられて、自分をこんな目に合わせた本人に指一本触れられないままここに閉じ込められて、助けを求めているわ。後ろで聞ける気味の悪い声が関係してそうね……」

その本人は果たして意図してこんなことをしているのか、はたまた地下にいる何かの原因で勝手に引き起こされているのか。

それは分からないとだけ付け足して、アクアは映像から目を背けた。

僕は映像を切り、再びダクネスに向き直る。

「法的にとは言うが、アルダープをどうやって倒すつもりだ？ おそらく、あ……科学者として、こんなこと言うのは馬鹿らしいことこの上ないが、奴は未知の魔法か何かで自分を守っている、まっとうな

やり方で倒せるとは思えない」

「……どうすればいいかわからない。だが、必ずどうにかしてみせる。アルダープの所業から人々を守るのは……私の使命なのだ」

一見、必ず何とかしてみせると感じる信念を宿した瞳と顔。

だが、その裏にはどこか自棄の傾向が感じられた。

ダクネスの顔……この顔はよく知っている。

……僕がよくやってた顔だ。

一人で何でも抱えようとして、どうしようもないことに挑もうとする顔だ。

「使命……？ お前何言ってるんだよ？」

カズマが、ダクネスの言葉の中に混じる違和感を感じとって質問する。

「……私は——」

ダクネスは全て話した。

以前僕らに話したように、ダクネスではなく、ダステイネス・フォード・ララティーナとしての話を。

これが僕ならノリノリで話すもんだが、彼女は何処か寂しげに語った。

僕らは例外だったろうが、本来であればその名を上げた途端に誰もが驚き、そして無礼を詫びて距離を取ってきたのだろう。

だが……、

「ねえ、ダクネス」

「ツ……な、なんだ？」

真面目な口調で自分を呼ぶアクアに、思わずダクネスがビクリと震える。

「私、ダクネスの家の子になりたいわ。だって、もしそうになったら毎日ゴロゴロしながら贅沢三昧できるって事でしょ!？」

「……はっ？」

——だが、こいつらは例外な連中ばかりなのだ。

「ぶははははは!! ダクネスお前……普段から真面目ぶった口調で話す癖に、本名が可愛すぎるだろツ……か、かわいいよララティーナお

嬢様!! うけるー! あひやひやひや!!」

「ラ、ララティーナと呼ぶなあ!!」

僕とめぐみんは顔を合わせてニヒルに笑い合い。

「わかったよララティーナ、奴をぶちのめすのはしっかりと証拠が出た時にするとも」

「ですね。我が名に懸けて約束しますよ。その時は一発で爽快にあの醜い屋敷を木端微塵に消し飛ばしてくださいませよ」

「や、やめろお!! 裁判が覆ってしまうようなことはやめろお!!」

ふざけた茶番を繰り広げる裏で、僕も強く決めたことがある。

正直言つて、一人で背負おうとするダクネスがこの先いい結果を結ぶとは思えない。

なぜなら僕も一人じゃ駄目だったからだ。

だが、キャプテン並みに頑固そうな彼女は、そうなつてしまった時に他人の助けを受け入れそうにない。

だから、彼女には悟られないように、こつそりと僕がアシストする
としよう――

第30話 しびるうおー

ほのかな月明かりが照らす広大な庭を、剣呑な雰囲気が満たしていく。

僕らの前に立ちはだかる三人の娘たちと、鋭い視線が交差した。

——戦いは、避けられそうにない。

「どうするダクネス？」

「……戦う」

「いい結末が待ってそうですね」

ザツと踏み出した彼女達の足音が、普段のそれよりも重く庭に響く。

一歩踏み出した彼女達に対して、こちらも一歩踏み出した。

「止まる気ないな」

「……こつちもだ」

互いの距離が、ゆっくりと、一歩ずつ縮まってゆく。

踏みしめるように歩いていた僕らも、ついには戦闘態勢をとって駆け出し、縮まる速度はどんどん早くなる。

カズマが唸り声をあげてファイティングポーズをとり。

アクアの拳に光が灯り、めぐみんの瞳が紅く輝き、ダクネスが肩を突き出してタツクルの姿勢をとる。

庭に伸びた五つの影が、やがてその中央で一つに重なり——

▽

僕は期待に胸を膨らませながら目的地までの道歩く。

「いやあ、楽しみだな。サキュバスが見せる夢……どんな感じなのやら」

「……」

だが、僕よりも楽しみにしているような思春期真っ盛りのティーン、

カズマはと言うと……。

「おい、どうした?」

「あ、ああ? いや、なんでも……」

さつきからずつとこんな調子だ。

何処か浮かない顔でソワソワしている。僕がしゃべりかけても上の空だ。

「しつかりしろ。これから行く場所がわかってるのか?」

「だからこそだよ……今まで彼女すらいなかった童貞が、いきなりそういうお店に入れるわけないだろ!? ここだけの話、一人だったらここまで来てなかった……おい、なに笑いこらえてんだよ」

仲間にセクハラをしまくり、女性の敵とまでギルドで噂されているカズマ。

そんなカズマが、今ここで綺麗な女性がいる店に行くってだけでこんなにビビリまくっている姿に、思わず笑いそうになってしまった。そんな僕の様子がきにくわないのか。

カズマは人目もはばからず大声で訴えかけてきた。

「お前はどうせ若い頃からモテモテで女には困らなかつたんだろ?」

はべらかしてたんだろ!? いいよなあ! 俺はどうか聞きたいか!?

俺はなあ、小さい頃に結婚しようねって約束した女の子がいたけど、どうなったと思う? その子はなあ……俺が中学生だったある日、不良の先輩のバイクの後ろに楽しそうに乗ってたよ!!」

「HHHHHHHHHHH!!!」

とうとう耐え切れずに膝を叩いて爆笑し始めた僕に、カズマは不機嫌そうに顔を歪めて僕を睨む。

ミツルギの時もそうだったが、どうやらコンプレックスを色々抱えていたようだ。

負の感情が爆裂している。

「クソッ! 笑いやがって!! これだからモテる奴は嫌いなんだ!」

「わかった。悪かったよ、君の過去を笑ったりして。でもおかしくてね、めぐみんを背負うたびに胸が大きくなつたかと世間話でもするかのように聞いたり、ダクネスに胸もガチガチなのかと尋ねる君が、店

に行くだけでこんなにビビって、しかもそんな……H A H A ツ……ピュアな失恋してるなんて……オーケー、今のが最後だ、もう笑わない」

泣きそうな顔しながら戦闘態勢をとりはじめカズマの姿を見て、僕は手を上げてわざとらしい降参のポーズをとった。

「くっ……お前にこの話をしたのは間違いだったかもしれない……」
「でも感謝してるさ。僕も失恋しかけてるからね」

なんてやり取りをしているうちに、例の店までたどり着いた。

大通りを外れた裏通り。

そこで控えめな看板を出している小さな店。

「あの店で間違いないのか？」

「あ、ああ……教えてもらったとおりだ。……お、おい！ そんなすぐ行くなって……！」

軽い足取りで店のドアまで歩く僕に比べ、カズマはかなりぎこちなく後ろからついてくる。

店に一步近付くたびに、カズマはひたすら深呼吸していた。

「スウー……ハアー……落ち着け俺……自然体だ……美人お姉さんの前でキョドってたらダサイぞ……」

そのまま流れるようにドアに伸ばした僕の手を、カズマが横からガツとつかむ。

「どうしたんだ、そんなビクついた顔をして。君が紹介した店だろ？
本来なら君が先導すべきはずだったのに」

「そんな定食屋に入るようなノリで進んでくなよ……お、俺にあと十秒くれ……」

ドアのすぐ横の壁にもたれかかり、胸に手を置いて何かブツブツつぶやき始めたカズマ。

完全にストリップクラブに初めて入るティーンの間だ。

入った店先のお姉さんにからかわれて『えあ、ハイッ！』しかしやべれなくなるか、変な事まくし立てて笑われるタイプと言ったところか。

「カズマ。時には歩くよりもまず走れだ。いいか？ 行くぞ」

「おい、ちよつ……！」

カズマの背中を押し、一緒に店の中へと突入した。

「いらつしいませー！」

目の前に飛び込んできたのは、まさにSHANGRI-LA^{桃源郷}

こじんまりしたその店の中で働いている一人一人が、街を歩けば誰もが振り返るような美女ばかり。

昔の僕なら全員まとめて会社で日替わり秘書として雇おうとしたかもしれない。

「Wow……驚いたな……これがサキュバスか……」

「……サングラス持つてくればよかった」

カズマは案内に来た煽情的な格好をしたサキュバスの肢体に目が釘付けになっている。

かくいう僕も正直目を奪われている。

モデルと付き合つたことは何度もあるが、ここにいるサキュバスたちは、そんなモデルに負けない美貌とプロポーションを持っていた。

そんな僕の様子を見たカズマが、肘で僕を突きながらおいおいと言つた視線を向けてきた。

「トニー、目的は夢で恋人に会うことだろ？ 案内人のお姉さんに目を奪われてていいのか？」

「君は分かつてないな。仮に既婚者であったとしても、魅力的な女性には思わず目を奪われるもんなんだ。君の親父だって、好きな女優くらいいただろ？」

「ま、まあ……でもそれとはちよつと違」

「つまりはそういうことだ。それに、確かに僕は目を奪われたが……僕の心まで奪つた女性はこの世でただ一人……ペッパードだけだ」

「そのセリフ、将来俺に恋人が出来た時に使わせてもらおうかな」と、二人で軽口を叩きあっていると。

「あ、あの……」

「おっと、失礼。この店について案内してくれるか？」

置いてけぼりにされていた受付のお姉さんに、僕は案内を促す。

「はい、では改めて。こちらのお店は初めてですか？」

「えっと初めてですが……話には伺っています。淫夢であればどんな夢でも見れるって……」

「ええ、さようございませう。では、特に説明はいらなそうさうですね。こちらにどうぞ」

微笑を湛えたサキユバスが、メニュー表が置かれた席に僕らを案内する。

時刻は夕方くらい。当然と言えば当然だが……店の中には男性客しかいなかった。

飲食店だというのに誰も食べたり飲んだりせず、試験終了チャイム直前まで問題を解いている必死こいた受験生みたいにペンを走らせて何かを書いている。

「ご注文はお好きにどうぞ。お酒もございませうが、飲みすぎないようにしてくださいね？　お酒で泥酔され、熟睡されると夢を見せることができませんので……」

僕は机の上にあるメニュー表を手にとって。

「それじゃスコッチを一つ」

「お前話聞いてたのか？　そんな強い酒頼むなよ」

「飲みすぎなきやいいだけだろ？　スコッチの一杯くらい、僕にとってはお茶みたいなもんだ」

「フフ……初めて来た人で、ここまで肝の座っている殿方は初めてだわ……素敵ね」

そう言つてサキユバスはからかうような微笑を浮かべたまま、下から髭をなぞるようにして僕の頬を指で優しくなでると、踵を返してお尻を強調させた歩き方で厨房らしき所へと去っていった。

女性からこういった挑発的なアプローチを受けるのも慣れっこだったのでとりえず愛想笑いで返したが……サキユバスはどこか少し驚いたような表情を見せていたのが気になる。

そのまま彼女が去った先を何となしに眺めていると、隣からカズマが恨めし気な視線を向けてきた。

「俺も酒場のお姉さんに只者ではないって見抜かれた後になんかチャ

ホヤされたい……」

「言っておくが、いいことは無いぞ。周囲から今の君みたいな怨念渦巻く視線を全身に浴びたり、女同士が嫌らしい戦いを始めたりするのがオチだ」

「お前が言うと言説力が違うわあ」

「だろ？」

それでも俺はチャホヤされてみたいとカズマがつぶやく。

正直言つて、カズマは一人の女性と出会って未永く幸せに暮らす方が性に合つてると思うが。

だがそれを言うと、ひねくれたカズマには『お前がモテることは無い』って皮肉ととられそうなので黙っておく。

「お待たせいたしました。スコツチです」

お酒を持つてきたサキユバスは、先ほど案内してくれたのとはまた別なサキユバスだった。

抜群のプロポーションなのは先ほどと同じだが、どこかより妖艶でありながらも貫禄があり、だが年増には見えない……そんなサキユバスだ。

直感だが、ここのボスかもしれない。

そんなボスっぽいサキユバスはと言うと。

「先程は申し訳ありませんでした、お客様」

急にペこりと綺麗なお辞儀をし、僕に謝罪をしてきた。

いきなりどうしたのだろうか。

「先程、私の部下があなたを魅了しようとしてました。というのも、サキユバスというのは、男から劣情の目を向けられてこそというものです。あなたがあなたからはそう言った感情をあまり感じ取れず、悪魔の本能とプライドからあなたに意識を向けてもらおうとしてついイタズラしてしまったそうです……。ここの支配人として、全てのサキユバスを代表して謝罪します……」

それと。と、サキユバスは付け加えて。

「どうやらあなたには……強く愛する者がいるようですね？」

「ああ、まあな。で、さっきの娘に伝えておいてくれ。劣情を催さな

かったのは単純に僕が女性慣れしていて、かつ愛する女性がいるからだ。メンタルケアは大切にな」

僕がそう言うと、支配人を名乗ったサキュバスはクスリと笑って手に持ってた何かの用紙を僕らに渡してきた。

見たところアンケート用紙のようだが……。

「そちらの用紙に自分の望むシチュエーションと住所をお書き下さい。夜に我々がお伺いして淫夢をお見せいたします。シチュエーションについてですが、女性側になってみることも可能ですよ？ 中には、両性具有になって男と女のハーレムを……なんて方もいらっしやいました」

この街の冒険者共が心配になってくるな。

さて、なんでも見れると言っていたが……一応聞いておこう。

「なあ、ひとつ聞きたいんだが……この世界にいない人間と夢で会うことはできるのか？」

支配人のサキュバスは何かを察したのか。

慰めるような、包み込むかのような微笑みを浮かべながら。

「ええ、もちろんです。前に、亡くなった恋人に会いたいという名目で夢を見せてもらいに来た方もいらっしやいました」

「別に死んでるわけじゃないんだが……まあ、そういうことならいい」
むしろ死んだのは僕の方なだけだな。

ジョークにすることもできないネタにこっそりと鼻で笑いながら、僕は貰ったアンケート用紙を眺める。

「じゃ、じゃあトニー。また後で」

そわそわしながら受け取った紙を持って机へと向かうカズマ。

僕も机へと向かいながら、ペッパーのこと以外にあれこれと考える。

自分が望んだままの夢を見ることができるサービス……使いようによつては、深いトラウマを持った人間に対してセラピーを行うことも可能だろう。

異世界に来てしまったがために止まってしまっていたある計画の手助けにもなるかもしれない。

略してB・A・R・F。
Binarily Augmented Retro-Framing

初めて見る悪魔の力とやらをなんの研究もせずに受けるのは少々不安があるが……。

科学の追究は未知から始まるものだし、自分で試すことによってわかることもある。

もちろん、夢の中とはいええペッパーと会えるというのは非常に楽しみにしているが。

▽

サキユバスの店の帰り道。

僕らは期待に胸を膨らませながら、特に寄り道することもせず屋敷へと帰った。

互いに『いい夢を』なんて茶化しあいながら、屋敷のドアを開けるとそこには……。

「はいはいーご注目ー！ 見なさいカズマ、トニー！！ 今日の晩御飯はなんだと思うかしら？」

上機嫌で満面の笑みを浮かべたアクアが、T a | D a !! とテーブルを手で指す。

そのテーブルの上には、大量のカニ料理が所せましと並べられてあった。

「へえ、カニ料理か。いいね、マイアミビーチで食べたストーン・クラブを思い出す」

「はいはいセレブセレブ」

「おい。今のは別にセレブ自慢なんかじゃないぞ」

「二人とも。この霜降り赤ガニの前で喧嘩はダメですよ」

霜降り赤ガニ？

変わった名前だな。

カズマがカニをジロジロと観察しながらしながらめぐみに。

「そんなに凄いカニなのか？」

「そりやあもう。殺人の動機になっても納得されるレベルですよ」

「なにそれこわい」

麻葉かなにかか？

「これはね、ダクネスの実家から引越し祝いに送られてきたの!! さすがは貴族の娘ね!! ほら、すごい高級酒もあるわよ!」

「日頃の礼だ、遠慮せずに食べてくれ」

「ああ、日頃から僕のラボの作業アームに服をはぎ取らせようとしたり、全身にアルミホイル巻いて発電室に突っ込んだりする礼だろ? ありがたく受け取るよ」

「!?」

「お、お前そんなことしてたのか……? やべえな……」

ダクネスは恥ずかしそうにモジモジとしながら弁明を始めた。

「ち、違うんだ……トニーがこのパーティーで壁役と攻撃どっちの役もこなしているから……わ、私の存在意義が危ういなど感じて……クルセイダーとしての固さの証明を……」

「それはクエストで示せ」

どんだん言葉が尻つぼみになっているダクネスは放っておいて、僕はアクアが嬉々として持ってきたグラスをテーブルに並べ、酒の栓を開ける。

「H m m……」

取り外したフタの裏をゆっくりと嗅ぐと、奥深くて重厚なふくよかな香りがし、脳裏には黄金の稲穂が浮かぶ。

どうやら日本酒にかなり近いお酒のようだ。

満足げに息を吐くと、横からアクアが頬を膨らませて抗議してくる。

「あつ! トニーったらぬけがけしてズルいわ!!」

「今からグラスに注ぐんだから、これくらいで目くじらを立てるなよ。ほら、君に一番に注いでやる」

「ト、トニー……私にももらえませんか……?」

「一口だけな。あとはジューズ……」

そわそわしながらお酒をせがんでくるめぐみんのコップに酒を少しだけ注いでやろうとしたところで、ある言葉が頭の中にフラッシュバックする。

——『飲みすぎないようにしてくださいね？ お酒で泥酔され、熟睡されると夢を見ることができませんので……』

……こんな美味そうな酒があるというのに今日は飲めない……。

一杯くらいなら問題ないだろうが、こんないい酒といい肴があるのに一杯だけだとかえってキツイ。

「あの、トニー？ 一口だけなんですよね？ その、なみなみと注がれているんですが……あ、ちよつ……トニー!? 溢れます溢れます！」

……いいいんですか？ いいってことですよね!？」

さて、どうしたものか。

いつそ用事があるといつてラボに引きこもるか？

いや、流石にそれはドライすぎる。

どうやらカズマも悩んでいるようだ。

が、カズマはあまり酒に興味はないようで、僕と目があうとすぐに首を横に振った。

サキユバスが最優先のようだ。

「トニー。一口ならまだしも、めぐみんにそんなに飲ませるのは流石に賛成できない。頭がパーになってしまふぞ。ほら、めぐみん。私とアクアで中身を分けるから、少しグラスを借りるぞ」

「ああっ！」

ダクネスが持って行ったグラスを少し名残惜しそうに見るめぐみん。

そんなめぐみんに何か声をかけるでもなく、ただ黙って酒瓶を持ったまま自分のグラスをぼんやりと眺める僕の肩を、アクアがゆすってきた。

……決断の時だ。

「ねえ、トニーってばどうしちゃったの？ 早く自分の分も注ぎなさいよ。早く乾杯して飲みましょう？ もう待てないんですけどー」

「……僕もジュースを飲む」

「……へっ?」

キョトンと目を丸くしたアクアを横を抜け、冷蔵庫から果物系のジュースやコーラを持つてくる。

そんな僕を、アクアがありえない物でも見るかのように目を剥いて。

「ええっ?! トニーってばどうしちやったの!? 禁酒始めたの!? いい? アクシズ教の教えにはね、『汝我慢をする事なかれ。飲みたい気分の人に飲み、食べたい気分の人に食べるがよい。明日もそれが食べられるとは限らないのだから……』ってあるのよ? 飲み仲間として、あなたが飲まないなんてつまらないわ!」

「僕を勝手に邪教徒にするな。これはただの気まぐれさ。そんな些細な問題は無視してカニを食べようじゃないか」

「ほーん? この女神アクアが宣言するわ! あんたは後で自分の愚かな判断を懺悔しながら酒を飲もうとするでしょう!」

その時にお酒が残ってる保証はないけどと付け足し、こっちに向かって口元に手を当ててクスクス笑うアクア。

少しイラツと来るが関係ない。

カズマの方へと目を向けると、彼もまた酒はいらないと首を横に振った。

彼も夢を追いかけることにしたようだ。

配膳を終えて全員食卓につき、乾杯してから早速カニの脚をとってパキツと割る。

中身を引つ張り出すと、殻からするりと肉厚な身が姿を現した。

「おお、上手く剥くもんだな。木槌持ってきて殻を砕こうとしたらどうしようかと」

「僕は世界各国を旅して来たんだぞ? 自国以外のカニの食べ方からいわかってるさ」

正直目の前やすぐ横でカニを割ったダクネスやアクアの見様見真似なのは黙っておこう。

新鮮そうなピンクと色のカニの身を、小皿に垂らした酢につけて口いっぱい頬張る。

「!?」

……これは驚いた。

この世界に来てからというものの、食べ物関係には驚かされてばかりだが……。

——こいつは別格だ。

「おい、どうしたんだよ？ なに変顔して唸ってんの？ そんなに美味しいのか？ お、俺も……ッ!？」

同じようにカズマも衝撃を受けたのか、カニを一口食べた途端に黙ってしまった。

他の全員もカニを無言で頬張り続けている。

こんなに酒が進みそうなくも馳走を食べながらも、酒が飲めない間の悪さを呪う。

そんな僕の横で、アクアがテーブルの小鍋に炭を入れてその上に網をおき、簡素な小型の一人用バーベキューコンロのようなものを作った。

そしてカズマの魔法で火をつけさせると、金網の上にカニ味噌がわずかに残った甲羅を乗せ、その中に先ほどの日本酒のようなお酒を注ぐ。

鼻歌交じりに甲羅にを炙って熱爛を作り、カニ味噌が溶け込んだそれをゆつくりと啜って、実に満足げに息を吐いた。

それを見ていた全員が喉を鳴らす。
もちろん僕もだ。

カニ味噌を食べる文化は僕の国には無いが、ああも美味そうに飲まれると試したくなる……。

「ほらほら、みんなもやってみなさいな。飛ぶわよ?」

「た、確かにこれは美味しいな!」

「ズ、ズルいです!! 今日くらいは一口だけと言わず、普通に飲ませてくださいよ!!」

再びカズマと目を合わせるが、彼はもう今にも負けそうな顔をしていた。

「負けるなカズマ……今度僕が用意してやるから……」

「お前……いい奴だな……」

一晩耐えればいいだけなのだ。

アクアが憎たらしくなるほど酒は欲しいので、銘柄を覚えてまた次回買って飲むとしよう。

左隣りに座るカズマと、周りに聞こえないようにそうこつそりと誓った。

▽

カニ料理も満腹になるまで食べたその夜。

僕は腹ごなしと日ごろのトレーニングとして、ラボから運んできた詠春拳の鍛錬に使う木人椿を軽く打った。

もちろん、体を動かした疲れによる睡眠導入効果も兼ねている。

カズマが丁度よく風呂を沸かしていたので風呂場でサツと汗を流して自室に戻り、自分の頭に脳波の測定装置を取り付けた。

サキュバスの見せる夢にどんな効果があるのかを確かめるためだ。それからベッドで身を投げてくつろぐことしばらく。

やってきたほどよい眠気に身を任せ、後に見るであろう夢に胸を膨らませて瞼を閉じ……

「曲者…… 出会え出会えー!!」

屋敷の庭の方から響いてきたアクアの声に僕は飛び起き、念のためにスーツを起動しておいてから階段を駆け下りる。

この屋敷に曲者が侵入してくるなんて正直考えにくい。

なぜなら、この屋敷に侵入者が来た場合には対侵入者用の警備システムが自動的に感知し、警告の後に非殺傷の攻撃を行う仕組みに……。

……Shit!!

僕としたことが、絶品のカニやら甲羅酒リベンジやら夢への期待やらで気を取られ、警備システムを切るのを忘れていた!

あまりの間抜けなミスに両手で頭を抱えたくなる。

焦りから額に汗をにじませて庭に飛びだすと、そこには二人のサキユバスがフォースフィールドで構成されたたドーム状の檻の中に捕らえられており、その上からアクアが掌をかざしていた。

アクアの手は、いつでも退魔魔法を放てるように淡い光を放っている。

同じく飛び出して来たであろうめぐみんもまたパジャマ姿のまま杖を構えてサキユバスを威嚇している。

「はーっはっは！ 愚かなり、サキユバスよ!! このフォースフィールドは、外側からの攻撃はキツチリ通しますよ!! 観念して経験値となるがいい!!」

フォースフィールドは、ユニビームの面積を自在に操ることが可能なアーティラリーレベル・リパルサー・トランスミッターによって構成されている。

元々 Mk. 17、ハートブレイカーに搭載されていた機能を僕が改良して作った防衛装置だ。

敷地内防衛としての運用なので、侵入者を安全に無力化できるよう、浸透圧の仕組みを利用して外側から内側へ攻撃が通るようになっている。

めぐみんがサキユバスを爆裂させたり杖で叩き殺したりしなければいいが。

と、その時。

「曲者ー！ じゃねえよ、この駄女神！ 人に迷惑かけんのもいい加減にしろ！」

カズマが怒号と共に庭に飛び出してきた。

……全裸にタオルで腰を覆っているだけという、ハルク以下の装備で。

もし本当に敵対的存在が侵入していたならナメた格好で来るなど叱咤していたところだ。

そんなカズマは、フォースフィールドに捕らわれているサキユバス達を見て首を傾げた。

「……あれ？ 何でサキユバスの子がそこに？」

「ほら、トニーもカズマも見て見て！ トニーの警備システムに引つかかったオマヌケサキュバスが、哀れな姿をさらして……って、大変！ 曲者がさらに二人いたわ!!」

「誰が曲者だ!!」

僕とカズマを指さして曲者呼びわりするアクア。

カズマはまだしも僕まで曲者扱いされる要素なんて……。

「ところでトニー、その頭につけている変な物は何ですか？」

……ああ、脳波測定装置を装着しっぱなしだった。

「これはナイトキャップさ。寝る時に被る帽子のことだよ。奇抜でオシヤレだろう？」

「奇抜すぎますよ！ ほぼ金属塊ではないですか!!」

僕はそんな不評な見た目ほど重くない、脳波測定機能付きナイトキャップをとって地面に置く。

「で、何でサキュバスがここで捕らえられているんだよ？」

「曲者カズマさんにも説明してあげるけど、トニーの警備システムにひっかかったサキュバスたちが今何もできずに浄化待ちってワケなの！ それじゃサクツと……」

アクアのかざしている掌の光が増し、サキュバスたちがヒツと小さな声を上げる。

——僕とカズマが行動を起こしたのは、同時だった。

「フライデー、フォースフィールドと警備システムを解除しろ。そいつらは敵じゃない」

僕の指示でフォースフィールドは解除され、

「はっ……？ ちょ、トニーっては何してるの!?!」

「カ、カズマ!?! 近付いちや駄目です！ 操られますよ!?!」

カズマは黙ってサキュバスの手を引いて庭から出ようとする。

まだアクアの退魔魔法、およびめぐみんの爆裂魔法の射程圏内だからだ。今普通に逃がしたとしてもいい的になるだけだ。

「アクア！ 今のカズマはそのサキュバスに魅了されて操られている

!! 夢がどうか風呂場でのたまつて……くそう！ そのサキユバスを逃がすな！ ぶ、ぶつ殺してやる!!」

屋敷の方から僕らへと向けて、殺気立っているダクネスがズンズン足音を鳴らしてこちらへ向かってくる。

月の光だけでもわかるほど顔が赤いのは、怒りのアドレナリンのせいでだけではなさそうだ。

僕はそんな彼女から距離を取るようにしてカズマの方へと走った。たった今来たばかりで状況をわかっていないダクネスには、僕がカズマの制止に向かったように見えたのだろう。

「……ッ!? トニー!? お、お前まで……!?!」

少し安堵の顔を見せたのもつかの間。

サキユバスを守るようにしてアクア達との間に立つカズマの隣に、同じく並び立つ僕の姿を見たダクネスの目が驚愕に見開かれ、警戒の色を滲ませると共にギリツと歯を鳴らした。

僕の背に、サキユバス達がアクアたちに聞こえないような小声で声をかけてきた。

「お、お客さん……! この状況は私たちの自己責任です……! 気が付かれないように枕元に立ってこそ一人前のサキユバス……! この状況は、私たちの落ち度なんです!」

「そうですよ……私たちはモンスターですから! 何も知らないフリを……!」

違う。

様々な要因で頭がいつぱいで、彼女らを招いておきながら警備システムを切らなかつた僕のせいだ。

そのことを、僕は素直に打ち明ける。

カズマとサキユバス達だけに聞こえるように。

「……こうなったのは、この屋敷を守る防衛機能を解除し忘れた僕に責任がある」

「それでも潜り抜けて枕元に立ってこそサキユバスで……!」

「君たちは何も悪くないさ。むしろ僕が作った警備システムの万全さを再確認できたって事にしよう」

「トニー、お前マジか……」

やれやれと肩をすくめるカズマに僕は尋ねる。

「怒ってるか？」

「別に？」

てつきりしばらく根に持たれるくらい怒られそうだと思っていたが、カズマはただフツと鼻で笑い。

「あのアホ三人のやらかしに比べたら、こんなのイタズラ以下だよ」

そう言っつて、手のひらに拳をぶつけてパシンという音を庭に響かせた。

「さっさとサキユバスのお姉さんたちを逃がして、その後は何処かの宿で続きと行こうぜ」

カズマがファイティングポーズをとって不敵な笑みを月明かりに浮かばせる。

その行動を挑発ととったか。

アクアは眉根を寄せ、チンピラみたいな顔をしながら拳を鳴らした。

「一体何のつもり？ 悪魔の味方をするなんて……ほら……袋叩きにされる前にそこをどきなさい。女神の敵対者になりたいの？」

「悪いが、僕は神と敵対したことがあるし、勝ったこともある。脅しにしちや陳腐だな」

パジャマのポケットに手を突っ込んでそう言いきった僕に、アクアの眉根がさらに寄った。

寄りすぎて眉間に山ができてる。

「良い度胸してるじゃないの……！」

「どうやら完全にサキユバスに魅了されているようです。説得は不可能でしょう……となれば、解決策は一つのみ……」

「ぶっ殺してやるっ！」

「そ、それは流石に物騒ですが、とりあえずぶちのめして正気にもどしてやりましょう!!」

各々が拳を、杖を構え始めた。

完全に戦闘態勢だ。

正直、今更になつてなんで僕はこんなバカみたいな理由で戦おうと
しているのだろうかと思う気持ちはある。

だが……この街の治安に影から貢献し……そして……。

「カズマ。愛する者の名前を口に出してみろ、心の決意を強くしてく
れる。僕はペッパード」

「美人でスタイルが良くて、恥ずかしがる系の世間知らずなお姉さん
……！」

「……まあ、合格だ」

……そして、恋人と夢で逢いたい。

そんな十歳のメルヘン少女が言いそうなワガママを叶え、色々大変
な思春期真っ盛りのカズマを満たしてやれる、優しき悪魔を守る為
に。

僕らは、退かぬ想いを込めた瞳で、前を見据えた。

——ほのかな月明かりが照らす広大な庭を、剣呑な雰囲気を満たし
ていく。

僕らの前に立ちはだかる三人の娘たちと、鋭い視線が交差した。

「どうするダクネス？」

「……戦う」

「いい結末が待つてそうですね」

ザツと踏み出した彼女達の足音が、普段のそれよりも重く庭に響
く。

一歩踏み出した彼女達に対して、こちらも一歩踏み出した。

「止まる気ないな」

「……こつちもだ」

互いの距離が、ゆつくりと、一歩ずつ縮まってゆく。

踏みしめるように歩いていた僕らも、ついには戦闘態勢をとって駆
け出し、縮まる速度はどんどん早くなる。

カズマが唸り声をあげてファイニングポーズをとった。

「俺達が時間を稼ぐから逃げろお姉さん!! かかってこいやー!!」

「お、おきやくきょん!!」

アクアの拳に光が灯り、めぐみんの瞳が紅く輝き、ダクネスが肩を突き出してタツクルの姿勢をとる。

庭に伸びた五つの影が、やがてその中央で一つに重なり――

「ぐおあつはああああああああん!!!」

タツクルと拳を盛大に食らったカズマが猛烈な勢いで吹っ飛んで行った。

せめて一秒は持つてほしかった……。

ダクネスとアクアはカズマの方へと突撃したので、必然的に僕の前立ちに立ちあがるのはめぐみんだ。

めぐみんとは一番付き合いが長く、背を押してノウハウも教えた、いわば愛弟子的な存在でもある。

恩師ぶるつもりはないが、それらの経験から彼女が僕と戦うのを躊躇して尻込みしたり……。

「はーっはっはっはー。そう、恩師とは超えるべきもの!! トニー、人生最高の瞬間にしようではありませんか!!」

……なんてことはなく、笑顔で目を紅く輝かせながら杖をブンブン振り回して僕の方へと突っ込んできた。

君がたくましくて僕は鼻が高いよ。

というか、それは僕が言うべきセリフなのでは?

ステータス差の問題で、真っ向から僕がめぐみんと組みあっても、あつという間に組み伏せられてしまうだろう。

色々おかしいと思うが、これは認めざるを得ない。

だから……。

「さあ、我が腕かいなのなかで息を……あ、あれ?!!」

僕は真正面から向かうと見せかけて、助走をつけて杖を振り上げながらジャンプしためぐみんの真下をスライディングで通り抜ける。

そして、スライディングしたその先に……。

月の光を鈍く反射させたMk. 45が、ガンツと音を立てて着陸し

た。

展開したMk. 45の背部に飛び込んでスーツを装着する。

ゆっくりと振り返って対峙する僕の姿を……青色に光るスーツの目を見ためぐみんが、喉を鳴らしながら一步下がる。

「い、いいでしょう……そうですね、全力のあなたを倒さねば、超えたとは言えないで……あああああ——っ!!」

目の前の土をリパルサーで吹き飛ばされたことによつて目に砂が入つためぐみんは地面をゴロゴロと転がった。

素早くめぐみんを無力化した僕は、カズマをブチのめしたアクア達
が追いかけるサキユバスの元へと向かう。

彼女らを直接つかみ、速度を上げて店へと返してやるつもりだ。

「あ、アクアー！ ダクネス！ 気を付けてください！ そつちに行きました!!」

アクアとダクネスが僕の方へ振り向くがもう遅い。

魔法の格好の標的になるのを防ぐため、低空飛行で飛ぶサキユバス
達を掴み……。

「こ、このっ……トニーの背教者めえええ!! もう知らないんだからー!!」

そんな後ろで聞こえるアクアの泣き声を背に、サキユバスを抱えた
僕はそのまま月夜の彼方へとスーツを飛ばした。

▽

その翌日。

ボコボコにされたが、操られていたということできちんとアクアに
回復してもらっていたカズマが、庭で何かをしゃがんで磨いていた。

「朝から掃除とは感心するね。ケガは大丈夫か？」

「まあな。回復魔法でしっかり治してもらったさ。しばかれた本人に
だけどな」

しゃがんでいたカズマが立ち上がって、額の汗をぬぐった。

どうやら磨いていたのは墓石のようだ。

墓石には、『アンナⅡフィランテⅡエステロイド』と彫られてあった。

何処かで聞いた気がするな……。

「この墓石を掃除するのがこの屋敷に住む条件の一つなんだよ」

「へえ、変わってるが……まあ、楽でいいな」

「で、トニーは何しに来たんだ？ 朝から外で日光浴と寒風摩擦するにはまだ若いだろ？」

「今日は僕の料理当番だからな。パンケーキを焼いたんだが……君の分は僕が食べるとしよう。まだまだ若くて食欲旺盛なんでね」

「わかったわかった……今行くよ!! トニーのパンケーキかあ……どう作ってもダメっぽくなるのは克服したのか？」

「……多少」

昨日の夜から、こんなふうには悪友みたいなやり取りができる程度にはカズマと絆が深まった。

共に秘密を共有し、共にそれを守る為に戦ったからだろう。

軽口を叩きあいながら屋敷の中へと戻ろうとしたその時。

『セイクリッド・ブレイクスペル』ッ！

どこか警戒したような顔のアクアが、僕に向けて解呪魔法をかけてきた。

そのまま唸りつつ、僕の体をペタペタ触ってくる。

「おい、何してるんだ？ 新手のスキンシップか？ それとも君の宗教の怪しげな儀式か？」

「ちっがうわよ！ ……うーん、もうチャームの影響は完全にないわね……」

昨夜サキユバスを店まで送り届けて帰ってきてからずっとこんな調子だ。

何度も僕に解呪魔法をかけてきて鬱陶しいったらありやしない。

そんなアクアはというと、安心したように一息ついてから得意げな顔を浮かべて僕に向けて。

「ふふーん、トニーの警備システムも、サキュバスのチャームまでは防げなかったみたいね……」

「そもそもかかっていないのだが、そう言うことにしといたほうが今は楽だ。」

「僕の整えた警備システムがザルみたいに扱われるのは、少々不服ではあるが。」

「アクアは僕にピッと人差し指を立てて。」

「でも安心なさいな！ この女神アクア様が、警備システムのさらに上から神聖な結界を張ってあげたわ!! これでもう呪いみたいなものもシャットアウトできるってわけよ！」

「そう言っつて、パチーンとウインクしてきた。」

「何か余計なことをしてなければいいが……。」

「アクアのドヤ顔は一向に変わる気配を見せず。」

「魔法防御と科学防御が二つが合わさって最強に見えるでしょう？」

「この屋敷はもう、どんな存在も決して踏み入れない無敵の要塞——」

『デストロイヤー警報！ デストロイヤー警報！ 起動要塞デストロイヤーが、現在この街に接近中です!! 冒険者の皆様は装備を整えて至急ギルドへ!! 町の皆さんは直ちに避難してください!!』

「そんな大音量の警報がアクアの声を塗りつぶし、街中に轟いた。」

「アクアはドヤ顔のままピタリと止まり、やがて顔じゆうに汗をにじませてついには青ざめ始めさせ……」

「ぜ、前言撤回……今すぐ荷物をまとめて逃げるわよ!!!」

「今迄見たこともない必死な形相で、屋敷へとすっ飛んで行った。」

第31話 古代兵器と近代兵器と最強の戦術破壊兵器

『デストロイヤー警報！ デストロイヤー警報！ 冒険者の皆様は……』

けたたましくなり続ける警報。

郊外であるここからでも、混乱した市民の声が聞こえてくる。

昔、『GODZILLA』という映画を見たことがあるが………。

まさにあれの避難シーンのようだ。

「ほら、逃げるわよ！ できる限り荷物を持って……あつ！ そうだわ！ トニーのラボに隠れてればいいじゃない!!」

「ですね。それが一番でしょう。この屋敷を手放すのは正直辛いですが、トニーのラボに住むというのも悪くはありませんね。私の寝室はスーツの保管室でお願いします」

めぐみんとアクアは既に諦めムード全開だ。

アクアに至っては屋敷とラボに続くエレベーターの入り口を何往復もして私物を運んで山を作ってる。

手提げ袋一つだけのめぐみんを見習ったらどうだ。

ダクネスは真面目な顔して屋敷に走っていったきりだが……真面目な彼女の事だ、きっとギルドに向かう準備をしているのだろう。

さて僕は……。

そんな慌ただしく、各々が準備をする中で、取り残されているものが一人。

「な、なあ。デストロイヤーっていったい何なんだ？ 緊急の呼び出し受けたんだし、装備整えてとつと行こうぜ」

カズマのその言葉に、アクアとめぐみんはありえないものを見るような目をカズマに向けて。

「あんた何馬鹿なこと言ってるの？ 起動要塞デストロイヤーと戦う気？」

アクアがエレベーター入り口に築いた山にさらに物を放り込みつ

つカズマにそう言う。

いい加減にしろ、重量オーバーだぞ。

「だからデストロイヤーってなんなんだよ……」

カズマは転生して間もないし、この世界の事をよくしらないのだから。

とりあえずヤバい何かが来ている程度には把握しているみたいだが。

ちなみに僕は書物を通してそのスペックは知っている。

「起動要塞デストロイヤー……通った後にはアクシズ教徒しか残らないと言われる最強の古代兵器にして最悪の賞金首ですよ。文字通り、山のような巨体を誇る上にクモのような八本の脚から繰り出される速度は馬すら凌駕し、あらゆる魔法をはじき返す結界まで持つています。私の爆裂魔法を二、三発撃ち込んでも突破は無理です。数百年も前から存在し、今もお倒されることなく、あるゆるものを蹂躪し続けていると言え、そのヤバさがわかるでしょうか？」

「ついでに言うと、僕も危険な存在だと判断して位置を特定してからミサイルで攻撃しようとした。だが、あいつの結界はステルスコーティングの機能まであるようですね。衛星から位置を特定できなかった」

「なにそれ。クソゲーじゃん……」

鬼気迫るめぐみんと僕の説明を聞いて、カズマの顔から血の気が引いていく。

……だが、その目には何かが静かに燃えていた。

彼はあきらめたわけではない。

それはきつと、昨晚僕らの元に訪れるも、不幸な事故によって先延ばしになってしまった夢の為だろう。

僕だってあきらめるつもりはない。

「装備を整えるのに時間がかかった!! さあ、ギルドに行くぞ!」

屋敷から飛び出してきたダクネスは、普段の装備に鎖が編み込まれたマント、着脱式の盾まで装備したかなりの重装備をしていた。

この街を守りし聖騎士として、退くつもりは微塵もないらしい。

「ね、ねえ……なんであんたらそんなやるき出してるのよ……逃げましょうよ？　屋敷が無くなってもラボがあるじゃない！」

「そうですよ！　無謀な戦いはしないのが冒険者です！」

「だがヒーローじゃない」

これまでずっと黙って様子を見てた僕の突然の一言に、全員が黙って僕の方に注目する。

カズマとダクネスがせつかくやる気を出しているんだ。

残りの二人にもやる気も出してもらわないとな。

「めぐみん、君は前に言ったよな？　最強の戦術破壊兵器になるって。で、そんな君は古代兵器（せいぼれ）に恐れをなして地下に引きこもる腰抜けになっただけだ」

ピクツとめぐみんの肩が動き、段々と燃え上がる暖炉の炎のようにゆっくりと目の紅い光が増していく。

それはまるで、怒りのボルテージを表しているかのようで。

めぐみんは、静かに唸るように。

「今……なんといいました？」

「腰抜け……って言ったんだ」

その次の瞬間その煌々と光る紅い目を僕に向け、怒りに震えながら叫ぶ。

「誰にも……腰抜けだなんて……言わせませんよ！　良いでしょう！！

今日をもってデストロイヤーは終焉を迎えることとなるでしょう

！！　この私の爆裂魔法の手によって！！　さあ行きますよ！！」

なんてチョロさだ。

やっておいてなんだが、ここまですんなりいくと逆に悪い気がしてくる。

だがまあ、ここまでくれば後は簡単だ。

決意を胸に宿したカズマが腕を振り上げ、その後ろからダクネス、めぐみんと続いていく。

「おっし、ギルドに向かうぞー！」

「賛成だ！」

「GRRRRRRRRRR!!」

そんな彼らの背中を、アクアが寂しそうな顔で眺め……。

「ね、ねえ待ってよ！ 私だけ一人にしないでよーっ!!」

遠ざかりつつある三人の元へ一気に駆けだした。

▽

「おつ、お前も来ると思っていたぜ」

俺にサキュバスの店を教えてくれたチンピラ冒険者こと、ダストが笑いかけてくる。

俺もお前が来ていると思ってたぜ。

そりゃ逃げる訳には行かないもんな。

ギルドの中央ではテーブルを円形に並べて即席の会議室を作っており、それがかなり物々しい雰囲気醸し出していた。

「それでは、皆さんが集まったところで……あの、スタークさんは……？」

「トニーはなんか準備があるってまだ家にいるよ」

「マジかよあの成金ヒゲオヤジ。あいついれば何とかなるみてーなことあったろ、飛べるし。いや、何で飛ぶのか何で飛べるのか知らないけどよ」

トニーの遅刻の報せを聞いて、ダストが軽い悪態をついた。

「あの人は本当に……私を腰抜け呼ばわりしといて……!」

めぐみんの目はさつきから光ったままだ。

さっきのトニーの煽りがかなり効いたらしい。

そんなめぐみんを焚き付けた本人はと言うと、ラボに籠ってなにか作業をしているようだ。

たしか、『せっかくだから試作兵器を使う』……とか言ってたが……。

ロマンを感じずにはいられないが、一体なんなんだろう。

「それではお集りの皆さん、ただいまより対テスロイヤーの緊急会議

をはじめます!!　まずは、デストロイヤーのとは何かから……」

受付のお姉さんが声を張り上げ、デストロイヤーとは何か、今までどれだけ対抗策を講じて失敗して来たかの説明を始めた。

——デストロイヤーを生み出した国は真つ先に滅び、落とし穴はジャンプで飛び越え、バリケードを築けば踏み越えるか迂回され、空からモンスターの背に乗って乗り込もうとすればゴーレムが備え付けのバリスタで迎え撃ち、地上からフックをかけようとしても速すぎで無理。

こんなやる前から匙を投げたくなるような無理ゲー具合の説明に、冒険者たちもその説明をしている本人であるお姉さんもどんどん表情が暗くなつていった。

そんな中、思いついたように冒険者の一人が。

「あの空飛ぶ鎧のオツチャンに頼むのはどうなんだ？　あの機動力ならバリスタで撃つのも無理だろ。今ここで考えられる限りの最高戦力を、あいつに抱えて運んでもらつてデストロイヤーに乗り込めば」
「無理でしょうね。トニーのスーツ……あの空飛ぶ鎧は、確かにバリスタから飛んで来る矢を避けられるでしょう。ですが、抱えられている人たちはその急加速に耐えられません。トニーが一人で乗り込んでも、もし中に大量の兵やゴーレムが潜んでいたとしたら……。トニーなら一人でそれらを片付けられるかもしれませんが、時間稼ぎに徹されたら先にアクセルが滅ぼされます」

「……………」

「ほ、他に意見はありませんか？」

思わず場が静まり返る。

魔法を防ぐ結界さえなければどうにでもなるのに……。

……いや、待てよ？

すぐ隣で、会議に飽きてコップの水を机にぶちまけて水絵を作つてるアクアを見て一つ思いつく。

以前、ウイズの店に行ったときにこんな会話があったのだ。

アクアの力があれば、魔王の城に張られた結界でもそれが二、三人

程度で維持している物なら破れると。

つまり、こいつはもしかするとテストロイヤーの結界を破れるかもしれない訳で。

俺は遊んでいるアクアにそのことを告げる。

「確かにそんなことも言ったけど、確約はできないわよ?」

「そ、それでもやる価値はある! 街の前で構えて、結界を解除したら後はめぐみんの爆裂魔法で……」

「——いや、駄目だ」

突如聞こえたギルドに響いた声に、全員の視線が入り口のドアに集まる。

そこにいたのは、全身を例のスーツでに身に纏ったトニーと……、

……頭部以外がアイアンマンスーツに覆われたウイズだった。

「す、すいません遅くなりました! 冒険者の資格も持っているので、お手伝いさせていただきます……!」

そんな二人の姿を見た冒険者たちが、一拍間をおいてから歓声を上げ始めた。

「貧乏店主さんだ! 貧乏店主さんと鎧のヒゲオヤジが来たぞ!! これで勝てるな!!」

「そのあだ名付けたのは誰だ? 怒らないから僕の前に出て来い」

「貧乏店主さん、その姿は一体……あの、胸がつかえなかったんですか……?」

「それはその……サラシを限界まで巻いて……それもキツかったです……うう……いい、言わせないください……」

耳まで顔を真っ赤にさせ、胸を隠すように腕を体に回すウイズに冒険者の鼻が伸び……微妙そうに伸びる。

アイアンマンスーツのせいで色気はだいぶ減っているからだろう。

「というか、ウイズがアイアンマンスーツを装着している理由は何なのだろうか。」

「そんな事を考えていると、トニーは若干速足で会議をしていた俺達の輪へと入り、受付のお姉さんに急かすようにして尋ね始めた。」

「デストロイヤーがここに来るまでの時間は？」

「えっと……まだ余裕があります……今から作戦を立てて、準備するくらいには……」

「それじゃあ、街へと続く穀倉地帯、治水施設、そのほかの村や設備の元までたどり着く時間は？」

「それは……あまり余裕はないと思われれます……ですが、そちらの避難は完了してありますが……」

その言葉に、ダクネスが少し悔しそうな顔をした。

ダクネスはこの街の為に尽力を尽くす貴族としての面もある。

俺達は街の前で迎え撃つ方針で作戦進めようとした。

だから、結果としてはやむを得ないとして見捨てられて蹂躪されることになる村や様々な施設に対して胸を痛めているのかもしれない。

そんな、俺の予測に同調するようにしてトニーが。

「……つまり、街まで続く道は全部破壊されるって事で良いんだな？」

「は、はい……そうなってしまいます……で、ですが……それはもう仕方のない事で……避難は終わっているんで犠牲者が出るようなことは……」

「避難とは住民に根こそぎ生活を捨てさせることだ。ちよつとそこのダクネスを借りるぞ」

「そう言つてトニーはダクネスの腕をつかみ、近くの物陰へと少し強引に引っ張っていった。」

「んなつ……お、おい何をするんだトニー!? 私を何処へ連れていくつもりだ!? こういうのはもつと別な時にゆつくりと……」

……あまりの勢いについていけない。



ずっと前から僕が考えていたことがあった。

以前めぐみんが吹き飛ばした外壁の弁償金……。

その時ギルドの受付嬢はこういったのだ、『全額とまではいかないから、せめて一部だけでも』と。

そう、一部だ。僕らはベルディアの懸賞金を全額と、今稼いでる途中の四千万エリスを出す予定だ。

なら、残りの大部分の弁償金を払ったのは一体誰だ？

もう既に壊れた外壁と住居の修理工事は始まっている。つまりは支払いも完了しているということだ。

アルダープは論外。あいつはもとより払う気が無いと言っている。

だとすれば、アクセルの管理者の名のもとに、弁償金を払うような人間はただ一人。

それは……。

「ど、どうしていきなりこんな物陰に連れてくるのだ……一体私にナニをするつもりなのだ？ 黴りたいのか!？」

それは、今この目の前で訳の分からない馬鹿なことをのたまってるこの変態貴族様だ。

「おい、真面目な話をするからよく聞け。壁の修繕費の大半部分を出したのは君だろ？ 正直に言え」

「……！… それ、それは……！…」

この子は嘘が下手だっことは分かっている。

初めて組んだパーティーメンバーで、付き合いもそれなりに長いんだからな。

ダクネスは少しうつむき、やがて観念したかのように僕の顔を見た。

「そ、そうだ……アルダープが支払いを拒否し、そのせいで路頭に迷いかけた民を救うために……屋敷を除くほとんどの保有資産をその弁償金に……充てた……」

思わずため息が出てしまった。

「つたく……君はなんて馬鹿なんだ……」

「では、民を見捨てるべきだったというのか!？」

「そうじゃない、何故君よりはるかに家格が下のアルダープに払うよう命じなかった?」

「わ、わからない……今にして思えば、そうすべきだったのだろうが……なぜか、その選択肢はその時浮かばなかったのだ……そんな簡単な策が……だ」

やはりあいつは何か特別な力を持っているとしか思えない。

それも、とびっきりのパワーだ。魔法についてはあらかた調べたが、人の思考までも捻じ曲げてしまうような魔法は存在しなかった。その正体が気になるところだが、今重要なのはそこじゃない。

「とりあえず、今はその話はいい。ダクネス、君に第二の質問だ。もし、デストロイヤーによって村や農業地帯が壊滅的ダメージを負ったら、その補填の金は誰が支払うんだ? アルダープだろ?」

「その通りだ……だ、だが……あいつは絶対に払わないだろう。だから……借金してでも……」

「借りる相手はアルダープか?」

「……………」

僕の問いに、ダクネスは黙り込んでしまった。

そのつもりらしい。

あまりにも破滅的な背負いこみようだ。

昔の僕よりひどいかもしれない。

だが、今ので点と点がつながった。

「ダクネス、アルダープの狙いはダステイネス家の失脚だ。君に私財を失わせたところで、君から金を巻き上げて借りを作らせ、何もかも奪うつもりだ!」

「で、でも……私はどうすれば……こうすることしか浮かばないのだ……トニー、私はどうしたらいいのだ……?」

僕の目の前にいるダクネスは、いつもの威風堂々とした雰囲気は微塵も残っておらず、ただ迷い続ける困り果てた一人の少女にしか見えなかった。

「僕に任せろ」

要するに、デストロイヤーを街の入り口ではなくアクセルの領土自体の前で止めれば、ダクネスが借金をしなくて済むということだ。

再びダクネスを連れてみんながいるギルドの真ん中へと戻る。

そして、ギルドの職員に遊びに行く先を告げるかのように軽い口調で告げた。

「計画変更。デストロイヤーは街の入り口ではなくアクセル領地に入る前に破壊する」

「は、はい!?!」

先程まで避難どうこう言っていた受付嬢が驚きに目を剥いて声をあげた。

そんな彼女のリアクション芸人張りの反応は無視し、めぐみんとカズマ、アクアにダクネス、そしてMk. 43に身を包んだウイズを連れてまっすぐ出口へと歩き始めた。

僕らの後ろから受付嬢がかなり焦った形相で追ってくる。

他のみんなも不思議そうに僕らを見ていた。

「ちよちよ、ちよつと待つてくださいい！ アクセル領地の入り口!?!なぜそこで!?! どうするつもりなんですか!?!」

「詳しい説明は省くが、今デストロイヤーに村や穀倉地帯を破壊されると面倒なことになるから、そこに到達される前に僕らで乗り込んで内側から止める」

「そんなことができるんですか!?! ちゃんと計算された作戦なんですか!?!」

「ああ、今計算した。大丈夫さ」

「今!?!」

受付嬢が焦るのも無理はない。

いきなり現れていきなり僕らだけで戦うと言ってギルドを飛び出していけば、そりゃ焦りもするだろう。

「落ち着け。とにかく僕に任せろ。君は回れ右してギルドに戻って、待っていてくれ」

「し、しかし……」

今迄黙っていたパーティーメンバーたちも、流石にどうということだ

と視線を向けてきた。

そんなみんなを代表してか、めぐみんが僕の背中を拳で軽くノックして。

「落ち着くのはトニーの方ですよ。一体なぜ避難が済んでいる区域も守ると……ああ、なるほどそういうことですか……」

ここで説明したら、このギルドにいる事情を知らない冒険者たちにも聞こえてしまおうだろう。

なので、現状についての説明が載っているメッセージ文をスーツからメールの形で送信した。

めぐみんも眼帯型デバイスで受信し、おそらく眼帯裏に映ったであろうメール文を読んで納得してくれただろう。

「お、おい俺にも説明しろよトニー。ウイズがスーツ着てる理由も含めてさ」

「時間がないからそれは移動しながらだ。ところでカズマ、今から空飛んでデストロイヤーに接近する。バリスタの集中砲火を受けながら乗り込まなきゃならない訳だが……仮に僕とウイズで君らを抱えて飛んだとしても、負荷と重量の都合上避けられないだろう。なんか考えはないか？」

「トニーが今考えている作戦の流れもまだ理解していないし、今回の作戦指揮はお前にまかせるよ、天才さん」

「それじゃ、お言葉に甘えて。仕切りたがり屋トニーの作戦タイムだ」
冗談めかしながら、近づくまでの作戦を頭で考える。

近付いたあとの事は考えてあるのだ。
デストロイヤーの厄介なところは乗り込むことじゃない、乗り込んだ後にある。

全員を連れて乗り込めそうなデストロイヤーの背中部分には相当数のゴーレムがおり、着陸前と着陸時にそいつらが迎え撃ってくるのが厄介なのだ。時間稼ぎされたら被害が出てしまう。

だが、それはめぐみんの爆裂魔法で解決できる。一発で背中にいるゴーレムを粉碎してくれるはずだ。

しかし、そのためには結界を破る必要がある。

そこでウイズの登場だ。彼女の役目は結界を破る事。

ライト・オブ・セイバーという魔法で、過去に魔王城の結界を切り裂いて中に侵入した者がいるという話を以前僕は紅魔の里で聞いた。なら、強力な力を持ったアークウイザードにしてリッチーのウイズなら、それと同じようなことがデストロイヤーの結界に出来るのではないかと思ったというわけだ。

この話をウイズにしたら、おそらく可能だと答えてくれたので連れてきた。

何故か冷や汗かいて苦笑していたのが気になったが。

ウイズには僕のスーツを一時貸し、デストロイヤーまで接近してから結界に穴を開けてもらう。

そして、その空いた穴にめぐみんが爆裂魔法をぶち込んでデストロイヤーの背中中のゴーレムをせん滅してもらおうという寸法だ。

自分が立てた作戦を頭の中で振り返りながら、近づくまでの手段を探す。

バリスタを撃ち落としながら目指すにしたって、めぐみんらを抱えているのは両手がふさがってそれもできない。

だから、必要なのはバリスタの矢から逃れる箱状の遮蔽物のようなものだ。

その箱の中にパーティーメンバーを入れ、それを僕が担いで飛ばせばバリスタの矢を撃ち落とす必要もない。

このスーツなら、矢がいくら当たっても平気だからな。

だが……バリスタの矢を何本も防げるそんな都合のいい物は……。

と、ギルドの外まで出てから周囲を見回していると、ギルドの建物の屋上にあったあるものが目に留まった。

あれなら……。

僕は、僕の後ろをついてきて同じくギルドの外へと出てきた皆に向き直り、ニヤリと笑って。

「さて諸君、全てが丸く収まるハッピーエンドと行こうじゃないか。

あ、受付嬢君。あれ、借りてくぞ」

「あの、あれとは一体なんの」

僕は答えを聞く前にギルドの屋上へと飛び、そこに設置されていた、街全体へと危険を知らせる鐘の音を響かせる、巨大な警鐘を……。

「Excuse
失礼」

「何してんですかあああああ!?!」

——力いっぱいもぎ取った!!

第32話 FANTASTIC AVENGERS

みんなハッピーエンドが好きだ。
だろ？

だが……いつもそうはいかない。
それでも、もし自分がそれを変えられるなら………、
誰だって力を尽くすはずだ。

『トニー！ お前は史上最低最悪のマッドサイエンティストだ!!』
例え、こんないわれのないことを叫ばれたとしても。

僕らは今、超高速でデストロイヤーの元へと向かっていた。

『生命の危険を感じざるを得ない安全性の無さと、ギチギチに詰められた圧迫感……し、新感覚だ……!!』

『うおおおお!! こ、ここにいたら死にます!! 出してください！
ここから出してください!』

『いやー！ 助けて！ お願いここから出してー!! カズマさーん
!!』

『声が反響するから叫ぶな!!』

僕とウイズ以外は、鐘の中に入れられた状態で。

そう、アクセルの街の中央にあった巨大な鐘をもぎ取り、それを逆さにしてみんなを底に敷き詰め、僕が下から無理やり担いで飛んでいく。

ちなみに乗り心地はカエルの胃袋の方がまだマシだとかなりの評判だ。

「みんな楽しんでるようで何よりだ」

『怨嗟と苦しみの声しか聞こえてきませんよ!?!』

頭部を晒しながら高速で飛んでるにもかかわらず、目を細めることも息苦しそうにすることも無くこうして平然と僕の横を飛んでインカム越しにツッコミを入れてくるウイズ。

本来なら目は開けられず、呼吸もままならないはずなのだが。

「君この向かい風の中、どうして普通にしていられるんだ？」

『風の防壁を張る魔法を頭部に纏っています。ふふ、こう見えて結構快適なんですよ?』

ウィズにMk. 43を装着させる際、髪の毛が長すぎてどう頑張っても巻き込みそうだったので仕方なく頭部だけは装着させなかったのだが……そこは流石魔法の世界と言ったところか。

女性として譲れない部分もあったのかもしれない。

「聞いておきたいんだが、スーパーヒーローになってみた感想は?」

『あ、あはは……正直少し窮屈ですが……でも、空を飛べるってのは素晴らしいですね! 感動します!』

「良い感想だ。またそのうち機会があったら着せてやるよ」

窮屈なのは君の胸が大きすぎるからだろうに。

ペツパーが見たら羨まし……いや、これ以上考えるのはやめておこう。

この世は大きさが全てじゃない。

そんな僕の邪推を吹き飛ばすかのような大声が突然僕の右耳に飛び込み、そのまま左へと突き抜けた。

『あああああーっ!! そうですよトニー!!』

めぐみんのシャウトがしばらく頭の中でこだまする。

「おい……耳が吹っ飛ばかと思っただぞ」

『いいから聞いてください! あれだけ私にはスーツは着せないって言ってたのに、どうしてちゃっかりウィズに着せてるんですか!?ズルイです!! ズルイですよ!! 私にも着せてください!!』

なおも響くめぐみんの魅惑の爆裂ボイス。

カズマたちも耳がやられたようだ。罵声が聞こえて来る。

『うっせーぞこのロリっ子!! 大声出すと鐘の中で響くって言うてんだろが!!』

『ねえ!! カズマもうるさいんですけど!! インカムあるんだから普通に喋りなさいよ!!』

『ああ……頭がグワングワンする……悪くない……』

めぐみんの叫びをカズマが叫んで注意し、そんなカズマをアクアが叫んで注意する。

無間地獄と化した鐘の中、駄々っ子めぐみんのひがむ声が絶え間なく聞こえて来るが……、

僕はそんなめぐみんに対し、心のそこから慰めるような声色で返す。

「めぐみん、悪いがスーツは大人用のサイズなんだ」

『……………』

『『あっ』』

めぐみんの声がピタリと止み、それも相まって察した三人の声が極めてクリアに聞こえてきた。

向かい風によって震える鐘の音がインカムに入り、独特な音がしばらく流れた。

『め、めぐみん……家に帰ったら牛乳パックでトニーのスーツを再現してあげるわ。だから……ねっ？ 元氣出して？』

『……………約束ですよ』

僕のスーツを牛乳パックなんかで再現するというのが引つかかるが、めぐみんはこの作戦の要なのでやる気を出してもらえてよかった。

だが、とりあえず今から数百年にわたって人類を苦しめたという賞金首に挑むとは思えないアホな空気を何とかしてほしい。

——そんな中、緊張感をにじませたウイズの声が響いた。

『皆さん見てください！ デストロイヤーが見えてきましたよ！』

いよいよ目視で確認できる位置まで近づいたことにより、さっきまでの空気も引き締まる。

『いや見えねーよ、鐘の中なんだから。一面真っ黒だわ』

『す、すみません……！』

……………なんてこともなく。

まあ、こういう方がこいつらしいと割り切って、僕も深く考えないことにした。

たまには論理的思考抜きで戦った方が強い。

バナナがハルクになるのはそう言う意味合いもあるのかもしれない。

「いいかみんな。今からデストロイヤーに突撃するぞ、シートベルト閉めたか？」

僕も合わせてふざけたことを言おうと思っただが、どうやら逆効果でしかなかったようだ。

『ジヨークも大概にしろよこの野郎！ 何がシートベルトだふざけやがって!! ひき肉になるわ!!』

『女神の命を何だと思ってるのよラボ籠りのヒゲニート！ しまいはバチあてるわよ!』

『こんな時に馬鹿な事いわないくださいよ！ あつ、ちよつ……加速してます！ 本当に加速させましたよこの人!!』

ダクネスみたいに誹謗中傷を黙って受ける趣味はない。

せっかく合わせてふざけたこと言ってみたらこの仕打ち。

「トロトロ飛んでたらかえって矢の餌食だ。全員降下の準備しておけよ」

デストロイヤーの元へと緩やかに加速させながら接近する。

その背の真上をとるようにして、高度を高く上げながら。

胸部と背部、脚部のスラスターが最大まで展開し、噴出する推進リパルサーが僕の背後に光の軌跡を描いてゆく。

デストロイヤーの背から矢が飛んでは来るものの、僕はもちろん、金属製の鐘が矢を弾いて中にいる四人を守る。

作戦通りだ。

ただ一つ誤算だったのは……………。

「二二ああああああ！ 耳がああああああ!!」「二二」

鐘が矢を弾く度に盛大に響き、中の四人の悲痛な叫びが僕の耳に入ってくるこどくらいだ。

これ以上うるさくされると聴覚に異常をきたしそうだったので、少し真面目な話をして静かにしてもらおうとしよう。

全員が知っておくべき話でもある。

僕は矢が届かない高度まで達してから真面目な口調で話し始めた。
「みんな聞いてくれ、アルダープの事だ。僕は奴の本当の狙いを突き止めた」

『えっ……なにそれ？ あいつは支払いを放棄して、それであとはダクネスが正規の手段であいつを倒すだけって話じゃなかったのか？』
「違う。チェックをかけられているのはダクネスの方だ。君らが借金を背負わされた時の話を覚えているか？ 壁の弁償代、一部だけで良いから出してってくれて言われただろ？」

『そ、そういえば……』

『トニー……！』

ダクネスがそれ以上は言うなと制止の声をかけてくるが知ったこつちやない。

元はといえば相談するそぶりすら見せなかった君が悪いんだぞ。

「悪いが言わせてもらおうからな。……さて、あの時の壁の弁償代だが……払ったのはなんとダクネスだ」

『……は？』

「ダスティネス家は弁償金を払うため、屋敷以外の保有資産をほとんど投げ打った。おかげでダクネスは今や貧乏貴族、エリス教会が配給するパンが生命線になってしまった。今夜の祝勝会のお代、ダクネスの分はみんなでおごってやろうじゃないか」

『わかったわ！ まったくもう、ダクネスったらまったくもう。無茶しすぎちゃ駄目よ？ そういうのはなんか発明品やらなんやらで色々便利なスーパーヒーローとかに任せておけばいいの！』

そう言つて『でしょ？』と肩をたたくかのようなノリで鐘の底をゴンゴンノックするアクア。

僕のことを困ったら何とかしてくれる便利屋か何かと勘違いしているらしい。

『おいトニー！ 変なことを付け足すな！ 私の家はそこまで貧しくなつてなどいない!!』

『……お前何勝手なことしてやがんだ』

『そうですよ……一言言ってくれば、領主の家まで行って爆裂魔法

で脅してきましたのに』

『うう……』

約一名、ことをよりややこしくしそうなアホがいるな。
それはともかく。

僕は以前、死ぬ寸前まで自分の問題を打ち明けず大勢に迷惑をかけたことがあった。

良かれと思って相談もせずに作ったウルترونが世界を滅ぼしかけたこともあった。

自分が犯したのと同じような過ちを仲間……それも、二十歳にもなっていないこんな少女にさせたくはない。

「本題はここからだ。もしこのままデストロイヤーの進行を許せば、街へと続くあらゆる民家や施設が破壊され、大勢の人間が路頭に迷う」

インカムからは、向かい風に撫でられた振動で微かに鳴る鐘の音だけが響く。

「路頭に迷った市民たちはきつと領主の元に向かうだろう。その責務として、失った財産を補償してもらうために。でも、そうはいかない。なぜならその相手は、高い服を着飾って二流ゴルフ場で威張り散らしているような奴だからだ」

『えつと……？』

「……ケチで見栄っ張りで、助けを求める人の手を嗤って払えるような奴って事だ」

『ああ、なるほど！ とんでもない野郎ね！ 出会ったらゴツドブローお見舞いしてやりたいわ！』

『……………』

皮肉を理解できなかったアクア以外、すっかり静かになったカズマ達。

隣ではいつも柔らかな笑みを浮かべているウィズが、どこか憤りを感じているような顔をしていた。

人畜無害で温和な彼女にこんな顔させるとは……君は罪な男だな、アルダープ。

僕は話を続ける。

「となれば、市民が泣きつく先はただ一つ。以前私財をなげうつてまで壁の弁償金を出してくれた慈悲深いダスティネス家だ。ああ、彼女は払うつもりだと堂々と僕に言ったさ。もう金がないダクネスはどこからか借りて来るしかない。借りる先は……？ おっと、ケチり続けたおかげで豊かなアルダープがいたじゃないか」

『……？ そのアルダープが、どうしてダクネスにだけはお金を貸すの？ ケチなんでしょ？』

『それは貸す相手によつて様々です。よく考えてください、アクア。お金を貸すというのは、文字通り貸しができるということです。その貸しというのは、何も金銭だけではありません。お金を貸してもらったという恩そのものが重要なのです』

『まあ、お前は俺からしよつちゆう金借りるクセに、その恩を三日……いや、三時間で忘れるけどな』

『ちよつと！ 普段から不甲斐ないあんたの事を助けてあげてるんだから、そんなみみつきい事で……』

「なあ、話続けていいか？ いいよな？ ……どうも。で、だ。もしダクネスに金がなくなり、アルダープに貸しができたらどうなる？ 手柄はダスティネス家の方が上だが、貸しができればそこにつけ入る隙ができる。ダスティネス家失脚の足掛かりにされるんだ。そう上手く行くかって？ 相手はやりたい放題やつといて尻尾をださないやり手、対してこっちは？」

十分な高度まで到達したため、いったん上昇をやめて一定の速度でデストロイヤーの背を追う。

「ああそう。一人じゃ何もできないのに、一人で何でも抱えようとする、分厚い政治の本を見たら読み物じゃなくて鈍器だと思ふような霊長目亜人科ゴ布林属のララティーナちゃんだ！」

『誰がゴ布林だ！ いい加減にしろ貴様！ ぶつ殺してやるっ!!』

『トニーさん……その嫌味はあんまりですよ……』

『さすがの俺もそこまでの嫌味は言わねえわ……』

ダクネスがブチ切れ、鐘の底をドカドカ力殴る。

ウイズもドン引きの表情で僕を見ていた。

後ろの方ではめぐみんやアクアの非難の声も聞こえる。

何気にカズマまで引いてるのに少しショックを覚えるが……。

そんな彼らは無視して、僕は下を走るデストロイヤーと、その進行方向の先を交互に見やる。

超高速で駆けつけたおかげで、デストロイヤーが農村に突っ込むまではまだ余裕がある。

「とまあ、今まで僕らに黙ってコソコソ破滅街道まっしぐらしてたラティーナをおちよくるのはこれくらいにして……」

僕は鐘の中の全員を降ろす準備をしながら。

「要するに、デストロイヤーがこの先で被害を出したらダクネスはチェックメイト。貸しを元手に政略結婚なんて迫られてみる、国の懐刀とまで言われたダステイネス家の権力を、アルダープが丸々手に入れてしまう。あの色欲魔の事だ、ダクネスが日ごろ妄想してるようなのよりもっとひどい事されるかもな？　まあ、それはそれで彼女にとってはハッピーエンドかもしれないが……少なくとも、僕らは受け入れる事なんてできないはずだ」

『トニー……』

「やるべき責務を放棄して、私欲の為に仲間ダクネスに不当な金を押し付けてきたあのクソ領主に、これ以上好きにさせていいと思うか？　そろそろ報復の一つでもしてやりたくないか？」

そんな僕の炊きつけに、カズマ達の反応はというと……。

『YESしか返せねえような発破かけてきやがって！　ったく、しようがねえなああ!!　貴族に喧嘩売るなんて御免だったけど、街救って借金背負わせてきたあのクソ領主にはムカついてたんだ!!　そりゃ超やり返してえよ!』

『当然！　紅魔族が悪徳貴族程度にビビったりするワケが無いでしょう!!　報復一択！　ぶちのめしましょう!!』

『私も不満だらけよ!!　貴族相手なんてちよっぴり怖いけど、みんなでやれば怖くないわ!!』

『み、みんな……』

カズマ達のそんな雄たけびに、ダクネスが感極まったような声を出す。

それを聞いた僕はニヒルに笑い、

「では諸君——」

皆が入っている鐘をしつかりとつかみ、

「——^{アベンジ}報復するぞ」

真つ逆さまにひっくり返した！

「あつ……？ あ、ああああああ……！」

「いやああああああああ……！」

「ぎいやああああああ……！」

「ぬおおああああああ……！」

カズマ、アクア、めぐみん、ダクネス。

全員が重力に従って下へと落ちて行く。

横でポカンとしてるウイズの方を向いて僕は一言。

「見ろ。みんな落ちて行く」

「知ってますよ!? なにしてるんですか!？」

「ちよつとしたユーモアさ。ほら、手筈通りに頼むぞ」

担いでいた鐘は民家のない森の中めがけて軽く投げ、リパルサーではるか彼方へと吹き飛ばした。

リパルサーが直撃した鐘は壮大に響き、それはまるで戦いを告げるゴングのようで。

僕は頭を下にして推進リパルサーを照射し、先に下へ向かったカズマ達を追いかけた。

▽

少し手を伸ばせば、雲を掴めそうな。

そんな、高さの空中で。

「ああああああああ！ あのクソマッドサイエンティストめがあああああーっ!!」

「カ、カズマさーん!! 死ぬ死ぬ！ 死んじゃう!! 私女神なのに死んじゃううう!!」

「死んだら枕元で一生爆裂魔法唱えてやりますよトニー!! ああああーっ!!」

「か、帰ったらまずあの男にやり返してやろう!! で、でもこのゴミのように宙を舞うのも……」

俺たちは自由落下でみんなまとめて命の危機だ。

ある一定の高度まで達したら全員で降下するとは聞いていたが、まさかゴミ捨てみたいにいきなり落とされるだなんて思ってもいなかった！

そんな俺たちの横に、独特のエンジン音を響かせてながら並ぶ影が。

その影は、背を下に向け手は後頭部に回して腕枕にし、足まで組んでくつろぐような姿勢をとっていた。

「フライデー、記録に取つといてくれ。この星にかかる重力は……地球と同じだ」

この野郎！

「てめーまじで覚えとけよ!!」

「せっかくだから遊覧飛行を楽しめ。良いもの見れるぞ」

そう言いながら右腕で俺とアクアを。左腕でめぐみんとダクネスを抱えて減速する。

目に涙を浮かべたためぐみんとアクアの抗議の喚きが、トニーを左右から挟んだ。

「普通に死ぬかと思いましたよ！ 降ろすなら言ってください！」
「言つたらろ」

「同時に落としちゃ言わないのと同じようなもんよ！ 謝って！ 女

神に死ぬ思いさせたこと謝っ……」

アクアの声を遮るようにして、一条の光が団子状に固まって低速落下する俺らの横を風切り音と共に過ぎ去っていく。

最近仲良くなったダストのパーティ仲間である、キースから教えてもらったアーチャースキル《千里眼》で確認する。

あれは……

「ウイズ？」

「結界の穴あけ……始まったか」

インカム越しに聞こえて来る、ウイズの魔法の詠唱。

その魔法は、一音一音を丁寧に。そして、歌い上げるようにして唱えられてゆく。

『フルパワー……！ 行きますよ……！』

何かの魔法を完全詠唱したのだろう。

『ライト・オブ……』

ウイズの手首から先の部分のスーツが展開し、そこから現れたウイズの素手が白く発光する。

その光は、彼女よりはるか上空にいる俺が視認出来るほどの強い光を放っており。

『……セイバー』 ツツツ!!』

瞬間。

長さ数十メートルは優に超えそうな長大な光の剣がウイズの手の先に顕現し、日輪のような美しく輝く円を描いた。

結界と魔法が拮抗する音もなく、デストロイヤーの結界に円形の穴が開くのがしつかりと見えた。

「成功だ！ よくやったウイズ！ 君は一旦退避してろ！」

『はいー』

デストロイヤーの背を守るゴーレムたちがバリスタで一斉にウイズを狙い、矢の弾幕が飛んでいくが、スーツの速度には追いつけるはずもなく。

ただむなしくウイズが飛んだ後の軌跡をなぞり、地面に向かって落ちていくだけだった。

「めぐみん!! 爆裂魔法をあのかに撃ち込め!!」

「任せてくださいー!」

トニーに抱えられているめぐみんが静かに目を閉じ、聞き覚えのある魔法の詠唱を始めた。

ちよくちよく付き合わされるめぐみんの日課。そこでいつも聞かされる、威力だけはバカみたいに高い究極の攻撃魔法の詠唱。

災禍を告げるカウントダウン。

「暴虐の限りを尽くしてきた起動要塞に終焰を——」

めぐみんの杖の先に、超高エネルギーを宿した光の珠が輝き。

「——我らが報復に祝福を!! 『エクスプロージョン』 ツツツ!!」

その珠は、まるで静かな泉に落ちる雫みたいに。

デストロイヤーの背へと、破滅を乗せて向かっていった。

真の脅威がウイズではないと気が付いたゴーレムたちが、バリスタの照準をこつちに向けるがもう遅い。

「来るぞー!」

トニーがそう叫んだその数瞬後。

デストロイヤーの背が一瞬輝いたかと思えば、轟音と共に業火の大輪が咲いた。

その威力たるや、背にいるゴーレムを消し飛ばすだけでは飽き足らず、その名の元となった巨体を大きくグラつかせる。

そして、ウイズが開けた結界の穴から、逃げ場を失った爆炎が噴火のごとき勢いで噴き出し、俺らのすぐ横をかすめていった!

「あ、あぶねー!」

爆裂魔法の直撃でデストロイヤーの姿勢がズレていなかったら軽く炙られていたかもしれない。

「今からデストロイヤーに乗り込む。全員、着地はかつこよく決めろよ」

「え、いや、普通に下ろし……!」

トニーは聞く耳を持たず、空いた結界の穴からデストロイヤーの背へと向かう。

………せつかくだし、トニーがいつもやってるあの着地をやってみよう。

なんかカツコイイポーズなので、地味にやってみたかった。

地面から数メートル離れたところでトニーから離れ、未だ爆煙が立ち込めるデストロイヤーの背に、膝と拳をつきたてて着地しよう……。

「まお、あ、あつー！ー！」

膝からメキツと音がなり、変な悲鳴を上げて膝を抱えながら地面に転がった。

俺の横では同じくアクアも地面に転がって震えていた。

「おい……なんだよ……これ……ひ、膝が……」

「グスツ……痛い、超痛いわ……『ヒール』……」

「カズマさん!!? アクア様!!? 大丈夫ですか!!?」

膝の皿が割れたかもしれない。

なんでアイツはこんな非効率な着陸の仕方してんの？

馬鹿なの？

まともに着地できたのはトニーとダクネス、スーツを装着したウイズだけだ。

と、そんな様子を見たダクネスが心配そうに声をかけてくるさらにその背中から、背負われたためぐみんがやれやれと言った表情で声をかけてきた。

「見た目はカツコイイですが、その着地方法はやめた方がいいですよ？ 膝に悪いです」

「ミスッて怪我するなんてマヌケだな」

「ちげーよ。これはあれだ、大地を感じているんだよ」

「へえ。余計マヌケだけどな」

この野郎。

よろよろと立ち上がると、おそらくデストロイヤー内部へ続くのであろう扉の奥から、ドスドスと威圧的で重量感のある足音が響いてきた。

千里眼スキルで確認すると、そこにはこちらへ押し寄せるイカつい

ゴーレムの群れが。

トニーもそれは確認していたようだ。

こちらに向かって来るゴーレムに向かって拳を向けて。

「それじゃ、僕らの街と腹筋レディを救うとしよう」

小型のミサイルを固まってるゴーレムのだ真ん中に発射し、木っ端微塵に爆散させた。

「ちょうどいい機会だ、アレを試してみよう。」

俺はニヤニヤとトニーに挑発的な笑みを浮かべながら。

「おつ、やるなトニー。どうだ？ どつちが倒せたか競走しようぜ。負けたら奢りな」

不敵に笑う俺の顔を見て、トニーがキョトンと……いや、マスクで見えないが。

そんな顔をしてこつちを見たような気がした。

「あー……まあ、構わないさ。ちなみに僕はスコッチが好きだ。おつまみは生ハムでチーズを巻いたやつが良い」

「なに俺が負ける前提で話してんだ！」

「それおいしそうね！ 私もそれがいいわ!!」

「お前に至っては関係ねーだろーが!! 馬鹿にしやがって！ 見てろよ!! 『ステイール』ッ!!」

ゴーレムに向かって放ったその魔法によって、俺の突き出したその手にはしっかりとゴーレムの頭部が載っていた。

頭部を獲られたゴーレムは活動を停止し、全く動かなくなる。

俺はフツとニヒルな笑みを浮かべたドヤ顔をトニーに向け。

……そして、そのまま重力にしたがつてめちやくちや重たいゴーレムの頭部が俺の腕ごと地面に向かい、腕をサンドイッチにした。

「あああああーっ!! 俺の腕がああああ!!」

「ねえ、バカなの？ あんたつてば、賢いフリしたバカなの？」

ニヒルな笑みを浮かべた俺のドヤ顔は一瞬にして泣き顔に変わり、膝に続いて腕をやられた俺は再び地面を転がる。

そんな俺を見たトニーが、盛大にため息をついて。

「しょうがないな、君にハンデをやるよ。ウイズ、手がスーツにおおわ

れてたら魔法が撃てないだろ？ ほら、一旦返してもらおうぞ」

トニーがそう言うと、ウイズが装着していたアイアンマンスーツの腕部が俺の腕へと飛来し、ガシヤガシヤと機械的な音を立てて俺の右腕を包んだ。

「おおおお！ マジかよ!! やった!!! よつしや、ここからずっと俺のターン!! 『ステイール』 ツツ!!」

ロマンを腕に覆った俺はテンションが上がり、目の前に立ち塞がるゴーレムに特効魔法を仕掛け……、

「へっ……きやあ!?!」

ウイズの胸に光るアークリアクターを引っこ抜いた。

スーツの動力源が突然無くなってただの鎧と化し、その重みでウイズが前にコケる。

……。

「おい」

「ちよつ……ちよつと待て！ おかしいだろ！ なんでだ……？ 手はゴーレムに向けたはず……」

「どうやら、魔法を放った手を覆っているスーツの腕部がステイールの対象になったようですね」

いや待ておかしい。それじゃ盗賊職は誰も箆手を持ってないだろうし、そもそも盗ったのは胸のリアクターだぞ、腕のパーツじゃない。

そんな俺の疑問に答えるように、めぐみんが続けて話をする。

「そして、遠隔でつながるスーツの大部分を装着しているウイズがその腕部の所有者として認識され、今の結果となったようです。これは興味深いですね」

「その……ぐめん、トニー」

「八十億が一瞬でガラクタになっただけさ、気にするな」

「えっ……あれ八十億エリスもすんの……?」

「八十億ドルだ」

「……………」

頭が真っ白になって口がポカンと開く。

「まあその……ウイズがスーツを脱いだらきちんとその腕部があなたの装備として認識されるはずです。なので、その……後は頑張ってください」

「頑張れボウズ。壊したぶんは働けよ?」

「ねえ、カズマさん。私たち今借金してるのよ? あんた何借金増やしてんの?」

……………。

俺はどこか困惑したような様子でこちらの出をうかがっている
ゴーレムに再び掌を向けて叫ぶ。

「チクショー! もうヤケだ! お前ら全員ぶっ壊してやるから覚悟しやがれ!! ていうかトニー! なんでそのスーツそんなバカ高いんだよ!! この先どんな賞金首倒したって赤字確定じゃねーか、バカバーカ!!! 『ステイール』! 『ステイール』!! 『ステイール』!!!」
「平和に値段は付けられない」

補助電源がついているのか、背面が展開して何とかスーツを脱いだ
ウイズをしっかりと確認し、ゴーレム目掛けてステイールを乱れ打つ。

魂の叫びも冷静に返された俺は幸運値に物言わせ、次々とゴーレムの動力部やら頭部やらの主要パーツをちぎっては投げていく。

俺TUEETEENA無双をしているというのに、なんだか全然晴れやかな気持ちにならねえ。

▽

カズマが雄たけびを上げてゴーレムを片っ端から無力化していく。

これは僕も頑張らないと負けるかもしれない。

「さっさと中心部に向かってコイツを止めるぞ。ウイズ、まだ動けるか?」

「ええ、大丈夫ですが……結界に穴を開けるのにだいぶ魔力を使ってしまったので、上級魔法の連発はできません……」

「十分だ」

あれだけの大魔法を使っておきながら、歩けるどころか戦闘継続まで可能とは、リッチーというのは恐ろしい存在だと言わざるを得ない。

これがリッチーのデフォなのだとしたら、敵対的なリッチーと戦う時は苦勞しそうだ。

建物の奥へ向かうようにして前へと進んでいると、後ろから不安げなダクネスの声が聞こえてきた。

「わ、私はどうすれば……」

「動けないめぐみんを守るのは君しかない。頑張ってくれ」

「あ、ああ！」

もしかすると最近出番がないことを気にしているのかもしれない。なにか彼女の戦闘力を底上げしてやる装備でも作ってやるべきだろうな。

「私は怪我した人をなんとなく治すので、戦闘面は全部あなたたちに任せるわね。頑張って！」

君はもう少しやる気を出せ。

——先へと突撃して行ったカズマを追いかけると。

「……カズマ？　おい、無事か!？」

そこにはひと際大きな扉の前で力尽きたようにして倒れるカズマの姿があった。

ゴーレムの残骸があちこちにあるので、相打ちにでもなったのかもしれない。

とりあえず回復だ。

僕がアクアの方を見ると、やれやれと言った感じで肩をすくめながらカズマの方へと向かう。

そして、回復させようとペタペタ触り始めたその瞬間。

「ドレインタッチ」

「あああああああああああーっ!!」

魔力を吸われたアクアが後ろにもんどりうつ。

立ち上がったカズマは、サウナ上がりにコーラでも飲んだかのよう

な、生き返ったといった顔で体の埃をパンパンと払って。

「ふう。いやあ、ゴーレム相手に無双してたのはいいんだけど、途中で魔力切らしちゃってさ。ちょうどいいところにアクアが来てよかったわ」

「このアンデッドニート!! この女神である私の神聖な魔力奪うだなんて、不届き物としてぶっちめてやるわ!!」

「こらやめろ、引っ張るな。幸いここはゴーレムしかいないみたいだし、俺の力が必要になるだろ? だからこれでいいんだよ」

「いいわけないでしょ!! 謝って! 女神の神聖な力奪ってごめんなさいって謝って!!」

このままコント見てるのも悪くはなさそうだが、あいにく急いでいるので喧嘩してる二人の横を通って扉に手をかける。

「……鍵がかかっているな」

どうやら魔術的な何かでロックされているようだ。ドアを押すと、それを拒むかのようにドアに魔法陣が浮かび上がる。

ドアの右には、数字が並んだ暗証番号を入れるタッチパネルがあった。

そんな開かないドアをグツと押した僕を、めぐみんとカズマが何か期待を込めたような目で見て来る。

一体なんだろうか。

「なあ、スパイ映画みたいにこう……扉のシステムをハッキングして開けるとかやるのか……?」

「いやいや、きつとパネルの表面をスキャンして、指紋から指が触れた順番をあぶりだすとかそんなんで……」

適当言ってる二人の声は無視して、僕はペタワットレーザーで強引に扉を丸く切り取る。

期待を込めた視線が、いつきに白けたようなそれに代わるのを感じた。

「……ないわー」

「もうちよつとこう……なかったのでしょうか。紅魔族としては、スマートさに欠けると思えますね」

「今回は早さが優先なんだ、隠密作戦じゃないんだぞ。いちいちハツキングして開けるよりも率が高い方を選ぶのが正解だ」

丸く空いたドアをくぐると、そこは今まで通ってきた部屋とは異なる雰囲気の間があった。

部屋丸く取り囲むようにして並ぶ本棚、あらゆる機材が並んだ机……。

そして何より目を引くのは……、

「おい、あれって……」

「人骨だな。どうやらここに生きた人間は残っていないようだ」

中央の椅子に腰かけた、白骨化した人の骨。

一人でポツンとそこに座っているのは、どこか悲哀を感じるが……。

「完全に成仏してるわね、未練もなくスッキリと。アンデッドになる心配はないわ」

「いや……それはないだろ、一人寂しく死んでたようにしか見えな
いぞ……」

「あれ、遺体の近くに何かあるわね……これは……日記かしら」

僕は白骨死体に目をやることは無く、ただ黙って書物を片っ端からスキャンしていく。

「——○月×日。国のお偉いさんが無茶言い出した。こんな……」

アクアが何かを読み上げ始めたが、構ってる暇はない。

このデストロイヤーに僕らだけで乗り込んだのには、街やダクネスの窮地を救う以外にもう一つ大きな理由があった。

『ボス、発見しました』

HUDに強調表示された書類の束をパラパラとめくる。

「——○月×日。設計図の期限が今日までだ。どうしよう、まだ白紙ですとか今更……」

複雑なパーツの種類や、組み立て方が詳しく書かれた説明書……

そう、起動要塞デストロイヤーの設計図だ。

ビンゴ。狙っていたものが完璧な形で手に入った。

にしても、気になるので日記の内容をいちいち声に出して読まない

でほしい。

「――〇月×日。あの設計図が予想外に好評だ。それクモ叩いた汁ですけど……」

後ろでアクアが読み上げる日記の内容がいやでも耳に入ってくる。気にしないようにしながら紙の束を上からスキャンし、そのすべてをデジタル化してスーツの記録媒体へ保管していく。

「これ全部頂いていくぞ」

『了解です、ボス』

数百年も補給無しで動き続ける超技術の設計図は手に入れた。

「――動力源がどうこう言われたが知るか……伝説級の超レア鉱石、コロナタイトでも持って来いと言ってやった……」

……なるほど、コロナタイトという鉱石が動力源なのか。

にしても、なんて責任感のない奴なんだ、片手間に聞いているだけだが軽いイラつきを覚える。

強力な力を持った兵器を作るなら、もっと責任感を持って然るべきだろうに。

……まあいい。あと必要なのは、こいつの動力源と優秀な助手だ。

「めぐみん君、こっちにきたまえ」

めぐみんに手招きすると、ダクネスの背から降りためぐみんはよろよろと杖を支えにしながらこっちへと向かってくる。

「トニー、どうしましたか……って、これは……まさか……!」

「凄いだろ? この紙束一つで世界が変わるぞ」

めぐみんは額に汗を浮かべ、ゴクリと喉を鳴らす。

「そそ、その……確かにすごいですが……これ一体どうするんですか? 下手しなくても持つてるだけで処刑されますよ?」

「だからここで燃やしていく。国じゃなくて、コイツを僕らで管理するんだ。なに、デストロイヤーを作り直そうって訳じゃない。新しいスーツの製造に役立ってるんだ。結界の展開、軽量のボディ、それらを動かす動力源……上手く使えば、何にも負けない最強のスーツが作れるかもしれない。僕一人でもある程度はやれるが……僕より魔術や魔力を用いた道具に造詣が深い君の力が欲しいんだ」

「ふむ……なるほど、重犯罪に片足突っ込むのはちよつと……いえ、かなり怖いのですが……ほかならぬトニーの頼みです。一緒にやりましょう」

「返事が聞けて良かった。それじゃ……」

「……おっと、これ作った責任者、俺でした！」

……。

……………。

僕は無言で振り返り、日記を読み上げていたアクアの方へと歩いていく。

「あの、トニー？ どうしたのですか？」

後ろ背にそう聞きながら追いかけてくるめぐみんを無視して、アクアから日記をむしり取り……。

「ああつー！」

その日記を両面から挟むようにして持ち、両手からリパルサーを発射して木端微塵に消し飛ばした。

「ちよつと！ 何してんのよ!! 確かにロクでもない内容だったけど、亡くなった人の遺品を吹き飛ばすのは聖職者として見過ごせないわ!! バチ当たるわよ!?!」

「むしろこいつが死んでよかったよ！ 生きてたら一発……いや、二発は殴っていたかもしれないからな！」

「……こいつ何でこんな怒ってんの？」

「トニーもあらゆる装備や兵器を製造する科学者ですが、平和を願い、責任を持って製造と提供をしています。無責任にこんな機動兵器を作り、あまつさえ罪悪感も持たずふざけ倒したこの男が許せないのです。確かに死んでよかったですね。カズマもあまり触れないでおきましょう、怒ったトニーにはあまり近付きたくありません」

「説明どうも。それじゃ、さつさと制御室に向かうぞ」

設計図も全部記録し終えた。

もうここに用はない。

誰も近くにいないことを確認してから、書物の山にミサイルを放つて全てを吹き飛ばし、スクランを終えた設計図をHUDに表示し、そ

れに従って動力源のある中枢部へと向かった。

そんな僕の背中から、ダクネスが不思議そうに声をかけて来る。

「……ずいぶん迷いなく進んでいるようだが、道がわかるのか？」

「……科学者なんでね。こういう兵器の内部のどこに動力部があるかは大体見当が付くんだよ」

そう誤魔化しながら、僕はHUDに表示されたタイマーを確認した。

結界に穴が開くことによって衛星で捕捉できるようになったデストロイヤーの位置と速度、最寄りの農村から元に計算されたタイムリミットだ。

指し示された時間は……残り十分を切っている。

僕は目線をずらし、もう一つのタイマーも確認する。

それは、HUDに表示された試作装置のシステム調整の進行具合を示すゲージバーと、その上に表示されている完了までの予測時間。

この試作装置さえ完成すれば、デストロイヤーの進行は確実に抑えられるだろう。

……のだが。

指し示された時間は——残り十五分。

第33話 KONOSUB “A” SSEMBLE

トニーの背を追って進んだ先にあったのは、複雑そうな動力部と、その根元で檻に入れられ、嚴重に保管された赤々と燃え盛る鉱石。

おそらくこれが動力源のコロナタイトだろう。

「フライデー、スキヤンの結果は？」

『制御装置は存在しますが、経年劣化によって機能しておらず、暴走状態に入っています。止めるには動力源を無理やり引きはがすしかないかと……』

「なんていい加減な作りだ……」

スマホのハンズフリーみたいなのに、フライデーの声が俺らにも聞こえるようにして響く。

にしても、山ほどいるゴーレムにメンテナンスでもやらせておけばいいのに。

トニーも言っているが、マジでいい加減だ。

パンジャンドラムの方がまだマシだろこれ。

「それじゃ、動力源を外すぞ」

「おい！ 待て待て待て！ いきなり外そうとするな!! 急停止して機体がコケたらどーすんだ!!」

なんの迷いもなくコロナタイトが設置されている鉄格子に手を突っ込もうとしたトニーを慌てて止める。

こいつ躊躇無いにもほどがある！

そんなトニーはと言うと、やれやれとため息をついて。

「ビクつきすぎだ。ウイズのテレポートがあるだろ」

「あつ………た、たしかに……」

「動力源が奥底に埋まっていたりしたらどうしようかと思っていたが……これなら試作装置を使わなくても何とかかなるかもな」

「それは困りますね……紅魔族としては、ぜひ見たいところです」

「いや気になるのはわかるけど使わないに越したことはないだろ……」

マスク越しで分かりにくいのが、何となくトニーに目線で急かされて

いるように感じたのでとりあえずウイズの方に向いて。

「それじゃウイズ、テレポートの用意頼むわ」

「はい。では、皆さん一か所に固まっててくださいね」

その言葉に従って、トニー以外のみんなが一か所に集まる。

トニーはそれを確認すると、行くぞと一言かけてから鉄格子をねじ曲げて開らき、中からコロナタイトを引っ張り出した。

——バツンツ

「うおっ!？」

ブレーカーが落ちたような音がし、明かりが消えて周囲が真っ暗になる。

強い衝撃が頭をよぎり、思わず目をつぶって構えた。

……のだが。

「……あれ？ 揺れたりしないな」

「変ですね……。おじすか、衛星から見えてどうですか？」

めぐみんが珍妙な名前の人工知能の名を呼ぶと、眼帯からホログラムの3D映像が飛び出した。

こんな薄い眼帯のどこにスピーカーが隠されているのかは不明だが、音声による解説も始まる。

『デストロイヤーは依然として動きを止めていません。ですが、緩やかに速度が低下しています』

「……つまり?」

『脚の構造からして、動力源の消失によって倒れるようにはなっていないようです』

「それを聞いて安心した……」

おもわず安堵のため息が出る。

造りはいい加減だが、そこらへんはしっかりしていたようだ。

『ですが……』

「はあ……でたよ。恒例の『ですが』が。で、なんなんだよ」

「カズマ、おじすかに当たらないでくださいよ」

ぬか喜びしてしまった分、その人工知能の言葉に思わず悪態をつい

てしまった。

そんな俺に、めぐみんが責めるような視線を向けてきた。

『……気にしていませんのでご心配なさらず。デストロイヤーですが、やがては動力源を失ったことよって機体が完全に停止するでしょう。問題は停止するまでの距離です』

「まさか……」

嫌な予感がする。

ダクネスもそう感じたのだろう。

額に汗をにじませ、ゴクリと喉を鳴らす。

『機体が完全に停止する前に、街への接触は避けられません』

「マジか……」

「なるべく安全に止めたいが……居住区にデストロイヤーが侵入するまでどれくらいだ？」

『残り五分とありません』

もうそんなに迫ってるのか……！

と、俺のように焦りを覚えたのか、めぐみんが。

「トニー、カズマ、何か策はありませんか!? もう時間が……!」

トニーはというと、覗き窓のようなところからアクセルの方を少し眺めて。

「……この現状を打破できそうな試作装置があるんだが、今現在も調整中で完成まで間に合いそうにない。デストロイヤーの動きを遅らせて時間を稼げれば……」

こんな奴相手に時間稼ぎしろってか。

なんだその無理ゲーはとぶん投げたくなる。

……いや、待てよ……?」

俺はふと、トニーがベルディアの首を宇宙まで持っていった時のことを思い出す。

宇宙空間まで飛び立てるパワーがあるならば……。

「……その試作装置とやらがあれば、確実にデストロイヤーを止められるんだな？」

一つ案が浮かんだ……が、名案とは言えそうにない。

そんな俺の表情にトニーは気がついたのか。

「何か浮かんだのか？ なんでもいい、言ってみろ」

「その……トニーにすさまじく負担をかけることになるんだけど……」

それを聞いたトニーは、手に持ってたコロナタイトを一旦足元に置き、サッカーボールみたいに踏んで転がしながら飄々と答える。

「我が身を犠牲にスパーヒーローしろって？ まあ、いつもの事だな。お易い御用だ」

「こいつホント危険を顧みないなあ……」

「で、その作戦の内容は？」

「まずデストロイヤーの脚の関節に水ぶっかけてからウイズの凍結魔法で動きを鈍らせる」

「悪くない戦術だ。関節が多い機械はその隙間が弱点だからな。ゴミが詰まるだけでも致命的だ。機械工学に精通してるのか？」

「ゲームやアニメでも、機械の関節を凍らせるのは有効打だろ？」

「……まあ、いいだろう。で、僕の役目は？」

きつと、今の俺はさぞ気まずい顔をしているだろう。

そんな俺は、デストロイヤーの頭の方を指さし。

「……デストロイヤーの真正面から突っ込んで勢いを食い止めて欲しい。……その……で、できる？」

「やってみよう。待機させてあるMk. 46を起動する、パワーが増すはずだ」

即答だった。

いつもの皮肉や嫌味も無しに、清々しいほど。

「カズマ!? さすがにその作戦はどうなんですか!? というか！ トニーもなんで即答するんですか！ 下手すれば地面に落ちて踏み潰されて粉々になりますよ!?!」

「詳細は省くが、似たようなことを前にやったことがある。前は止めるんじゃないくて動かすことが目的だった」

「……発案した俺が言うのもなんだけどさ、嫌なら拒否したっていいんだぞ？ ほらその、生存第一の俺をちよつとくらい見習ったらどう

だ？」

心の奥に湧いた罪悪感から少し早口でまくし立てるが、正直俺も他に手段が浮かばない。

もし、失敗してダクネスが借金ごさえる結果になってしまうのだとしたら、最悪みんな夜逃げしようとかまで考え始めている。

……………のだが。

「そんなに僕を信用出来ないのか？ 君たちは知らないだろうが……これくらい、僕が今までに体験してきた危機の中ではかなり軽いほうだ」

トニーは何も気にしていないかのように、壁をレーザーでくり抜き、家から出勤するかのような足取りで。

「それじゃ行ってくる。ウイズ、ダメだった時の脱出のことも考えて、テレポート出来るだけの魔力は残しとけ」

「ええ、分かりました！」

そう言い残してトニーは開けた穴から飛び出し、宙で複数のパーツをスーツの上から身に纏いながらあつという間に視界から消えてしまった。



僕の身を、スーツの上から更に強固な鎧が包んでいく。

両腕に大型の磁気クランプを装着し、デストロイヤーの顔面に張り付く。

「キャプテン、今回はレバーを押さなくてもいいぞ」

誰も聞いていない軽口を一人で叩き、脚部や背中を覆うロケットブースターから推進リパルサーをフルパワーで放出する。

メリメリと音を立て、接地面の金属がへこんでいく。

……………だが、速度が落ちる気配は全くない。

「FKKNN……………クソ……………質量が違いすぎるー！」

『い、いや！ 気のせいかな、速度が落ちているように感じるぞ!!』

「本当かカズマ！」

『スマン、気のせいだったわ!』

「クソガキめ!!」

僕の気持ちを返せ。

もう街が目と鼻の先だ、これ以上進ませる訳にはいかない。

「フライデー! Mk. 46の温存は考えるな! 各パーツをオーバードロードさせて限界を超えた出力をだせ! パーツが消耗したそばからパージして交換しろ!」

『了解です、ボス!』

全身のブースターからバーナーが強く吹き荒れ、デストロイヤーの額にヒビが入り、全身のパーツから奇妙な音がなり始める。

『速度が落ちてる……おい! 今度は見間違いない! マジで落ちてるぞ!』

『流石はトニーだ……この巨体を正面から……』

どうやら効果アリのようだが、スーツの消耗が思ったより激しい。

あつという間に外付けのMk. 46のパーツが負荷で歪み始めた。

『お、おいトニー!! なんか変な音が聞こえてくるぞ! 大丈夫なのか!』

「ただのスーツが軋む音だ、気にするな」

『それって気にしなくちゃいけない音じゃないんですか!? トニー、大丈夫ですよね!』

めぐみんの心配そうな声が聞こえてくるが、スーツが破損するなんていつもの事なのでいちいち気にしてなんていられない。

「こっちは気にするな。それよりもそっちはどうだ?」

『今やってる!』

デストロイヤーの脚の方に目を向けると、その根元の方で水しぶきと氷の霧による反射光が見えた。

頑張っているようだ。

惜しむらくは、成果が出ていないところくらいだな。

どんな様子か、こっそりめぐみんの眼帯にリンクして様子を覗き見してみる。

『ねえ! これ意味ない気がするの!』

『ち、ちくしょう！ 凶体がデカすぎて凍らせたそばから砕かれちゃう！ もつと一気に凍らせないと………！』
『もつと魔力を込めて魔法を撃つことが出来れば……でも、魔力がもう………！』

アクアが水を出し、それをウイズが凍らせるという形でやっているそうだが、どうやら全然足りないようだ。

聖水だからアンデッドの力で凍らせにくいということもあるんだろうが……。

段々と全員の顔が暗くなっていく中、ザッと一步踏み出す力強い足音が響いた。

その音にめぐみんが視線を向けたのだろう。

彼女の眼帯越しに映った映像には、覚悟を決めたかのような表情のダクネスが。

『ウイズ。私からドレインタッチで魔力を体力ごと吸え』

『ほ、本気ですか!?!』

『皆私とこの街のために戦ってくれていると言うのに、私は先程から見ているだけだ……。どんな形であろうと、私も尽力を尽くしたい』

『ダクネス………』

普段ならみんな止めにはいるだろう。

だが、決意が宿る彼女の姿を見てそうするものは一人もいなかった。

『分かりました………では、いきますよ?!』

『ああ、この体力だけが取り柄だ。いくらでも吸ってくれ』

ウイズがダクネスの手を握り、そこからドレインタッチを始めた。冒険者のカズマが普段使う劣化版とは違い、吸われる魔力の流れが映像越しでもしっかり見える。

どうかこれで成功して欲しい。

先程からMk. 46のパーツの消耗が激しく、このままでは底をつきそうだ。

『ぐっ………』

『ダクネスさん、大丈夫ですか!?!』

『お、おいダクネス！ 無理しすぎるなよ!』

『ねえウイズ！ ちよつと吸いすぎじゃないの!? まだ魔法は撃てないの!』

急激に魔力も体力も吸われたダクネスが地面に片膝を着き、心配したウイズが手を離そうとするが……。

『構わん……続ける……!』

その手を、ダクネスが力強く握り続けた。

『まだ足りんだろう……?』

『で、ですが……!』

『続ける!』

『うう……ご、ごめんなさいダクネスさん……!!』

ウイズが泣き出しそうな顔をしながらダクネスから吸い続ける。

もう魔力なんてとうに底を尽き、体力をずっと吸われつつけているはずなのだが……。

『気にするな……。私はやるべきことをしているだけに過ぎない……ウイズもそうしろ……!』

流星はダクネスといった所か。

正義の権化のような姿を見るとこちらの士気も上がってくる。

『そ、それにしても……これが本場のドレインタッチか……ふふ……た、たまらん……!』

流星はダクネスといった所か。

変態の権化のような姿を見るとこちらの士気も下がってくる。

『台無しだよ馬鹿野郎！ 心配した気持ちを返せこのド変態が!』

『こんな時まで言葉責めだと……? カズマは本当に容赦がないな……!』

『なんというか……ダクネスで安心しました』

まだまだ余裕そうなダクネスの姿にカズマが頭を抱えてうずくまる。

めぐみんもアクアもウイズも、先程まで心配そうな顔はしていなかった。

いつもは色白なウイズの血色が普段よりも良くなり、ダクネスから

そつと手を放す。

『十分な魔力が得られました！　ありがとうございます！　ダクネスさん！　これでデストロイヤーの脚を止められるはず……いえ、止めて見せます!!』

『あ、もう終わりなのか……？　もう少し……い、いや……だいぶ限界のよう……だ』

『ダ、ダクネス!』

『お前も色々無茶すんなぁ……』

クタツとダクネスが倒れ、アクアが駆け寄って介抱を始めた。

意識はあるようだが、もう一步も動けそうにない。

そんなダクネスは、アクアに膝枕されながらウイズの背中を見ていた。

彼女の想いを、みんなの想いを乗せたその背中を。

『みなさん、あとは任せてください。トニーさん、今手を貸しますね!』

「熱烈ドラマの陰で僕は忘れられてたかと。巨大要塞を真正面から抑えてる僕より目立つなよ?」

『ふふっ……確約はできませんね』

ウイズはうつすらと笑みを浮かべ、彼女らしかぬ自信に満ちたジョークを放ち。

『——『カースド・クリスタルプリズン』』

静かに、凍てつかせるかのような声色で拳を地面に叩きつけた。

『おわああああ!　な、何これ!!』

『さ、さすがはリッチー……』

オーバーなカズマのリアクションも領ける。

叩きつけたウイズの拳から波紋のように氷山が地面を伝わって外へと伸びていく光景が目飛び込んできたからだ。

『さ、寒い!　なんか超寒いですけど!　ウイズったら本気出し過ぎじゃない!?』

『お、おじすか!　どうなっているんですか!?　衛星から映像を送ってください!』

状況を把握するため、映像の視点をめぐみんの眼帯から人工衛星の視点に切り替える。

その映像には、ウイズの出現させた氷山が大木の根のようにしてデストロイヤーの脚を覆う姿がはつきりと見えた。

『ボス、デストロイヤーの速度が急激に低下しています。成功です！』
これなら……………！

「このまま抑え続けるぞ！ 踏ん張れウイズ！」

『はい！』

正面からは僕が、脚そのものはウイズが。

速度は落とせているもの……………。

『抑えられはしますが……………長くは持ちません……………！』

『ボス、予備パーツの残量が尽きました……………！』

氷は生成された傍から砕かれ、僕のスーツは悲鳴をあげる。

そして……………。

『ヤバいです！ 民家がもう目の前ですよ！』

『クソ！ もう打つ手がない！』

「やれることはやった。後は……………そうだな、女神エリスにでも祈っておくとするか」

冗談めかしてはいるが、流石にマズイと内心焦りを覚える。

それでも僕はヒーローだ、プライドがある。

あと少しで全てが丸く収まりそうだというのに、ここで諦めるのは絶対にゴメンだ。

そんな子供のような駄々を嘲笑うかのように、デストロイヤーの脚は前へと歩を……………。

「—— ミニリパルサー・デプロイヤー」 作戦地域に到達

……………やつと。

やつと来たか……………。

「手のかかる息子だ……………」

僕がついたため息に応えるかのようにして、巨大な格納ポッドがデストロイヤーのそばへと飛来し、そこからつつかれた蜂の巣のように

大量のドローンを吐き出した。

平たい円盤の形をしたそのドローンは、次々とデストロイヤー下へと殺到しカンカンと甲高い金属音を奏でて張り付いていく。

そして……

『あ、あれ……う？』

異変に気が付いたのはアクア。

『景色の流れる速度が緩やかに……』

『……なんだ？ 止まってる……？』

段々と気付き始め、動揺が全員に広がっていく。

僕はそんなカズマ達に。

「これにて一見落着だ。ウイズも氷出すのやめていいで」

『え、えつと……一体何が……？』

『……！こ、これは……!?!』

スキャンが可能なめぐみんだけが全容を理解し、驚愕の声を出す。

『お、おい、なんだよめぐみん。どうしたんだよ？』

『……ってます』

『……ん？』

『浮いてます!! 起動要塞デストロイヤーが、空に浮いています!!』

『はっ……はあああああっ!!?』

——ミニリパルサー・デプロイヤー。

本来は紅魔の里、およびアクセルで製造している対魔王軍用防衛設備なんかを詰めたコンテナを王都に送るために開発した装置だ。

皿ほどのサイズの推進リパルサー発生装置で、どんな物体にも張り付き、接着面の反対側から推進リパルサーを噴射することで重い物体を高速で運搬することができる。

いちいちクインジェットで運ぶのが面倒だったので造ったのはいいものの……まさかデストロイヤー相手に使うことになるとはな。

僕はズタボロになったMk. 46を全てパージしてカズマ達の元へと戻った。

戻るや否や、カズマ達が僕の方へと駆けてきた。

「トニー、デストロイヤーが浮いてるってどういうことだよ!」

「そのまんまの意味だ。デストロイヤーの腹にジェット取り付けて空に飛ばしてる。これでもう地に足がつかず、これ以上進むこともない」

「流石……発想がぶっ飛んでるな……」

適当に話を受け答えしながら、僕が入ってきた穴から街がある方向へと目を向ける。

もう民家や畑は目の前であと数歩でも進行を許したら踏み潰されていただろう。

「とりあえず、もう安心だったってことだな? はあ……マジで焦った……」

「一時はどうなることか……」

危機が去って気が抜けたのか、カズマとめぐみんが床にへたり込む。

ウイズもほっと胸を撫で下ろし、それで上下する彼女の胸をカズマが凝視していた。

気待ちはわかるが、いい加減にしないと痛い目見るぞ。

体験談だからな。

「機動要塞デストロイヤーもなんてこと無かったわね! さあさあつ、帰って乾杯しましょう! 今日には派手に祝おうじゃない!」

「バカっ! フラグになりそうなことを言うんじゃない!」

「カズマ、慎重なのは良いが臆病にはなるな。というわけで、僕も帰って飲むのに賛成。異論は聞きたくない」

「私、生野菜と何かのタタキとかで強めのお酒をきゅつとやりたいわ!」

「それも悪くないが、僕ならニンニクの香りを移したバターで焼いたステーキにバーボンだな」

僕とアクアで祝勝会ムードに浸りながら、飲むお酒の種類なんかを

あーでもないこーでもないと言っている、そんな横で。

「……」

ただダクネスが黙って、何かを警戒しているかのようにある一方を睨んでいた。

その視線の先にあるのは……。

「ダクネス、どうしたのですか？ コロナタイトがどうかしたのですか？」

「……まだ終わっていない。胸騒ぎがする、まだ危険な香りが残っているぞ。デストロイヤーは、まだ終わっていない！」

ダクネスのそんなセリフに反応するかのようにして、地響きが起こる。

僕らがいるデストロイヤーは現在宙に浮いている。ということは、その震源は……。

「お、おい！ なんかもつちや揺れてるぞ！」

「それだけではありません！ みなさん見てください！ コロナタイトが……」

僕が先ほど適当に置いておいたコロナタイトの方を見ると、先ほどよりもさらに赤く、そして強い光を放っていた。

「……フライデー」

『先ほどよりも熱エネルギーが急激に増えています。このペースでエネルギーが増え続けると……』

「あー！ 聞きたくない聞きたくない！ おいコラこの駄女神!! お前ってやつは、足引っ張らないと気が済まないのか!!」

「ええっ!? 何で私なの!? 私何もしてないじゃない!! それに、フラグならトニーだって立ててたわよーっ！」

コロナタイトはエネルギーを供給し続ける為に特殊な細工が施されてきたようだ。

無理に引き抜くとエネルギーが暴走するようになっていたらしい。僕のアークリアクターを見習ってほしいもんだ。

「全員僕に掴まれ。いったんデストロイヤーの外まで退避するぞ！」
後ろ髪引かれるが、どうやらコロナタイトはあきらめるしかなさそ

うだ。

▽

外の平原へと退避した僕らは、重たい振動音を奏でて震える宙に浮いたデストロイヤーを見上げる。

「おい、どうするんだあれ……このままじゃボンツていくんだろ!？」

「ですが、ここで爆発する分なら問題ないのでは？ 街までは遠いですが、近くの村も窓が割れる程度で済むと思います」

めぐみんがそう推察するが、ウィズがあることに気が付き冷や汗をにじませる。

「いえ……デストロイヤーの正面を見てください」

そこは、僕が全力で押し込んだことよってできたデストロイヤーの前面の亀裂。

「もし内部で大爆発が起きようものなら、あの亀裂から爆風が一点集中で……!」

「あーあーあー! それも聞きたくない!!」

「ここらの農村は年配の方々多い……! ここはまだしも、まだ先の村々の住民たちの避難は完了していない可能性がある……!」

カズマが喚き、ダクネスが街の方角を見て拳をギュツと握りしめる。

「ど、どうするのよ!？」

「コロナタイトだけなら森の方へぶん投げればいいが、デストロイヤーの脚を止め続けたせいで熱がたまって本体そのものが爆発しかけている」

「冷静に絶体絶命ですって分析してるのか!? 解決策を考えてくれよ!!」

「落ち着け。解決ならもう出来てる」

「……はい?」

僕は親指でクイツとデストロイヤーを指し。

「デストロイヤーの下にたくさんくっ付いてるミニリパルサーを見

ろ。あれでデストロイヤーをベルディアの時みたいにはるか上空まで持っていったって爆発させる。僕らはここでただ座って花火を見物していればいいって訳だ」

「流石はトニーですね！　では、ここでその花火とやらを見物していきましょうか!!」

「なら最初からそう言ってくれよ……あー、心配して損した」

爆裂魔法も撃って疲れているのか、めぐみんが地面に倒れるようにして座り、それに続いてカズマやアクアも地面に座り始める。

それから少しの間デストロイヤーをながめていたのだが……。

「……ねえ、なんだかちつとも高度が上がってないように見えるんですけど……気のせいかしら？」

「気のせいじゃないですね……デストロイヤーの振動も大きくなってきていますし、これ大丈夫なんでしょうか？」

さきほどから全然高度が上がらないデストロイヤーに段々不安を感じてくる。

「……どうやら計算違いだったようだ。あのミニリパルサーにデストロイヤーを空高くあげるほどの推進力は無いらしい」

「お、お前……！　どーすんだよ！　無駄に時間を使っただけじゃねーか！」

「今どうするか考えてる……！」

アクアの魔力をめぐみに流して、爆裂魔法で吹き飛ばすか？

やれるかもしれないが、間に合うかどうか分からないので却下。

だが……あれを上にあげるにはさらなる推進力がある。

もうミニリパルサー・デプロイヤーは全て使ってしまった。

推進力……推進力……。

……あるじゃないか、飛びっきりの推進力が。

——僕だ、僕自身だ。

「……いいことを思いついた」

僕は、一步デストロイヤーに向けて踏み出す。

そんな僕の背中を見ためぐみんは、その知力の高さを遺憾無く発揮し僕の意図になんとなく気がついたようだ。

流石だな。

「……トニー、何をするつもりですか？」

「みんな笑顔のハッピーエンドさ。まあ、いいからそこで見物してろよ。ヒーローってのがなんなのか見せてやる」

そう言い残し、僕はデストロイヤー目掛けて飛び立った！

『トニー！ お願いですから戻ってきてください！ 他に手があるはずです！』

「僕でも他に浮かばなかったんだ、君たちがもつといい策を考えつけないとは思えないね」

『トニー、お願いですから……！』

『えっ？ お前何してんの？ 何するつもりだよ？』

焦るめぐみんと、状況が飲み込めていないカズマの声が響く。

めぐみんは今にも泣き出しそうな声でカズマに叫んだ。

『トニーは自分を推進力にしてデストロイヤーを高高度まで持つていくつもりです!!』

『待て待て待て！ トニー！ そんなことしたら爆発に巻き込まれるぞ！』

「僕なら大丈夫だ」

『うるせーバカヤロー！ いいから戻ってこい、この正義ガチ勢が!!』
「後でな」

うるさいので通信音声ミュートにし、デストロイヤーの下へと潜り込む。

「さあ、最後の仕上げだ。」

後のことは考えない。反動は覚悟の上で、スーツの出力をフルパワーにして持ち上げる。

グンツとデストロイヤーの機体が上へと動き、高度が上がり始めた。

【エネルギー量 10%以下】

『ボス……帰還するのに必要なエネルギーが足りません』

「構うもんか」

「みるみる下の景色が遠ざかっていく。

そして、それに伴ってデストロイヤーの振動も増してきた。

内部の熱エネルギーも相当なものになっている。

もういつ爆発してもおかしくない。

そんなデストロイヤーをチラリとみやり、僕は皮肉げに笑う。

通った後にはアクシズ教徒しか残さないデストロイヤーか……。

AなNらD ……………

A私Mは ……

IアRイOアNン MマAンNだ。

デストロイヤーの振動が一瞬止まったその直後。

凄まじい轟音と共に目の前が白く染まり——

——スーツの遠隔操作が切断された。

「ふう……これで転生する前に作ったスーツ全てともお別れか。

まあ、デストロイヤーの設計図が手に入ったんだ、これくらいは安い

な」

『ええ。ですが……』

「なんだ？」

『私、何かものすごく嫌な予感がします……』

『どうして？ 後はギルドでパーティと宴会するだけだろ？』

おかしなことを言い出したフライデーに、そう冗談めかして笑う。きつと今頃、カズマ達はテレポートでアクセルにでも戻っているだろう。

スーツが無くなった僕はギルドの酒場まで歩いていかなきゃならない。

アクアが我慢できずに先に飲み会を始めてなければいいが。

完全勝利の余韻に浸りながら、僕は上機嫌に鼻歌交じりにギルドへと向かった。

▽

あのクソ野郎。

どうして勝手なマネばかりするんだ。

カツコつけてるつもりなのか。

映画の主役のつもりなのか。

「あの……大馬鹿……ヤロ、お……!!」

「グスッ……うあああ……こんなの……あんまりですよ……」

アクセルに指一本触れさせること無く、俺達はトニーの宣言通りにデストロイヤー相手に完全勝利を収めた。

……だというのに、何一つそんな実感はわからない。

足取りは重く、顔は下を向いている。

グスグスと鼻を鳴らしながら、デストロイヤー討伐の報告をするためギルドへと向かっていた。

「どうしてですか……どうしてトニーが死ななくちゃいけないんですか……!」

先程からめぐみんはずっとあんな調子だ。

俺だって今にも地面にうずくまって泣き出したい。

——仲間を失う。

この世知辛い世界、冒険者にとってこれは珍しい話ではない。でも、それにしたって……こんなに辛いなんて。

「エリス様……どうか、すべてを救ったかの英雄に……魂の安寧を……」

「トニー……グスツ……仲良くなったのに……もつと一緒にしやべつてお酒飲みたかったのに……」

「彼ほど世の為人の為に動いた冒険者……いえ、勇者はいませんでした……どうか、安らかに眠ってほしいですね……」

ダクネス、アクア、ウイズ……。

みんなトニーが消えていった空を一度眺め、そして涙をこぼして彼の死を嘆いた。

やがてギルドに付くと、そこには大勢の冒険者たちと受付嬢が神妙な顔つきで待っていた。

そこに現れた俺達の姿に、どうやら勝利を確信したようだ。

「おい……やったのか？ あのデストロイヤーを？」

「……ああ」

「「うおおおーっ！ すげえええーっ!!」」

その言葉に、ギルドの中がワツと沸き立つ。

受付嬢も胸をなでおろしていた。

しかし、冒険者の一人がすぐれない顔色の俺達を見て違和感を感じとったのか……。

「な、なあ……あの空飛ぶ鎧の男はどうしたんだよ？」

「……」

ギルドの中が静まり返る。

皆気が付いたのだらう。デストロイヤーを打ち破り、街を救ったのに誰も笑わず、ただひたすら押し黙る俺達の姿を見て。

「う、嘘だよな……？」

「トニーは……死んだよ……自分の身を犠牲にして、デストロイヤーを……ツ……破壊したんだっ……」

「そんな……」

「こらえ切れずにあふれた涙を袖で拭う。」

クソ、とてもじゃないが祝う気分になんてなれない。
俺の後ろにいる仲間たちもただずつと黙っていた。

そんな中で、冒険者の一人が悲し気な顔を浮かべながら、俺達に
コップ一杯の酒を出してきた。

「追悼し、乾杯しよう。あいつもそれを喜ぶぜ、きつと」

「……かもな」

冒険者はお酒を俺に手渡し、それを見た他の冒険者やギルドの職員
たちもお酒を用意して皆に手渡していく。

全員にお酒が回ると、みんなが俺を見てきた。乾杯の音頭を取れと
言うことなのだろう。

……トニー、お前のことは決して忘れないよ。

あの時ヒーローとして踏み出したその背中を思い浮かべて、俺は
コップを掲げ。

「それじゃあ……ヒーローに」

「ヒーローに」

皆もコップを掲げ、トニーの死を偲んで。

「かんぱ……」

その時だった。

ギルドのドアが開く音が乾杯の音頭を遮った。

一体誰だとそつちに顔を向けてみると、そこには……。

「Huh……注ぎたてのお酒と勝利の匂い……で、僕の方は？」

いつもの飄々とした笑みで立つ、トニーの姿があった。

……は？

「どうしたんだみんな？　なんでそんな顔し」

「ゴッドブロー!!」

「ぐああああああ」

なんでと声をかけようとした俺の横をアクアが猛スピードで通り
抜け、トニーのみぞおちに光る拳をねじ込んだ。

ぶつとんでったトニーは入ってきたギルドのドアから外へと飛ん

で転がる。

「大変！ トニーが、トニーがアンデッドになって出てきちゃったわ！」

腹を抑えながら立ち上がったトニーは、そのままヨロヨロと俺達の方へと向かってきて。

「おい、状況を説明しろよ……ダクネスと趣味が同じになった覚えはないぞ……」

状況に思考が全く追いつかない。

他のみんなも同様のようだ。ただただポカンとトニーを見ている。

アクアはトニーの前に立つと、目から涙をこぼしてトニーの手をギョツと握った。

「トニー……あなたはもう……ここにいちや駄目なの……行くべきところに行かなくちゃいけないの……」

「は？」

「だから……だからね……っ？」

握りしめている手が淡く光り、アクアの顔が優し気な……まさに女神と言った表情に変わって。

「貴方を今ここで……天界へと送ります。トニー、ありがとうね？ してさようなら……『セイクリッド』」

「おい待て」

「いだいっ!？」

トニーがアクアの額にデコピン食らわせた。

痛そうな音がギルドに響く。

「なあ、感動的な雰囲気だしてるところ悪いんだが、一体君たちは何をしてるんだ？ 演劇の練習か？」

「あ、あれっ!? なんで……というか、あれ？ アンデッドじゃない……っ？」

「僕の目を見るよ……死んだ目に見えるのか？」

「うーん、一応死んだような目をしてるけど、曇りなき眼でみた限り、ちゃんと人間みたいだね……」

「そのガラス玉、あとで取り出してクリーナーで磨いとけ。ったく

……」

「説明してくださいよ」

低く、怒りをこらえているように唸るめぐみんの声。

これまでずっと黙っていたが、俺も喋ってもいいだろうか。

そろそろ我慢の限界だ。

「説明？　なんの説明だ？　説明ならこっちがしてもらいたいね。勝利の宴会を開こうとここまで歩いてきたら、その狂犬にいきなり腹を殴られて、アンデッド扱いされたんだからな！」

「何で生きてるのか説明してくださいよ!!」

そう怒鳴ってにらみつけるめぐみんを見て、トニーも訝し気に顔をしかめた。

「……何そんな目を真っ赤にして怒っているんだ？」

「トニー、お前はデストロイヤーを空まで運び、爆発と共に死んだはずだろう……？　なぜここにいるのだ？」

俺も一歩前にでて、トニーを睨む。

どういう事情か知らないが、こっちは大変だったんだぞ。

これでいつもの冗談とか抜かしたらマジでボコボコにしてパーティーから追い出してやろう。

俺は煮えたぎり始めた怒りを何とか抑えながらトニーに問う。

「一から……十まで……きっちり話せ……」

そんな俺の怒りがにじみ出た声に対し、トニーは何を言ってるんだと言った表情のまま。

「生きてるも何も、あそこにいたのはスーツだけだ。僕自身はラボにいて、スーツを遠隔操作してた」

「……は？」

「あの時使ったミニリパルサー・デプロイヤー。あれの調整をラボでしながら戦ってたんだよ、少しでも早く用意できるようにね」

「「は？」」

怒りに震える俺達の顔を見て、とうとうトニーも今の状況に気が付いたようだ。

汗をにじませ、一步後ろに後ずさりながら。

「……………このこと話してなかつ」

「うおらああああーっ!!」

俺とめぐみんのタックルを喰らい、再びトニーはギルドの外へと吹っ飛んでいった。

追い打ちの為に飛び出した俺達の背中を、アクアとダクネスも追いかけてくる。

「てめーぎげんなよ！ マジでぶぎげんなよ！ 俺の涙を返せよ！

そこまでしてイカした演出とやらがしたいのか！ この野郎!!」

「貴様、あんな紛らわしい言い方しておいて実は生きていただど!?

どれだけ悲しんだのかわかっているのか!? ぶっ殺してやる!!」

「ねえ返して！ あの時の気持ち返してよ！ もうトニーが物作りしてる時に指切つても回復魔法かけてあげないんだからね！」

「あ、あのー……………それくらいに……………」

ボコボコと蹴りまわされるトニーが待ったと手を突き出すが、怒れる俺達四人の猛攻は止まらない。

ウイズの制止ももちろん聞かない。

「言葉をつか……………うぐつ！ おい！ 本気で蹴ったな!? わかった、天下のアイアンマンが負けを認めてやる！ だから……………」

▽

それからしばらく僕は四人から不当な暴力を受け、ようやく解放された。

アクアから治癒の魔法を貰い、そして…………。

「というわけで、ラボにも屋敷にも入れてもらえず、僕はここに来たって訳さ。確かに誤解を与えたのも悪かったが、だからって痛めつけて屋敷から追い出すのはやりすぎだろ……………あいつら本当はゴブリンの仲間じゃないのか?」

……………そして、追い出されて泊まる宿もない僕は馬小屋で管理人相手に愚痴っていた。

何処かで見ただことあるような、なにかただ者ではなさそうな。

そんな雰囲気のない管理人はただ黙って僕の愚痴を聞いていた。

「まあ、長々と僕の愚痴を聞いてくれてありがとう。仕事引き留めて悪かったな」

「話の九割くらいは聞いとらんかったから構わんよ」

「そりゃ……正解だな。人の愚痴は聞き流してなんぼだ。ところでじいさん、どこかで会ったか？ 具体的には、どこかのプレミアなんかで会った気がするよ」

「さあ……ワシみたいな顔の老人など、どこにでもおると思おうが……」

そう言っって新しい藁を馬の元へと運ぶ年長いた管理人。

その背中からはただ者じゃない雰囲気が出ているのだが……。

僕はそんな管理人にまた話しかける。

「なあ、毎日こうやって冒険者の話を聞いたりするの？」

「まあ。ここでしかない馬小屋の管理人をして、たまーにこうして冒険者の話を聞いておる。その話を元に漫画でも書こうかなんて思っておるよ」

「いいね、きつと売れるさ。そのうち僕の話もしてやるよ。それじゃ、僕は五度目の謝罪に行ってくる。これで駄目だったら、いよいよもつて晩飯抜き馬小屋生活が始まる。藁が食べれる君が羨ましいよ」

そう冗談めかして馬の頭をなでる。

不機嫌そうにブルルと唸った馬の声を背に、馬小屋から出ると。

カズマ達四人が並んで立っていた。

「あー……いまからまた君達の元へと謝りに行こうと思っってたんだ。ほら、そのパン屋に寄ってハンバーガーでも買っってからね」

「もうバカな真似しませんか？」

めぐみんがジトつとした目を向けてそう言っってきた。

前ほどの怒りはもう感じない。

「流石に締め出すのも悪いと思っってた……もうこんなこと二度としな

いなら戻してやろうって話になったんだ」

「戻してやろうってなんだ。なんでそんな上から目線なんだ？ 屋敷はまだしもラボは僕の家だし、君たちが勝手に誤解……」

「そうか、じゃあな。みんな、屋敷に戻ろうぜ。今日は霜降り赤ガニを食べよう」

「はいはい、わかった！ 悪かったよ……もう二度としない。これで良いか？」

カニをちらつかせるとは味な真似してくるじゃないか。

「よくできました！ ちゃんと謝れて偉いわね！」

謝った僕の頭を、アクアが背伸びしてなでてくる。

なんか無性にイラツと来るが、今ここで波風を立てるわけにもいかないの、黙ってなでられてやる。

「さっ……帰りますよ、トニー。ですが、その前に……」

僕は乱れたヘアスタイルを自分の手でセットしなおしながら。

「なんだ？ 帰る為には歌って踊れとでも言うつもりか？」

「おい、それ以上皮肉を言うなら本当に締め出しますよ。……一つだけ聞きたいのです。もしあの時、遠隔操作ではなく実際にスーツの中に入っていたとして……それでも、トニーは今回と同じ選択肢を取りますか？」

「……かもな」

あっさりと言った僕だが、めぐみんはそんな答えは分かっていたとでも言わんばかりにフツとあきらめたかのように笑い。

「そう言うと思っていましたよ……ヒーローですもんね。ですが、これだけは忘れないでください」

めぐみんは、控えめに一歩だけ僕に近づき、悲し気な顔を見せないように帽子を目深にかぶって。

「あなたは言いましたよね？ 『みんな笑顔のハッピーエンド』って……私達、笑ってないですよ、ヒーロー……」

震える声で小さくそうつぶやいた。

「……悪かった、ゴメンな」

「じゃあ、今度こそ帰りましょう。今晚は美味しいものにしましょう、

カニは前食べたので何か別のものを……」

ペッパーにも、何度も似たようなことを言われたのを僕は思い出した。

ヒーローとしてやるべきことを成すのも大切だが、自分の身を案じてくれる人たちのことももう少し考えるべきかもしれない。

少し考え方を変えるべきかなと、心でそう思いながら。

馬小屋の藁に寝そべって固まって体をグツと伸ばして、今日の晩御飯の想いを馳せ――

――ガチャリ。

そんな、無機質な音と共に、僕の腕に何か冷たいものがはめられた。

なんだと目を自分の腕に向けてみると、そこには手錠が鈍い輝きを放っていた。

手錠をはめてきたのは、ガタイの良い全身を鎧に包んだ兵士。

状況をよく呑み込めない。

今日二回目だ。

兵士たちの間から、黒髪の女性が出てくる。

その女性の目は、まるで親の敵でも見るかのような冷たいまなざしをしていた。

「冒険者、トニー・スターク！ 貴様には現在、国家反逆罪の容疑が掛けられている！ 私と共に来てもらおうか!!」

「What the F――」

THE UNBREAKABLE DARKNESS

第34話 ニューライザー

スタークが我が屋敷のリフォームを終えたその後。

新しいベッドの寝心地をしばらく堪能したワシは、とある後処理のために薄暗い地下室へと向かっていた。

階段を下る事に、鼻をつくカビの嫌な匂いが強くなる。

そして、あの不愉快な音も次第に増してきた。

「ヒュー、ヒュー……」

「起きろマクス！ 起きろと言っているんだ！」

「どうしたんだい、アルダープ？ 僕に用かい？」

蹴りつけて起こした、この気持ちの悪い悪魔。

恐ろしい程に整った顔立ちに、生気を感じない無表情。

ワシはこいつが気に食わない。

この先何があってもワシはこの悪魔を好きにはなれんだろう。

「用がなければ貴様なんぞに会いにくるものか。願いがあから来たのだ」

「叶えて欲しい願いははなんだい？ 対価をくれるなら僕は何でもするよ！ ヒュー、ヒュー！」

この悪魔は馬鹿だ。

何度願いを叶えても、対価どころか願いを叶えたことすら忘れる。

そんな馬鹿な悪魔に、ワシは叶えて欲しい願いを告げる。

「トニー・スタークという男がいる。このワシに何度も金をせびってくるしつこい男だ。奴の思考を適当にねじ曲げて辻褄を合わせておけ。ワシのために働けたこと自体が報酬だったなり、そのような形だな」

「それは無理だよ、アルダープ……なにか、強い光が邪魔してる……」

「なんだと……？ 以前もやっただろうが。それが出来んと？」

「無理……今は、強い光が……無理だよ」

こいつが出来損ないの下級悪魔なのはワシが一番わかっている。
今も願っているララティーナを未だにワシの物に出来ないの
だから。

だが、こいつが無理だと拒否したのは初めての事だった。

ワシは、命令を無理だと切つて捨てられたことにカツと頭に血を昇
らせ、思いつきり悪魔を蹴りつける。

「貴様にー！」

何度も。

「拒否権なんぞー！」

何度も。

「あるとでも、思つて、いるのか!!」

「ヒュー……、ヒュー……、ヒュー……」

蹴られ続けたマクスは、やがてうづくまつて動かなくなった。

荒らげた息を整え、ワシは再びマクスに命令しようと……

「……………おいマクス、これはなんだ？」

……して、マクスの足元に転がっていた小さななにかに気がつい
た。

それは、先端に球形のガラスがついたペンのような物体。

見たところ、壊れているようだが……。

マクスはユラユラと揺れながらそれをつまみ上げて。

「アルダープ！ 誰かにこの部屋をこれで調べられたよー！」

「なっ……………！」

その言葉に一気に血の気が引く。

「調べられただど!? ここを撮られたとでも言うのか!? 誰にだ!?」

「安心してよアルダープ！ 僕の力が干渉して何も見えていないはず
だよ！ でもいい悪感情だねアルダープ！」

「ふぎけるな！ この地下室が探られている時点でマズいのだ！ な
ぜひとつの仕事も出来んのだこの能無しが！」

あまりの無能っぷりに腸が煮えくり返りそうだ。

今はそれどころじゃない、探りを入れてきた者の正体を突き止めて
処刑せねば。

いや、というより……この技術力……。

考えてみれば、寝室に入れたのも奴だけだ。

「マクス……これを見つけたのはいつだ？」

「うーん、今日かな？ 昨日かな？ 一週間前だったかも……覚えてないよアルダープ……でも、きつと最近」

……こいつに聞いたのが間違いだった。

だが、これで分かった。

トニー・スタークだ、奴しか考えられない。

いや、仮に奴では無かったとしても貴族であるワシにはどうとでもできる。

「ララティーナ……くくく……お前はもうすぐワシの物になるぞ、ララティーナ……」

これは好機だ。

トニー・スタークを捕え、ワシの元で強制労働させよう。

奴の技術力を自由に使えば、こんな出来損ないの悪魔に頼らずとも好き放題出来るだろう。

そして何より、奴はララティーナのパーティー仲間だ。

命をちらつかせれば取引のカードにだって使えるに違いない。

長く険しく見えた、ララティーナを我が物にするまでの道。

今以上の富を、権力を。

この国において絶対的な力を手に入れるまでの道。

全てが一度に手に入りそうなチャンスが転がってきた事に

思わずくつくつと笑いが込上げる。

「ハハハハハ!! ララティーナ！ お前はワシの物だ！ 絶対に手に入れるぞ！ 絶対にだ!!」

「ヒュー、ヒュー！ 楽しそうだね、アルダープ!! 残虐なことを考えている時の君が好きだよアルダープ!! ヒュー、ヒュー！」

▽

ああ、愛するペツパー。君はそっちで何してる？

僕は死んだことになっているだろうから……きつと悲しませてしまっているんだろうな。

まあ、そんなに悲しまなくていい。ちよつと異世界の危機を救ってから君の元に戻るよ。

そして、自分の墓を見ながら冗談めかしてこう笑うんだ、『もつとい墓に出来なかったのか?』ってね。

そう……できればいいんだが……。

「トニー・スターク。貴様には現在、国家反逆罪の容疑が掛けられている。私と共に来てもらおうか」

その前に、僕は犯罪者になってしまiumみたいだ。

「ちよ……ちよつとなんですかあなた達は!? その手を退けてください!」

僕の腕に掛けられた手錠を見ためぐみんな、鎧に身を包んだ兵士たちに着てかかる。

「おい、その男は私の仲間だ。いきなり手錠を掛けるなど、なんのつもりだ」

そして、ダクネスは僕を守るようにして手錠をかけた騎士と僕との間に立った。

……なんだ君たち、随分頼もしいじゃないか。

「おお、おいトニー……お前何やらかしたんだよ……!? どうとうやばい実験に手をつけてしまったのか?」

「トニーってば本当に問題児なんだから! ほら、私も一緒にごめんなさいしてあげるから謝りましょう!」

君たちはもう少し僕を見る目を改めろ。

そんな問題ばかり起こしてるわけじゃない。

そんな真面目なのやら茶番なのやら分からない空気にも負けず、僕の逮捕を宣言した黒髪の女性は。

「先日、この町の領主であるアセクセイ・バーネス・アルダープ卿が、屋敷を貴様に監視されたと通報してきた。とにかく、貴様は私と共に」

……馬鹿な。

何故それがバレている？

地下室で破壊されたカメラからか？

あれには証拠隠滅のための自爆プログラムが仕込まれている。

通信途絶と共に自爆して消えるはずだが……。

魔法か何かで封じられたか……？

「ト、トニー……やばいですよ…………！」

さつきまでの威勢はどこへやら。

めぐみんは顔中冷や汗まみれにしながら僕を見つめてくる。

そういう反応はやめろ。

怪しまれるだろ。

ダクネスも難しそうな顔をしている。

やばいぞ、言い逃れできない。

この星で最高峰の頭脳が二人揃って冷や汗しか浮かべられないってのはどうなんだ。

「……どうした？ そんな深刻そうな顔をして？ とにかく私と来い。それとも、来れない理由でもあるのか？」

来れない理由……その手があったな。

「……一日だけ時間をくれ」

「逃げるつもりか？ 許されるわけないだろう」

「まさか。逃げるつもりは無い。DESTROYヤーの件でまだまだ僕にはやることがあるんだ。明日には警察署なり裁判所なりどこへだつて顔を出してやるさ」

僕のその言葉に、黒髪の女性は少しだけ唸り。

「……確かに。数百年間人類を苦しめ続けたDESTROYヤーの討伐ともなれば……その確認の手続きには本人がいないと進まないものもあるだろう……わかった、一日だけ待ってやる」

彼女が兵士に命令すると、僕の腕の手錠を懐から取り出した鍵で外した。

僕は自分の手首を少し揉んで調子確かめながら皮肉を言う。

「優しい女性だな。男にモテるだろ」

その言葉に元々吊り上がっていた彼女の眉の角度がさらに上がる。
……おっと、地雷を踏んでしまったようだ。

「トニー・スターク。一日だけ待つとは言ったが、条件付きだ」
今度は彼女から直々に、懐から先ほどの手錠とはまた違った腕輪の
ようなものを取りだして僕の腕に巻いた。

それは、禍々しい刻印がいくつも描かれた悪趣味な腕輪。

「女性からプレゼントを貰うことには慣れてるが、こんな奇抜なデザ
インのプレゼントは初めてだ。で、これは？」

「この街から出ようとする」と装備した者に強力な呪いを付与する魔道
具だ」

「……へえ」

思わず乾いた返事が出る。

「ちなみに効果は強力な麻痺だ。街からつま先一つでも出してみる、
よだれまみれでピクピク痙攣するハメになるぞ」

「なるほどよくわかった」

「すまない、もう一つくれないだろうか」

「お前は黙ってるこの変態！」

いきなり出てきたDM騎士を、優秀な飼い主君が引き下げる。

頼むから次は出てこないようにしてくれ。

「ではまた明日、トニー・スターク。行動は早めに移すといい」

「……」

そう残して踵を返し、兵士を連れて去っていく連中の背中を、僕ら
はしばらく眺め。

「……それじゃ言われた通り、さっさと手を打つとしよう」

▽

「……で、結局案は浮かんでないと」

「そう言うの考えるのは君の役目だろ？」

「丸投げすんなよ。俺は関係ないんだからな!？」

「冷たいな。チームだろ」

「えっ？ お前は時々手伝う臨時メンバーとか最初に自分で言っ
てなかつたっけ？」

「Wow、一本取られた」

緊張感なんて微塵も感じさせず、飄々としているトニー。

「こいつさつきスキツそうな女のところに突き出してやろうか。」

「ねえ、冗談言い合ってる場合じゃないでしょ!？」

「アクアの言う通りだ。アルダープの屋敷を監視したのは事実なのだ
から、上手く裁判をやり過ぐす方法を考えよう」

「そうですね、カズマは狡っ辛い手を考えるのは得意なのですから、な
にかないですか?」

「おい、狡っ辛いのは褒め言葉じゃないからな?」

裁判を逃れる手なんて早々思いつくわけないだろうに。

そもそも俺はこの世界の裁判の仕組み自体、全くといっていいほど
知らない。

時代が中世ヨーロッパみたいの様子を見るに、嫌な予感しかない
が……。

「それこそ、証拠とかはどうなんだ? 地下室をこっそりカメラに収
めたとか言ってたけど、そのカメラ自体はどうなってるんだ?」

「もしもの時を考慮して自爆装置を仕込んであるはずだったんだが
……なんらかの理由で防がれた可能性が高い」

「そもそも証拠などなくとも、貴族がその気になればいくらでもでっ
ち上げられる」

「おいおい……」

「やっぱそんなんかよ。」

「そんなの……」

「……そういえば、俺の国にはこういう時に使える必殺の言葉があつ
たな」

「必殺の言葉!? なんですかそれは!? 紅魔族としてすごく気になり
ますー!」

「そう、俺の国でも有名なあの言葉。」

「その名も……『記憶にございません』だ」

若干勿体つけて言ってみたが、みんなの反応はと言うと……、

「何を言っているんですか？ 裁判には嘘を看破する魔道具が使用されるんですよ？ そんなの通用する訳ないじゃないですか」

「その、カズマの国の法は大分緩いのだな……」

「ねえ、魔法があるこの世界で何言ってるの？ 。カズマったら頭甘々なの？」

「う、うるせー！ なんだよ嘘を看破する魔道具って！」

「いや……その手でいこう」

大不評の嵐の中でただ一人、トニーだけが納得したように頷いた。
まさかの賛同者に俺は思わず目を剥く。

「えっ……じゃあ何？ ひたすら記憶にございませんって叫んで押し通すの？」

「そんなわけないだろ。君は馬鹿か？」

このヒゲオヤジ喧嘩売ってんのか。

「いいか、つまりは本当に記憶が無ければいいんだ」

「……は？」

「トニー……まさかとは思いますが……」

「ああ、その通り」

トニーはイタズラを思いついた悪ガキみみたいな顔をして。

「僕の記憶を消す」

——馬小屋の前から移動した俺たちは、得体の知れない機材がゴロゴロしている研究室のような所へと来ていた。

トニーがホワイトボードに複雑怪奇な方程式やら色々と書きながら、俺たちに作戦を力説し始める。

「それじゃ作戦を説明するぞ。いいか、脳っていうのは、新しい情報を別の形で保持してから大脳皮質に送る。つまり、それを逆転させれば一時的に記憶を消せるんだ」

「……………??？」

「君には話してないから理解しようとしなくていいぞアクア」

「メモリーのデータを一時的にクラウドに移しとくみてーなもん？」

「ニューアンスは間違ってる」

「……理屈はわかりましたが、それをどうやるんですか？」

「尋ねるめぐみんに、横にいたダクネスがハツと何かに気が付き」

「もしかして、記憶を消すポーションを使うのか？ あれはやめておいた方がいいぞ？ 運が悪ければ副作用でバカになってしまう禁忌のポーションだからな」

「えっ？ それやばいじゃん。トニーがバカになったら何が残るんだよ？」

「イケメン金持ちプレイボーイの博愛主義者ってところだな」

「おっと、嫌味つたらしい皮肉屋が抜けてるぞ」

「二人共この状況で何馬鹿な言い合いしてるんですか！」

「このオヤジ（ボウズ）が……」

「それ以上やるなら二人まとめてぶっ飛ばしますよ！」

それから少しして。

「で、結局どうやって記憶を消すんだよ？」

「磁力の力だ。そして、これが……その装置」

掛けられていシーツをバサツと取り去り、トニーが光の元に晒したそれは。

頭部をスツポリ覆えそうな、半球状で傘のような物体が取り付けられた大型の椅子。

なんとというか、一言で言い表すなら……

「……パーマでもかける気なのか？」

「髪を巻くやつじゃない、どこのマダムだ。これで脳をいじるんだよ」

「ほう……やはりトニーの作るものは変わってる上にユニークなものばかりだな。これを使えば、鬼畜なことをしてから記憶を消し、もう一度辱めてから消し……そして最後に全てを思い出させて精神的に屈服させるなんて芸当も……！ くう……素晴らしいな！」

「さて、早速やるぞ」

変態の妄想を軽くスルーしたトニーは、記憶を消去するだとかいう

怪しさ満点の椅子に座って。

「重要なのはここからだ。使用する磁気の強さによって消去する記憶の量を調節する。めぐみん、これを使ってくれ」

トニーがめぐみんに渡したのは、長方形の薄いタブレット。

画面にはジグザグの波形が一定のリズムで動き、その下にはダイヤルのようなものが映っていた。

この椅子の制御装置のようだ。

「僕の記憶をノース・スター打ち上げ前まで戻す。あれも一応監視装置と言える代物だからな。裁判で不利になる記憶は全部消す」

「のーすすたー？　なんだそれは？」

「……いつか説明してやるよ、ダクネス」

トニーが気まずそうにダクネスから視線を逸らした。

ダクネスが人工衛星の存在を知ったらうるさそうだもんな。

気持ちは分かる。

「めぐみん、起動は君に任せる。記憶が無くなった僕をしつかりケアしてくれよ」

「任せてください」

「忘れっぽくなったお年寄りの介護みたいだな」

「冒険者だからって僕の皮肉まで習得しなくても良いからな？　……」

さあ、やってくれ」

……そういえば、トニーが人工衛星を打ち上げた時にはもう既にみんなと面識があるんだよな……。

俺だけを知らないわけか……。

「では、押しますよー！」

めぐみんが画面をタッチすると、トニーの頭部を覆うリングが一瞬だけ光る。

薄く目をつむっていたトニーがやがて目を開け……。

「……大丈夫ですか？」

「あー……特になんの不調もないが……なあ、娘っ子。ここはどこだ？　なんで僕はラボにいるんだ？　これから授業のはずなんだが……」

「色々あったので、順を追って説明しますね。……というか、懐かしい呼び方をしてくれませんか……あの、娘っ子はやめてください、トニー」
「どうやら成功したようだ。」

めぐみんの故郷で教師をやったあたりの記憶まで戻ったらしい。

「待て……トニー？ 君こそ随分フランクに僕の名を呼んでくれるじゃないか。いつからそんな仲になった？」

「うえっ……!? あっ、そ、そうでしたね！ すいませんスターク先生！」

「なあ、一体何がどうなっているんだ？ そこにいるのはアクアか？ 久しぶりじゃないか。なんでここにいるんだ？」

「ねえ、カズマさん……なんだかボケたおじいさんとお話ししてる気分なんですけど……」

「おい、答えろよ。あの酒まだ残ってるよな？ ……口笛吹くな！」
いきなり空間がカオスになってしまった。

「ここは俺がトニーに助け舟を出してやろう。」

「……なあ」

「君は誰だ？」

「カズマです」

「僕とどういう関係だ？」

「お前の史上最大の命の恩人さ」

「おい」

トニーに真実を教えようとした俺に、めぐみんが杖で頬をゴリゴリしてくる。

「騙されないでくださいト……スターク先生」

「僕をカモれるほど賢い男には見えないからな。どうせ嘘だと分かっ
てたさ」

「やはりトニーは昔も今も変わらん……相変わらず、いい口撃力だ」
「と言っても、一年も前じゃ無いんだけどね。ここ最近がとにかく濃
かったから、なんだか凄く昔のトニーに会った気分だわ」

過去のトニーを知る俺以外の全員がやいのやいのとトニーを囲ん

で騒ぎ出す。

……こいつら目的忘れてるんじゃないだろうか。

「お前らとりあえず状況を説明してやれよ」

「おつとそうでしたね。良いですかスターク先生、単刀直入に言います。今あなたは見覚えのない罪に問われて裁判に問われようとしています」

いや、思いつきり故意に監視してただろ。

というか、故意に監視してたから記憶を消そうとしてるのだが……。

「なるほど……嘘が効かない法廷で不利になる発言をしないように記憶を消したのか……我ながらいいアイディアだ、未来の僕もしっかり賢いようで安心したよ」

「この異世界で人工衛星打ち上げちゃうくらいにね！ トニーったらもうちよつと加減できないの？」

……。

「へえ、計画はしてたがもう実行してたのか。洒落た名前も考えてたんだぞ？、ノース・スターって名前なんだが……」

……。

……。

「おい、駄女神。お前今なんつった？」

「え？ 人工衛星を打ち上げ……」

アクアの言葉が尻すぼみになっていく。自分が何を口走った気がついたようだ。

俺はアクアの頬をおもいつきり引つ張って。

「こんのクソバカがあああああ!! セっかく記憶を消したのになんでそれ言っちゃうんだよ！ 台無しじゃねーか！」

「いらい！ いらい！ まっへ!! ほんなふもりや……」

「うるせーっ！ 少しは考えてから物言えこの駄女神がああーっ!!」

「あー……なるほど、人工衛星の存在がバレて国の上層部に訴えられそうなんだな？」

「まあ、ちょっと違いますがだいたいそんな感じですよ。なのでトニーの記憶を消して裁判で勝つつもり……でした。もう過去形です」

トニーがため息をついて顔を手で覆う。

アクアとは転生の時以来会ってないそうだが、あの反応を見るにきつと初対面から色々やらかしてたんだらうな。

「かひゆまはん！ ほっへはのひりやう！」

▽

「もう一度記憶を消す。あまり細かい調整は効かない装置だからな、僕が教師をやり始めたころまで戻そう」

「……大丈夫なのですか？ 見たところ、連続して使用するのはマズそうですね……」

「確かに良くない。でも、このままじゃもつと良くない。だろ？」

なあ、アクア？」

「んーん！ むー！ むーっ！」

トニーがアクアにふざけた口調尋ねるが、ガムテープで口を塞がれ、剥がせないよう手も縛られたアクアには唸って抗議しか出来ない。

何言ってるかさっぱりだ。

「なあ……金を払うからあのプレイを……」

「やらないからな。なんなら君も記憶を消さないか？ その馬鹿げた趣味に目覚める前まで記憶を消してから、まともな教育を……」

「教……育……！」

「よし、さっさと記憶を消してくれめぐみん。これ以上変態の姿を頭に収めたくない」

トニーが再び椅子に座り、めぐみんがタブレットを操作し始める。

と、そんな時。

『ボス、連続で行うと脳がダメージを負う可能性が……』

「と言っても、確率でいえば一桁だ。何事にもリスクは付き物だろ？」

ムシヨにぶち込まれるよりはいい」

「んーん！ んーんー！ んむーっ!!」

「おいうるさいぞ、どうしたアクア」

アクアはというと、必死にアイコンタクトをしながらひよこひよこ動き回っている。

「どうやら言いたいことがあるようだ。」

「仕方ないな……おい駄女神。次ぎつきみたいなことしたら今度は飯の時以外ずっと口塞いでやるからな」

テープをアクアの口からべりつと剥がす。

痛かったのか、涙を浮かべてしばらく自分の口元をスリスリした後。

『『ブレッツシング』!』

アクアが手をかざしてそう唱えると、トニーの体が淡く光った。

「今は……」

「運を上げる支援魔法……?」

「少しでも失敗する確率を下げようと思ったの！ 今のトニーは運が上がってるから、きつと上手くいくわよ！ 裁判に勝ったら、今度は本当に記憶が無くなるくらいお祝いのお酒を飲みましょう！」

そういつて、アクアが満面の笑みでトニーにサムズアップした。

トニーはアクアにフツと笑い返して。

「もちろんだ、バーカウンターに飾ってある秘蔵のお酒を開けよう、飲み仲間君」

「それはもう飲んじやったわ」

「は?」

「では行きますよ、スターク先生。準備は出来ましたか?」

「出来てたが、たった今気になることが……」

「それじゃトニー、また後でね!」

「おい待……」

めぐみんがスイッチを入れると再びリングが光り、めぐみんに向かって手を伸ばしていたトニーの体がビクリと硬直した。

やがて止まった時が動き始めたかのように、数度瞬きをして、周囲をキョロキョロと見渡す。

「よし、アクア。今度こそ何も言うなよ?」

「わかったからテープ持ってにじり寄らないでちょうだ……」

「……君らは誰だ?」

……おい。

「相変わらずジョークばつかなお前は……ほら、作戦成功だろ?俺のことは知らないだろうが、他のみんなは知ってるだろ?」

「いいや?」

やめろ。

「トニー、私を忘れたとは言わせませんよ? 私より人の記憶に残る人はいないと自負してます」

「だろうな、僕が君みたいなかわいい女の子を忘れるはずがない。だからこそ言うよ、会った記憶は無い」

「……?!?!」

そんなベタな展開だけはやめろ。

俺の願いをあざ笑うかのように、トニーは浮ついた笑みを浮かべて。

「にしても凄いな。女性に囲まれるのは慣れてるが、ここまでの美人に囲まれたのは初めてだ」

「やばいぞマトモじゃない!!」

トニーの異常発言に思わず後ずさる。

だが、美女と呼ばれた三人は辺りをキョロキョロし、やがてそれが自分のことを指しているのだと気が付き、驚いたように自分を指さして目を見開いた。

こいつら、今となつては男に声をかけられることなんてないからなあ。

……いや違う、そうじゃない!

「どうすんだよこれ! トニーの記憶どうなっちゃったんだよ!!」

「こんな展開ベタすぎるわよ! トニーつてばふざけてるだけなんで

しよ?」

「ふざけてるってよく言われるが……美人を口説くときはいつだって真面目さ。素敵な場所と多少の時間をくれたら……それを君に証明するよ」

「キ……キモいわ!」

「キモい!」

なんというか、椅子にドカッと座って足を組んでふてぶてしくするのは以前のトニーのふるまいそのものだが、どこかチャラついているというか……振る舞いが若者っぽい。

……凄まじく嫌な予感がよぎり、俺はそれを確かめるべくトニーに尋ねた。

「トニー……今が何年何月何日か言ってくれないか?」

「映画か何かのネタか? 今日はい4日——」

「——1991年、12月14日。もうすぐクリスマスだ、聖夜を美女三人と共に過ごそう。両親が出かけてていないからね。おっと、キャンデイスもいるんだった。ちよつと彼女に許可を取ってくるから……なあ、ところで一つ聞いていいか? ここはどこなんだ?」

最悪の予想をはるかに上回る展開に、俺は頭を抱えて叫んだ。

「What the F——」

第35話 ジヤツジ 裁かれるヒーロー

最悪だ。

「君らの名前を教えて貰えないか？僕はトニー・スタークだ」

「め、めぐみん……です」

「めぐみん……日系？あだ名か？可愛らしい響きだな、そのハロウインみたいな服装も含めて気に入ったよ」

めぐみんが思わず紅魔の名乗りを忘れる程度には最悪の事態だ。

そんなめぐみんが、俺の後ろに回ってグイグイ服を引っ張ってくる。

「カズマカズマ！今のトニーは凄く気持ちが悪いです！何とかしてください！」

「お、おう……」

顔の造形が整っているとはいえ、45歳のオッサンに口説かれてなびく少女は普通じゃない。

「なあトニー、とりあえず片っ端から仲間を口説くのをやめろよ……」

「仲間？仲間ってなんの？この仮装同好会か？」

「このふざけた男は一体なんなの……で、でもカズマと同等かそれ以上にギラついた獣のような目……わ、悪くない！」

「……君もしかしてマリファナやってる？」

どうしよう、空間が凄まじくカオスだ。

さすがの俺も匙を投げて今すぐ逃げたい。そしてダクネスには説教してやりたい。

そんな時、救いの声がすぐ近くのスピーカーから聞こえてきた。

『ボス、私はF. R. I. D. A. Y. と申します。未来のあなたが作った人工知能です』

「……確かに僕は天才だが、スカイネットを作った覚えはないぞ？

ああ、君たちターミネーター2は見たか？ほら、四ヶ月前くらいに公開されたばかりの……」

「ターミネーター2の公開は四ヶ月前じゃなくて二十年以上前だ」

「……なんだって？」

『あの、話を戻していいですか?』

フライデーの声が聞こえたスピーカーの方にトニーが体を向けると、その周辺に様々な映像を映したホログラムが浮かび上がった。

『ボス、あなたの現状を簡単にご説明致します』

▽

「今の僕は45歳。最強のスーパーヒーローで大勢の命を救ったのに、今は不当な裁判にかけられそうになっているだっけ?」

ものすごく胡散臭いものを見る目でトニーが俺とフライデーの説明をかいつまんで復唱する。

今迄記録してきた映像を織り交ぜて説明したので、多少は信じてるみたいだが、それより何よりトニーが食いついていたのは……。

「未来の僕がコミックみたいなスーパーヒーローやってるとは……信じられないね」

「俺は今でも信じられないよ」

さて、ここからが一番重要な話になるのだが……。

「単刀直入に言うぞ。お前は前の世界で死んで、この魔法の世界に転生したんだ」

「転生させたのは他でもない、女神であるこの私よ!」

「あー……そういうのはまにあって」

「変な宗教の勧誘じゃねーよ!!」

そう思われても仕方ないかも知れないが、事実だからとしか言えない。

ちなみにめぐみんとダクネスには聞かれたくなかったので、彼女らは上手く説得して部屋の外に出してある。

「今まで見せてきた映像見て信じられないのか?」

「百歩譲って記憶だけが若返ったのは信じよう、十分有り得る話だからな」

「なら、お前が裁判にかけられそうなのも信じられるだろ?」

「……まあ、それも信じよう、不本意だけだな。でも剣と魔法の異世

界ってなんなんだ。さっきの映像は合成だろ？これも未来ならありえる話だ」

「ほれ、『ティンダー』」

俺は証拠にと、初級魔法の炎を指から出してみせるが……。

「僕の国のマジシャンの方がもっと色々できるぞ。魔法って言うならもっと面白いもの持ってこいよ」

「……よし、分かった」

翌朝。

「——『エクスプロージョン』ツツツ!!」

「AAAAAAAAAHHHHHHHHHH——ツツ!!」

朝露の匂いが広がるアクセルの平原に、破滅の光が突き刺さった。舞い上がった土の塊が空から降り注ぎ、クレーターの中が爆煙越しでもグツグツと赤く煮えたぎっているのがわかる。

「どうだ？信じるか？」

俺は、でんぐり返しに失敗した五歳児みたいな恰好で地面に転がるトニーにそう告げた。

「今のは……地面に核爆弾を仕込んでたんだろ？」

「誰がそんなふざけたマジックやるか」

「わかった……信じるよ」

「よし。それじゃ、時間ないからさっさとラボに戻るぞ。裁判でどうするか決めなくっちゃな」

そんなこんなで俺達は再びラボに戻ることに。

セナと名乗ったあの怖い検察官は、夕方にはもう屋敷のドアを叩いてくるだろう。

それまでに対策を練れなきや、裁判で難癖付けられて有罪判決されかねない。

▽

先日之夜とは逆に、今度は俺が椅子に座ったトニーの前に、ペンを持ってホワイトボードを背に立っている。

その余白にはトニーみたいに頭の良さそうな方程式は書かれてないが……。

「なあ、一つ聞いていいか？なんでホワイトボードの余白に半裸のカズマの肖像画が書かれているんだ？」

「凄いでしょ！私の力作なのよ！特に表情の感じとか最高でしょ！」

「普通は消すところだが、引き締まった肉体と男らしい表情が気に入ったから消さないでおく。いや、マジでカツコよく描けてる。俺の特徴をよく捉えてるな」

「絵に本体が負けてるぞ」

トニーのいつもの嫌味は耳を塞いでスルーする。

アクアが俺の魅力を余すことなく描けるなんて少し感心した。

「トニーの言う通りよ。それ、ホワイトボードにカツコイイカズマさんを描いたら、相対的にその前に立っているカズマがダサく見えると思って描いたのであって、別にカズマのカツコよさを描こうとした訳じゃ……ああっ!?!消さないでよ!!」

ホワイトボードをまっさらに戻してから一度咳払いし、力説を始めようと……して、

「それじゃ、対策会議を始めろぞ。議題は……」

『みんなでヒーローを助けるヒーローになろう』ってのはどうだ？」

「却下。記憶と一緒にジョークのセンスも無くしたのか!?!お前今の状況分かってるのかよ！国家反逆罪だぞ！平民の命が軽いこの国じゃ極刑間違いなしだ！ほら、わかっているって言えよ天才さん!!」

「あー……わかった……」

俺が真面目モードでお前を助ける会議を始めようとしたってのに茶々を入れてくんな。

突然怒鳴ってペンを地面に叩きつけた俺に軽く引くトニーの横から、アクアが呆れたような顔でびしっと手を上げて。

『ドラ息子をみんなで嫌々助けよう』にしたらどうかしら」

「今は議題をテーマに大喜利やってるんじゃないやねーんだよ！でもその議

題は気に入ったから採用する」

「やったわー！」

「この僕がいじられてるだと……?」

なんだかよくわからないシヨックを受けてるトニー。

俺は脱線しかけた話を元に戻すために手をパンパン叩いて。

「本題に戻るぞ。この国の裁判システムは知らないが、嘘を看破する魔道具のベルを鳴らさないようにすればいいんだろ？」

「それだけではないぞ。トニーの仲間である我々が弁護士を請け負い、証拠を集めてきた検察官に対して反論し、裁判官を納得させる必要がある」

「弁護なら知能の高い紅魔族であるこの私に任せてください、論破してみせますよ。トニー、あなたは私達が必ず守りますからねー！」

「いざとなったら私に任せろ。お前にも非はあるが、元はと言えば責務を放棄したあのアルダープが諸悪の根源だ。この戦い、勝ってやるう」

「Wow、美人の弁護士たちに囲まれて凄く頼もしいよ……もし君たちの舌がよく回るっていうなら、先にそれを体験させ……AGH!!」

最低の下ネタを言おうとしたトニーの顔面に、めぐみんが思いつきりペンを投げつけた。

「トニー、お前マジで少し控えろよ……大事な話の途中なんだからさ……」

「ああ……ここまで女性に拒絶されたのは初めてだ……」

こいつ自分が後にヒーローになるってさつき知ったばかりなのに、女の子にセクハラとか恥ずかしくないのか。

そう思った事が口からそのまんま出そうになったが、なんだか冷たい視線を浴びる予感がしたのでやめた。

「ねえねえ。トニーを法廷でフォロワーするのは良いけど、どうするの? 声であれこれやり取りしてたら怪しまれるわよ?」

「確かにその通りだ。魔道具はやり過ぎせるだろうが、質問攻めされてボロが出たらまずいぞ」

「だな……何質問されるか分からない法廷でカンペなんて用意できな

いし……」

顎に指をあててうんうん唸る俺達に、バツとめぐみんが手を上げた。

「私にいい考えがあります」

上げた手を額に当てて不敵な笑みを浮かべるめぐみんは、机の上に何かを置く。

それは、トニーが愛用してるサングラス……と、小さな無線キーボード。

「トニーのサングラスにこのキーボードでこつそりと指示を送るのです。私達が送信したメッセージ通りに喋ればきつと上手くいくでしょう」

「グツジョブめぐみん！それで行こう！トニー、聞いてたか？」

「サングラスにメッセージを送るとか、ラリつてるとしか思えないワードが出てきたが……わかった、こっちは右も左も分からないだ。君たちに任せるよ」

トニーはそう投げやりに言い残すと、いつの間にか用意してたトロピカルジュースのストローに口を付けてズズつと飲み干す。

めぐみんは、そんなふてぶてしいトニーを心配そうに見つめていた。

……うん、俺も心配だ。

俺もトニーに半分呆れた目を向けていると、めぐみんが俺の袖をグイツと引っ張り、部屋の外の廊下まで連れ出してきた。

いきなり引っ張られた俺は若干困惑しながらめぐみんに尋ねる。

「おい、いきなりどうしたんだよ。まるで告白するみたい……」

「彼、不安がってます」

「俺まだ心の準備が……なんだって？不安がつてる？」

めぐみんの言葉をオウム返しに聞き返した後、ドアのガラス越しにトニーを見る。

二杯目のジュースを飲みながらナッツを貪り食らい、コンピューターが内蔵されたサングラスを掛けて『SF映画かよ！』と騒いでるトニーの姿を。

「……不安……がつてる?」

「トニーとは付き合いが長いからわかります。彼は不安ごがある
と、それを悟られまいと逆にふざけるんですよ……。暴飲暴食もしま
す。頭が若返つてもトニーはトニーですね」

「なるほど……あれは不安の裏返しって事か……」

「ということは、さっきのめぐみんの心配そうな目は……。」

「……カズマ、私はなんとしてもトニーを助けたいです。恩師で、友
で、仲間で……いつも彼からは貰ってはかりなんです。だから……」
「あー、あー、わかっている、わかっている。あいつには色々お世話になっ
てるしな。絶対助けるさ」

俺はそう言つて胸元にぶら下げてある女の胸や尻をガン見してもバレない傑作装置普通のサングラスを
コツコツ叩いた。

サングラスの有用性を知らないめぐみんには伝わらないネタだつ
たが、それでも彼女は嬉しそうに笑つて。

「カズマならそう言つてくれると思つてましたよ。なんだかんだで仲
間想いですよね」

「まつ、いぎつて時はクインジェットで遠い国まで逃げればいいしな」
「既に逃げるプランを立てている辺りなんというか……。その、もう
ちよつとカツコよく締められないのですか?」

「余計なお世話だ。とにかく、対抗策は見つかったんだし、なんとかな
るだろ」

「そうですね。では部屋に戻……」

めぐみんと二人で部屋に戻ろうとして向けた視線の先では……、

『火災発生。火災発生。スプリンクラーを起動します』

「ねえ!トニーってばバカなの!?!なんでお酒に火をつけたのよ!?!」

「やってみたいカクテルがあったんだ。まあ、スプリンクラーの水割
りウイスキーもきつと美味しいさ。飲むか?」

「ハアハア……獣のような目をしたトニーの前で、ずぶぬれにされる
だなんて……」

そんな様子をドアの窓越しに見た俺は、横に立つめぐみんに無表情
な顔を向けて一言。

「前言撤回していい？」

めぐみんは何も言わずただ押し黙り、静かに目を伏せて盛大にため息をついた。

……心なしか、その姿はアクア達に呆れるトニーにちよつと似ていた。

▽

「では、この男の身柄は拘束する」

「トニー……お務め終えたら飲み明かしましょう……」

「いや逮捕されるわけじゃねえから」

約束通りの時間にやってきた黒髪の女検察官こと、セナにトニーが拘束される。

手枷を嵌められたトニーは皮肉げに鼻をフンと鳴らして。

「僕が罪深い男なのは理解してるさ。でも、まさか手枷をはめられて裁判に連れてかれるなんてな。帰ったら親父に自慢しよう。『これで僕もあんたのようにロクデナシだ。参ったか？』ってな」

「トニー……」

いつものように皮肉をまくし立てているが、あれは不機嫌な時の皮肉だ。

めぐみんかさつき言った通り不安なのかもしれない。

なにか声をかけてやろうかと思ひ、踏み出そうとしたその時。

めぐみんが俺の横を抜けてトニーのそばに寄り、その肩に優しく手を置いて……、

「トニー、あなたは私たちが必ず助けます。大舟に乗ったつもりでいてくださいね」

瞳を見据え、決意に満ちた目でそう告げた。

「めぐみん……」

トニーは驚いたように目を見開いていたが、やがてなにか安心したようにフツと笑い……、

「……僕は記憶を失ってるらしいが……実は、君を見た時に何となく

安心感を覚えたんだ。……今その理由が解ったよ、めぐみ……O u c
h！」

「なんでキスしようするんですか！」

「今のつてそういう流れかと……」

……めぐみんにキスを迫って思いつきりビンタされた。

そんなトニーに冷めた視線を向けるセナがめぐみんに一言。

「……罪状にセクハラも追加しますか？」

「はい、お願いします」

「!？」

▽

——そして、裁判当日。

俺達は手錠をかけられたトニーと共にホールの中央に立っていた。

距離を置いた向かい側には裁判官、検察官、告発人が座っている。

裁判に立ち会うのはおろか、弁護人なんてしたことが無いのでかなり緊張している……のだが。

そんな事よりも気になることが。

「……何でお前アザだらけなの？」

俺の隣に座るトニーには、体の至るところにアザがあった。

とりあえずアクアに目配せして回復させるように促す。

「あら、本当ね。一体何したの？喧嘩でもしてきたの？『ヒール』！

……ほら、もう大丈夫でしょ？」

アクアが光る手をかざすと、みるみるとアザが消えていき、トニーは落ち着いたように息を吐く。

にしても、トニーが喧嘩は無いだらう。小学生じゃあるまいし。

まさか、看守に虐待を受けたとかだろうか？

「同部屋になった男と殴り合いの喧嘩になったんだ。女の胸がいか尻がいいかだな。でも大丈夫だ。最終的には仲良くなった。なっ？」

トニーが傍聴席にサムズアップすると、見物に来た群衆の中から顔にアザをつけたダストが満面の笑みでサムズアップを返した。

「……お前は小学生か？」

「悪いが小学生は飛び級してるんだ」

相変わらずの減らず口だが、今よりも人を見下すような態度がでて余計腹が立つ。

俺は呆れたようにデカいため息をつきながら。

「30年も前からお前は皮肉屋だったわけか……」

「皮肉屋は頭が回るって言うだろ」

「口が達者で頭も回るなら俺たちの弁護は要らなさそうだな。みんな、帰ろうぜ」

「待て待て待て!!こんな軽口くらいで腹を立てるな!」

「法廷では静粛に!」

大声で叫ぶ俺達に、裁判長らしき男が迷惑そうな顔をしながら木槌で机を叩いた。

「では、これより国家反逆罪に問われている被告人、トニー・スタークの裁判を始める!告発人はアレクセイ・バーネス・アルダープ!……では検察官。彼の起訴状を」

セナが立ち上がり、懐から取り出した紙を広げ始める。

その間に、俺はトニーの脇腹を肘でつついてひっそりと囁いた。

「おい、予め言っとくけど、あんま余計なことは言うなよ?俺達でサポートするんだからな?妙なアドリブは無しだ」

「はいはい、そんなに僕が破天荒に見え……わかったよ、そんな目で見てくるな」

トニーに釘を刺しているうちに、セナが起訴状を読み上げ始める。

「……よろしいですか?被告人はアルダープ殿の屋敷に監視装置を取り付け、プライバシーを侵害しました。その証拠品もここにありません」

そう言ってセナが懐から何かのガラクタを取り出し、裁判の出席者全員に見えるように掲げた。

それは、複雑な構造をした機械の残骸。

とてもこの世界のものとは思えない、高度な技術力によって作られたものだというのが一目でわかった。

「この装置の先端にはレンズが取り付けられており……詳しく調べた結果、魔道カメラとよく似た構造をしていた事が発覚。そして、これがアルダープ殿の屋敷で見つかりました。これほどの物を制作することができる技術力を有した人物は、ベルゼルグ国内にはトニー・スタークを除いて存在しないという確認も取れています。また、これが発見される前にトニー・スタークとアルダープ殿の間にはトラブルがあったこともわかりました」

つまり、と付け足してセナはトニーを冷やかな目で睨む。

「これらの証拠からして、トニー・スタークがアルダープ殿の屋敷にこの監視装置を取り付けたことは明白。領主という立場の人間を監視するというのは、この街……延いてはこの国における秘匿性の高い重要情報を盗もうとするテロ行為に他ならない。よって私は、被告人に国家反逆罪の適用を求めます！」

なんだそりや。

状況証拠だけで犯人だと決めつけるどころか、目的まででつち上げて『はい、国家反逆罪』ってか。

いや、うん。犯人なんだが……なんというか、当初の目的はダクネスを助けるためだっただけに、ここまでの言いがかりはいっそ笑えてくる。

トニーも呆れてるのか、ポカンとした顔でセナを見ていた。

やがてハツと正気に戻り、俺にだけ聞こえるように小さな声で聞いてくる。

「なあカズマ……僕にはこれが裁判のおままごとにししか見えないんだが……」

「トニー、この世界の倫理観は中世レベルだ。とりあえず指示通りにしゃべってくれ」

「ああ……頼りにして良いんだな？」

セナが読み終わるのを確認した裁判長は、視線を俺達に移して。

「続いては、弁護人と被告人に発言を許可する！では、陳述を！」

その言葉にめぐみんがすかさず立ち上がった。

「黙って聞いていればなんですか！どれもこれも証拠として不十分で

す！もつとマトモな根拠を持ってきてください！こんなものはや裁判としての意味を成していませんよ！」

「弁護人はもつと口を慎むように！ここが法廷の場であることを自覚すること！」

「根拠？いいでしょう！トニー・スタークだけではありません、あなただって本来であればここに立っていてもおかしくない人物なのですよ！」

「ほおおお？この私が、国家反逆罪が適用されるような人間だとも？」

「ベルディアが襲来した際、結果的に討伐したとはいえ街に多大なダメージを与えたのを忘れたとは言わせませんよ！」

激昂して反論するも、冷静に返されたためぐみんは耳を塞いでそのまま動かなくなる。

こいつ何しに来たんだろう。

前日あんなにトニーを助けるって意気込んでいたのに。

だが、めぐみんが論破されて涙目になってる間にキーボードの用意はできている。

これでトニーの陳述は大丈夫だろう。

「他に陳述をする弁護人はいないようですね？では被告人、あなたは？」

裁判長がそう尋ねると、トニーは俺を一度見てから立ち上がった。

よし、ここからだ……。

俺はキーボードに身の潔白を証明する文書を打ち込み……。

「――まず第一に、私は検察官が言うような罪を犯した記憶はありません。にこちゃんマーク」

「はい？」

「絵文字おくらってんじゃねえ馬鹿!!」

「いだいっ!」

横からトニーに絵文字を送り付けたアクアを小声で叱りながら思いつきりひっぱたく。

「えつと……トニー・スタークさん。今、記憶にないとおっしゃいましたか？」

「ええ。その装置に見覚えはなく、そしてその油ギツシユなオッサンの家を監視した記憶もありません」

「なんだとキサマ!?!」

「被告人! 告発人を煽らないように!」

「アドリブ無しだっつたろうがボケ!」

勝手に色々付け加えたトニーを横から小突く。

こいつらどうしてこんな状況でふざけていられるんだ。

俺はうんざりし始めたが、作戦自体は成功のようだ。

トニーの発言に鳴らないベルを見て、検察官は眉根を寄せて唇をかみ、アルダープもまさかといった表情で固まり、法廷がざわめきだす。裁判官が、嘘を看破する魔道具のベルが鳴らないことをしつかりと確認して。

「……どうやら、今の本当の事のようにですね。確固たる証拠がない上に、魔道具による嘘の探知にも引つ掛からないのであれば、被告人を有罪にすることはできません。被告人、トニー・スターク。あなたに一つ尋ねます。本当にアルダープ殿に対して何の罪も犯していないのですか?」

あつさりと俺達の勝訴に進みつつあるあることに若干戸惑いながらも、油断はせずキーボードに文字を打ち込んでいく。

「——その通り。私は彼に対して何一つ罪をおかしてはいません」

「……ふむ、嘘でないことはしかと確認しました。検察官、他に証拠となりえるものはありますか?」

再び鳴らないベルを見た裁判官はセナにそう促すが、もう何もないらしく、ただ黙ってうつむいた。

よし、科学チートの勝利だ!

勝利を確信して俺は胸をなでおろす。

反対側の席に座っていたアルダープは俺達の方を……正確には、トニーを恨めし気に睨んで捨て台詞を吐き始めた。

「貴様……これだけの事をして、今夜から安心して眠れると

思うなよ……?」

「……HAッ!」

トニーはそんなアルダープの捨て台詞を鼻で笑い、見下すような顔で……。

あ、なんか嫌な予感がする。

トニーが失言をしないよう、その口をふさぎにかかるが一步遅かった。

「今夜もぐっすり眠れるさ。高級ベッドだからな。自宅は豪邸、車はアンタの頭頂部よりツヤツヤの高級車。美人の仲間のお尻はスポーツ選手並みにプリプリだ。残念だったなポストロール」

そう言って、ずっと黙って様子を見てた右隣りに座るダクネスの肩に手をまわして、強烈な煽りをアルダープにお見舞いした。

「ッ!?お、おいトニー……!」

「まあ、そう照れるなよ。ほら、もつとくつつけ。二人であの哀れなおっさんに勝利の投げキッスしよう。イエーイ」

煽りまくるトニーの様子を見たアルダープはと言うと……。

「キッ……キサマッ……ッ……」

何かが……というか、おそらく全部が癩に障ったのだろう。その顔は見る見るうちに赤黒く染まり……、

「今すぐッ!今すぐこの無礼な男を処刑しろおおおッ!!!」

法廷内に響き渡るほどの怒号を上げて立ち上がった。

「被告人!今の発言は見過ごせません!貴族の、領主という立場の人間に対してあまりもの侮辱です!」

「あれが領主で貴族だって?なら僕は皇帝だな。跪け!」

「ぬああああ!!キサマだけは絶対に殺してやる!!」

「やめろ馬鹿!上手く行つてたのに台無しになっちまったじゃねえか!!」

駄目だこいつ。状況をわかってない、多分自分が何やつても大丈夫だと思っっている。

「静粛に静粛に!今の発言は貴族への侮辱罪とみなす!国家反逆罪に對しては証拠不十分で無罪とするが、侮辱罪の件については有罪判決

を下す！」

裁判官が木槌で机を叩いて法廷を静まり返らせ、トニーにそう告げた。

流石に言葉一つで有罪になるとは思ってたのか、トニーは驚いたような顔して冷や汗を浮かべていた。

クソツ、あのままだったら無罪で終わりだったのに！

「被告人トニー・スタークは有罪、判決は……」

判決が下されようとしたその時。

「——死刑にしろ」

アルダープは立ち上がったまま、怒りに満ちた表情でそんなことを言ってきた。

セナはそれに対して。

「その……流石に侮辱罪で死刑を求めることは……」

そう告げるが、アルダープはただジッとセナを見つめ。

「いいや、その男は死刑が妥当だ。だろう？」

「………はい、死刑が妥当です………ね？」

は？

「おい、ぐっご遊びにしては悪趣味すぎるぞ。こんなのでいちいち死刑にしてたら街から人が消えると思うんだが？」

トニーがそう皮肉を吐きながら講義するが、そもそも死刑に同意したセナ自身も困惑した様子だ。

………一体何が起こっているんだ？

と、その時。

アクアが突然立ち上がり、大声で叫び始めた。

「今、この法廷で邪な力が使われるのを感じたわ！何者かがあ悪しきモガッ！」

「すみません！こいつちよくちよくおかしなことをつぶやくんですよ！気にしないでください！」

「弁護士。他の弁護人の選定はしっかりするように」

「はい、超反省しています」

先程のトニーの事もあって神経質になっていた俺は、アクアが余計

なことを喋ると判断してすぐさま口をふさぎにかかった。

間違った判断ではなかったと思う。

ていうかそれどころじゃない。

裁判長は、黙って俺達の様子を眺めたのちに咳ばらいを一つして。

「被告人。トニー・スターク。反社会的な態度、及び、言動。そして、この街を担う領主に対してのあまりにも無礼な態度から、今後さらに告発人に対して何かしらの危害を加えかねないと判断。よって——」

……こんなの、絶対におかしい

「——判決は、死刑とする」

「どうなってるんだ！……こんなの裁判として破綻してるぞ!!」

「おお、落ち着けトニー！セカンドプランで行くぞ！」

「……セカンドプラン……？ハッ！わかりました！法廷ごと爆裂魔法で吹っ飛ばせばいいんですね!」

「誰がセカンドインパクト起こせつつった!?クインジエットをここに呼ぶんだよ!」

固まっていたためぐみんが正気に戻ったかと思えば、やっぱり正気じゃないことを喚きだした。

ヤバイヤバイ！俺ももうパニックを起こしてしまっている！

そんな中、ふとダクネスの方を見ると、胸元から何かを取り出そうとしていた。

おそらく自分の家の紋章が彫られたペンダントを出してこの場を収めようとしているのだろう。

……馬鹿野郎。

確かに、それを出したら自分の家の権限でこの裁判を預かることもできるのかもしれない。

だが、アルダープに貸しを作ることになってしまう。

そうになったら、俺達が今までお前の為に戦ってきたのがペアになっちまうだろうが。

ペンダントを取り出させないよう、俺はダクネスに手を伸ばす。
混乱状態になって騒ぎ始めた俺達を鎮める為に、警備員もにじり寄ってきた。

今すぐここにクインジェットを降下させて、さっさと逃げよう
……

……そう思った、その時。

「――裁判長。その裁判、私の権限でなかったことにさせてもらえないだろうか？」

冷静さを感じる静かな声ながらも、しつかりと通ったその声は、混乱状態にあった法廷を一瞬で静まり返らせた。

声がした方に目を向けると、傍聴席の人の波が左右に分かれ、その中央から護衛を引き連れた白スーツの女性が現れた。

ダクネスと同じ金髪碧眼で、腰に剣を帯びた短髪の美人。

一体誰だろうか？

そんな疑問に答えるようにしてダクネスが驚きの声を上げる。

「あ、あなたは……シンフォニア卿!? な、なぜこのような場所に……？」

「なあ、あの人誰？」

「こらっ、指を指すな！ 彼女はこの国の四大貴族の一つであるシンフォニア家のご令嬢だ！ 失礼の無いようにしろ！」

周りを見ると、裁判長もセナも、同じく貴族であるアルダープでさえも啞然としてその女性を見ていた。

シンフォニア卿と呼ばれた白スーツの女性は、しつかりとした足取りでホール中央まで来ると、裁判長を見据えて口を開く。

「裁判長。その男はな、王都の防衛において多大な貢献を重ねてきた英雄なのだ。彼のおかげで何百、何千という兵士や冒険者の命が救われている。そんな小物への侮辱一つで不当な罪を着せられていいような人間ではない」

「ッ……！」

先程までトニーの言葉にあれだけキレ散らかしてたアルダープだったが、白スーツのその言葉には何も言い返せずに、ただ悔しそうに黙る。

白スーツはトニーに顔を向けると、フツと凜とした笑みを向けて。「スターク殿、事情は把握している。たまには私に貴方を助けさせてくれ」

「……よくわからないが、それならダイナーに付き合ってくれただけで……OH！」

いきなりナンパを仕掛けたトニーの脇腹をダクネスが小突く。

どうやらトニーとかなり面識があるようだが、今のトニーはちよつとアレなので黙らせておいた方がいいと思う。

「で、どうだ？名は……アルダープだったな。貴族の特権を振りかざすのは好きではないが……まあ、先に仕掛けたのは貴様だろう、同じことをされても文句は言うまいな？」

「ぐぐ……くっ……」

アルダープは心底悔しそうな顔をして。

「裁判長……起訴を取り下げる……」

そう、忌々し気に吐き捨てた。

第36話 スリルに一撃

裁判所から帰る道すがら。

「スターク殿は記憶を失っておられるのですね……」

後ろでダクネスとあれこれ話をしていた白スーツの女……もとい、クレアが俺達の方へと来てそう呟いた。

「ええ、なので……」

「う、うむ……いきなり口説こうとしてきたことは不問にしましょう……ところで、あなたがめぐみんさん……ですよ？」

「はい。……それがどうかしたのですか？」

あらかじめ知っているかのようなクレアの確認に、めぐみんが首をかしげる。

「いえ、スターク殿が度々話していたのですよ、王都で起こるような大規模な集団戦において、心強い最強の存在がいると」

「えっ……」

「もし行く当てが無かったら王都で雇ってやってくれと言っておりますよ。大事に思われている生徒のようですね？」

「トニーが……？」

クレアの話聞いたためめぐみんが、一足先に屋敷の門前に立つトニーを驚きと感動が入り混じった表情で見つめる。

良い話だなあ。

師弟物でよくある、普段弟子を滅多に褒めないのに、実は裏で認めていたことを第三者から知るみたいな展開。

アクアも本物を見たのは初めてなのか、『ねえねえ見た？』とでも言わんばかりに俺とめぐみんを交互にチラチラ見てニコニコしてる。

「それと、下手に刺激すると大爆発するから扱いに気を付けてくれとも……私は最初それを聞いた時、とても人間の事について話しているとは思っていませんでしたよ」

「あの人は……」

でもそこはトニー。なにか余計な一言を加えて台無しにせずにはいられないみたいだ。

クレアが冗談っぽく笑いながら告げたその話に、めぐみんはあきらめたように顔をしかめた。

そして……。

「改めてみるといい屋敷だな、趣があつて。僕の家よりは小さいが。ところで、アイスクリームメーカーおいてない？　ないなら僕が作る」

屋敷の前であれこれふざけたこと言ってるあの飄々とした男が全てをぶち壊している。

もう口にテープでも張っておこうかな。

そんな様子を見ためぐみんはため息を一つ付くが、やがてフツと笑うと。

「まあ、今はここで楽しくやっていますよ。当のトニーはあんな状態になつてしまいました……まあ、一時的なものです。記憶が戻るまでは我々で守りますとも」

トニーが信じた爆裂魔法で。と、付け加えてめぐみんは小さな胸を張った。

クレアはその言葉に感心したかのように微笑み。

「ぜひ頼みますよ。ああそうだ、何日かこの街に滞在することになつたので、もし暇があればクエストの様子を見ていても？」

「ええ、構いませんともー」

自信満々と言つた様子で、俺達の同意も得ずに答えるめぐみん。

俺の後ろでは、ダクネスがめちやくちや不安そうな顔でこつちを見ていた。

国の四大貴族の前でこいつらとクエストなんて本来なら絶対止める……止めるのだが。

そうしない理由が、俺にはあつた。

▽

それは、俺達がまだデストロイヤーを倒す前のある日のこと。

俺は、借金返済のための資金稼ぎであるクエストも終えて退屈だったので、夕日が差す庭でとある実験をしていた。

「――狙撃ッ！」

引き絞った弓から放たれた矢が、風切り音を立てて木に突き刺さる。

俺はその木に近づき、樹皮にナイフで刻んだ丸いから少し外れた所に刺さった矢を引き抜いた。

「んー……練度あげなきゃもつと精度良くないか……？」

引き抜いた矢を持って再び元の位置に戻ると、俺は矢を番えて的を狙い、弓を引き絞る。

俺が柄にもなくこんな練習してるのには訳がある。

――事の発端は、トニー無しで何度かクエストを経験した時の事だった。

俺たちは、ダクネスという堅い壁役がいながらも、後方から遠距離攻撃できる存在が居ないのだ。

一発しか打てない上にダクネスを巻き込みかねないめぐみんは論外。

俺はトニーがいないとゴブリンの群れ相手に全滅しかねないこのパーティーに危機感を覚えた。

……今更すぎるが。

そこで、なんでも覚えられる冒険者である俺の出番という訳だ。

最近できたアーチャーの知り合いから教わり、《弓》と《狙撃》を習得した。

弓が素人でも扱えるようになるスキルと、運が良いほど程飛び道具の命中率が上がるスキル。

特にこの《狙撃》スキルは、幸運値の高い俺にまさにうってつけと言えるだろう。

……のだが。

「狙撃！……はあ、もうやめようかな」

的には当たっているのだが、中心からは外れてしまう。

いまいちしつくり来ない、何とも言い難いもどかしさを覚えながら一人ごちる。

「くそ、何がダメなんだろうな……レベル上げて精度を……」

「——弓の問題だな」

「うおお!？」

突然後ろから声をかけられ、思わず飛び上がった振り返る。

「なんだ、トニーかよ。驚かせやがって」

「驚いてるのは僕の方だ。なんで弓なんて練習してる?」

「それは……」

特に隠す理由もなかったので、俺は弓を持つてる訳をトニーに説明した。

「なるほど……僕に頼りつきりにならないよう考えた訳か。怠け癖が改善してみたんだな?」

「ああ、今度はお前がその嫌味癖を治す番だぞ」

「努力する。……で、この弓は一体なんだ?」

トニーは俺の手から弓を取ると、材質を確かめるように弦を引っ張ったり、握ったりしながら気に入らなさそうに顔をしかめる。

「グリップは滑る、弦にはほつれ、弓本体のバランスも酷いもんだ、これじゃ矢に速度が出ないし狙いも定めにくい。ゴミ捨て場から拾って来たのか?」

「……お金に余裕がある訳じゃないし、その辺の武器屋で安いやつを……」

「はあ……安物買いの銭失いだな。僕についてこい」

——言われるがままにトニーのラボまで付いていくと、そこにあったのは分厚い鋼鉄の扉。

扉には英語で武器庫との文字が大きく描かれており、物々しい雰囲気醸し出していた。

トニーは黙って扉の前に立つと、その横にあった指紋認証用のパネルに指を押し当て。

「僕だ、開けてくれ」

『トニー・スターク……認証完了。サトウ・カズマ……アクセス不許可』

「僕の権限で許可する」

『認証完了』

フライデーとはまた違った、もつと機械じみた自動音声がかくと、目の前の扉が左右に分かれて開く。

「こつちだ」

「うわ、すげえ……」

部屋の中には、ゲームでも見ないような大量の武器。

俺がいた世界より何世代も進んでるとしか思えない、近未来感漂う装備が所狭しと並んでいた。

「よし、見つけた。ほら、これを君にやる」

そんな中、トニーが一つのロッカーから引つ張りだしたのは、折りたたまれた棒状の何か。

それが何かと聞こうとするのと同時。

トニーがその棒切れを力強く振ると、瞬時にアーチエリーへと変形した！

ビンツと、変形の勢いで張った弦の音が武器庫に響く。

「……か、かっけえ！」

俺の反応に満足そうに鼻を鳴らしたトニーは、自慢げに語り始めた。

「この弓は、とある男が持っていたものだ。名前はクリント・バートン、通称ホークアイ。アベンジャーズのメンバーだ」

なにその中二心くすぐられるコードネーム。

カッコいい……のだが。

「トニーが元居た世界で組んでたヒーローチームの事か？ 空飛んでビームもミサイルも出せるお前の仲間の武器が弓と矢ってどうなんだ。役に立つのか？」

それを聞いたトニーは面白そうに笑うと、腕時計からホログラムで出来たモニターを出現させ、酒場のカウンターテーブルで酒を滑らせ

るかのように俺の方へと飛ばしてきた。

受け止めたそのモニターに映っていたのは、一人の男。
アスレチックのような複雑で立体的な地形をした広大な部屋で、弓矢を手を駆け回っている。

何かを察したのか、その男は鷹の目のような鋭い視線と共に体を反転させると……………。

「まじかよ」

即座に背の矢筒へと手を伸ばして二本の矢を弓に番え、浮遊していた二体のドローンと同時に射抜いた。

他にも、一本の矢を敵集団の中央に放ったかと思えば、やじりが大爆発して敵を一網打尽にしたり、矢の刺さった個所が急激に高熱になって鉄骨を溶かしたり……………。

特殊なパーツが装着されたやじりを使い分けることによって、多彩で巧妙な攻撃を可能としていた。

……………なるほど、弓矢ならではの攻撃だ。

映像が終わり、ホログラムのモニターがフツと消える。

トニーは弓を俺に手渡して。

「前に君に言っただろ？ めぐみん達のパーティーリーダーを引き受ける代わりに、僕が君をサポートするって」

「……………あつ、ああ……………」

「……………忘れてたのか？」

空飛ぶキャベツ、ベルディア、冬将軍とか色々あったからなあ……………。

この異世界に来てからというものの、すさまじく濃い生活を送っている気がする。

「まあ、別にいい。とにかく……………これはもう君のものだ」

「サンクス、トニー。いいもの貰ったわ」

俺は任務の前に銃を点検するクールなエージェントを気取り、弓を握りしめたり、弦を引いて調子を確認していると……………トニーがなにやらニヤニヤしながらこつちを見てきた。

「貰ったおもちやで早く遊びたいって顔してるな？」

せつかく気取っていたというのに、そんな俺の心を見透かしたうえ

で、それを楽しむとか中々いい性格をしている。

「お前ってホント……」

「試そうって話をしてるんだ。早速トレーニングルームで試射してかないか？」

……こいつは本当に、いい性格をしている。

——広々としたトレーニングルームの壁際で、トニーがテニスボールを三つ構えて俺の横に立つ。

「ボウズ、準備は？」

「いつでもいい」

弓を構え、装備されたレーザーポインターを起動した俺を確認すると、トニーはテニスボールを俺と壁の中間をめがけて山なりに投げた。

俺は、放物線を描いて落下するテニスボールに照準を合わせ。

「狙撃！・ 狙撃！・ 狙撃ッ!!」

矢が空気を裂く音が三度響いたのちに、シンと部屋が静まり返る。

ボールが床を跳ねる音は一切せず……、

「まっ……七十点ってところだな」

「どう見たって百点だろ」

「バートンなら三つ同時に射抜いていたさ」

「お前のとこの化け物集団を基準にすんな」

……壁には、三つのテニスボールが矢によって壁に縫い付けられていた。

▽

裁判の翌日。

トニーの記憶を元に戻す目途は……まだ立っていない。

なんでも、連続で記憶を消去したせいで脳にはダメージが残っており、回復するかどうかわかっていないのだ。

アクアの回復魔法でその辺はどうかできないのかと思ったが、こ

これは病気に似た症状らしく、回復魔法も効かないらしい。

そんなトニーはと言うと……。

「あれがジャイアントトード……へえ、本当にモンスターが蔓延る世界なのか……」

「スターク殿、あまり近づき過ぎぬように。……しかし、雪が降っていても活動するものなのだな」

ジャイアントトード討伐依頼を受けた俺達に同行し、雪の降る平原で興味深そうにジャイアントトードを眺めていた。

今は戦えぬ身のトニーに対し、クレアが心配そうな顔をしながら側につき。

ダクネスは、そんな二人を守るようにして立っている。

俺の横では、アクアとめぐみんが不安そうにソワソワしていた。

「ね、ねえ。相手はあのカエルよ？ トニーはあんなんだし、私たちだけじゃ不安なんですけど。なんでカズマったらそんな自信満々な顔してるの？」

「というより、その背中に背負ってる棒みたいなのは何ですか？」

俺は静かにカエルを見据え……、

「ふっ……まあ見てろ」

背中から取り出した棒を強く振り、弓へと変形させる。

それを見ていためぐみんが、目を紅く輝かせて俺に迫ってきた。

「な、なんですかそれは!? カズマのクセに無駄にカッコいいですよ！」

「クセについてどういうことだよ。これは俺の才能に目をつけたトニーが、俺にぴったりだったってくれたんだ。今からこれで無双してやるから、今日はお前の出番なしな」

「むっ……」

それを聞いたためぐみんは眉間に皺をよせて頬を膨らませるが、俺はお構い無しに弓に矢をつがえ……、

「狙撃ッ!!」

特殊なやじりを装着された矢をカエルめがけて放った。

矢は俺の狙い変わらず、吸い込まれるようにカエルの頭に突き刺さっ

た。

「おお……カズマさん、中々やるわね。今度からレゴラスニートつてよんであげ……ちよっ！ あのカエル、矢が頭に刺さったのに動いてるじゃない！」

「頭蓋骨までは貫通できなかったみたいだな」

当然だ。牛よりデカイカエルの頭を大してレベルも高くない狙撃スキルで貫けるワケがない。

だが、俺にとってそれはどっちでも関係のない事。

「カ、カズマさん！ カエルがこっちに来てるんですけど!! 逃げましょう？ ねっ？ ねえってば！ いやー！ 私カエルに食べられるのはもう嫌よ!!」

情けなく半べそかきながら背を向けて逃げるアクアを尻目に、俺は弓についているボタンを軽く押す。

その瞬間。

こちらに向けてノソノソと近づいてきてたカエルの頭が爆発四散した。

頭を吹き飛ばされたカエルは首から上を爆煙に包みながら、地面に倒れて動かなくなる。

その戦果を確認した俺は、手に持っている弓に目を落として思わずつぶやく。

「これはすげえな……」

「トニーが作っただけはありますね……やじりが爆発するとは……あの、それ使用を控えてもらえませんか？ 私の立ち位置が危ぶまれるので」

「超断る」

犬歯を覗かせて掴みかかってきたためぐみんを適当にいなし、新しく手に入れた武器に関心していた時。

ボコツと、近くの地面がせりあがる音がしたので目を向けると、一匹のカエルが近くの地面から湧き出していた。

「フツ……わざわざやられに出てきたのか……」

俺はそうかつこつけて矢をつがえ……

——ボコッ。

——ボコボコボコッ。

それは、ギャグかなにかのような勢いで。

最初に現れたカエルに続くようにして、地面からカエルが次々と沸いて出てきた。

「あ、あの……さっきの爆発音につられて出てきたんじやないですか!?!」

「そこら中に埋まつてるなんて思うわけないだろおおお!? め、めぐみん！ 爆裂魔法だ！」

「ま、任せてください!! カエルごとき、この私の爆裂まほ」

そこまで口上を述べたところで、めぐみんは横から伸びてきたカエルの舌にからめとられ、そのまま頭から丸呑みにされてしまった。

……………。

「め、めぐみん!! 食われてんじやねええええ!!」

腰のショートソードを素早く抜き、めぐみんを捕食中で動けないカエルを何とか倒す。

というか……………。

「や、やばい！ カエルが矢の数より多い！」

「なにをしているのだお前と言うやつは！ シンフォニア卿！ あなたはお逃げください！」

みかねたダクネスが突っ込んでカエルの注意をいくらか引くが、それでも漏れたカエルがこっちに向かってくる。

「あー……僕らは逃げるべきか？」

「ええ、そうしましょう！」

「トニー殿のパーティーマンバーだと聞いてどんな強者達なのだろうと思っていたのだが……ど、どうなっておるのだ……？」

トニーとアクアは俺達の様子に見かねたのか逃げる準備をし、クレアも俺達を見ながら首をかしげて背を向けている。

……………が。

その退路を断つようにして、三人の目の前に三匹のカエルが地面からボコッと湧き出した。

「いやあーっ!! なんてこうなるのよー!! 助けて! 助けてカズマ
さーん!!」

「くっ……カエルはザコモンスターと聞く。こうなったら我が剣で
……」

立ちほだかるカエルの姿に、アクアが絶叫して泣き喚き、クレアは
覚悟を決めた顔で腰に差した剣を抜く。

横立っていたトニーはアクアと同じく取り乱す……かと思いきや。

「……………」

「ね、ねえトニー? 何やってるの? 何で突っ立ってるの? あき
らめたの?」

トニーはカエルを前にして腕を組んで仁王立ちし、余裕そうな笑み
を浮かべる。

……流石は将来ヒーローになる男と言ったところか。何か策でも
思いついたにしても肝が据わっている。

精神年齢が幼くとも、その素質は昔からあったようだ。

不安そうにトニーを見つめるアクアの問いに、トニーはフツと鼻で
笑いながら答える。

「カエルは動く生物しか獲物と認識できない。つまり、こうして動か
ないでいると捕食されることは無いんだ」

「な、なるほど! トニーってばスゴいわ!! 動かないだけでいいん
でしょ!? 天才的な策じゃない!」

「生物にも詳しいとは……流石だ、スター」

——世界が違えばカエルの習性も違うのか。

「おまえらああああ!! 食われてんじゃねえええええ!!」

「しっ……シンフォニア卿おおおおお!!」

天才的な策で見事カエルの口に収まった三人を救助すべく、俺は弓
に矢をつがえてカエルを射抜こうとするが、湧き出た他のカエルが行
く手を阻む。

「か、数が多すぎる!! フライデー! クインジエットをこっちに寄

越してくれ！ 機銃掃射でこいつらを……」

『巻き込まれる可能性が高いです。推奨できません』

「くそつたれーっ！」

背後から迫るカエルの足音。

目の前には、脚やら腕やらだけカエルの口からはみ出てるトニー達。

あと数秒後にはこいつらの仲間入り。

そう、あきらめかけたその時。

『『カースド・ライトニング』 ツツツ!!』

——真つ白な平原に、鈴のように澄んだ魔法の詠唱が響き渡った。複数の闇色の稲妻がまつすぐ、そして正確に。

体内に飲まれた仲間たちに傷一つ付けることなく、カエル達の弱点のみを撃ち抜いた。

倒れ伏したカエルの口の端から、飲まれた三人がデロツと流れ出てくる。

汚くて触りたくないが、そうも言ってられない。

『『ライト・オブ・セイバー』 ツ!』

再び響いた魔法の詠唱。雪で白く染まった平原を蹴り抜け、小柄な影が飛び出した。

その影は、俺が三人を助けている間に、ダクネスを取り囲んでいたカエル達を腕から伸びた光の剣によって次々と切り伏せていく。

なにあれ。ジエダイ？

「大丈夫ですか？」

あつというまにカエルを片付けた張本人……黒のローブを身に纏い、めぐみんと同じ紅の瞳を持つその少女は、あれだけ動いて息一つ乱すことなく俺達に手を差し伸べた。

「ありがとう……あやうくカエルの昼飯になる所だった」

「無事でよかったです……まったくもう、めぐみんったらこんなところで死にかけてちゃだめ……」

瞳の色的にめぐみんとは同じ一族なのだろうか。

目の前の少女は、倒れ伏すめぐみんを一度見て呆れたようにため息を一つ付くが……、

「えっ……ここで倒れてるのって……ス、スターク先生!? スターク先生ですか!?!」

……そのすぐ横で同じように粘液まみれで倒れるトニーに目を見開いた。

少女はトニーのそばに駆け寄り、心配そうに声をかける。

「スターク先生! 私です! ゆんゆんですよ! こんなところで何やってるんですか!?! あなたが逮捕されたって聞いて飛んできたんですよ!?!」

トニーはと言うと、雪原でぐったりとしながらけだるげに答えた。

「やあ、どうやら未来の僕も立派にプレイボーイやってるようだな。知り合いがかわいい子ばかりだ」

「!?!?!」

!?!?!瞬で顔を真っ赤にした少女がカエルを葬ってた時以上の速度で後ろに飛びのく。

俺だつたら一々口にしないでバレないように見……。

いや、違う。そうじゃない。

「こればかりはゆんゆんに同情しますね……」

「あ、めぐみん……! その、スターク先生はどうしちゃったの……?」

ついに実験か何かに失敗しておかしくなっちゃったの!?!」

あながち間違ってるない。

「お久しぶりです、ゆんゆん。その、トニーは色々事情があつて……説明しますね……」

▽

ゆんゆんと呼ばれた少女を連れ、ラボに戻って一時間。

「そんな……記憶が若返るなんて……」

「裁判で勝つには仕方のない事だったんだよ。まあ、僕はこの経験を楽しんでるが」

そう言つてカクテルを飲んでゆんゆんとなつた少女にピースするグラサンのオツサン。

記憶が戻つた時のことも考慮してもう黙つててくんないかなこいつ。

「それで、治す目途は立ってるの?」

「いえ……それが、まだ何も言えないのですよ……」

それに付け加えるようにして、めぐみんはすこし難しい顔をしてぼつりつつぶやく。

「で、ですが……」

「……どうしたの? 他に手があるの?」

ゆんゆんの問いに言い淀んだめぐみんは、トニーを一度見て不安そうにしながら答えた。

「荒治療ですが……あえてもう一度電流をながすことで記憶を呼び戻せるはずですよ……理論上は」

「それ絶対悪化するやつよね!」

「うぐぐ……否定しきれません……」

俺はトニー脳のダメージが自然回復するまで様子見すべきだと意見しようとするが……。

それを、小さな電子音が遮つた。

なんだと思つて音源の方を見ると、クレアがポケットからスマホのようなものを取り出していた。

「レインか? 一体どうした。今少々忙しいのだが……」

トニーが提供した技術なのだろうか。

異世界ファンタジーの世界であんな現代チックなものを見せられると、なんだかやるせない気持ちになる。

と、相変わらぬトニーのファンタジーブレイカーっぷりに軽く呆れていると、通話をしているクレアの顔が一気に青ざめた。

「な、なんだと!? それは確かな情報なのか!? ……くっ……」

なにやらトラブルのようだが……。

そんなクレアの様子に、ダクネスが心配そうに声をかけた。

「シンフォニア卿。何かトラブルですか?」

「ダステイネス卿……その、どうやら王都の近くの村を魔王軍が乗っ取ったらしく……」

「それは面倒ですね……そのまま魔王軍の拠点にされてしまえば、王都への攻撃がより激しくなる……」

「スターク殿が整えた最新鋭の防衛設備があるからその辺は怖くないのですが……問題は、その魔王軍が村民を人質にとり——」

「——」トニー・スタークを呼べ」と要求している事なのです……」
「!?」

クレアのその言葉に、俺達の間には動揺が走った。

「は!?　なんでトニーが名指して呼ばれてるんだよ!?　そんな理由なんて……いや、たくさんあるな」

「トニーは確かにロクでもない所があるけど、わざわざ人質取ってまで狙われる……人だったわね」

「否定しません」

「君達僕が何言われても傷つかないと思ってないか？」

俺達のやり取りにクレアは若干引き気味だが、咳ばらいを一つして話を続ける。

「スターク殿は幹部であるベルディアを葬った。幹部を葬った冒険者を討ち取れば新しい幹部の席へと近づける……魔王軍はそんな連中だ。スターク殿を討って名を上げたいのだろう」

それは……。

「トニーは、今は記憶が無くて戦えません……それとスーツも……」
ここにいる全員が思った事を、めぐみんが代弁した。

今のトニーは一般人同然。戦うことはできない。

ダクネスが険しい顔でクレアに尋ねる。

「シンフォニア卿、期限はどれだけあるのですか？」

「一週間です……それまでにスターク殿が姿を現さなければ、村民を一日に十人ずつ処刑すると……」

「厄介ですね……討伐隊の編成は？」

「ええ、検討中のようですが……現在、敵拠点への大規模な攻撃作戦を立案中でして……オマケに、村を占領しているのは魔王軍準幹部……そこに討伐隊を派遣できるほどの余裕があるかどうか……」
「くっ……」

悔し気に唇をかみしめるダクネスとクレア。

部屋に悲壮感が漂い始める。

「なあ」

そんな空気の中、トニーが手に持ってた飲み物を置き、おもむろに立ち上がった。

またなにかふざけたことを言うのかと思い、俺はトニーの発言を制そうと手をかざして。

「トニー、ジョークを言いたくなったら後にしるよ。今結構大事な話を——」

「僕が戦う」

シンと、その場が水を打ったように静まり返った。

……今なんて？

「トニー……先ほども言っただろう。今のお前には、記憶もスーツもない。お前は戦えないんだ」

ダクネスその言葉に、めぐみんがハツとした表情を浮かべる。

「いえ……もしかしたら、記憶が戻るかもしれない……過去の記憶を体験すれば……それが刺激になって……」

「でもスーツが……」

「ないなら作ればいい」

「どうやって!? スターク先生は今三十年分記憶が若返ってるんですよ!?! 先生からすれば、三十年も先の技術をどうこうしろって言うてるようなもので……」

ゆんゆんがそこまで言ったところで、トニーがいつもの飄々とした笑みを浮かべ、鼻でフツと笑って遮った。

「びぎんのや」

「スターク先生……？」

今のトニーの顔からは、さつきまでのふざけたチャラ男のような雰囲気は嘘のように消え去っていて、

「三十年後の未来の技術と言えども、そのおおもとにあるのは過去の技術だ。なら、理解できない理由はない」

「不可能ですよ！ わずかな過去の断片から未来の技術を読み解くなんて！」

「できるさ、なぜなら僕はトニー・スタークだからだ。三十年後の教科書にだって、きつと僕の名前はある」

そこにあるのは、いつものヒーロー^{トニー}の顔だった。

トニーのその言葉を聞いたためぐみんは、意を決したように頷き。

「トニー……私が手伝います。ともに作りましょう、新しいスーツを」

あなたと私なら必ずできます。と、そう付け加えて、めぐみんはトニーと共に研究室へと消えていった。

第37話 IN MEMORIES

あそこに転がってるのは……何かのゴミ。

あそこに散らかってるのは……何かの食べカス。

あそこで山になってるのは……あれも何かのゴミ。

駄目だ、頭がボーツとしている。

ふと横を見ると、今の私以上にボーツとしていそうなトニーの姿が。

「トニー……ヒゲが……伸び荒れてますよ……剃ってきたらどうですか……?」

「そういう君こそ……髪が部屋の角に溜まった埃みたいだぞ……」

浮浪者みたいな見た目じゃで出来ることもできなくなるとトニーに言おうとしたその矢先。

「二人とも今すぐ寝てください!! もう五日もここに籠って徹夜してるんですよ!?!」

そんな、ゆんゆんの怒号が響いた……気がする。

「ああ、えっと……? もう朝ごはんの時間ですね! トニー! シリアルを用意します」

私はシリアルが入った箱を手に取り、ボウルにその中身を……、

「めぐみん! それ鉄くず入れ!! 寝ぼけてるの!?!」

「なにやってるんだ君は? もう寝てろ、僕がココアでも入れてやるから」

そう言つてトニーは、身近にあつた手頃なカップを……

「スターク先生! それプラズマ廃液です! 飲んだら死にますよ!?!」

もうっ! なにやってるの!?! 今すぐ二人とも寝てよ!!」

「寝てたらスーツはできません」

「彼女と同意見だ」

「徹夜でボケてもできないわよ!! ああ、もう……!?!」

怒った表情のゆんゆんが、なにやら詠唱しながらこっちへと向かってくる。

この子はいざという時、妙なまでの行動力が……。

トニーも何か危なっかしさを感じたのか、少し焦った様子でゆんゆんの前に手を突き出す。

「あー……積極的な女性は好きだが、その表情で迫られると身の危険を——」

『スリープ』！』

ゆんゆんに睡眠魔法をかけられたトニーが、その場で膝から崩れ落ちて地面に転がる。

トニーのそんな様を見届けもせず、ゆんゆんはすぐさま視線を私に移してにじり寄ってきた。

「あ、あの……ちよつと待つ」

「寝なさい！ 『スリープ』！』

ゆんゆんの手のひらが私に向けられると同時に、強烈な睡魔に襲われ——

▽

「——ハッ！」

あれからどれだけ立っただろうか。

焦燥の感情から一気に脳が覚醒した私は、かけられていた毛布を蹴り飛ばして跳ね起きる。

「おはようニュークリアレディ。やっぱり人間は寝ないとダメなようだ」

声が出た方に目を向けると。

トニーとそっくりな声をした何者かがホログラムを操作して……。

「トニー、ヒゲ全部剃っちゃったんですか!? 一瞬誰かと……」

「肉体年齢はともかく、中身は年相応の若者さ。剃り方どころか、髭すら生えてないんだぞ」

「未来のあなたが怒るでしょうね……」

目をこすりながら、トニーが立つ作業台へと向かうと横からずいとコップを持った手が伸びてきた。

中身は真つ黒な液体で満たされており、底の方からシユワシユワと音を立てて気泡が立ち上っている。

「はい、冷たいコーラ。これ飲んで目を覚まして」

「おお、気が利きますねゆんゆん」

中身を一気に飲み干すと、喉を強烈な刺激が伝い、鼻から芳香が抜けていく。

「ふう。これで眼もバツチリさえました。ところで、私はどれだけ眠っていたのですか？」

「十時間つてところ。眠ってる間に機材の調整と片付けならしといったから」

意外な言葉に、おもわず目を丸くする。

「おや、見たこともない機材がゴロゴロしているはずですが、大丈夫だったのですか？」

「横で様子をみていたから、ある程度は機材の使い方くらいは分かっていたわよ」

族長の娘にして学校の成績第二位の面目躍如といったところか。

なにも教わってないというのに、見ただけでそこまで理解できるのは高い知力がなせる業だろう。

「私のライバルを名乗るだけはありませんね。少々お手伝いも頼んでいいですか？」

「いいけど、あんまり複雑なのはできないよ？　というか……」

そういつてゆんゆんが向けた視線の先では、ハードな音楽をバックに黙々と作業するトニーの姿が。

「スターク先生は記憶を失っているから、私とほとんど変わらない状況のハズなのに……」

「まさか一日足らずで理解するとは思いませんでしたね……」

以前のトニー程とはいかないながらも、私やフライデー、おじすかのアシストを得てみるみるうちに知識も技術も身に着けてしまった。

ふざけた言動、行動ばかりが目立っていたけれど、流星は人類随一の知力持ち……。

「めぐみん、君も早くこっち来て手伝ってくれないか」

「あ、はい！ 今行きます」

スーツを作る私達に有利な点が二つあった。

一つは、以前のスーツの設計図があった事。

それと、アークリアクターの予備があった事。

やはりスーツの大切な動力源だけあって、予備は大量に作ってあったみたいだ。

リアクターも含めて一から作れとなっていたら、流石に期限までに間に合わなかったかもしれない。

しいて問題を上げるとすれば。

「しかし……未来の僕が作るこのアイアンマンスーツとやら……凄まじい破壊兵器だな。これが十機もあればアメリカは何一つ恐れるものはなくなる。どんなテログループだろうが怖くない」

……発想が、少々物騒だ。

トニーがヒーローになったきつかけは知っていたけれど、なんとうか……。

最強の武器で敵を蹴散らせば犠牲者が減るといふ思想で動いている。

理解できない訳じゃないけど、ヒーローっぽい考えかと言われると微妙だ。

「トニー。今作ってるのは兵器ではなくみんなを守るアーマーなんですから……そんな言い方したら未来のあなたが怒りますよ？」

「まったく……未来の僕の話ばかりだな……ヒーローだったのは聞いたが、僕はそんなに凄いやつになるのか？」

「ふふっ……ええ、凄いですよ。見た目も強さも……ああ、あと皮肉も」

「変わらない物もあるということか」

皮肉っぽく笑いながら、トニーは組み立てたパーツをアイアンマンスーツの胸部に取り付ける。

そして、いつも見てたのとはほぼ変わらない見た目までくみ上げられたスーツの全身をみて満足げに鼻から息を吐く。

これでスーツはほぼ完成だ。

昔の設計図をそのまま流用したので、トニーが以前に装着していた Mk. 45 の劣化コピーのようなスーツではあるが、これでも十分に戦える神器級の装備だろう。

五日半で完成……少々時間をかけ過ぎたかもしれない。

あとは細部の調整とテストのみ。

五日半でこれならきつと間に合う。

これからは、トニーに戦う準備をしてもらわないと。

「トニー、これを装着してください」

そう言つて私が用意したのは、骨組みだけのスーツ。

頭部を守るヘルメットは装着されてるものの、胴体はかなりスカスカ。

予備のアーリアクターと接続されており、戦闘や飛行時の姿勢制御といったものの練習用に私がスーツ開発の片手間に制作したものだ。

「なんの戦闘訓練も無しに戦わせるわけにはいきませんからね。これで訓練しますよ」

「まあ……来るとは思ってたが……その、いきなりなのか？ このアーマーが勝手に動いて戦ってくれるんじゃない……おい、引つ張るな！」

少し前のあの勇ましい発言はどこへやら。

私は、不安気味にたじろぐトニーの手を引つ張る。

「あなたが自分自身の力で戦つてこそ、あなたはヒーローなのですよ？」

その言葉に、トニーがハッと目を見開いた。

私はさらに話を続ける。

「トニー。無責任にコンピュータに任せるのではなく……あなたが立つて、あなたが前を向いて、あなたが戦わなくては駄目なのです」

「……！」

「それが、強大な力を持ったヒーローが負うべき責任というものなのです。でも、恐れなくてください。そのための訓練は、私達が責任を持ってします」

トニーの今の思想がどんなものであろうと、心の底にあるのは人を助けたいという気持ちであることに変わりはないはずなのだ。

それは、あの時戦うと言って立ち上がったトニーの目を見れば分かった。

「……なるほど、未来の僕が君を科学者としてだけでなく、戦闘面でも信頼を置いてる理由がわかったよ」

そう言ってトニーは、私が渡した骨組みのスーツを起動した。

ガチャガチャと音を立て、トニーの体をスーツが覆っていく。

我ながらロマン面も追及して出来たなど、その変形を見て満足気に鼻から息を吐く。

「よし、バシッと服も決めたことだし……手始めにヒーローになるとするか」

今度は手を引かれるでもなく、自分の意志で、自分の脚で歩き始めたトニー。

私はそんなトニーの前を歩き、訓練室へと案内し……

「ねえ、めぐみん……良いこと言ってるとは思っただけ……責任云々を説くなら、毎日意味もなく爆裂魔法を撃つのやめたら……？」

良いことを言ったのに茶々を入れてくるゆんゆんは無視して、私は足早に立ち去るようにして先導した。

「おい、もっとゆっくり……なんだかこれ歩きづらいぞ……Hey！設計ミスだ！このままじゃ転ぶ……Ow！」



そしてやってきたのはトレーニングルーム。

この超広い空間なら、多少上に飛んだって大丈夫だ。

部屋全体を見通せる高い位置に組み込まれた分析室から、私はガラス一枚隔てた向こうのトニーに指示を飛ばす。

「さて、早速ですがまずは飛行テストです。私と同じくらいの位置まで飛んでからホバリングで制止して下さい」

「御安い御用だ」

そうカツコ付けてトニーは上へと飛び立つ。

アークが生み出すプラズマの軌跡。

広い空間の真ん中に美しい一条の光の線を残し……、

「……次はもつと出力を抑えてください」

……そのまま、頭から天井に突きささった。

『指一本……動かせないんだが……』

「なるほど。どうやら脊椎を損傷したみたいですね」

『そんな軽く言うことか……？ 死にかけてるんだぞ……？』

「その辺は任せてください。首と胴がSAYONARAしても治せる人がいますから。アクア、きてくださいーい！」

『任されたわ！ これとっても楽しいわね！』

『イカれた世界だ……』

クレーンを操作し、その先に吊られてるアクアをトニーに近づけてヒールさせる。

ついでに頭部が天井にめり込んだトニーをアクアに引っ張りださせ、そこから仕切り直し。

「——大分いい感じですね。もう矢や軽い魔法程度なら簡単に避けられるでしょう」

『ここに来るまでに五回以上致命傷を負ったぞ！ このスーツ君が作ったんだろ!? 調整がピーキーすぎる!』

「さて、ここからは戦闘訓練です」

『無視するな!』

私がトニーに開始の合図を告げると同時。

『ハハハハハハハ!! この時を待っていたぞ!』

トニーの目の前に、頭上から降ってきた一つの人影が、金属音と共に拳を地面に突き立てて着地した。

巨大な質量エネルギーによって地面はヒビ割れ、土埃が空を舞う。

その中から出てきたのは……鎧を着こんだ、普段の冒険者としての

姿をしたダクネスだ。

二重の意味でインパクトのある登場をしたダクネスに、トニーは少々驚いたようなそぶりを見せるが……

『でかいカエルを倒しに行つたとき、君の戦いぶりを見せてもらったぞ。まるで当たらない剣で、僕の練習相手が果たしてつとま……』

小馬鹿にした態度でダクネスをあざ笑うトニーだったが、最後まで言う前に、トニーの目の前に風切り音を立てて矢が突き刺さり……、

『What the——』

矢から肉眼でも目視できるほどの強力な衝撃波が周囲に広がり、トニーを吹き飛ばす。

『ッ!? クソ!』

吹き飛ばされてもすぐさま空中で姿勢を直し、ホバリングできるのは今までの訓練のたまものか。

宙に浮いたまま、トニーは矢が飛んできた方角を見る。

そこには……。

「——ようこそ地獄の入口へ」

以前見せたハイテク弓矢を装備し、決め顔で立つカズマの姿が。

……ちよつとカッコいいじゃないか。

中々に紅魔族の琴線を撫でてくる。

そんなカズマにトニーはすぐさま掌を向け。

『これでもくらえ!』

トニーのリパルサー光線が、光の橋を架けるかのように掌からカズマへと伸びていく。

『ライトニング!』

しかし、その間に割り込むようにして飛んできた電撃魔法によって、カズマに届く前に空中で爆散した。

超高速で飛ぶりパルサー・レイの先端を捕らえ、魔法で叩きおとすなんて芸当ができるのは一人しかない。

『スターク先生、許して下さい! 向かう先が向かう先です! 全力

で鍛えますから!』

トニーから貰ったB目標捕捉アシストアームカバー・O・T・T・Iを装備し、立ちふさがるゆんゆん。

ダクネス、カズマ、ゆんゆんに囲まれたトニーは深刻そうにため息をついた。

『随分とスパルタな戦闘訓練だな……』

そう厭味ついたらしく愚痴るトニーに、私は一応声をかけてみる。

「どうしますか? 難易度を下げますか? まずはダクネス一人からでいきますか? 楽勝すぎるかもしれませんが」

『いいや、このままで行く』

そうこなくては。

引くつもりは一切なさそうな、強気な声色のトニーに私は安堵する。

『お、おい! めぐみん! 私をザコ敵扱いするのはやめてくれ!』

ダクネスが何か言っていたが、誰もそれに触れることは無く、トニーがまず先に動き始めた。

いきなり上に飛び上がったかと思うと、距離を取りながらカズマやゆんゆんめがけてリパルサー光線の雨を降らせる。

『おわっ! ちょよ、あぶなっ!』

『『ファイアーボール』ツ! 『ライトニング』ツ!』

紙一重で危なっかしく避けるカズマと、迎撃するゆんゆん。

『任せろ! 二人とも私の後ろに!』

ダクネスが嬉々としてカズマとゆんゆんの前へと躍り出て盾になる。

リパルサーが直撃する度に嬌声を上げてて怖い。

ダクネスが盾になりはしたが、トニーはひたすらに上から光の弾幕を張り続け、反撃するチャンスを全く与えない。

『おい、ズルいぞクソチート!!』

『スターク先生! 飛び続けるなんて卑怯ですよ!! 降りて戦ってください!』

『悪いがお断りだ。僕は僕の強みを活かして戦う。君たちにはそれが

できないのか？ 戦闘経験五分未満の僕相手に？ こりや、この訓練で得られるものはなさそうだな』

『んぎぎぎい!!』

トニーの強烈な煽りを受け、カズマとゆんゆんが激昂する。

空から一方的に撃ち下ろして強みを活かしているとか言ってるが、あれはどうなのだろう……。

『カズマさん、下を向いてください。目にももの見せてやります』

私には集音マイクで聞こえているが、ゆんゆんがカズマに小さな声で物騒な声色で呟く。

何をするつも……

『フラツシュ』

『ッ!?!』

ゆんゆんの手から放たれた強烈な閃光がトニーの動きを一瞬止める。

「——ッ!!」

……そして、ついでに私の目も焼き、私は地面にのたうち回る。

ゆ、油断した……。

戦況はどうなっているだろうか。

『狙撃!』

私と同じく眼がくらんだのか、トニーは硬直し、カズマはその隙を逃さず、矢をトニーに放った。

その矢はトニーに当たるすんでのところで爆発し、我が物顔で飛び続けたトニーの体を一気に地面へと向かわせる。

『だーはははは!! 煽っておいてそれとか恥ずかしくないの？ バーカバーカ! ざまーみろ!』

子どもみみたいな暴言を吐き捨てながら、無言で落下するトニーを見て爆笑するカズマ。

勝利を確信したのか、ゆんゆんはトニーを落下の衝撃から救おうと風魔法の詠唱を始めた。

その瞬間。

地面に激突寸前だったトニーの手足に、突如リパルサーの光が灯った。

トレーニングルームの床にわずかに肩をこすらせて火花を散らし、カズマ達の元へと猛烈な勢いで迫る。

『うわわわ!! ダ、ダクネス! 突っ込んで止めてくれ!!』

『任せ……ああっ!? なぜ無視するのだ!?!』

低空を飛ぶトニーを捕らえようとダクネスが立ちはだかるが、まるで道端の小石でもまたぐかのように避けてしまった。

何故ダクネスは残念そうな顔をしているのか知らないし、知りたくもない。

そして、防衛網を突破された二人は迎撃の体勢を取り始める。

表情の読めないマスクをして迫りくるトニーが怖いのか、かなり焦った様子で。

『あわわ……ファ、『ファイアーボ——』

ゆんゆんの瞳が紅く光り、網膜に幾何学模様が浮かび上がった。

ターゲット追尾して攻撃できるよう、目に装着したコンタクトがトニーをロックオンし、人工筋肉を搭載したアームカバーが照準をアシストする。

必中の火球魔法がトニーを迎撃するかと思われたその時。

トニーがゆんゆんとカズマの中間に滑りこみ、すぐさま上へと急上昇した。

『——ル』ツッ!』

『!?!』

燃え盛る火球の魔法を宿したゆんゆんの手は、トニーを確実に捕らえていた。

だが……トニーが自分自身とカズマとの射線が被る位置で、ちょうど上へと消えたことにより……。

『し、しまっ——!?!』

『うぎやあああああっ!?!』

本来、トニーめがけて飛ぶはずだった火球がカズマに直撃した。

……なるほど、狙いは二人の誤射を誘うことだったのか。

急編成でこさえられたチームの連携力の穴を、トニーが上手く突いた形となった。

『ご、ごめんなさい！　ごめんなさい！　カズマさん！　本当にごめんなさい！』

吹き飛ばされて床で転がってるカズマに、今にも土下座しそうな勢いで謝るゆんゆん。

介抱しようと駆け寄ったゆんゆんの足元の床を、トニーのリパルサー・レイが粉碎した。

『きやあつ!?!』

思わず足を止めるゆんゆん。

視線を上げたその先では、トニーが掌を突きつけていて。

『僕がその気になっていけば、今の一撃で君を倒せていたぞ。それで、あとのノーコンクルセイダーは適当に上から打ち下ろしてチェックメイト。僕の勝ちだな』

そう言つて、分析室の窓から覗く私めがけ、トニーはサムズアップした。

強味^{賢さ}、活かしたなあ……。

▽

「あのな、俺がその気になってたらステイル一発でこの戦いは終わってたぞ」

ラウンジで反省会をする中で、カズマが唐突にそう言った。

この男……。

訓練にならないので、スーツに対しての即死技であるステイルは禁じていたのだが……。

ヒールで完全に治ったはずの体をこれ見よがしにさすりながら、恨めし気にブツブツと愚痴るカズマのその姿は、最高に情けなかった。「カズマったら、いくら何でもそれはダサすぎると思うんですけど」

アクアにまで言われ、カズマは不貞腐れ気味にラウンジのソファに転がる。

「で、初戦で三人まとめてぶっ飛ばした僕は、問題なく戦えるって事でいいのかな？ ああ、それともこの三人じゃ練習相手が務まらないから、次はもっと強い奴と訓練？」

こつちもこつちでロクでもない。

ドヤ顔でさつき戦った三人を煽るトニーのその姿は、最高に憎たらしかった。

ゆんゆんもダクネスも歯ぎしりしてトニーを見ている。

「そのくらいにしてください、トニー。今度はリパルサーの精度をあげる訓練ですので、ドローンを出しましょう。カズマ、ドローンの操作は任せました」

「おう、今度こそお前をぶちのめして、地面の味を脳裏に焼き付けさせてやるからな……！」

「まったく……大人になってくださいよ」

私が再びトレーニングルームまで行くと、その後ろをトニーとカズマがついてくる。

先程の戦闘の勝利で調子が上がったトニーは、私の後ろで得意げに語り始めた。

「やっぱり将来スーパーヒーローになるだけあって、僕には昔から才能があったんだな。明日でヒーローに、明後日には全員救って、それで――」

その次の言葉で、私は。

「――みんな笑顔のハッピーエンドだな」

……心の奥底が、黒々としたなにかに覆われた。

思わず足を止める。

ああ、もしかしたらこれは……神様がくれた最後のチャンスなのか

もしれない。

「おい、どうした？ 急に立ち止まって」

振り返らず、そのまま動かない私の後ろから、トニーが声をかけてくる。

「……トニー、先に行つててください。私には準備がありますので」

「作戦会議か？ まあ、そういうことなら先に行つてまってるよ。コーヒーでも飲みながらね」

マグカップにコーヒーを注いで立ち去るトニーの背を見送った私の肩を、カズマが叩く。

「なにブーツとしてるんだよ？ 準備ってなんだ？」

私は、心の奥から湧いた感情を、そのまま口から吐き出す。

それは……

「カズマ。私はトニーがあんな純粋に楽しそうでいる所を初めて見ました。……私が知ってるトニーは、笑っていても……いつもどこかに弱さや痛み、陰りがありましたから……トニーは今、初めてそれから解放されているのしれません」

「めぐみん……」

……それは、失うかもしれないという懸念から来る不安と恐怖。

デストロイヤーの一件で、トニーが死んだと錯覚した時から生まれた私の心にある恐怖。

「……お前、トニーの記憶が戻らなければいいと思ってるのか？」

私は、そう聞くカズマに背を向けたまま……小さく頷いた。

「……トニーは、別に今のままでもいいんじゃないですか？ 命を懸けなくても、トニーなら凄い発明品を作つて世界を救えます」

「毎日セクハラされるかもしれないぞ」

「うぐっ……それは……でもまあ、カズマがいるので大して変わりませんし……」

「どういうことだコラ」

慣れたいつもの空気が少しだけ流れるが、カズマは一つため息を吐くと、私の後ろから正面へと回ってきて。

「あのな、俺だってあいつの正義ガチ勢っぷりには引いてる、ドン引き

だ。もう少し自分の事を考えて生きてもいいだろうって思う。でもな、それがあいつなんだよ。俺達のトニーなんだ。トニーがどんな過去を持っていてるか、トニーが心の奥に何を抱えてるかなんて、俺にはさっぱりわからないよ。でも、それが無かったら俺達のトニーは消えちまう。本当にそれでいいのか？」

「……わかりません。私には、どうしたらいいのかわかりません……」

世界を救うためなら、トニーは喜んで自分の身を投げ出すだろう。

それは、すごく美しくて、カッコよくて、気高い事だ。

でも……それでも……、

……それが、誰にとっても良い事だとは限らないのだ。

新しく芽生えた葛藤を心に抱えつつ、トニーの訓練を続けようとトレーニングルームへ足を向け……。

『めぐみん様！ ギルドより緊急クエストが発令されました！ アクセルの正門前に多数の生命反応を検知！』

私の眼帯から、おじすかによる警告音声 flowed。

フライデーも検知したようだ。おじすかと同じ警告をラボに響き渡らせる。

「クツ、こんなタイミングで……！」

「ほーん？ 何？ この私のテリトリーに足を踏み入れようとしてる不届きものがいるっていうの？ いい度胸じゃない」

ダクネスが苦々しそうに顔をしかめ、アクアは拳をベキベキと鳴らす。

私は自分の眼帯に宿る人工知能を起動して。

「おじすか、フライデー。ドローンを飛ばして敵の情報を探ってきてください」

『ドローン発進』

ラボから発信したドローンがアクセルの正門へと向かっていく。

ただの野良モンスターのむねなら、そのままドローンに搭載された武装で鎮圧してしまおう。

一つ懸念なのは、緊急クエストが発令されているところだ。

本来、モンスターが多少正門に押し寄せたくらいで発令されるようなものではないはずのだが……。

「ねえ、めぐみん！ こっちにも映像見せて！」

「言われなくても見せますよ！」

眼帯からホログラムを照射し、今この場にいる全員に見えるように映像を投影する。

ドローンに搭載されたカメラを通して、街の様子が映し出された。

見慣れた商店街を越え、民間人の居住区を駆け抜け、敵の侵入を防ぐために閉ざされた正門を迂回して。

街を囲う防壁を飛び越えたその先で、ドローンが映し出したのは……、

「……最悪です」

平原には、漆黒の鎧を着こんだ百はくだらない軍勢が陣形を組んでひしめいていた。

そして、その中には大勢の人間が紛れ込んでいて。

あれは……！！

「み、民間人だ！ 魔王軍の連中、民間人を人質に取っているぞ！ なんて卑劣な……！！」

めずらしくダクネスが激昂し、血が出そうなほど拳を握りしめた。

アクアもゆんゆんもゴミを見るような目を映像に向けている。

……参った。あれではドローンによる攻撃も爆裂魔法も使えない。

そもそも、何故あれだけの数の魔王軍がこんな駆け出し冒険者ばかりの街に大挙しているのだろうか。

思い当たる節は……。

ま、まさか……。

「なあ、今の緊急クエストってアナウンスはなんなんだ？」

さっきのフライデーのアナウンスを聞いて、先にトレーニングルームに向かった時ハズのトニーが私たちの方へと戻ってきた。

現状を説明しようとトニーの方へと視線を向けると、それに従って

私の眼帯から投影される映像がトニーの方へ向けられる。

それと、映像の中の魔王軍が何か巨大な布をアクセルの正門側へと見せつけるかのように広げるのは同時だった。

広げられた布には大きな文字が書かれており、それをトニーが何気なく読み上げる。

「……トニー・スタークを出せ？」

「なっ……!?!」

やはりあの連中は、王都近辺の村を占領したとかいう魔王軍の攻撃部隊なのだろう。

期限まで待ちきれず、直接出向いてきたと言ったところか。

「お、おい……期限は一週間後じゃないのか？　僕はまだ……」

トニーが不安そうに私達を見渡す。

気まずい沈黙がしばらく流れ……

「トニー……不安なのはわかる……わかるが……放っておけば民間人が……」

「わかる？　わかるだつて？　おい、僕が習ったのは飛び方とちよつとした撃ち方程度だ！　確かに僕は将来ヒーローになるかもしれないが、それは二十年も先の話で、今の僕は先週まで家でパーティー開いて飲んで歌って踊ってた、ただの世界一賢いプレイボーイの御曹司なんだぞ！　それでいきなりこんな武装したアメフト選手百人と殺し合えつて？　ハッ！　時代を先取りした自殺方法だな？」

「す、すまない……」

怒りに身を任せたトニーの嫌味に、ダクネスが思わずたじろぐ。

誰も言い出せずにいた事を、ダクネスがみんなの代わりにトニーに伝えた。

私はダクネスに嫌な役をやらせてしまった事に自己嫌悪を感じながらも口を開く。

「トニー……嫌になったら逃げて構いません。我々が戦いますから……」

「少なくとも、今の僕には荷が重……」

先程のまくし立てるような皮肉から一転。

私が投影している映像の中に何かを見つけ、唐突に口を閉ざしたトニー。

「……トニー？」

トニーは、ただ黙って見ていた。

映像に映る、漆黒の鎧を身に纏った魔王軍……ではなく――

——そこで捕らえられている、絶望に染まった表情の民間人たちを。

▽

「トニー……嫌になったら逃げて構いません。我々が戦いますから……」

僕がスーパーヒーローになるのは、はるか先の話だ。

あのパワードスーツが強いのは分かる。だが、いきなり戦う覚悟を決められるかどうかは……。

剣に弓矢で武装した原始人相手なら余裕だとマシンガンを渡されたとしても、自分一人で敵は百人以上いたんじや、やってやると答える一般人はいない。

そうだ……僕はただの一般人じゃないか。

まあ、天才で金持ちで女にモテモテって事を除けばだが……。

スーツを作ると決めた時にはあんなにあふれていた勇気が。

「少なくとも、今の僕には荷が重……」

崩れ……

と、そんな時。

僕の目に、捕らえられている人々の顔が飛び込んできた。

恐怖に染まったその表情の……目の奥で助けを求めている……そ

んな顔。

——『その命……無駄にするな……』

「ぐあつ……!」

「トニー?」

突如、頭に電流が走ったかのような痛みが走る。

今脳裏によぎったのは……!?

「ふうっ……ふうっ……」

「トニー!? 大丈夫ですか!」

——『私が生み出したものの中で、最も素晴らしいのは……お前だ』

「頭が割れそうだ……!」

酷い頭痛に襲われながら、脳裏にフラッシュバックする謎の光景達。

——『私にはあなたしかいない』

そこに映る、名前も知らない、そばかすが特徴的な女性の姿に。

思わず自然と、絞るように、小さく、僕の口からその名が出てきた。

「ペッパ……?」

「トニー、まさか……記憶が?」

仲間たちが心配そうに僕の周りに集まってくる。

その中で、めぐみんが僕のそばに寄って肩に手を置いてきた。

「トニー……あなたには言わなくてはならないことがあります」

ふと見た彼女の顔は……悲し気ではあったが、その瞳の奥に強い決意の光を宿していて。

「私は……あなたの記憶が戻らなければいいと……そう思ってしまったんです。自分の為に生きる人生を送ってもいいんじゃないかと……」

なんの話をしているんだ?

僕の……僕の記憶……。

「あなたが抱える痛みを和らげよう。幸せになってほしい。そんなのは……トニーの意思を無視した、恩師を失いたくない私のワガママの

為の、ただの口実だったんです。あなたは……とつくにそれを乗り越えてきたんですよね」

——『僕のアーマー。あれは僕にとって……暇つぶしでも、趣味でもなく……僕を包む繭だった』

まるで、頭の中で勝手にビデオが再生されているかのようだ……。見知らぬ光景ばかりが見えるのに、心のどこかで懐を感じる。

——『君はより大きな世界の一員となったのだよ』

「その記憶があなたの強さを作り……その心があなたをヒーローにしたんですね」

「……そうだ」

ああ、そうだ。

——『やっとわかったんだ。何をすべきか』

——『真実は——』

I 私
A は
M ア
I イ
R ア
O シ
N マ
M シ
A ン
N だ

「——全て思い出した」

今迄僕を築いてきたすべてのものが。

頭と、心を駆け巡り、光を灯した。

僕の意味に反応したスーツがラウンジの階下から飛来し、僕の身を包む。

「トニー……?」

不思議そうに僕を見る全員の日を見て……。

「役目を果たしてくるよ」

そう言って、マスクを閉じる甲高い金属音をラウンジに響かせた。



スーツの速度なら、ラボからアクセル正門なんて三分とかからない。
い。

正門前の平原に着地した僕は、目の前にいつ魔王軍の軍勢に正面から向き合う。

隊列を組む兵士の一番前にいるあいつがボスだろうか。

ベルディアに比べたら少々見劣りするものの、黒の鎧に身を包み、剣を腰に帯びたいるその見た目には、ボスだと瞬時にわかる程度の風格があった。

「……俺は魔王軍幹部、ボリスだ。お前がトニー・スタークか？」

「そういう君は……あー……、ミニベルディア？」

「やかましい！」

ベルディアの劣化コピーみたいな見た目はどうやら彼のコンプレックスだったようだ。

僕は怒鳴り散らす彼を手でどうどうとわざとらしくなだめる。

「フン……噂にたがわぬ嫌味な奴らしいな……ところでトニー・スターク……この者たちが見えるか？」

男が見せてきたのは、剣を突き付けられた人質達。

おびえ切った顔で小さく震え、弱々しく声を漏らす。

「た、助けて……あいつの言う通りにしてください……」

……あいつの言う通りに？

「今のが聞こえたか？ こいつらの命が惜しかったら……」

男はとびつきり邪悪な笑みを浮かべて続ける。

「俺は無抵抗で殺される」

なるほど。

「……見た目に反して、ずいぶん狡すつからい奴みたいだな。僕の身内にも卑劣な手を使うやつはいるが、そいつでもやらないぞ」

「魔王軍幹部の席に着くのには、お前の首があればそれでいいんだ。その過程なんぞどうでもいい」

しょうもない奴だ。

数々の悪党と戦ってきたが、そのなかでも最低の類と言ってもいい。

「他人の為に、己の命を炎に投げ入れられるか？ ヒーロー。精々考えろ」

「ああ、考えた。炎を吹き消す」

その刹那。

背中と脚部にエネルギーを集中させて噴射し、その場に残像を残して前へと跳ね飛ぶ。

空気の壁を突破した拳が、轟音を立てて相手の顔面にめり込んだ。爆発ともとれるような衝撃音すら置き去りにし、空の彼方まで吹っ飛んでいく魔王軍準幹部とやら。

時が止まったような沈黙がわずかに流れ……。

「てツ……テメエ！ 今の話聞いてなかったのか!? この人質が見え……」

ボスを殴り飛ばした時には、既にホーミング式小型ミサイルのロツクオンが完了していた。

肩部がせりあがり、人質に剣を向けていた手下の頭部めがけてミサイルがまっすぐに放たれる。

「ぐえ」

「ぶ」

「お」

ミサイルは正確に手下の頭部のみを撃ち抜いて地面に転がした。

「は……っ？」

なにが起きたか理解できずに固まる敵。

チャンスはいまだ。

スラストスターを起動し、人質と敵との間に割って入る。

これでもう人質作戦は使えない。

「今のうちに逃げろ！」

「や、やべ……」

並んで構える兵士めがけて拳を向け、ペタワットレーザーを横なぎに放……、

——プシュン。

……とうとうとして、そんな情けない音を拳から響かせた。

「……記憶がさかのぼった時の事は覚えていないが、過去の僕が作ったんじゃないや不調も出るか」

「殺せーっ!!」

黒い鎧の軍勢が波のようにならぬ。

剣や斧の切っ先を光らせ、まとめて僕の元へと押しかけてきた。

だが……それはかえって好都合。

なぜなら……。

【ユニ・ビーム チャージ完了】

破滅の光が胸に灯る。

「喰らってくださったばれ」

「ギイアアアアアアアア!?!」

太陽光を一本に束ねたかのような破壊光線が、まとまって来た敵をDNA一つ残さず消し飛ばす。

そんな有様を目の前にしてもなお、兵士は闘志を絶やさずに叫ぶ。

「ひ、ひるむなーッ!」

あれは……ただやけっぱちになっただけみたいだ。

数で押せばと思ったのか、さつきよりも多い兵士が今度は散開しながら襲い掛かってくる。

これは少し面倒だな。

アクセルの門まで走り切り、守衛の裏で守られてる人質を確認した僕は、辺り一帯ごと吹き飛ばそうかとミサイルのロックオンを始めるが……。

「狙撃ッ!」

『『カースド・ライトニング』ッ!』

そこで、空から飛来した矢と、闇色の電撃が敵を貫いた。聞き覚えのある声と、矢に魔法。

空を見上げると、クインジェットのハッチからカズマが弓を。

ゆんゆんがワンドを構えて立っていた。

その後ろではアクアにダクネス、そしてめぐみんの姿も。

「ハーツハツハツ！ 大丈夫ですかトニー！ 手助けに来ましたよ！」

「前衛は任せろ。敵の攻撃は私が全て引き受ける」

心強い援軍が駆けつけてきた。ダクネスはクインジェットから飛び降りて僕の横に並び。

他の全員も続くのかと思いきや……。

「ツてえーッ！ ツてえーッ！ 逃げる奴は魔王軍だ！ 逃げない奴はよく訓練された魔王軍だ！ ホンツト、異世界は地獄だぜエーッ！！」

『ライトニング』！ 『ファイアーボール』！ あ、あの……本当にこんな戦い方で良いんでしょうか……？」

カズマとゆんゆんはというと、クインジェットから矢と魔法で一方的に敵兵士を撃ち下ろしていた。

空から一方的に撃つなんて、なんてやらしい戦術なんだ。

「きたねーぞテメーら！ 『ファイアーボール』！」

極悪戦術に魔王軍の魔法使いが激昂し、クインジェットめがけて魔法を放つが……。

『リフレクト』ッ！」

「はあっ!? ……グオオオアアアア!?」

カズマとゆんゆんの背後にいたアクアが、飛んできた魔法を防護魔法で跳ね返して兵士たちを吹き飛ばした。

「あーはっはっはっはっ!! この女神アクアが来たからには、あんたら有象無象なんて軽く消し飛ばすと思いなさいな！」

そういうセリフはクインジェットから降りて言え。

だが、敵にはかなり効果アリだったようだ。

地には僕とクルセイダー。

天には戦闘機と悪辣な戦術をとる冒険者たち。

ボスも失い、味方も半数以上がやられ、さらに増援が駆けつけた以上、敵にもう戦う気力は残っていないかった。

「くそおー！ 撤退だ！ 撤退するぞ!!」

一目散に平原の向こうの森へと向かっていく兵士たち。

だが、それはまさに最悪の選択肢というやつで。

クインジエットのハッチの奥で、紅い二つの光がキラリと光る。

「ふははははは!! 我らに喧嘩を売ったのが運の尽きです! ここで消えてなくなるがいい!!」

地上からでも見える巨大な魔法陣が空に浮かび、逃げる敵兵士たちの背中めがけて光が放たれる。

今迄あらゆる兵器があらゆる場所で効果を発揮する様を見てきたが……これは別格だ。

『『エクスプロージョン』ツツツ!!』

爆ぜる閃光、吹き荒れる熱風。

クインジエットもたまらず揺さぶられる。

アクセルの平原が一瞬で焦土と化し、敵がいた痕跡一つ残っていない。

「カズマカズマ、今の爆裂魔法は何点でしたか?」

「揺られて気持ち悪かったから三十点」

「!?!」

ゆつくりと地上へと近づいてくるクインジエットの中では、そんないつものアホなやり取りが行われており。

そんな彼らに、僕はどこか懐かしさを覚える。

楽し気なクインジエットの中だが、僕のすぐ横では何故かダクネスが悲壮感を漂わせており。

「また……なんの見せ場もなかった……」

肩を落として深いため息をつくダクネスに僕は一言。

「ああ、君居たのか。気が付かなかった」

「!?!」

記憶が戻ってすぐの出撃だったため、状況がよく呑み込めていないが……どうやら戦勝ムードで良いらしい。

笑い合うカズマ達をみて、僕は彼らにサムズアップを送る。

満面の笑みで全員がサムズアップを返してきたところを見ると、記憶を消す作戦は上手く行ったのかもしれない。

「やあ、作戦は成功したと見ていいのかな?」

そんなことを軽く聞く僕に、クインジエットにいる面々はみんな苦
笑いを浮かべていた。

第38話 AGE OF V

「本日の部屋の清掃、完了しました。失礼いたしました、アレクセ……」

「やかましい！ さっさとでてゆけ！ ワシは今気が立っておるのだ！」

「も、申し訳ありませんでしたー！」

私の自室の掃除を終えたメイドに怒鳴りつけ、部屋から追い出す。

メイドの足音が遠ざかったのを確認した私は、地下室へとつながる隠し扉を開けた。

そして、湿ったカビ臭い階段を、地団駄もかくやと苛立った足音をひびかせて降りる。

全く忌々しい。あの時シンフォニア卿が来さえしなければ……。

あの悪魔の役立たずっぷりに嫌気がさす。

「マクス！ マクス!!」

地下室へと続く階段を降りきり、ドアを荒々しく開け放つ。

薄暗いその部屋の中央には、いつものようにヤツがゆらゆらと地べたに座って揺れていた。

「ヒュー……、ヒュー……おや？ アルダープかい？ 君が恋しかつたよ、アルダープ！」

「ふざけるなっ！ 貴様、なぜワシの命令通りに動けんのだ！ スタークは有罪判決となつて、このワシが飼育することになるはずだっただろう！」

そう。この悪魔の力によって現実を捻じ曲げ、スタークの技術力を手に入れ、さらにスタークを交渉の材料としてララティーナにも手を伸ばそうとしたのだったが……。

「なんだか眩しくて強い力が働いて……ヒュー……失敗……」

最後まで聞くことなく、私は役立たずの出来損ないを蹴りつける。

「この無能めが！ 言い訳などするな!!」

「ヒュー……、ヒュー……」

この先どうしたものか。

コイツは役立たずで、ララティーナもスタークも手に入る算段が立たない。

「これ以上失敗してみろ！ 契約を破棄して、貴様を殺処分してくれろ！」

「ヒュー……、ヒュー……うん、うん……アルダープ……頑張るよ……」

マクスに唾を吐き捨て、踵を返して階段を登る。

公衆の面前で恥をかかされ、拳句の果てに自分の目的は果たせずじまい。

今迄あの忌々しい悪魔の力であらゆるものを手に入れてきたが、自分の一番欲しい物だけは全く用意できない無能の悪魔には、むかつ腹が立ってしょうがない。

「いつか手に入れてみせるぞ……ララティーナ……！」

階段を登り切った私は、地下室から自室へとつながるドアを開けようと手を伸ばす。

自分の部屋に戻ったら、はらいせにメイドの一人を難癖付けて翫つ

てや——

「申し訳ありませんアレクセイ卿、掃除用具の忘れ物が……」

——私が部屋に戻るのと、メイドが自室のドアを開けたのは同時だった。

秘密の地下室へ続く隠しドアから現れた私に驚き、丸くなった彼女の目と私の目が合う。

「ア……アレクセイ卿……？ 今、どこから……？」

忘れ物を取りに来たようだが……。

おかげで……この秘密部屋がばれてしまった。

「ハア……」

ため息を一つつく。

「あの……アレクセイ卿……？」

このメイドは気に入っていたのだ。

目元がララティーナに少し似ていたから。

「ああ、レナータ……」

だが。

もう、駄目だ。

「——なぜノックをしない？」

私は、部屋の壁に飾られた剣を手に取り——

▽

それは、春の到来を感じさせる、ある晴れた午後のこと。

「天気もいいし、僕と魔王城に行かないか？」

「こいつとうとうイカれたみたいだ」

「そうですね」

僕の提案に唾を吐くカズマとめぐみん。

失礼なボウズ共だな。

「なあ、聞けよ」

「マッドサイエンティストの話に耳を貸してたら、命がいくつあっても足りねーよ」

今のは転生ジョークだろうか。

僕はソファでくつろぐカズマの横に座る。

「良いから聞け。魔王城に行くっていうのも、別に魔王をぶちのめしに行こうってわけじゃない。まあ、それもいざれやるが……。とにかく、今回は魔王城に掛けられたバリアを調べたいだけだ」

「そんなの、ドローンとかでやれば良いだろ。もしくは、スーツだけ向かわせるとかな」

僕は首を静かに横に振り。

「詳しく調べるために複数のデカイ機材が必要なんだ。クインジェットでバリアの近くまで運んで、コードを伸ばしてバリアに接続する」「めっちゃ無防備になるじゃん！ いやだよ！ 総攻撃受けたらどう

するんだ！」

「そこは大丈夫だ。クインジェットから出すのはコードだけ。機体はステルスモードで隠せるし、もし気づかれたらすぐさま退散する」
それを聞いたカズマは、それでも警戒しきった視線だけを僕の方へと向けてきて。

「……俺が必要な要素は？」

「敵感知スキルだ。それと、君のドローンの腕」

横から『私もドローンは使えます』と控えめなアピールが飛んできたが、めぐみんは最初からアシスタントとして連れてくつもりだったのでひとまず置いて。

「嫌だ！ やりたくないもんはやりたくない！ 俺はヒーローじゃないの！」

そう言い残してカズマはソファから立ち上がり、喉でも乾いたのか台所へと向かう。

遠ざかっていくその背中に、僕は一言。

「そう言えば、君の借金を一部肩代わりしたのは誰だったっけな？」
ピタツと、カズマが動きを止めた。

「おや、あれはなんだ？ ほら、あそこの壁に立てかけられてある弓だよ。良い弓じゃないか！ 誰に用意してもらったんだ？」

僕はソファから立って、プルプル震えだしたカズマの周りをほくそ笑みながらぐるぐる回る。

「あー……いっつも夜中まで僕のラボに居座って、ゲームばかりやってるのは誰だっけ？ 例の店のサービス受けるのに屋敷じゃ無理だからって、僕のラボに夜な夜な」

「あああああ!! わかったよ!! やれば良いんだろやれば!! バカ！ 陰湿ヒーロー！ 生えかけの髭がキモいオヤジ！」

「やる気十分で結構だ」

そしてアクシデントで無くなった髭をネタにするのはやめろ。

いそいそと準備を始めたカズマを見ながら、少し寂しくなった顎周りを手でなでていると。

「……なあ、私も付いて行っていいだろうか？」

ついさつきまでずっと黙っていた、ダクネスがおずおずと聞いてきた。

「ステルスで動くつもりだし、万が一敵に見つかっても交戦するつもりはない。君が活躍できる場はないから、来る意味はないと思うぞ」「くっ……淡々と私がお荷物だと伝えてくるその毒舌っぷり……少し前の、手当たり次第に私たちを口説こうとする獣のようにギラついた眼をしたトニーも良かったが、やはりこっちな……!」

僕は単に事実をそのまま伝えただけなのだが。

またおかしな世界へ旅立ち始めたダクネスは無視して、僕も魔王城へ行くこうと用意を……

「……なんだって？　僕が君らを口説いた？」

「ああ、それはもう……暗がり二人きりになろうものなら、すぐにも襲われそう……!」

体をくねらせながらそう言うダクネスを見て、思わずめぐみんの方へと顔を向ける。

マジ？　と言った視線を込めて。

「マジですよ。私にキスを迫ろうともしました。あれはトラウマものでしたよ」

「H A H A ……この僕が……君らを？　H A H A H A ……ダイナマイトで火遊びする趣味はないね」

まさかそんなことは無いと頭を振っていると、ダクネスが僕の横でわざとらしい咳ばらいを一つした。

「その、私の趣味の話はさておき……今回の作戦には私を同行させてほしいのだ……」

「だから、君を連れて行くメリットが……」

「頼む……!」

真剣な顔で懇願してくるダクネスに、僕は少々驚く。

ここまでしつこいダクネスは初めて……でもないが、自分の性的欲求を満たそうとする時以外でこうも食い下がるのは初めてだ。

……しようがないな。

「はあ……まあ、別にメリットがないだけで、デメリットがあるわけで

もないだろうしな。ついてきてもいいが、変なことはするなよ?」

「も、もちろんだ!」

ダクネスはパアッと笑顔を咲かせ、自分の部屋目掛けて装備を取りにすつとんでいく。

カズマがブツブツ言いながら支度を始め、めぐみんも杖を取ったところで……、

「……なによ、皆して私を見て?」

二人用のソファを占領し、ふんぞり返りながらブドウをつまむアクアに、そこにいる全員の視線が集中した。

「……お前は来ないのになって」

「魔王城なんておっかないところ行くわけないでしょ。私はなんも声かけられてないんだし、別に行かなくてもいいでしょ? だって、私はここに残るわ」

「……とか言ってますが?」

アクアの理屈にカズマはこめかみをヒクつかせ、めぐみんは呆れたようにため息、をういてアクアに指を指して僕にそう聞いてくる。

僕としては別にいてもいなくてもいいのだが……。

だがまあ、あの言いぐさには少々むかつ腹が立たなくもない。

僕はアクアにとびつきりダメな奴を見る目を向けて。

「ああ、別にいいさ。いてもどうせ迷惑事を招くだけだろうしな」

「……なによ。そんな目を向けたって無駄よ。私はそんな危ないところに近づきたくないの」

「みんな、帰りにクインジエットで美味しいものでも食べようか。最近改良してね、機体の外の景色を取り込んで、機内に投影できるようにした。機内は360度僕らだけの展望台さ」

本当は周囲の映像を取り込んでステルス化させるための技術だが……そこは僕の遊び心だ。

「チーズとワインでも持っていくか。ラボのカクテルラウンジから特別なやつをな」

それを聞いたアクアの眉が、ピクつと動いた。

カズマとめぐみんも僕の悪巧みに乗り、イヤらしい笑みを浮かべて

僕に続く。

「じゃ、俺はシャワシャワがいいな。高級なやつ！」

「私はサンドイッチでも作りましょうかね。美味しい肉を使ったローストビーフでも挟みます」

だんまりを決め込んでいたアクアだったが、段々と我慢できなくなったのかじわつと目に涙を浮かべ始めて……。

「ず、ずるいわよ！ そうやって女神を引きずりだそうだななんて！

行くわよ！ 行くから私にも宴会参加させて！」

僕はアクアに小馬鹿にした笑みを向けて一言。

「悪いが、定員オーバーだ」

「わあああーっ!!」

キレたアクアが、とうとう泣き叫びながら僕らにつかみかかってきた！

▽

カズマがドローンで索敵し、さらに追加で敵感知スキルを使って周囲の安全を確保する。

ダクネスは僕の近くで、もはや装備している意味はあるのかと問いたくなる、当たらない大振りの剣を地面に突き立てて周囲を警戒。

アクアは来てそうそうクインジェットの途中で昼寝。

そして僕とめぐみんはと言うと……、

「H m m……」

「言っただでしょう。ある程度魔術に精通したとはいえ、簡単に理解出来る代物ではないと」

先程からずっと、魔王城のバリアの前で唸っていた。

前と同じようにバリアの組成を調べて解除を試みていたのだが……。

「結局わかったのは……全体の20%……いや、25%つてところか」「はつきりいってそこまで理解できる時点でかなりおかしいのですが……。立ち食い感覚で寄って得たこの結果で、魔導の研究が100年

は進みましたね」

それでも魔王城の結界に不正アクセスして突破するには程遠い。
なぜただの一生命体が機械も何も使わず、自分が内包するエネルギーのみでこんな強固なバリアを張れるのか……。

魔法の世界だと言われても当然納得はいかない。

むしろイラついてすら来る。

「さて、嫌がらせに新型爆弾でも取り付けて帰ろうか」

「良いアイデアですね。カズマ、聞こえますか？ 紅魔族には、ピクニックの時に魔王城の結界に魔法を撃ちまくって退散するという恒例行事があるんです」

「僕も試作ミサイルを打ち込んだりしたんだ。あれは楽しかった」

『……お前らと関わっていると魔王軍に目をつけられたりしないよな？』

大丈夫だよな？』

度々僕や紅魔族が魔王城に攻撃を仕掛けているという事実を知ったカズマが、インカム越しにそんな事を心配そうな声色で届けてきた。

「ねえ、もう終わったー？ はやくジェットの中かで美味しいものを食べたいんですけどー？」

「おっと、昼寝してた置物女神が食事をご所望だ。そろそろ戻るとしようか？」

遠くで未だ敵を警戒してたダクネスを無線で呼び戻し、魔王城のバリアに取り付けていたコードを全て外す。

「はやくー！ もうお腹ペコペコなんですけどー！」

「トニー、あいつここに置いてかないか？」

いつの間にか僕らの横に戻ってきていたカズマが、クインジェットの中からわがままを垂れるアクアにこめかみをヒクつかせながらそう言った。

正直賛成だが、あいつなら泣きながらも普通に歩いて帰ってきてきそう
で怖い。

だがまあ……腹が減ってきたのは事実だ。

せめて雑用くらいはやってもらおうとするか。

「今行くから、せめてテーブルと配膳の準備をしろ。と、最後まで言おうとしたその時。カツと、僕らの目の前が明るくなり――

――クインジェットが、盛大に爆発した。

「なっ……!?!」

「ア、アクアーツ!!」

一瞬にして燃え盛るスクラップと化したクインジェットに、カズマが叫ぶ。

返事は帰ってこない。

僕は近くに待機させてたスーツをすぐさま装着して、戦闘態勢を取った。

「カズマ、敵感知は!?!」

「ひっかからなかった! 多分、超超遠距離からの攻撃だ!」

どうなってる……!?!

敵感知外からの攻撃なんて爆裂魔法でも無理だし、そもそもステルスモードで周囲からは見えないはずだ。

「わ、私はアクアの安否を確認してくる!」

「誰だか知りませんが、100倍返しにして消し飛ばしてみせますよ!」

ダクネスが未だに火柱を上げ続けるクインジェットへと突っ込み、めぐみんは眼を紅蓮にギラつかせて爆裂魔法の詠唱を始めた。

僕は周囲をスキャンして索敵しようとするが……。

「トニー、あれ……」

カズマのその言葉に振り向き、彼が睨みつけている方へと視線をやる。

どうやら向こうから姿を見せに来たようだ。

木々の向こうに、黒くて暗い人影が映る。

「フム……鬱陶しい光がチラつくから来てみれば……中々に面白い客が来ているではないか」

現れたのは、背丈190はありそうなタキシード姿の大男。

一見すると人間のようなのだが、顔には道化師が付けていそうな白黒の仮面が張り付いていた。

僕はさかさず掌を向けて警告する。

「そこで止まれ。従わなければ攻撃するぞ」

「おっと。突然攻撃して失礼した！ 汝ら人間に危害を加えるつもりは無いので、そのピカピカおててを下ろすが良い、その缶詰頭の男よ！」

ふざけた態度で手を挙げ、降参の意を示す謎の男。

缶詰頭……。

いや、違う。こいつは今なんて言った？

まるでアクアが人間では無いことを知っているかのような口ぶり……。

「あんたは何者だ？ 吹っ飛ばしたジェットは弁償してもらおうからな」

仮面の男は名を聞かれるのを待ってましたと言わんばかりに、口元を怪しく歪め、仰々しく手を開いて、

「我輩は魔王軍幹部が一人。地獄の公爵にして、すべてを見通す大悪魔——」

貴族のような一礼を完璧な所作で行い、こちらにぐにやりと笑い掛けた。

「——バニルである」

魔王軍幹部……！

「や、やべえ……!」

幹部と聞いたカズマの顔が冷や汗にまみれる。

「さて、挨拶も済んだところで……汝らに聞かねばならんことがある……ここに来た目的はなんだ?」

「ああ、いい天気なんで魔王をぶちのめしに来たんだ」

「ほうほう、魔王城の結界を調べに来たのか。教えてくれて感謝する」
………なんでわかった? 遠くから監視してたのか?

いや、それならわざわざ理由を尋ねる必要はないはずだが。

思わずめぐみんやカズマと顔を見合わせる。

バニルはそんな様子の俺達を馬鹿にするかのようにクツクツと笑って。

「良い狼狽えっぷりであるな、冒険者どもよ。我輩は全てを見通せるのでいちいち聞きだす必要はないのだ。ちよいと汝らをからかいたかっただけの事。まあ、セリフだけはキザでカッコよかったぞ! フハハハハハ!!」

………ずいぶんとイイ性格をした奴のようだ。

「良い苛立ちの悪感情を貰ったところで……自由気ままに生きている我輩とて、魔王軍幹部としての仕事を果たさねばならん。今すぐここから立ち去るか、つまみ出されるか選べ。なお、後者の場合は傷一つ負わせることなく優しくつまみ出してやるので安心するが——」

『セイクリッド・エクソシズム』!!!」

僕らの横から飛び出した淡い光が、バニルの体を包んだ。

光の柱がバニルの足元から天へと突き抜け、やがて光が収まると、バニルがいた場所に彼が付けていた仮面だけが落ちていた。

「やってくれたわね、このクソ悪魔! 汚い不意打ちだなんて流石は悪魔だわ! ぶつちめてやるから覚悟なさいな!!」

HANNYAの形相のアクアが、汚い不意打ちをバニルにかましてそう叫んだ。

無事だろうとは思っていたが、まさかあんな顔を煤だらけにする程度ですんでいるとは。

……だが、それはアイツも同じだ。魔王軍幹部があれで終わりだとは思えない。

「あ、あれを見てくださいー！」

僕の予感は見事的中。既知の生物の常識を諸々超越した挙動と理屈で、地面に落ちた仮面の下からニヨキニヨキと体が生え始めた。

見た感じ、あの仮面が本体で……体は土くれのようだな。

「フハハハハ!! この我輩の美しい仮面にヒビを入れてくれおつて! 不意打ちとは、その貴様が忌み嫌う悪魔と変わらんではないか!」
「人の悪感情を吸つてる辛うじて生きてる害虫と同列にしないでと貰えますう?」

「そこまでだ」

小学生並みの罵り合いを始めそうな女神と悪魔の間に割つて入る。

「おい、神と悪魔の戦いなんて教会の壁画に描かれそうな事始めるつもりなら、もう少し理知的に喋ったらどうだ?」

ここは一つ、大人である僕が対話するとしよう。

あいつを上手く誘導すれば、魔王やこのバリアに関する情報を手に入れられるかもしれない。

「理知的? 人類最高の頭脳持ちの汝のようにか? ほうほう! 約束を守れず、愛しのソバカス娘に愛想つかからされかけてる汝が言うと言得力があるな?」

……。
……。

「今、なんて言った……?」

「あの、ト……トニー……落ち着いてください……」

「そ、そうだぞ……悪魔の言うことに惑わされるな……」

剣呑な雰囲気を全開にして、悪魔に向けて一歩踏み出した僕を、めぐみんとダクネスの二人が恐る恐るなだめにかかる。

邪魔をするな。大人が話しているんだぞ。

「フハハ……うん? あまりいい悪感情が湧いてこんな……? 一応汝が気にしていそうな事を見通して選んだはずだが……」

間抜けな仮面の奥から訝し気な視線を向けるバニルを、僕は鼻で笑う。

「HAッ。あいにく自分が招いた結果はちゃんと受け止めて前に進めてるんでね」

ペツパーの件に関しては、アクセルにいる優しい方の悪魔のおかげでもあるが。

「にしても……魔王軍の幹部なんて大物やってる奴のすることが、よりによって他人の人間関係への茶々入れか。ダサイのは仮面だけじゃないみたいだな。早く大人になれよ」

「やーいやーい！ 怪人クソダサ仮面！」

隣で僕に乗るかのようにして煽るアクア。

バニルの口元がほんの一瞬、ピクリと動いた。

「たかだか百年も生きれぬ^人飯製造機^間が、四千年以上生きる我輩^{大悪魔}をガキ扱いとは大きく出たものだ！ ヒーローではなくコメディアンを名乗った方が将来的にも良いのでは？ 殺人ロボットを作る心配もないであろうしな！ フハハハハ!!」

「四千年も生きてるクセして、未だに魔王の手下やってるどころか、人類との戦争の手助けすらマトモに出来ないのか。僕はこっちに来て一年足らずで王都から魔王軍を追い出しけどな？ なんだ、悪魔つてのは無駄に長く生きるだけの無能な劣等種族じゃないか！ H A H A H A H A H A!!」

「いいわよトニー！ もっと言ってやりなさいな！ 見なさい！ あのダサ仮面悪魔、トニーにイラついてきてるわよ！」

ここまで相手を煽るのは僕も久々だ。

ヒリつく空気が、ねっとりとした毒ガスのように周囲に広がる。

「お、おいトニー……そろそろやめようぜ……相手は魔王軍幹部だろ……隙を見て逃げるぞ……！ 俺たちを抱えて飛んでくれよ……！」
楽しくなってきたところなんだ、邪魔するなよ。

「……我輩は今の戦争に大した興味はない。ただ、先代の魔王に今の魔王を頼まれたから、城でなんちゃって幹部を引き受けているだけである。悪感情を食えればそれでいいのだ。従って、貴様のその煽りは

全くの的はずれである。大切なご飯製造機と言えど、地獄の公爵たるこの我輩にその物言いは看過できんな」

「つまり、あんたは幹部とは名ばかりの城に引きこもる四千歳のニートってことか。地獄の公爵の名が泣いてるぞ?」

「事件が起きない限り研究所に引きこもってる貴様が言うでないわ!」

「人類を守る為の研究をしてるんだ!二酸化炭素も生み出せない生産性ゼロの下等生物にはわからないか!」

「ストップ! ストップ! ストップ!! お前らいい加減しろよ! ヒーローと大悪魔がなんてくだらない言い争いしてんだ!」

僕とバニルの間に割って入るカズマ。

ふと後ろを見てみると、めぐみんもダクネスも若干呆れた顔をしていた。

「よくもまあ、お互いあんなスラスラと馬鹿にする言葉が出てきますね。感心ですよ」

「なんとという罵りあいだ……あの間に立って罵倒されたい……されたいが、流石に時と場所を考えるべきだ……と、私は思うぞ」

僕は、僕をなだめようとする三人に心配いらないと手を振る。

——ゆつくりとバニルの顔面目掛けて、腕部のあらゆる武装を展開させながら。

「僕があんなダサイ仮面被ったアホのおちよくりにも本気で怒ると思うのか? 笑いしか出てこないね」

「笑ってねーじゃん。指先から腕までピカピカじゃねーか」

「そこだけは意見が合うな、コスプレ中年よ! 貴様のような自己中男のつまらぬ煽りなど、口角すら上がらぬわ! フハハハ!!」

「笑ってんじゃん。目が光ってるじゃん」

バニルは口元こそニヤつかせているが、その両目は赤黒くギラつき、邪悪なオーラを放っている。

「おい、やめろよ? マジでやめろよ? ここでお前らみたいなのがやり合ったら、俺達吹っ飛ぶからな?」

「H A H A H A H A! 安心しろ、安心していいが……少し下がって

僕のりパルサー光線とバニルの赤黒い怪光線がぶつかり、麗らかな日差しすらかき消す光の球体が、二人を挟んだ中央で膨らむ。

やがて、千のリアクターの核融合が如き閃光と大轟音が辺りを包んだ。

第39話 ありえないほど《悪魔》

轟音、閃光、戦塵。

木々が爆ぜ、大地は抉れ、巻きたつ土煙が周囲を暗くする。

高速で動く物体めがけ、リパルサーやミサイルを惜しみなく叩き込む。

「人間は攻撃しないんじゃないのか？ 悪魔は嘘をつかないって聞いたぞ」

「安心するがいい！ 我輩が放っているこの光線は、人体には全くの無害！ 鎧と服のみを粉碎し、需要のない中年の裸体をこの敵陣の中で晒させるであろう！」

「どうかな。僕が脱いだ時は大抵歓声上がるが」

けん制で撃った数発のリパルサーレイ。

飛び跳ね、体をくねらせて避けてはいるが、いずれは避けられなくなる体勢になる。

「そこだ」

宙に大きく跳んで無防備になったバニルの顔面にリパルサーを放つ。

「なんだこんなも……ッ!?!」

空中で不安定な姿勢だと言うのに、あっさりとりパルサーを手でたたき落とすバニルだったが、その裏に重なるようにして放ったミサイルがバニルの仮面に直撃した。

ミツルギのデータを取る時に使ってたカズマのドローン戦法が役に立ったな。

吹っ飛んだバニルがゆらりと立ち上がり、体に着いたホコリを払う。

「中々やらしい攻撃をしてくるではないか。悪魔らしくて感心したぞ。死後は我輩の元に悪魔として生まれ変わるつもりは無いか？」

「悪いが飲んだくれ女神とあの世で飲み明かすって先約があつてね。それよりも……」

自称見通す悪魔と戦って気がついたことがひとつ。

「あんだ、今の僕の事を見通せてないだろ。見通せてるなら、さっきの攻撃が当たるわけが無いもんな」

「フム……」

だが、こいつの力はおそらく本物だ。

僕の過去や思考もこいつには筒抜け。もしかしたら未来も。

「データメな能力だが、制限があるみたいだな……回数制限？ インターバル？ ……このスーツか？」

それを聞いたバニルは、面白そうに口元に歪めた。

「……正解である。その妙な鎧を纏った貴様は見通せん。我輩と実力が拮抗する存在には、この力は通用せんのだ」

「つまり格下専用って訳か。いいね、ラスベガスのショーで使えそう
だ」

「何か勘違いしているようであるな……実力が拮抗してるというのは
――」

瞬間。

バニルが突然視界から消え失せ。

「――我輩は能力抜きに貴様を倒す力があるということだ」

気が付いたときには、あつという間に背後に回ったバニルが、目を赤黒く光らせて立っていた。

反応が遅れ……！

『『バニル式破壊光線！』』

「ツ……！」

空に待機させてたMk. 46から、盾のパーツが僕とバニルの間に飛び出し、怪光線を防ぐ。

怪光線を受けた盾は、もう使用ができそうにないほど損傷していた。

ふざけた名前の癖して、バカげた威力の攻撃だ。

「こっちの番だ」

Mk. 46から飛んできた強化パーツが、僕をスーツの上から鎧のように覆っていく。

「ほう、よく出来た玩具であるな。ちびっ子達にさぞや人気が出るで

あろう」

「あなたの仮面じゃ赤ん坊の機嫌も取れないだろうよ」

背中 ジェットからバーナーを噴射し、バニルに肉薄する。

怪光線が厄介なら、近接戦闘を挑めば封殺できるはずだ。

右腕に装着された剣をバニル目掛けて振るう。

「良い太刀筋ではないか！ 同僚のスケベデュラハンを思い出すぞ！」

ベルディアの事だろうか。

以前あいつと戦った時にスキャンした動きをそのまま使っている
ので、近接戦闘はそれなりに戦えるはずだが……。

「ほれほれ、そんな猿真似剣術では来世になっても我輩には当たらぬぞ！ おおっと！ いい悪感情をありがとうである！ フハハハハ！！」

実にムカつく動きと表情で、バニルは剣をのらりくらりと避ける。

作戦変更だ……！

「よし、もう少し科学者らしい武器で戦うとするか」

右腕の大剣がパージされ、新しい武器が装着された。

赤い三角錐の形をしたそれは、花が開花するかのように開いて変形し、バニルめがけてマイクロウエーブを浴びせかける。

「んぐ……!?! こ、これは……!」

「焼き加減はウエルダンでいいか？」

電子レンジと同じ要領で、バニルの体を極限まで熱する。

バニルの背後の木々が発火し、地面の土が赤く煮え始めた。

「妙ちくりんな……真似を……!」

「ガラス細工になったら玄関に飾つといてやるよ」

おちよくるための演技には見えない。

高熱で熱せられた土くれの体が所々ガラス化し、動きが鈍くなつていく。

目からビームも体が固まって狙いが定めにくいようだ。

「元は暴徒鎮圧用だったが……意外なところで役立つもんだ。ああ、君には関係の無い話だったな。ご退場願おう」

オブジェ一步手前のバニルにもう片方の腕を向け、ミサイルを装填する。

せいぜい派手に散ってもらおう。

僕の勝利を確信したのか、仲間が後ろから駆けつけて来た。

「フ……フハハ……ハ……」

……？

もはや体も崩れかけているバニルの口から、歪んだ笑い声が盛れだした。

なにがそんなにおかしいと、問う暇も無く……、

「トニー……避けて……」

アクアのそんな叫び声が聞こえると同時。

バニルの本体である仮面が飛び出し、スーツの顔面にへばり着く。やがて、HUDのアイコンが全て真っ赤に染まっていき――

【不正アクセスを検知。対処不可……不kkkkkkkkkk】

【 ;) 】

▽

戦いのあまりの苛烈さにまるで介入できずにいた俺達は、トニーがバニルを抑え込んでいるのを見て、行くなら今しかないと加勢に来た。

来た……のだが。

「……トニー？」

トニーがトニーであると確かめるために声をかける。嘘であつて

くれという気持ちを含めながら。

おかしいことをしていると思うが、本当は分かっているんだ。

トニーに……敵感知が反応している！

こつちにゆつくりと振り向いたトニーの顔を見て、めぐみんが叫んだ。

「ト、トニー！ 凄くカッコイイ見た目になっていますが、大丈夫でー
ー」

めぐみんが最後まで聞く前に、トニーの掌がこちらに向いた。

今迄何度も見てきた……敵を貫き、粉碎する破滅の光を灯した掌が。

「おい、マジか!!」

「(僕じゃない……!! この悪魔が動かしてる! ……駄目だ! コントロールが効かない!!) フハハハハ! しばらく楽しめそうだ!! 実に愉快的な玩具であるな!」

バニルの声を発したスーツの掌が、アクア目掛けてリパルサーを放つ。

制圧用じゃない、抹殺用の高威力リパルサーだ!!

「ふ、ふわあああああーっ!!」

「危ない!」

リパルサーがアクアの顔面を貫くすので、ダクネスが合間に入って防ぐ。

ダクネスの背に弾かれたリパルサーは、射線上の木々や岩を貫きながら地平線の彼方へと消えていった。

「ふーむふむふむ! 楽しい機能が盛りだくさんであるな! さて、忌まわしき女神をブチのめすでしょう! (みんな逃げろ! システムが完全に乗っ取られている!)」

「マジかよおおお!」

「フハハハハ! 共に派手派手しく行くこうではないか、中年ヒーローよ! 我輩、テンションアゲアゲである!! (回避行動をとれ! こつちはターゲットにロックオンした!)」

「タ、ターゲット!?」

「(君たちだ!)」

トニーの全身のパーツが威圧的な音を奏でて稼働し、今まで見たこともない武器がギリりと光る。

それだけじゃなく、空に飛んでるMk. 46のパーツも次々とトニーの武装を強化していく!

「とにかく逃げましょう! トニーのスーツは対人武器も山盛り搭載してます!」

トニーのスーツに詳しいめぐみんが、顔面を冷や汗まみれにしながらそう叫んだ。

とにかく回避に専念を……。

無理ゲーだと心の中で諦めながら、急いで伏せようとしたその時。

「はあああ!」

一斉に背を向けて逃げ出す俺たちの中から、ダクネスが踏み出してトニーに飛びかかった!

途中でリパルサーやら変な音波やら食らってた気がするが……そこは壁役の面目躍如と言ったところか。

「トニー! 目を覚ませ!!」

「(再起動も効かない! 何とか逃げろ!)」

ダクネスが死に物狂いでトニーを押しさえつけるが、長くは持ちそうにない。

でも、今なら!

「アクアー! 退魔魔法だ!!」

「まかせなさい!!」

退魔魔法は人間には効かない。

ダクネスに抑え込ませて、そのまま浄化魔法を浴びせればダメージが通るはず!

『セイクリッド・エクソシズム』ツ!」

「ぐおおおお!!」

トニーのスーツが光に包まれ、バニルの仮面から煙が上がる。

「(……！ 今のを続ける！ システムが一瞬だけ元に戻った！)」
よし、効果アリだ！

「アクア！ 退魔魔法をあいつに撃ちまくれ！ ダクネス！ 可能な限り押さえ込み続けてくれ！ めぐみん！ トニーのスーツは爆裂魔法を耐えられるか？」

「Mk. 46の上からなら耐えられます！ ですが……中身のトニーが耐えられるどうか……！」

とりあえず、爆裂魔法は最終手段だ。

今はバニルを退魔魔法でできる限り弱体化しよう。

それでバニルが倒れるか、トニーがスーツの支配権を得られればそれが一番。

つまり……。

「……殺す気のトニー相手に時間稼ぎ……って訳だな……！」

「(いやコイツは……アクア以外とは遊ぶ気マンマンだ)フハハハハ!!」

『時間稼ぎって……訳だな……』なんて、不相应にカッコつける姿ときたら……フハハハツ！ フハハハハハ!!」

チクショウ！ こいつ殺してえ!!

「(……H A H A ツ)」

「なんでテメーまで笑ってんだよおおお!!」

もうこのまま帰ってやろうかな。

俺は怒りに身を任せてトニーに手を向ける。

スーツ相手の一撃必殺技！

「『ステイ……ぐつはあああああつっ!?』」

「カズマああああああ!!」

魔法を唱えるその瞬間。

みぞおちに強烈な衝撃が走り、自分の視界が遙か後方までブレて引き伸ばされる。

ダクネスの隙をついてリパルサーを俺にぶち込んだらしい。

「『ヒール』！」

「ぐ……おええ……帰りにえ……帰りにえよ……」

ぶっ飛ばされた俺は腹を擦りながら、そんな泣き言を漏らす。

「カズマさん、すっかりしてよ。あのクソ悪魔は私がこの手で消し去ってあげるから」

「お前、悪魔相手だと心強いな……」

ちらりとバニルの方を見ると。

「もつと！ あああつ！ もつと色々な武器を私に撃つてこい！ あああつ！ 今の焼かれるような痛みは!？」

スーツを乗っ取ったバニルと苛烈な殴り合いを始めていた。

最も、ダクネスの攻撃は一切当たっていないのだが。

……のだが。

「ええい！ なんなのだこの女は！ なぜ倒れん！ なぜ殴られて喜悅の感情を浮かべておるのだ！（僕のチームメイトを甘く見るなよ。この女を倒したいなら今の十倍は出力を上げなきゃな。しかしどんな腹筋してるんだ？ 僕の全身より君の耳の方がマッチョしろ）」

「お、おい！ トニー！ お前は女性の扱いに長けているではなかったのか!? 私を筋肉の化身みたいな扱いをするのはやめ……」

「隙ありである」

「あつ——」

トニーの言葉にツッコんだその隙を突かれ、スーツの胸から出た極太の光線によってダクネスが空の彼方までぶっ飛ばされる。

「ダ、ダクネス!!!」

吹っ飛ばされる時、こつちに向けて親指を立てていたから大丈夫なのかもしれないが……。

いや、大丈夫だとしても色々大丈夫じゃない。

「さて、邪魔者もこれにて退場……我輩の狙いはその駆け出しプリーストであるので、逃げるなら見逃してやるぞ?」

『セイクリッド・ハインス・エクソシズム』ツ!!」

「甘いわっ!」

俺達へ視線を向けたその隙にアクアが横から退魔魔法を放つが、背

中のスラストスターから火を吹かせ、プラズマの残光を残して避ける。

『エクソシズム』！ 『エクソシズム』！ 『エクソシズム』ツ！！ ああ、もう！ トニーってば動かないですよ！ 当たらないじゃない！』

「（それが出来たら苦労はしない！ 今こっちでシステムのコントロールを取り返すから何とか耐えろ！）」

スーツからトニーのそんな声が聞こえてくるが……。

「ほーれほれほれ！ 避けてみるがいい！ フハハハハ！」

「ふ、ふわあああああつ！」

スーツの全身からレーザーやらミサイルやらがドカドカ出てきては、それらがアクアの元へと降り注ぐ。

自身に強化魔法を掛けて凌いではいるが……。

「このままじゃアクアが殺される！ めぐみん！ 何とか出来ないか!?!」

「い、いま私の方でもトニーのスーツにアクセス出来ないか試しています……いますが、常にアルゴリズムが変わる七重の魔術式ファイアウォールと次元関数トラップの迷路に守られています……！ 下手したらこっちのシステムまでハッキングされかねません！」

「なにそれこわい」

でもこのままじゃアクアが死ぬ。

ああ、クソ。やるしかない。

「おいコラアアアアア！ ヒーラーから狙うとか趣味わりぞ！」

叫んで弓を構えた俺に、バニルがアクアを狙う手を止め、興味深そうに視線を向ける。

「おや……どういうつもりだ？ さっきまでどう助かるかしか考えてなかった小僧よ。今の我輩は玩具を手に入れたおかげでテンションが高くてな！ 殺しこそせんが……怪我をさせてしまうかもしれぬぞっ。」

「ひーっ！」

本来は青い光が灯るアイアンマンの目が、バニルの仮面越しに赤黒く邪悪に光っていて、思わず血の気が引いて後ずさる。

「カズマ……カツコつけるならもう少し持つてください……」

「いや、だってあれ怖いじゃん!! 戦っても時間稼ぎにすらならない気がする……!」

「援軍が欲しいですね」

「大量にな……」

と、半ば諦め気味に弓を構え直したその時。

空から、どこか聞き覚えのある独特な飛行音が近づいてきた。

その場にいる全員が音がした方角に視線を向ける。

あれは……!」

「ドローン!? なんでここに?!」

「私の権限で動かせる最大数のドローンです。……私の出番が取られるようで、あまりこういうのに頼りたくは無いのですが……ああ、オマケもついてますよ」

めぐみんの眼帯から幾何学模様の光が淡く漏れる。

「どうやらあれで操作してるらし……、」

「……オマケ?」

「うおおおおお!」

そんな怒号の方を見れば、ドローンの下にぶら下がってるダクネスの姿が。

「どうやら吹っ飛ばされた先で拾って貰ったらしい。」

「フハハハハ! 次から次へと、まさに玩具箱ではないか! だが……貴様の相手は勘弁願いたい。撃ち落とさせてもらおう」

「あいつとどうとう悪魔にも嫌がられ始めたぞ」

ダクネスへ向けて光の弾幕が張られるが、めぐみんによる卓越したドローン操作によってそれらを避けつつ、バニルへと。

「くらええええ!」

「ツ!」

ドローンの修正によって、ダクネスの飛び膝蹴りが正確に命中する。

スーツの扱いになれていないのか、盾で防いだりできずにもろに食らい、轟音と共に吹っ飛ばされた。

「はははは！ 当たった！ 当たったぞ！ 私の攻撃が！」

攻撃面で役に立ったのが嬉しいのか、砂煙を巻き上げて転がるバニルを見たダクネスが、満面の笑みでピョンピョン飛び跳ねる。

一見喜ばしいことが……。

「(ナイスキックだ、ダクネス。……次は僕が中にも考慮してくれ)」

「あ……ああっ！ す、すまない！」

「これは思わぬところで悪感情。ごちそうさまです」

どうやらバニルを喜ばせるだけだったようだ。

だが、そのおかげで……。

「懺悔の時間よ、クソツタレ悪魔！」

「しまっ——」

良い時間稼ぎが出来た。

「ゴッドブロオオオーツツツ!!!」

雄叫び応えるようにして、アクアの右拳が朝日のように輝く。

放たれる拳が、光の軌跡を宙に残して、スーツに張り付くバニルの仮面にめり込んだ。

「ぐ、ぐおおおお!!」

殴り飛ばされたバニルが、地面を転がって魔王城のバリアに叩きつけられる。

これはさすがに効いただろう。

ヒビの増えた仮面を手で押さえながら、アクアを睨みつけるバニルを見てそう確信する。

「やってくれるでは無いか……!! (おい、今すぐ逃げろアクア! 君を殺す気だぞ! あらゆる武装でロックオンされている! 何が飛ぶか分からないぞ!)」

そんなトニーの声が聞こえらると同時、バニルの目が赤黒く光る。スーツの胸にも光が灯り、目の輝きと徐々に光量が増す。

あ、これめっちゃヤバイ攻撃のやつだ。

なんならアクアを地形ごと消し飛ばしかねない攻撃が来そうだ。逃げろとアクアに叫ぼうとした俺の声を、トニーの声が遮った。

「…………ツ！ アクア！ ジャンプしろ！」

「へっ？ ……あうっ！」

こんな時に限って転ぶアクア。足元に木の根でもあったのか、最低の幸運値がここで炸裂……

…………いや、あれは……………！

「(やられたか……………！)」

トニーの警告は、今スーツから射出された金属製の足枷の事だったようだ。

妙にメカメカしいデザインの足枷が、アクアの両足をガツチリと固定して離さない。

…………これはマズいことになった。

「トニー！ ……なんとか止められないのですか!? アクアが死んでしましますよ!?!」

「(今やってる!)」

眩しさを覚えるほどの光が、バニルの目とスーツの胸から溢れ出す。

「バニル式——」

もう、間に合わない……………っ！

「——殺人ユニ・ビームツツ！」

そこで、一か八かで弓に矢を番えた俺の横から、一つの影が飛び出した。

「今行くぞアクア！ 私に任せろおツ！ 『デコイ』ツ！」

地面に転がるひしやげた盾を持ち、アクアの前に滑り込んだのはダクネスだった。

それとほぼ同時に、アクアめがけて光線が放たれる。

仮面とスーツの胸部から放たれた赤と黄色の光がダクネスの盾にあたり、盾が薄氷のようにあっさりと砕け散った。

「ダッ……………！」

そのまま胴体まで貫かれるかとヒヤリとするが、腕を交差させ、光を散らして耐えている。

ダクネスの鎧が赤く光を帯びて溶け始めた。

「ウツ……ウオオオオオツ!!」

「人は殺さぬことを信条とする我輩に、こんなことをさせるとは、中々に畜生ではないか! (防御とヘイト集めに全スキルポイントを振つてる様なやつだ。ヒーローの鏡だろ? ああ、今のは皮肉だ)」

「と、時と場所を考えろおっ! んんんんっ!」

ダクネスの顔が赤く熱を帯びて蕩け始めた。

こいつもうダメかもしれない。

自分の鎧が溶けるほどの攻撃に晒されてるといいうのに、余裕そうなダクネスを見て安心と呆れが混じった溜め息を着く。

そして、また大きく息を吸って吐き、呼吸を整えた。

……今度は、俺の番だからだ。

俺は潜伏スキルを発動させ、ダクネスに釘付けになつてるバニルへと、背後に回りながらゆつくりと近付き……。

「おらああああっ!!」

右手に矢を持って、そのままスーツの背中へと飛びついた。

「(おい、何やってるんだ!? 危ないからポップコーンでも食べながら眺めてろ!)」

「お前を助けようとしてんのに軽口たたいてんじゃねえよ!!」

叫びながら、スーツの頭部とバニルの仮面の隙間に矢をねじ込む。

「フハッ! 何をするかと思えば……釘抜きと勘違いしてお……うぐっ!? 貴様、なんだその矢は!? ビリビリするではないかっ……!

!」

「うちの暴飲女神の聖水に丸一日漬けたいた特製矢だよ! 気に入ったか!」

「世界一邪悪な漬物であるな」

余裕そうな軽口を叩いてはいるが、バニルが放つ怪光線も、スーツから放たれる光線もチカチカと不安定そうな挙動をしている。

その隙を見たダクネスが交差させた腕で光線を弾きながら、重戦車の如き剣幕で正面からバニルへと猛突進した。

「さあ! 観念しろバニル! 引きはがしてから握りつぶしてくれる!」

怒れる筋肉騎士がバニルの仮面に手をかけ、物騒なセリフを吐きながら引きはがしにかかる。

うちのクルセイダー怖いんですけど！

このままバニルの仮面を俺とダクネスで引きはがそうとした、その時。

「――復旧完了だ。照明を元に戻そう」

システムを乗っ取られた時とは違う、スーツに搭載されたスピーカーから、しっかりとしたトニーの声が聞こえた。

ところどころ赤かったスーツの光が青色に戻り、トニーが自らの手でバニルの仮面を引き剥がしにかかる。

「……貴様、何をした？」

「方程式を解いただけさ」

メキメキと音を立て、とうとうスーツのマスクからバニルの仮面が剥ぎ取られた。

「ふう、ようやく顔のゴミが取れたな」

トニーは仮面を握りしめ、展開したマスクから得意げな顔を覗かせる。

「さつき調べたバリアに含まれてるコードと、システムを乗っとられた時に流れたコードが一部一致した。生物由来による、脳波に似た反応。奇遇な事に、人工知能であるフライデーと類似点がいくつかあつてね」

「……その僅かな断片から読み取り、組成を理解して我輩をスーツから締め出したというのか？」

「そういうこと、もう四千年生きてたら理解できるかもな。……さて、レンタル料を支払ってもらおうか」

今から滅殺するバニルに、そんな皮肉を浴びせ、掌に光を灯す。

「アクア、めぐみん。トリは君たちに任せた。派手にやれよ」

「合点承知！」

「まあ待て。この我輩が引き分けを提案しようではないか。どうだ？

魔王軍幹部にして、地獄の公爵の我輩と引き分けである！ みんなに自慢――」

なにか焦ったように捲し立てるバニルを無視し、トニーがリパルサーで軽くアクアに仮面をトスする。

「精々派手に散りなさい、薄汚い害虫悪魔！ ゴッドブローツツツ!!」
「はぐおっ!?!」

輝く拳がバニルの仮面にめり込む。

無駄に綺麗なフォームのアップパーカットが、光の筋を宙に残して仮面を空高くへと打ち上げた。

「無へと帰するがいい！ 我が爆裂の焰によって！」
天に掲げた杖の先に光が灯る。

何度も見てきた、なんだって消し飛ばす爆裂魔法の光。

その杖先は、狙い違わず空のバニルの仮面へと。

「……フン。まさか、我輩の破滅願望がこんなところで叶うとはな。この我輩にも……見通せんであつたわ」

「——『エクスプロージョン』ツツツ!!」

紅蓮の大輪が空に咲き、大轟音が響き渡った——！

▽

「——とまあ、そのような邂逅を経てここに至るのわけである」

棚にある魔道具を麻布で拭きつつ、ウイズに背を向けながらそうこぼす。

それを聞いたウイズは感心したようにほうと息を吐いて。

「バニルさんを倒すなんて凄いいじゃないですか！」

「バカ言うな。今そこでピンピンしてるだろ」

「何が残機だ、ふざけやがってこのチート生物が」

我輩に恨めしげな視線を飛ばしながらそう言うのは、目つきの悪い中年ヒーローと異世界ボウズ。

あることを伝える為にこのウイズ魔道具店に呼び出したのだが……偉く不機嫌だ。

「フハハハハハ！ 何を言うか。見よ、仮面の額にあるⅡの文字を。初代は確かに汝らに討伐された。今いるのは二代目である」

「その額の数字3000まで増やしてやろうか？」

鋭い目つきで、『あいきるゆるーすりーさうざん』などと遠い国の言語で喋りだした中年ヒーロー。

鼻で笑う我輩に嫌気がさしたのか、ウィズが入れた紅茶を一口啜つた。

「ハア……本当にお前は人に危害を加えないんだな？」

「勿論。言ったであろう？ 人間は我々悪魔の大切なご飯製造機。傷をつけるなど論外である」

「監視してるからな。変な真似してみろ、その時は」

「その時は、この僕が貴様を倒す！ ……か？ 芸のないヒーローであるな。人気が出んぞ？」

「……その時は、アルカンレティアのアクシズ教徒達にこの店とあなたの正体を教える」

「冗談でもやめろ！ 貴様何を考えておるのだ!？」

狼狽える我輩を見て、スタークが憎たらし気にはくそ笑む。

何と悪辣な手段であろうか。この男は本当にヒーローなのであるうか。

「なにになに？ ウチの子達をここに呼んで、みんなでこの木っ端悪魔をぶちのめすの!?! いいじゃない！ やりましょうやりましょう!」

「黙るがいい！ このニワトリプリーストめ！ 余計な口を挟むでないわ!」

水色プリーストの眉間に皺が寄り、スタークにアゴでクイツと『やっちまおうぜ』と言わんばかりのサインを送る。

チンピラかこやつは。これでは話が進まない。

「さて、今日ここに汝らを呼んだのは他でもない。時にその中年ヒーローよ。遠い遠い世界から来た傑物にして、行動力と独善性ゆえに祝福と混乱を同時に招く男よ。我輩は汝に忠告しに来たのだ」

「……忠告?」

「勝手ながら、汝の思考を見通させてもらった」

「ああ、デイナーの献立がバレたかな？ 魚が良いと思ってたんだ」

軽口を叩いてはいるが、明らかな警戒の色が全身か滲み出した。

「私は肉の気分なんですけど」

「ほら、外に出ますよアクア。川に釣りにでも行きましょう」

「ああ、今日の晩飯の魚を釣ろう。釣れた数と大きさとで勝負しようではないか」

「この水の女神に釣り勝負？ いいわよ、度肝を抜く大物をつつてあげようじゃないの」

空気を読まぬプリーストを、慣れた手つきで店の外へと誘導するパーティメンバー。

その様子を見届けた後、我輩は話を元に戻そうと咳ばらいを一つして。

「忠告とは、汝と因縁のある例の強欲領主の事だ」

「アルダープの事か？ 続けろ」

「うむ。汝はあの男に対して近いうちに報復を……それも、かなり強引な手段でやるつもりであるな？」

「……………」

「え、マジ？ 暗殺とかするつもりじゃないだろうな？」

不安げにスタークを眺める異世界ボウズ。

我輩はスタークを指さして告げる。

「見通す悪魔が宣言しよう。汝の短絡的な行動は、汝が本来守ろうとするあの鎧娘によくない結果をもたらすであろう。もう少しゆっくりと計画を練るが吉と出た」

「……………」

スタークは、顎を指でさすって考えるような仕草を見せる。

我輩の忠告に対して出した答えは……、

「見通すヒーローが宣言しよう。計画ならあるさ。……戦う」

……真っ向からの、拒絶だった。

第40話 PAYDAY

バニル討伐の懸賞金によって、カズマが抱えていた借金は無くなった。

カズマが負ったこの借金は、アルダープがダステイネス家を破滅させるために仕組んだもの。

そして、僕を狙った裁判騒ぎも切り抜けた。

アルダープが僕らを狙った計画は全て防いだと見ていいだろう。

守備ターンは終わりだ。

次は……

「さて、奴をぶっ潰すとするか」

「待つてました！」

「イエエエイ！」

「どうしてくれようかしら！ あの豚ゴリラどうしてくれようかしら！！」

最近ようやく復興が終わったラボの一室にて、カズマ達と共にヤツを潰すための会議を始めていた。

もちろんダクネスは抜きで。

あえて照明を落とした薄暗い部屋で行われる報復心にまみれた会議は、さながら呪いの儀式のようで。

「トニー。バニルとの会話からして、もう何するかは考えてあるんですよね？」

「もちろんだ。さて、みんなに質問だ。悪の組織を追い詰めるとき、まずは何から始める？」

「はい、トニーせんせー。活動資金を根こそぎ持っていくことです。マフィアを追い詰めるドキュメンタリー特番でやってたのを昔見た」
僕がノリで投げかけた質問に、カズマが同じくノリで答える。

「正解。金がなくなれば取れる手段が限られてくるからな。ボロを出しやすくなる」

「しかし、貴族の資産を我々一般人がどうこうできるんですか？」

めぐみんの意見はもつともだが、それはあくまで一般人として動い

た場合。

「ねえ、トニーってば顔が怖いんですけど……ヴィランの顔なんですけど……」

「おい……お前まさか……」

真つ先に気が付いたカズマに皆まで言うなどアイコンタクトをし、自信満々のプロジェクトをプレゼンする新社員の気持ちでみんなに告げた。

「ああ、奴の隠し金庫を爆破する」

「はいクソー！」

僕は全力でその場から逃げ出そうとしたカズマとアクアの首根っこを掴んで、再び椅子に座らせる。

「おい、君達の逃げ癖は何とかしろ」

「うるせー！ お前こそ無茶苦茶しようとして周りを巻き込むその癖を何とかしろよ！」

「一本取られた」

「痛いところを突かれましたねトニー」

「いやよー！ 絶対嫌！ そんな物騒な犯罪行為に巻き込まないで！」

二人に向き合い、大人として彼らと話す。

子供二人を……アクアを子供にカウントして良いか分からないが……とにかく、こいつらを言いくるめるのくらい……。

「ダクネスを救うんだぞ、それでいいのか？」

「だからって大犯罪をしでかす必要はないだろ!! 変な方向に思い切りが良すぎるんだよお前は！」

「そうよ！ トニーが捕まった時どれだけ大変だったと思ってるの!?!」

「それはあんたのせいでもあるだろ！ おい耳塞ぐな！」

僕の心からの説得も虚しく。

二人の拒否反応は強くなっていくばかりだ。

「トニー……いくら表情を大人っぽく取り繕っても、いちいち駄々に目くじら立てていては駄目ですよ……」

後ろからボソツと聞こえた娘つ子のノイズはシャットアウトする。にしても……カズマとアクアの二人はビビりにもほどがある。

「魔王軍幹部、機動要塞デストロイヤーとだって戦って来たのに、今更矮小な貴族の金庫を吹っ飛ばすのにビビるのか？」

「冒険者として戦うか、犯罪者になってコソコソするかじゃちがうんだってーの！」

「そーよ！ 捕まるなんて嫌よー！」

付き合ってもらえんと立ち上がり、出口へ向かう二人の背に手を伸ばす。

「おい、待て……金庫はこの国にはないんだ、すこしでも人手が……」

「あー聞きたくない聞きたくない！ とにかく！ 俺は俺で別の手を探すからなー！」

「怪我しても知らないんだからね！」

カズマもアクアもあつというまに部屋から立ち去ってしまった。

自動ドアの閉まる無機質な音が響く。

……取り付く島もないとはこのことか。

「……トニー、我々二人だけでやるんですか？」

「いいやまさか。カズマとアクアは作戦に必須だ。なんとしてでも参加してもらおう」

「案はあるんですか？」

僕はフツと鼻を鳴らし、めぐみんにいたずらっぽく笑い掛けて。

「そこで質問だ。ここに残ってる二人の特徴は？」

「どちらとも超天才」

「その通り」

二人でほくそ笑み、茶番を繰り広げる。

「二人を舞台に引きずりだすなんて僕らにかかれば余裕だってことを証明してやろう」

「……いい案が浮かびました」

「僕もだ。意見の交換会というこう」



大犯罪の片棒を担がされそうになったその夕方。

……いや、実際過去にも泥棒の片棒を担いだのだが……。

「まったく、『じゃあせめて晩飯の買い出しにでもいつてこい』って……そもそも今日の買い出し当番はトニーだったのにさ……あいつならスーツで飛んで帰ってくるだけだろ」

「買い物袋を首にかけながら飛ぶアイアンマンは中々シユールな絵面だが。」

そんな風に愚痴りながら買い物の帰路を歩いていると、付き添いのアクアが上機嫌そうに話しかけてきた。

「でも、『余ったお金で好きなもの買え』って、いっぱいお金くれたじゃない！ おかげで良いお酒が買えたわ！」

「だな。バニル討伐のお祝いもまだだったし、今日は美味しい鍋と美味しいお酒でパーティーだ！」

満面のアクアに毒気を抜かれ、豪勢になるであろう今日の晩飯に想いを馳せながら商店街を出ようとしたその時だった。

「お客さんお客さん！ 忘れものですよ！」

そんな声に、思わず振り返る。

何かの店の店員だろうか。エプロン？ をつけた二人組の男女が立っており……、

「ただいまサービス期間中としてね！ この商店街で一定額以上のお買い物をしていただいたお客様には、福引をしていただいてるんですよ！」

そう言っって人当たりのよさそうな笑顔で手招きしてきた。

「カズマさんカズマさん、福引ですって！ 景品は何かしら！」

「一等賞はなんと！ どどーんと豪華に海外旅行！ チャレンジして損はありませんよ！」

「海外旅行!? 凄いわ！ 運だけはいいいカズマさん！ 私の為に一等賞を引き当てて頂戴！」

こいつバカにしてんのか。……にしても福引……福引かかあ。
俺はこれ以上ないドヤ顔を浮かべて。

「俺、福引で悪い結果出したことないから」

「バニル討伐で借金がなくなったことと言いつつ、俺には今良い波が来ていると思う。」

「一等出しても文句はいうなよ?」

「もちろん」

ガラガラの取っ手を握り、逆回転させて調子確かめる。

なんだかイケそうな予感がしてきた。

願掛けのように深呼吸をして、一気にガラガラを回す。

「そおー!」

受け皿の上に転がり出た玉の色は……

「金……色……?」

「おめでとうございます! いったーしよーつ!!」

ガランガランとベルの音がけたたましく鳴り響く。

……マジか。

驚きの感情に、喜びの感情がなだれ込んで上書きされていく。

「えっ? えっ? ウソ? ウソ!? カズマさんカズマさん! 今日
はツイてるわ!」

「俺SUGEEEE!! おいおい! やっちまったよ! どーしよ
!」

「やったわやったわ!! トニー達に自慢しましょう!」

借金の返済、そして海外旅行を福引で引き当てる。

……間違いない、ツキが回ってきてる。

否、今迄の俺が不幸すぎたのだ。

人目もはばからず叫び散らし、アクアと狂喜乱舞しながら、俺はそんな事を想うのだった。

▽

それから一週間後。

旅行に向かうために指定された待合所へと向かうため、俺はアクアと共に大きな荷物を持って屋敷の玄関に立っていた。

「気を付けて行つて来いよ」

「もっと羨ましそうにしろよな、つまらない」

「海外旅行なんて僕にとっては散歩と大して変わらないからな」

「これだからセレブは……」

サラリとひけらかすトニーに、俺とアクアで悪態をつく。

今回の海外旅行は二名しか行けなかったので、その場にいた俺とアクアで行くことになった。

「というか、行先を聞いたアクアが絶対行くと行って聞かなくなったのだ。」

なにせ……。

「おみやげ期待してますよ？ エルロードですもんね。きつとお土産も豪華絢爛間違いなんでしょう」

「そーよそーよ！ めぐみんにはドラゴンの装飾が施された剣型チエーンを買ってきてあげるわ！」

「ほんとですか!?! 楽しみにしてます！」

「いやそれどこにでもあるやつ」

エルロード。

ベルゼルグの隣国にして、カジノで成り立ったという変わった国だ。

国の保有資産はこの世界最高峰だが、兵士は脆弱。

隣国であるベルゼルグがエルロードを守り、エルロードが資金繰りに疎いベルゼルグを資金面で守ると、持ちつ持たれつの関係にある友好国だ。

カジノの国だけあって、観光地として極めて評価が高い。

豪華絢爛、黄金一色、酒池肉林の極みであるカジノ街はまさにこの世の楽園だという。

「それじゃあ行きましょうよカズマさん！ 真の天国が私たちを待ってるわ！」

天国ってお前が管理してる場所じゃないのかとツツコミたくなる

が、それを抑えて玄関から出る。

「心から楽しんでくるとするわ。ちよむすけに餌やりすぎんなよ?」

「ああ、じゃあな。H A H A……」

「行ってらっしゃい。くつくつく……」

「……?」

なんでトニーとめぐみんは微妙にほくそ笑んでるんだ?

妙な気配を漂わせる二人を背に、俺たちは渡された紙に書いてる集合場所へと向かうのだった。

——屋敷を出て一時間くらいだろうか。

「奇遇だな待合場で知り合いに会うなんて。そう思わないか?」

「奇遇ですね」

「おい……」

屋敷を出た時のワクワクはどこへやら。

俺は煮えたぎるような怒りに満ちていた。

心弾ませてたどりで着いた集合場所にいたのは……。

【エルロード旅行 カズマ御一行様】とかいうふざけたプラカードを掲げて立つトニーとめぐみんだった。

トニーはいつもの軽薄そうな表情を浮かべながら、俺達にウインクして一言。

「ようこそ、エルロードツアーへ」

……今すぐ殴りたい衝動に駆られるが、ひとまずこらえる。

「トニーとめぐみんってばなんで待合所にいるの? あなた達は来れな……あ、あれ? なんか凄く嫌な予感がするんですけど……」

まだ状況に気がついてないアクアが、顔に冷や汗を浮かべながらそう言った。

「なあ、おい……あの時の福引の店員って……」

「ええ、変装した私とトニーですよ。二人を金庫攻撃作戦に参加して

もらうため一芝居打ちました」

「そういうこと。中々いい演技だったろ？」

……………。

……………。

「死ねええええ!!」

「ゴツドブロー!!」

「スーツ」

「あああああああつ!!」

怒りに任せて殴り掛かるも、トニーが呼んだスーツの超合金ボディに拳が砕かれた。

腕まで痺れる衝撃に思わず叫び、俺もアクアも地面をのたうち回る。

ちくしょう、コイツ嫌いだ。

「それじゃ、馬車に乗ろうか？ 楽しい旅の始まりだ」

「もう好きにしろよ……………」

こうなつたらコイツは今後もあの手この手でハメてきそうだし、俺はいっその事あきらめることにした。

その方が多分楽だろう。

「あんまりよ…………トニーのこと少し嫌いになつたわ…………」

「人間関係は嫌われることの方が多い。時には殺意を持たれる程な。

…………あれ？ これ僕だけかな？」

「納得だよクソ野郎」

悪態をつきながら、トニーが用意した馬車に乗ろうと…………

「…………おい、なんだこれ？ 取っ手がつかめないぞ」

「注目されたくないからカモフラージュモードにしてたんだ」

『あなたは控えめな方ですね』

俺が乗ろうとした馬車は、まるで壁に書かれたトリックアートのように触ることができず、中からはフライデーのジョークが聞こえて来る。

これは…………。

「カモフラージュ解除」

ブンツと、独特な電子音を奏でて馬車が真の姿を現す。

「あら？ クインジエツトじゃない。あのクソ悪魔に吹っ飛ばされたはずでしょ？」

「アベンジャーズが使う輸送機なんだぞ。予備の機体が無いわけないだろ？ まあ、お古で薄汚れてはいるが。じゃあご搭乗ねがおうか。フライデー」

トニーがフライデーに呼びかけると、クインジエツトのドアが開いてタラップが降りてきた。

階段をのぼり、機内へと……

……？

今、背後に敵感知スキルが反応したような……？

「どうした？ やっぱ行きたくなくなったか？」

「いや、なんでもないよ。行きたくはないけど」

気のせいだろうと頭を振り、機内の中に入る。

前に乗ったクインジエツトよりも、少し無骨が増した機内を見渡すと、椅子には見覚えのある少女の姿が。

「やつほ。みんな元気？」

「……クリス？ なんでここに？」

目立つ綺麗な銀髪の髪。

そこにいたのは、過去に盗賊スキルを教えてくれたクリスだった。

「餅は餅屋だ。今回は潜入任務ってことで、助けを呼んだ」

「そういうこと！ ねえ、トニー。シャンパンのお代わりある？」

「もちろんあるとも。つまみは冷蔵庫に入ってるぞ。ああ、あとアイスクリームもある」

「トニー！ 素敵な旅になりそうね！」

酒とつまみで簡単に機嫌を直すアクア。あまりにも釣られやすすぎる。

トニーもこいつを物でホイホイ釣らないでほしい。絶対引つかかるから。

なんでも用意できる当たり質が悪いぞこのオッサン。

「全員乗ったか？ シートベルト閉めとけよ」

洋画チックな軽口が聞こえると、クインジェットの扉が閉まって機体が宙へと浮かび上がる。

酒と料理にうつつを抜かして話を聞いてなかったアクアが、機体の揺れでワインを丸々一本地面に落として泣いていたが、雲を突き抜けて青空へと飛び込む、窓からの美しい眺めの前にはどうでもいい事だった。

「ああああー！ 私！ 私のワインがー！！ またワインが駄目になっちゃったああーっ！！」

「君のじゃなくて僕のだ。あとで拭いとけよ」

▽

エルロードへと向かう空路の中。

僕は、機内の中央にあるホログラム発生器を兼ねたテーブルを囲み、カズマ達に作戦概要の解説をしていた。

「……でだ、やつの金庫なんだが……田舎町のアクセルじゃ金庫に不安があったらしい。それでセキュリティが完璧なエルロードに金を移したって事だ」

相変わらず金にどん欲ですねと、めぐみんが小さく唸り。クリスが呆れたように鼻を鳴らした。

正直僕も金は大きな銀行に預けていたので……というか、金持ちは大体そうするので奴の行動パターンは読める。

今回アルダープの金庫のありかに目星をつけられたのも、自分がセーブであることが理由の一つだ。

「で、どんな場所にあるんだ？ ドラゴンの腹の中とか言うなよ？」

「すくなくともタンスの裏ではなさそうですね」

めぐみんの小粋なジョークが披露されたところで、僕は端末を操作してホログラムの映像を出す。

ホログラムには、王都が田舎町に見えるほどの巨大な都市が映っており、そのどれもがきらびやかな装飾によって彩られていた。

「この町一番のカジノ兼銀行であるこの建物がターゲットだ」

「……デカくね？ デカすぎね？」

「まあ、中にあるのはカジノを始め、銀行、五つ星ホテル、ショッピングモール、etc……」

街を拡大して映し出されたその建物は、ラスベガスのど真ん中に建っているのも違和感のない超巨大建造物だった。

それを見たアクアが、目をギラつかせる。

「凄い！ 凄いわ！ ここに泊まるの!? ここで遊ぶの!？」

「話を聞いてなかったのか？ 遊びに行くわけじゃない、破壊工作しに行くんだぞ」

「……悪徳領主のお金なんだし、少しくらいくすねて、それをカジノで……な、なんでもないわよ！ なんでもないからそんな目で見ないで！」

鋭くなった僕の目線に気が付いたアクアがすこし小さくなって黙ったところで、話を再開する。

「当然、警備もエルロード最高クラスだ。クリス、どう思う？」

「警備兵の質は低いと思うけど、トラップは質も量もケタ違いだろうね。過去最高クラスだと思っと思ったほうがいいよ」

「貴重なご意見どうも。……とまあ、奴の資産が眠っている金庫を吹き飛ばすのは至難の業だ。めぐみんの爆裂魔法無しじゃ無理だろう」

「……いいんですか？ いいんですね!？」

悪徳貴族が貯め込んだ金銀財宝の山を粉みじんに吹っ飛ばせるとわかり、めぐみんがかつてないほど目を輝かせた。

全く、現金な娘っ子だ。

「ああ、悪徳貴族の貯め込んだ資産を一つ残らず灰にしてくれ。焼けたエリス札が降り注ぐ光景をバックに佇む君はさぞ絵になるだろうな?」

「うおおおおお！ 燃えてきました！ なんとという私好みのシチュエーション!! 流石トニー！ 私の喜ぶ演出をよく理解してますね!!」

小躍りして妙ちくりんなポーズを取るめぐみに温かい目を向けてつつ作戦の説明に戻る。

「さて、作戦場所の説明が済んだところで、その内容についてだが……まずは衛星からスキャンした建物のホログラムから、構造的弱点を見つける」

「トニーがそれを見つけたら、今度はあたしとトニーとカズマ君で乗り込むよ」

「くはあ」

「いい加減あきらめろ。いいものやるから」

乗り込むとわかって露骨に嫌そうな顔をするカズマだったが、良い物という言葉に少し興味を示した。

僕はクインジェットの後方にあるアタッシュケースを広い、ホログラムを消したテーブルの上に置いて。

「開けてみる」

自慢げに笑みを浮かべ、カズマへとアタッシュケースを滑らせた。ケースを受け取ったカズマは、ゆっくり留め具を外して中身を取り出す。

どんな顔するか見ものだな。

「おいマジか……」

機内のライトに晒されたそれは、一丁のスーツとマスク。

ウエットスーツのように上下一体のデザインとなっており、生地の間隙のところに様々な装置が取り付けられている。

マスクは頭頂部以外を覆う機械的なバイザー……、バイクヘルメットとマスクの融合体といえるデザインだ。

先程まで死にかけの深海魚みただったカズマの瞳が、年相応の少年のように爛々と輝く。

「ま、まさか、まさかこれは……!」

「君専用のステルススーツだ。大事にしろよ」

「FOOOOOOOOO!!!」

大喜びで跳ねまわるカズマと、それを羨ましげに見るめぐみん。

君にはもうその眼帯とローブをやっただろ。

「すげえええ! 誰もが夢見るハイテクNINJAスーツじゃん!

ファンタジーは絶命したけどSFの始まりだ! 俺のコードネーム

は雷電な！」

「ブークスクス！ カズマさんがイケメンの雷電を名乗るなんて片腹痛いんですけどー！ ゴ布林くらいで我慢しときなさいな！」

「ゴ布林なのはお前の脳みそだろ」

「……………」

機内で取っ組み合いを始めたゴ布林Jr. とゴ布林女神。

互いの髪を引っ張ったりほっぺをつねり合っていると、クリスの手によってようやく引きはがされた。

ここは託児所じゃないぞ。

「……………ところでトニー、私にはなにかないの？」

カズマと軽いにらみ合いをしつつ、アクアがそんなことを聞いてくる。

「君に頼む任務に特殊装備は必要ないんだよ。でも、君にしかできない超極秘最重要任務だからな続きは現地で話すよ」

「私にしか……………できない……………」

必要とされてると感じたアクアが、カズマと同じく目を輝かせて任せろと胸を叩く。

こいつら案外チョロいのかもな。

金はかかりそうだが。

「潜入担当は僕、クリス、カズマだ。めぐみんはサポート、そしてフィナーレ担当だ。アクアの担当は後で話す」

「フィナーレ……………終幕……………うえへへへ……………」

フィナーレという言葉に瞳を輝かせ、機内の隅で奇妙な笑い声を響かせるめぐみんを尻目に、僕はホログラム映像を再び立ち上げた。

衛星からのスキャンが完了した潜入先のホログラム映像を隅々まで見渡し、安全に潜入できそうなルート割り出しにかかる。

さて、丸裸にしてやるとしよう――

▽

作戦会議が終わる頃には、僕らはもうエルロード上空に到達してい

た。

本来なら馬車で10日はかかるそうだが、あいにくジェット機ではちよつとしたドライブ程度の体感時間だ。

機体が雲の下へ降りると同時に、NYの夜景にも引けを取らない光の海が窓から見えてくる。

「わああ……！ すごいわ！ エルロード!! キラキラ……！」

コックピットに顔を覗かせに来たアクアが、エルロードの夜景を見て目を輝かせた。

今までアクセルの田舎町にずっといたんだもんな。

変に騒がれそうになく、かつ平らな広場を見つけ、そこにゆっくりとクインジェットを降ろす。

「到着だ。フライデー、ドアを開けてくれ」

『了解です、ボス。足元に気をつけてください』

開いたクインジェットから降り、体をほぐすように伸びをする。

僕に続いて他のメンバー達も降りてくるのだが……。

「ね、ねえ……本当にこれ着て行くの……？」

スロープでモジモジするクリスに、僕は顔を向けて。

「恥ずかしがるな、似合ってるぞ。なあ、アクア？」

「ええ！ とつても綺麗で可愛いわよ！ 自信もって！」

「そんな事言われてもさ……」

アクアとクリスの二人は、機内で着替えたドレスを身に纏っており、ハイヒールの音をスロープに響かせながら降りてくる。

「うう……ドレスは慣れてないよお……」

「ホントに綺麗だつてば！」

ラメの入った白銀のドレスをヒラヒラさせながら、クリスがぼやく。

「安心なさい！ きつとカジノに入ったらモテモテよ！」

カジノに潜入するにあたって、普段の冒険者の姿では目立ってしようがないのでドレスをこしらえたのだが……。

ドレスより女神のような羽衣の方が似合うかもな？ なんて、からかったらどんな反応するかな。

そんな、しょうもないことを考えていると。

「ああ、とつても似合っているさ。まるで夜空に淡く輝く満月のようだ」

僕でも言わなそうな……いや言ったことあるかもしれないが、そんなキザなセリフに振り返る。

「カズマ……サトウ・カズマだ」

タキシードを来たカズマが、スローブの上でジェームズ・ボンドを気取っていた。

「どうだ？ 似合ってるか？」

「ああ、よく似合ってるよ。まるで執事見習いのようだ。今のはそのモノマネだろ？」

「このやろう。自分が似合ってるからって……」

自分の着てるタキシードに視線を落とし、カズマの妬ましげな視線を茶化すように笑った僕は、目的地の方へと歩き始める。

「それじゃ、茶番もここまでにしておこう。でも顔は緩みっぱなしでいいぞ。潜入先で浮かれた客を演じていたいからな。いいぞアクア、その調子だ」

「これ真顔なんですけど」

——それから歩くこと1時間弱

ジェットを停めた外れの広場から、一気に人がいる繁華街まで来た。

「驚いたな……」

人口が僕の世界より圧倒的に少ないこの異世界で、タイムズスクエア並の人数を見れるとは思っていなかったので少々面食らう。

「で、目当てのカジノは？」

「もう入っているぞ。ここはショッピングモールの一部だ」

「嘘だろ……」

カズマが愕然として周囲の煌びやかな光景を見渡す。

ますます浮かれた子供っぽいのが、田舎者を馬鹿にするような目でのりに人に笑われてるのでやめて欲しい。

一緒に思われたくないのでカズマからすこし距離をとる。

「目当てのカジノはもうすぐだ。めぐみん、聞こえるか？」

『問題ありません。ステルスドローンも準備完了です』

目当ての金庫室があるカジノに向かう道すがら、無線の調子を確認する。

『あつ、あつつい！ ココアをこぼしてしまいました！ 熱い熱い！』

感度は良好。慌てふためく娘つ子の姿が目には浮かぶようだ。

ちなみに、僕の肩には蚊を模した超小型ドローンが潜んでいる。

めぐみんはこのドローンを使って金庫室侵入の手伝いをする役だ。

あの子には少々退屈かもな。

「凄いわ!! 本当にラスベガスじゃない！」

到着したカジノの入口は、まさにラスベガスそのものに近かった。

職人の技が光る芸術的な装飾が宮殿の王室を彷彿とさせ、辺り一面が金や銀、人工的な光で輝いている。

ああ、実に見慣れた内装だ。

そんなロビーを見渡し、懐かしさを感じていると。

「ところで、アクアさんの役目ってなに？ 結局何も話してないよね。

あと、トニーが持つてるアタツシケースも気になるんだけど」

「あ、俺も気になってた」

カジノの入り口に入る中、クリスがそう尋ねてきた。

そろそろ良い頃合いだろう。

僕は近くテーブルに寄り、二人の疑問に答えるかのようにアタツシケースをその上で開く。

——中に入ってたのは、総額5000万エリスの現金だ。

それを見たアクア達が一気にざわめく。

「えっ!? 何その大金!? トニーっては何する気なの!？」

「うわすげえ……」

「す、凄い大金だね……何に使うの?」

「今説明する」

僕らの作戦は隠密作戦。金庫室に侵入し、アルダープの金庫を突き

止めて破壊する事。

そのためには、忍び込むチーム以外にも必要な存在があった。「いいか、作戦は今からだ。僕とめぐみんは金庫を守る警備システムの妨害と無効化」

その存在とは……、

「敵感知と潜伏スキルを持つカズマとクリスは先導と警備員の無力化。そしてアクア——」

……陽動だ。

アタツシユケースをアクアの方へと滑らせ、ただ一言。

「——ENJOY 《遊びつくせ》」

浮かれ気味のアクアには、カジノで死ぬほど豪遊してもらおうことにした。

気分が良ければ酒を飲んで宴会芸。大声で笑い、歌い、踊り狂う。嫌でも人目を引くことだろう。陽動にはこれ以上ない適任者がアクアだったのだ。

ドヤ顔でそう説明したが……目を輝かせて叫ぶアクア以外は、みんなかつてないほどドン引きしていた。

第41話 PAYDAY2

カジノフロアは吹き抜けとなっており、上の階からでもカジノを見下ろせる仕組みになっている。

上階の金庫室があるフロアへと向かう道すがら、俺は階段の手すりからカジノフロアを見下ろした。

千里眼スキルと盗聴スキルを使って熱気あふれるそのど真ん中を覗く。

中心にいたのは、やっぱりというかなんというか……アクアだった。

どうやら盛り上がってるらしい。

『みなさいな！ 私の手札を！ ロイヤルストレートフラッシュよ！』

やってるのはポーカーのようだ。

嘘だろと思わず口にしてしまう。

あのアクアが、ポーカーで最強の手札を……。

『僕もロイヤルストレートフラッシュ』

『僕も』

『ジョーカーのファイブカード』

『あああああーっ！ また負けたーっ！』

……???

意味の分からない手札だらけすぎる。

俺はこれも異世界かとこれ以上考えるのをやめた。

考えるだけで無駄だこんなもん。なんだよ四人中三人がロイヤルストレートフラッシュって。

なんだよジョーカーのファイブカードって。

それよりも……

「トニー、ヤバいぞ。あいつ思った以上に金かけては負けまくってる。このままじゃあの金使いきっちゃうかも」

「心配するな。あれ、実は五千万エリスじゃなくて一億エリス入ってるんだ」

「はっ。」

衝撃の発言に思わず俺どころかクリスまで振り向く。

「あのケースは二重構造になっていて、一層目の五千万エリスを使いきったら二層目に隠された五千万エリスが一千万エリスずつ時間差でケースから排出される仕組みになってる。これなら無駄遣いしても確実に時間稼ぎができるだろう?」

「犬用自動餌やり機みたいなものか」

「そんなところだ」

「アクアさんを何だと思ってるの!?!」

そんなこと言っても、あのままじゃマジで五千万エリスがあつと言う間に底をつきそうだったしな。

おとなしく高いお酒でも飲んで宴会芸でもやってくれてればいいのだが。

「おいおい! カジノフロアでバカみたいに金使ってカモられてるボンボンがいるみてーだぞ!」

「はははは! それは面白れえな! 見てみようぜ!」

浮かれた常連や観光客がカジノフロアの熱狂ぶりを聞きつけ、慌ただしく階段を降りていく。

それを見た警備兵も相方と談笑しつつ、カジノの様子を上から眺めていた。

よっぽどセキュリティに自信があるのか、はたまた平和ボケでもしているのか。

「効果アリだな。まずは関係者専用通路から侵入するぞ。警備兵の制服を拝借しよう」

「めぐみん、警備兵の制服がありそうなところって分かるか?」

『そこから右手側のドアに入って、職員用階段を登ったドアの先にロッカールームがあるようです。私がドローンで先行してロッカーの鍵を開けておくので、ドアを守ってる警備兵は頼みましたよ』

トニーの肩からドローンが離れ、ドアの隙間から職員用階段へと向かっていく。

俺たちはその階段へのドアの前を陣取る警備兵へと、近くの物陰か

ら警戒されないように注意を向ける。

「あいつどうする?」

「考えてるところだ」

大して重要性の無さそうな箇所を守っていた警備兵達は持ち場を離れて浮かれているが、さすがにこういう重要な所はしつかりと守っているようだ。

トニーは何か案でも浮かんだのだろうか。

何かひらめいたような顔を、クリスの方へと向けて一言。

「クリス、ハニートラップ仕掛けて来てくれ」

「それが人類最高峰の頭脳から出た作戦なの!」

さらっと出てきたセクハラに、クリスが食って掛かる。

「おい待て。単純かつ有効な作戦だぞ」

「いやいやいや! 無理だよあたしには……!」

さて、トニーとクリスどっちの味方につくべきか。

あまりクリスが恥ずかしい思いをするような作戦はやめるべきだとは……。

「トニーの意見に賛成だ。クリスなら絶対やれる」

「カズマくんも乗らないでよ! キミに至っては変な目で見る気マンマンでしょ!」

「そんなことない、そんなことない。勝手に人を変態みたいにするなって」

「ぱんつ盗った人のセリフじゃないよ!」

あれは不可抗力だ。

クリスは自分を守るように体に腕を回し、俺達に攻めるような視線を向けてくる。

ハニートラップを仕掛けるクリスを見てみたい感が少し表に出てしまったが、そこでトニーがクリスの肩を掴んで説得にかかり始めた。

「安心しろ。君ならできる」

「でもあたし……ダクネスみたいなスタイルとか無いし……」

「そういうのは立ち振る舞いでどうにでもなるさ。女神みたいな雰囲気

気を出してみるのはどうだ？」

「ちよつ……！」

何か焦ったようにしてトニーに手を突き出すクリス。

女神エリスの敬虔な信徒らしいので、今の発言はちよつと良く思わなかつたか。

「トニー、流星にクリスに女神のオーラを出せつてのは無理があるだろ。ここは酔っ払った浮かれ気味の女の子で……」

「なんだつて？」

ほんの少し、クリスの目が鋭くなった。

……あれ？ フォローに入ろうとおもったのに……。

「カズマ君。これでもあたしは盗賊職なんだよ？ 人から情報を聞くときにある程度演技することだつてあるんだから」

心なしか声まで低くなった気がする。

女神の真似をしろつてワードが彼女の信仰心に触れてしまったのかと思つていたけど違うのだろうか。

それはともかく、俺だつてエリス様に出会つてその美しさにやられた身。

あんな雰囲気を出すなんて……。

「いやいやいや、無理だろ流星に。俺、エリス様に一度会つたことがあるけど、あんな雰囲気出せつこないつて。ボーイツシュ系のクリスには特に」

「……………」

あれあれ？ クリスの眉がどんどん上へと吊り上がつていくぞ？

クリスは気合を入れるように、フンと鼻を強く鳴らして一歩踏み出し。

「よし、見ててよ。サツと釣つて、人気のない場所でサツと気絶させるから」

何故かトニーが俺にグツとサムズアップしてる。

女神の雰囲気を出すとは思えない物騒なセリフを吐いたクリスが、警備兵がいる方へと向けて物陰から出る。

廊下を照らす照明の下に出たクリスの顔見た俺は……、

「ツ……マ、マジか……」

思わず息を飲んでしまう。

そこにいたのは、あの時見た女神エリスの如き美しいオーラを出すクリスだった。

ふわりとした優しい気な表情、落ち着いていて品を感じさせる所作。

エリス様を初めて見たあの時の気持ちを、俺は鮮明に思い出していた。

「あ、あれが熟練の盗賊職つてやつか……半端じゃない演技力だ……」

「アカデミー賞もとれるかもな」

トニーが面白そうに笑いながら、警備兵に向かうクリスの方を見る。

一層輝きが増したように見える銀色のドレスを、小さくなびかせ、クリスが警備兵の目の前を……、

「……あ、あれ!? おい、あいつ無反応だぞ!」

「What the……」

クリスも流石に想定外だったのか、廊下を二度ほど往復してみたものの……、

「お手洗いをお探してでしょうか?」

「……いえ、なんでもありません……」

迷子と勘違いされて声をかけられた時点で心が折れたのか、絶望した表情で俺達のいる物陰へと戻ってきた。

「あはは……あはははは……スタークさん……私に女性的魅力は無いみたいですよ……」

「あー……落ち着け。女神の演技が抜けてないぞ」

エリスっぽい立ち振る舞いのまま涙を流して突っ立っているクリスの姿に、俺はなんだかすさまじく悲しい気持ちになってくる。

「にしても、これはヤバいな。めぐみんは先行してるし……」

「……? いや、待て。あれは……」

トニーがそう呟いて向ける視線の先では、見張りの警備兵が見回り中の兵と挨拶していたのだが……。

「……なるほどな。そういうことか」

人類最高峰の頭脳が別のプランでも考え付いたに違いない。
一体どんな……

「カズマ。君があいつに色仕掛けしてこい」

「……は？」

駄目だ。凡人の俺には全く理解できない。

理解不能理解不能。

何かの聞き間違えかともう一度聞いてみよう。

「ごめん、なんて？」

「君がああの門番の男を誘惑するんだ」

「????」

理解不能理解不能理解不能。

俺がフリーズする横で、クリスがトニーに尋ねる。

「えっと……トニー？ どういうこと？」

「彼は男が好きだよ。今門番と見回りがあいさつしただろ？ その時の門番の目……あれは色目だ。男にもモテた僕にはわかる。見回りの容姿からして、カズマみたいな少年らしい顔が好みのようにだ」

「なるほど」

「なるほどじゃねえよ！ じゃあ何か!? 俺は今からあいつの目の前まで行ってセクシーポーズでも取って来いって言うのか!?!」

「YES」

「NOOOOO!」

俺は先程のクリスのように体に腕を回してへたり込む。

クリスの方へと視線を向けて助けを求めるが……。

「うーん、トニーの案に賛成かな。というわけでカズマ君、頑張って」
チクシヨー味方がいねえ!

そりゃ俺が先にクリスに同じことしたけどさあ!

「ほら、酔っ払った危うい少年になれ。もつと大胆に……クリス」
そんなことを考えてるうちにトニーが目配せし、クリスが手をワキ

ワキさせて俺の方へと向けてきた。

ちよつ……。

『ステイール』！ もういつちよ『ステイール』！

「きやあああああつ！」

俺の蝶ネクタイとシャツのボタンがクリスのステイールによって剥ぎ取られる。

胸元が露になり、自分でも驚くほど情けない悲鳴を全力で上げてしまった。

「ん？ 誰かそこにいるのか？」

ヤバい。いや、もしかしたら助かったのか？

近づく警備兵の足音に緊張と安堵でパニックになりかけている中。

「カズマ君頑張つて！」

クリスが小声でそう囁き、俺を物陰から押し飛ばした。

ドツと手を床に付き、顔を上げたその先には……例の警備兵が。

「大丈夫ですか？ 何かトラブルですか？」

「えつ……あのつ……ちよつと酔つ払っちゃつて……」

『いいぞ、その調子でどこか別の部屋に誘導しろ』

インカム越しにトニーが無茶ぶりをぶち込んでくる。

なんで俺がこんな目に……。

「どこか体調が悪いのですか？」

「その……」

『今だ！ 目を少し細めて、誘うような視線で『少し横になれるところに連れてつてくれ』と艶っぽく言え！ 君ならできるぞ！』

三流の監督気取りがうるさいったらありやしない。

他人事だからって好き勝手言いやがって！

チクシヨウ、やればいいんだろやれば！

「あのつ……ちよつとつ……体が熱くつてえ……」

「ッ……そ、そうですか……ッ！」

警備兵の視線が急激に熱を帯びる。

わお、今までモテたことなんて一度もなかった俺が、ついに人を悩殺することが出来たよ。

相手は男だけだ。

『クク……僕よりセクシーじゃないか……！ H A H A H A ……！』

『カズマ君ッ……ふ、ふふふっ……それならイチコロだね……』

……俺何やってるんだろ。

なんだか涙が出そうだ。

そしてあの二人をぶっ飛ばしたい。

「医務室……いえ、休憩室まで……行きましようか」

「ヒエッ……」

警備兵は俺の肩に手を回し、自分の胸元へと俺を引き寄せた。

屈強な男の厚い胸板から、肌の熱を頬で強く感じ取る。

お父さん、お母さん。あなたの息子は、童貞より先に処女を失うかもしれない。

▽

「君の雄姿は忘れないぞ……カズマ」

僕の横で、クリスが敬礼する。

カズマが消えた方へと。

「ちよつとやりすぎたかな」

「最近ギルドでカズマのセクハラが問題になってたからな。良い薬になつたんじゃないか？」

クリスの解錠スキルで素早くドアを開け、階段を駆け上がってロツカールームへと侵入する。

めぐみんからの情報でロツカールームに人がいないのは確認済みだ。

『ロッカーの鍵も解錠済みです。遅かったんで紅茶をお代わりしてまし……アツツイ！ あついで！』

どうやらまたこぼしたようだ。

ジエツトの中で一人だと言うのに賑やかでいいな。

三人分の制服を取り、タキシードから警備兵の制服に着替えてロツ

カールームを出る。

僕もクリスマスも服の下には特殊作戦用のスーツを着ていた為、同じ部屋で着替えても問題はない。

「まったく、制服のデザインが悪いな」

「正直ダサイね。そんなことよりも……」

クリスが指さした先には、半泣きの顔で佇む服の乱れたカズマの姿が。

僕はきさくに手を振って笑う。

「やあ。楽しんできたか？」

「隙を見て後ろから吸ってヤツたよ！」

「!？」

おそらくドレインタッチですぐさま気絶させてきたと言いたいんだろうが、言い方のせいで酷い誤解を受けそう。

現にクリスがものすごく顔を赤くして慌てふためいている。

「まったく、最高の作戦だったよ天才さん！ 人類最強頭脳の名は伊達じゃないな！」

「わあ……カズマくん……いざって時は大胆なんだね……」

「……？」

警備員の服を受け取ったカズマが、怒りながら着替える。

クリスがカズマに対して凄まじい勘違いをしてしまったが、面白いので放っておこう。

なんだか微妙な空気の中、僕らは金庫室へと足を動かし始めた。

「よお、カジノのアイツみたか？ バーカウンターにゲロ撒き散らしてたぞ。顔もスタイルも良いのに色々残念な女だよな」

連絡用通路ですれ違った警備兵が、今もカジノで元気に暴れてるアリアをそう言っただけで馬鹿にした。

仲間をバカにされ、うっかり怒ったりしてバレるような展開にならなきゃいいがと、カズマの方を見る。

「マジかよ終わってんな」

だよな。そんな反応だろうと思ってた。

知らないところで身内にすら馬鹿にされるゲロ吐き飲み仲間君の

明日が僕はとても心配だ。

と、すれ違った兵が遠くまで行ったことを確認したクリスが、僕に向かつて。

「で、ここからどうするの？」

「無数の兵士に気付かれずに無数のトラップを掻い潜って金庫室へ向かう。楽勝だろ？ めぐみんのドローンと君の畏感知でトラップをみつけつつ……僕が解除する。カズマは警備兵の探知と、必要なら無力化してくれ」

「え、トニーが解除？ 魔法式の畏を？ いつから魔法学者になったんだよ」

「昨夜から」

信じられない物を見るような目を僕に向けてくるカズマ。

「魔法式トラップの仕組み、種類、解除方法。魔法の勉強自体は前からしてたんでね、簡単だったさ」

「お前ってマジ……ったく、チートにも程が……」

「それよりもだ」

自分の天才っぷりをひけらかすことよりも大事な事がある。

「この先、お互い呼び合うコードネームが必要だ。本名で呼び合うわけにはいかないだろ？ で、考えた。僕がボス、クリスは助手君、君は下っ端君だ」

「ちよつとまで」

「ほんとだよ」

僕が考えた最高のコードネームに、クリスもカズマが待ったをかける。

「そこは普通あたしがボスじゃないかなあ？ 経験者だし」

「下っ端君ってなんだよ。せめてワトソン君とかにしてくれよ」

「ヒント。この中で一番頑張ってるのは誰でしょう。一番賢いのは誰でしょう？」

『あの、作戦中に何してるんですか……？ ちなみに私はクリムゾン・セプターみたいなのがいいです』

めぐみんは場を沈めたいのか煽りたいのかどっちなんだ。

面倒だな全く……。

「どうせコードネームだ、なんだっていい。ジャンケンで勝った頃から適当に名乗れよ」

「お？ 言ったな？ 俺ジャンケン負けた事ねーからな」

「奇遇だね、あたしもジャンケン負けたことないよ！」

勝手に盛り上がる子供二人。

そして……。

「まさか俺が負けるなんて……」

「ふふ、言ったでしょ？ 負けたことないって。私のことはお頭って呼んでね？」

「……言い出したのは僕だが、まさか下っ端君になるとはな……」

僕もかなり幸運な方だが、この二人には敵わなかったらしい。

別にどうでもいい事だが……これから二人に下っ端呼ばわりされるのは少々不満だ。

終わつたはずのコードネーム談議をつづけていると、真面目な声色でめぐみんから連絡が入ってきた。

『ここまではです。ここから先は気を引き締めてください』

「……だね」

腑抜けた空気から一変、僕らの間に緊張の雰囲気ギリッと走る。

歩いているうちに金庫室への通路に入ったようだ。

めぐみんの操るドローンと、クリスの罨感知スキルがこの先にある罨を複数見つけ出したらしい。

周囲には警備員の気配がない。

罨で同士討ちしないよう、ここ巡回を置いてないのだろう。

カズマも服の隅々に隠してあったパーツを組み合わせて弓矢を装備する。

「まずはその扉の前、ある程度近付くと何か作動するみたいだね」

『周囲をスキャンをします。少々お待ちを……おっと、踏むと左右から矢が飛んで来るようですね。もちろんただの矢じゃなさそうです』
「了解だ」

僕が装着したサングラスに、クツキリと罨の位置が映る。

そして、罨から出てくる魔術特有のシグナルも。

ポケットからとある特殊装置を取り出し、罨の方へと向けた。

三角錐の形状をした手のひらサイズで、一見アクセサリにしか見えない赤と銀のカラーリングが施されている。

「なにそれ？」

「フアブリケーター。ありとあらゆる物体の組成を解析することができる機械だ。本当は冷蔵庫よりデカいが、最近小型化させた。これで罨を解除できる」

「とにかくすごいってことは分かった」

フアブリケーターを罨のある方へ向けると、形状を変形させてレーザースキヤンを開始する。

——魔術というのは、科学の正反対に見えて紙一重だ。似通った面がいくつもあり、理解にそこまで時間はかからなかった。

人が直接放つ魔術はまだしも、罨はプログラミングされた自動迎撃システムとほとんど変わらない。

可視化された魔術のシグナルを解析して、似たようなをシグナルをぶつけ合わせる。

つまり、根底にあるものは……

「さて助手君、魔法より優れてるものって知ってるか？ それはな——」

計算によって作り出されたプログラムが魔術のプログラムを塗り替えて誤認識を起こす。

この間に行われたのは、ただの計算。

……そう、

「——数学だ」

ホログラムを閉じると同時に目の前の罨が解除され、壁面に隠されてた矢、床のスイッチなどが露になる。

「……科学チートってすげーな」

「どういたしまして」

ただのナンセンスなオブジェとなり果てた罠を踏み越え、今と同じ要領で複数の罠を無力化していく。

歩く速度は変わらず、ただひたすらに金庫室へ。

「――助手君、僕の合図に合わせてあそこの空気口に矢をぶち込め」

『狙撃！』

解除。

「――お頭君、ステイールで起動前にゴーレムのスイッチを抜き取ってくれ」

『ステイール！』

解除。

「――複雑に重なってるタイプの罠だな……僕が10秒床下の魔法陣を無効化する。クリムゾンなんとか君はドローンについてる振動カッターでワイヤーを切れ」

『任せてください。……あの、なんとかはやめてください。監視者とかで良いので』

「はいはい。切ったらトラップの機構がむき出しになる。その際にお頭君は右の感知センサーをスキルで解除。助手君は天井にある金属製の罠をテルミットチャージが付いたトリックアローで部品ごと溶接させて動けなくしろ。……よし、今だ！」

『ステイール！』

『狙撃！』

なんなく解除。

ハッキングの難しい罠は、構造的弱点を見つけ出したうえで物理的に解除する。

カズマは臨機応変に対応できるガジェットの搭載された弓矢を使い、クリスは持ち前の窃盗スキルをフル活用。

良いチームワークだ。

「この先も上手くやれると思わないか？ このイケメンバンド集団」
「この先もやりたいとは思わないけどな……」

この子がもう少し勇気を持ってくれると嬉しいのだが。

『おっと、皆さん止まってください』

先行していためぐみンドローンから、制止指示が入る。

僕らの目の前に立ちはだかるのは、床から天井まで十五メートルは優に超えそうな程の高さを誇る巨大な……。

「わあ……壁かと思った……」

「これ扉……？ 扉なのか？」

壁と見まごう鋼鉄製の巨大扉を見上げた二人から、思わずと言った様子でそんな言葉が漏れた。

「重たい扉で進めないようにするトラップか……いや、トラップというよりは単なる通せんぼだな」

「畏検知に引つかからないよ？」

「言つたら、通せんぼだつて。つまり、超重たいドアつて事だ」

「ええ……」

目の前にそびえたつTHE・鉄塊ドアを前に、カズマとクリスがげんなりとする。

「どうすんの？ というか、あいつらはこれをどうやって開けてるんだよ」

『おそらく、騎士が何十人と集まって開けるのでしよう。非効率極まりないですね、アホだと思えます』

めぐみんもげんがりしているようだ。

「僕からすれば家のドアと大して変わらないさ。ほら、見てろ」

僕が懐から取り出したのは以前デストロイヤーを無力化する際に使ったミニリパルサー・デプロイヤー。

以前よりさらに小型化させ、さらにパワーもアップさせた。

重量物の運搬だけじゃなく、こうして障害物の排除にも使える。

「Open Sesame」

デプロイヤーを扉に取り付け、冗談めかしてそう呟く。

『トニー、トニー！ 今の言葉は何ですか？ 異国の言葉ですか？』

「その通り、どんな扉も開く魔法の言葉だ」

「下っ端君が言った通り、俺の国でも使われる禁断の言葉だぞ」

『ふおおおおお！』

禁断の魔法の言葉というのが琴線に引つかかったらしい。

めぐみんの目の輝きが音声越しに聞こえてきそうだ。

からかわれてるとは知らないめぐみんを、僕とカズマでほくそ笑む。

「わあ。なんだか男の子らしい一面って感じがするね……」

クリスが呆れたような声を出す、重量物と床がこすれ合う音……ドアの開く音にかき消される。

開いたドアの隙間から堂々と中へと入った。

中は……真っ暗で何も見えない。

どうやら電気代をケチってるようだ。

「助手君、君のスーツのバイザーを起動しろ。暗視モードが付いてる」

「千里眼スキルの暗視があるから、正直いらないけどな……うおっ！

こりゃカツコいい！」

カズマの首元からマスクのパーツがせりあがり、変形してカズマの顔を覆う。

少年はとてもご満悦のよ……

「あああああああ！ 髪の毛挟んだ!! ハゲる！ 齢16にしてハゲる!!」

「あー……すまない、君の髪型が合わなかったな。次は挟まないように調節……」

そこまで言い掛けて。

——カチカチツ

そんな、固いもの小刻みにぶつけ合わせたような音に、全員が押し黙る。

「……敵感知に反応は？」

「……なし」

「あたしも……」

『サーチライトをつけます』

めぐみんのドローンが周囲を照らす。

そもそも、めぐみんが部屋の中を先行してクリアリングを終えているはずだが。

——カチカチカチッ

再び聞こえた異音。

カズマが、ブルリと身を震わせた。

「なんだ助手君、この音に嫌な思い出でもあるのか？」

「……小さい頃の話なんだけどき、祖父母に会いに田舎の村に行った時……」

明かりが周囲を照らし続ける。

立体的に動けるドローンが、周囲を壁まで照らし尽くすが何も映らない。

「冒険気分で家から林に行ったんだけど、その時に影からでつかい黄色い虫が飛び出してきてさ……」

——カチカチカチッ

異音。

広い空間のせいで反響してて聞き取りづらかったが、どうやら音の出どころは天井のようだ。

やたら高い天井へと、めぐみんのサーチライトが向かう。

「オオスズメバチって奴なんだけど、ソイツが俺に向けて大顎をカチカチと鳴らして威嚇して来たんだ……」

ぽたりと、何か粘着質な液体が僕の足元に落ちた。

サーチライトが、天井に巨大な影を作る。

「その時の音にそっく……」

照らし出された強大な八つの目が、僕らを捕らえた。

——蜘蛛。

天上には、人の背丈など悠々と超える毛むくじやらの大蜘蛛が、よだれをたらしながらこちらを見ていた。

「キシエアアアアアアアッ!!」

「あ、あああああああーっ！」

『ひぎやあああああ！』

「走れえええー！」

あまりにおぞましい見た目に、カズマもクリスも絶叫しながら逃げ出す。

二人はともかくドローン越しに見てるめぐみんすらもだ。

「何あれ！ 何あれ!? 怖い怖い怖い!!」

「怖いよおおおー！」

開いてるドアの方へと全力で走るが、大蜘蛛が僕らより素早く天井を伝って回り込み。

あろうことか、器用に前足二本を使って扉を閉ざす。

「はあああああ!? 冗談だろ！ 蜘蛛の動きじゃねーぞー！」

それはまるで、クローゼットのドアを閉める主婦の動きのようであった。

部屋の構造を把握し、逃げ道を塞ぐことに慣れている知性に、あの重たい鉄ドアをいとも簡単に動かせる筋力。

そして、よだれでぬらぬらと光る、人の腕程もある大きい牙。

厄介そうな相手だ。

「下っ端君！」

「わかってる！」

だが、扉にはミニリパルサー・デプロイヤーがついたままだ。

もう一度出力を上げれば……。

そんな考えを文字通り吐き捨てるかのようにして、大蜘蛛の口から大量の糸がドアに向かって放たれる。

「そんな……」

あっという間に糸に覆われたドアを見て、クリスが愕然とした。

ドアが完全に閉じることによって、その隙間から漏れてた光も消える。

光源はめぐみんのドローンのみだ。

「キシエアアアアッ！」

「避ける！」

大蜘蛛が飛ばしてくる糸の塊を、三人そろってギリギリで回避する。

僕やクリスはともかく、カズマはアシストスーツの筋力増強が無ければ避け切れなかっただろう。

そのことはカズマ自身が一番わかっているのか。

「あああつ！ ヤバイ！ 死ぬ死ぬ死ぬ！ 何とかしてくれ！」

「落ち着け、パニックになるな！いつもの悪知恵はどうしたんだ!？」

「あんな化け物相手に無茶言うな！ お前こそお得意の話術で交渉でもしてこいよ！」

「僕がDr.ドリトルにでも見えるのか!？」

「ねええええ！ 喧嘩してる場合!？」

『そうですよ!』

クリスとめぐみんの声にハッと正気に戻る。

「光源を確保しろ！」

「信号弾使えよ！」

クリスが懐からフレアガンを取り出す。

通信が使えなくなった時の連絡用として持たせておいたものだ。

引き金を引く音がしてすぐ、人工の眩い光が天井へと伸びて周囲を照らした。

「ギイイイ！」

信号弾をかすめた大蜘蛛が、金切り声とともに後ずさる。

「おい、見たか今の！ あいつ、火とか強い光が苦手だ！ ゲームみたいな！」

この世の大抵の生物は強い光と火は嫌いだ。

世の理から外れたような見た目の怪物も例外ではないらしい。

「ボウズ、テルミットチャージがついた矢は残ってるか？」

「ある！ あいつにぶち込めばいいんだな!？」

「その通りだ」

「あたしと下っ端君で引きつけるよ！」

手首に装着していた腕時計を、機械仕掛けの指ぬきグローブへと変形させる。

「ほら、こつちだ害虫！」

僕の放った音波攻撃が大蜘蛛の顔面に直撃し、忌々し気にこちらを見る。

鈍く輝く八つの目が僕を捕らえた。

粘着質な音を立てて、牙が持ち上がる。

「……とりあえず、引き付けたけど……次どうするんだ？」

今の装備じゃどうしようもないので、飛び掛かられたらマズい。

「まかせて！ 『バインド』 ツ！」

クリスが投げつけたワイヤーが大蜘蛛の脚に絡みつく。

見覚えのあるワイヤーだと思ったその矢先、ワイヤーが電光を放って瞬いた。

「ギイイイッ！」

いつの日かクリスに渡した、電撃を放つエレクトリカルワイヤーだ。

「今だよー！」

『狙撃』 ツ！」

カズマの放った矢が、電撃で動けない大蜘蛛の側頭部に刺さる。

いい腕してるじゃないか。

ワイヤーから解放された大蜘蛛が、今度は矢を放ったカズマの方を見る。

今までで一番ご立腹のようだ。

牙を振り上げ、八本の脚をワシヤワシヤと動かしながら金切り声をあげてカズマの元へと突っ込む。

「キシエアアアアアアアッ!!」

「ヒッ、ひいイイああああーっ！」

「何してるんだ！ 早くテルミットを起動しろ!!」

「あわばばば……！」

あまりの恐怖体験に我を忘れてたらしい。

僕の声に若干正気を取り戻したカズマが弓についてるスイッチを超連打し、大蜘蛛の首にオレンジ色の明かりが灯る。

「ギャギイイイイ！」

効果アリだ。

一瞬で鉄をも溶かす温度と化した矢尻が大蜘蛛の頭部で広がり、あつという間にグズグズにしていくな。

「ギイイ……」

胴と頭が焼き切れて転がる大蜘蛛の頭部が、壁に背を着いて尻もちを着くカズマの足元へと……。

「ぎゃああああ！ グロいグロい!!」

壁際で涙目になってるカズマを見て、ホッと一安心。

死人もけが人も無し。一件落着だ。

「恐ろしい敵だったね。敵感知に引っかからないなんて」

『ドローンのスキャンにも引っかかりませんでした。耐久力が無かったのが救いですね……』

「スキャンもスキルもすり抜ける敵か……。対策を考える必要があるな」

こういうタイプの敵も存在する。

生きてそれを知れただけでよしとしよう。

「さっさと先に」

進もう。

そう、言おうとして。

ブチツと、背後のドアにへばりつく糸がちぎれる音に振り向いた。

「やばい！ 敵感知に反応アリだ！ ……ん？ でもこれ……」

「どうした？」

「……アクセルでジェットに乗る時に感じたのと同じ……」

扉がブチブチと音を立てて開き始める。

ただでさえ重い鉄の塊だというのに、強靱な蜘蛛糸でコーティングされた大扉をあかも簡単に開けるとは。

部屋を埋め尽くすほどの兵隊を引き連れてきたのだろうか。

大勢の敵を相手にするハメになるかとうんざりしたが、扉側から指す逆光に浮かんだ影はたった一つ。

そして、カズマの感じていた違和感の正体がわかった。

見たことのある顔が……見たこともない表情で立っている。

「投降しろ、盗賊団……お前たちの正体は知っているぞ」
ダクネスが、僕らの前に立ちふさがった。

第42話 夜空を掛ける虹の橋

「めっちゃ怒ってるんですけど……」

「見りやわかる」

ドアから漏れる光を背に立つダクネスは、今にも緑色に変身してしまいそうな程激昂していた。

「ね、ねえ……とりあえず話し合わない？」

「ゆつくりと話し合おうではないか、貴様らを締め上げた後でな……！」

(ヤバイよ！ あんな怒ってるダクネス見た事ない！)

半分涙目になったクリスがこちらを見てそう耳打ちしてくる。

正直僕も初めて見るな……。

「あー……人違いじゃね？」

「しらばっくれるのも大概にしろ！ 扉についてたこれはなんだ！ デストロイヤーを倒した時に使ったものとそっくりではないか！」

ダクネスがこちらに見えるように掲げたのは、ドアを開けるのに使ったミニリパルサーだった。

あれをもぎ取ったのか……。

ダクネスの常識外れの怪力に引きつつも、僕はカズマと適当に誤魔化すことにする。

「奇遇だな。カジノで知り合いに会うなんて。そう思わないか？」

「奇遇だな」

「貴様ら、この期に及んでふざけるつもりか！」

もう駄目そうだ。

ダクネス相手とはいえ、流石にこの状況で言い逃れは出来そうにないらしい。

なら、正直に。

「……ダクネス、これは君を守る為でもあるんだぞ。君はあいつを倒すためになにか行動したか？」

『言い方もうちよつと何とかならないんですか？』

めぐみんが咎めて来るが、あいにく勝手に口が動いた。

「慎重に動かねばならんのだ……。お前こそ、犯罪にまで手を染めて……！」 その行動が生む結果を考えたのか!？」

「ああ、考えた」

ダクネスが言い切る前に、僕はミニリパルサーを再び起動する。
「!?」

ミニリパルサーがダクネスの手を抜け、空で円を描いて彼女の横腹にピタリと張り付き……。

「お、おい——」

……リパルサージェットが接地面の反対側から噴射され、ダクネスの体を壁に叩き付けた。

「やりすぎ！ トツ……下っ端君!! やりすぎだつて!!」

「んああああつ！ こ、この感覚はツ……まるで押し倒されているかのような……」

「……でもなさそうだね」

「さあ行くぞ。ダクネスの頭は腹筋より固いからな。ああなったら止まらないだろう。説得は後回しだ」

壁にめり込みかけているダクネスを尻目に、僕は前と走る。

「……はっ！ おい待て！ このっ……!」

ダクネスが力づくでミニリパルサーを引きはがしにかかる。

あまり持ちそうにない。

案の定、背後で何かを握りつぶすような音が聞こえた。

ふと後ろを見ると、粉々になったミニリパルサーを投げ捨て、こちらに向かって走ってくるダクネスの姿が。

「助手君」

「はいはい!」

カズマが弓に矢をつがえ、振り向きざまにトリックアローを放った。

暴徒鎮圧用の非殺傷武器。強烈な衝撃波を放ち、対象を無力化する。

ダクネスの鎧の胸部に装備されたソニックバーストを応用したものだつたが……まさか本人に使う羽目になるとは。

「今のうちに金庫まで走れ！　これで少しは足止めが……」

ダクネスの元まで飛んだ矢じりが作動するその数瞬間。

彼女はただ……顔の前で両腕を交差させて構えた。

ただ構えただけ……それだけで、問題なく作動したはずのソニックバーストは、彼女を吹き飛ばすことはおろか、一ミリ後退させることすらできなかった。

ドラゴンもひるみそうな鋭い眼光が、僕らに向けられる。

交差したその腕の隙間から、ぎらりと。

……………。

……………。

「凄いな。あ……アダマタイト入りのカクテルでも飲んだ？」

「私を鋼鉄系モンスター扱いするのはやめろ！」

鋼鉄系か岩石系か。僕には最早ダクネスがモンスターに見えて仕方なかった。

「お頭！　どうすんだよこれ！　あいつの脚力じゃすぐに追いつかれる！」

「その柱を爆弾矢で根元から折って！　こうなったら質量頼みだよ！」

カズマが間髪入れずに小型爆弾付きの矢じりで近くの柱を爆破し、廊下を塞ぐようにして倒す。

「往生際が悪いぞー！」

崩れた柱の後ろからダクネスのそんな声が聞こえて来るが、あれは流石に大丈夫だろう。

被害額に関してはアクアがカジノに落としたお金で多分ノーカンだ。

「ねえ、目的地まだなの!？」

「椅子レディ！」

『なんですか椅子レディって！　私にはちゃんとクリムゾン……ああ、もう！　スキャンによると、そこを右に曲がった先です！』

潜入先の金庫の設計図やマップ、誰がどこに何を預けているかの情報、めぐみんが操作するドローンにを資料室や警備室に侵入させることによって、既に把握済みだ。

それを事前に建物全体をスキャンして手に入れた地図と合わせることで道案内に関しては何事もないだろう。

「さらに足止め仕掛けるからね！ 『ワイヤートラップ』」

蜘蛛の巣のようにピンと張った鉄のワイヤーが廊下を塞ぐ。

安心したいところだが、廊下の先から空気の震えるような足音と共に、床から感じる振動が大きさを増しながらこちらに向かって来ているのを感じた。

横倒しにした柱もなんなく持ち上げて突破したらしい。

「……数年前だったらパニック発作起こしてたかもな」

「確かに怖い！ 早く進もう！」

アルダープの金庫は目の前だ。

とつととたどり着いて……外に運ぶ。

「ほらあそこ！ 助手君！ 鍵壊して！」

「任せろ！」

カズマが即座に放った矢が、僕らの目の前に現れた鉄格子の扉の取っ手に突き刺さり、強力な腐食液を搭載した矢じりが鍵を溶かしきる。

「蹴破るよ!!」

クリスがガタガタになった扉を蹴破り……。

「……ようやく見つけた。」

「Back in game」

ホテルの廊下のように、左右にネームプレートが書かれた部屋がいくつも並んでいる。

その最奥の、僕らから見て真正面にあったアレクセイ・バーネス・アルダープの文字。

今度は小型爆弾でドアのカギを吹き飛ばす。

「あたしの解錠スキルの見せどころが……」

「こつちの方が早いし楽なんだよ。追手に気づかれてるときはな」

ちらりと後ろを見る。

まだダクネスの姿は見えないが、ターミネーターみたいな足音は聞こえて来る。

急がないと素手で捻り殺されそうだ。

「さっさとやるぞ。時間がない」

「ああ、でも……凄いい財宝の数だな。ホントに全部ぶっ飛ばすのか？」
部屋を見渡すと……辺り一面美術品や骨董品、棚いっぱい貴金属に山積みの札束……。

田舎町の領主にしては、大分潤ってるようだ。……その0.00001%も領民に還元していないようだが。

そんな金銀財宝を今から全て灰にしてしまうのは……。

「さぞ気持ちが良いだろうよ」

「うん。お前はそういうやつだよな。俺も借金とか無くなったから金にそんな執着ないけどさ」

「あたしはこういうの好きだよー」

素顔を隠したスカーフ越しでも、クリスの笑顔がわかる。

やっぱりエリスはアクアにも負けないくらい根が破天荒そうだ。

「さあ、椅子クリムゾン君。配置についてくれ」

『もうなんでもいいです……』

画面の向こうにいるめぐみんが、盛大にため息をつきつつクインジェットを移動させる。

僕らの今回の作戦の要だ。

「各員、シートベルトを締めなおしておくようお願いします」

「こつち来るときも聞いたぞ、そのジョーク。……で、マジでやるの？」

「わかってて聞いてるだろ」

「だよな……はあ……」

カズマのそんな諦めの混じった質問を流しつつ、用意してきた特殊な装置を金庫の隅々に張り付けていく。

——金庫を破壊するに従って、どうしてもクリアしなくてはならな

い課題があった。

それは、爆裂魔法が必要不可欠なこと。めぐみんに華を持たせる為だけに爆裂魔法の使用を提案した訳じゃない。

金庫だけでなく、金庫の中の財宝はどれも超強力な魔術式防御が施されていることが事前に分かっていた。

それこそ、超強力な攻撃魔法でも使わないと突破できない代物だ。ただ、爆裂魔法は閉所では使えない。

そこで、今回使用するアイテムの出番というわけだ。

「やばい！ もうすぐそこまで来てる！」

「体の固定を急げ！」

金庫に細工を施してから入口の方に顔を向けると、薄暗い廊下の向こう側で断続的に輝く明かりが見えた。

そして、それに伴う爆発音やら破壊音。

逃げながら設置していた非殺傷の地雷やらブービートラップといったものを、ダクネスが耐久力に物言わせて強引に切り抜けながら向かってきているだろう。

対人地雷を戦車で強引に踏みつぶす地雷処理とまんま一緒だ。それを人の身でやるんじゃない。

「あたしも助手君も体の固定完了したよ！」

「頼むぞクリムゾン！」

『任せてください！ ですが、電磁気周波数の調節完了と突破経路上の市民避難まで少し時間かかります！』

「はやくはやくはやく……！」

壁に固定されたまま、貧乏ゆすりみたいに小刻みに動く焦ったカズマ。

そんなカズマの視線の先で……。

限界まで目が吊り上がったダクネスがこつちにドスドスと向かってきていた。

「そこまでだ！ 金庫室には触れるんじゃない！」

「悪いがもう触ってる」

軽口もいい加減にしろと、ダクネスがため息をつき。

「トニー……私を助けようという気持ちには……本当に感謝している。その気持ちは本当だ」

だがな、とダクネスは挟んで話を続けた。

「お前は勘違いしている。お前は強くても、一人の平民に過ぎない……。貴族相手に盗賊行為など、一族まとめて木の下に吊るされてもまだ有情と言えるほどだ……。それに……」

先程までの吊り上がった目はどこへやら。

ダクネスの顔は、悔し気に歪んでいた。

「私は守られっぱなしだ……借金の件も、デストロイヤーの件も……今度こそは……」

……なるほどな。

一人で背負い込むその姿勢は、やっぱり昔の僕を……いや、それよりひどいかもな。

「ダクネス、勘違いしてるのは君の方だ。君がどれだけみんなを守りたいか、その気持ちは理解した。……でもな、結果の伴わない正義ほど足を引っ張るものはないんだよ」

「……」

「ちよつと……」

クリスが僕を咎めるような視線で見ってくる。

こいつは言わなきゃわからないタイプだから言うだけだ。

「さっきも言ったが、君は口だけだ。アルダープを何処まで追い詰めた？」

「……」

「だよな？ 無言が答えだ。慎重にとか言ってる場合じゃないぞ。ヒーローは遅れて登場じゃ話にならない」

躍りになって空回りする前に、彼女には気づいてほしい。

今のままじゃ自分すら守れないことを。

「ハッキリ言うが、清濁併せ？めない君にアルダープは倒せない。だから、追い詰めるのは僕に任せろ」

「黙ってみていろと言うのか……守られるだけのお嬢様でいろという

のか……？」

彼女の態度で合点がいった。

魔王城に調査に出ると言った時にやたら来たがったのはこのせいだ。

「適材適所だ。バニルと戦った時、君は身を挺してアクアを守っただろ。そういう時が君の出番って訳だ。……まったく、僕に親父みたいな説教をさせるなよ」

「……」

守ることを信条とするダクネスが、逆に倒さねばならない宿敵から僕に守られた事で焦っているのだろう。

若者め……。

「とにかく、焦るな。手は僕が打っている。今からクイーンを倒してチエツクをかける所だ。で、君はルーク。キングへの直線ルートを作ってやるから、家でカニでも食べて——」

クリスとカズマが僕の方を見る。

皮肉や嫌味ばかりじゃなく、なにかフォローを付け加えろと言わんばかりの視線で。

クリスはともかくカズマまでそんな目で見てくるなよ。

……まあ、壊れたスーツだけじゃなくて、自分の悪い癖も直していないとな。

「——だから、僕を信用してくれよ。僕が君を信用してるようにな」

「トニー……」

ダクネスの目じりが下がり、あきらめたように……でも少しだけ嬉しそうに笑った。

そして、僕の方へとゆっくり向かってくる。今度は威圧的ではなく、好意的に。

「いいね。和解の握手と行こうか」

「……お前が言った通りだ、私はお前を信じている。何をやる気か知らないが……済ませて帰ろう……」

ダクネスがゆっくりと手を差し出してきた。

正直、手を取って熱く握手したいところだが……。

『磁場が安定しました。市民の避難も完了しています。いつでも脱出可能ですよ』

そろそろ退場の時間だ。

「……どうした？　なんで壁に張り付いてるんだ？　何かするんだろう？」

「あー……なあ、さっきの話なんだが、僕を信用してくれてるって言うただろ？」

「あ、ああ……そ、そう改めて聞かれると、答えるのは少し恥ずかしいかな……」

照れくさそうに頬をかくダクネス。

……なんだかちよつと罪悪感が湧いてきた。

「もしかして壁から外れないのか？　どれ、私が剥がして……」

そう言つてダクネスが僕の肩に手を伸ばした時だった。

——ボゴツ

そんな、岩が割れるような音を立てて、伸ばしたダクネスの手から僕の体が少し後退する。

「……？　おい、一体何をした？」

壁という壁がめきめきと音を立て、その音と共にゆっくりと金庫全体が壁にめり込むようにして、呆然と立ってるダクネスから遠ざかっていく。

「なんだこれは!?　金庫が動いてないか!?　一体どうなって……おい、答え……」

「僕を信用してくれてる親愛なるダクネス君。いいか……？」

再び大きい音を立て、金庫そのものが壁を突き破った。

「——これからすること、どうか怒らないでくれ」

ダクネスにウィンクしたその数瞬後。

一気に視界はダクネスから遠ざかり、周囲の視界が後方めがけて引き延ばされる。

同時に感じる背中への複数の衝撃。

「ああああああ!! やっぱこの作戦どうかしてる!!」

凄まじい速度で引つ張られるようにしてバックする金庫室の中で、カズマがそう叫んだ。

金庫室の中の物品たちは、持ち出されないように魔法で固定されているので、どれ一つとしてドアから零れ落ちたりはしていない。

背中に通じる衝撃が二桁に到達してしばらくしてから、最後に大きい衝撃を経て……。

僕らの眼下にエルロードの夜景が広がった。

「いい景色だ!! みんな楽しめ! 百万ドルの夜景だ!」

「ごめんゲロ吐きそう!」

「ちよっ! あたしにかかるから絶対やめてよ!」

それもそのはず。なぜなら僕らは金庫ごと宙づりになってるから。

これが僕らの金庫奪取計画。

金庫室が狭くて爆裂魔法が使えないなら、金庫を部屋から移動させればいい。

キャプテンの盾に使用したマグネティックエレメントを応用して作った特殊電気磁石。

張り付けた金属製の物体に特殊な磁気を付与し、それに唯一反応する正反対の磁気を持った電気磁石を、クインジェットのワイヤーフックに連結させることで、他の金属に一切干渉すること無くこの金庫のみを建物から引つ張り出すという仕組みになっている。

ビーチの砂浜から磁石で金属製のゴミを取るのと同じだ。

金庫の背が磁極となるように装置を取り付けたから、したがって僕らは入り口側を下にしてクインジェットからぶら下がっているというワケ。

通路上の市民は、めぐみんがドローンを利用してボヤ騒ぎを起こす事で避難させた。

『お疲れ様です、トニー。とりあえず爆裂魔法をぶっ放しても騒がれない位置の平原まで移動しますね』

めぐみんがゆっくりとジェットを動かし始める。

だが、それでも金庫はかなり揺れ……。

「あつ……これ駄目だわ。……うえっ」

「嘘でしょ助手君！ まって！ 本当に待っ」

かくして僕らは、見事アルダープの金庫奪取を成功させ、エルロードを後にした。

甲高い悲鳴と、わずかな虹の橋を夜空に残して。

▽

朝起きて一番に、私の元に絶望の一報が届いた。

——エルロードにある私の金庫が丸々消えたと。

ふざけるな。

ふざけるな！ ふざけるな！

「ふざけるなあああああああつ!!!」

「ビュービュービュー！ 凄い！ 凄いよアルダープ！ こんな美味しい悪感情は初めてだよアルダープ！ 僕、やっぱり君が大好きだよ！」

「黙れええ！」

私の横で愉快そうに笑うマクスに腹が立ち、頭を思い切り蹴りつけた。

「がああああ……！」

怒りが収まらず、自分の頭をかきむしる。

非常事態なんてもんじゃない。

私の財産の大部分が無くなってしまった。

何故よりもよって私の金庫を……！

「賊めえ……ひつとらえてなぶり殺しにしてくれる……！ マクス！」

憎悪を殺意を煮えたぎらせ、マクスの名を叫ぶ。

私に頭を蹴られて埋まっていたマクスが、何事も無かったかのようにぐにやりと姿勢を戻し、ユラユラと聞く姿勢に入る。

「賊をここに呼べ！ 私に首を差し出すよう仕向けろ！」

「うん！ わかった、わかったよアルダープ！ 君の物を盗んだ人を

ここに呼んだらいいんだね！」

「わかったのならさっさとやらんかあつ！」

「うん！ うん！ 出来たら対価をちょうだいよ！ アルダープ！」

ニタニタ嗤う悪魔を一度睨み、そのまま答えず地下室を後にする。

何が対価だ。踏み倒されてることにすら気づけない間抜けの癖に。

自分の財産が奪われたという事実には、再びどうしようもない怒りに腹が煮える。

ほかの貴族の笑われ者にされる前に捕まえて公開処刑せねば示し
がつかない。

賊をマクスの力で捕え、殺してくれと叫ぶまで黽つたら……、

「この手で惨たらしく処刑してくれる……！」

▽

華麗なる脱走劇の後。

金庫は街から遠く離れた適当な平原まで運び、問題なく爆裂四散させた。

アルダープが溜め込んでた金銀財宝も美術品も紙幣も。

一切合切は全て灰燼に帰した。

めぐみんはというと、月夜の下で燃え盛る財宝を背に、焼けた紙幣が舞い散る中で高笑い。

それはそれは楽しそうだった。

正直僕もあの光景には……スカツとしたな。

それで、その翌朝の事。

ダクネスは、僕らに置いてけぼりにされたアクアと共にテレポート屋を使って戻ってきていた。

正直一発殴られるのを覚悟していたが……。

「トニー、話があるんだが」

「話って、もちろん口を使つての話だよな？ その当たらない拳で
じゃなくて」

「殴りたいならそう言え。……ちがう、その件では怒ってはいない」
置いてけぼりにされたことにすら気づいていない程楽しんでたア
クアはともかく、ダクネスすらその顔からは怒りが感じられなかつ
た。

「じゃあなんだ？」

「先日の件だ。ハッキリ言って……お前が正しい……のだろう。た
だ、わからないんだ。私が何をすればいいのか。浮足立っているとい
うか……」

ダクネスがもにもよると歯切れ悪くしゃべりだす。

気持ちの整理がついていないらしい。

そこから少し黙ってから……ダクネスが、絞るような声で小さくつ
ぶやいた。

「私は……どう戦えばいいのだ？」

……脳裏にある男の姿がよぎる。

彼の言葉を借りるとしようか。商標登録してなければいいが。

「みんなで」

それを聞いたダクネスは少しあつけにとられてから、憑き物が落ち
たかのような顔で笑った。

第43話 REGICIDE

さて、アルダープ逮捕に向けて次の手を打とうなどと考える、青空
広がるご機嫌な朝。

「――！」

けたたましい警報の音が、屋敷の中に響き渡った。

屋敷やラボに近づいた敵対者を攻撃する自動迎撃システムが作動
したらしい。

強欲な三流領主の財産を吹っ飛ばした後だ。

僕らの正体は分かっているだろうが、つい先日の事なので警戒し
てしまう。

侵入者が何者か調べようかと端末を取り出すと同時に、上の階からド
タドタと複数の重なった足音が聞こえてきた。

「なんだなんだなんだ!! クツソうるせーぞ！」

「屋敷に警報つけたんだ。科学兵器であれ、魔道兵器や呪術的攻撃で
あれ即座に反応して防御する。呪いに関してはアクアの結界ありき
だが」

この屋敷の要塞っぷりをカズマに得意げに自慢する。

そしてコーヒーを一口。

「人の家を勝手に魔改造すんな！ アラームうるさすぎて飛び起きち
まったじゃねーか！」

「でもおかげでどっかの誰かからの攻撃から身を守れたんだ、感謝し
て欲しいくらいだね。まあ、音量に関しては改善しておこう。コー
ヒーいるか？」

「……二度寝する」

呆れた顔してすごすごと部屋に戻ろうとするカズマと入れ替わる
ようにして、他の面々も顔を表した。

「敵襲ですか？ ここのセキュリティで止められない相手なら私も出
撃しますよ？ もしそうなら魔王と幹部の攻撃部隊が相手でしょう
が」

「また変な改造をしたのか……。ところでトニー、その……。良かったらでいいのだが……」

「アクセスコードを剥奪して侵入者としてセキュリティシステムに攻撃されたいとか言うのは無しだぞ」

「まだなにもいってな」

「ああ、いい天気だな。部屋に戻って寝ててくれ」

それを聞いたダクネスが、悲しそうな顔をしながらボソリと。

「……もし戦う時は、私もクルセイダーとして前線に立たせてくれと言おうとしたのだが……」

「ごめんな」

昨日の今日でこの物言いは良くないな。

流石に自分のひねくれっぷりに少し反省……

「でもちよつと……。よかつたぞ」

ありがとうダクネス。おかげで僕の罪悪感が薄れたよ。

「それで、どうするんですか？ 最強の防衛システムが起動したとはいえ、絶賛敵襲中ですよ？」

「アクセルの街自体にはなんの被害も出ていないようだ。敵は最初からここが目的で来たらしい。生け捕りにして情報を……」

『ターレット防衛ライン突破、レーザーフェンス防衛ライン突破、地雷原防衛ライン突破、ドローン部隊防衛ライン突破、衛星兵器攻撃ライン突破』

警報が立て続けに響き、即座に僕は戦闘態勢に入る。

リビングの床の一部が開き、中からスーツがせりあがってきた。

「う、うおおおおお!! なんですか今の!! トニー！ 今のは!! 今のは一体!」

「あとで君の杖もジュース瓶も床から出てくるようにしてやるから落ち着け」

「約束ですからね!」

適当な冗談のつもりだったのだが……。これで今夜は徹夜するハメになった。

それよりも……!

「このセキュリティを突破できるほどの敵がすぐそこまで来てるぞ！ カズマとアクアを起こしてこい！」

めぐみんが装備を取りに行くついでに二人を起こしに行く。ダクネスはスーツを装着した僕の横に立って構えを取った。

「いつでもこい……！」

人影が迫る玄関のドアめがけて光が灯る掌をかざす。

ガチャリと、まるで我が家に帰るかのように人影が……

「フハハハハハ！ どうしたどうした！ 客人であるぞ!! 出迎え」

戯言を最後まで聞く前に、見覚えのあるヴィランの汚い仮面めがけてリパルサーを放った。

「おっと！ 茶の代わりに光線が出てくるとは、なんとも物騒な屋敷であるな！」

「悪いがもう我が家は店じまいなんだ。とっとと出ていけ、三流道化」
僕の放つリパルサーをひらりひらりと躲しては癪に障る笑い声を上げるバニル。

横にいたダクネスが飛び出し、バニルに殴りかかる。

「悪魔め、そこになおれ！ ぶっころしてやる！」

「フハハハハハ!! つい最近まで自信喪失しかけていた、腹筋は固くても心はグラグラな」

「ぬああああ!!」

顔を真っ赤にしたダクネスが猛烈なラッシュをバニルにかますが、やっぱり当たらない。

僕は掌をいったん下に向けて……。

「おや？ 対話の時間か？ 汝も鋼鉄の鎧を身に纏うにしては、大概……」

アームミサイルを展開し、拳をバニルに向けて狙いを定める。

「物騒ヒーローよ、武器を下げて話す姿勢に入るのか、徹底的に戦う姿勢をとるのかどっちかにしたらどうなのだ？」

「あんたの態度次第だ」

スイーツの駆動音が良い感じに裏拍を取っている。いいね、ノってき
た。

バニルの様子はと言うと、心底ムカついたといった感じで、ギリギリと歯を噛み締めながら顔を歪ませていた。

「うわ……これが女神とヒーローの姿かよ……」

大悪魔を相手に大立ち回りを繰り広げる僕らの背中に、カズマが超ドン引きした視線を向けていた。

▽

「では、本題に入るとしよう」

家のソファに腰掛けたバニルが、神妙な顔つきで話の姿勢に入る。

「時に中年ヒーローよ、我輩が以前に汝にした忠告は覚えているか？」

「悪いね、ゆうべ何食べたかも覚えてない」

「サンマ定食ですよ。美味しかったですね」

「だな」

問いを冗談めかして受け流す僕に、バニルは呆れたといった感じに口元を脱力させた。

指でトントンと仮面を叩きながら、ため息混じりに話を続ける。

「……先日のエルロードでの強盗騒ぎについて、なにか心当たりがあるのではないか？」

「ああ、新聞で一面を飾ってたな。あそこで強盗成功させるなんて、大した奴もいたもんだ」

「誤魔化そうとするのはよせ。そのグータラ女神が放つ光のせいで見通すことは敵わんが、我輩の力がなくとも察することなど容易であるわ」

追い詰めたいというよりは、話をさっさと進めたいから早く明かせといった感じのバニル。

僕らを突き出したいって言うなら、屋敷に来た時点で警察をぞろぞろ引き連れてきているはずだ。

元魔王軍幹部だが、人に危害は加えていない。信用はしないが、一

応答えるでしょう。

「それが事実だとして……君と何の関係があるって言うんだ？」

「ここまで来てまだはぐらかそうとする疑り深い中年よ。助言をくれ
てやろう、汝は人の心というものを学んだ方が良い」

「……Huh？」

あまりにも予想外過ぎる忠告に、思わずそんな気の抜けた声が出る。

「セラピーでも始める気か？ 向いてないぞ」

「だろ？ と、笑い飛ばそうとカズマ達の方に顔を向けるが……」

「悪魔の言うことに賛同するのは癪ですが……」

「言えてるな」

「その……悪魔の言うことだ、流しておけ」

ちなみにアクアは賛同したいが、悪魔嫌いだから声に出したくはないって顔が言ってる。

「どいつもこいつも喧嘩売ってるのか？ ……まあ、一部認めよう」

「ふむ、その意気だ。さて、かの強欲領主であるが……問題なのは、汝のやり口だ。いくらなんでも強引がすぎる。我輩の言葉を覚えておらんのか？ 『汝の』」

「短絡的な行動、だろ？ それが狙いだ。相手の力を削いで、選択肢を潰して、あいつの力の本質を暴く」

「……知った上での行動であったか……」

まるで呆れたとでも言わんばかりに、バニルがため息をつく。

「何が言いたいんだ？」

考えの読めない悪魔相手に、今度は僕が急かすように尋ねた。
バニルの口元が、ゆっくりと開く。

「未知の力を使う癩癩持ちを下手に追い詰めるなど言っておるのだ。
相手と機を誤ると汝とて死ぬ」

そう口から漏らすと同時。

ドンツと、衝撃波で空気の震える音と共にけたたましいベルがまた響く。

つい先程も鳴った自動迎撃システムのアラートだ。

「!?」

その場の全員が身構えるが、僕のすぐ後ろで喚いて叫ぶやつが一人。

「ああああ——っ!!」

「落ち着け。アラートなら間に合ってる」

「悪魔よ悪魔! 悪魔に攻撃されたわ!」

窓の外を見るやいなや、バタバタと叫び散らかしながら玄関から飛び出していくアクア。

カズマ達も状況に追い付けず混乱し始めた。

バニルは面白そうに顔を歪めて僕らを見渡しながら、仰々しく手を挙げ語り始める。

「フハハハハ!! 冒険者どもよ! 汝らが奴とどう戦うのか、我輩ちよつと楽しみであるぞ!! フハハハハハ!!」

「漫画本の悪役でも気取っているのか? そのダサイ仮面のせいでキマってないぞ」

今の所、攻撃はアクアの作った結界によつて止められているようだ。

口元を歪めて不愉快な笑い声を上げるバニルはダクネスに見張らせ、僕もアクアの後を追う。

屋敷の外に出ると、アクアが屋敷の庭で空を強く睨んでいた。

そのアクアの目線の先のものを、僕も見上げる。

結界にぶつかり続け、激しく振動している黒い塊を。

「フライデー、あれは何か解析できるか?」

『基本的には魔力主体の『呪い』と分類される攻撃に似ていますが、粒子放射線を検出しました。今までの呪いや魔術の攻撃には観測されなかったものです』

「粒子放射線……」

フライデーの解析結果を、うわ言のように繰り返す。

なにか、何かが分かりそうだ。

僕の直感が何かを告げようしている。

「なあ、フライデー」

ただおもむろに、意識した訳ではなく、直感で言葉が漏れた。

「僕がアルダープ家を探ろうとした時に検知したエネルギーと、類似点があるか調べてみてください」

『照合中……完了。ボス、懸念通りの結果です。極めて類似しています』

ピタリと、パズルのピースがハマる感覚。

「見てなさいトニー！　今から私がサクツと、あの気味の悪い塊を浄化して……」

「やめろ」

「いだいっ！」

光り放ちながら掲げられたアクアの手を、ぺしっと叩いて下げさせる。

「何すんのよ！　あれは呪いよ!?　しかも飛びつきり凶悪なヤツ！

トニーってば時々悪魔みたいな顔したりするけど、とうとう本当に悪魔になっちゃったの!?!」

「アクア、あの結界にぶつかり続けてるアレ……あのまま放置してても大丈夫か?」

「へっ……?　そりゃ私の作った結界だもの、破られるなんて絶対ありえな」

「流石だな、ラボに来てくれ」

そのままアクアの手をグイツと引っ張り、ラボのエレベーターに乗り込む。

「ね、ねえちよつと待って！　結界張った私にしか分からないけど、あれすっごくうるさいのよ!!　ずっと首筋をつつかれてるのような感覚がするの!」

「マフラーでもしとけ」

「トニーに人の心は無いの!?　カズマー！　カズマさん!!　助けて！　お願い助けて!」

アクアの絶叫と僕を乗せて、エレベーターが下がる。
アルダープ、やっぱり短気を起こしたか。

これでもうチェックだ。
ブタ箱まで秒読みだぞ、ケツを守る練習でもしとくんだな。

▽

「ほう……実に興味深いな……遠い遠い異国の技術であるか……」

「下手にあれこれ触るなよ。その大切なセンスの無い仮面が焦げたりでもしたら大変だろ？」

「言われなくとも、我輩にそこまでの好奇心は無いので安心するがいい。何でもかんでも手を出して、取り返しのつかないことになるナンセンスな貴様と違って……なっ！ フハハハハハ!!」

こいつはいちいち癪に障ることを言わないと気が済まないのか？

「トニー、多分お互い様ですよ」

「君まで僕の頭の中を読むな」

さつきまで屋敷にいた全員をラボに集め、屋敷に受けた呪術攻撃の正体を探りにかかる。

当たり前のようにラボにいるバニルに対して、アクアとダクネスはかなり不満気な顔だ。

「トニーさーん？　なんでこの害虫までラボに呼んでるのかしら？」

「そうだぞ……悪魔を家に招き入れるなど……」

「呪いに詳しいやつが必要だったんだよ。床はあとで掃除するさ」

「我輩を汚物扱いするのはやめていただこうか」

僕は部屋の中央にあるホログラム発生装置を起動し、屋敷を覆うバリアとリンクさせる。

浮かび上がるのは、未だバリアにぶつかり続ける気味の悪い漆黒の玉。

「で、こいつは一体なんなんだよ？」

質問には答えてこそ科学者というもの。

「量子放射線に似た物質だ。空間を構成する重力比率を変成し、リー

マン幾何学的空間曲率運動を誘発する。接触するあらゆるエネルギー、もしくは時空間の量子化的現象のベクトルを湾曲させる性質を持つてる」

「ごめん、なんて？」

懇切丁寧に答えたものの、カズマはというと寝ぼけたジャイアントトードみたいな顔をしている。

そんなカズマに、僕はバカにするような目を向けながら

やれやれと肩をすくめた。

「お前マジで嫌い」

「フハハハハ！ 思わぬ所で美味なる悪感情をござ馳走様である」

「お前もマジで嫌い」

「やれやれ、仕方ないですねカズマは……この私が懇切丁寧に教えて……あつ！ 痛いです痛いです！ 謝りますからつねらないでくださいー」

僕の講義そっちのけで茶番プロレスを始めたカズマとめぐみん。

「その、すまないが……私達にもわかりやすいように頼む。アクアが寝そうだ……」

というか寝てる。

「それじゃ、簡潔に早い話が……現実改変能力だ」

「は……う？」

ぴたりと、つねりあいをしてたカズマとめぐみんがぴたりと止まる。

「げ、現実改変……？ チートの中のチートじゃねえか…… 漫画の中だけだと思ってた」

「そこまで強力な能力など、聞いた事が……」

青ざめるパーティメンバーたち。

強敵には頬を染めるダクネスすらも、顔色は優れない。

そんな中で、一人ニヤニヤ歪んだ笑みを浮かべるヤツが。

「やるではないか。マクスウエル能力を看破するとは……汝の国の技術は侮れぬな」

「僕の技術と言って欲しいね。それよりも、マクスウエル能力って

言ったか？ 知ってるのか？」

バニルの口元を歪めたまま、面白そうに話す。

「マクスウェル。我が同胞にして、地獄の七大悪魔が一人」

「悪魔……？」

さつきまで船を漕いでいたアクアの目が、悪魔というワードにカッと開く。

「やっぱりあんたの身内じゃない！ ふぎけんじゃないわよこのクソ悪魔！ トニー！ これはチャンスよ！ 今すぐここでコイツをぶつちめるの！」

「寝起きが良いじゃないか。ぶつちめるのは僕も大賛成だが、少し静かにしてくれ。そのまま寝てていいぞ」

「ひ、ひどいわ！ さつきはあんなに私を求めたのに、要らなくなったら突き放すなんて！」

「変な言い方をするな！」

アホ相手に柄にもなく声を荒らげていると、バニルがうるさそうに顔をしかめ、大きいため息をいた。

悪魔の天敵が女神つてのは嘘じゃないらしい。

「……マクスウェルは、捻じ曲げる悪魔だ。思考も、事象も、真実も……都合のいいように捻じ曲げる。それがヤツの能力だ」

……なるほどな。アルダープが捕まらないわけだ。

「あの悪徳領主が好き放題できる理由はわかりました。……ですが、何故それだけの悪魔をただの人間が使役できてるんです？」

「その通りだ。大悪魔ともなると、対価も相当なものだろう？ あのアルダープが、それを支払える人間だとは思えん」

めぐみんとダクネスの言い分はもつともだ。

この世界を支配してる魔王だって、バニルの事は持て余していた。

大悪魔とは、そう簡単に顎で使えるものではないのだろう。

僕の世界でも、それこそ悪魔ではないが、神々にはみんな振り回さソールとロキれていたように。

「当然であろう。あの三流領主ごときが従えられる悪魔ではないわ。だが……ヤツは力こそあれど、頭が抜けていてな」

バニルはウンザリといった様子のため息をついて。

「願いを叶えても、対価どころか叶えたことすら忘れる。そんな頭の出来のせいで、ずっとこき使われておるのだ」

「ピーキーすぎるだろ」

「相性が良さそうに結構だ。そのまま地獄まで仲良くしてもらいたね」

「そこである」

ビシッと、バニルが僕に指を指した。

「我輩の目的は、こき使われる我が同胞を地獄に戻すこと。その為には、悪徳領主に対価を支払わせるか、あるいは——」

またしても、バニルの口元が歪む。

さつきよりも、より歪に、悪魔らしく。

「——汝らが、マクスウエルを一度抹殺するしかない」

そう、言い放った。

「悪魔は死ぬと地獄に戻り、交わしていた契約の全てが破棄されるのだ」

「へえ。その口ぶりじゃ、前者よりもあんたのお友達を殺して欲しいって言ってるように聞こえるんだが。マクスウエルとやらは友人に恵まれてるみたいだな」

「対価を支払わせる方法ではダメな理由でもあるんですか？」

「無論、我輩は最初からそのつもりで動いておったわ。だが……」

バニルは忌々しそうに僕の方を見て、わざとらしくため息をついた。

「このヒーロー症候群末期の中年鎧男がド派手に領主を追い詰めたことで、そもいかなかったのだ」

「Huh? なんで僕が悪者みたいになってるんだ? 倒さなくて済む手段があるっていうなら、最初から僕らに事情を話せばよかっただろ。悪者なのは知ってて黙ってた君の方じゃないか」

「隠し事が好きなのは汝だけではないのにな。そんなことよりも、汝のせいでもっとこじれたことになりそうなのだ」

その言葉に、僕は目を細くして、訝しんだ視線をバニルに向ける。

「ハッキリと言おう。あの悪徳領主は……自分が追い詰められたら、ヤケを起こしてこの街を破壊し尽くすぞ」

「なんだと……!?!」

ダクネスがバニルに詰め寄る。

「言葉の通りだ。あのような短気で、不相応な力を持ったものを下手に刺激するとどうなるかなど、我輩でなくとも見通せるであろう?」

「まるで実際に見たかのような口ぶりだな」

「見たとも。見通したとも」

「それじゃ、僕らが勝つてギルドで豪遊する所も見通せたんじゃないか? 酔ったアクアがそこらの床にゲロ溜まりを作ってるエンディングまで含めて」

軽口を叩く僕に、バニルは少し押し黙った。

やがて、重そうに口を開く。

「……見通せんのだ。汝らが低俗領主を追い詰め、そこでヤケを起こした癩癪領主が街を破壊しようとする所までは見えるのだが……」

「随分都合が悪いわね……なーんか企んでるでしょ。悪魔の言うことなんて信用ならないわ」

「おっと! やることなすこと空回りばかりで周囲の信用ゼロのポンコツリリーストが信用を説くとは! 実に面白い冗談であるな!

フハハハハハ!!」

アクアとバニルが壮絶な睨み合いを始める。

今にもデフコン1が発令されそうだ。

「女神と悪魔の世界大戦なら庭ででもやっててくれないか? だがまあ……あんたの言うことにも一理ある。奴が街を攻撃すること前提で話を進めよう」

「……え、信じるの?」

「敵の能力をわざわざ教えてくれた以上はこっちに協力する意思があるか? 反対意見ある人いるか?」

「絶対イ」

「ゼロだな。よし、取り掛かろう」

僕は叫び散らかすアクアを無視して指を弾く。

小さく響くその音の波紋に乗るかのように、様々な機器達が目覚め、幾何学模様の光がラボに広がり始めた。

「ふおおおお……！」

そんな中で、一際明るい光源が一つ。

言わずもがな、真紅に輝くめぐみんの瞳だ。

スポットライトめいて出るこの光のおかげで、めぐみんが何を見て文字通り目を輝かせているのわかる訳だが……。

今回その光に照らされているのは、僕らの正面に出現したホログラムの設計モデル。

そこには、大きく映る5つの文字が並んでいた。

それは………、

M k · 4 7 。

その青写真だった。